

Double Servant —
Poetry of Brimir—

ねずみ一家

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品は、小説『ゼロの使い魔』とオンラインゲーム『ラグナロクオンライン』（以降RO）とのクロスオーバーです。

各設定やROの裏ストーリー等はなるべく変えないようにしつつ、ROを知らない人でも読めるように書いていますつもりです。

しかし、それぞれの魔法についての詳細やストーリーの根幹に関わる部分など、つじつまを合わせるために多少オリジナル設定を盛り込んでいますのでご了承ください。

魔法やアイテムについての説明は出来る限り文中に含めるようにしています。

どうしても補足が必要な場合には、各話の最後に解説を加える予定です。

なるべく設定に矛盾の無いよう努めますが、最新のR.O情報が追い切れていない場合もありますので、生暖かい目で見守って下されれば幸いです。

なお、本来のR.Oではダメージを受けてもアイテム（ポーション、リングや肉など）を使えば即回復となっていますが、そういったR.Oでのゲーム的要素を少しリアルよりしています。

（R.Oの特徴であるカードという要素はあまり使わないと思います。使いにくいのです・・・）

また、ゲーム内ではステータスの割り振りをプレイヤーの任意に行なえますが、この作品内ではリアルと同じように生まれ持った才能によって個々人の能力が設定されています。

更に、死んでもすぐ復活できるといったゲーム的要素はオリジナルの設定によって補完しております。

召喚される人物は、オリジナルキャラクターの「リウス」です。

イメージでは、ルイズとキュルケとタバサの要素を盛り込みつつ、サイトの考え方や性格を少しだけ加えた二十歳くらいの女性となっています。

あくまで、この「リウス」をゲームのキャラクターでなく一人の登場人物として扱ってもらえれば何よりです。

WEBへの投稿は初ですので、モタついたりレイアウトが崩れてしまうことがあると思います。

何卒ご了承ください。

目次

第一章

第一話	予期せぬ出会い	1
第二話	最初の夜	14
第三話	懐かしい生活	27
第四話	はじめての授業	46
第五話	はじめての授業 その後	60
第六話	貴族さまの喧騒	74
第七話	昼下がりの決闘	86
第八話	Analysis of	
Each Person	——	107
第九話	かつての夢 1つ目	

第二章

第十話	城下町でお買い物	120
第十一話	かつての夢 2つ目	135
第十二話	盗賊はどこへ?	164
第十三話	筋書きと、焦りと	192
第十四話	vs フーケ	205
第十五話	遠い家路	222
第十六話	This World,	238
That World	——	248
第十七話	舞踏会にて	268

429	第二十六話	かつての夢	4つ目
	第二十五話	ひとときの休息	—
	第二十四話	溪谷の戦い	—
386	第二十三話	アルビオンへ続く道	—
	第二十二話	出発の朝	—
	第二十一話	古き友の来訪	—
	第二十話	王女、ご行幸	—
303	第十九話	平和な日々の過ごし方	—
285	第十八話	いつかの夢	3つ目

561	第三十五話	Party Night	—
	第三十四話	ニューカッスル城	—
	第三十三話	Flying Robb	—
	第三十二話	大空の珍客	—
504	第三十一話	かつての夢	5つ目
	第三十話	先を急ぐ者、追いつがる者	—
	第二十九話	襲撃	—
	第二十八話	月夜の対話	—
	第二十七話	中庭の決闘	—

547

535

486

475

467

447

第五十六話	The Will of	968
Royalty	—	—
第五十七話	決戦の日 前日	989
第五十八話	迫り来る脅威	1005
第五十九話	喧騒の学院	1018
第六十話	迎撃に向けて	1032
第六十一話	それぞれの思惑	1046
第六十二話	学院の戦い	1065
第六十三話	Mag e of Fla	1074
mes	—	—
第六十四話	贖罪の炎	1107
第六十五話	Relief	1132
第六十六話	守るべき意味	1159

第六十七話	喧騒の後で	1176
第六十八話	タルブの夜	1197
第六十九話	伝説と口八丁	1228
第七十話	来訪者たち	1255
第七十一話	彼方からの援軍	1276
第七十二話	エインヘリアル の残影	1294
第七十三話	Apostle of	1318
Ymir	—	—

第一章

第一話 予期せぬ出会い

あまりの眩しさに目を開けると、深く青い空が目の前に広がっていた。

まるで長い間暗い場所にいたかのように目の前がチカチカする。

いつの間に外で寝ていたのだろうか、青臭い草の匂いと優しくそよぐ風が心地良い。

「あのー！ もう一度召喚させてくださいー！」

少女の声が聞こえてくる。

「お願いしますー！」と、まるで子犬が喚くかのように甲高い声でしきりに誰かへ訴えていた。

「それはダメだ。ミス・ヴァリエール」

今度は落ち着いた中年男性の声が聞こえてくる。

「どうしてですか！」と訴える少女の声に対して、中年の男はゆつくりと諭すように続けた。

「決まりなんだ。春の使い魔召喚は二年生の進級に必要なだけでなく、神聖な儀式だと君だって知っているだろう。望む使い魔が召喚されなかったからといって、やり直すこ

とは出来ない」

「だ、だからって人間なんて」

「確かに動揺するのはもつともだ。しかし、まずは彼女を介抱しなくては」

リウスは彼らが近づいてくるのを感じた。

痛む頭を押さえながらゆっくりと上体を起こすと、頭上から声をかけられる。

「おお、気が付かれましたかな」

「・・・あなた達は？」

頭だけでなく身体中がズキズキと痛んでいる。

こここの連中か、もしくはは近くのモンスターに何かされたのだろうか。

しかし、自分の体を見ても傷一つついていない。

どうやら寝ていたのではなく気絶していたようだ。

ここに来る前に何をやっていったのか思い出そうとしても、頭に霧がかかったようであまり思い出すことができない。

リウスが痛む頭に手をやると、背中まで伸びる自分の薄桃色の髪が三つ編みのように結わえられていた。

この結わえ方は冒険に出る時のものだ。傍らには、同じく冒険時に持ち歩いている傷だらけの荷物袋が転がっている。

ふと自分の装いを確認してみると、冒険者としてのセージ（賢者）の正装をしていた。胸元には布の胸当てがなくて、肩には二の腕までしかないローブがかかっていた。

下半身には前掛けのような布きれと、背後からの攻撃を防ぐ分厚い布でできた防具。脛まで伸びる革製の靴は遠出する際のお気に入りだ。

セージになったばかりの頃は恥ずかしい恰好だと思っていたが、今はもう恥じらいなど残っていないかった。

この恰好は、見た目よりも戦闘を主軸に据えられているのだ。

ほんの少し思索にふけた後、見上げると中年男性と少女がすぐ近くに立っていた。

先ほどの声の主だろう。男性は丸いフレームの眼鏡をかけており、額から頭頂部にかけて禿げあがっている。

少しこけた頬に小さい耳。しかしその顔には彼自身の優しさがにじみ出ており、心配そうにこちらを窺っている。

その隣には鳶色の瞳と濃い桃色の髪をした少女がいた。

十二、三歳だろうか。両腕を胸の前で組み、半目でこちらを睨み付けている。

友好的には見えないが、随分と端正な顔立ちだった。私の淡い桃色の髪とは違い、鮮やかでウェーブのかかった濃い桃色の髪が彼女の雰囲気になじんでいる。

「あんた誰？」

ぶすつとしていた少女がぶつきらぼうにそう告げた。

モンスターに襲われていたのだとしたら、彼らに助けられたのかもしれない。

「冒険者のリウスと言います。助けていただいたようで、ありがとうございます。貴方は？」

「ボウケンシヤ？ 何よそれ、どこの平民かって聞いてるのよ。しかもアンタ、凄い恰好してるわね」

リウスは質問を無視されたことをさほど気にした様子もなく、目の前の桃色髪の少女の装いをざつと見る。

この少女は白い服にひらひらした黒いスカートを着て、そして上等そうな黒いローブを羽織り、首元には五芒星の紋章があつた。

その姿はゲフェンの魔法使い達とは随分と違う恰好だつた。

ゲフェンとは、『剣と魔法の王国』ルーンミッドガッツ王国における最大の魔法都市だ。

言い伝えによると魔法都市ゲフェンにはるか昔に存在していた巨大な王国の様相を受け継いでおり、その王国によつて生み出されたありとあらゆる魔法が連綿とゲフェンのウィザード達に語り継がれているという。

過去の魔法はその大半が失われているが、かつて失われた魔法を基にあらゆる新しい

魔法が生み出され続けている。

そして今もお、強大な魔力を操るウィザード達のギルドを中心に、数多くのウィザードや見習い魔法使いであるマジシャン達が暮らしている。

リウスもほんの4、5年前までマジシャンとしてゲフェンで暮らしていたため、ウィザードやマジシャンの装いをよく知っていたのだった。

それにしても、冒険者のことを知らないとは。

つまり今いる場所はルーンミッドガッツ王国のみならず、シュバルツバルド共和国ですらないようだ。

ルーンミッドガッツ王国が『剣と魔法』を主軸とする一方、シュバルツバルド共和国は『科学』という技術の開発を中心にしている巨大国家である。

ルーンミッドガッツ王国の北にあるミヨルニール山脈を国境として隔てており、この二大国家は表向き友好関係にあたるため、交易も盛んに行なわれていたはずだ。

つまり、今いるこの場所はこれら二つの大国とすら交易を結んでいない異国なのかもしれない。

リウスがなんとなく嫌な予感を巡らせていると、少し遠くから野次のような声が飛んできた。

「ルイズ、サモン・サーヴァントで平民を呼び出すなよ！」

「どっかの踊り子か何かかしら？ 凄い恰好してるわね、お腹といい足といい、丸見えじゃない」

「しかも、ちよつと髪が桃色じゃないか？ ルイズとお似合いだな！」

リウスが声の方向を見ると、遠巻きに少年少女たちがこちらを見て笑っていた。

彼らは皆、このルイズという少女と同じような恰好をしている。

「う、うるさいわね！ ちよつと間違えただけよ！」

ルイズと呼ばれた少女はリウスから視線を外すと、キツと彼らを睨み付け怒鳴り散らしている。

リウスは『呼び出す』という言葉が気になった。

また、これは予想通りではあるが、ジユノーに暮らすセージの正装も見たことがないようだ。

セージたちが住む都市ジユノーはシユバルツバルド共和国の首都であり、強大な魔法の力によって空中に浮いているため観光地としても有名である。

「間違えたって、ルイズはいつつもそうじゃん！」

「さすがはゼロのルイズだ！」

遠慮なんて考えもせず大きな声で爆笑する少年少女たち。

ルイズと呼ばれた少女は怒りを堪えプルプルと震えていたが、リウスは目の前のあま

りにも平和な光景に思わず目を細めた。

「失礼、ミス。私はこのトリステイン魔法学校で教師をしているコルベールというのですが、失礼ながら少々お話を聞かせていただいてもよろしいでしょうか」

様子を窺っていた中年の男、コルベールが声をかけてくる。

魔法学校というとゲフェンで言うところのマジシャン（魔術師）ギルドのようなものだろうか。

少年少女らは若すぎる上に戦闘経験もそれほど高くないように見えるので、彼らは見習いのマジシャン達だと考えると納得が出来る。

実力者といえる力を持っているのは遠目に見える子供らの数人と、そしてこのコルベールくらいのものだろうか。

「それは構いませんが。ええと、コルベールさん。すみませんが、ここがどこなのか教えてもらってもよろしいですか？」

いいですよ、とにこやかにコルベールは話し始めた。

「ここはトリステインです。ハルケギニアにある国の一つ、トリステイン。貴方は彼女、ルイズ・フランソワーズに召喚の儀式で呼び出されたのです」

やはり私知っているシユバルツバルド共和国やルーンミッドガッツ王国、アルナベルツ教団、それらの周辺国や、アッシユバキウムといった異世界のいずれにも属して

ないようだ。これもおおよそ予想通りである。

しかし『召喚の儀式』というのはどういう意味だろう。

「あのおう。召喚、とは？」

「ああ、気を悪くされないで下さい。何せ誰もこんな事が起こるなんて思っていないからですね。使い魔の儀式で人間が呼び出されるなんて。貴方を呼び出した彼女は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと言います。ここトリスティンでは名門と名高いヴァリエール公爵家の三女なのです」

使い魔の儀式。リウスはどんどん強くなる嫌な予感に眉をしかめた。

「コルベールさん。シユバルツバルド共和国、ルーンミッドガッツ王国、といった言葉に心当たりはありませんか？」

「シユバルツバルド、ルーンミッドガッツ、ですか。いえ、聞いたことはありませんね」
つまり、このルイズとかいう小さい子に、使い魔として、ルーンミッドガッツ王国を聞いたことすらない異国へと呼び出されたと。

しかもこのルイズとやらは貴族のおエライさんの子供のようにだ。

貴族とか王族とかいう奴らは信用ならない、それがリウスの見解である。

今まで会ってきた地位のある人たちを思い浮かべると、事あるごとに、アレを持ってこい、ココに行つてこい、と使いつ走りのように扱われてきた気がする。

指定の場所に行ったら、いきなり見知らぬ人にナイフを投げつけられたこともあった。

もちろん立派な人もいたが、大体がとんでもない連中である。

ふと遠目に見える少年少女らに目をやった。

コルベールの言う通り、自分のような人間らしき使い魔は見当たらない。彼らの傍らには召喚されたと思われる見たことのない生物がいる。

「シユバルツバルド？ ルーンミッドガッツ？ どの田舎よ！ ミスタ・コルベール！ やっぱりもう一度使い魔の召喚をやり直させてください！」

黙って聞いていたルイズがもう我慢できないとばかりに声を張り上げた。コルベールは眉間にシワを寄せてルイズに振り返る。

「落ち着きなさい、ミス・ヴァリエール。何度も言うようですが、もう召喚は行われたのです」

なおもルイズは反論をしようとしたが、コルベールはリウスの方へ再度向き直った。

「ミス・リウス。先ほどもお伝えしたように、貴方はミス・ヴァリエールに彼女の使い魔を呼ぶ呪文『サモン・サーヴァント』で呼び出されてしまったのです。そして、この春の使い魔召喚の儀式は昔からの伝統で、呼び出された生き物を使い魔として契約せねばなりません。」

「どうやら貴方はこの地ではない異国、例えば東方の出身などかと思われませんが、彼女と使い魔の契約を結んでいただけませんかでしょうか。当然、貴方の衣食住は主人となるミス・ヴァリエールが負担いたします」

丁寧の説明しているが、凄まじい言い分である。

「どこの誰とも分からない人間を勝手に召喚する」という誘拐まがいのことをしておいて、更に使い魔とやらになれ、ということのようだ。

ちなみに、コルベールもその事に気付いていたので少し気後れする部分があった。

しかし使い魔というものは貴族の大事なパートナーである。

そのため、いかに小さなネズミであつたとしても周りの者からその主人に近い身分として扱われる。

しかも、ミス・ヴァリエールはあのヴァリエール公爵家である。一介の平民にとって、その使い魔という地位はこの上ない身分だといえるだろう。

ただ順を追って説明している内に、ダメかもしれない、という気持ちが大きくなってきた。

この呼び出された女性は表情が分かりやすい。最初は感謝の笑みを見せていたが、ミス・ヴァリエールが召喚したことを告げたあたりから悩んだように顎に手をやっている。

一方、コルベールの説明を受けたリウスは少し不快感を思いつつも、セージとしての知識欲がムズムズと刺激されるのを感じていた。

互いに契約もしていない相手は無作為に呼び出す呪文、見たことのない生物たち。この魔法使い達の魔力の流れもちよっとおかしい。

もしかしたら、彼らの魔法は私の知らないものなのではないか。

「私は冒険者なので、滞在という形であれば別に構わないのですが……。使い魔というものが何なのか、もう少し詳しく聞いてからでもよろしいでしょうか」

「おいおい。ルイズの奴、使い魔の平民に契約を渡らされてるよー」

「さすがゼロのルイズ！ 平民にもルイズがゼロだつて分かるのかしらー」
「暇になってきたよ。早く契約してくれよー」

暇を持て余していた生徒らの間から、また野次の言葉が漏れ出した。それを聞いたルイズの頬にかあつと赤みが差す。

「うるさいわね！ 黙って待ってなさいよー」

ルイズがきんきんやんと喚いている時、リウスの要望を聞いていたコルベールは、やはりどうやらまだ時間がかかりそうだと内心ため息をついていた。

これが普通の使い魔であればさつさと契約をすれば済む話である。

しかし、今回呼び出されてしまったのは人間なのだ。もちろん彼女にも意思があり、

家族だっていることだろう。

人間を相手にあれよあれよと契約まで済ましてしまうのは、後々の問題に発展しかねない。

しかし、ずっと失敗続きだったミス・ヴァリエールにとっては初めて成功した魔法である。しかもこれは大切な使い魔召喚の儀式なのだ。

彼女が呼び出した使い魔に拒否されるような事態だけは避けなければならぬ。

「確かに、もつと話し合う必要がありますね。私は人間が召喚されたことを学園長にお伝えしなければなりません。授業の時間も押してしまっていますので、後はミス・ヴァリエールに詳しくお聞きください。ミス・リウス、それでよろしいですか？」

ルイズが口を挟もうとするが、リウスはちらりと彼女を見るだけでコルベールに答える。

「ええ、ではそれで」

「分かりました。ではミス・ヴァリエール。彼女に説明をしてもらえるかね。今日の授業は公欠扱いとするから、ミス・リウスと納得のいくように話し合いなさい。契約を済ましたら私に伝えるように」

そう言うと、コルベールは他の生徒達へ次の授業に出席するよう伝えた。

ルイズは横目でこちらを睨みながら、使い魔が契約を済るなんて、とブツブツ言っ

いる。

コルベールの指示を聞いた生徒たちは互いに談笑しながら呼び出したばかりの使い魔を連れ、ふわりと宙に浮かび上がると、遠目に見える建物へ飛んで行ってしまった。

ルイズとその使い魔とのやり取りを囁し立てていたものの、実のところルイズの失敗に付き合わされ、内心退屈しきっていたのである。

リウスは少し遠くに見える建物へ文字通り飛んで行った生徒達を、目を丸くして見つめていた。

「なにあれ、何かの魔法？」

「はあ？ レビテーションも知らない訳？ もう、私たちも行くわよ。歩きながら説明するから」

やっぱり私の知っている魔法と全然違う。

未知の土地に、未知の魔法。

リウスはワクワクする気持ちを抑えつつ、さっさと歩いていく目の前の少女についていくのだった。

第二話 最初の夜

「異国から、ねえ」

「もしくは異世界かもしれないわね」

「異世界なんてある訳ないじゃない、バカバカしい」

二人は、魔法学院内の学生寮の中、だだっ広いルイズの部屋のテーブルに向かい合って座り、メイドに持ってこさせた紅茶を啜っていた。

「どうやらこのルイズという子は私のことを東方の国から来たと思っ込んでいるようだ。」

学院へ向かう途中、リウスはルイズからの情報収集に努めていた。

「むやみやたらに自分の情報を明らかにする訳にはいかない。」

「まだ使い魔になると決めた訳ではないし、この土地における自分の優位性はここには無い自分の知識と魔法だけなのだ。」

「まず情報収集をしてからでも遅くはないだろう・・・。」

「そのような思惑もあり、ハルケギニア大陸における5つの王国であるトリスティン王国・ガリア王国・帝政ゲルマニア・アルビオン王国・ロマリア皇国について、人里に現

れるオーク鬼やコボルド等のモンスターについて、一般的な宗教であるブリミル教について、ここでは魔法を使えるメイジが貴族となっていること等々を聞き出すことに成功していた。

サモンサーヴァントという魔法で召喚された生物を、逆に元の場所に戻す魔法が存在しないと聞いたときは、心の内で、なんつー魔法だ、と思ったものだ。

そして何よりも驚いたのが空に浮かぶ2つの月だった。間違いなくここは異世界である。

リウスの世界には、月は1つしか存在しないのだ。

「それで、肝心の使い魔の件なだけど」

ここまで使い魔とはあまり関係のない説明を続けていたため、ルイズは少しイラついた様子で口を開く。

リウスは道中渋りながらもきちんと説明をしてくれるルイズの様子を思い出していた。

最初見た時はちよつとキツめの性格をしていると思っていたが、根は真面目で優しいのかもしれない。

「契約はするんでしょうねー！」

使い魔のことについては説明していないことを忘れているのだろうか。

ルイズの言葉にリウスは内心呆れていたが、余計な質問をしていたのはこちらの方なので顔には出さないで尋ねる。

「使い魔が何をやるのか教えてもらってもいいかしら」

「もー、手間のかかる!」

そう言いながらもちゃんと説明しようとするルイズ。

やっぱりこの子は優しい子なんだろうなあと思う。

少なくとも自分が育ったところではこういう子はいなかった。

「いい? まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力が与えられるわ。つまり、使い魔が見たものは主人も見えるようになるの」

「へえ、それは凄い。でも使い魔のプライバシーはどうするの?」

「普通は人間が呼び出されることなんてないのよ。はい次。使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。例えば秘薬の材料とか」

「秘薬というと、植物とか鉱物を取ってくればいいのかしら。形と場所を教えてくださいば出来ると思うわ。これでもセージなんだから」

「セージ?」

「賢者のことよ。学者と言い換えてもいいかもしれない。元いた場所だと薬の材料をよく自分で取ってきてたし、たぶん大丈夫」

「平民の学者のことを賢者って言うなんてずいぶん生意気ね。ふーん、学者だったんだ。踊り子とかかと思つた、そんな恰好してるし」

リウスは「まあ、確かにね」と苦笑した。

冒険者でもない限り、こんな恰好をした学者はいないだろう。踊り子のような服であるのも否定できない。

「次。使い魔は主人を守る存在であること。一番重要だけど、これはいいわ。アンタ、女の人だし」

リウスは学院への道中に聞いたオーク鬼やコボルド程度なら多分問題は無いだろうと思つていたが、これは言わないことにした。

私の魔法、つまりルーンミッドガッツの魔法を使うのは、もつとこの世界の魔法について調べてからにしなければならぬ。

この世界の国々が魔法を軸に据えた社会制度を取っている以上、体系の違う魔法を使つてしまうと身元を調べられる恐れがある。

いづれ帰るための手段を探るときに、組織立つて追われでもしたら目も当てられない。

ふと見るとルイズがもじもじと何か言い辛そうにしているのが目に入った。

さつきまで流暢に喋っていたのに、急にどうしたのだろうか。

「それから、ね。アンタ昼間に、コルベール先生に、滞在でいいのなら使い魔をやってもいいって言ってたじゃない？」

それでね、とルイズは視線を泳がせている。

「確かにそう言ったわね。聞いている限り使い魔の仕事には問題なさそうなんだけど……。もしかして、契約つてのは一年や二年の話じゃないのかしら？」

「……あのね。その、一度行なった契約は、どちらかが死ぬまで一生続くの」

その言葉を聞いたリウスは納得のいったように、うーむ、と天井を仰いだ。

言いくそうにしていたのはそういうことか。

私がコルベールに滞在なら構わないと言っていたことで、契約が一生続くことを伝えると、契約そのものを断られると思ったのだろう。

そして昼間にコルベールが言っていたように、契約が行えない、使い魔がいなくなるとルイズは進級することができない。

「……まるで誘拐ね」

心の内で思ったことを思わず口に出してしまうと、ルイズがハツとした顔をして俯いてしまった。

「……ごめん。何を呼び出すか分かっていなかったんだし、しかも人間が出てくるなんて思いもしなかったんでしょ？ 貴方は悪くないわよ」

「・・・」

ルイズは顔を上げずに俯いたままだ。

その様子を見たリウスは居心地の悪い気分になりながらも、腕を組んで今後どうするかを考える。

リウスは、使い魔との契約のことをルーンミッドガッツにおけるモンスターペットのようなイメージで考えていたのだった。

ペットという用語があり、実際のところは協力、共存といった方が正しい。

モンスターペットとは、主人がモンスターに食糧や住居の提供を行なう代わりに、モンスターが主人へモンスター自身の能力の一部を譲渡する、という互いの利益を重視した契約に近いものだ。

そのため、主人はそのモンスターを他の人に譲り渡すことが出来るし、モンスター側が不当な扱いを受けたと感じた場合には半ば一方的にその契約を破棄することが出来る。

「私とは契約をしないで、もう一回使い魔を呼び出すことはできないの？ それまでなら使い魔としての仕事もやるわよ」

もちろん衣食住は確保してもらおうけれども、とりウスは続けた。

これは私が呼び出された際にルイズ自身がコルベールへ訴えていたことだ。

しかし、ルイズは俯きながら答える。

「・・・本当は、もう一度使い魔を呼び出せるかどうかは分からないの。使い魔が死んでしまうことで契約が切れるのは間違いないんだけど、少なくともこの図書室には呼び出した使い魔が生きてる内にもう一度召喚して成功した記録が無かったわ。呼び出した使い魔が契約を拒否すること自体起きないことなの」

リウスは一度死ぬことで契約が切れるのであれば問題ないのではないか、と思ったが、自身の道具袋の中身を思い返すと考えを改めた。

学院へ移動する時、ざつと道具袋の中身を改めたが、死者蘇生の効果を持つアイテム、イグドラシルの葉は持っていなかったはずだ。

もしかしたらこのハルケギニアの世界にも死者蘇生のアイテムがあるかもしれないが、ルイズの言い分だと死者蘇生のアイテムがあつたとしても簡単に手に入る代物ではないのだろう。

それに、そもそも異世界から来た私を蘇生させる効果があるかどうかは判らない。

リウスの世界においても、イグドラシルの葉により死者蘇生を行なえるのは戦女神ヴァルキリーの祝福を受けた者のみである。

女神ヴァルキリーはルーンミッドガッツの主神オーディンに連なる神の一柱であり、地上に生まれてくる一部の人間にその祝福を授けるといふ。

また、祝福を受けた者は生まれつき祝福を受けた記憶を持っている。

リウスもその一人であるため今まで死んだ経験は数知れない。何度経験しても死ぬことには慣れないものであるが。

ともあれ、一回死んで契約を切ってから蘇生する、という手法は出来ないと考えた方がいいだろう。

(そういえば、私は何で元いた世界に帰りたいんだっけ)

元の世界に戻る手段については何も分かっていないに等しい。

使い魔を拒否したところで、身元不明の女性がこの世界で生活の基盤を作るといふのは相当な労力がかかるだろう。

そのためリウスは、使い魔になりつつ元の世界へ帰る方法を探し、場合によってはこの世界で骨を埋めてしまっても仕方がないかとまで考えていた。

しかし元の世界で何かやり残してしまっているような、そんな気持ちが頭の奥でぐるぐると回っている。

いまだに呼び出される前のことは思い出せていないが、そのことが関係しているのかもしれない。

そう思い悩んでいるとリイズが俯いたまま口を開いた。

「いめんなさい……」

ふと見ると大粒の涙がテーブルにこぼれている。

リウスは慌てて声をかけた。

「ちよ、ちよっと。大丈夫よ、貴方のせいじゃないわ。言ったでしよ、私は冒険者よ。帰る手段くらいどうにかなるって」

そう言うところ、リウスはびくりと身を震わせる。どうやら『帰る』という言葉に反応したようだ。

まだ会ってから半日も経っていないが、リウスが、彼女の言う平民に対してこうして謝ることなんて思ってもいなかった。

何度かリウスに『平民のくせに』と言っていたのを思い出す。

リウスにはよく分からなかったが、きつとリウスには自分が貴族であることに誇りがあるのだろう。

昼間の広場で『ゼロのリウス』と笑われ、怒りに震えるリウスを思い浮かべる。

目に力を溜めて必死に何かに耐えようとしているリウス。

その昼間の様子から、彼女の心中はなんとなく想像できた。

かつての自分も、周りから笑われていたのだから。

リウスが口を開くと更に涙がこぼれていく。

「わ、私は、あなたのことを、へ、平民のくせにとか言っちゃって。あなたの言う通りよ。

私がやったことは、ゆ、誘拐と同じことだわ。あ、あなたにだって家族はいるのに」
リウスはゆつくりと席を立つと、ルイズの横にしゃがみこんで何とか慰めようとする。

しかしルイズは顔を見られまいと、ぷいと顔を背けた。

その様子は見た目よりも幼い子供に見える。

ひつくひつく、と泣き声だけが部屋に響く。

ルイズは自分がやったことが「誘拐のようだ」と言われた時、大きなショックを受けていた。

去年の今頃、数多くの平民が誘拐されて殺されるという事件が多発していた。

誘拐された平民はその半数が見つからなかったが、残る半数は殺された挙句に道端に打ち捨てられ、その身体には生々しい拷問の後が数多く残っていたという。

民間人による拷問はハルケギニアでは重罪である。

事態解決に動き出した魔法衛士隊は犯人をあつという間に発見し、犯人は衛士隊に抵抗したことによってその場で処刑された。

その犯人は、家を追われた下級貴族だった。

ルイズはその事件を知った時、大きなショックを受けると同時に、その貴族を許せない、と怒りに溢れていた。

杖を持って平民を守らなければならぬ貴族が、よりにもよって自分の快樂のために平民を殺すなど。

しかし今の自分はどうか。

故意ではなかったとはいえ、それが何だつて言うのだ。

平民を笑いながら拷問で殺していく下級貴族を思い浮かべる。

自分ももし彼女、リウスと同じように、見知らぬ土地にサモン・サーヴァントで呼び出された挙句、使い魔になれと言われたらどう思うか。

猛然と拒否した上で、なんとしてでも自分を元の場所へ帰すように要求するだろう。

その上で召喚した者を恨むだろう。

何てことをしてくれただと。

「ご、ごめん、なさい……」

泣き続けるルイズがぼつりと口にする。

リウスはどうしよう、と焦ったが、覚悟を決めて頭をガシガシとかいた。

「あーもう！ メソメソしない！ あと謝らないの！ アンタは悪くないし、私はアンタを恨んだりしちやいないから！」

リウスは泣き止まないルイズの頬を両手で挟むと無理やり自分の顔へ向かせた。

「使い魔になってやるわよー！」

ルイズはきよとんとした。

てつきり憎まれていたものだと思っていたのだ。しかも、使い魔になつてやる？ 何で？ 無理やり呼び出されたのに？

ルイズの頬から両手を話すと、リウスがルイズの目を見たままゆつくり語りかけてくる。

「ルイズは立派だよ。貴族とか平民だとかは馴染みがないから分からないけどね。あたしはアンタが気に入ったんだ。だから使い魔になつてやる」

ルイズは立派、とそう言われてもピンとこない。

ただ今はそれよりも聞かなければならないことがある。

「で、でも帰りたいんじゃないの？」

「帰りたい理由も思い出せないし、別に急ぐ訳でもないからね。ルイズがビービー泣いたりしなくなるまで付き合ったら、帰るか帰らないかゆつくり考えるとするわよ」

少し間を置いてから、ルイズが口を開いた。

「そう、なの。あの、ごめんなさい」

「だーかーら、謝ったらダメだつて」

笑いながら、よいしょ、と立ち上がるリウス。先ほどのやり取りが恥ずかしかったのか、その頬は少し赤らんでいる。

ルイズはその様子をじっと見て、ふふつと小さく笑った。

「どうしたの？」

「リウスってさ、本当はなんか男っぽい口調なのね」

そう言われたリウスは照れたようにそっぽを向きながら、頭をがりがりとかいた。

「うるさいなあ、昔っからこうなのよ。せつかく人が立派なセージに見えるように気を付けてたっていうのに」

小さく二人で笑いあうと、思い出したようにリウスが尋ねる。

「それで。契約するのはどうやるわけ？」

第三話 懐かしい生活

朝、窓から差し込む光にリウスは目を覚ました。

ゆっくりと体を起こし軽く伸びをすると、ふっと辺りを見回す。

そこは野外でもなければ、ルーンミッドガッツ王国の首都プロンテラの民宿でもない、ルイズの部屋だった。

すぐ隣を見ると、まだルイズは寝息を立ててやすやすと寝入っている。

昨夜は夕食に間に合わなかったため、メイドに持ってきてもらった軽食を取った。

その後に契約を済ませると、リウスはルイズの寝巻を借りてルイズのベッドに寝させてもらったのだった。

寝るのは別にベッドじゃなくてもいい、とリウスは伝えたが、ルイズは頑としてベッドで寝るべきだと意見を曲げなかった。

平民といえども女性性を床や外で寝させることは貴族としてどうか、という話のようだ。

リウスはベッドから降りると、部屋の隅にある鏡で身なりを確認しながら、寝巻を脱いで、椅子にかけておいた冒険服に着替えた。

昨夜はパンツだけ履いて眠ろうとしたリウスに、ルイズが慌てたように寝巻を貸してくれたのだった。

そもそも冒険時には着替えなど必要としない。

長期の冒険であるなら破損時の予備として複数の冒険服を用意するが、宿に泊まる場合には屋内ということもあり、毛布で充分に暖が取れるため裸で寝ることも少なくないのである。

とはいえ、寝巻を着た方がよく眠れるので貸してくれるならありがたかった。

のであるが、ルイズの身長は150センチ程（1センチ≒1cm）であり、リウスよりも20センチ近く小さい。

そのため、ルイズの寝巻を着たりウスは見事なつんつるてんだった。

リウスは慣れた手付きで髪を三つ編みに縛り終わると、ふと左手の甲を眺めた。

左手の甲には、昨晚契約をしたときに浮かび上がった奇妙な模様がある。もつとも、契約の際には焼きごてを当てられるような激痛が伴ったのだが。

（まさか、契約の方法がキスだなんてねえ）

そうひとりごとちると少し顔が赤くなっているのを感じる。

別に同性愛の気はないが、冒険家などやっているときスなんてそうそうしないものだ。

もう二十歳近くになるが特定の相手もないし、どちらにせよ恥ずかしいものは恥ずかしい。

(そういえば朝起こしてって言われてたっけ)

リウスはすっかり着替え終わったが、少し物音を立てたくらいではルイズは起きないようだった。

起こす時間が正確には分からないが、このまま寝かしておく訳にもいかないだろう。

事実、周りの部屋からはかすかな物音が聞こえてきている。

「ルイズ、ルイズ」

体を揺さぶっても、なかなかルイズは起きようとしなない。

「ほらルイズ。起きてったら」

「……うーん、あともうちよっと」

そう言うと、またルイズはむにやむにやと寝入ってしまった。

面倒くさい、魔法でもぶっ放してしまおうか、と少し考えたがそれは流石にまずいだらう。

ルイズが毛布を巻き込むように丸まり始めたので、リウスはその毛布を奪うように無理やり引つpegがした。

「ほら！ 朝だよ朝！」

「わ、わ。なに？ なにごと？」

急に毛布を剥がされたルイズはあわあわと慌てながら起き上がった。

「……ちいねえさま？」

目をシヨボシヨボさせながらそんなことをのたまう。

「誰が姉さまよ。まだ寝ぼけてるのかしら」

「……あー、リウス。おはよう。もうちよつと優しく起こしてもらえる？」

「優しく起こしてたわよ。もう、遅刻しちゃうわよ？」

のろのろと動き出したルイズはそのままゆつくりとベッドに座り込んだ。

「服」

「服が何？」

「服、取って」

「自分で取りなさいな」

「貴族はー、自分で着替えたりしないものよ」

まだ随分と眠そうである。

まあ、今日は使い魔としての初日だ。今後、使い魔というものがどこまでやるべきなのか、色々と話し合うことにしよう。

そう結論付けたリウスは面倒くさそうに腕を組んだ。

「しようがないわね。どこにあるの？」

「そこに下着があつてー、制服があつちにー」

指示通りに下着と制服を取ると、座ったまま眠りかけていたルイズに無理やり手渡す。

ルイズは手元にある服をしばらくぼうつと眺めてから口を開いた。

「服」

「服が何よ」

「服、着せて」

「貴族は自分で服を着替えたりしないって？」

「そう」

まだ眠くて仕方ないという顔をしているルイズにつかつかと近寄ると、リウスはルイズの乱れた頭をくしゃくしゃと撫でまわした。

「な、何するのよ」

「アホなこと言つてないで早く着替えなさい。後で髪くらいなら梳いてあげるから」

ルイズは、貴族をなんだと思つてるのかしら、などとブツブツ言いながら制服に着替え始めた。

着替え終わったルイズが髪を梳いてほしいと言つてきたので、鏡の前に連れてくると

姿見に置かれた櫛で髪を梳いてやる。

まるで手のかかる妹みたい、と思う。

ルイズは着替えている内に目が覚めた様子だったが、桃色の髪を梳かれながらもまだ小さく欠伸をしていた。どうやら朝は弱い性質のようだ。

「綺麗な桃色の髪ねえ。よし終わり」

梳き終わった髪を眺めてそう伝える。

ルイズが言うには、ヴァリエール家は代々桃色の髪をしているとのことだ。

姉の一人と母親が同じような髪をしているらしい。

準備を終え、朝食を取るために部屋を出る。

すると、すぐ近くのドアが開き、中からこの学院の生徒とおぼしき制服姿の女性が現れた。

燃えるように真っ赤な髪に彫りの深い顔、突き出た豊満なバストを胸元の開いたブラウスで強調する、褐色肌の美女。

身長、肌の色、雰囲気、胸の大きさ、全てがルイズと対照的だった。

彼女はルイズを見ると、にやっと笑いかける。

「おはよう、ルイズ」

ルイズは顔をしかめると、嫌そうに挨拶を返す。

「おはよう、キュルケ」

キュルケと呼ばれた女性はまじまじとリウスの顔を見ている。

「貴方の使い魔って、その人？」

リウスを指さし、バカにした口調で言う。

「そうよ」

「あつはつは！　ほんとに人間なのね！　すごいじゃない！　人間を召喚するなんて貴方らしいわ、流石はゼロのルイズ！」

ルイズの頬にさつと赤みが差した。

「うるさいわね」

キュルケと呼ばれた少女はひとしきり笑うと、リウスの顔をもう一度ちらつと見る。

「おはようございます。私の名前はリウスと言います。これからよろしくお願いしますね」

口調に気を付けながらにこやかに挨拶をする。

ルイズが半目でこちらを睨んでいるようだが、気付かないふりをした。

「あら、おはよう。ルイズの使い魔にしちゃあ品が良いわね。でも、人間の使い魔じゃあねえ。あたしも昨日使い魔を召喚したのよ、誰かさんと違って一発で成功よ」

「あつそ」

つんと澄ました顔でルイズが答える。

「どうせ使い魔にするなら、こういうのがいいわよねえ。フレイムー」

キュルケの呼び声に応え、真つ赤で巨大なトカゲがキュルケの部屋からのつそりと現れる。

大きさは虎ほどもあるだろうか、尻尾は炎で燃え盛り、むつとする熱気を放っている。

「これって、サラマンダー?」

ルイズが悔しそうに尋ねた。

「そうよー、火トカゲよ。見てこの尻尾。ここまで立派で鮮やかな炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ。好事家に見せたら値段なんかつかないわよー」

「そりゃあ、良かったわね」

ルイズは憎々しげに答えてから、ふとりウスを見上げると、息を飲んだ。

立ったままの姿勢は変えていないが、彼女がこれ以上ない程に警戒心を露わにしているように見えたからである。

サラマンダーがそんなに珍しかったのだろうか。

「素敵でしょう、あたしの属性にぴったり」

キュルケはリウスの様子に気付かずに会話を続けている。

厳しい目つきでサラマンダーを見つめるリウスが静かに口を開いた。

「このサラマンダーは、近付いても平気なのですか？」

「ああ、大丈夫よ。嘔みついたりしないわ。あなたはあんまり見たことないかもしれないわね」

キュルケがけらけらと笑いながら答えると、リウスは膝をついてまじまじとサラマンダーを見つめた。

サラマンダーはきゆるきゆると声を出し、丸い目でリウスを見つめ返す。

(違うみたいね)

リウスは内心ほつと息を吐いた。

リウスの世界にも、トール火山という場所にトカゲに似たサラマンダーという魔獣が生息する。

ただ、トール火山のサラマンダーは全身が炎で構成されており、生物というよりも精霊に近い。

たとえ腕利きの冒険者達が慎重に歩を進めていても、一瞬の油断でパーティーが壊滅させられる程の危険な存在だ。

自分も文献で読んだことしかないためサラマンダーと聞いた時には耳を疑ったが、こうして見る限りだとこの世界のサラマンダーはそれ程危険な生物ではないのかもしれない。

「初めて見ました。立派なサラマンダーですね」

そつとサラマンダーに触れてみると熱い程の熱気を帯びている。そのままサラマンダーの頭を撫でてやると、きゆるきゆると嬉しそうな声を出した。

「でしよう？ ルイズと違つて話が分かるわね」

キュルケはにつと満足そうに笑う。

「あたしは『微熱』のキュルケ。これからよろしくね。それじゃ、また後でね。リウス。ルイズも」

そう言うと、炎のような赤髪をかきあげ、颯爽とキュルケは去つていった。

その後ろをフレイルムがちよこちよここと可愛らしく追つていく。

キュルケが居なくなると、ルイズは拳を握りしめた。

「くやしー！ なんなのあの女！ 自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからつて！ ああもうー！」

「いやあ、立派な使い魔ね。ルイズもああいうのを召喚したかったの？」

「あたりまえじゃない！ メイジの実力を測るには使い魔を見ろつて言われてるくらいよ！ なんてあの女がサラマンダーで、わたしがアンタなのよ！」

昨晚の泣きじゃくつた姿はどこへやら、床をダンダンと踏みしめている。

「大体、アンタもアンタであの女の使い魔を褒めてんじやないわよ！」

「だって初めて見たもの、あんな生き物。面白いわね、尻尾の構造はどうなってるのかしら」

「もういい加減にしなさい！ 私達もさつきと行くわよ！」

ルイズは少しずつと廊下を進み、リウスがその後ろを追う。

ふとルイズはさつきのサラマンダーを前にしたリウスの様子を思い返していた。

あの、緊張感。

姿勢はそのままに即座に動けるよう警戒心を露わにしていた姿は、まるで戦い慣れた戦士であるかのように見えた。

ただの平民だと思っていたけど、まさかね。そう思いながら、ルイズは食堂へと向かっていくのだった。

リウスは食堂へ繋がる渡り廊下を歩きながら、目の前を歩くルイズや他の生徒達を尻目に窓から外をちらと眺めた。

この魔法学院は、中心にある巨大な本塔と、それを囲む5つの塔からなっているようだ。

本塔を取り囲んでいる5つの塔はそれぞれ均等な距離で城壁を繋いでいるため、上空から見ると五角形になるように作られているのだろう。

リウスは、この施設は城塞の役割も持つているのかもしれない、と考える。

ルイズの話によると、この世界における魔法を使える者は大抵が貴族であるという。魔法学院、という名前から考えると、ここにいる子供達はほぼ貴族なのだろうし、戦時に独立して自衛できるように作られているのかもしれない。

つまり、ここはこのトリスティンという国の重要な施設だということだ。

戦時には城塞として支配階級である貴族の子供を守り、平時には魔法の教育を中心に、貴族同士の繋がりを作ることで各々の貴族を知るチャンスとなるのだろう。

リウスは内心、気を付けなければ、と身を引き締める思いになった。

自身が余りにも目立つ行動を取れば、その情報がそのまま支配階級の耳に届くことになる。

私自身大した魔法は使えないが、それが未知の魔法となると話は別だろう。

平民ということではほど興味を引かれていないようだし、大体の貴族が子供なので、そこまで気を付ける必要もないかもしれないが。

食堂の中に入ると、大聖堂のような巨大な食堂全体がきらびやかな装飾に彩られていた。

その中には、やたらに長く豪華なテーブルが3つ並んでいる。

「1つのテーブルに百人は座れるだろうか。二年生であるルイズ達は真ん中のテーブルのようだ。」

「うわあ、これは凄いわね」

あつげに取られたリウスが口を開けたまま感嘆の声を漏らすと、ルイズが腕を組んで自慢げに言う。

「でしよう？ トリステイン魔法学院で教えるのは魔法だけじゃないのよ」

それにしても豪華すぎやしないか。

テーブルには純白のテーブルクロスが敷かれ、その上には朝食とは思えない程の上質な料理が所狭しと並んでいる。

「メイジはほぼ全員が貴族なの。『貴族は魔法をもってしてその精神となす』のモットーのもと、貴族たるべき教育を存分に受けるのよ。だから食堂も、貴族の食卓にふさわしいものでなければならぬの。もちろん、料理人も超一流よ」

「なるほどねえ」

相槌を打ちながら、リウスはいつも自分が食べていた食事を思い出す。

大体リングー個と、適当に塩を振った干し肉1つで夜まで持たせていた。栄養も何もあつたものではない。

「本当ならあなたはこの『アルヴィーズの食堂』には入れないんだけど、特別に私が許可

してるのよ。感謝してよね」

「そっか。ルイズ、ありがとうね」

リウスは、にこやかに笑いながら返答をした。

まだ召喚されてから一日弱しか経っていないが、リウスにはルイズが手のかかる可愛い妹のように感じられていた。

しかし、ふと思う。何か変じゃないか？

席にたどりつき、ルイズに命じられて椅子を引いたリウスは、腰かけたルイズの前に置かれた料理に再度目を通した。

高級そうなローストチキンにワイン。

皿の底まで透き通っているスープ。

魚の形をしたパイ。

色とりどりのサラダ。

他にも、見たこともないような旨そうな料理が沢山置かれている。

「朝からよく食べられるわね。こんなにいっぱい」

「あら、全部は食べないわよ。食べたい分だけ食べるの」

ルイズはさも当然であるかのように手を振った。

それを聞いたリウスは、支配階級つてのはこういうものよね、と内心ため息をついた。

こんな上等な料理を残すというのはのだから、ため息も出るといふものだ。

「それで、私の食事はどうしようかしら。ここは貴族サマの席よね」

「あ……」

「そういうえば、昨日どたばたしていたおかげで厨房に料理の用意してもらっていない。い。

「あなたの食事を用意してもらっていないなかったわ」

「そうなの。じゃあ外で何か食べれそうなものでも探してこようかしら」

リウスはこともなげにそう言った。

冒険をしている時には食べられそうなモンスターを狩って食べていたし、そこらに生えていたハーブをむしり取って調理したこともある。

彼女にとって野生の食糧探しは大した苦でもないのである。

しかし貴族であるルイズは、もちろんそんな経験をしたこともない。

「ちよ、ちよっと、別にそんなことしなくてもいいわよ。厨房に言つて用意してもらおうかしら」

「別にいいのに」

ルイズは焦つたようにリウスに告げると、近くを通つたメイドを呼びつけた。

「彼女、私の使い魔のリウスっていうんだけど、彼女の食事を用意してもらえますか？」

「承知いたしました、ミス・ヴァリエール。ミス・リウス、こちらへどうぞ」

特に嫌そうな顔もせず、恭しく答えるメイド。確か、昨日軽食を部屋に持ってきてくれたメイドだったはずだ。

「食べ終わったら外で待つてて」

ルイズの言葉に、はいはい、と手を振って答えると、リウスは横で控えていたメイドに連れられて厨房へと向かっていった。

「何かお食べになりたいものはございますか？」

厨房へ着いたリウスに席を促しつつ、先程のメイドが尋ねてくる。

カチューシャでまとめられた綺麗な黒髪とそばかすが可愛い女性だ。

しかし、今は顔が若干強張っている。

この女の子が厨房の人間に事情を話している時にも思ったが、どことなく厨房全体に緊張感が伝わっているのをリウスは感じていた。

「ありがとうございます。忙しい貴方がたの手を煩わせたくありませんので、余りもので構いませんよ。ええと、お名前は？」

「あ、私はシエスタと言います」

「確か、昨日の夜にもルイズの部屋に軽食を持ってきてくれましたよね。遅くなりました

たが、ありがとうございます。とても美味しかったです」

「あ、ありがとうございます。丁寧に、どうも」

シエスタは少し戸惑いながら礼を返すと、では少々お待ちください、とその場を去って行った。

どうやら、厨房の者が食べる賄い料理を持ってきてくれるらしい。

料理を待つ間、リウスは厨房を見回した。

調理や仕込みに追われているようで、コックもメイドもバタバタと忙しそうだ。

そんな中、時々こちらへ視線を向けてくる者もいる。

どこの誰とも分からない貴族の使い魔にどういふ対応をすればいいのか分からないのだろう。

今の私はそういう身分なのだからしょうがないのだが、なんとなく気まずい雰囲気である。

「ミス・リウス、お待たせいたしました」

ぼんやりと厨房の様子を眺めていたリウスの前に、暖かそうなスープと数個の白パン、魚のパイの半分と、数切れのローストチキンや瑞々しいサラダが運ばれてきた。

「ありがとう、ミス・シエスタ」

にこやかにお礼を言いながら、運ばれてきた料理をもう一度見る。

その内容に、内心困った気分になった。

どうやら貴族の使い魔ということで大分気を遣わせているらしい。

賄いといつても、この料理はさつき見た貴族の料理と同じようなものではないか。

「ええと、ミス・シエスタ。私のことは『ミス』をつけずに『リウス』って呼び捨てで結構ですよ。別に貴族でもないですし、なんかこそばゆいので」

照れくさそうにそう伝えると、シエスタは一瞬驚いた顔になりつつも穏やかな笑みで返した。

「分かりました、リウスさん。では、私のことも『シエスタ』とお呼びください。私も『ミス』と呼ばれるのは初めてで、ちょっとその・・・」

可愛らしくもじもじとしているシエスタに、分かったわ、と笑いかけつつ、スプーンでスープを一口すすする。

「これ美味しいわね。今までこんな美味しいもの、食べたことないわ」

「よかった。お替りもありますから、ごゆっくり」

一礼して。パタパタと仕事に戻っていくシエスタを見送ると、今度はローストチキンを一切れ頬張る。

これも非常に美味だった。気付くと、机の上に並んでいた料理を次から次に平らげってしまう。

リウスは小食な訳ではなく、単に食事の必要を感じないからそこまで食べないだけなのだ。

その考えも、この食事の前には改めるべきかもしれない。

お腹がいっぱいになり一息ついていると、シエスタが紅茶を手に戻ってきた。

「紅茶はいかがですか？」

「ありがとう、シエスタ。他の料理もとっても美味しかったわ。朝からこんな美味しい料理が食べられるなんて幸せね」

正直な感想を口にする、シエスタはふふつと微笑みを返した。

「満足いただけただけで何よりです、リウスさん。はい、紅茶をどうぞ」

リウスは紅茶をゆつくりと飲み干すと、そろそろルイズも食べ終わったかしら、と席を立った。

「シエスタ、ごちそうさま。作ってくれた人にも、とても美味しかった、ありがとうって伝えておいて。・・・あと私には本当に気を遣わなくていいからね？ あなた達の邪魔はしたくないから」

リウスが厨房に来たばかりの時とは違い、シエスタはにっこりと笑った。

「分かりました、リウスさん。昼食の時にもいらしてください。用意してお待ちしていますので」

第四話 はじめての授業

朝食が終わり、ルイズとリウスは授業のある教室へと向かっていた。

教室に入ると、先にやってきていた生徒達が一斉にこちらを振り向き、くすくすと笑い始める。

ルイズは周囲の様子に対して特に気にした素振りも見せず、自分の席へと向かっている。

ふと見ると、朝に会ったキュルケがこちらへ向かってひらひらと手を振っていた。

彼女の周りには男子生徒が囲んでいて、キュルケをまるで女王のように祭り上げている。

「やっぱり、ここの空いてる席に座ったらダメなの？」

「うーん、そうね。今日は使い魔の紹介も兼ねているから、なるべく近くにいた方がいいわね。座らずに立つてるのも後ろの邪魔になるから、座ってもいいんじゃないかしら」
「そう。ならよかった」

リウスは嬉しそうにルイズの隣に座ると、いそいそと荷物袋から持ってきた小袋の中から羊皮紙と羽ペンやインク瓶を取り出した。

準備を終えて教室を見回すと、色々な種類の使い魔が目に入った。

椅子の下でどぐろを巻いているヘビや、生徒の肩に乗ったフクロウ、机の上にはカエルやネズミがちよこんと行儀よく座っている。

その中でも、特に目を引いたのは見たことのない生物達だった。

宙に浮いた巨大な目玉……。ビホルダーもあんな目玉をしている。しかし、この生物のように触手はない。それよりもこの生物には翼もないし、どうやって浮いているのだろう。

下半身がヘビのようになっていてる女性……。オボンヌ、は確か人魚だったはず。どちらかといえばイシスに近いが、明らかに鱗の形状や尻尾の形がイシスとは異なっている。

巨大なトカゲがうろうろしている……。体の大きさはフリルドラやドリラーと似ているが、あれらはどちらかといえばイグアナだった。ここにいるのは完全にトカゲだ。

どんな生態をしているのかしら、トリウスがその生物たちを観察していると、教室の扉が開いて優しい雰囲気を漂わせた中年の女性が入ってきた。

その女性は紫色のローブにふちの長い帽子を被っていて、それこそゲフェンによくいるウイザードハットを被った魔法使い達に似ている格好だ。

彼女は教壇に上がって教室の中を一瞥すると、にこりと満足そうに微笑んだ。

「皆さん、おはようございます。どうやら春の使い魔召喚の儀式は大成功のようですね。このシユヴルーズ、こうやって春の新学期に様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

そしてシユヴルーズはもう一度ゆっくりと教室中を見回して、生徒と使い魔の姿を確認していく。

やがて、その視線がルイズとリウスに向けられた。

「ああ、貴方が。ミス・ヴァリエールはとも変わつた使い魔を召喚したものですね」

その言葉を待つてました、とばかりに教室中が笑いに包まれた。

「ゼロのルイズ！ 召喚できないからって、その辺にいる平民を連れてくるなよ！」

小太りの生徒が囁し立てると、教室が更に大きな笑い声に包まれた。

ルイズはおもむろに立ち上がり、野次を飛ばした小太りの男子生徒に向けて怒鳴る。

「違うわ！ ちゃんと私が召喚したもの！ リウスが召喚されちゃつただけよ！」

「嘘つくな！ 『サモン・サーヴァント』が出来なかつたんだろう！」

「っ！ この……」

リウスはなおも反論しようとするルイズの袖を引っ張つた。

すると、ルイズはキツとリウスを睨み付ける。

（何よ！）

(あんまり熱くなるとキリがないわよ。ああいった手合いには、正論を言ったり、逆に容姿とかで言い返してやりなさいな。流れを自分に持つてくるのよ)

横に座る使い魔と小声でやり取りをするルイズに対して、じれたように小太りの生徒が続ける。

「金でも掴ませて平民を連れてきたんだろう！ お前はゼロのルイズだもんなー！」

ルイズはふうつと息を整えると、軽く笑みを浮かべ小太りの生徒に向き直った。

「昔から事あるごとにつつかかかってくるわね、マリコルヌ。何？ 貴方、私に気でもある訳？ デブが移るから話しかけないでくれませんか？」

「なっー！」

女子生徒がその言葉に吹き出すと、男子生徒達が一斉に、ルイズのことが好きだったのか、道理でよくルイズにちよっかいを出す訳だ、と逆にマリコルヌと呼ばれた生徒を囁し立て始めた。

「こっ、このゼロのルイズ！」

「あーあ、それしか言えないのかしら。そもそもガラガラ声で何を言ってるのかよく分からないわ。それよりも早く黙らないと、ミセス・シユヴルーズに怒られちゃうわよ？」

そう言うのと、ルイズは優雅に席へついた。

マリコルヌは怒りに震え、なおも言い返そうとするもなかなか言葉が出ないようだ。

「ミセス・シュヴルーズ！ ゼロのルイズに侮辱されました！」

ルイズは座つたまま、いまだに騒ぐマリコルヌに顔を向けると余裕たつぷりの顔でにっと笑つた。

「あーらら、今度はミセス・シュヴルーズに告げ口しちゃうの？」

今度はその言葉で教室中が笑いに包まれる。

マリコルヌの顔は真つ赤になつていたが、今度こそ何も言い返せないようだ。

周りの男子生徒が、もうやめとけ、お前の負けだよ、と言っているのが聞こえる。

見かねたシュヴルーズがばんばんと手を叩いた。

「はい、そこまで。ミスタ・マリコルヌ、ミス・ヴァリエール。お友達のことを馬鹿にするものではありませんよ。分かりましたか？」

「でもミセス・シュヴルーズ！ ルイズの『ゼロ』は事実です！」

マリコルヌに馬鹿にされても、ルイズはどこ吹く風という具合に平然としている。

ため息をついたミセス・シュヴルーズが軽く杖を振ると、マリコルヌがすとんと席についた。

「あなたはその恰好で授業を受けなさい」

見ると、マリコルヌの口にどこから現れた赤土が押し付けられていた。

マリコルヌは真つ赤な顔でもがもがと声にならない声を上げている。

(やるじゃない)

リウスが横目でルイズを見ながら笑いかけると、ルイズはにやつと笑いながら目線を返す。

その様子を、頬杖をつきながらも心底面白そうにキュルケが見つめていた。

(上手くいつてるみたいね)

正直に言うと、キュルケはルイズが心配だった。

プライドを常に持ちながら、何があっても決して諦めないルイズの性格は、キュルケにとって好ましいものだった。

その甲斐があつてか使い魔召喚は無事に成功したが、その召喚された相手は人間の女性である。

キュルケ自身ルイズの性格は気に入っていたが、その性格が彼女の人間関係に悪影響を及ぼしていることは誰が見ても明らかだった。

そのため、呼び出された使い魔と上手く行くかどうか、キュルケは気が気じゃなかったのである。

『もしかしたら今度こそルイズはへこたれてしまうかもしれない』

キュルケはそう考えていたのだが、今朝の様子と今のやり取りを見る限り、どうやら杞憂だったようだ。

そうこうしている内に授業が始まった。

まずは魔法のおさらいとのことだったが、その内容はリウスにとって非常に興味深いものだった。

魔法の系統は大きく分けて『火』『水』『土』『風』の4つであること。

『虚無』という系統があるが、これは伝説にしかない失われた系統であること。

系統を足せる数により、ドット、ライン、トライアングル、スクウェア、とメイジのランクが変わること。

この世界では、リウスが認識している『魔力』のことを『精神力』と呼んでいること。「それでは、『土』系統の魔法の基本である『錬金』について説明しましょう。一年生の時にできるようになった人もいるでしょうが、基本は大事です。もう一度、おさらいすることにしませう」

そういうと、シユヴルーズは短く呪文を唱える。

すると、教卓の上にあつた石ころが光を放ち、光を放つ金属へと変わっていった。

それはどうやら真鍮なのだそうだ。

ゴールドと勘違いしたキュルケの言葉を否定しつつ、シユヴルーズはもったいぶつたように自身のランクがトライアングルだと告げた。

リウスはそれらを羊皮紙にまとめながら、この世界の魔法がリウスの世界の魔法よりも応用が利くことに内心舌を巻いていた。

リウスのいた世界、ミッドガルドの魔法は、戦闘で活用するための魔法が中心となっている。

炎の矢を飛ばす『ファイアーボルト』や氷の矢を飛ばす『コールドボルト』、大地を隆起させる『アーススパイク』、空中から電撃を打ち込む『ライトニングボルト』などの魔法がその代表である。

それらは自身の魔力と大気中に漂う魔力を掛け合わせることで魔法現象を発生させており、ハルケギニアの魔法のように緻密な動作ではなく、良く言うと簡単かつ強力な、悪く言うと大ざっぱな魔法であった。

もちろん上級の魔法も存在しており、氷に風といった複数の魔力反応を掛け合わせることで吹雪を巻き起こす『ストームガスト』などもあるが、これもある意味では単純に二つの魔力反応を掛け合わせただけの代物だ。

また、リウスは先ほどのシュヴルーズの実践の際、彼女の魔力の流れを読み取っていた。

どうやら何よりも違うのは、ハルケギニアの魔法は自分の体内にある魔力のみを使用している、ということだ。

そのため、生まれ持った資質や血統に強い影響を受けているのかもしれない。

逆にリウスの世界の魔法は、最低限の資質を必要とはするものの、魔法は単なる技術であるという認識が強い。

それこそ、運動技能や製作技能と同じ部類である。

空中を漂う魔力を掛け合わせる技術さえ学べば、駆け出しのマジシャンであっても、ファイアーボルト、コールドボルト、アーススパイクなどの複数の属性を高レベルで扱うことができる。

そのためリウスの世界では、簡易的な魔力と魔法の構築式を埋め込んだスクロールというアイテムも存在している。

そのアイテムを使えば、空中にある魔力を扱えない、つまり魔法を使うことができない人ですらもスクロールに埋め込まれた魔法を容易く発動させることができるのだ。

まあ、いくらそういった技術があったとしても、結局のところ自身が持つ魔力の密度によってその威力が決まるため、駆け出しのマジシャンと才能ある熟練のウィザードが放つ魔法の威力は天と地ほど違うのではあるが。

シヴルーズの授業によると、ハルケギニアでの土の魔法は単なる石ころを他の金属に変えたり、物質をより強固にしたり、逆に腐食させたりと多様な使い方が出来るらしい。

また、ゴーレムという人形を魔力によって作り出すことで、それを意のままに操ることも可能だという。

『土』系統は生活に根差した魔法。シュヴルーズは得意げにそうまとめると、一旦授業を区切った。

「さて、それでは『錬金』の実演をどなたかにやっていただきましょうか」

リウスが周りを見回すと、生徒達はわざとらしくシュヴルーズから視線を逸らしたり、メモを取るふりをしていたり様々である。

そのままふと横に座るルイズを見ると、ルイズはリウスのメモしていた羊皮紙に興味深そうに眺めていた。

どうやら、シュヴルーズの言葉が聞こえていなかったらしい。

当てられるわよ、とリウスがこつそり伝えようとした時、シュヴルーズが口を開いた。

「では、ミス・ヴァリエール」

「は、はい！」

「ここに石ころを『錬金』で望む金属に変えてごらんなさい」

しかし、ルイズは立ち上がらない。困ったようにもじもじとしているだけだ。

「どうしたのですか？ ミス・ヴァリエール」

不思議そうな顔をしているシュヴルーズに、キュルケが困った声で言った。

「先生」

「なんですか？」

「それはやめた方がいいと思います」

シユヴルーズはますます不思議そうな顔をしている。

「どうしてですか？」

「危険です」

キュルケはきつぱりと言った。

すると、教室の生徒全員が頷く。ルイズは口を閉じたまま俯いていた。

「先生、ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。ミス・ヴァリエールの実技の成績が良くないことは存じております。しかし、非常に努力家であるとも聞いています。さあ、ミス・ヴァリエール、気にせずによつてごらんなさい。失敗を恐れていては何もできませんよ」

「ルイズ、やめて」

キュルケが蒼白な顔で言った。しかしルイズは立ち上がる。

「やります」

口元をきつと結び、覚悟を決めたようにルイズが教壇へ向かう。

すると、教室中の生徒達がそそくさと机の下へ隠れ始めた。

どういふことだろう、トリウスは呆氣に取られながら彼らの様子を見つめる。

「さあ、ミス・ヴァリエール。この石ころを、望む金属に変えるのです。変えたい金属のイメージを強く念じなさい」

『錬金の魔法は、定められた呪文と術者のイメージによつて望む金属へ変化させるようだ』。

そう羊皮紙に書き留めていると、すぐ後ろの席から声がかかった。

「あなた、隠れた方がいいわよ」

一方、ルイズはシュヴルーズの言葉に頷き、鈴のような澄んだ声で呪文を紡いでいく。なんで隠れる必要が、と聞き返そうとした時、ルイズの目の前にある石ころを見たり

ウスは目を疑った。

異常なまでの魔力が、石ころの周りをぐるぐると渦巻いていたのだ。

呪文は先ほどシュヴルーズが唱えていたものと同じだったはずだ。

ただ、魔力の方向性が全く違う。

何よりも、この魔力の密度。目の前の石ころと混じり合うといった消費が行われずに、そのまま石ころにまとわりつくような形で魔力が凝縮され続けている。

しかし集まり続ける魔力は何故か霧散していない。

「何、あれ」

何が起きるか分からない。

そう感じたリウスが急いで机の下に隠れた瞬間、凄まじい爆音と衝撃が教室を揺らした。

耳をつんざく爆音に思わず両手で耳をふさぐ。

その音に驚いた使い魔たちが暴れだしたようで、獣の叫び声が辺りに響き渡った。

「ル、ルイズ！」

机からはい出したリウスは急いで教壇があつた場所へ駆ける。

教壇は木つ端微塵に砕けており、数人の生徒達が近くにあつた机の下敷きになっていた。

この破壊力。その中心にいたルイズは――

「ルイズ！」

慌てて教壇に近づくと、煤で真っ黒になったルイズがむくりと立ち上がった。

どうやら怪我一つしていないらしい。

ほっとして脇を見ると、壁に叩きつけられたらしいシユヴルーズが煤だらけになりながら気絶していた。見るも無残な姿である。

「だから言ったのに！ あいつにやらせるなつて！」

リウスの背後から生徒の叫ぶ声がしたので振り向くと、教室は阿鼻叫喚の大騒ぎに

なっていた。

爆発に近かった窓ガラスは割れ、吹き飛んだ机と椅子が散乱し、暴れる使い魔たちを生徒たちが慌ててなだめている。

「ああ！ 俺のラツキーが！ 蛇に食われた！」

「クヴァーシル、落ち着いてくれ！ 爪が痛い！」

「もう！ ヴァリエールは退学にしてくれよ！」

生徒達が騒ぎ立てる中、当のルイズは頬についた煤をハンカチで拭いながら淡々とした声で言った。

「ちよつと失敗したみたいね」

その言葉を聞いた生徒達が猛然と反論する。

「ちよつとどころじゃないだろ！ ゼロのルイズ！」

「いつだって成功率ゼロじゃないか！」

ここに至るまでに何度も聞いていた彼女の二つ名『ゼロ』の意味を、リウスはようやく理解するのだった。

第五話 はじめての授業 その後

シユヴルーズが気絶してしまったため、授業は中止、自習となった。

そのため、半壊した教室にいるのはルイズとリウスだけである。

騒ぎに駆けつけた別の教師から、ルイズは罰として後片付けを一人で、かつ魔法抜きで行なうように命じられたため、リウスも使い魔としてその片付けを手伝っていた。

ばらばらになった教壇や壊れた机を部屋の隅に集め終わると、リウスはうーんと伸びをした。

ルイズは黙々と煤で汚れた机を拭いている。

「隅に集め終わったわよ。窓、拭くわね」

ルイズは何も言わずにこくと頷いた。

その表情は暗い。昨日他の生徒に馬鹿にされていた時の顔と同じか、とリウスは思う。

二人して黙々と片付けを続ける。

その沈黙に耐え切れなくなったのか、俯いた姿勢のままルイズが口を開いた。

「……これだから、私の二つ名は『ゼロ』なのよ」

何の感情も含んでいないような、暗く冷たい声色だった。

リウスは窓を拭く手を止めてルイズに向き直る。

「今朝教えたでしょ。『貴族は魔法をもつてしてその精神となす』。でも私は魔法を使えない。何をやっても爆発する。そういうことよ」

リウスは何も答えずに、俯いたルイズをじつと見続けている。

ルイズの口元は微かに歪み、まるで笑っているかのようにさえ見えた。

「……何よ、何見てるのよ。なんか言いなさいよー」

堰を切ったかのようにルイズが叫んだ。

それでもリウスは目を逸らさず、ルイズの目を真つ直ぐに見続けている。

『錬金』の実演で指名された時、ルイズはきつと上手くいくと思っていた。

今まで何度も何度も魔法を唱えては、爆発。

呪文を完璧に覚え、理論も学び、座学で一番になった。

でも、魔法を唱えると何も変わらずに、爆発。

魔法の先生にもさじを投げられ、家族からは呆れられ、クラスメートからは馬鹿にされた。

でも、私はリウスを召喚した。

契約も上手くいった。

ついに魔法は成功して、リウスは本当のお姉さんみたいで、私のために思ってくれていて。

きっと、リウスを召喚できたのなら上手くいく。

リウスが見てくれている今なら、魔法は成功する。

そう確信していた、さつきまでは。

「私なんて、貴族失格なのよ！ 平民からも同情されるような、出来そこないよ！」

さつきまでの冷たい声色とは違った、悲痛な叫びだった。

ルイズの目からはとめどなく涙がこぼれている。

リウスは侮蔑も同情も無い視線をルイズに向け続けていた。

「……もういい」

ルイズは握りしめていた布巾を机に置くと、俯きながら教室の出口へ向かっていく。

リウスはその様子を少し目で追ってから、口を開いた。

「ルイズ」

「……何」

ルイズは俯いたまま足を止めて答える。

ルイズは、何も言って欲しくはなかった。

今まで家族から向けられたように、自分の使い魔にまで呆れられるなんて。

「わたしの友達にカトリーヌって子がいてね。小さな子だったんだけど、わたしと同年だった」

唐突にリウスは話し始める。

ルイズは背を向けたままで続きを待っていた。

「わたしが魔術師ギルドに入った時、カトリーヌはいつも一人だったわ。元々持つてる強い魔力、貴方達の言う精神力を使いこなすことができなくて、他の人は迷惑がかかると嫌ってたのよ。私はその時、いつまで経つても魔法が上手くならない落ちこぼれでね。ずっと思い悩んでた」

ルイズは頭を棒で殴られたような衝撃を感じていた。

いつの間にか、足が震えている。

魔術師ギルド。同い年。魔法。つまり。

「あなた……、魔法が、使えるの……?」

ルイズは振り向き、震える声で尋ねる。

今、自分がどんな顔をしているか想像もできない。

「ええ、使えるわ」

平然と答えるリウスを、ルイズはいつの間にか強く睨み付けていることに気が付いた。

「私がほんの少しだけ魔法を操れるようになった頃、冒険に出かけた先でカトリーヌと会った。いつも平然としてたのに、彼女、泣いてたわ。依頼されたモンスター退治で、モンスター共々森を焼いちゃったって」

リウスは睨み付けてくるルイズから視線を逸らさずに続ける。

「私はその時、泣いてるこの子をどうにかしたいと思った。ずっと昔に死んだ弟と重ね合わせたのかもね。私は魔法を扱うのは苦手だったけど、魔力の感知と体術は人よりも才能があつた。だから、セージを屈指したの」

「だから、何?」

ルイズが口を開く。

ルイズは、自分が思う以上に冷たい声を出していることに気付きながらも続けた。

「落ちこぼれのメイジが、落ちこぼれだったメイジを召喚したって話!? ふざけないで

! だから、何だっていうのよ!」

「貴方の魔力は、カトリーヌに似てる」

叫ぶルイズに聞こえるよう、リウスは少し大きな声で告げた。

「貴方の魔力は他の人よりもはるかに強大よ。それこそ、シユヴルーズ先生やコルベール先生や、私よりも」

ルイズは涙も拭わずにきつとリウスを睨み付けた。

涙は両目からとめどなく流れ続ける。

もう、何に怒っているのかも分からない。

「嘘つかないで！」

「セージとして言うわ。私の専門は『魔力の流動性における解析技術』。モンスターや人の魔力解析を主としている私が断言する。貴方の魔力は他の人よりも強すぎる。だからこそ、魔法が上手くないかないの」

ルイズは力を込めた拳をふつと緩め、ぺたんとその場に崩れ落ちた。

「じゃあ、どうすればいいのよお・・・」

ルイズはルイズの傍にしやがみこむと、そつとその小さな体を抱きしめた。

「今は分からないけど、きつと大丈夫よ」

抱きしめられたルイズはルイズの肩にしがみつくようにしている。

「今まで、何度失敗しても挑戦し続けてきたんでしょ？」

「・・・うん」

「ずっと馬鹿にされ続けてきたけど、諦めないで努力し続けてきたんでしょ？」

「・・・うん」

「失敗、怖かったでしょう？」

「・・・うん」

「でも、逃げずに挑戦してきたんでしょ？」

「・・・うん」

「なら、貴方には本物の勇気がある。いつか、魔法を使える貴方になれる。貴方は立派よ。ルイズ」

「・・・う・・・ん」

「他の誰が馬鹿にしても、認めなくても、私だけは貴方を認めてるわ」

まるで叫ぶかのような泣き声が、教室中に響き渡った。

「もう、平気？」

「うん、ありがと」

ルイズはひとしきり泣いた後、残っていた教室の後片付けを終わらせてから食堂に向かっていた。

そうは言っても、片付けの残りは全てリウスが行なったのであるが。

思えば、人前で泣いたことは昨日が生まれて初めてだった。

それに引き続き、今日も号泣してしまっている。

しかも会ったばかりの人に対して、である。

ルイズは今になって恥ずかしさがこみ上げてきたが、不思議と気持ちは晴れやかだった。

「それにしても貴方、メイジだったのね。何で言わなかったのよ」

ルイズがジト目で睨みつけると、リウスは内心ぎくりとした。

「ごめんごめん。言うチャンスが無かったのよ」

警戒してたから、とは口が裂けても言えまい。それこそ主人と使い魔の関係にヒビが入りかねない。

「まあ、私は魔法が使えるといっても貴族じゃないわよ。小さい頃の記憶はないけど」

「あ……、ごめん」

「昨日、謝るなって言わなかったっけ？」

何を思ったのか謝るルイズに、今度は含み笑いをしたりウスがジト目で睨みつける。

そうして少し笑いあった後、何かに気付いたルイズがそっぽを向きながら口を開いた。

「リウス。先に食堂に行つてて」

「いいけど。どうしたの？」

「顔、洗ってくるから」

ああ、とリウスは納得した。思えば号泣した直後である。

ルイズの両目は赤く、頬には涙の跡がまだ残っていた。

全身を見ると少し衣服も乱れている。

何があったのか、と生徒達に勘ぐられるのはリウスも流石に嫌だった。

一旦ルイズと別れ、リウスは先の授業で見たルイズの魔法を考えつつ厨房へと向かった。

『錬金』の対象だった石ころを覆う、異常な密度の魔力。そこまでは分かる。

だがそれが何故爆発したのかがどうにも分からなかった。

魔力を凝縮して爆発させている？

ただ、それでは爆発するのはあくまで『魔力そのもの』である。

魔力の爆発による衝撃で石ころや教壇がバラバラになるのは分かるのだが、ルイズやシヴルーズが煤で汚れたことの説明がつかない。

(つまり、何らかの熱が発生しているということね)

教壇の破片にも焦げ跡があったことから、強い熱量が発生しているのは間違いないだろう。

そうすると、魔法の近くにいた二人が無傷だったのも問題ではあるが、一番の問題は、『ルイズが何に対して魔力を混じり合わせて魔力反応を引き起こしたか』である。

(もしかしたら、あれは魔法の失敗じゃなくて成功の一つなのかもしれないわね)

あれが失敗ではなく、『錬金』をしようとして別の魔法が発動している、という可能性は十二分にあった。

そもそも、リウスの世界において『魔法が失敗した結果、爆発する』ことは起き得ないことである。

普通、魔法が失敗したら魔力が霧散して『何も起きない』のが当たり前なのだ。

はつきりと言えることは、ルイズの魔法を考えるにはまだまだ情報が足りていないということだ。

そもそも、まだこの世界の魔法について充分に調べられていない。

魔法社会なのだから魔法の研究もちゃんと行なわれているだろうし、それらをきっちり確認してからこの件は考えるべきだ。

リウスはそう結論付けると、たどり着いた厨房を覗き込んだ。

相変わらず、戦場然としている厨房ではコックもメイドもバタバタと慌ただしい。

リウスはどきまぎししながら通りがかったメイドに声をかけると、案内されるがままに厨房の中へ入っていくのだった。

「いちそうさまでした」

昼食の賄い料理は朝とは違い、野菜が少し入ったスープと固いパン、それに朝食の残りである魚のパイが数切れである。

それでも美味しく堪能したリウスは、隣で休憩しているシエスタに笑いかけた。

「とっても美味しかったわ。ありがとうシエスタ」

「よかった。朝の残りをお出ししてしまって、すみません」

「そんな、謝らないで。朝ごはんも凄く美味しかったし、またこのパイを食べたいって思ってたんだから」

シエスタはリウスの顔に微笑みかける。

シエスタは、この人はまるで猫みたいだ、と思った。

リウスさんの凜とした雰囲気と、こちらを見透かすような濃い青色の瞳。初めて見た時にはその雰囲気についての間にやら萎縮してしまっていた。

あまりに見たことのない服装に「もしかしたらメイジかも」と思っていたことは確かだが、それ以上に、まるで隙の無いその佇まいが大好きだったお爺ちゃんと重なったからかもしれない。

そういうった今朝の緊張も既に昔の話で、今ではこうやって笑い合ってお話しをしている。

この人は感情が顔に出やすいようで、さつきもスープを一口食べた途端に口元をほこ

ろばし、ニコニコと美味しそうに食事をしていた。

そういつたところが彼女の主人であるミス・ヴァリエールと似ていると思う。

「なあに、シエスタ。なんかじつと見て。何かついてる?」

「! いえ、何でもありません! あ、そろそろデザートを運ばなくっちゃ」

シエスタは慌てて席を立つと、パタパタと厨房の奥に引つ込んでいった。

リウスが良い香りの紅茶を楽しんでいると、シエスタがケーキを乗せたトレイを手に戻ってくる。

「うわ、結構量があるわね。手伝おうか?」

シエスタの持つトレイにはずっしりと果物の詰まったケーキが並んでいる。

片手でトレイを持ちながら反対の手に持つハサミで配るのだろうが、このトレイを片手で持つにはいささか無理がありそうに見えた。

「いえいえ。慣れてますから」

シエスタはそう言いながらぱつとケーキを配る手つきをするが、トレイを持つ左手が少し震えているのは隠せていなかった。

「二人よりも二人の方が楽でしょ。はい、持つわよ。手もちゃんと綺麗にしてるから」

リウスはひよいとトレイを奪い取るとにやつと笑った。

「あ、ありがとうございます。じゃあ、すみませんがお願いします。実は今日のは少し重

くつて」

実際にケーキが重かったのは事実である。

シエスタは素直に好意に甘えつつ、ケーキを配るため食堂へと向かうのだった。

ルイズは心なしか上機嫌だった。

泣き跡のついた顔もちゃんと洗い、髪や衣服も整え、多少遅れたけれども何食わぬ顔でルイズは昼食の席についていた。

いつもよりも、ご飯が美味しく感じられる。

—私だけは貴方を認めてるわ

あの言葉でここまで気持ちがるなるなんて、思ってもいなかった。

初めて、本当に言ってもらいたい言葉を、本当の言葉で言ってもらえた。そんな気がする。

「あらルイズ。随分と嬉しそうね」

はたと隣を見るとキュルケが立っていた。

確かにキュルケの言う通り上機嫌だったのだが、それを見破られたみたいで嫌だと思つたルイズは、いつもと同じようにジロリとキュルケを見上げた。

「なによキュルケ」

「そつちこそ何よ、気持ち悪い。にやついた顔が隠しきれないわよ」

ルイズの顔にさつと赤みが差した。

「う、うるさいわね！ 何の用よ！」

「あら、ご挨拶ね。気付いてないみたいだから、教えてあげようと思つてたのに」

ルイズは小首をかしげた。気付けば周りが随分と騒がしい。

「あなたの使い魔、なんか大変なことになつてるけど。ほつといていいの？」

第六話 貴族さまの喧騒

真つ青な顔になって震えているシエスタをかばうように、リウスがワイン塗れの貴族の前に立ちふさがっていた。

「決闘だー」と周りにいる貴族たちが騒いでいる。

(何で、こんなことに)

シエスタは恐怖で気が遠くなるのを感じつつ、リウスさんだけは許してもらわなければと朦朧とする頭で考えていた。

つい十数分前、私がガラスで出来た小瓶を拾ったことがきっかけだった。

リウスさんに手伝ってもらいながらケーキの配膳を進めていた私は、目の前の貴族様のポケットから紫色の液体が入った小瓶が落ちるのを見たのだった。

小瓶を落とされたのは、金色の巻き毛とフリルのついたシャツを着ている貴族様だった。

名前は確か、ギーシュ・ド・グラモン様といったはずだ。

「あの、グラモン様。こちらの小瓶をポケットから落とされましたよ？」

しかしグラモン様はちらつとその小瓶を見たと思うと、無視するかのようにその視線を戻した。

何で私はその視線の意味に気付けなかったのだろうか。

「あの、すみません。グラモン様……」

その時は、周りの貴族様との会話に夢中で気付かなかったのだろうかと思っていた。

二度にわたって話しかけているメイドとその手に持つ小瓶に、グラモン様と話していたご学友の方が興味を持った。

「……おっ！ その香水は、もしかしてモンモランシーの作った物じゃないのか？」

「そうだ！ その鮮やかな紫色は間違いない！」

「つまり、ギーシュ！ お前は今、モンモランシーと付き合ってるんだな!？」

そこからはあつという間だった。

ケティと呼ばれる貴族様が二股だったのかと泣き、モンモランシーという貴族様が二股をかけられていたことに怒って、グラモン様の頭にワインをぶちまけて去っていった。

そこから、少しの沈黙が流れた。

ワインに塗れたグラモン様はため息を一つつくと、ハンカチを取り出してゆっくりと顔を拭いた。

「あのレディ達は、薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

確かそんなことを言っていた気がする。

その時の私は頭が真っ白になっていたので、あまり記憶が定かではない。

やってしまった。その言葉だけが頭の中で響いていた。

隣に立つリウスさんが「行きましよう」と促してくれたので、一緒にその場を離れようとした。

しかし……。

「待ちたまえ、そのメイド君」

びくりと体を震わせた私に代わって、リウスさんが答える。

「……何か御用ですか？」

「君じゃない、そのメイド君に用があるんだ」

大げさなため息を一回ついた（と思う）グラモン様は更に続けた。

「君が軽率に香水の瓶を拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉に傷がついた。どうしてくれるんだね？」

「え……、え……？ あ……」

言葉が出てこなかった。

貴族様を怒らせてしまった、でもこれは言いがかりだ、どうしようどうしよう。

「いいかい、メイド君。僕は君がああの香水の瓶を渡そうとしてきた時、彼女たちのためにちやんと知らないフリをしたんだ。使用人なら状況を察して、間を合わせるぐらいの機転があつてもいいだろう?」

「え……。あの……。その……」

「そうは思わないかい?」

とにかく謝り続けるしかない、そう思った。

「も、申し訳……!」

そこまで言った時だった。隣に立つリウスさんが口を開いた。

「彼女、シエスタに、あなたへ香水の瓶を渡すよう伝えたのは私です」

最初、リウスさんが何を言っているのか分からなかった。

「差し出がましい真似をして申し訳ございませんでした。以後、気を付けます。それは仕事がありますので、失礼いたします」

リウスさんが軽く腰を折って一礼をする。

確かにそれは丁寧な物言いだったが、やけに透き通ったその声色は、まさに冷淡極まりないものだった。

一瞬、リウスさんが懐かしいお爺ちゃんの姿と重なる。

——冒険者つてのはな、怖がつて冷静じゃなくなつちまったら死ぬだけなんだよ。

いくら怖くつても、冷静でいなきやな。

お爺ちゃんと同じ冒険者になる、と小さい頃の私はそう言つて聞かなかつた。それに気を良くしたお爺ちゃんはいつも私にそう教えてくれていた。

でもお爺ちゃん。相手は貴族様だよ。

心の中で、もう死んでしまつたお爺ちゃんに訴えかける。

目の前のグラモン様がやけに大げさな身振りを交えながら、リウスさんに話しかけていた。

「いや、ちよつと待ちたまえ。ええと、どこかで見たような……。ああ、君はルイズの使

い魔くんか！ 使い魔なら使い魔らしく、主人の傍にいればいいものを！

さて、じゃあ君に聞こうか。どうしてくれるんだい？」

リウスさんはグラモン様をじつと見つめてから苦笑した。

「どうもしませんよ？」

更に頭の中が真っ白になった気がした。

グラモン様もあんぐりと口を開いている。

「むしろ今いちゃもんをつける前に、二股した女の子達に謝つてきた方がいいと思ひますよ」

その言葉に周りの貴族様たちがどつと笑った。

「そうだ！ ギーシユ、お前が悪い！」

ああ、もうやめて。

「早く服替えて謝ってこいよ！」

すると明らかにいらついた様子のグラモン様は、急にふふつと笑って両腕を広げるようなポーズをする。

「はっ、所詮はあのゼロのルイズの使い魔か。貴族に対する心構えがなっていないな。

……いや、ルイズも貴族とはいえないか。ああも魔法が使えないのでは、ルイズも貴族の心構えなぞ欠片も持っていないんだらうさ」

グラモン様は椅子に座って足を組むと、リウスさんを見もせず虫を追い払うような仕草をした。

「でも僕は寛大だ、君も女性だからね。いいよ、行つても。許してやろう」

そこまでグラモン様が言った時、横から、がぎり、と何かを擦ったような音がした。「……このクソガキが。言ってくれたな」

地の底から響くような、低く、冷たい声だった。

驚いて横を見ると、リウスさんがグラモン様に憤怒の（としかいえない）表情を向けている。

「な……。き、貴族に向かって……。」

リウスさんのその剣幕に、周りの貴族様の息を飲む音がした。

「ルイズに対して、貴族とはいえないだつて？ この、エセ貴族が」

グラモン様の頬がかつと赤に染まる。

「き、貴様！ 平民が、貴族に向かって！ 決闘！ 決闘だ！」

その言葉を皮切りに、最初呆けたようにしていた周りの貴族様たちが徐々に騒ぎ始めた。

「決闘だ！」、その言葉に私は気が遠くなるのを感じていた。

「決闘だ！ ギーシュが決闘するぞ！ 相手はルイズの使い魔だ！」

「ルイズの使い魔！ 二十分後、ヴェストリの広場に来たまえ！ 平民が貴族に楯突くことの意味を教えてやる！」

周りの貴族が騒ぐ中、ギーシュ・ド・グラモンはマントを翻して去っていった。

周囲を取り囲んでいた一部の貴族たちが「決闘だ！」と叫びながらギーシュの後を追っていく。

その様子を睨み付けるように見ていたリウスは、ふっと肩の力を抜くと一つため息を

ついた。

「はあ、やつちやつたな。ごめんねシエスタ。私のせいだわ」

横に立つシエスタに向き直ったリウスだったが、シエスタは真つ青な顔をしながらぶるぶると震えている。

いや、シエスタの顔は青を通り過ぎてもはや土気色になっていた。

今にも倒れそうに見えたシエスタに、もう一度リウスは声をかけた。

「ちよ、ちよつと。シエスタ大丈夫？ こっちは何とかしとくから、厨房で休んできたら？」

「リ、リウスさん。あなた、殺されちゃう……」

涙を浮かべながら訴えかけるシエスタを見たリウスは、そういうことか、と内心納得していた。

『貴族は魔法をもつてしてその精神となす』、ルイズが言っていた言葉だ。

この世界の魔法は生活に根差した重要な技術であると同時に、魔法が使えない人、いわゆる平民に怖れられる力となっているのだろう。

勘違いをした貴族やその子供達が、その言葉の本来の意味をはき違えてしまっているのだ。

「あ、謝りましょう。今すぐ謝ればきつと大丈夫です。何度も謝れば、きつと」

シエスタは唇を震わせながら、涙ながらに何度もリウスへ訴えかけている。

これじゃケーキは配れないな、とリウスは他人事のように考えながら、シエスタの手を引いて厨房へと向かっていった。

厨房に着くと、心配そうな表情のコックとメイド達がこちらを窺っていた。

そこにいたメイドの一人に震えるシエスタを任せてから、手に持ちつばなしだったケーキの乗ったトレイを渡す。

振り向くと、遠目に先ほどギーシュの周りにいた貴族の一人がこちらを見つめていた。

どうやら私が逃げないように見張っているのだろう。

目が合ったその貴族が、こっちへ来い、と言うように手招きをしている。

その貴族のところへ向かおうとしたリウスの手が、誰かに掴まれた。

「い、行っちゃダメです。殺されちゃいます。一緒に謝りましょう」

見ると、シエスタが冷たくなった両手でリウスの手を掴んでいる。

ここまで怯える姿を見るに、貴族が平民に魔法を向けるのはよくあることなのだろう。

周りのコックやメイド達も次々に口を開く。

「そうだけ。行っちゃあ駄目だ。あんたが悪くないのは分かっている。だけど貴族と決闘

だなんて、死に行くようなもんだ」

「謝りましょう。昨日来たばかりなんですから、グラモン様もきつと分かってくれます。わ、私達もシエスタと一緒に謝りますから」

リウスは口々に訴える目の前の人達を見て、思わず目を細めた。

（仕方がない、か。自業自得ね）

内心ひとりごちたリウスは心を決めて告げた。

「皆さん、心配してくださってありがとうございます。でも大丈夫です。私も、魔法が使えますから」

その言葉に、厨房の人々はみな哑然としていた。

シエスタも何を言ってるのか分からないといった顔をしている。

ギーシュとやらの魔力を見たところ、多分魔法は必要がないとも思う。

ただ、相手は未知の魔法だ。

いざという時にはこちらでも魔法を使う必要がある。

それに、身の危険を顧みずに心配してくれる彼らを騙してたくはない。

「そろそろ行かないと。今までよくしていただいて、ありがとうございます」

メイジが恐れられているのなら、彼らも魔法を使う私を怖がるだろう。

そして、彼らを責めることなんて出来ない。

それはしようがないことだ。

(せっかく仲良くできそうだったのにな)

リウスはそう思いながらも彼らに背を向け、見張りの貴族の元へと向かっていった。

「ちよつと、リウス！ 何してんのアンタ！」

ルイズの部屋に置いた荷物袋から武器を取ってきたリウスの所へ、ルイズが息を切らせて走ってくる。

「あー、ごめんルイズ。ギーシュとかいう人と決闘することになっちゃって」

リウスは申し訳なきように言った。実際、この件でルイズもお咎めを受けるかもしれない。

横に立ったルイズはきやんきやんとまくし立てている。

「馬鹿なことはやめなさい！ 今すぐ謝ればギーシュだつて許してくれるかもしれないわ！ そもそも何でこんなことになつてるのよ！」

「ええと、成り行き？」

「ああそう！ 成り行きね！ いいからほら、謝りに行くの！ 私も謝るから！」

その言葉にリウスは笑いながら言う。

「譲れないものつてあるでしょう？」

「いいから！ 怪我じゃ済まないかもしれないわ！ 死んじやったらどうするのよ！」

「

必死になってリウスの手を引くルイズを見て、リウスは思わずルイズの頭を撫でた。

「優しいねえ、ルイズは」

急に撫でられて驚くルイズに向かって、なおも続けた。

「でも、あの貴族には謝らないわよ」

リウスはにやつと笑いながらそう言うのと、すたすたと決闘の場へと向かっていく。

「ああもう！ ちょっと待ちなさい！」

ルイズは慌ててリウスの後を追いかけていった。

第七話 昼下がりの決闘

ヴェストリの広場は、魔法学園の敷地内、『風』と『火』の塔の間にある中庭である。西側にある広場なので、そこは日中でも陽があまり差さない。

あまり生徒が近づく場所ではなく、普段は人気の無いひっそりとした広場だった。

しかし、今のヴェストリの広場は噂を聞きつけた生徒達で溢れかえっている。

「諸君！ 決闘だ！」

ギーシュが薔薇の造花を掲げると、生徒達が歓声を上げた。

「二年のギーシュが決闘するぞ！」

「相手はあのルイズの使い魔の平民らしいが、ギーシュが女性相手に決闘するなんてなあ」

「いや、聞けばあの女の人がギーシュを真正面から馬鹿にしたらしいぜ」

「そうさ！ ギーシュ、あの生意気な女に立場を弁えさせてやれ！」

ギーシュは腕を振って歓声に応えている。

おろおろしながら隣に立つルイズをよそに、リウスは何食わぬ顔で肩を回していた。

「ギャラリーも充分に集まったようだね。さて、そろそろ始めようか」

その言葉に周りの生徒達が更に大きな歓声を上げた。

「ちよつとリウス！ 早く！ 謝りなさいよ！」

ルイズが慌てたようにリウスへ訴えるが、リウスは柔らかい笑みを浮かべるだけだ。「だから謝らないってば。ほらほら、ルイズは危ないから下がってて」

リウスは左の腰にかけた二本の短剣を確認しながら、ルイズを周りの人垣の方へ促した。

ギーシュは全く緊張していないその姿を見て苛立ちながらも、胸の内には一抹の不安があった。

グラモン家といえば由緒ある武門の家系である。

父はトリステイン王国の元帥、三人の兄達も名のあるメイジとして軍に所属している。

グラモン家は、軍人としてエリート中のエリートなのであった。

そのような家に生まれたからか、ギーシュは生まれてから今まで幾人もの手練れのメイジを見ながら育ってきた。

彼らの常に冷静で隙一つない姿に、幾度となく憧れを持ったものである。

さつきまでは分からなかったが、目の前に立つこの女性からも彼らのような手練れに

似た雰囲気を感じる。

あの恰好からだだの平民の踊り子だとばかり思っていたが、もしかしたら名のある傭兵なのかもしれない。

無いとは思いますが、メイジである可能性もある。

そんな不安を払拭するかのようには、ギーシユはいつも手にしている造花の薔薇をさつと振るつた。

そして小さく詠唱を唱えると、造花から剥がれ落ちた一枚の花弁が地に落ちる。

その途端、まるで大地から生えてくるかのように、見事な造形のブロンズ像が立ち現れた。

大きさは成人男性ほどだろうか、人型であるそれは優美な戦乙女の姿をしている。

リウスはそれを見て、おおーっ、と面白そうに声を上げた。

もう一度上がる歓声に応えながら、ギーシユは口上を述べる。

「改めて名乗ろう。僕はギーシユ・ド・グラモン。二つ名を『青銅』のギーシユ。従って、君とは僕の操る『ワルク्यूレ』がお相手しよう」

そう言うと、ワルク्यूレを操って自身の目の前へ移動させる。

ワルク्यूレの造形の確かさと、その動きのなめらかさに、今度は周りの生徒達から拍手が上がった。

「うわあ、あれがゴーレム？ 凄い魔法ね。ほらルイズ、下がった下がった」
「ちよつと！」

ルイズはなおも喰つてかかるが、リウスはルイズの耳元でそつと囁いた。
「大丈夫よ、私も魔法を使うから」

ルイズははつとしてリウスを見る。

あの教室で、確かにリウスは魔法が使えると言っていた。

でも本人は落ちこぼれだったと言っていたし、それに勝てるかどうかなんてやってみないと分からないではないか。

「もう！ 知らない！」

ルイズはそう言うと、リウスに促されるままに人垣の方へ走っていった。

それを見送るリウスにギーシュが声をかける。

「さあ、もういいかな。言い忘れていたが、僕はメイジだ。だから魔法で戦う。よもや文句はあるまいね？」

その言葉に振り返ったリウスがうつすらと笑いながら告げる。

「ええ、構いませんよ。でもまずは、私にも口上を言わせてくださいいな」

ギーシュは「ふん」と鼻を鳴らしながら顎で続きを促す。

しかし杖を握った手には少し汗をかいていた。

リウスがすうつと息を吸う。

「私は東方のメイジ、シユバルツバルド共和国のリウス。二つ名はありません。私は冒険者なので、剣と魔法で戦います。よろしいですね？」

少し大きめの声に一瞬周りが静まり返ると、広場は次第にざわざわとした声に包まれていった。

「魔法？ 平民じゃなかったのか、あの女は！」

「でも剣と魔法で戦うって言うってたわよ。貴族崩れってヤツかしら」

「東方のメイジって、まじかよ」

ざわざわとした雰囲気の中、ギーシユは内心毒づいていた。

嫌な予感が当たった。本当に、メイジだったとは。

なんとか顔を繕いつつ、勿体付けたようにギーシユは鼻を鳴らす。

「ふん、構わないさ。その生意気な態度にようやく納得がいったよ。まさかメイジだったとはね。では、始めようか」

そう言うのと、ワルキューレが一步、二歩とリウスへ近付いていった。

リウスは腰に下げた短剣の一本を右手で引き抜くが、その短剣を構えもせず近付いてくるワルキューレの様子を観察している。

(二つ名が『青銅』ってことは、あのゴーレムは青銅製ってことでいいのかしら。そこそ

こ固そうだけど、レイドリックほどの威圧感はないわね)

リウスは今までの冒険でレイドリックというモンスターに出会ったことがあった。

レイドリックは、グラストヘイムという廃墟の古城にいる、文字通りの動き回る鉄の鎧である。

グラストヘイムの兵士の魂を宿らせたその鎧は生前と同じような剣術を使い、生きている人間を無差別に襲うのだ。

リウスは『モンスター情報』の魔法を発動させると、目の前のゴーレムの属性やその能力を分析していった。

どうやら一目見た時に感じた通り、レイドリックほどの能力は無いようだ。

せいぜい駆け出しの戦士程度の動きしか出来ないらしい。

属性も金属で出来ているだけあって無属性。つまり、どの魔法でも同じようなダメージを与えられるということだ。

リウスは続いて、ゴーレムの魔力を辿っていく。

すると、ゴーレムの四肢とギーシュの持つ杖に魔力的な繋がりを感じた。

どうやら、土に魔力を通して青銅を『錬金』し、杖から発している自身の魔力とゴーレムを繋いでいるようだ。

ということはギーシュがさつき言っていたように、自立的に行動するのではなく単純

に『操って』いるだけだと思っただい。

（錬金で生成しているってことは、武器や盾を持たせることもできるかもしれないわね。弩みたいな複雑な武器も錬金できるものなのかしら。石とかを投げられても面倒だ（ど）

もつともこの程度のゴーレムでは、一体や二体なら大した脅威にはなり得ない。

ただ更に多くの数を作られると面倒だ。

リウスが使える範囲魔法は『ヘブンズドライブ』と『ファイアボール』のみ。

得意な魔法は、地面を隆起させる『ヘブンズドライブ』と『アーススパイク』だ。

（そうね。じゃあ、私は土系統のメイジだっことにしようか）

そう思いながらワルキューレを見続けるリウスを、じれたようにギーシュが睨み付けていた。

目の前の使い魔が持つのは杖ではなく短剣、つまり密着するかのような接近戦が主と
いうことだ、とギーシュは当たりを付けていた。

「随分キレイな短剣だけど、そんなものを使ってしまった方がいいのかい？ このワル
キューレを相手にしてしまうと、そのキレイな短剣に傷が付いてしまうよ！」

その演技がかった言葉に、周りの生徒達からどっと笑い声が漏れる。

それもそのはず、リウスの手にあるのは金色に光る美しい短剣であり、戦闘で使用す

る武器というよりは儀礼用の短剣にしか見えなかった。

しかしバゼラルドというその短剣は魔力を増幅する力を持ち、リウスの愛用する武器の一つである。もちろん、生徒達にはそれを知る由も無い。

「確かに。結構高いんですよ、これ。じゃあ私も魔法を使いましょうか」

リウスはそう言つてすつと短く息を吸うと、呪文を紡ぎ始めた。

魔法のレベルは3くらいでいいはずだ。

『アーススパイク』

どん、という音と共にワルキューレが砕け散った。

よく見ると、リウスへ向かっていたワルキューレの足元から頭に向けて、三本の尖った石の柱が突き立っている。

静まり返った広場にパラパラという軽い音が響くと、石の柱は何事もなかったかのようには地面へと戻っていった。

よく晴れた青空の向こうから鳥の声が聞こえてくる。

バラバラになった青銅の破片を、ここにいる多くの人間が雁首揃えて呆然と見続けた。

何とも間拔けな光景である。

(あれえ?)

魔法を打ち込んだ張本人、リウスも唾然とした表情で破片を見続けていた。

短剣を持っていない左手の甲では、使い魔のルーンが鮮やかに光り輝いている。

(私の詠唱って、こんなに早かったっけ?)

一瞬静まり返った広場は次の瞬間、叫びにも似た歓声に包まれていた。

「なんだあれ!」

「石柱の魔法? でも杖も持たずに魔法使ってたわよ」

「あの短剣が杖の代わりなんだろ。それよりも! あんなの人が喰らったらひとたまりもないぞー!」

ルイズは先ほど起きた光景に目を見開いていた。

いつの間にか隣にはキュルケと青い髪の少女が立っている。

「凄いわねルイズ。あなたの使い魔、あんな威力の魔法を一時で出したわ」

「聞こえていないのかルイズは答えない。代わりに隣の青髪の少女が口を開く。

「・・・あの人、全然本気じゃない」

キュルケは隣に立つ青髪の少女、タバサの顔をちらつと見る。

この子がこんな風に他人へ興味を示すのは珍しい。

「そうみたいね。それにしても自分が唱えた魔法だつてのに、何をあんなにびつくりしてるのかしら」

当のリウスは周りの喧騒も聞こえずに、先ほど自分が使った魔法を思い返していた。確かに自分はアースパイクのレベル3を使ったはずだ。

しかし、それにしても詠唱が早すぎた。呪文を唱えてから、魔力の構築がほぼ一瞬で終わったのだ。

しかも魔法の威力も上がっているようで、普段よりも発生させた石柱が大きかった。あれではレベル1でも先ほどのゴーレムを破壊できるはずだ。

そんなリウスの困惑をよそに、対峙するギーシュは背筋が凍る思いをしていた。青銅で出来たワルキューレを一撃で吹き飛ばす威力の魔法。

あの魔法がどの程度の射程を持つのかは分からないが、下手をしたら今自分がいる場所も射程の範囲内かもしれない。

しかも、あの使い魔の女性は詠唱を唱え始めてから一瞬でワルキューレを吹き飛ばしていた。

あんな一瞬で足元から魔法を放たれたら、避けようがないではないか。

ギーシユは、足元から突き上げられた石の柱で串刺しになる自分の姿を想像した。
こんなはずじゃ。

ギーシユはそう思った。

ただの平民相手に、貴族への立ち振る舞いを教育してやるだけだったのに。

足元から感じる強い死の予感に、思わずギーシユは背後へ飛び退きながら手に持った造花を無我夢中に振りまく。

五枚の花びらが辺りに舞い、それぞれが新たなゴーレムを形作った。

はっとしたりウスは目の前の光景に自分の失策を恥じた。

さっきのタイミングで畳み掛けるべきだったのに、既にギーシユは次のゴーレムを出してしまっただようだ。

ギーシユの近くに大盾を持ったゴーレムが一体。

前方に立ちふさがるような形で、更に大盾持ちのゴーレムが一体。

残る三体はそれぞれ左右に散らばる隊形で棒状の武器を手にしている。

しかもギーシユの横に立つゴーレム以外の全てが、こちらに近い位置に立っていた。

「行け！ ワルキューレ！」

ギーシユが叫ぶと、彼の近くにいるゴーレム以外の四体がこちらに向かって走り出し

た。

迷っている暇はない。

飛び道具を持ったゴーレムはいないみたいだが、あの数に殺到されたら避けきれない可能性がある。

とりあえず右から迫ってきているゴーレムは一体のみだ。

右側に向き直り、青銅で出来た棒を振りかぶりながら走ってくるゴーレムを狙って詠唱を始める。

「アーススパイクー」

ごごん、という音と共に地面から突き出た石柱でゴーレムが串刺しになる。

念のために二本の石柱を発生させたので、ゴーレムはその胴体ごと縦に引き裂かれていた。

次は左だ。二体のゴーレムがすぐ近くまで迫ってきている。

前方から向かってきている大盾のゴーレムはまだ少し距離があるため後回しだ。

左から迫るゴーレム達が、それぞれリウスの右肩と左脇を狙って棒を振り下ろしてきた。

リウスは急いでもう一本の短剣を引き抜くと、一瞬で二体のゴーレムの持つ棒の真ん中を叩き切る。

引き抜いた短剣は、強力な魔法のかかったカウンターダガーという武器だ。

非力なマジシャンのために作られたこの武器は、意思を持つかのように狙った対象の弱点を容易く引き裂いてくれる。

いつも以上に身のこなしが速くなっているのをリウスは感じていたが、気にしている余裕は無い。

ゴーレム達はすぐさま半分になった棒から手を離してリウスに掴みかかろうとしている。

リウスは後ろに下がって距離を取りつつ、突き出されてきた一体のゴーレムの両手首を切り落とした。

そしてもう一体が掴みかかろうとするのを避けながら、両手を切り落としたゴーレムの右脇から一気に背後へと回り込む。

体勢を低くしていたリウスは、回り込んだ時の回転を利用しながら目の前のゴーレムの右膝を斜めに断ち切った。

しかし崩れ落ちる目の前のゴーレムの後ろから、残るゴーレムがまたもや掴みかかろうとしてくる。

リウスが脇を見ると、大盾を持ったゴーレムもすぐそこまで近付いてきていた。

リウスは内心舌打ちをしながら、掴もうと手を伸ばすゴーレムへ密着するように飛び

込んでいく。

「しめた！」と考えたギーシュは、ゴーレムに思いつきり両腕で掴みかかるように命令を下した。

しかし、リウスは手に持つ短剣をゴーレムの左太ももに突き刺したかと思うと、自分の全体重をかけてそのままゴーレムの体勢を崩す。

よろめいたゴーレムの太ももから即座に短剣を引き抜くと、十分な勢いをつけて体勢を崩しているゴーレムの首を叩き落とした。

リウスは体勢を整えるため、大盾を持ったゴーレムから一步離れるようにステップを踏んだ。

目の前には大盾を構えて迫りくるゴーレム。

だがさつきまで誰もいなかったはずの後ろから、がちやり、と金属の動く音が聞こえた。

「今だ！ 捕えろ、ワルキューレ！」

リウスは知らないが、ギーシュの精神力で作りに出すことのできるゴーレムは七体までである。

少し時間をおいてから、その最後の一体をリウスの背後に生み出したのだった。

リウスは咄嗟に目の前のゴーレムが持つ大盾へ向けて左手の人差し指を向ける。

視界に入ったその左手の甲では、使い魔のルーンが力強く光り輝いていた。

「ナパームビートー！」

リウスがそう呪文を唱えると、目に見えない念力の衝撃によって大盾のゴーレムが大きく後ろへと仰け反った。

その隙を逃さずに、目の前のゴーレムが持つ大盾の上部を両手で掴む。

そのまま両手に力を込めて盾を駆けあがったかと思うと、呪文の詠唱を開始しながら、ゴーレムの頭を踏み台にして空中へと身を翻した。

同時に横目で自分の周囲の状況を確かめる。

近くにいるゴーレムは、この二体だけのようだ。

「ヘブンズドライブー！」

空中で呪文を唱え終わると、地面から突き出してきた細長い尖った岩が二体のゴーレムの全身を貫いた。

リウスが無事地面に着地すると、穴だらけになったゴーレム達は力なくよろめき、自分の重量に耐えきれなかったのか、そのまま崩れるようにぐらりと倒れ込んでいった。

リウスは一息ついて辺りを見回した。

残るゴーレムはギーシユの横に控える一匹だけのようだ。

周りを取り囲む観衆達は先の攻防に大いに盛り上がっている。

「さあ、次はどうくる？」

余裕たっぷりといったように、リウスはギーシュに視線を向ける。

しかし内心では、先ほどの攻撃を仕掛けてきたギーシュに対して賞賛したい気持ちがあつた。

間違いなく、彼の魔力よりも私の魔力の方が上のはずだつた。

一体一体のゴーレム達的能力も大したことはない。

しかし、そうした評価を嘲笑うかのような、あの波状攻撃。

そしてあのタイミングで背後にゴーレムを出現させるといふ技術と戦略。

その結果、元々使うつもりになかったナパームビートまで使わされた。

一介の見習い魔法使いがここまで戦えるとは、とても思っていなかったのだ。

一方のギーシュは、今の攻撃が全て通じなかった悔しさと、これから行われるであろう私刑に対する恐怖から、滝のような汗を流して俯いていた。

死の恐怖もあつてか、先ほどの攻撃ではこれまでに以上にワルキューレ達を操れていたはずだ。

明らかにドットを超える力を発揮できていたし、ワルキューレの奇襲のタイミングも完璧だつた。

それなのに、敗れてしまった。

残ったワルキューレは一体だけ。

精神力も尽きかけている。

横に佇む優美な姿のワルキューレも、今はひどく頼りないものに見える。

ふと使い魔の女性を見ると、彼女は詠唱を開始していた。

「ま、待って」

『アーススパイク』

今までの非ではない、無数の石柱が横に佇むワルキューレを貫いた。

その地響きのような音がしばらく続いたかと思うと、今度は細かい石のようなものが

辺りに降り注ぐ。

さつきまで、ワルキューレだったものだ。

少し離れた所にいたあの女性がこっちへ近づいてくる。

それを見たギーシユは腰を落として、思わず目を伏せた。

ああ、もう駄目だ。

まさか今日死ぬことになるなんて思ってもいなかった。

まだ、モンモランシーにも謝っていないのに。

気付けば、使い魔の女性が目の前にいた。

「これでゴーレムはいない。あなたの精神力も尽きかけている。まだ続けるなら相手になるわよ。そうじゃないなら、私の言うことに従ってもらおうわ」

静かな声色でそう語りかけてくる。

続けられる訳がない。ギーシュはそう思いながらも、死の恐怖のあまり降参の言葉を口から出せないでいた。

「もうやめて！」

誰かがギーシュを庇うように横から飛び出してきた。

見ると、その人は金髪を見事にロールにした少女だ。モンモランシーだった。

「お願いよ！ もうギーシュは魔法を使えないわ！ あなたの勝ちよ！」

「モ、モンモランシー……。だめだ、さ、下がって」

モンモランシーはギーシュを庇うような恰好で動かない。

庇う少女の頬を涙がこぼれていく。

「バカ！ なんてこんな決闘なんてしたのよ！ わ、私、最後の魔法で、死んじやつたかと思つて……。！ 勝手なことばかりして……。！」

「か、彼女は関係ない！ やるなら僕をやれ！」

ギーシュはふらつきながら立ち上がり、逆にモンモランシーを庇う。

震える手で、花卉のない薔薇の造花をリウスに向けていた。

「や、やめて、ギーシュ！ もう魔法は使えないでしょ!？」

「構うもんか！ さあ！ やるなら僕をやれ！ モンモランシーには手を出すな！」

リウスは盛り上がるうら若い二人を前に、困ったような表情で頬をぼりぼりと掻いた。

最後の魔法は余計だったかな、と思う。

「誤解してるみたいだけど、別に私はあなたをどうしようとか思っていないよ」

その言葉にギーシュは呆けたような表情を浮かべる。

いつの間にか周囲の観衆もざわざわとした雰囲気になつていた。

「だって、あなただって私を殺そうとなんてしてなかったでしょ?」

リウスは先ほどのゴーレム達を思い返した。

素手に、大盾に、棒。どれも殺傷力の無いものばかりだ。

大盾なんて作り出せるのだから、いくらでも武器らしい武器は作れただろうに。

何とか押さえこもうとしてたからなのか、あの棒の使い方だと骨の一本くらいは折れただろうが。

—君も女性だからね

ギーシュは食堂でそんな言葉を口にしていた。

知つてか知らずか、殺されると思ひながらも彼はそれを実践してみせたのだろう。

「だから私はあなたに危害を加えようなんて、思っていないわ」

そう言うのと、少し間を置いてギーシュが杖を下ろした。ほっとした空気が流れる。「ただ、私の言うことに従ってもらおうけどね」

リウスが悪戯つぽくにやつと笑うと、ギーシュの顔に緊張が走った。

モンモランシーがリウスをきつと睨み付ける。

その様子に、リウスは地面に座るギーシュの顔を覗き込むかのようにしやがみこんだ。

「あなたが怖がらせたり泣かしたりした女の子達に、きちんと謝りなさい」

「え……」

一瞬の間を置いて、ギーシュが呆気にと取られたような声を漏らす。

「四人よ。このモンモランシーつて子と、ケティつて子。それにメイドのシエスタ。あなたが馬鹿にしたルイズ。この四人。分かった？」

「は、は……」

「よし」

リウスは満足そうに頷くと立ち上がった。

「これでこの決闘は終わり。そのモンモランシーつて子、あんまり泣かしちゃダメよ。そんな可愛い彼女がいるのに浮気するなんてねえ」

リウスは楽しそうに笑いながら二人を見る。

密着した姿勢だった二人は頬を赤くしながらさっと離れた。

「それと食堂で言った『エセ貴族』って言葉は取り消すわ。あんなこと言って、ごめんなさい」

頭を下げるリウスを、先程まで恥ずかしそうにしていたギーシュが真顔になって見つめる。

そんなギーシュの様子に、リウスはもう一度微笑みかけた。

「あとね。さっきの決闘、凄かったわよ。思った以上に強かった。出来ればその力を、誰かを守るために使ってね」

それじゃ、とリウスはその場を離れた。

遠くの人混みの中からルイズがこちらへ向かって走ってくるのが見える。

そう、私のこの力は誰かを守るために。

走ってくる桃色髪の少女を見つめながら、リウスはもう一度そう思うのだった。

第八話
Analysis of Each
Person

トリステイン魔法学院の主塔、その最上階にある学院長室からヴェストリの広場を守る者たちがいた。

一人は、本学院の長であるオールド・オスマン。

白髪を豊かに湛えたその老人は三百年の長きに渡って生き続けているとも言われ、知的で賢者然とした姿から学院長としてふさわしい人物と言えた。

もう一人は、ジャン・コルベール。

普段冴えない表情の彼も決闘の様子を見るにつれ、眼鏡の奥の瞳に強い警戒心を浮かべるようになっていた。

「勝つてしまいましたね」

「うむ」

オールド・オスマンはパイプに火をつけると、一息吸ってから白い煙を吐いた。

二人の前には淡く輝く鏡が浮かんでいる。

その鏡はヴェストリの広場にいるリウスを映し出していた。

「さて、『炎蛇』のゴルベールくん。彼女をどう見る？」

自身の名に付けられた二つ名に眉をしかめながら、ゴルベールは口を開く。

「貴族崩れの傭兵、でしょうか。あの動きは間違いなく戦い慣れた者の動きですが、軍人のように教育を受けたものではないでしょう。」

彼女自身は東方のメイジだと言っていました。どこまで本当なのかは分かりません。少なくとも召喚された時の様子では、トリステインはおろかハルケギニアのことすら知らないようでした」

自らの分析を細かく告げるゴルベール。

ふむ、とオスマンはもう一口パイプを吸った。

「ただ、彼女の魔法ですが……、あれはあまりに威力が高すぎます。まるで人間以外を攻撃の対象にして作られているかのような」

「そうじゃな。最後の魔法は、ミノタウロスのような亜人にも効くじやろう」

何でもないことかのように、オスマンはパイプを吹かしている。

ミノタウロスとは、牛頭の亜人である。

身長は2メートルから3メートル程。

肌は短い剛毛に覆われ、その下にある筋肉と皮膚の硬さによりオーク鬼とは比べ物にならない強度を誇っている。

頭部の形状に似合わず雑食であるが、特に肉を好み、稀に人里にいる人間を襲う強大な化け物だ。

その生息数こそ少ないが、腕力だけのオーク鬼、体ばかり大きいトルル鬼やオグル鬼などとは一線を画す存在だった。

「仰る通りです。最後の魔法は範囲こそ狭いものの、トライアングル・スペル並みの威力がありました。彼女はそれをあの短時間で詠唱して、あまつさえ疲労の色さえ見せていません」

浮かんでいる鏡は、平民のメイドに抱きつかれているリウスと、周りにいるルイズやキュルケやタバサを映し出している。

今のリウスの表情にも特に疲労の色はうかがえない。

「先ほどのゴーレムとの攻防の直後においても、息一つ上がっていません」

「オールド・オスマン。あなたはどう思われますか？」

「そうじゃの、と一度言葉を区切ると、オスマンは厳かな表情で口を開いた。

「あの、服装」

「コルベールはぼかんとした表情でオスマンを見る。

「へそ丸出しの恰好、そして健康そうな脚。いや、若いってのは素晴らしいの。眼福眼福」

ほっほっほ、と笑うオスマンにコルベールは食つて掛かった。

「オールド・オスマン！ アホなことを言つてる場合ですか！」

非難もどこ吹く風というようにオスマンが告げる。

「まあ、今は様子見でよい。先の決闘も彼女が厨房のメイドを庇つたためだと聞く。非はグラモンのせがれにあるのじゃろうな。彼女には、次の機会に改めて話を聞くとしよう。呼び立ててすまんかったの」

「そう、ですか。では一応、昨日仰られたように彼女の使い魔のルーンだけでも確認してまいります。それでは失礼します」

（オールド・オスマンは本当によく分からない。次の機会があるかも分からないのに）

コルベールはそう思いながら、学院長室を後にする。

その入れ違いに、眼鏡をかけた緑髪の美女が学院長室に入つていった。

「オールド・オスマン。『眠りの鐘』を宝物庫に戻しておきました。こちらの鍵をお返しします」

「ありがとうの。ミス・ロングビル」

ロングビルがオスマンに宝物庫の鍵を手渡すと、ふむう、とオスマンは喉を鳴らした。「ミス・ロングビル、君もあんな恰好を試してみたくなかないかね？」

オスマンが杖で指し示す先には、鏡に映されたりウスの姿があつた。

ロングビルは表情を変えずにオスマンを見据える。

「お断りします。それと、パイプを吹かすのはお止めください。あなたの体調管理も、秘書である私の仕事ですので」

何食わぬ顔で机に座るロングビルを横目に、オスマンは心底残念そうな表情を浮かべた。

（使い魔のルーンが光っておったの）

パイプに残る火を魔法で吹き消したオスマンは、パイプの中の灰を念力で捨てながら先程の戦いを思い浮かべていた。

（まさか、人の使い魔に未知の魔法とは。長く生きていると、何が起きるか分からないもんじゃないのう）

オスマンは面白そうに椅子に座り直し、ロングビルに紅茶の用意を促すのだった。

「よ、良かった。無事で、良かったです」

シエスタはそう言うのと、両手で顔を覆って泣き始めてしまった。

シエスタもいつの間にかどこかから決闘を見ていたようだ。

彼女は走ってくるルイズを追い抜くスピードで、リウスの元に飛び込んできたのだっ

た。

ギーシユくんのことを言えた義理じゃないわ、とりウスは苦笑した。

昨日から今日にかけて、私の方が女の子を泣かしているかもしれない。

「もう、泣かないでシエスタ。魔法使うから大丈夫って言ったじゃない」

ヴェストリの広場にいた生徒達は決闘が終わったことを見届けてから、既にその大半が塔の中へと戻っていた。

ギーシユはというと、リウスと話してから少し経って気絶してしまったようだ。

どうやら精神力の限界だったらしい。

心配そうなモンモランシーを付き添いに、他の貴族達によって医務室へ運び込まれていった。

周りにいるのはルイズ、シエスタ、キュルケと、喋ったことのない青髪の少女だ。

遠目にはこちらの様子を窺っている貴族が数人いる。

また生意気だつてケンカを売られたらどうしようかな、とりウスはぼんやり考えていた。

「それにしても、あなたがメイジだなんて気付かなかったわ。しかも凄い強いじゃない、びつくりしたわよ」

キュルケがそう口にする、ルイズもむくれたように口を開いた。

「ほんとよ。私だつて今朝知つたんだから。しかも勝手に決闘だなんて。使い魔の癖にご主人様をほっぽつといて、何やってるのかしら」

「素直じゃないわねルイズ、あんなに心配そうに見てたくせに。リウスがゴーレムに囲まれた時なんか、手で顔を覆つて全然見てないんだもの。あんなに恰好良かったのに、勿体ないことをしたわね」

「う、うるさいわね！ キュルケは黙つてなさい！」

そうこうしている内に、ようやくシエスタも泣き止んだようだ。

貴族に囲まれた中で泣いていたことに気付いたのか、慌てた様子で一礼をすると厨房に向かつて。パタパタと走つていった。

リウスはそれを見送つた後、ルイズへと向き直つた。

「そっか、心配させちゃつたわね。ごめんねルイズ」

「わ、分かればいいのよ」

さつきの剣幕はどこへやら、急に恥ずかしそうな様子で呟くルイズ。

その姿を見たキュルケが面白そうにまた茶化し始めた。

そうしたわいわいと騒がしい様子を、青髪の少女、タバサも黙つて見つめていた。

ゴーレムを翻弄しつつ次々に破壊していくリウスの姿を思い返す。

その戦い方はまるで舞いでも踊っているかのようだったが、恐ろしい程に実戦的な動

きだった。

そして彼女が使った魔法。

『アーススパイク』や『ヘブンスドライブ』とかいう魔法に関しては、ハルケギニアにも似た魔法がある。

『ナパームビート』という魔法も念力の一種だろうか。

しかし、彼女の使う全ての魔法はあまりにも威力が高すぎた。

東方のメイジ、彼女が宣言したその言葉をタバサはもう一度思い返した。

もしかしたら、この使い魔は私が欲しい知識を知っているかもしれない。

タバサがそんな期待を込めた視線をリウスへ向けていると、リウスもその視線に気が付いた。

「初めまして、ですよ。ルイズの使い魔、リウスと言います。以後、よろしくお願いいたします」

リウスは微笑みながら丁寧に自己紹介をする。

眠そうな目でぼんやり見ていたタバサは小さく呟いた。

「私の名前はタバサ。二つ名は『雪風』」

「ミス・タバサ、これからよろしくお願ひしますね」

にこやかに笑うリウスに対して、タバサは未だにぼんやりとした目でリウスを見つめ

ていた。

口数の少ない子なんだろうか、とリウスは思ったが、その表情が少し気になっていた。リウスが昔ゲフェンに着いたばかりの時を思い出す。

その泊めてもらった宿屋の鏡で久しぶりに自分の顔を見た時のことを。

このタバサの表情は、その時の自分の顔にひどく似ているように思えたのだ。

すると、微笑ましそうにタバサの様子を見ていたキュルケが笑って言った。

「タバサはいつもこんな感じなのよ。あ、そうだね。リウス、私のことも『ミス』だなんて他人行儀じゃなくって、ルイズと同じように話して頂戴。あとタバサにも。いいわよね、タバサ」

ん、とタバサは短く返答する。

その様子を黙って見ていたルイズがジロリとリウスを睨み付けた。

「別にいいけど、キュルケとはあまり仲良くしないでよね」

「どうして?」

リウスがきよとんとして尋ねる。

不思議そうな表情のリウスに向き直ったルイズは、腕を組んで胸を張った。

「まず、キュルケはトリステインの貴族じゃないの。隣国ゲルマニアの貴族よ。それだけでなく許せないわ。私はゲルマニアが大嫌いなもの」

キュルケはどこ吹く風という感じで微笑みながら様子を見ている。

「わたしの実家があるヴァリエールの領地はね、ゲルマニアとの国境沿いにあるの。だから戦争になるといつとも先陣切つてゲルマニアと戦つてきたの。そして国境の向この地名はツエルプストー！ キュルケの生まれた土地よ！」

ルイズはどんどんヒートアップしていく。

タバサはちよこんと座りこんで本を読み始めていた。

「つまり、あのキュルケの家はヴァリエールの領地を治める貴族にとつて不倶戴天の敵なのよ。実家の領地は国境を挟んで隣同士！ 寮では隣の部屋！ 許せない！」

ルイズがダンダンと地面を踏みしめ始めた。

キュルケを見ると、やれやれといった具合に肩を竦めている。

「しかも色ボケの家系よ！ キュルケのひいひいひいおじいさんのツエルプストーは、わたしのひいひいひいおじいさんの恋人を奪つたのよ！ 今から二百年前に！」

「結構、昔の話ねえ」

「それから、散々ヴァリエール家を辱めたわ！ ひいひいおじいさんは、キュルケのひいひいおじいさんに、婚約者を奪われたの！ ひいおじいさんのサフラン・ド・ヴァリエールなんかね！ 奥さんを取られたのよ！」

「恋人、取られまくりね」

「だから！ 仲良くなったらダメ！」

そう言つて締めくくつたルイズは、いぶん疲れた様子だ。

「大丈夫？」とリウスが声をかけているのを尻目にキュルケが口を挟む。

「そうは言つても、取られる方が悪いわよ。戦争についてだつてしょうがないことだわ」
赤髪をかきあげながら火に油を注ぐキュルケに、容易く再炎上するルイズ。

その言い争いを見守つていたリウスはタバサに声をかけた。

「止めた方がいいのかしら」

「いつものこと」

タバサは視線を本に落としたまま短く答えた。

キュルケが余裕たつぷりにルイズを茶化し、ルイズは大真面目に顔を赤くしながら反論している。

「仲が良いのねえ」

「私もそう思う」

炎上する一部を除いて、のんきな時間が過ぎていく。

ふと見ると、遠くからコルパールがこちらに向かつてきていた。

心なしか顔が険しい。

「皆さん、そろそろ授業が始まりますぞ」

「コルベールが開口一番にそう言うのと、ルイズとキュルケの言い争いがぴたりと止まった。」

「は、はい。分かりました」 ルイズが慌てて答えた。

「分かりましたわ、ミスタ・コルベール」 キュルケは動じた様子もなく髪をかきあげた。
「・・・」 タバサは何も答えず、本を閉じて立ち上がった。

三者三様の反応を見ていたリウスに、コルベールが顔を向ける。

「それと、ミス・リウス。使い魔のルーンを見せて頂いてもよろしいですか？」

「あ、はい。こちらです」

リウスが左手の甲を見せると、コルベールは羊皮紙に手早く模様を書き写した。

「ふむ、珍しいルーンですな。はい、ありがとうございます」

羊皮紙に書き写したルーンをまじまじと見つめてから懐に仕舞うと、コルベールはあつさり立ち去っていった。

その様子をリウスはじつと見つめていた。

先ほどのやり取りに、私に対しての警戒の色が見えたように思えたのだ。

(どこかから決闘を見ていたのかもね)

何も言つてこないところを見ると、今すぐ何かある訳ではないのだろう。

何も言わずに急に襲い掛かってくるのであれば別なのだが、多分この学院ではそう

いったことはあるまい。

そういえば、とリウスは別の思索をしつつ、授業へと向かうルイズ達に付いていく。すると、目の前を歩くルイズから声がかかった。

「リウス。別に次の授業は使い魔がいなくても大丈夫だから、どつかうろついててもいいわよ」

「そうなの。じゃあルイズの部屋にいようかしら」

そういつてルイズ達と別れると、リウスはルイズの部屋へ向かっていった。

そういえば、もう一度荷物袋の中身を改める必要がある。

リウスの意識は、荷物袋の中にあつた見知らぬ2つの小石に向けられていた。

第九話 かつての夢 1つ目

ルイズは夢を見る。

ふと気付くと、ルイズは深い青空の下でポロポロの服を着た人達と共に行列に並んでいた。

いつの間にか、視点がひどく低い位置にある。せいぜい前にいる大人の腰あたりだ。

(ここは?)

辺りを見回そうとしても顔が動かない。

まるで誰かの視界をそのまま覗いているようだった。

「オラ！ 次だ！」

ガンガンと金属を叩く音がすると、行列が前へと少し動いた。

誰かに右手を弱々しく握られているのを感じる。

—大丈夫、もうすぐだから。

誰かの幼い声が耳に響いた。

どこかで聞いたような声だが、頭がぼんやりとしていてうまく思い出せない。

自分の視界が右に移ると、そこにはポロポロの服を身にまとった小さな男の子がい

た。

その子供はひどくやせ細っている身体をこちらへと寄せ、不安そうに胸の前へ持つてきている手には薄汚れた器が握られている。

一瞬風が吹き、目の前の少年の薄桃色の髪が優しく風になびく。

もう一步、前に進む。

すると、少し離れた所で男性の怒号が上がった。

「返しやがれ、この野郎！」

ばつとルイズの視界が振り向く。

見ると、女性が何かを抱えながら必死に駆けて行く姿があつた。

その後ろを、怒声を上げる男性が追いかけていく。

少ししてから、遠くで女性の悲鳴が聞こえてきた。

隣にいる小さな子供がぎゅつとこちらに抱きついてくる。

—大丈夫よ。大丈夫だから。

聞こえ続ける悲鳴を背景に、今度はかすかに震える声が耳に響いた。

(これ……誰の声なの?)

ルイズが聞こえてくる声の主をいくら必死に思い出そうとしても、思い出すことはできなかつた。

しばらくの間、行列を少しずつ進んでいく。

目の前の人が横にどくと、目前には金属製のテーブルに置かれた大きな鍋が湯気を出しながら並んでいた。

湯気に向こう側には大人たちが立っているように見えるが、湯気を通してはよく分からない。

「器を」

鍋の向こうにいる男性らしき人が無感情な声で指示する。

それに従って、視界の主と横の子供が男性へ薄汚れた器を渡した。

少しして、ごとり、と目の前の鍋と鍋の間に何かが入った器を置かれる。

視界の主は急いでそれを受け取ると、行列から逃れるように早足で歩いていった。

器に入っているのは、穀物で作られた粥のようだ。

半ば駆けるように、朽ちた材木と藁で作られた家々の間を通り抜けていく。

ひどく汚れた通りをしばらく進むと、視界の主はその家の一つに飛び込んでいった。

その家の中は灯りもなく薄暗い。

「ちゃんと取ってこれたかい」

声のした場所を見ると、優しそうな老婆が小さな椅子に座っていた。

足を怪我しているようで、包帯に血がにじんでいる。

「あそこには危ない人がいるからね。この時間以外は、あまり行っちゃいけないよ」

—分かったわ、行かないようにする。あんたも。分かったわね？

横を見ると、先ほどまでしがみつくようにしていた子供が嬉しそうに粥を頬張っていた。

「こちらを見るといつと笑って言う。

「分かったよ、お姉ちゃん。ねえ、今日はご飯食べられて良かったね」

そう言うのと、また器に入った粥へ顔を向け、必死に食べ始めた。

—ほら。あんまり一気に食べようとすると、喉につつかえちゃうわよ。

「ごめんねえ。馬鹿息子が逆らわなければ、あんたたちをこんな目に合わせなかったのに」

隣を見ると、老婆がしくしくと泣いていた。

視界の主が老婆に近づき、その皺だらけの手をそつと握る。

老婆の手を握っているその手は薄汚れ、余りに小さな細い手をしていた。

—わたしたちは平気よ。それに、お父さんは悪くないわ。きつとすぐに迎えに来てくれるもの。

そう言うのと、目の前の老婆が小さな声を上げて更に泣き始める。

すると、ルイズの視界はすつと暗闇に飲み込まれていった。

リウスは上機嫌に食堂へと向かっていた。

食堂に通じる渡り廊下の窓から外を見ると、青空の下を鳥の群れが飛んでいく。今日も良い天気だ。

「おはよう。ルイズ、リウス」

「おはようキュルケ。良い天気ね」

後ろからキュルケが声をかけてきたので、リウスは振り向いて声を返した。

ルイズはというと、物思いに沈んでいるようで答えない。

キュルケは特に気にした様子もなくふつと笑うと、颯爽と赤髪をなびかせながら食堂へと向かっていった。

ルイズはいまだに何か考えながら歩いている。

そのせいか、その歩みは随分と遅い。ただでさえ小さい体であるのにそんな様子だからか、次々と他の生徒達に抜かされていく。

それから少しして、前方から見知った声がかかった。

「ルイズ！」

見ると、金色の巻き毛の少年がこちらへ向かってくる。

昨日リウスと決闘をした少年、ギーシュ・ド・グラモンだった。

ルイズはその声にすら気付かずに、すたすたと食堂へ向かって歩いていく。

「ちよつとルイズ。呼んでるわよ」

はつとしたルイズは、リウスの顔を見たと思うと視線を逸らした。

朝からずつとこんな調子だ。

今朝起きてからというもの、彼女の髪を梳いている間も何を考えているのかぼうつとした様子だった。

ルイズのそんな様子にリウスが「ほら」と促すと、真面目な顔をしたギーシュが目の前に立っていた。

「何よ、ギーシュ」

怪訝な顔をしたルイズに対して、ギーシュはさつと地面に両膝とつくと、まるで土下座をするかのような恰好をする。

「ラ・ヴァリエール公爵家が三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールに、グラモン家が四男ギーシュ・ド・グラモンが謝罪を申し上げる！」

ほかんとするルイズ達や周りの貴族達を気にもせず、彼は続けた。

「今まで申し訳ない！ 僕が悪かった！ これまで行なってきた侮辱を、どうか許して欲しいっ！」

ギーシュは頭を地面にこすり付けるかのようによつて低頭していた。

その姿に慌てた様子のルイズが声をかける。

「ちよ、ちよつとギーシュ！ 何してるのよ、顔を上げて！」

呆氣に取られていたルイズはギーシュの傍に近付くと、狼狽した声を上げる。

「許してくれるかい……、ルイズ」

ギーシュは自分を立ち上がらせようとするとするルイズに向けて、頭を下げたまま問う。

ルイズはその姿に見つめながら口を開いた。

「……ええ、ヴァリエールの名にかけて」

「……ありがとう」

そう言うと、ようやくギーシュは顔を上げてルイズを見た。

ルイズが立ち上がるとギーシュもその身を起こし、今度はリウスに向き直る。

「ミス・リウス。貴方にも謝罪をしなければならぬ。昨日は、本当に申し訳なかつた。

この通りだ」

頭を下げるギーシュに、リウスは慌てた様子で口を開いた。

「そ、そんなに謝らないでください。昨日のことは私があなたを侮辱したことで始まつたことです。私も謝らなければなりませんし、彼女たちに謝つてくれれば私はそれで満足ですから」

「ありがとう、ミス」

頭を上げたギーシュがリウスを見る。

リウスは昨日の凜とした姿とは違って、おろおろとした表情に浮かべていた。

「昨日怖がらせてしまった彼女、シエスタにはもう謝ってきたよ。一番迷惑をかけてしまったからね」

普段とは違う真面目な顔をしたギーシュがリウスを見つめる。

「ミス・リウス、僕に敬語など使わないでくれ。貴方との決闘で、僕が魔法を持たない平民に対してどれほど酷いことをしたかに気付いたんだ。彼女には、本当に酷いことをした」

ギーシュは決闘で感じた死の恐怖をいまだ鮮明に覚えている。

昨日までの自分は、何も考えずにあんな恐怖を平民へと向けていたのだ。

今の彼は、かつての自分の姿をひどく嫌悪していた。

「これからモンモランシーとケティにも謝ってくる。恥ずかしい話だが、今朝までずっと気を失ってしまっていたのね。少し遅くなってしまうが、早く謝らなければ。それでは」

そう宣言したギーシュはマントを翻して去っていった。

「急に、何なのかしら」

呆氣に取られたルイズをちらと見てから、リウスは去つていくギーシユの後ろ姿を見た。

先ほどの様子を見て彼を嘲笑する者もいたが、リウスには朝日に照らされた堂々とした後ろ姿から、確かに立派な貴族の姿を感じていたのだった。

リウスが厨房に着くと、奥にいたマルトーというコックから大きな声がかげられた。

「おつ。来たな、『我が剣』！　そこに用意してあるから遠慮なく食べてくれ！」

リウスはその言葉に少し苦笑しながら、豪華な料理が用意してあるテーブルに腰かける。

昨日の夕食時、リウスが食事を貰いに行くと、厨房から予想していなかった歓声が上がったのだった。

「あんたは会ったばかりの俺たち平民のために横暴な貴族と戦ってくれた！　メイジといつても、あんたは別だ！　だから、これから『我が剣』と言わせてくれ！」

そう声をかけてきたマルトーと呼ばれる中年のコックやシエスタの話の聞いていくと、どうやら厨房の人達もこぞつて決闘を見に来ていたらしい。

『我が剣』というフレーズは、リウスが短剣を中心に戦っていたことが由来だそうだ。

興奮した様子の人達に囲まれて、怖がられるとばかり思っていたリウスは気まずそうにしながら顔を赤くしていた。

職業柄、彼女はこういう状況に全く慣れていないのだった。

今朝からリウスが上機嫌だったのは、怖がられるとばかり思っていた厨房の人から受け入れてもらえたためである。

ただ目の前に置かれた朝食の内容を見て、リウスはもう一度困ったように苦笑した。豪華で美味しい食事は確かに嬉しいけれど、迷惑はかけたくないのに。

そう思いながらも、好意には感謝で答えなければ、とリウスはありがたく食事を頂戴するのだった。

それから数日の間は滞りなく進んだ。

リウスが危惧していた貴族からのちよつかいも無く、実に平和な毎日だった。

それというのも、ギーシュとキュルケが「ミス・リウスに決闘を挑んだら、そいつに私たちが決闘を挑んでズタズタにする」と公言していたからだだった。

ただでさえ東方のメイジだと噂されるリウスに加えて、キュルケもギーシュも学院では有名な実力者である。

そんなメイジ達と三回も決闘を行なえるほど胆力のある生徒がいる訳もなく、リウスはのんびりと毎日を過ごしていった。

「明日は街に出るわよ」

ある日の夜、ルイズが唐突にそう宣言した。

「あれ、授業は？」

リウスは自分の武器の手入れをしていたが、その手を止めてルイズへ聞き返す。

「明日は虚無の曜日だからお休みよ」

虚無の曜日だと言われてもリウスには分かる訳がなかったが、要するに休日なのだろうと彼女は判断した。

何をしに行くのか、というリウスの問いに、ルイズがぴつとリウスを指差した。

「城下町に服を買いに行くのよ」

城下町、と聞いたリウスは興味津々といった具合に目を輝かせる。

「いいわね、行ってみたいわ。でも服なら替えの服が一着あるし、着回せば別に問題ないけど」

「あなた、他の生徒からすごい見られてるわよ。特に男子から」

そういえば、とリウスは思い返した。

すっかり気にしていなかったが、この服が隠しているのは、両腕と、胸や腰の一部だけである。

確かにこの年頃の男子生徒にとつて、下着のような服は目に毒かもしれない。

「でもルイズにとつてはせつかくの休日でしょ、勿体ないわよ。場所さえ教えてくれれば私一人でも行ってこれるわ。ちようど換金したいものもあるし」

「な……！ リウスだけ行っても意味ないじゃない！」

「そうなの？」

きよとんとしてゐるリウスに、ルイズは、このコンチクショウ、と睨み付けた

実をいうと、ルイズはつい先日、噂好きなクラスメートから先の決闘騒ぎの原因を詳しく聞いたのだった。

そのきっかけは実にアホらしいもので、香水を落としたことでギーシュの二股がバレて、ギーシュがその香水を親切に拾ってくれたメイドに八つ当たりした、ということだった。

そしてその様子を見かねたリウスがメイドを庇い、それを馬鹿にしたギーシュにリウスが怒ったのだ、とその女生徒は話してくれた。

話を聞いていたルイズは呆れかえっていた。

事情を知らないルイズはリウスに謝るよう言ってしまったが、こつちが謝る必要なんて何一つなかったようだ。

しかしその女生徒と話している時、横から割り込んできた他の生徒が言った。

「それ、ちよつと違うわよ。私すぐ近くにいたもの。あの時ね、ギーシュつたら全然関係の無いルイズのこともバカにしたの」

ルイズは驚いて、少し興奮した様子で話を続ける女生徒を見た。

「確か、その、魔法を使えないんだからルイズは貴族じゃないって言ってバカにしたのよ。そしたら彼女ね、ルイズをバカにした事にホントものつすごい怒っちゃってさ、真正面からギーシュに『このエセ貴族』とか言っちゃったのよ。凄い声で。怖かったわあ」
ギーシュつてばサイテーよね、と二人の女生徒が笑い合っている中、ルイズはそれを聞いて涙が出そうになっていた。

知らぬ内に、自分を庇ってくれていたのだ。

ルイズは女生徒達にお礼を言い、リウスのために何か出来ることがないか考えていた。

何か買ってあげるのがいいのだろうか。

例えば、今の生活で足りていないもの。

ベッドは確かに足りてないけど、一緒に寝れないのは嫌だ。

他には・・・髪留めとか、ネックレスとか。

ルイズは綺麗なネックレスを付けたリウスを想像すると、すぐにかぶりを振った。確かに喜ぶかもしれないが、リウスは女性の癖に自分自身に対して無頓着すぎる。

リウスから聞いた話によると前の生活では食事も全然取っていないかったみたいだし、睡眠もあまり取っていないかったようだ。

冒険で手に入れた宝石なども全て売っぱらっていたと言っていたので、装飾品というものにそれほど興味がないのかもしれない。

大体いっつもあんな服着てるし、と愚痴をこぼし始めたルイズははっとした。

そうだ、服だ。女性に人気な服じゃなくつても、実用性の高い服なら喜ぶかもしれない。

虚無の休日を使つて一緒に服を買いに行こう、とルイズはこの所ずっと考えていたのだが、まさか一人で行くとか言い出すとは思わなかった。

じとりと睨み付けてくるルイズを見て、リウスはようやく自分が余計なことを言ったことに気付いた。

どうやらこの子も一緒に行くつもりだったようだ。

「やっぱリウスも一緒に行きましょう。私だけじゃ、お店の場所も分からないから。」

ね？」

先ほどのリウスの言葉に、ルイズは拗ねた顔をしてそっぽを向いている。

誰かが傍から見ていたなら、その様子は妹をあやす姉のように見えたかもしれない。

(この子がいるから、今更あんな夢を見たのかもしれないわね)

ルイズをなんとか宥めつつ、リウスはふと今は亡き弟に対して思いを馳せるのだった。

第十話 城下町でお買い物

「じゃあ、城下町、トリスタニアまでの道にあまり危険はないのね」

「ええ、そうですね。街道周辺の亜人も根こそぎ討伐されています。街道を通っていれば盗賊共も滅多に現れないはずですよ」

「街道は巡回の兵士がうろついているんですわ。命を捨てる覚悟じゃなきゃ、盗賊もメイジの方々を襲いやしません。盗賊共にそんな度胸があるとも思えませんや」

虚無の休日の朝早く、リウスは衛兵の詰所で立ち話をしていた。

城下町へは昼頃に到着する予定でいるため、まだルイズは夢の中にいる。

「王都に繋がる街道だものね、考えてみればそうよね。ありがとう、ドニさん、ポールさん」

「いえいえ。しかしミス・ヴァリエールはお優しい方ですね。リウスさんのために買い物をするだなんて」

にこやかな様子の衛兵はポールという青年だった。

丁寧な口調で話す青年に粗野な雰囲気はなく、元々はトリステイン城付きの衛兵として働いていたというのも頷ける。

「でもお嬢さん、城下町といつても気をつけなきゃなりませんよ。裏通りには飲んだくれの傭兵やら貴族崩れ共やらもいますからね」

リウスをお嬢さんと呼んでいるのは、ドニという中年の傭兵である。

元々はラ・ロシエールという都市の出身らしく、傭兵としてトリストインの様々な都市を転々としていたとのことだった。

その見た目はしかめっ面の親父であるが、面倒見の良さや剣の腕前から傭兵の中でも人望が厚いようだ。

つい先日、リウスが魔法学院の周辺について情報を集めていた際にこの二人とも知り合ったのだった。

当初は貴族の使い魔ということで若干不審な目を向けていた傭兵たちだったが、リウスが例の決闘を行なった東方のメイジだと分かるや否や、うってかわって友好的な態度を取るようになっていた。

傭兵の人々は決闘の場に立ち会っていないかったようだが、決闘の詳細を知っているとところを見ると、どうやら貴族平民問わず学院の多くの人に決闘の噂が広まっているらしい。

「治安の問題はあるわけね。ハルケギニアのことは全然知らないから助かるわ。王都でそれじゃあ、他の街でも同じなのかしら」

「風の噂じゃ、ラ・ロシエールなんて酷いもんですわ。アルビオンの紛争で傭兵がごったがえしてるってんで」

「アルビオン、って他の国よね。紛争なんてことになってるの?」

話を聞くところによると、『白の国』アルビオンでは貴族の反乱によつて内戦に発展しているとのことだった。

その影響で、トリステインとアルビオンの交易地点であるラ・ロシエールにはアルビオンから逃げてきた傭兵や移民が溢れているそうだ。

「巷では、そろそろアルビオンの王様が危ないつもつぱらの噂です。下手したらずつと友好関係だったアルビオンがトリステインにも攻めてくるんじゃないかって、トリステインからガリアへ逃げる人もいるくらいですよ」

「ええつ、それはマズいじゃないの」

「そうなんですよ。お偉いさんが何とかしてくれることを祈るしかありません」

「陛下が気軽に杖をお振りにならなけりや、戦争なんかにならないでしょうがね。ブリミル様に平和を祈りやみんな幸せ、杖に祈りや戦争ばかり、ってなもんです。私ら平民は戦争なんかまつびらごめんなんですがねえ」

中年の衛兵、ドニが溜息まじりに言葉を漏らす。

やはり貴族中心の社会体制を取っていることで、そのしわ寄せが平民の人々へと降り

かかっているのだろう。

仕方ないで済ませなければやってられないのだろうが、仕方ないで済ませられるほど軽い話でもなかった。

他の国の話を聞いていても、ハルケギニアでは権力を巡る諍いが絶えないようだ。

隣国のゲルマニアでは水面下で王権争いが勃発し、ガリア王国では過去に王族の暗殺騒ぎもあつたらしい。

ロマリア皇国では神官と平民の格差が激しいらしく、ドニが言うには『ぶくぶく肥え太った神官ばかりの国』とのことだった。

結局のところ、そういった点ではリウスの世界における国々と変わらないようだ。

ルーンミッドガッツ王国でも権力争いの噂はあるし、シユバルツバルド共和国において権力を有するレッケンベル社という組織は、自分らの利益ばかりを追い求める腐りきった奴等の巣窟だった。

リウスはそこまで考えを巡らせると、はたと考え込む素振りを見せた。

『レッケンベル社』という言葉が何か引つかかるのだ。

ほんの少し、頭痛がしてくるのを感じる。

「そうだ、リウスさんはワインを飲まれるのですか？ トリスタニアでは美味しいワインを出す店がありましたね」

唐突にポールが話題を変えた。どうやら眉をしかめて考え込むリウスの様子を見て、
気を使ったようだ。

リウスは思考を一旦止めて、ポールの言葉に応える。

「ワインなら好きよ。ここに来る前には、マステラ酒って果実酒をよく飲んでたわ」

衛兵の二人はそれぞれトリスタニアでオススメの店について教えてくれた。

その二人の総評として、トリステインのワインなら『安くてもなお旨い』タルブ村の
ワインか、値は張るが『外れ無し』の絶品』オルニエール・ワインが良いとリウスへ語っ
た。

他にも、城下町トリスタニアの商業区であるブルドンネ街には多くの露店が並んでお
り、その中には時々掘り出し物があったりするという。

ただ商人組合の中では『貴族は最高のお客さん』というのが定説だそうで、商人の言
う通りにしていると間違いなくぼったくらられてしまうそうだ。

そうしたトリスタニアの色々な話を聞いていたら、随分と日が高くなっていた。

「そろそろルイズを起こさなくっちゃいけないわ。二人ともありがとう、またお話を聞
かせてね」

「ああ、お嬢さんも気を付けて行っておいで。おい、ポール。そろそろ見回り行くぞ」

「分かりました、先輩。ではリウスさん、お気をつけて」

馬を乗り続けて三時間。ルイズとリウスは城下町トリスタニアに到着していた。

リウスは楽しそうな表情を浮かべながら、辺りをきよきよと見回している。

リウスの背には持ってきた自分の荷物袋、その手には先ほど買った洋服屋の皮袋が握られていた。

隣にいるルイズは、しかめっ面をしながら羊皮紙に書かれた地図を見つめている。

「リウス、ちよつと立ち止まって。えつと、ここは『ブルドンネ街』、よね」

「トリステインで一番大きな通りだったっけ」

「あの店があそこにあつて、あれがこうだから……。絶対あつちにあるはずだわ」

地図を片手に歩くルイズと、その後ろをついていくリウス。

幅の狭い石敷きの道では、商人達が客寄せのため声を張り上げている。

それを眺めていたリウスは、さつき通った時に見逃していた露店を見つけて目を輝かせた。

「ルイズ、ちよつと見ていつていい？」

「もう、さつきも見ただじゃない。ええと、この道はここに繋がってるから……。やつぱりここらへんよ！ この地図間違ってるんじゃないの!？」

「そうねえ。この辺りにあるのなら、知ってそんな人に聞いてみようか」
今現在、二人は豪快に道に迷っていた。

目的の洋服屋にはすんなりと辿りつき、学院の衛兵たちが教えてくれた食堂で美味しい食事を楽しんだのだが、そこでリウスが武器屋に行ってみたいと言いついたのだ。

その結果、かれこれ三十分近くブルドンネ街の近くをさまよいつづけている。

リウスは地図とにらめっこをしながら、その地図を傾けたりくるくると回したりしていた。

どうやら人へ道を聞くことには納得がいていないらしい。

リウスをほつとくと何かしら危ないので、リウスはその手を引いて横に立たせておいた。

「ねえ、ここらへんにある武器屋ってどう行くのかしら」

声を張り上げていた、ずんぐりとした商人にリウスは声をかけた。

「へいらつしやい！ 良いもの取り揃えてるよ！」

その商人は商人根性を発揮させながら、聞いてもいない品物の説明を始めた。

黄金の砂浜で取れた金の巻貝。たぶん塗料でも塗っているのだろう。中に何か詰めているようだが、巻貝の重量は金のものではなかった。

火竜山脈で発見された竜の化石。人の手で削った岩だろうか。所々が不自然にごつ

ごつとしすぎていて、とても生物の骨には見えない。

忘れられた遺跡から発掘されたという魔法のネックレス。どこからどうみても魔力が宿っているようには見えなかった。単なる銅で出来たネックレスである。

商人オススメの品を面白そうに聞いていたリウスは、その脇にある小さな木彫りの馬に目をやった。

十サント程の可愛らしい木彫りの馬は二つ並べられており、たてがみや尾の形状がそれぞれ異なっている。

目には綺麗なガラス玉がはめ込まれているようで、なかなか出来の良い品物に見えた。

つがいの馬なのだろうか、まるで互いに戯れているかのような姿をしている。

「あ、おじさん。あれはいくらかしら」

「おお、あれに目がいくとはお目が高いですな。あれは出来が良いので、一つ二エキュ、二つ合わせて三エキュと七十スウにおまけしちやいましょう」

リウスはルイズに教えてもらったハルケギニアの通貨について思い出していた。

ハルケギニアで主に用いられている通貨は、ドニエ（銅貨）、スウ（銀貨）、エキュ（金貨）、それに新金貨の四種類であるらしい。

10ドニエが1スウであり、100スウが1エキュ。そして新金貨が大体エキュ1

金貨の3分の2程の価値である。

そして、街で中流階級程度の平民が不自由な生活を行なうには年間120エキユーほどが必要とのこと。

そう考えると、この木彫りの馬は贅沢な買い物だと言えるだろう。

リウスは脇にかけた小袋から数個の小さな宝石を取り出した。

少し前の冒険で手に入れたエメラルドやルビーである。

既に加工作された品物なので、そこそこの価値があるはずだ。

「今持ち合わせがないから、これと交換でもいい？」

それを見た商人は内心舌舐めずりをしていた。

これが本物の宝石でなかったとしても、こういうものはよく売れる。万が一本物であるなら、こんなに美味しい話は無い。

そう思いつつ、顔には出さずに商人が返答した。

「へえ、宝石ですか。こういったものは鑑定が難しいので、なんとも言えませんな。それ全部である木彫り一個くらいでしょう」

「あらそうなの。ならいいわ、この貴族の子の面倒見なくちゃいけないし。邪魔したわね」

はつとした商人は羊皮紙を見つめているルイズを見た。

よく見ると、首に五芒星の紋章がある。あれはこの近くの魔法学院のものだったはずだ。

そう気付いた商人は立ち去ろうとしたリウスに慌てて声をかけた。

「お嬢さん、お待ちになって！へへ、商売がお上手ですな。いいでしょう、それ全部とこの木彫り二つを交換しましょう」

リウスはこれらの宝石に大した未練はなかったため、手に持った宝石を商人に手渡しで木彫りの馬を受け取った。

小袋の中には、更に大きな宝石がまだいくつか入っているのだ。

多少はぼったくられているだろうが、リウスにとっては別に問題ではない。

「ついでに、近くにある武器屋の道を教えてくれる？」

商人が懇切丁寧に教えてくれた道を歩いていくと、段々と路地は狭くなっていた。

悪臭が鼻をつき、そこら中にゴミや汚物が転がっている。

結局人に道を聞いてしまったことに、先ほどまでルイズは気に食わなそうにぶちぶち文句を言っていた。

しかし今は何を考えているのか、鼻を押さえながらむつつりと押し黙っている。

リウスはそんなルイズの様子を気にしつつ、路地裏の様子に眉をしかめながら武器屋への道を進んでいた。

足元に転がるゴミを蹴飛ばして端に寄せておく。

(嫌な道ね……。知らないことを思い出すわ)

ボロボロの服を着た人々と優しいお婆ちゃん。汚らしい路地裏に朽ち果てた家々。突き抜けたような真つ青な空。そして、あの子の笑い顔。

瞬間、目の前の視界に真つ赤な血溜りが見えた気がした。

耳に響く男の怒号。

リウスは血の気が引いていくのを感じて、思わず立ち止まり目を押さえる。

しばらくして目を開けると、目の前にはゴミの散らばった路地があるだけだった。

急に立ち止まったリウスに対して、ルイズが心配そうな顔をして覗き込んでいた。

「ちよつとリウス？ 顔、真つ青よ？」

心配そうなルイズの顔を見たリウスは、血の気が引いた顔のままルイズへと微笑む。

「ごめんね。ちよつと立ちくらみしたけど、もう大丈夫だから。行きましょう」

リウスはそう言うと、そそくさと狭い路地を進んでいく。

ルイズはその様子を心配そうに眺めていた。

(やっぱり、昔のことを思い出してるのかしら)

ここのとこ続げさまに見る夢。あれは多分リウスの夢だ。

本来、主人と使い魔は感覚の共有を行なえるはずだが、ルイズとリウスは未だに感覚の共有が出来ないでいる。

何故かは分からないが、それが夢という形になって表れているのかもしれない。

今ルイズがいる汚らしい路地裏。

あまりこういう所に来たことがないルイズにとって、この光景はリウスの夢に出てくる路地裏を彷彿させるのに十分なものだった。

ルイズは夢の中に現れる少年を思い出す。

今、目の前を歩くリウスの薄桃色の髪の毛。

夢の中の少年の髪は、彼女の髪と瓜二つだった。ということは、彼がリウスの弟なのだろうか。

しかし、リウスの弟は……。

二人は何となく押し黙ったまま、しばらく路地裏を歩き続けた。

やがて目の前に、剣の形をした銅の看板が下がっている家を見つける。

「ここみたいね」

どうやらここが目的の武器屋のようだ。

石段を上って羽扉を開けると、二人は店の中に入ってしまった。

店の中は昼間だというのに薄暗く、ランプの灯りがともっていた。

壁や棚には所狭しと剣、槍、槌が並べられている。

壁に立てかけられている立派な甲冑が厳めしい。

店の奥にはパイプをくわえている五十そこらの親父が、こちらを胡散臭げに窺っていた。

彼はルイズの首元に描かれた五芒星に気付くと、パイプを口から離してドスの効いた声を出した。

「貴族のお嬢さん。うちはまっとうな商売してまさあ。お上に目をつけられるようなやましいことなんか、これっぽっちもありませんや」

(つまり、やましいことをしてることかしら)

リウスはぼんやりとそんなことを考えていた。

貴族を見た途端にこういった反応をするとは、怪しいことこの上ない。

「客よ」

ルイズは腕を組んで言った。

「こりやおったまげた。貴族が剣を！ おったまげた！」

「なんでよ？」

「いえ、若奥様。坊主は聖具をふる、兵隊は剣をふる、貴族は杖をふる。そして陛下はバ

ルコニーから手をおふりになる、と相場は決まっておりますので」

「用があるのは私じゃないわ、こっちの使い魔よ」

「忘れておりました！ 昨今は使い魔も剣をふるようで」

店主はお愛想を言うのと、横に立つリウスをじろじろと眺めた。

「剣をお使いになるのは、ここのお嬢さんで？」

ルイズは頷いた。

リウスは先ほどから、目の前に立つ店主の親父をじつと観察している。

「リウス、用があるんでしょ？ 私は剣のことなんか分からないから、適当に見てるわね」

そういつてリウスを促すと、ルイズは棚の上の商品へと目を向けた。

店主はいそいそと奥の倉庫へ消える。

それを横目で見送ってから、ルイズが小声でリウスへと声をかけた。

「聞きそびれてたけど、何で武器屋なのよ。貴方、もう立派な短剣を持つてるじゃない」
「荷物の中に武器があったから売りたいくつてね。ほら、お金は何かしら必要かもしれないじゃない？ あと、ここで売ってる武器にも興味があるわ」

ルイズはリウスが背負っている荷物袋を見る。

やたらと大きい袋を持ってきたのはそういうことのようにだ。

そうこうしている間に店主が奥の倉庫から戻ってきた。

長さ一メートル程の細身の剣を抱えている。

「そういや、昨今は宮廷の貴族の方々の間で下僕に剣を持たせるのが流行っておりましてね。その際にお選びになるのがこのようなレイピアでさあ。軽いので女性にも扱えると思いますぜ」

なるほど、確かにきらびやかな模様がついている。

いかにも貴族好みしそうな、綺麗な剣だった。

「貴族の間で、下僕に剣を持たせるのが流行ってるの？」

ルイズが尋ねると、店主はもつともらしく頷いた。

「なんでも『土くれ』のフーケとかいう盗賊が、貴族のお宝を散々盗みまくってるって噂で。貴族の方々は恐れて下僕にまで剣を持たせている始末だそうで、へえ」

ルイズは盗賊の話に興味がなかったようで、店主が持っている剣をじろじろと眺めている。

「いいじゃない。この剣、気に入ったわ。リウスにプレゼントしてあげる」

ルイズはリウスそつちのけで口を出し始めた。

リウスは唐突なルイズの言葉に驚きつつも、自分の見解を述べる。

「これじゃ派手すぎない？　こういった装飾が付いてると高そうだわ。ここじゃ服屋み

たいにツケも効かないだろうし、ルイズのお小遣いが勿体ないわよ」

先に訪れた服屋はヴァリエール家の馴染みの店だったようで、ツケが効いたのである。

悪いから、と断ろうとするリウスに、ルイズは半ば無理やり服を選ばせたのだった。

だからこそルイズは、他にもリウスが欲しがるものがあればプレゼントするつもりだった。

「わたしは貴族よ。これ、おいくら？ 新金貨で百までなら出せるわ」

流石は貴族のお嬢様である。ルイズは買い物の駆け引きが下手くそであるようだ。

財布の中身を聞いた店主は話にならないとばかりに手を振った。

「まともな剣なら、どんなに安くても二百くらいが相場でさ。新金貨で百でしたら、あそこにある剣くらいでしょうかね」

そう言った店主が乱雑に置かれた剣の山を指差すと、ルイズは頬を赤くする。

剣がそんなに高い物だとは知らなかったのだ。

「結構するのねえ。じゃあ、まずはこれを査定してもらってもいいかしら」

剣の相場を聞いたリウスはそう告げると、荷物袋の中から引つ張り出した剣や盾をカウンターに置き始めた。

それらは、先ほど見せられたようなレイピア、特殊な形をした短剣、幅の広い軍用剣、

それに磨かれたばかりにみえる煌びやかな盾だった。

それぞれ装飾はついていない武骨なものではあったが、随分質の良い品物に見える。

次々に置かれる武器防具に、店主が心底驚いた様子で口を開いた。

「これはまた、随分と、良い品物をお持ちで」

店主はカウンターに置かれた4つの武器をまじまじと見つめる。

彼のその顔は先ほどまでの商人の顔ではなく、武器屋としてのプライドを醸し出した顔だった。

正直に言つて、どれも良い品だ。

これらの武器は一流の兵士が使いそうな代物である。

重量、バランス、切れ味、どれをとつても文句が無い。

特にこの盾の出来栄えといったら、実用的でありながら高価な美術品として保管されていてもおかしくない代物だった。

「この盾は、どこの方が作ったもんで？」

「さあ、分からないわ。貰い物だったと思うけど」

リウスの言葉に嘘はなかった。

何故こんなものが荷物袋に入っているのかは分からないが、多分冒険の際に手に入れた代物だろう。

今回は自分に使えそうもない重い物だけを選んで持つてきたため、ルイズの部屋にはまだもう少し武具が残っている。

「そうですね。誰が作ったか分からないのであれば……この武器を全部合わせて新金貨で500ほど。盾は1000と行ったところでしようか」

「……何よそれは。それだけあれば立派な家だつて建てられるじゃない。たかが武器なんか……」

店主の言葉を聞いたルイズは呆れたように口を開いた。

しかし店主は至つて真面目な様子である。

「お言葉ですが、若奥さま。並の剣ならばいざ知らず、名のある剣の中には城に匹敵するだけの値がつくものもありますぜ」

そこまで言つて店主は口を閉ざした。

あんまり褒めそやすのは良くない。この貴族共がもつと高い値を要求してこないとも限らない。それでなくても、貴族は美味しいが厄介な相手なのだ。

「盾は1400。それ以外はその値段でいいわ」

しかしルイスはけろつとした顔でそんなことをたまつた。

店主は少しの間、頭の中でこの武具がどの程度の価値で転売できるかを考えた。

この武器ならば城住まいの貴族であつても売れるだろうし、盾はちゃんとしたルート

で売ればエキューで1500はくだらないだろう。

フーケ騒ぎでまとまった金が入ってきているので、この貴族が言う要望の金額も払えるはず。

つまり、ここは有無も言わず『買い』だ。

「良いでしょう。合わせて新金貨で1900。金貨と新金貨で用意しますんで、少々お待ちを」

そう言うのと、真面目な顔をした店主はまた奥の部屋へと引つ込んでいく。

目の前で行われた取引にルイズが呆気にと取られていると、突然、少し離れた場所から声をかけられた。

「ちったあやるじゃねえか、嬢ちゃん！ でも騙されてるぜ！ もう少し値段を吊り上げちまいな！」

低い男の声が店の中に響き渡った。

ルイズとリウスは声のした方へ振り返る。

しかしそちらの方には剣が積んであるだけで、人影はない。

「おいおい、（こ）だぜー！（こ）ー！」

見ると、山積みになされた剣の一つがかちやかちやと音を立てているのを見つけた。

リウスはそれに恐る恐る近寄ると、驚いた顔をして眩く。

「劍が、喋ってる?」

「おう、そうよ。デルフリンガーってんだ。しかし、おめーじや俺つちを扱えそうにねえのが残念だな。見る目があるつてのに、女なのが勿体ねえぜ」

がちやがちやと身を震わせているそれは、いかにも古そうな一本の劍だった。

すると突然、奥の部屋からどたどたと店主が走ってくるのが聞こえる。

「やい! デル公! お客様に失礼なこと言うんじやねえ!」

「失礼? けつ、俺は本当の事を言ってるだけだぜ。おめえこそ、さつきから見たりや何とか値切ろうとわざと安い値段を言いやがつて! あの盾じやあ、もつと良い値段がつくだらうがよ!」

「うるせえ! 滅多なことぬかすんじやねえぞ! それ以上商売の邪魔したなら、貴族に頼んでてめえを溶かしてもらうからな!」

「へつ、おもしれえ! やってみろや、ごーつく親父がよ!」

人と劍が言い合いをし始めたのを見ていたルイズが口を開いた。

「これつて、インテリジエンスソード?」

店主はこの客の気が変わらないかと戦々恐々とした様子である。

「へ、へえ、そうでき。意思を持つ劍とやらで。一体どこの誰が劍をしゃべらせるなんてことを始めたのかしりやせんが、適当なことばっかり言うので困ってるんで」

「はー、珍しいわね」

一部始終を聞いていたリウスは目を輝かせながら、デルフリンガーを鞘から引き抜く。

長さは1メートル半ほどで、柄は長く、両手でしっかりと持ち持てるように作られている。

剣身は片刃で細く、薄手に作られているようで長さの割にはやや軽い。

リウスの世界でいう、カタナやツルギといったカテゴリーにあたるだろうか。

しかし、その刀身に錆が浮いてしまっているのが勿体ない。

見た感じ、錆さえ無ければなかなか良い武器だといえるだろう。

「おでれーた、てめ『使い手』か。しかも相当な場数を踏んでやがるな。てめ、俺を買え」
剣が自分で自分を売り込む姿を見たリウスは、面白そうに笑いながら口を開いた。

「でも私じゃ貴方を使えないわよ?」

リウスは短剣なら扱えるが、こうした片手半剣は使うことができない。

さっきの軽いレイピアですら使いこなせないし、使い慣れた武器があるのならそれを使った方がいいに決まっているのだ。

「多分何とかなるんじゃないか? いいから買ってみるって! 損はさせないからよ
!」

わいやわいや騒ぐ剣を見たリウスは、確かにそうかも、と思い始めていた。

こうしてデルFRINGガーを手に持っていると、何故かデルFRINGガーのような片手半剣の使い方が頭に流れ込んできているのだ。

まあ、それでも実際に使えるかは分からない。

しかしその懸案を抜きにしても、こんなに面白い剣を放っておくなんて勿体ない。

リウスはそう思うと、ふとデルFRINGガーの魔力を探ってみた。

山積みにされた剣の一本であるならそこまで高くはないだろうが、この剣からほんの少しだけ魔力の痕跡を見つけたのだ。

しかしリウスの想像に反して、この剣からは尋常ではない程の魔力がほとばしっていた。

リウスは目を見開いた。

どうやらこの錆によって隠されているようだが、この剣からは異常なまでの魔力を感じる事ができる。

それこそ、今まで見てきたどの武器よりも。

これでは、さつき自分が売ろうとしていた武器の値段では到底追いつかないだろう。

数万エキュー、もしかしたら数十万エキューかもしれない。

そんな金額をどうやって作ればいいのか、想像もつかなかった。

リウスは半ば諦めながら、ダメ元で店主に値段を聞いてみることにした。

「ええつと、親父さん。この剣、いくらなのかしら」

「はっ？ そいつをお買い上げいただけるので？」

「まあねえ。興味は、あるんだけど」

リウスは歯切れ悪く返答する。

あまりにも高い場合は諦めざるを得ないだろう。

使えるかどうか分からない武器を買うために、尋常でない金額を作るのは馬鹿げた話である。

「あれなら、百……いや厄介払いできるなら五十で結構でさ」

「はい？」

リウスは耳を疑った。

というより、店主の言葉の意味を掴みかねていた。

さつきまでデルフリンガーからも『ごーつく親父』とか言われていたのに、急にどうしたのだろう。

「五十つて、エキューよね。五十？ 五十万つてことかしら？」

「おいおい、お客さん。いや、お嬢さん。ご冗談が好きですな。そんな値段なわきやないでしょう。新金貨で五十枚つてことでさ」

呆れた様子で苦笑した店主を、リウスはまじまじと見つめた。

正直、意味が分からない。

さつきは普通の剣で新金貨二百枚とか言っていたのに、まさかこんな剣を新金貨五十枚で売ろうだなんて。

そもそも喋る剣という珍しい魔法の武器を、普通の剣以下の値段で売るとは。リウスの感覚ではとても正気の沙汰ではなかった。

もしかしてそんな珍しい代物じゃないのかも、トリウスは悶々と悩んでいた。が、一人で悩んでいても仕方がない。

なるべく動揺を顔に出さないようにして、店主に告げた。

「じゃあこの剣もちようだい」

「へい、お待ちを」

そう言うと、店主はあっさりとおの奥の部屋に戻っていった。

「えー、こんな剣を買うの？ もっと綺麗で喋らないのにしなさいよ」

「まあまあ。面白いじゃない」

「そうだけ、貴族の娘っ子。俺を選ぶたあ、流石目が肥えてるヤツは違うな！」

デルフリンガーも嬉しそうにかちやかちやと音を出している。

ふと、さつきデルフリンガーが言っていた『使い手』という言葉が気になった。

「ねえ、デルフリンガー。さつき貴方が言っていた『使い手』って、どういう意味なの？」

デルフリンガーはしばらくウンウン唸ってから、あっさりと言った。
「知らね、忘れた」

呆れたようなリウスとルイズ。言い訳をするかのようにデルフリンガーが言葉を継いだ。

「長く生きてるから思い出せねえわ。お前さんに握られたときにビビつてきたのは間違いないねえんだけどな」

「長く生きてるって、アンタ出来てから何年経ったのよ」

「六千年ってところだろうなあ」

「長生きなのねえ」と興味津々なリウスに、「剣の癖に虚言癖まであるなんて、何なのかしら」と真に受けないルイズ。

そうこうしていると、店主が戻ってきた。

「お待ちせしやした。何とか店にある金をかき集めました。エキュー金貨で850枚、それに新金貨で550枚でさ」

店主はざつしりと重い金貨の袋を二つカウンターに置いた。

「間違いないのね?」

「へえ、大丈夫でさ。何でしたら今数えましょうか」

少しむっとした店主に、リウスは笑って答える。

「貴族に無礼な真似をしたら、その首が飛んじやうものね。分かったわ、ありがと」

そう言ったリウスは袋の中の金貨をざっと見てから、金貨の入った二つの袋を荷物袋に仕舞う。

金貨をろくに数えもしないその様子に、店主はぼかんとした表情を浮かべた。

「ちよ、ちよつとお待ちになつて。そのまま持つて帰るおつもりで？」

「そうだけど？」

「ここらへんは強盗も出ますぜ。なんなら俺がそこまで送りましょう」

「そんな、悪いわ。お店もあるでしょう」

「いやいや、お嬢さん方だけでそんな大金を持つて歩いてちや危なつかしい。店は戸締りしときゃあ大丈夫でさ。ちよいとお待ちを」

そそくさと奥の部屋に引つ込んだ店主は、腰に長剣を下げて戻ってくる。

「へつ、珍しいな親父。いっつも金勘定ばかりしてるおめえがよ」

「うるせえぞ、デル公！」

一行が店を出ると店主はしつかりと店に鍵をかけ、ブルドンネ街に向かつて先導して歩いていく。

店主の急な見送りに微妙な空気の中、リウスは短剣をすぐ引き抜けるようにしながら、店主と周りを警戒していた。

この店主を完全に信用した訳じゃない。何が起きるかは、分らないのだ。

そんな警戒もつかの間、あつという間に一行はブルドンネ街に出た。

そのまま街の入り口にある厩舎へと向かう。

今度はリウスとルイズが先導しているが、まだ店主は周りを警戒した様子で後ろを付いてきている。

「ねえ、親父さん。何でここまでしてくれるの？」

リウスはふと振り返って店主の顔を見た。

店主は一瞬ぎくつとした顔をしたが、すぐ真面目な顔に戻る。

「へえ、お嬢さん方が心配だったんでさ。さつき渡した物をそのまま持つて帰るとは、思わなくて」

店主は、貴族の買い物なんてどうせ後から召使いか何か金が金を受け取りにくるのだからと思つていた。

それをこの女性は自分で持つて帰ると言う。

よっぽど頭が回らないのか、腕に自信でもあるのか。

金貨をろくに数えないというのも、騙し騙されを続けてきた彼にとつては信じられないことだった。

今回は、金貨という分かりやすい形で貴族を騙してしまうと後が面倒なことになるため、騙さなかつただけだ。

店主はずつと聞きたかつた言葉をようやく口にしました。

「お嬢さん。お嬢さんは、貴族なんですかい？」

「いや、私は貴族じゃないわよ。この子は貴族だけどね。私は平民で、この子の使い魔よ」

「そうでしたか。そりゃあ、大変でしょう」

店主はそう口に出すや否や、しまったと思つて口に手をやる。

貴族の前で、俺は何てことを。

ルイズがじろりと店主の顔を見る。

その視線を受けて店主が顔を青ざめさせる中、リウスが笑つて言った。

「まあ、多少大変ではあるけどね。それよりも、この子に会えて良かったって思つてるわ」

「大変つて何よ、大変つて」

その言葉を聞いて照れた様子の貴族の子供に、その子の頭を撫でる使い魔の女性。

その様子を店主はぼんやりと眺めていた。

大昔に別れてしまった妻と子は、今どうしているのだろうか。

厩舎に着いたリウスは店主に振り返った。

ルイズは馬小屋の番をしていた人に声をかけている。

「親父さん、ここまで送ってくれてありがとう」

「いえ、何もなくて良かったでさ。デル公、お前も元気にやれよ」

「うるせえ、このごーつく親父め。世話になつたな」

「そうそう、一つ言い忘れてました。デル公がうるさかったら鞆に閉まってください。すぐ黙りますんで」

「て、てめえ親父！ 余計なこと言うんじゃねえ！」

リウスがその言い合いにくすくす笑っていると、馬に跨ったルイズから早くしなさいと催促された。

「それじゃ親父さん、元気で。また寄るわ」

「お嬢さんも。道中お気をつけて」

二頭の馬が街から離れていく様を店主は見守っていた。

使い魔の嬢ちゃんが背負うデルフリンガーも小さくなつていく。

(これから、店が静かになるな)

そう思うと、店主は少しだけ胸にやり様のない寂しさを感じるのだった。

第十一話 かつての夢 2つ目

ここ最近、トリステインの貴族たちは『ある問題』に悩まされていた。

神出鬼没な盗賊、『土くれのフーケ』に狙われた貴族たちが後を絶たないのだ。

性別年齢出身、その全てが謎に包まれているその盗賊は、宝石でも絵画でも、武器や防具、骨董品やヴィンテージワインであっても、価値のあるものなら何でも盗んでいく。

ある時は堅固な壁を文字通り『土くれ』に変えてひっそりと金目の物を奪い、別の事件では巨大なゴーレムを操って力任せに強行突破する。

その時その時の状況に合わせて手口を変えてくるその盗み方に、貴族たちは手をこまねいていた。

分かっているのは、フーケがトライアングル以上の『土』系統のメイジだということ。そして、お宝の中でもマジックアイテムには特に目が無いことだけだ。

貴族たちはこぞつて下僕に剣を持たせたり、高レベルの『固定化』を使って対策を立てたりするものの、未だにフーケを捕らえるどころか、その正体すらも掴めないでいる。

そして、その『土くれのフーケ』は今トリステイン魔法学院の宝物庫の中にいた。

もちろん宝物庫にぎっしりと詰まっているお宝が目当てであるが、当の怪盗は焦った

様子で一人愚痴をこぼしていた。

「つたく、少しは整理しなさいよね。どこに何があるか分かったもんじやないわ」

何度かこの宝物庫には入ったことがある。

その度に目当ての物を探すが、なかなか見つからないのだ。

そのため、業を煮やしたフーケはこうして深夜にこっそりと侵入しているのだが、お

目当ての代物は一向に見つからなかった。

フーケの目的であるお宝は一冊の本だった。

だからこそ、どの場所に紛れ込んでいるのか分からないのである。

「絶対あるはずだよ。何で無いのさ」

フーケは若干疲れた様子で床に腰を下ろした。

そろそろ戻らなくてはならない。ただでさえ、こうした深夜の侵入は危険極まりないのだ。

もちろん、見回りの衛兵が巡回するタイミングは把握している。

そのため有り得ないことではあるのだが、もし誰かに見つかりでもすれば言い訳など出来るはずもない。

もう、目当ての物ではなく他のお宝を持っていくべきかもしれない。

こうして見るだけでもいくつか高く売れそうなマジックアイテムが置かれている。

それに、当初盗み出そうとしていた「破壊の杖」も既に発見しているのだ。

(そろそろ、潮時かもね)

そう考えつつも依頼主から提示された莫大な報酬を思うと、フーケは落ち込んだように短くため息をつくのだった。

魔法で作った灯りがほのかに宝物庫を照らしている。

そろそろ行こう、と立ち上がったフーケは、ふと茶色い棚の下にある隙間が気になった。

確か、あそこはまだ探していなかったはずだ。

まさかこんな所に？

フーケはそう思いながらも魔法の灯りで隙間の暗がりを探らしてみる。

すると、宝物庫の床に30センチ程の小さな隠し扉を見つけた。

これだ。

フーケはにんまりと口を吊り上げた。

宝物庫の中に隠し扉を作っているとは、用意周到なことだ。

鍵がかかっているようだが、床の『固定化』は宝物庫の外壁に比べるとそれほど強力なものでもなさそうだった。

外壁は内側から『鍊金』で崩していつても半日はかかる。

しかしこの隠し扉ならば、今すぐにも私の『錬金』で破ることができらるだろう。

ようやく目当ての物が入っているであろう場所を見つけたフーケは、内心小躍りした
い気持ちでいっぱいだった。

しかし事に至るのはまだ先だ。

今、この隠し扉を破る訳にはいかない。

そう考えたフーケは浮き立った気持ちを静めた。

そして頭の中で内側から外壁を破壊する段取りを考えながら、静かに宝物庫を後にする
のであった。

ルイズは夢を見る。

その日の夢はいつもと違っていた。

どうやら視界の主はどこかの街を歩いているらしい。

今までの夢ではまるで子供のような視点であったのだが、今回の夢はルイズの身長よ
りも少し高い視点となっていた。

視界の主は大きな噴水を横切つて、がやがやと騒がしい喧騒を抜けていく。

白い基調のマントを羽織つた一団や、黒いローブを身にまとつた青年など、周囲の人

達はルイズがあまり見たことのない服装をしていた。

しかし、中にはリウスのような下着っぽい服装の女性もいる。

視界の主は彼らを尻目に、一軒の家へと向かっていった。

目的の家には青銅の看板がかけられ、その看板には杖の模様が描かれている。

その家に入ると、眠そうな顔の女店主がこちらへと顔を向けた。

「ブルーージェムストーンを買いにきました。とりあえず50個ほど。

その声は大人びた声だったが、少しだけ幼さが残っていた。

女店主は気だるそうに立ち上がると、すぐ後ろの棚でがさごそと何かを皮袋に詰め始めた。

「この収集品と交換でお願いします。

そう言うと、視界の主はカウンターに様々な物を並べていく。

動物の毛の束や綺麗なウロコ、何かの動物の牙、瓶に入った液体や虫の皮、果ては弓や盾といった装備から、鮮やかな色をした野草まで。

女店主はそれを一通り鑑定すると、小袋に見たことのない金貨を詰め込んで視界の主に手渡した。

「お釣りだよ。まいごど」

視界の主がその言葉に軽くお礼を言って家を出ると、目の前には巨大な塔がそびえ

立っていた。

視界の主はその厳めしい巨塔を見上げると、ふうつと一つ溜め息をつく。

そのとき、視界の端に小さな女の子がとぼとぼと歩いているのを見つけた。

彼女もリウスと似たような服装をしているが、その肩には少女の外見に似合わない立派な毛皮のマントがかけられている。

視界の主は駆け足にその子供へと近付いていった。

—カトリーヌ。

呼ばれたその子供が振り返る。

その手には紫色の宝石が埋め込まれた美しい杖が握られていた。

「あ……、久しぶり」

驚いた顔をして、目の前の少女が口を開いた。

薄いクリーム色の短い髪が可愛らしく、まだあどけなさの残る、小さな女の子だった。

(この人が、カトリーヌ?)

リウスがリウスを呼び出した翌日、あの教室で聞いた名前だ。

確か、強大な魔力を持つとリウスが言っていたはずだった。

—久しぶりね。元気でやってた?

視界の主はそう言うと、彼女と一緒に立ち話を始めた。

妹さんは元気かと問うと、少女が元気だと答える。

その杖の調子はどうかと問うと、少女が使いやすいと答える。

ジュノーという街の様子を伝えると、少女がそうなんだと答える。

どう見ても一方通行のような会話だったが、目の前の少女は心地よさそうに薄く微笑んでいた。

しばらくして、カトリーヌと呼ばれた少女がもじもじと何かを言いたそうにしている。

—どうしたの？

「あのね。その」

そう言うのと、目の前の少女はもじもじしながら俯いてしまう。

—ほら、言わなきゃ分からないわよ？ 次はいつ会えるか分からないんだから。

そう言われた少女はきつと口元を結ぶと、意を決したように口を開いた。

「私、少ししたらハイウィザードになるんだ。ちよつと前にゲフェンタワーの人にそう言われたの」

一瞬、沈黙が降りる。しかしすぐ嬉しそうな、興奮した様子の声が聞こえてきた。

—ちよつと！ 凄いいじゃない！ おめでどう！

その言葉と共に、視界の主は少女の肩をパンパンと叩く。

目の前の少女は困ったような、嬉しそうな顔をしていた。

「いたた。ありがとう」

「やったじゃない！ 貴方ってば、やっぱり凄いわ。」

凄い力を持つてるんだもの。それくらい当然よ。

しかもハイウイザードって言ったら、ウイザードギルドのマスタークラスじゃないの！

視界の主はいまだに興奮冷めやらぬ様子で少女を褒めそやす。

ふと、その様子を見ていた黒いローブの二人組の会話が聞こえてきた。

「ほら、あの子ですよ。今度、ハイウイザードになるって子」

「元々凄い魔法を撃つって、お前言ってたしな。お偉いさんのお眼鏡にかなったってことか。横のセージは何なんだ？」

「ああ。あの子は魔法がてんでダメだったから、セージになった子だったはずですよ。今でも魔法じゃなくて、肉弾戦が中心だそうで」

「げえ。それじゃセージの意味ねえな。モンクにでもなれば良かったんじゃないか？ 違うもん持つてるからあんなに仲が良いのかね」

ルイズは、どこからか少し苛ついた感情が流れ込んでくるのを感じていた。

(勝手なこと言いやがって。この子がどんな気持ちでいたと思ってる)

耳の奥でそんな言葉が響いてくる。

しかしこの流れ込んでくる感情は、ルイズが昔からずっと感じていたものに似ていた。

「あの。ごめんね」

目の前の少女が、急にそんなことを言った。

その瞬間、ルイズは自分の中に暗い感情が流れてくるのを感じていた。そしてその感情はどんどん強くなり、目の前の少女に向けられていく。

ルイズにはこの感情に覚えがあった。

これは、嫉妬ではないのか。

—ごめんって、何が？

視界の主から冷たい声が放たれる。

目の前の少女ははっとした顔をして慌てて口を開いた。

「ち、違うの。貴方のおかげなのに、周りが貴方に酷いこと言ってる」

—私が憧れてたウィザードの、更に先へ行つたから『ごめん』ってこと？

カトリーヌ、貴方はそう思ってるのね？

(違う。私はそんなことを言いたいんじゃない。この子に対してそんなこと思っていない)

ルイズには二つの声が聞こえていたが、目の前の少女は青ざめた顔をしたままだ。
「おいおい、どうした」

今にも掴みかかろうとする気配を感じたのか、先程の黒ローブの二人組が近寄ってくる。

視界の主はぎつと少女を睨み付けると、踵を返してその場を後にした。

「ま、待って！」

後ろから少女の声が聞こえてくるが、視界の主は振り向かず早足で立ち去っていく。

（早く。今すぐ戻って謝らなきゃ。今すぐ。）

違う。私はあの子にそんな感情なんて持ってない。そんなこと、考えてない）

ふと、俯いた視界に巨大な塔の影が映っていた。

視界の主は顔を上げると、大きく佇む塔に向けて怒りのこもった目で睨み付ける。

そして、まるで駆けるかように歩みを速めていった。

その後ろから叫ぶかのような少女の声が響いた。

「待って！ リウス！」

虚無の休日から数日経った昼間、リウスはルイズが授業を受けている時間を使って、少し離れた森へと赴いていた。

今日はいつもの冒険服ではなく、中流階級の平民が着るような服を着ていた。

上質そうな布製の黒いズボンに、白いシャツ、そしてこげ茶色の皮でできたチョッキを羽織っている。

それは、ルイズが先日城下町で買ってくれた服の一つだった。

そして背負った荷物袋の中には、デルフリンガーや元々持っていた二本の短剣が入っている。

武器を持つと、使い魔のルーンが光る。

そして筋力や五感、魔力に至るまで、自身の体が強化されることにリウスは気付いていた。

しかも武器を握ると、振るったことのないデルフリンガーのような剣の使い方が頭の中に流れ込んでくるのだ。

それらの検証を行うため、あまり人目につかない場所を選んでやってきたのだった。リウスは日頃からときどき生態調査のために森を散策していた。

その際、森の奥に開けた広場を見つけていたのだった。

いくつかの目印を辿って広場に難なくたどり着いたリウスは、荷物袋を背から下ろし

た。

がちやがちやと音を立てながら武器を引き出すと、試しにデルFRINGガーを手に持ってみる。

左手のルーンが光り、体がよく分からない力で満たされていくのを感じる。

両手で持ったデルFRINGガーを軽く振ると、空気を切り裂く音が辺りに響いた。

「凄いわね、本当に私でも扱えそうだな」

「そうだろう。なんせ俺たちがそう言うんだから、間違いねえよ！」

デルFRINGガーがどんなもんだとばかりに声を上げる。随分と機嫌が良さそうだ。

「ねえデルフ。あなたの言う『使い手』って言葉について、まだ思い出せない？」

リウスはデルFRINGガーの言っていた『使い手』という言葉に、この能力のヒントが隠されている気がしていた。

とはいっても人間が使い魔として呼び出されることは滅多に無いらしいので、人間が呼び出されることで特別な能力が付与されていることも否定はできないのだが。

ちなみに、デルFRINGガーという名前は長つたらしいので、彼のことはデルフと呼ぶことにした。

思いのほか、彼もその名前を気に入った様子だ。

『『使い手』……うーん。いや、やっぱり思い出せね』

デルフリンガーは取り付く島もない。だが、他にもいくつか聞くことがある。

「そういえば、何で私とその『使い手』だつて分かつたんだっけ」

「そりゃあ、相棒が俺に触つたからさ。俺たちは使う人間の力が大体分かるんだよ。なんかこう、ぼやっと」

また新しい情報が出てきたので、この調子でどんどん新情報を教えてくれるかと思いきや、その後は「知らね」「忘れた」のオンパレードである。

「その内に思い出すんじゃないか？ だつて俺たちはほら、剣だからよ。使つてくれれば何とかなるって」

なんとも適当なものだ。

呆れたリウスは広場にある平たい岩に腰かけると、荷物袋から小さな皮袋を取り出した。

それを開くと、2つの物が入っている。

「何なのかしらね、これ」

リウスはひとり呟くと、袋に入っていたそれらを手に取つてまじまじと見つめる。

その1つは、濃い藍色の球体だった。

ぞつとするほど冷たいその球体は手の平ほどの大きさがあり、何故か分からないが、この球体からはひどく気味の悪い気配が伺える。

もう一つは、ガラス管に入っている石の欠片だった。

手の平半分ほどであるその石は黒ずんでおり、その表面には何かの文字の断片が見える。

どこの古代文字なのだろうか、何が描かれているかは全く分からない。

「……おい、相棒。何持ってんだそれ。気持ちわりいから閉まつといてくれよ」

急にデルフリンガーが心底嫌なものを見たかのような声を出した。

リウスは小首をかしげつつ、平たい岩に立てかけてあるデルフを見る。

「デルフ、これ見たことあるの？」

「いんや、見たことはねえ。けど、その球。それから気持ちわりい気配を感じるんだよ。

捨てつちまえよ、そんなもの」

「捨てはしないわよ。私にもこれが何なのか分からないんだから」

何かピンとくるものでもあるのだろうか、デルフリンガーはやけにこの球体を嫌がっているようだ。

とりあえず今は保留として、2つの石を小袋に入れ直してから紐で封をする。

「はい。これでいい？」

「本当は捨ててほしいんだけどな。まあ相棒に贅沢は言わねえよ」

「悪いわね。思い出すまで我慢して」

リウスはそう言ってデルフリンガーを手に取り、ひとまず素振りでも行なおうとする。

すると、空に何か大きな影が見えた気がした。

「・・・ドラゴン？」

リウスが空を見上げると、優雅に空を飛んでいるドラゴンがいた。

青いウロコが太陽の光に照らされて輝いている。

「ありやウインドドラゴン、風竜だな。どうやら子供みてえだが」

デルフリンガーがのんきな声で解説をする。

青空を泳ぐように進むドラゴンはすぐ近くの森の中へ降り立ったようで、木々に隠れて見えなくなつた。

「迷い込んできたのかしら。危なっかしいわね」

そう誰に言うでもなく呟くと、リウスは荷物をまとめてドラゴンが降りたであろう場所へと急ぐ。

学院が近い場所にドラゴンが現れるなんて危険極まりない。

リウスの世界にもドラゴンはいたが、大抵が好戦的かつ強力なモンスターばかりなのだ。

ドラゴンが降り立った場所は、リウスがいた広場から少し離れた所だった。

その背びれには学院の制服を着た者がちよこんと座っている。

青髪の少女、『雪風』のタバサだった。

「きゅいきゅい！ お姉さま！ お腹すいたのね！ お腹が！ すいたのね！」

ドラゴンは明らかに人間の言葉を喋りながら、タバサに向かって喚いていた。

先ほどからずっとこうである。

きゅいきゅいと喚き散らすこのドラゴン、シルフィードは実は風竜ではなく風韻竜という種族だった。

韻竜は高い知能を持ち、先住魔法によって精霊を操ると言われているが、ハルケギニアではもう絶滅しているというのが定説だ。

しかしこうして召喚できてしまったのだから、その定説は間違っていたということだろう。

そのためタバサはシルフィードに人前で喋るなど命じているのだが、よほど空腹なのか、シルフィードは飛んでいる間もずっと食事をせがんでいた。

あんまりにもうるさいので、一旦落ち着かせなければ学院に戻ることも出来ない。

タバサはシルフィードの背に乗ったまま話しかけた。

「さつきも言ったように、食事なら今から用意する。だから喋っちゃダメ」

「お肉！ お肉がいいのね！ 早くしてほしいのね！ 待ち遠しいのね！ ごはん、ごはん、おいしいごーはんー！ きゅいきゅい、るるるるー♪」

タバサは少し疲れた顔でため息をついた。

この竜は伝説の韻竜だというのにまるで小さな子供のようだ。

実際シルフィードは韻竜の中では子供らしいのだが、それでもタバサに比べて長い年月を生きている。

陽気で素直な性格は気に入っているが、疲れているこちらの身にもなってほしい。

そんなことを考えていると、急に茂みのがさつと揺れた。

タバサはぎくりとして、さつとシルフィードの背から降りる。

まさか、聞かれた？

シルフィードに念話でこれ以上話さないよう伝えると、魔法で風を操って音のした場所を探った。

「・・・誰？」

小さく声をかけると、茂みをがさがさと揺らしながら平民の女性が現れた。

その女性は気まずい顔をしながらこちらへと近付いてくる。

まさか、平民に聞かれるとは。

タバサは疲れていたとはいえ、そこまで周りを警戒していなかった自分を呪っていた。

こんな森の奥に人がいるとはとても思っていなかったのだ。

その女性は街で見えるような薄い布製のズボンとシャツを着て、皮で出来た荷物袋を背負っている。薄桃色の髪に、この顔・・・？

「使い魔の」

「タバサさん。ごめんね、盗み聞くつもりはなかったんだけど。ああ、今日はこんな恰好してるから分からないかもしれないわね」

確かクラスメートであるヴァリエールの使い魔で、リウスという名だったはず。

『盗み聞く』ということは、聞かれてしまったのか。

「お願い。誰にも喋らないで」

端的にそうお願いをする。すると、どこからか低い男の声がした。

「すげーな、韻竜だったか。久しぶりに見たぜ」

その声に、タバサは警戒する顔をして辺りを窺った。

その様子にリウスが苦笑する。

「タバサさん、こつちこつち。この剣が喋ったのよ。デルフ、あんたも誰にも言わないようにね」

「あいよ、相棒。貴族の娘っ子、安心しな。俺たちは口が固いつて有名なんだ」
すぐに忘れるだけでしょ、と笑うリウスの手には、長身の剣が握られている。

「インテリジェンスソード？」

「つて言うらしいわね。こないだの休日にルイズと買ってきたのよ」

「デルフリンガーってんだ。よろしくな、貴族の娘っ子」

警戒を解いたタバサはじつと二人（一人と一本）を見ている。

「大丈夫よ、誰にも喋らないわ。ねえ、このドラゴンは貴方の使い魔なのかしら？」

「・・・シルフィードっていう名前」

「シルフィード。私はルイズ・フランソワーズっていう貴族の使い魔で、リウスっていうの。これからよろしくね」

シルフィードに向き直ったリウスはにこりと微笑む。

「きゅ、きゅいい・・・」

シルフィードはどうしていいか分からないといった様子で、タバサの顔色を窺っている。

タバサはしようがないとばかりにため息をついた。

「喋ってもいい」

既に、周りには他に誰もいないことを確認済みだ。

こうしている間も、誰も近寄ってきていないことを絶え間なく確認している。

「きゅい！ よろしくなのね！ わたし、シルフィードっていうのね！ お姉さまの使い魔やってるの！ あ、シルフィードっていうのはお姉さまが名付けてくれたのね！

本当の名前は、イルククウっていうのね！ きゅいきゅい！」
よつぽ喋りたかったのか、急に喋りまくるシルフィード。

リウスも呆気に取られた様子だ。

「この子は韻竜。誰かに知られてしまうと、研究のために連れて行かれてしまう。だからお願い、喋らないで」

「もちろんよ、喋らないってば。ルイズにもね」

「・・・ありがとう」

この使い魔の女性をどこまで信じられるかは分からないが、今は信じるしかない。ペこりとお辞儀をしたタバサはシルフィードの背に乗ろうとするも、ふと足を止める。

この使い魔はいつも何処かに行ってしまうか、もしくは常にルイズの傍にいる。

そのため、なかなか二人きりで喋ることができなかった。

今は、そのチャンスなのではないか。

そう考えたタバサは、特に何の感情も顔に出さないうでリウスに向き直った。

「あなたに質問がある」

リウスはきよとんととして続きを待った。

「東方の特殊な毒を治療する方法を知っていれば、教えてほしい」

不思議な聞き方である。特殊な毒と言われても、リウスに分かるはずもない。

「それはどんな毒？」

「・・・心を壊す毒」

タバサはまるで絞り出したように声を出す。

これはタバサにとって、とても大切なことなのだろう。そう考えたリウスは少し考え込んだ。

「うーん、駄目だね。私はそういった毒の治療法については分からないわ」

もし深い外傷を負っているのであれば、懐の小袋にたった一つあるイグドラシルの種を使って治療することができよう。

しかし毒となると話は別だ。

しかも心を壊した人を治療するなんて、リウスにはどうすることも出来なかった。

「そう・・・」

明らかに落胆した声を出すタバサ。

この子は顔に感情が出にくいだけなのかもしれない。いや、感情を出さないようにし

ているのか。

「でも、どうして私なら知ってるかもって思ったの？」

タバサは少し俯いていた顔をこちらへと向ける。

「あなたの決闘を見た。そこであなたは東方のメイジだと言っていた。だから、知ってるかもと思った」

なるほど、トリウスは納得した。

タバサのいう毒というものは東方由来のものなのかもしれない。そうであれば、私が知ってるかもと考えるのに納得がいく。

「さっき言ってた毒を何とか出来ないか、もう少し考えてみるわ。少しでも可能性がありそうならすぐ伝える。相談してくれてありがとうね」

「・・・礼を言うのはこちらの方。ありがとう」

タバサは本心からその言葉を口にした。

かすかな望みであっても、繋がなければならない。

シルフィードへ向き直ったタバサに対して、今度はリウスが声をかけた。

「タバサさん」

「・・・？」

振り返ったタバサがリウスの顔を見る。

やっぱりこの顔だ、とリウスは思った。

一つの目的のためならば何を犠牲にしても構わないという顔。

目的に沿わない事柄には全く興味がない顔。

とても、辛いことがあつた顔。

でも、だからこそ、事情を知らない私が何を話したところでどうにもならないだろう。

今後、彼女の判断が彼女自身を深く苦しめることのないように祈るばかりだ。

「ううん、何でもない。引き留めちゃって悪かつたわ。それじゃあね」

タバサは小首を傾げたが、特に気にも止めずにシルフィードの背びれに跨つた。

シルフィードが羽ばたき始めると、その巨体がふわりと宙に浮かぶ。

「きゅいー！ またね使い魔さん！ ぐはん、ぐーはーんー！ ーるるー♪」

「ここからは喋っちゃダメ」

タバサが手に持った長い杖でシルフィードの頭をぽこぽこ叩く。

シルフィードはきゅいきゅいと喚きながら、その場からあつという間に飛び去つて

行つた。

シルフィードに乗つたタバサはすぐ近くの学院を目指しながら飛んでいく。

あの使い魔、リウスは毒の治療法を見つけてくれるだろうか。

正直に言つて、それほど期待はしていない。

治療法を探すとは言つていたが、そもそも本当に探してくれるかどうか分からないのだ。そんな奇特な人などそうそういるはずもない。

もし探してくれる人なんているのなら、その人には裏があるか、もしくはとびつきりのお人好しである。

そう思いながらも、タバサはほんの少しだけ嬉しそうな顔をして学院へと向かつていくのだった。

その夜、夕食を済ませたリウスはデルフリンガーと話して分かったことについて、ルイズと話し合つていた。

「武器を持つと速く動けるようになったり、重い物を持つことができるようになる。こういう能力つて、使い魔のルーンによくあるものなのかしら？」

ルイズはリウスの言葉に考え込みながら、テーブルに置かれている馬の木彫りを指で撫でていた。

この馬の木彫りは、リウスが先日城下町で買った木彫りの片割れである。

片方はリウスが持ち、もう片方をルイズへとプレゼントしていたのだが、ルイズは

思った以上に気に入ってくれているようだ。

「うーん……。無いとも言切れないけど、聞いたことないわね。召喚した使い魔と感覚が共有できること。それと、使い魔とは念話で話すことができること。それくらいしか知らないわ」

「うーん……。その二つは出来ないのよね。代わりに、武器を持つと力が増す。何でなのかしらね」

二人してウンウン唸っていても埒があかない。

そういうえば、とリウスが口を開く。

「あと使い魔のルーンには関係してないけれど、ここの言葉を話せるようになってるつてのもあるわね」

それに気付いたのは初めて授業を受けた時、シユヴルーズ先生の授業の時だった。

リウスにはハルケギニアの文字を全く読むことができず、逆にルイズにはリウスの世界の文字を読むことが出来なかったのだ。

しかし、会話による意思疎通は行なうことができている。

とはいえ、召喚された直後から会話できていたことから、会話が行えるのは使い魔として召喚されたことが原因だと考えられた。

ちなみに、今リウスが座っているテーブルには数冊の本が置かれている。

物は試しとルイズが図書館から童話本を持ってきてくれたのだが、リウスにはちんぷんかんぷんだった。

「字は読めないのよね。リウスはこの事を色々調べたいんでしょ？ 字なら教えるわよ」

ルイズの座学は学年でもトップクラスである。

ルイズは胸を張って得意げな顔をしていた。

「うーん、勉強かあ。本を読むのは好きなんですけど、そういうのは苦手なのよね。確かにこの文字は覚えなくちゃいけないんだけどさ……、やっぱり気乗りはしないわね」
リウスは苦虫を噛み潰したような顔をして頬杖をついた。

「ちよつと、あなた学者でしように。勉強が苦手ってどういうことよ」

「私は感覚派なのよ。魔法は頑張つて覚えただけど、いくつになつても苦手なものは苦手だわ。」

魔法を撃つ時の感覚も、こう何ていうか、ボワツとしてるのをこうシューツて伸ばしていつて、グルグル回して塊にするって感じだし」

身振り手振りを交えてリウスが説明するも、ルイズには何のヒントにもならなかったようだ。

「そんなんでよく学者になれたわね」

ルイズがじとりと不信の目をリウスへ向けた。

アカデミーという研究施設にいる自分の姉とはエライ違いである。

「もちろん提出する論文とか書類はちゃんとしてたわよ。……やっぱり苦手だったけど」

リウスはふてくされたような声でそう付け加えると、大きく伸びをした。

ルイズも座っていた椅子にもたれかかると、口を手で押さえながら欠伸をする。

「とりあえず、文字なら明日からでも教えるわよ。適当な本を持ってきておくわね。

あーなんか眠くなってきたわ」

いつの間にか随分長く話し込んでいたようで、外はすっかり暗くなっていた。

最初は会話に参加していたデルフも、今ではすっかり鞆に収まっておとなしくしてい

る。

「じゃあルイズ。遅くなっちゃったけどお風呂に行こうか。私も今日はなんか疲れ

ちゃったわ」

学院には貴族用の浴場と、平民用のサウナの二つの風呂がある。

当初、リウスはサウナ風呂の方を使っていたが、ルイズの計らいにより貴族用の浴場

も使うことができた。

リウスが東方のメイジだということは既に知れ渡っていたため、周りの貴族からも特

に文句は言われていない。

ただリウスが浴場に入ると、何人かの貴族の女の子がリウスを見てきやあきやあ騒いでいたりする。

あれは一体何なんだろう、とりウスはいつも思っていたが、害は無いので放つておいている。

「そうねえ、そうしましょう。このままじゃお風呂も入らずに寝ちゃうわ」

ルイズは既に少し寝ているかのような目をしていた。

よっぽど眠かったのかもしれない。既にいつもルイズが寝る時刻に近くなっている。

そうしてルイズが風呂へ向かう準備をしている時、カタカタという小さな音が鳴っているのにリウスは気が付いた。

音の鳴っている場所を見ると、窓が少し揺れているようだ。

風でも出てきたのかな、と外の暗闇を覗いたリウスは思わず声を出した。

その声を聞いたルイズも、リウスの横に立って外を覗きこむ。

そこには、塔ほどの大きさがある人間のようなシルエツトがあった。

その大きな影は森へ向かって音も無く悠然と歩いていき、そのまま暗闇の中へと溶けて消えていったのだった。

第十二話 盜賊はどこへ？

翌日、学院は蜂の巣をつついたような大騒ぎになっていた。

堅牢な城壁を突破した盜賊が、幾人ものメイジがいるこの学院から秘宝を奪い去っていったらしい。

緊急会議が招集されて宝物庫に集まった教師たちは、宝物庫に開けられた大穴を見て、信じられない物を見たというように啞然としていた。

その後は慌てふためいたり憤慨したりと、今更のように大騒ぎしている。

オールド・オスマンも眉をひそめながら、無残に破壊された床の隠し扉を確認していた。

どうやら宝物庫の端にある茶色い棚の下に、盗まれた秘宝を隠していたようだ。

床下に隠された扉はまるで腐食したかのようにボロボロになっている。

宝物庫の扉近くにいたルイズとリウスは、そんな教師たちの様子を見守っていた。

昨日の夜に見た巨大な人影をコルベールへ報告した際、教師達への詳しい報告も含めて宝物庫に立ち会って検分するようにと連れてこられたのだった。

「この宝物庫の大穴。巨大な人影というのはゴーレムに違いありません。『土くれ』の

フーケでしようか」

「『土くれ』のフーケだと……。ええい！ 下賤な盗賊風情が、魔法学院にまで手を出すとは！ 我々をナメくさりおつて！」

「衛兵は何をしていたのだ！ むぎむぎと賊に入られるとは！」

「いや、相手はメイジだ。衛兵ごときではどうにもなるまい。それよりも、当直の教師だ！」

「そうだ、当直の教師は……。確か、ミセス・シユヴルーズ。貴方だったのではありませんかな？」

「どうやら教師たちは、秘法の奪還や犯人の捕縛よりも責任の所在ばかり追求しているようだ。」

その矛先を向けられたシユヴルーズは顔を青くしたまま震えあがった。

シユヴルーズは多くのメイジがいる学院が襲われる訳がないと考え、宝物庫が破られた時間は自室でぐつぐつと寝ていたのだった。

ただ、それはたまたま昨夜の当直が彼女であったというだけである。

学生ばかりとはいっても、ここはメイジが数多くいる場所なのだ。

教師たちは、そんな場所に賊など来るはずがない、そもそも貴族である自分が居心地の悪い窮屈な詰所にいる必要などない、と日頃から当直をサボっていたのだった。

オールド・オスマンがそういつた日頃からの教師の態度を指摘すると、教師たちは皆きまり悪そうに押し黙った。

「つまり、そういうことじゃ。責任の所在など追及しておつても埒が明かん。わしも含めて、油断しておつた皆の責任だとしか言えぬからのう。それよりも、今話し合うべきは犯人をいかにして捕え、奪われた秘法を取り返すかじゃよ」

教師たちは真剣な顔をして頷き、オスマンの次の言葉を待った。

窮地を救われたシュヴルーズは感激のあまりオスマンへ抱きついていたが、当のオスマンはやんわりとそれを引きはがしつつ、ルイズへと目を向ける。

「ではまず、昨夜ゴーレムらしき物を見たという者に話を聞こう。ミス・ヴァリエール、話を聞かせてもらえるかのう」

「は、はい」

ルイズは緊張した面持ちで一步前へ出る。リウスはルイズの後ろでおとなしくしていた。

「目撃したのは私と、私の使い魔のリウスです。目撃したといつてもほんの少しだけです。……まず、窓がかすかに震えているのをリウスが見つけました」

「サイレントの呪文じやの。サイレントで音を消しても、空気の震えは止められぬからのう」

「はい。私たちが見たのはゴーレムが立ち去る瞬間でしたが、音は全くしていませんでした。巨大なゴーレムはあちらの方、森の方角へと歩いて行きましたが、途中から暗闇に紛れて見えなくなりました。私たちが見ていたのは、それだけです」

ルイズが壁の大穴から見える森に向かって指を差した。
そこには確かに一部の木々が倒れた跡と、こんもりとした土の塊があった。

「ありがとう、ミス・ヴァリエール。盗賊はあそこでゴーレムを崩して逃げて行った訳じゃな。他に、何か気になる点はあったかの？」

「いえ、真つ暗だったので私には何とも……。私の使い魔のリウスも、暗くてよく見えなかったと言っていました」

「そうか。ふむ、犯人を捕らえるのには手がかりが足りぬの。……。後は、ミス・ロングビルの調査を待つしかないか」

オスマンは思案気に髭をなでながら呟いた。
昨夜のことである。

彼の秘書であるミス・ロングビルは事態を把握すると、夜も明けきらぬ内からこの事件についての聞き込み調査へと向かっていたのだった。

近隣の農家を手当たり次第に当たってくる、ということだ。
オスマンが呟くのとほぼ同時に、ミス・ロングビルが帰ってきた。

「ただいま戻りましたわ」

「おお、ミス・ロングビル。ちやうど良いところに戻ってきたのう。思つたよりも早かつたが、調査はもう済んだのかね？」

「いえ。まだ途中だったのですが、気になる情報があつたのです。そのため、早急にお知らせしようと調査を切り上げて戻ってきたのですわ」

皆がロングビルに注目する中、彼女はその情報について簡潔に説明する。

何でも、ここ最近、近くの森の廃屋に怪しげな人物が出入りしていたのを目撃していた農民がいたとのこと。

農民は森で山菜を集めていたらしいのだが、その怪しげな人物はまるで人目に避けるかようにローブを着込んで顔や姿を隠しており、頻繁にその廃屋へ荷物を運び入れたり、逆に持ち出したりしていたそうだ。

その荷物の中には、大きめの絵画や装飾品が見えたこともあつたという。

「まだ断定はできませんが、仮にその不審人物がフーケだとすると、件の廃屋へと盗品を隠していたのかもしれない。そうなのであれば、盗まれた秘宝もそこに運び込まれた可能性が高いと思いますわ」

「ふむ……なるほどの。よくやってくれた、ミス・ロングビル」

確かに、その人物は不審である。

フーケの可能性は充分にあるし、フーケでなかったとしても別の犯罪者なのかもしれない。

オスマンは目を細めて、ロングビルに尋ねる。

「その場所は近いのかね？　君か、もしくは話を聞いた農民に、その廃屋へ案内してもらうことはできるかの？」

「はい。馬を飛ばせば2、3時間ほどで到着できる距離です。場所は聞いておきましたので、私が案内できます」

「よし、それだけ分かれば十分に調査できますぞ！　学院長、すぐに王室へ報告しましょう。その場所へ衛士隊を差し向けてもらわなければ！」

オスマンはそう提案したコルベールに顔を向けると、目を剥いて一喝した。

「馬鹿者！　王室なぞに報告して決定を待つておつては時間がかかりすぎるわ！　捕らえられるものも捕えられぬじやろうが！　仮に助力を仰ぐにせよ、その場所が犯人の隠れ家なのかも分からん。助力など論外じや！」

「……そもそも、これは魔法学院の問題じやろう。身に降りかかる火の粉も払えずに王室へと問題を丸投げしておるようでは、貴族としての面目が立たぬではないか！」

普段の好々爺とした姿からは想像もつかないような迫力と威厳だった。

コルベールに同調しようとしていた教師たちも困ったように顔を見合わせたり、恥ず

かしそうに俯いたりしている。

「・・・何度も言うようじゃが、これは魔法学院の問題じゃ。そのため、今から調査に赴く有志を募ろうと思う。我こそはと思うものは、杖を掲げよ」

しかし、しばらく待つも誰も杖を掲げない。

気まずい沈黙が宝物庫に漂う。

その様子に、ルイズがすつと杖を掲げた。その光景にその場にいた誰もが驚いた顔をする。

「ミス・ヴァリエール！ 何をしているのです、貴方は生徒ではないですか！ ここは教師に任せなさい！」

「でも、誰も杖を掲げないじゃないですか！」

ルイズが声を上げると、その言葉に教師たちは顔をしかめて口を閉ざした。

彼らは、教師である自分が危険な盗賊であるフーケと戦うなんて有り得ない、と思っていたのだった。

そしてルイズが杖を掲げた後でも、彼らはざわざわと教師同士で話し合うだけである。

その様子にオスマンが呆れていると、宝物庫の扉が開いた。扉の外にいた衛兵が困った表情を浮かべている。

「私も一緒に向かいますわ」

入ってきた人物、キュルケが杖を掲げてそう宣言した。

その後ろから姿を現したタバサ、ギーシユも同様に杖を掲げる。

どうやら、今までの話を扉の前で盗み聞いていたようだ。

「貴方たちまで何をやっているのです！」

シユヴルーズが声を上げると、キュルケは赤髪をかきあげた。

「ヴァリエールには負けていられませんもの。でもタバサ、あなたはいいのよ。関係ないんだから」

そう言われたタバサはキュルケを見上げると、「・・・心配」と一言呟いた。

その様子に感激した様子のキュルケはタバサに抱きついてお礼を言っている。

その横に立つギーシユの杖はかすかに震えていたが、ますます真剣な顔をしたかと思うと口を開いた。

「わ、私、ギーシユ・ド・グラモンも志願させていただきます！ 少しでも彼女らの身の安全を守るように！」

一方でリウスはその様子を黙って見ていたのだが、正直な所このメンバーでは危険だと考えていた。

犯人が『土くれ』のフーケとやらであった場合、相手は熟練のメイジとなるかもしれ

ない。

戦いの経験があるならともかく、半人前の学生を現地向かわせるなどもつての外である。

教師たちからも「何を馬鹿な」「危険すぎる」という声上がるが、彼らの誰も杖を掲げる様子はない。

それを見たオスマンが教師らに向かつて重々しく口を開いた。

「では何故、彼らよりも先に杖を掲げなかったのだね？　そして、今になつても何故杖を掲げないのだ？」

教師らがぐつと押し黙ると、オスマンは更に続けた。

「その様子では、今さら杖を上げられてもいささか頼りないのう。それに我々は皆、犯罪者の捕縛などに関して専門外じゃ。このような状況では教師も生徒もさして変わらぬ。」

それに彼らは並のメイジではない。勝手に盗み聞いていたことは、褒められたことじゃないがの」

オスマンはルイズ達に向き直ると、その深い瞳をタバサに向けた。

「まず、ミス・タバサは若くしてシユヴァリエの称号を持つ騎士だと聞いておる」

その言葉に、キュルケやルイズ、ギーシュだけでなく、教師たちですら驚いている。

リウスには何のことだかよく分からないが、周りの反応を見るに実力があるということだろうと解釈した。

『シユヴァリエ』の称号は、純粹に自身で行なった偉業に対して与えられるものである。最下級ではあるが、それをこんな年端もいかぬ少女が持つていることに周囲は驚きを隠せないでいた。

「そして、ミス・ツエルプストー。ゲルマニアの優秀な軍人を数多く輩出した家系の出で、彼女自身も優秀なトライアングルのメイジである。

ミスタ・グラモンは元帥である父を持ち、彼もまた高名な軍人を数多く輩出している家系の出じゃ。ドットではあるが、儂はラインに近い力を持つと思っておる。ちと危なっかしいがの。先ほどの宣言を聞くに、十分な働きをしてくれるじゃろうて」

キユルケが自慢げな顔をしている一方、ギーシュは感激した様子でオスマンを見つめていた。

「ミス・ヴァリエールは、かのヴァリエール公爵家の息女であり、将来有望なメイジだと聞いておる。そしてその使い魔は、東方のメイジじゃ」

その言葉を聞いた教師からざわついた声が上がった。

ふと、オスマンはルイズの後ろに立つリウスを見つめる。

「ミス・リウス。儂は学院長としてこの学院に留まらなければならぬ。すまぬが、儂の代

わりにこの子達を守ってくれるかの？」

リウスは自分を見つめるオスマンの目を、じっと見つめ返した。

「どうやらこのメンバーで大丈夫だと本当に思っているようだ。」

「もちろん、私も行かせていただきます。この身に代えてもこの子達を守りましょう」

そのリウスの言葉にオスマンは満足そうに微笑んだ。

教師たちは未だにざわざわと何かを話し合っているようだった。

その中には、「使い魔如きに何が出来るのか」「何故、あんな訳の分からないメイジを頼りにする必要がある」と不平不満を呟いている教師もいるようだが、オスマンがそんな教師たちに鋭い目を向けると、ざわついた教師陣は一様に口をつぐんだ。

「教師の諸君。異論のある者は、前に出たまえ」

しばらく待つて誰も名乗りを上げないのを確認すると、オスマンは再度ルイズ達に向き直った。

「魔法学院は、諸君らの努力と貴族としての義務に期待する」

ルイズ、キュルケ、タバサ、ギーシュの四人は直立すると、杖にかけて誓ってから恭しく一礼する。

リウスは一礼をしただけだったが、彼女たちを守ると胸の内で誓った。

「では、ミス・ロングビル。この子らの案内をよろしく頼む」

「はい、お任せください。ところで、出発の前に一つお伺いしたいことが」

ミス・ロングビルは軽くお辞儀をすると、上目遣いにオスマンを見た。

「秘宝について、詳細を伺ってもよろしいでしょうか。今朝お話しした際には箱だと言われていましたが、その箱には中身が入っているのですか？」

「ふむ……、そうじゃな」

確かに、あの箱が開けられていては秘宝を奪回することなど出来ないだろう。

そう思いつつもオスマンはしばし躊躇ったが、少し考えた後に重々しく口を開いた。

「箱の中身は、本じゃ。二冊入っておるが、一冊は偽物となっておる」

「その、偽物かどうかの区別はつくのでしょうか」

「……いや、儂でなければ分からないじやろうな。二冊とも金の装飾がついておって、読めない字で書かれているはずじゃ」

「かしこまりました。それでは行って参ります」

ロングビルはそう言うのと、ルイズ達を促しつつ宝物庫を後にした。

（クソジジイめ……。用心深いのにも程があるわ）

その道中、ロングビルは胸の内毒づいていた。

（仕方がない、こいつらを人質に使うしかないか）

このミス・ロングビルこそ、魔法学院の『繋がりの秘宝』を盗んだ『土くれ』のフー

ケなのであった。

第十三話 筋書きと、焦りと

秘宝奪回の一行は案内役のロングビルと共に、目的地である廃屋に向かっていた。

魔法は目的地まで温存すべきだということで行は学院の馬車に乗っていた。襲撃が会った時にすぐ動くことが出来るよう、馬車の荷台は屋根が外されている。

なお、タバサの使い魔であるシルフィードは雲近くまで上昇して周囲を監視中だ。

ちなみにキュルケとギーシュの使い魔は学院で留守番である。

キュルケの使い魔は機敏な動きができないため、ギーシュの使い魔であるジャイアントモールでは土系統のメイジであるフーケに接近を気付けられる恐れがあった。

馬車はゴトゴトと音を立ててゆっくり進んでいく。

出発してから一時間、既に暇を持て余していたキュルケが思いついたように口を開いた。

「ミス・ロングビル、何で面倒な案内役なんて自分でかかって出たんですの？」

今現在、ミス・ロングビルは案内役なのだからと馬車の手綱を操っていた。

しかし、そんなことは学院の平民にでも場所を教えて馬車を引かせればいだけである。

キュルケはそう考えて質問すると、ロングビルはにこりと笑って答えた。

「いいのです。わたくしは、貴族の名を無くした者ですから」

キュルケはきよとんとする。

「だって、貴方はオールド・オスマンの秘書なのでしょう？」

「ええ。でもオスマン氏は貴族や平民だということに、あまり拘らないお方です」

「差支えなかつたら、事情をお聞かせ願いたいわ」

キュルケは興味深そうに身を乗り出した。

ロングビルは優しい微笑みを浮かべるだけで、答えようとしなない。

「いいじゃないの。教えてくださいいな」

そんなキュルケの肩をルイズが掴んだ。

「なによ、ヴァリエール」

「よしなさいよ。昔のことを根掘り葉掘り聞くなんて」

ルイズの夢を思い出したのか、ルイズは若干険しい顔で言った。

ルイズはその様子を微笑ましそうに眺めている。

「暇だからお喋りしようと思っただけじゃないの」

「あなたのお国じゃどうか知りませんが、聞かれたくないことを無理やり聞き出そうとするのは、トリステインじゃ恥ずべきことなの」

二人はいつものように火花を散らし始めた。

タバサはというと、相変わらず読書にふけている。

ギーシユは出発当初から気を張り過ぎていたようで、少し疲れた顔をしながら大きな欠伸をしていた。

「いい天気ねえ」

眩しい光に目を細めたりウスは馬を引くロングビルをちらつと見てから、ごそごそと持ってきた道具の確認を始めるのだった。

「こんなところにフーケがいるの?」

「ええ、わたくしの調査によれば」

一行は茂みの中から目的の廃屋を観察していた。

周囲は鬱蒼と茂った森になっていて、日中にも関わらず薄暗い。

目の前の広場は直径50メートル程もあり、その広場の中央には朽ち果てた廃屋がひっそりと立っているだけだ。

「ここからじゃ中が分からないわね・・・」

キュルケがぼつりと口にする、一行は目を見合わせた。

確かに、ここで見ていても仕方がない。

ロングビルの情報が正しければ廃屋の中に秘宝があるはずだが、もしかしたらフーケも一緒にいるかもしれない。

「誰かに偵察をしてもらう必要がありますね」

ロングビルがキュルケの言葉に継いで発言をする。

ロングビル、『土くれ』のフーケは内心舌舐めずりをしながら、頭の中で次の手を思い返していた。

ここから彼らを人質に取るために、自分に有利な状況を作っていく必要がある。

偵察の候補としては、風竜を使い魔とするタバサか、ヴァリエールの使い魔であるリウスのどちらかだろう。

今現在、タバサの使い魔である風竜がはるか上空から周囲を監視している。

いざとなれば秘宝だけでも回収し、風竜に乗ってこの場を脱出する、と事前の打ち合わせで決めているのだ。

フーケに悟られないようにと風竜には相当高い所で飛んでもらっているため、生徒達が逃げるまでには若干の猶予がある。

そしてタバサと他のメンバーを分断しておきさえすれば、彼らの逃げの手を更に遅らせることができるだろう。

初手の人質確保が失敗した上に、何も出来ずに逃げられてしまうという事態は防ぐことができる。

もう一人の候補、使い魔のリウスはこの中で一番の脅威として考えるべき存在だ。

流石に全力の巨大ゴーレムであれば何も出来ないだろうが、以前の決闘騒ぎを見る限りではほぼ無詠唱で強力な魔法を繰り返してくる。

万が一自分の存在が悟られた場合には、避ける間もなく攻撃を受けてしまうかもしれない。

そう考えると、出来る限り自分とは離れた場所にいてもらいたいのが正直なところであつた。

だが、万が一を気にしては意味がない。

ここは逃げの手を潰しておく意味でもタバサを選ぶべきだ。

「ミス・タバサは風のトライアングルでしたよね。偵察にはうつつけだと思つたのですが、どうでしょうか？」

それとなくロングビルが提案する。

一行はその提案に納得したようで、タバサが偵察へと向かうことになった。

「では、その間に私は周囲の森を偵察してきます。風竜では見えない場所にフーケがいる可能性もありますので、一か所に集まっていますは危険でしょう。もしフーケを発見

し、捕縛が無理だと悟った場合には、森の入り口に停めてある馬で脱出しますのでご安心を」

頷く一行を更に誘導するため、続けてロングビルが発言する。

「ミスタ・グラモン、貴方も馬には乗れますよね。わたくしと一緒に来ていただけますか？」

タバサが廃屋への偵察に向かうのなら、残る標的は、キュルケ、ルイズ、ギーシュである。

キュルケは火のトライアングルメイジであり、ルイズには使い魔が付いている。

そのため、ロングビルは最も御しやすそうなギーシュを人質として選択した。

「貴方もわたくしも土のメイジです。フーケも土のメイジなので、私達であればフーケにも対抗しやすいかと思うのですが」

ロングビルがもつともらしい説明を加えると、ギーシュは口元をきつと結んだ。

「分かりました。一緒に向かいましょう」

ロングビルはギーシュへ優しく微笑む。

しかし、その内心では彼らを嘲笑っていた。

よし、これで問題は無い。

タバサの偵察中に、広場へ巨大なゴーレムを作り出す。そのままタバサに対してゴー

レムで二、三の攻撃を加える。

その後、一行の目がゴーレムに向けたことを確認してから、ゴーレムを自動操縦にしつつギーシュを捕らえるのだ。

そして、秘宝奪回の冒険はミス・ロングビルとギーシュが捕えられるという最悪の結果で終わる。

本物の秘宝を引き換えにギーシュは返されるが、最終的にミス・ロングビルは人質のままどこかへ消えてしまう。

そして、本物の『繋がりの秘宝』は戻ってこない。

(この件で、あのジジイは罪に問われちまうかもしれないねえ)

ロングビルは胸の内ではくそ笑んでいた。

人の胸や尻をさんざん触りやがって。当然の報いだ。

しかしそんなロングビルの想像とは違い、ルイズの横にいる使い魔が口を出した。

「それなら私が行きましょう。私も土を得意とするメイジなので、ミス・ロングビルが気付けないことにも気付けるかもしれません」

「うーん。そうね、それならリウスが行った方がいいわ。ギーシュよりも強いってことは決闘で証明されてるし」

「適任だと思っ」

キユルケとタバサがリウスの言葉に賛同する。

ギーシユは少しばかり悩んだようだが、確かにそうだと賛成した。

使い魔が離れることが不満なのか、唯一ルイズだけが反対している。

そして、ロングビルもこの発言には賛同せざるを得ない。

今や、あの時の決闘を知らない者など学院にはいないのだ。

しかし、こいつが主人の元を離れるとは思わなかった。

『土系統のメイジ』かもしれないのは分かっていたが、決闘の発端を聞く限りだと主人にべったりくっついていいると思っていたのに。

「それでもよろしいのですが．．．失礼ですが、ミス・リウスは馬に乗れるのでしょうか？」

ロングビルは唯一の抵抗としてそう発言するも、先日城下町まで馬を走らせたことをリウスが告げた。

そう言われてしまうと、これ以上反対するのは得策ではない。

（くそつ、使い魔ごときが余計なことを！ せっかく上手く行きそうだったのに！）

ロングビルは一人ごちるが、こうなると予定を変更するほかない。

この使い魔が一緒に付いてくる。

それは、当初想定していたように容易くゴーレムを出す訳にはいかなかったという

ことだ。

ギーシュ相手なら見られずにゴーレムを出すことも出来るし、見られたとしても特に問題なく捕えられただろう。

しかし、この使い魔にゴーレムを出すところを見られでもしたら、一瞬で行動不能にさせられるかもしれない。

まさか、一番近くに置いておきたくない相手と共に行動することになるとは。

もちろん、この事態を想定した策も考えてある。

しかし、そうなるといくつかの危険を伴うのだ。

ロングビルは内心焦りながらも次の段取りを頭の中で思い返す。

そうしている中、ルイズはリウスによる森の搜索についてししぶしぶ納得した様子だった。

「ルイズはここに隠れてて。ギーシュくん、皆を守ってあげてね」

「あらリウス。ツエルプストーの女は自分の身くらい自分で守れましてよ」

ギーシュがリウスの言葉に緊張した顔をして頷き、その様子にキュルケは茶々を入れてる。

ルイズは不貞腐れたように、ぷいと横を向いた。

「話は後。フーケがいたらここに一旦戻る。いなかったら合図を出す。フーケがいた場

合は全員で廃屋を囲んで、ギーシュのゴーレムを突入させる。フーケが出てきたら一斉攻撃。

「じゃあ、私は偵察してくる」

タバサがそう告げると、一行はもう一度顔を引き締めた。

ここからの策は一度たりとも失敗が許されない。

ロングビルは必死に頭を回転させながら、居もしないフーケを警戒しつつ歩を進めるのだった。

「どうやら廃屋にフーケを見つけたようです」

広場が見える茂みに隠れていたロングビルとリウスは顔を見合わせた。

廃屋を覗いていたタバサが、音を立てないようにながら作戦を立てた茂みへと戻っていく。

それを見届けてから、ロングビルとリウスの二人も先ほどの茂みへと向かった。

「フーケが、いたんですか?」

ロングビルが緊張した面持ちで尋ねると、タバサは頷きもせず口を開いた。

「廃屋にあるベッドが人の形に膨らんでいるのを見た。隙間も無くドアも窓も閉めら

れていたから、風を使って調べることもできない。

もしかしたらフーケかもしれないし、フーケじゃないかもしれないかもしれない。もしくは人じゃないのかもしれない」

沈黙の中、誰かの息を飲む音が聞こえた。

「罨かもしれない、って罨ね」

リウスが顎に手をやりながら呟いた。

タバサがその言葉にこくと頷く。

「フーケの可能性もある訳よね。じゃあさつきタバサが言ってたように、廃屋を取り囲んでギーシュのゴーレムを突入させる、ってのが一番良いんじゃないかしら」

一行がルイズの提案に賛成すると、今度は全員で廃屋へと向かっていく。

廃屋の入り口付近にギーシュ、ルイズ、リウスが陣取り、反対側はタバサ、キュルケ、ロングビルが廃屋の背後を見張っていた。

ギーシュは青銅製のゴーレムを三体作り出すと、その内の一体を廃屋へと突入させた。

次いで二体目も突入させると、ベッドの上の膨らんでいる塊を飛びつくように押さえこむ。

仮にフーケであれば、この時点で勝敗は決したようなものだ。

しかし、ベッドの上にある塊は微動だにしない。

様子がおかしいとギーシユはゴーレムに命じて、ベッドの布団をめぐらせた。

そこには、岩で出来た人形が転がっているだけだった。

「つまり、畏って訳ね……」

ルイズはそう呟くと、辺りを警戒するようにきよろきよろとし始めた。

ギーシユのゴーレムは事前の取り決め通り、廃屋の中の椅子や棚を動かしている。

しかし、物を動かすことで動き出す畏がある訳でもないらしい。

廃屋の向こう側にいた三人にこちらへ来るよう手招きすると、三人は恐る恐る小屋へと近付いてきた。

「フーケはいたの?」

「いや、ベッドの上にあったのは岩でできた人形だったんだ」

「畏なのか、保険なのか。何か思惑があるはず」

一行は部屋の中を覗き込んだ。

そこには汚く散らかった跡があるのみで、特に怪しいものはない。

「じゃあ、わたくしとミス・ツエルプストー、ミス・タバサは、森も含めて周囲を警戒しています」

「いえ、三人とも散らばらないで近くにいた方がいいです。小屋の入り口からちよつと

離れた場所で、周りを見張っててください。互いの位置も確認し続けるように」
ロングビルの提案にリウスが反論する。

それを聞いたロングビルは少し背中に冷や汗をかいていた。

(こいつ、まさか勘付いてるんじゃないだろうね)

ロングビルはそう思いながらも、リウスの発言通りに行動する。

しかしその頭の中では、次の手までは焦ってはいけない、と何度も自分に言い聞かせていた。

ルイズ達は廃屋の搜索を入念に行なっていた。

リウスはカビ臭い部屋の中で秘宝を探しつつ、頭の中では別のことを考えていた。

ロングビルが考えている通り、リウスはロングビルを疑っていたのである。

宝物庫がゴーレムに突破されて秘宝を盗まれた。

それだけなら納得できるのだが、問題はその秘宝の隠し場所にある。

あんな分かりにくい場所にある秘宝をいとも容易く見つけ出した理由は何か。

それは隠し場所を知っていたからだと考えられるのだった。

ただでさえ、あんなに巨大なゴーレムを使っているのだ。

下手をしたらあつという間に発見されてもおおかしくはないだろう。

そもそもメイジが多くいる学院に侵入するのだから、事前に秘宝の場所を調査していない訳がない。

あの時間よりもっと早い時点から宝物庫に侵入していた可能性も無くはないが、宝物庫の錠前は破壊されていなかった。

そして、極め付けはあの穴である。

あの壁の瓦礫には秘宝のあった隠し扉と同じような、まるで腐食させられたかのようなわずかな跡が残っていたのだった。

つまり、宝物庫に何度も足を運ぶことのでき、その行動を怪しまれない人間が事前に細工していたということだ。

要は、学院の内部に犯人に近しい人物がいると当たりを付けたのだった。

また、奪われた秘宝は読めない本である。

他の物は盗まれていないのだから、元々その本を狙っていたのだろう。

売れるかどうかも分からないそんなものを狙う理由は、たぶん何者かに依頼されたのだと考えられた。

しかし犯人がいざ盗んでみると、箱からは二冊の本が出てきた。

『もし私が犯人ならば』、せっかく盗んだお宝のどっちが本物なのか、危険を冒しても知りたくなる。

宝物庫に足を運べる人物、つまり学院での地位が確立されている人間。そして、凶つたかのようなロングビルの情報。

しかもその情報は、凄腕の盗賊にあるまじきアジトの場所についてだった。

そう考えると、ロングビルが犯人に近い人物であることが予想できたのである。

とはいえ、それはあくまで今リウスが知っている情報での仮説だった。

犯人が偶然隠し扉を見つけたから盗み出した可能性もあるし、そもそも犯人がどこから隠し扉の場所を知り得た可能性もある。

犯人が単に農民に目撃されるマヌケである可能性もあるのだ。

なので、念のためにロングビルの動向には注意しておく必要があると、リウスはそう考えていたのだった。

一つ気がかりだったのは、その考えを他のメンバーには伝えられていないことである。

ロングビルを監視するには、常にロングビルの近くにいななければならないかった。

そのため筆談をしようにも、ロングビルに気付かれないようにしながら他のメンバーへ自分の考えを伝えるタイミングがなかなか無かったのだ。

「もしかして、これじゃない?」

思索にふけっていたリウスが振り向くと、ルイズが二冊の本を抱えていた。

ルイズの声が聞こえたのか、タバサやキュルケも入り口近くまで歩いてきている。そんなキュルケとタバサの様子にも気付かずに、リウスはその本を見て目を見開いた。

「それって……」

「きゃあああああああああああああああ!!!」

不意に聞こえたロングビルの叫び声に、リウスは後ろを振り向いた。

窓の外には巨大な影がある。

急いでリウス達が廃屋の外に出ると、巨大なゴーレムの腕に掴まれたロングビルが悲鳴を上げていた。

「た、助けてくださいあああ……」

力なく叫ぶも届かず、ロングビルはそのまま巨大ゴーレムに思いきり投げられてしまい、廃屋の向こう側にある森の中へと落ちていった。

「リ、リウス」

「お、大きすぎる……」

ルイズとギーシュが呆気に取られたように呟いた。

小屋から少し離れた場所では、キュルケが火の玉、タバサは氷の槍でゴーレムを攻撃しているが、いかにせん大きすぎるために効果が薄いようだ。

「ルイズ！ その本を持って離れてなさい！ ギーシユくん！ ルイズを頼んだわよ！」

「リウス！ 私も一緒に・・・」

「何言ってるの！ いいから離れてなさい！」

そう叫んだリウスは腰につけていた短剣、バゼラルドを引き抜くと、脱出の隙を作るために巨大ゴーレムへと駆けだしたのだった。

第十四話 vs フーケ

三十メートル程の巨大なゴーレムがキュルケとタバサを見下ろしていた。

ロングビルを放り投げた後、何故か動きを止めていたゴーレムがゆつくりと腕を上げていく。

次の瞬間、目にも止まらぬ速さでその腕を振り下ろした。

振り抜かれた腕は轟音と共に地面に深々と突き刺さり、辺りがもうもうと土煙に包まれていく。

リウスは土で作られたゴーレムを見上げ、ひとり歯噛みした。

ゴーレムが既に作られてしまつては、もう破壊する他ない。

リウスには、ハルケギニアのメイジに対して非常に効果的な魔法がいくつかある。

『デイスペル』という魔法もその一つで、この魔法は構築・固定化された魔力を強制的に分解する魔法だった。

供給が見込めない今、貴重品である魔法石の触媒は必要だが、どんなに強力な魔法であっても維持が不可能なレベルまで魔力を霧散させることができる。

しかし魔力によって物質を形作られてしまうと、デイスペルの効果が魔力そのものに

まで届かなくなってしまう。

デイスペルは、宙に漂う魔力を利用することで『対象の魔力を分解する』魔法なのだ。ゴーレム生成の初期段階ならともかく、既に岩でゴーレムを形作られてしまうとその内部にまではデイスペルも届かなくなってしまう。

ともあれ何者かにゴーレムを作られてしまった以上、仕方がない。

キュルケとタバサの安否を確認する隙を作るため、リウスは急いで魔法の詠唱を開始した。

「アーススパイクー」

地面から突如生えた五本の石柱が、地面に刺さっていた腕を粉々に破壊する。

すると、土煙の中から二人の人影が見えた。

「二人とも、無事ね」

リウスはほっと息を吐く。

彼女たちは先ほどの攻撃を上手く避けたようだ。

キュルケはリウスの顔を見るなり、険しい顔のまま笑いかけた。

タバサは表情を変えないままでゴーレムの挙動を見つめている。

「やっぱり貴方の魔法は凄い威力ね。私達の魔法じゃちよつとしか効いてないみたいだわ」

「強度はそこまでじゃない。だけど大きすぎるし、修復してる。逃げた方がいい」

見ると、先ほど破壊した巨大ゴーレムの腕がまるで巻き戻るかのように修復されていく。

「打ち合わせ通り、シルフィードで脱出しましょう。秘宝はルイズが持つてるから早く……」

避けてっ!!」

リウスがキュルケを突き飛ばすと、巨大ゴーレムの胸から撃ち出された石の塊がキュルケのいた場所に突き刺さった。

続いて飛来する石の弾丸は、タバサが風を操って軌道を逸らす。

突き飛ばした時に飛来した石がリウスの左脚を少しかすったようで、少しばかり肉が抉れて血が流れていた。

「あ、ありがとうリウス。助かったわ。足は平気?」

「平気よ。そこまで深くない」

キュルケは少し顔を青くしながら、それでも負けじと目の前のゴーレムを睨み付けた。

「行かせない、って訳ね」

またゴーレムの胸から岩が弾き出された。

タバサが一瞬強い横風を吹かせると、岩は数メートル横の地面をバウンドしていく。「聞いて」

タバサが目の前ゴーレムから目を離さずに口を開いた。

「あのゴーレムは、リウスと私で足止めする。そうしないとシルフィードが狙われかねない。キュルケはルイズとギーシュの所に」

巨大ゴーレムは修復し終わった右腕を自らもぎ取ると、残る左手でもぎ取った腕を思いつきりぶん投げた。

「伏せて！」

タバサの叫びに合わせて、三人ともその場に伏せる。

頭上を通り過ぎた巨大な岩の塊が、背後の廃屋を吹き飛ばした音がした。

「キュルケ、行って！」

リウスのその言葉に振り向いたキュルケは、駆け出そうとした足をふと止めた。

「・・・嘘でしょ。何で、あそこから」

キュルケの呟きにリウスも一瞬だけ振り返った。

そこには、ルイズとギーシュの元へ向かう五体の人型ゴーレムの姿があった。

「くそっ！ 何でこっちからゴーレムが！」

出来る限りあの巨大ゴーレムから離れようとしていたギーシュが、焦ったように叫んだ。

廃屋の斜め後方にある森から五体の人型ゴーレムが姿を現したのだ。

それぞれが黒光りする光沢をしているため、相手のゴーレムは鉄製かもしれない。

もしそうだとしたら、同じくらいの大きさといえども青銅で出来た自分のワルキューレでは防ぐことができない。

「ルイズ、僕の後ろに！ ワルキューレ！」

ギーシュは既に作っていた三体のワルキューレに加えて、更に四体のワルキューレを作り出した。

七体のワルキューレ達はいつかの時とは違い、それぞれ武器と盾を携えている。

ワルキューレ達が密集隊形で隊列を組むと、鉄製の人型ゴーレム達がこちらへ向かって走り出した。

ルイズは自分の体がいっつの間にか震えているのを感じていた。

周りの音が遠ざかり、なぜか自分の心臓の音だけがやけに大きい。

ルイズは助けを求めるような目で巨大ゴーレムの方を見た。

そこではリウスとタバサが巨大ゴーレムの撃ち出す岩を避けつつ攻撃を加えている。

そしてキュルケは何かこちらへ向かおうとしているが、なかなか向かうことが出来

ないでいるようだ。

目の前のギーシュがこちらへと何か叫んでいるが、ルイズには何を言っているのかよく分からない。

気付けば鉄製のゴーレムを一体破壊したようだが、ワルキューレはもう三体ほど破壊されていた。

「……ズ！ ルイズ、しっかりとしろ！ もう持ち堪えられない！ フーケの狙いは君の持つてる秘宝だ！ 逃げろ！」

その言葉にルイズはハッと我に返るが、脚が動かなかった。

鉄製のゴーレムは残り三体になっていたが、ついにワルキューレは一体となり、最後のワルキューレも鉄のゴーレムの持つているメイスでばらばらに破壊された。

邪魔者を片付けた三体の鉄製ゴーレムがルイズとギーシュの元へ走ってくる。

向かってくるゴーレムにギーシュはおろおろと動揺していたが、ルイズはキツとそのゴーレム達を睨み付けた。

「私は、貴族……。そうよ、私は貴族よ！ お前になんか、背を向けるもんですか！」
ルイズはそう叫ぶと、思いつき杖を振った。

一番先頭にいた鉄のゴーレムが特大の爆発に巻き込まれてバラバラになる。

残る二体の鉄製ゴーレムも吹き飛ばされていたが、破壊はできていない。

すぐさま立ち上がった二体のゴーレムは鉄の剣を構え直すと、そのままスピードを上げてルイズへと突っ込んでくる。

ギーシュは驚いたようにルイズを見ていたが、次の瞬間には歯を食いしばり、何とかゴーレム達を止めようと自ら突進する。

だが、その甲斐もなく大きく突き飛ばされてしまった。

地面を転がるギーシュを尻目に、ルイズはもう一度呪文を唱えるため何とか後ずさるうと足を動かす。

しかしそれを阻止しようと、ゴーレム達はルイズの足へ向けてその鉄の剣を薙ぎ払った。

「そろそろ、シルフィードが来る」

タバサは普段よりかなり大きめの声でそう告げた。

タバサが飛来する岩の塊を風で逸らし、リウスの持つ魔法で最も破壊力の高い『アーススパイク』の最大レベルを用いて巨大ゴーレムの体を吹き飛ばす。

それを五回ほど繰り返したところで、巨大ゴーレムは修復が追い付かなくなってきたようだ。

この巨大ゴーレムはキュルケを目標に切り替えている。

キュルケが背を向けてルイズ達の方向へ向かおうとすると、風で軌道を変えられないように自身の体をもぎ取っては投げつけてくるのだ。

そのせいで、キュルケはなかなかルイズの元に駆けつけられていない。

すると、突然巨大ゴーレムが頭から順にぐしやぐしやと崩れ落ちていった。

急な出来事にそこにいた全員が一瞬呆けたようになるが、次の瞬間には三人ともルイズ達の方向へ振り向いた。

既に、ギーシユのワルキューレはいなくなっていた。

ルイズの魔法が当たったのか、巨大な爆発によつて一体のゴーレムが粉々に吹き飛ばされる。

しかし残る二体の人型ゴーレムが体を起こして、二人の元へと向かい始めていた。

リウス達三人が一斉にルイズ達の元へと走り始めた時、リウスは頭の奥で何かが弾ける音が聞こえた気がした。

胸の奥が熱くなると同時に、気が昂ぶり、体に力が満ちていく。

足に力を溜めて駆け出すと、まるで自分が風になったかのようにだ。

― 担い手を守れ。なんとしても。

頭の中で声が聞こえた気がしたが、そんなことに気を止めている場合ではない。

リウスは胸の奥から湧き上がる怒りの感情に身を任せながら、ルイズの元へと駆けて

いく。

一瞬で、前を走るタバサとキュルケを追い抜いた。

(ふざけるな！ こんなところで、こんな場所で、あの子を殺させるか！)

リウスは誰に言うでもなく心の中で叫んだ。

ルイズの目前に迫るゴーレム達は、後ろへ下がろうとするルイズの足に向けて剣を振りかぶっている。

リウスは手に持ったバゼラルドを投げ捨て、勢いよくカウンターダガーを引き抜いた。

残りの距離は、10メートルもない。

(大丈夫、間に合う！ 大丈夫よルイズ！ もう二度とあんなことにはならない！ なるはずがない！)

そう確信したリウスはその勢いのまま右手でルイズを突き飛ばし、残る左手に持つ短剣で手前のゴーレムの腕や首を切り裂いていく。

(よし！ これで、あともう一体を！)

そう思った時、リウスは自身の右足に、冷たい剣が食い込んでいくのを感じたのだった。

ルイズは何者かに突き飛ばされた後、近くに誰かが倒れ込む音を聞いていた。「痛……。な、何が……。？」

ルイズが痛む体を起こそうとしていると、近くでゴーレムの動く音がした。

そして何かの地響きと共に、ギーシュの短い悲鳴が聞こえてくる。

はつとしたルイズは両足ともさほどの痛みが無いことに気付いた。

確かに足を切られたと思ったが……。

するとすぐ近くから肉を突き刺すような音と、苦悶に満ちた呻き声が聞こえてきた。

この声は、リウスの声だ。

「やっただわ。やっど、捕まえた」

聞いたことのある声を耳にしながら、ルイズはようやくその身を起こした。

ルイズの視界には、左腕と右足が血に塗れて横たわっているリウスと、岩の手で捕え

られているギーシュの姿が映されていた。

そして、リウスをその足で押さえつけている鉄のゴーレムと、冷たい笑みを浮かべて

いる擦り傷だらけのミス・ロングビルが。

「ミス……。ロングビル……。？」

ルイズが呟くと、ロングビルはルイズの顔を見てにやつと笑った。

「ヴァリエール、アンタの使い魔は本当に厄介だったわ。本当、殺したいくらい」

そう言うのと、ロングビルはリウスへ顔を戻す。

すると、鉄のゴーレムが血に塗れた剣を高く掲げた。

剣の切っ先は倒れ伏すリウスへと向けられている。

リウスは激痛に顔を歪めながらも地面に転がる短剣へ手を伸ばそうとするが、鉄のゴーレムに身体を押さえつけられているため身動きが取れないようだ。

「動くな、ヴァリエールの使い魔。あと、今後口を開くんじやないよ。グラモンのガキがどうなったっていいってのかい？」

リウスはぐつと歯を食いしばり、ロングビルを睨み付けている。

「え．．．、何で．．．」

ルイズはあまりの状況に言葉を失った。

まさか、まさかこの人が、フーケか。

「や、やめて。秘宝は私が持つてるから。これは返すから。だから、やめて。お願い」
弱々しく訴えるルイズにロングビルが顔を向ける。

「じゃあ、秘宝と杖をこっちに投げな」

ルイズは抱えていた二冊の本と自分の杖をロングビルの足元に放り投げる。

その金色に光る装飾の本は、間違いなく盗み出した『繋がりの秘宝』だった。

ロングビルは秘宝の本を一瞥すると、足元に転がる秘宝を拾いもせず廃屋のあった

方向を見た。

「タバサとツエルプストー、あんたらもだよ。杖を遠くへ放り投げな。

あとタバサ。風竜に私を襲わせようなんて思わないことだね。拍子にグラモンのガキを握り潰しちまうかもしれないよ」

いつの間にかすぐ近くまで来ていた二人は悔しそうに唇を噛みながら、杖を遠くの方へと放り投げた。

シルフィードもすぐ近くを飛んでいるようだが、一向に近付いてくる様子はない。

ロングビルはにんまりと笑うと、歌うように言葉を吐いた。

「良い子だ。正直に言うからね、あんたらを一人も殺したくはなかったんだ。顔を見られちまった今でもそれは変わってない。グラモンのガキも人質にするだけさ。用事が済んだら、お家に帰してやるよ。」

・・・本当は、使い魔のガキ、てめえも殺さないはずだったんだよ。今は違うけどね」
ロングビルは仰向けに倒れているリウスを睨み付けると、吐き捨てるように言った。

「ヴァリエールの使い魔、お前は危険すぎる。こうしてる間も、どうにかしてグラモンのガキを助けられないか考えてるんだろう？ 呆れた良い子ちゃんだ。今から死ぬってのにさ」

リウスの左腕と右脚からは絶えず血が流れていた。

そのためか呼吸も浅く、顔色も悪くなってきた。
先程まで強張っていた身体からも、力が抜けていた。

その様子を無表情に眺めていたロングビルが軽く杖を振るうと、鉄のゴーレムがリウスに向けて剣を構え直した。

「いやだ、やめて。やめてやめてやめて！」

「やめろ！ その人を殺すな！」

「やめてちょうだい！ お願いやめて！」

ルイズやギーシュ、キュルケが悲痛な叫び声を上げ続ける。

タバサは黙って刺すような目でロングビルを睨み付けていた。

「・・・嫌だね」

眉をしかめたロングビルがそう言い放つ。

すぐさまゴーレムが剣を振り下ろし、肉を突き刺す音と共に、リウスの胸へ鉄の剣が突き立てられた。

「いやあああああああ!!!」

ルイズの悲痛な叫びが辺りにこだました。

リウスの体が小さく仰け反り、その口から短く吐息が漏れる。次の瞬間には、ごぼり、と生々しい音が聞こえてくる。

ギーシユも泣きながら叫び、キュルケは呆然と地面に膝をついた。

タバサは微動だにせず目を見開き、力なく動かないリウスを見続けている。

しばらく、ロングビルはその様子を何の感慨もない顔で眺めていた。

「さて、後はこの本とグラモンのガキを運ぶだけだ。この使い魔は、余計なことをしたからこうなったんだ。あんたらもこれ以上、私を追いかけるんじゃないよ」

子供たちの叫び声が辺りに鳴り響く中、ロングビルは剣を突き立てられたリウスから目を逸らして泣きわめくギーシユを見る。

その時、ガリツという音が聞こえた気がした。

「・・・ソウル、ストライク」

瞬間、ロングビルの目の前にいくつもの光の球が浮かび上がったかと思うと、その光の球がロングビルと鉄のゴーレムに激突した。

大きく吹き飛ばされたロングビルはそのまま地面へと打ち付けられる。

「がはっ！ な、何」

「アーススパイク」

どがん、という音と共にギーシユを掴んでいた岩の手が根元から吹き飛んだ。

先ほどまで泣き叫んでいた子供達も呆然とした顔をしている。

これは。この魔法は。

はつとしたロングビルは剣が刺さったままのリウスを見る。

すると、力無く倒れ伏していた、死にかけていたはずのリウスが、体に刺さった剣の刃を両手で掴んで勢いよく引き抜いていた。

「な、な。ば、化け物……!」

ごぼつ、という音と共に血を吐いたリウスは、鉄の剣を杖にしながらゆつくりと立ち上がった。

みるみる内に、リウスについた全ての傷がふさがっていく。

「死んだかと、思ったわ。イグドラシルの種が無かったら、終わりだったわね」

「ひ、ひいつ!」

『『ファイアーオール』』

ぼうん、という音と共に、森へ逃げようとしたロングビルの目前で身の丈ほどもある巨大な火柱が立った。

「ほ、炎の魔法……!?!」

「今更、逃げようっていう訳?」

振り向くと、ヴァリエールの使い魔がしっかりとした足取りでこちらを睨みつけてい

た。

怪我をしていたはずの左手には既に短剣が握られており、右手の指をこちらへと向けている。

『ナパームビート』

がこん、と左頬に強い衝撃を受けたことにロングビルは気付いたが、そこまです。目の前は真っ暗になり、ロングビルの意識は暗闇の中へと消えていったのだ。

第十五話 遠い家路

ロングビルが横へ倒れるのと同時に、リウスも足から力が抜けたように尻餅をついた。

「リ、リウス！」

リウスは土に塗れていたが、全く気にもせずリウスの元へ駆け寄った。

次いで、キュルケとタバサもリウスの所に走ってくる。

「横になって！ 今すぐ学院に運ぶから！」

「大丈夫、大丈夫よ。少しふらついただけ」

「大丈夫な訳ないでしょ！ 血がこんなに出てるのに！」

リウスがそう叫ぶと、すぐ近くでシルフィードの羽ばたく音が聞こえてきた。

「リウス！ 平気なの!? ああ、どうすればいいの!?!」

「もう、大丈夫だったら」

「いいから喋らないで！ 早く横になりなさい！」

「応急手当が終わったらすぐに学院へ連れて行く。ギーシュはロングビルを捕らえて」

「わ、分かった！」

タバサが指示を出すと、ギーシュはよろよろとふらつきながら自分のマントでロングビルをきつく縛り付けた。

タバサとキュルケはルイズと同様にリウスの顔や傷を覗き込むと、自身の顔を歪ませる。

リウスの身体は正に血だらけだった。

怪我をした左腕と右足だけでなく、胸の傷や口から吐いた血がリウスの首と胸を赤く染めている。

三つ編みがほどけた薄桃色の髪には真っ赤な血がべつとりと付き、地面に広がっている血だまりはその傷の深さを物語っていた。

これで、大丈夫な訳がない。

間に合わないかもしれない。いや、先ほどの傷で間に合うはずがない。

応急手当を始めようとするタバサの額には汗がにじんでいた。

しかし、リウスの胸元を見てはっと驚いた顔をする。

「傷が……、ない……？」

ルイズやキュルケも、リウスの胸にあるはずの傷を覗き込んだ。

剣で刺し貫かれた箇所は血で真っ赤になっていたが、確かに傷らしい傷は見当たらない。

い。

かすかに薄く残る傷跡があるだけだ。

「さつき身体を回復させる薬を使ったのよ。一個しかなかったんだけど、あつて良かった。」

あの状態じゃゴーレムの剣を利用するしかなかったけど、おかげで皆無事みたいね」
リウスがそう言うと、ふいにルイズがリウスの頭を思いつきり平手で叩いた。

キュルケとタバサが驚いてルイズを見ると、ルイズはぼろぼろと泣きながら震えていた。

「馬鹿、馬鹿リウス！ ふざけないで！ 無事じゃないわ！ あなたが無事じゃない！

一人で傷だらけになって、何考えてるのよ！」

「ちよつとルイズ、何やってるの！ 怪我してるのよ!?!」

キュルケが焦ってそう怒鳴ると、ルイズはリウスに抱きついて泣きじやくった。

「嫌いだわ・・・、貴方なんて大嫌い。何でこんなことするのよ・・・。私が泣かなくなるまで、いなくならないうって言ってたじゃない。」

わ、私のせいで、皆が危ない目に合つたのに・・・。私がすぐに逃げなかつたから、こんなことになつちやつて・・・。」

リウスは泣きじやくるルイズの頭をぼんぼんと優しく叩くと、その柔らかな桃色の髪

を撫でた。

「失敗したのは私の方よ。ルイズ、ゴーレムを倒したさっきの魔法、見事だったわ。

ルイズが魔法を使って戦ってくれたから、秘宝も取り戻せて犯人も捕まえられた。貴方の力で全部上手くいったのよ」

ルイズは顔も上げずに、リウスに抱きついたまま泣き続けている。

「皆もおつかれさま。それじゃあ、学院に帰りましょうか」

「それで、体は本当に平気なんでしょうね？」

ルイズがリウスをじろりと睨みながら言った。

その目は泣き腫らして真っ赤になっていたが、いつものルイズの調子にリウスは少しほっとする。

一行は来たときと同じように、全員で馬車に乗って学院へと向かっていた。

『土くれ』のフーケに仲間がいる可能性もあるので、念のため周囲の警戒はしているのだが、先程のロングビル必死さを見るに単独犯である可能性が高い。

そのため一行にはそこまでの緊張感も無く、のんびりと学院に続く道を進んでいた。

なお、来る時と違う点があるとすれば、馬車の隅にきつちりと縛られたロングビルが

転がっていることくらいだった。

ロングビルはギーシユの持つていたベルトや紐で手足を縛られた挙句、もう一度ギーシユのマントで腕ごと体を縛り上げられていた。

そして、口にはさるぐつわがはめられている。

仮に拘束が解けたとしても、隠し持つていた杖も含めて全てへし折った上にキュルケの特大の炎で灰にしてあった。

もうどうやつても魔法は使えないだろう。

「ええ、もう体に問題はないわ。さつきは一気に血が無くなったから、ふらつと来たただけだと思う」

「ならいいけど。髪、ほどけちゃったわね。結んであげようか？」

リウスは肩から胸元にかかった自分の髪を一瞥する。

薄桃色の髪の毛の所々についた血は、すっかり固まってしまっていた。

「血も付いちちゃったし洗ってからにするわ。ありがとうね、ルイズ」

「平気ならよかったわ。それにしても、リウスのいた国って凄いわね」

馬を引いていたキュルケが声を上げる。最初はギーシユが御者に名乗りを上げたのだが、魔法の使い過ぎでよろめくギーシユに代わり、キュルケが馬車を引くことにしたのだった。

「あんな深手をあつという間に治しちゃうんだもの。それに、光の球や火の魔法もリウスの魔法なんでしょう？ あんなの見たことないわ。東方って、凄いとこなのね」

リウスは、東方ではなく異世界から来たことをまだ彼女達には伝えていない。

まるで騙しているようで後ろめたく思っていたが、今ここにはロングビルもいるのだ。

もう彼女はそのまま捕まるだけだろうが、異世界から来たなどと迂闊に喋ってしまう訳にもいかないだろう。

「あの薬は人が作った物じゃないんだけどね。私のいた国じゃないんだけど、東方にはイグドラシルっていう巨大な樹があるの。あの薬は、そのイグドラシルの種よ。」

イグドラシルの実ならどんな傷でも完全に治すことができるし、その葉っぱは死んだばかりの人を生き返らせることができるわ。条件はあるんだけど」

平然と説明するリウスに、一行は信じられないといった顔をした。

「じゃ、じゃあ、ミス・リウスも何度か死んだことがあるってことですか？」

「ギーシュくん敬語なんていらないうってば。そうね、何回あったか分からないくらい。今回も死ぬかと思っちゃった」

「道理で、無茶をすと思うた」

「もう、本当ですよ。無茶しないでください」

タバサとギーシュが溜息交じりに呟くと、リウスは苦笑した。

「まあ、持ってたのはさっきの種だけよ。他は何も無し。だから死んじやったら私も生き返れないわ」

「じゃあ、なおさら無茶なことはしたらダメじゃない。いい？ あんなことはもう止めてちょうだい。次は無いわよ」

「分かったわよ。次からは気を付けるわ」

ほんとかしら、とルイズは横目でリウスの顔を見る。

今回のようなことがあればまたやりそうだ。

そんなルイズの様子にリウスは焦ったように苦笑いを浮かべた。

「ほんとだって。私だって死にたくないし、今回は皆に助けられたようなものなんだから」

「でも、リウス。私は何にも出来なかったわ。あなたとタバサに助けられてばかりで」
キュルケが暗い声で呟いた。それを聞いたリウスは小さく笑う。

「そんなことないわよ。キュルケが何度も隙をつけてルイズの所に行こうとしたから、あのゴーレムもキュルケを狙わざるを得なかったんだから。そのおかげで私達は大分楽になつてたわ」

「そう。キュルケがいたおかげ」

リウスの言葉にタバサも短く賛同の声を上げた。

「ギーシュくんもギリギリまでルイズを守ってくれていたし、ルイズが魔法であの鉄のゴーレムを倒したから私も間に合った。このメンバーじゃなかったら、ここまで上手く行かなかったと思うわよ」

一行はそのリウスの言葉に少し黙り込んだ。

今思えば、これは綱渡りだったのだ。

リウスの言う通り、誰が欠けていてもこの結果はありえなかった。

ルイズはそう思うと、今更ながら背が凍る思いをしていた。

「私は、やっぱりロングビルを許せないわ」

ルイズが短く呟く。その言葉は不穏な空気を持つているように思えた。

少しの沈黙の後、リウスが口を開いた。

「いい？ ルイズ」

ルイズは鳶色の瞳をリウスへと向ける。

「ロングビルを憎んじや駄目よ。あのことは、もう起きたことなの。そしてその結果、私たちは無事ここにいるのよ。」

「……私たちは誰かを憎むためにこうして生きている訳じゃない。たとえ私が刺された時に、私が死んでいても」

リウスはルイズの目を見つめたまま薄く笑いかけていた。

「なるべくしてなった、それで良いはずよ」

その言葉は妙に実感がこもっていて、一行はなかなか口に出して否定することができなかつた。

リウスは、視線をルイズから青く突き抜けた空へと巡らせている。

「憎み続けていても、その憎しみの相手がいなくなればそれでお終い。居なくなつた人が戻ってくる訳じゃないわ。」

結局、降りかかる運命から人は逃れられない。出来ることといったら、その降りかかった運命にどうにかこうにか抗うことだけよ」

リウスはまるで昔話をするかのように小さく語っていた。

そして誰を見るでもなく視線を足元に向けた時、リウスは自分の髪にこびりついた血が視界に入ると、そつと目を逸らした。

「じゃあ、憎んでいる相手を誰も罰せられないのなら、あなたはどうぞすればいいと言うの？」

そう声を出したタバサはリウスをじつと見つめていた。

彼女には珍しく、その目には怒りの色がこもっているように見える。

リウスはタバサの顔を横目で見てから、ゴトゴトと揺れる馬車の床へと視線を落とす。

た。

「その人を止めればいいと思うわ。そして、恨みを晴らすために殺してしまってもいい。でも居なくなつた人が望んでいたことは、そして貴方がやりたかつたことは、本当にそれだつたの？」

その言葉は一行と、そして目が覚めていたロングビルの耳にも届いていた。

しかし、その小さく寂しそうな声は風にかき消され、ざわめく木々の中へと淡く消えていったのだつた。

第十六話 This World, That World

学院の医務室にて、オールド・オスマンは戻ってきた五人の報告を詳しく聞いていた。学院に着いた時、まずロングビルを衛兵へと引き渡した。

その際に衛兵たちがひどく驚いていたのは、ミス・ロングビルが盗賊の正体であったこと、そしてリウスの服が血まみれだったことが原因だったようだ。

取り急ぎリウスは事の次第をオスマンに報告をしようとしたが、リウス以外のメンバーと衛兵たちがそれに反対し、ひとまず医務室でリウスの様子を見てから報告を行なおうとしていたのだった。

そこへオールド・オスマンとコルベールが姿を現したため、そのままその場で報告を行なっていたのである。

「まさか、ミス・ロングビルが犯人じゃったとは……」

一通りの報告を聞き終えたオスマンは眉をしかめて天井を仰いだ。

一方のコルベールはロングビルが犯人だと知ってからというもの見るからに消沈していたが、努めて何でもないのであるかのように表情を繕っていた。どうやらコルベールはロン

グビルに並々ならぬ感情を持つていたらしい。

一行もそのことに気付いていたが、あえて気付かない振りをしていた。

しばらくして、オスマンが「そうか」と短く呟くと、ルイズ達へと向き直った。

「全員、無事で良かった。まずそれが何よりの朗報じゃ。そして、よくぞ犯人の捕縛と秘宝の奪還を成し遂げてくれた。この学院を代表して君たちの素晴らしい働きに感謝するぞ。君たちは、この学院の誇りじゃ」

ルイズ達はこの上ない労いの言葉に表情を明るくする。

しかしオスマンはその様子を見て目を閉じると、深々と頭を下げた。

「そして、真にすまなかつた。ロングビルが犯人だと僕は気付いておらなかつた。もしやすると、君たちのいずれかが犠牲になっていたかもしれない。学院を代表する者として恥ずべき事じゃ」

ルイズ達は頭を上げてくれるよう、慌ててオスマンへと口を開いた。

しばらくしてようやく頭を上げたオスマンは生徒達へと笑いかける。

「君達には僕から『シュヴァリエ』の爵位申請を出そうと思う。王宮から追って沙汰があるじやろう。ミス・タバサに関してはもう授与されているので、精霊勲章の授与を申請するつもりじゃ」

『シュヴァリエ』、という言葉に一行はまた表情をばあつと明るくさせた。

しかし喜んでいたルイズが突然神妙な顔になり、オスマンに対して質問を投げかける。

「あの・・・、リウスには何もないのでしょうか？」

「うむ。彼女は残念ながら貴族ではないのでな・・・。すまぬの、ミス・リウス」

「いえ、私には爵位は必要ありません。なので気に病まないでください」

医務室のベッドに座っていたリウスは軽く微笑んだ。

念のためにと医務室のメイジに傷を見てもらったが、リウスの体には傷らしい傷は残っていないかったようだ。

そのため医務室での治療といえは、身体と髪についた血を温水で拭ってもらい、簡単な治癒呪文をかけてもらったただけである。

もちろん、血まみれだった服もルイズが持つてきてくれた替えの服に着替えている。

オスマンは、リウスの顔へと微笑みを返した。

「代わりといつては何じゃが、儂に出来ることなら何でも言つて欲しい。出来る限り力になるぞ」

穏やかな笑みを浮かべていたリウスが、その言葉にぱつと明るい顔をする。

「で、では今後、図書室を使わせていただくことも可能ですか？」

リウスは目を輝かせながら質問を投げかけた。

その明らかに期待に満ちた様子に、オスマンやコルベルだけだけでなくルイズ達も思わず笑いを零すと、それに気付いたリウスは恥ずかしそうに軽く咳払いをする。

「あの、出来ればいいのですが」

「もちろん良いぞ。儂から図書室の司書に話を伝えておく。いつでも利用してもらつて構わんよ」

オスマンはそう言うと、ぼんぼんと手を打った。

「さて、君らも疲れたろう。今日の授業は特別休暇としておくから、どうかゆつくりと休んでおくれ。だが、今日の夜は『フリツグの舞踏会』じゃ。今回の件は無事解決したため、予定通り執り行なおうぞ」

キュルケの顔がぱつと輝いた。

「まあ、そうでしたわ！ フーケの騒ぎで忘れておりました！」

「今夜の主役は何と言つても君らじゃからな。夜にはぜひとも参加してくれたまえ。無理だけはしないようにの」

キュルケはタバサの手を取ると、オスマンに礼をしていそいそとその場を後にした。

ギーシユも眠そうにふらつきながらそれに続いていく。

先ほど受けた診療によると、彼らの傷は軽い打ち身や擦り傷などで大したことはなかったようだ。

ギーシュがふらついているのは、例によつて魔法の使い過ぎである。

ルイズもリウスと一緒に退出しようとしたが、リウスは首を横に振つた。

「悪いけど、ルイズは先に戻つて休んでおいて？　・・・オールド・オスマン。少し聞き

たいことがあるのですが、よろしいですか？」

「おう、ちようど儂らも君達に話したいことがあつたんじや。しかしミス・リウス、体の

調子は問題ないのかの？」

「ええ、私は問題ありません。ですが私の件は、出来れば二人きりで話したいのです

が・・・」

「であれば、儂の用件から話そう。すまないが、二人とも学院長室まで来てくれるかね

？」

ルイズとリウスは不思議そうな顔をしながら、オスマン、コルベールと共に学院長室

に向かった。

四人が学院長室に入ると、オスマンは自身の机から一冊のぼろぼろに古ぼけた本を取り出した。

「話したいことというのは、ミス・リウスの左手にある使い魔のルーンのことじや。ほ

れ、ここのページじゃよ」

ルイズとリウスの二人が開かれたページの絵を覗き込むと、そのページには複雑な模様のルーンが描かれていた。

二人はリウスの左手に浮き出たルーンと見比べる。確かに同じものであるようだ。

「この書物は『始祖ブリミルの使い魔たち』という名じゃ。そしてそのページに描かれているのは『ガンダールヴ』のルーン。そうじゃな、コルベールくん」

「ええ、オールド・オスマン。その通りです。ミス・ヴァリエールは知っているかもしれませんが、ミス・リウスはご存じないでしょう。説明いたします」

ガンダールヴ。その名前を聞いたルイズは息を飲む。

リウスにも、その名前には聞き覚えがあった。

「始祖ブリミルの用いた『ガンダールヴ』は主人の呪文詠唱の時間を守るために特化した存在だと伝え聞きます。言い伝えによると、始祖ブリミルは呪文の詠唱に長い時間を要していたそうです。その間、己の身を守るために用いていた使い魔が『ガンダールヴ』です。」

その強さは千人の軍隊をたった一人で壊滅させるほどの力を持ち、並のメイジではまったく歯がたたなかつたとか」

「・・・そんな凄いルーンだったんですね」

リウスが呑気な声を上げる。

しかしその言葉とは裏腹に、頭の中でどうすべきかを考えていた。

この場でこのルーンについての情報を共有すべきか、隠すべきか。

オスマンがコルベールの説明に言葉を継ぎ足す。

「そして、この伝説の使い魔はありとあらゆる武器を使いこなしたそうじゃ。どうかね、ミス・リウス。心当たりはあるかの？」

リウスは情報を共有すべきだと考えると、左手のルーンに向けた視線をオスマンへと戻した。

実際の現物がここにあるのだ。隠していても意味がないだろう。

「ええ、心当たりはあります。千人の軍隊を、というほどではないですが……」

私は何らかの武器を持つと、筋力や五感が強化されるようです。それに、魔法の威力や詠唱の速度も上がっていました。扱ったことのない武器が使えるようになっていくことも確認してあります」

「なるほどの。君や君の魔法が特殊だとばかり思っていたが、そういう訳かね」

「な、何でそんなルーンがリウスに……？」

興味深げにリウスの説明を聞いていたオスマンに対して、今まで固まっていたルイズが問いかけた。

「うむ、それが儂にも分からんのだ。ともあれ、この件は儂とミスタ・コルベール以外は誰も知らぬ。むやみに王宮へ伝えて、騒ぎになるのは避けたいからの」

「そうでしたか。お心遣い、感謝いたします。オールド・オスマン」

リウスはほつと胸を撫で下ろした。

どうやらこの老人は王宮といった権力の場にそこまで興味が無いようである。

始祖ブリミルはこのハルケギニアにおける一般的な宗教、ブリミル教における崇拜の対象だったはずだ。

そんな人物の使い魔が現れたとなると、国内外問わず政治的ないざこざが生まれるに決まっている。

そしてリウスは、目の前のオスマンやコルベールを信用に足る人物ではないかと思い始めていた。

少しだけ逡巡したが、意を決して口を開く。

「お二人ともにお伝えしておくべきことがあります」

「何かね、ミス・リウス」

目の前のオスマンとコルベールは不思議そうな表情を浮かべている。

「私は東方のメイジではなく、異世界からこちらへやってきたようなのです。私のいた場所には、月が一つしかありませんから」

出来る限り端的にそう述べると、オスマンとコルベールの二人は驚愕の表情を浮かべていた。

そして何故か、以前伝えていたはずのルイズも驚いた顔をしている。

「へ、変なこと言ってるんじゃないわよ」

「ルイズには言つてなかつたつけ？ 最初の夜に」

ルイズははつとした。

確かにリウスを呼び出したその日の夜、リウスは異世界から来たかもしれないと言つていたはずだ。

ただ、その時は何かの冗談とばかりに思っていた。

リウスはもう一度オスマンに向き直った。

「ただ、異世界から来た等と言つてしまうと必要のない混乱を招いてしまいます。そのため、私は東方のメイジだとしてきました。黙っていて申し訳ございません。今後も、私を東方のメイジだとして扱って頂ければと思います」

そう言うと、オスマンはいつの間にか面白そうに笑っていた。

「なるほどのう。いや、興味深い」

「オールド・オスマンは、その、確信があるのですか？」

コルベールがそのオスマンの様子を見て問いかける。

なるべくオブラートに包んだ発言だったが、コルベールは未だに半信半疑なのだろう。

「伝説上のガンダールヴが召喚されたのじゃ。普通と違うことが起きたとしても不思議ではなからう。

それに、ミス・リウスの使う魔法は儂も知らぬ。そして魔法の使い方も、じゃ。違う魔法の体系を持つ異世界から来たと考えると納得もいく。東方の魔法という説も捨てがたいがの」

「気付かれていたんですね」

やはり、あの時の決闘の様子を見られていたらしい。

リウスはそれに苦笑しつつ、内心では目の前の老人に舌を巻いていた。

この老人は外見とその魔力の密度の通り、凄腕のメイジであるようだ。

きよとんとしているコルベールとルイズに対してリウスは説明をする。

「貴方方の精神力という力を、私の世界では魔力と呼んでいます。私達の魔法と貴方方の魔法で最も違うところは、私達の魔法は自分の魔力だけでなく、宙に漂う魔力も利用している点です。それに私は宙にある魔力を常に吸収し続けているため、魔法の使い過ぎで倒れることもありません。たぶん貴方方よりもずっと少ない魔力の消費で済んでいるはずですよ」

その内容にコルベールは興味津々のようで、しきりに頷いたり相槌を打ったりしている。

しかし話が少し逸れてしまったので、リウスは軽く咳払いをしてから続けた。

「それで本題なのですが、今回盗まれた『繋がりの秘宝』についてです。オールド・オスマンがどのようにしてあの本を手に入れたのか、もしよろしければ聞かせて頂けますか？」

オスマンは真面目な顔をしたまま、やがてその重い口を開いた。

「あれは、先々代のトリステイン国王から譲り受けた物じゃ」

そしてどこか、遠い昔を思い出すようにリウスへ語りかけた。

「本来であれば、あれは王宮の宝物庫で管理されるべき代物じゃ。王宮に伝わる『始祖の祈禱書』と同じく、始祖ブリミルに関係しているものだと聞いておる。先々代の国王は、何故だか知らんが儂にその管理を任されていたのじゃよ。先々代国王は『決して使われべきではない』と仰られていたの」

そうでしたか、とリウスは考え込んだ。

コルベールとルイズは息を殺してリウスが口を開くのを待っている。

「何か、知っておるのかね？」

オスマンが静かに語りかけると、リウスは思い悩んだように口を開いた。

「あの本の序文の一部は、私の世界の文字で書かれていました。何故かその序文の一部しか読めなかったのですが……」

その内容は、私のいたシュバルツバルド共和国という国の首都にある、シュバイチエル魔法アカデミー図書館にて厳重に保管されている本と似た内容です。古代遺跡より発見された著書ですので、執筆者が誰かも分かっていません」

リウスは一瞬黙ってから、もう一度口を開いた。

「私の世界では、あの本は『ユミルの書』と呼ばれています。ユミルとは私達の世界にある宗教で、世界を構築するありとあらゆる物の基となった神だとされています。」

そして、ユミルは別名で『ブリミル』と言われているのです」

その言葉を聞いたコルベールとルイズは口をぽかんと開けている。

一方で、オスマンは眉をひそめて何かを考えているようだ。

「ハルケギニアが君の世界と何か関係しているかもしれない、ということかね」

「分かりませんが、そうなのかもしれません。それに先ほどの話に出てきたガンダールヴも、私の世界では『魔法の心得のある妖精』、ドワーフという亜人の別名として伝わっています。ユミルの肉体である大地から生じた、特殊な亜人であると」

「ほう。ちなみに、君は人間なのじゃな？」

リウスが頷くと、オスマンは髭に手をやってしばらく黙り込んだ。

「謎が謎を呼ぶ、じやな。何故君にガンダールヴのルーンが現れたのかも分からんし、君の世界との関係があるのかも分からんの」

では一つ聞いておきたいことがある、とオスマンは続けた。

「今回の盗賊騒動で関わった皆が知っておるように、あの書物は『繋がりの秘宝』と呼ばれておる。この名前がどういう意味なのか、予想はつくかね？」

「そうですね……。私には分かりませんが、あの『繋がりの秘宝』にはこう書かれています」

リウスは思い出すように少し考えると口を開いた。

『人間として資質を持ちし者、その魂はヴァルキリーの導きにより、聖戦ラグナロクのためにヴァルハラへと向かうであろう』。

ヴァルキリーとは、人間界を見守りながら、彼ら神々と共に戦える人間を導く神だとされています。ヴァルハラとは私の世界における神々が住む宮殿のことです」

「ふむ、あの本が異国の神々と繋がっているということか。それとも、単に君の世界との繋がりを示しているのか・・・？ むう、これもやはり分からないの」

学院長室が少しの間沈黙に包まれる。

色々話をしたが、結論として分かったことはそこまで多くは無い。

あまりにも分からないことが多すぎるのだ。

今までの情報の共有以外に、これ以上有用な情報があるとは思えなくなってきた。

「儂の方でもいくつか調べてみる。何か有益な情報があれば共有しよう。先ほど医務室でも言った通り、ミス・リウスは図書室を自由に利用して良い」

「ありがとうございます。私も同様に調べてみます」

「つい長くなつてしまったの。貴重な時間をありがとう。最後になつてしまったが、君は医務室で聞きたいことがあると言つていたね。それについて聞こう」

「ええ。では申し訳ありませんが……、ミスタ・コルベールにも話を聞いてもらいたいと思います」

そう言つてコルベールを見ると、彼は驚いた顔もせず頷いた。

それを見たオスマンがルイズへと顔を向ける。

「では、ミス・ヴァリエール。疲れているところに長々とすまんかったのう。申し訳ないが、退室してもらえるかね？」

「で、でも……」

「ごめんねルイズ。貴方に共有しなくちゃいけないことは、後々ちゃんと教えるから」

そう言われたルイズはしぶしぶ席を立ちあがると、一礼してから学院長室を退室していった。

静かに扉が閉められるのを確認してから、リウスがオスマンへと向き直る。

「では、話を聞こう。ミス・ヴァリエールのことかね？」

「どうやらオスマンもコルベールも予想がついていたようだ。」

リウスは重々しく頷く。

「仰る通りです。彼女の魔法について伺いたいことがあります」

リウスはそう言うと、先日ミス・シュヴルーズの授業で起きたこと、そしてリウスが確認したルイズの魔法についての詳細を、事細かに二人へ説明した。

「……ここまでが私の確認したことです。ルイズの魔力は異常なまでに強力ですが、その魔法は他のメイジ達とは根本から違うように感じています。何か、心当たりはありますか？」

その言葉にオスマンとコルベールが顔を見合わせる。

そしてオスマンが軽く頷くと、コルベールが口を開いた。

「貴方のルーンが『ガンダールヴ』のルーンと酷似していると気付いた際に、オールド・オスマンと話し合いました。もしかしたらですが、ミス・ヴァリエールは虚無の魔法を扱えるのではないかと」

リウスは、シュヴルーズの授業で虚無の魔法について軽く触れていたことを思い出し

ていた。

魔法の系統は大きく分けて『火』『水』『土』『風』の4つであるが、『虚無』という5つ目の系統は伝説にしかない失われた系統であつたはずだ。

ガンダールヴは始祖ブリミルの使い魔であり、ブリミルは四系統の魔法の祖であると同時に、虚無の魔法を操つていたとルイズから以前聞いていた。

あながち的外れでもないかもしれない。

「ハルケギニアには5つの王国があると聞いているかね？ 帝政ゲルマニアを除く4つの国々は、始祖ブリミルの子孫が興した国だとされておる。そして、ヴァリエール公爵家はトリスティン王族との血の繋がりが特に濃いのじゃよ。そう考えた場合、始祖ブリミルの使つた虚無の資質をミス・ヴァリエールが持つていても、何の不思議でもないのじゃ」

「そうなのですか……。ガンダールヴの件も考えると、そう考えてもおかしくないかもしれないですね」

「ミス・ヴァリエールが虚無の資質を持つのであれば、可能性として彼女が他の魔法を扱えない理由となるのかもしれませんが。そもそも、ヴァリエール家の人間が魔法を扱えないなど有り得ないことですから。」

しかしながら、我々魔法学院では『虚無』の魔法を扱う方法など分からないのです。あ

くまで伝説上の魔法でしたから、虚無がどのような魔法だったのかすら分からないのが現状なのです」

コルベールの言葉に、リウスは顎に手をやって少しの間考え込んだ。

「魔法の研究施設などでも難しいのでしょうか。そういった施設なら研究が進んでいるものだと思うのですが」

「難しいじやろうな。確かに、トリステインにはアカデミーと呼ばれる魔法研究の施設が存在する。しかし、アカデミーの虚無研究で行なっているのは『虚無』の魔法の研究ではなく、あくまでブリミル教に関わる聖具などを再現している程度じゃ。」

先ほど伝えたように、トリステインには『始祖の祈禱書』といった始祖由来の宝物があるにはある。しかし、そういった国家に伝わる秘宝の研究はタブーなのじゃよ。国の正当性を疑うことになってしまうからの」

「では、虚無がどのようなものかを確かめる方法はないのですね・・・」
「残念ながら、そうじゃな」

実際のところ、リイズの魔法が何なのかはリウスにも分からないままで。

その上、ヒントとなるかもしれない『虚無』については、ハルケギニアであまり研究が行なえていない。

そうになると、リイズが魔法を使えるようになるためには、結局リイズ自身に魔法を使

う方法を見つけてもらうしかなさそうだった。

「何故、ミス・ヴァリエールの魔法について知りたいのだね？」

オスマンは柔らかな表情のまま、そう尋ねた。

リウスはその言葉を聞いて困った顔で笑う。

「あの子は今までずつと魔法が使えなかつたことに悩み苦しんできたようでした。そろそろ、報われてもいい頃だと思おうでしょう？」

リウスは本心からそう口にした。

その本心がオスマンにも伝わったのか、目の前の老人はにこやかな笑みを浮かべる。

「そうじゃな、彼女も辛かったじやろう。今、儂とミスタ・コルベールのみでどうにか確かめる術がないか調べておる。ガンダールヴの件と同様に、王宮などの政治が絡む所にこの事を伝えるべきではないからの」

「そうでしたか……。ご配慮いただき、重ね重ねありがとうございます」

リウスが頭を下げると、オスマンが「最後に一つ聞かせてほしい」と問いかけた。

「君は、二元の世界に帰りたいかね？」

リウスはそう問われて少し思い悩んだ。

リウスには、帰らなければならぬ理由があるはずだ。

しかしハルケギニアで目覚めてからというもの、未だにその理由も、そして何故この

ハルケギニアに自分がいるのかも思い出せてはいないのだった。

「そうですね．．．、いつかは帰らなければなりません。ですが、今はルイズと共にいます」

「そうか、分かった。ではいつか必要になった時のために、我々も君が元の世界へ帰る方法を調べておこう。

願わくば、ミス・ヴァリエールと共にいる時間が長くあつて欲しいものじゃ」

話が終わり、リウスが一礼して学院長室から出ようとした時、オスマンが手をほとんど叩いた。

「そうじゃ、ミス・リウス。君さえ良ければ、今夜の『フリッグの舞踏祭』に出席してもられないかの。君も今夜の主役の一人なのじゃからな」

「え、ええ。ですが、私はそのような場に出たことがないのですけれども．．．」

「よいよい。服装なども君の持っているもので構わぬよ。それに、学院には万一のための予備のドレスもある。ぜひ、参加してくれたまえ」

そこまで言われてしまうと出席しなくちゃならないのかしら、とリウスがどぎまぎしている時、コルベールはじとりとオスマンを見据えていた。

「オールド・オスマン．．．、貴方、まさかまた眼福がどうか言うつもりじゃ．．．」
コルベールがそこまで言うのと、オスマンは見た目に反した素早い動きでコルベールの

口を塞いだ。

コルベールの言葉がよく聞こえていなかったりウスは小首をかしげている。

「と、ともかく！ ぜひ参加してくれたまえ！」

事情がよく飲み込めなかったが、取り急ぎ準備だけはしないと。

そう思ったりウスは改めて一礼してから、学院長室を後にするのだった。

第十七話 舞踏会にて

アルヴィーズの食堂、その二階のホールで今夜の舞踏会は行なわれていた。

中では色とりどりに着飾った貴族達で溢れ、談笑する者もあれば曲に合わせて手を取り合い踊っている者もいる。

そんなホールの外にあるバルコニーから、リウスはワイングラス片手にその様子を眺めていた。

何を思ったか手に持ったワインを一気に飲み干すと、少し疲れたような顔でうーんと伸びをする。

「どうしたい相棒。俺っち不在の冒険での疲れでも出たか？」

俺っち不在の、ともう一度デルフリンガーが言う。

どうやら、せつかくの活躍のチャンスに置いて行かれたことが随分とショックだったらしい。

これでも大分態度が良くなった方だ。

しかし置いて行かれたショックのあまりなのか、デルフリンガーは舞踏会にまで自分を持って行けと要求したのだった。

流石にパーティー会場へ剣を持っていく訳にもいかないため、会場の準備をしていた人にお願いをした結果、こうしてデルフリンガーをバルコニーに置かせてもらっている。

にも関わらず、未だにデルフリンガーはご機嫌斜めのようだ。

気軽な話相手がいることにリウスも助かつてはいるが、申し訳なさ半分、鬱陶しさ半分である。

「うーん、確かに疲れちゃったわ。ものつすぎい生徒達が集まってくるんだもの。ただでさえこういう服にも慣れてないってのにね。決闘でもしてた方がよっぽど楽だわ」

今のリウスは少し胸元が開いた真っ白なドレスを着込み、薄桃色の髪もいつもの三つ編みではなくバレッタでまとめてあった。

パーティーに相応しいように、肘まである白い手袋も付けている。

「その調子で次こそは俺も使ってくれよ」とデルフリンガーは面白くなさそうに鞆をかちやかちや鳴らしている。

その様子をリウスはちらりと見てから、ほろ酔い気分で空に浮かぶ二つの月を見上げた。

リウスはオスマンとの会話の後、どの服で舞踏会に参加すればいいのか、あれやこれやルイズと話し合った。

しかしリウスが持っているのは、下着のような冒険服2着、布製の黒いズボンに丈夫な皮で保護された作業用ズボン、白いシャツ数枚と、こげ茶色の皮でできたチョッキや厚い布製マント、等々である。

その結果、どれもあまりに舞踏会つぽくない、とルイズからダメ出しを喰らったのであった。

それからなんのかんのあつて、結局学院に予備用として用意してあつたドレスセットを借りたのだった。

ちなみにどのようなドレスがいいのかはリウスには判断できなかったため、そこはルイズに任せて見繕ってもらつてある。

この服でいいはずよね、とあまり履いたことのないハイヒールの靴にふらつきながら、会場に足を踏み入れたまではよかった。

ただ会場に入った途端、あまりの豪奢さにぎやかな社交場の様子に呆気に取られてしまったのである。

好き勝手にうろついてもいいものかどうか、リウスがきよろきよろしていると横から声をかけてくる者がいた。

「やあ、どうしたんだい。ミス」

そうやって声をかけてきたのはギーシュだった。

もう酒が入っているのか、その顔は既にほんのりと上気している。

リウスがほっとしたのもつかの間、何か変な感じがした。

敬語じゃなくていいと言ったことには言ったのだが、やけに馴れ馴れしい態度になっている。

「いや、この会場にびっくりしちやって」

「はっは、凄いだらう？ 君は一年生かな？」

怪訝な顔をしたリウスを尻目に、ギーシュは下手な舞台のような仕草でリウスの手を取ると、ウイंकウ混じりに笑いかけてくる。

「ほら、緊張しなくていい。落ち着くまで、ちよつと一緒にどうだい？ とつておきの話があるんだ。君も喜んでくれるはずさ」

その言葉に合点がいったリウスは、じとりとギーシュの顔を見た。

「ちよつと、ギーシュくん。気付いてないでしょう。また彼女さんに怒られるわよ？」

キザつたらしい笑顔のまま、ギーシュは目の前の女性の顔を正面から見た。

と思つたら、口をあぐりと開けて顔を青ざめさせている。

「ミ、ミミミ、ミス・リウス！ す、すみません、気付いていませんでした！」

そのまま土下座に移行しようとしていたギーシュを、リウスが慌てて止める。

「ちよ、ちよつとこら！ やめてつてば、目立っちゃうでしょ！」

突然の奇行に焦ったリウスは、膝をつこうとしたギーシュをなんとか押しとどめた。何事かと周りの貴族がこちらへ目を向けている。

それに気付いたリウスは気まずい顔をしたが、事の発端であるギーシュは周りの雰囲気にもせず、緊張している様子だ。

「もう、注目されちゃったじゃない。いっつもああいう風にナンパしてる訳ね」

「そ、それはともかく。ミス・リウスはどうされたのですか？ こんなところで」

その言葉にリウスは少し目を泳がせると、バレッタでまとめられた自分の髪をいじくった。

「その、私はこういう場所に慣れてないのよ。だから、ここからどうしたもんかと」

「ああ、舞踏会そのものはまだ先ですよ。今は食事を取ったり談笑したりしていればいいんです」

ギーシュはそこまで言うと、少しの間リウスの顔を見たま黙りこくっている。

リウスはホールの給仕が持ってきてくれたワイングラスを受け取り、「ありがとう」と礼を言うと、もう一度ギーシュの顔を見た。

「・・・あの、ミス・リウス。僕は、どうしても貴方に聞きたいことがあるんです」

「何かしら?」

リウスはギーシユの言葉を待つ。

ギーシユは酒のせいか頬を少し赤らめたままだったが、その表情はまるで素面のようになり真面目な顔になっていた。

「あの決闘の時、食堂で貴方は僕のことを『エセ貴族』と言いました。それはいいんです、あの時の僕はそう呼ばれても仕方のない男でしたから。

でも決闘の後に、貴方はその言葉を取り消しました。あれは、何故ですか?」

「あの時のことね。うーん、そうねえ」

リウスは少しの間考え込んでから口を開いた。

「あなたがミス・モンモランシーを庇ったから、かしらね」

ギーシユはじつとリウスを見つめながら、続きの言葉を待っている。

「『貴族は魔法をもつてしてその精神となす』。私はね、この言葉は『互いに支え合うこと、それを貴族が率先して行なっていくなさい』、つて言っていると思うの」

「支え合う、ですか?」

リウスは怪訝な表情を浮かべたギーシユと目が合うと、そのギーシユの目を見つめたまま続けた。

「男性と女性、貴族と平民、支え合うものは何でもいいわ。そして、ハルケギニアで力を

持っているのは貴族、その根っこにあるものは魔法を扱えること。

魔法によって戦う力や権力を持っているからこそ、そしてそういった存在である責任として、まず支えようとするのは貴族であるべきだ、って意味だと思うのよ」

「・・・」

ギーシュは少し俯きながら顎に手をやり、じつとリウスの言葉について考え込んでいくようだ。

リウスはその様子に少し微笑むと、更に言葉が続けた。

「まだここに来て日が浅い私が偉そうに言うべきじゃないと思う。説得力が無いとも思うわ。私は貴族ですらないし、この解釈は違うのかもかもしれないから。」

でも、ミス・モンモランシーがあなたを庇い、逆にあなたは精神力も残っていないのにミス・モンモランシーを庇った。その姿を見て、『エセ貴族』なんて言うべきじゃなかったって感じたのは確かよ」

リウスはそこまで言うと、ワイングラスに目を落としてひとり呟いた。

「思えば、これは『こうであって欲しい』っていう私の願望なのかもしれないわね。」

私の考えは、あくまで私が思う正しさに基づいているだけよ。ギーシュくんは、ギーシュくんの信じるべき正しさを見つければいいと思うわ」

「貴族であるからこそ、支え合う・・・。そうか、支え合うか」

ギーシュが何やらブツブツ呟いているのが聞こえたが、リウスは「私は何言ってるのかしらね」と小さく呟いて、右手に持った真つ赤なワインの入ったグラスへ口をつけた。「ミス・リウス！　ありがとうございます！」

ギーシュはリウスの左手を両手で包むように持つと、感極まった顔をしながらそう叫んだ。

リウスはその様子に目を丸くしつつ、口に含んだワインをぐくりと飲み下す。

「う、うん。どういたしまして。よく分からないけど」

「貴方が学院に来てくれて本当に良かった！　そうだ！　ミス！　東方のお話を聞かせて頂けませんか？　僕は貴方のような立派なメイジになりたいと・・・」

「あら！　素敵じゃない！」

「ギーシュ！　何やってるのよ！」

ギーシュの話の途中で二人の女性が割り込んできた。

声のかかった方を見ると、その赤髪に似合っている真つ赤なドレスのキュルケ、そして煌びやかなベージュのドレスを着たモンモランシーがいた。

「あらあら、本当に素敵だね。貴方いつも同じ服か、色気のない男物の服しか着ないんだもの。ちゃんと可愛いんだから、たまにはこういう恰好もしいとね」

「ちよつと！　あなた、また女の子にちよつかい出して！」

話に乱入してきた二人の女性はそれぞれ好き勝手に話している。

キュルケの後ろにはまるでお付きの者のように付き従っている男子生徒、モンモランシーの後ろには何やらきやあきやあ騒いでいる女生徒たちがいた。

「この人も迷惑してるでしょ！ ほら見なさい、ってあら？ ミス・リウス？」

ようやくモンモランシーもギーシュが話していた女性がリウスだと気付いたようだ。

すると少し離れたところから、ギーシュの友人達らしき男子生徒の集団がぞろぞろとこちらへやってくる。

「ギーシュ、話の途中でどっかに行きやがって。でっかいゴーレムが出てきた後はどうなったんだよ」

「お話って、盗賊騒ぎのこと？ 私達も聞きたいわ！ リウスお姉さまも恰好良かったんでしょ？」

ギーシュの友人達の言葉に、モンモランシーの後ろにいた女生徒たちがきやいきやい言いながら反応をしている。

「お姉さま、って何で私を？」

リウスが聞き慣れない言葉に小首をかしげると、モンモランシーが溜息混じりに口を開いた。

「ギーシュとの決闘以来、あなたのファンって結構多いのよ」

「そうよ！ あの決闘は恰好良かったわあ。女性なのに男の人に一步も引かない戦いぶり。食堂の時も、恩義に感じてる主人が侮辱されたなら真つ向から反論する！ まるで物語の中にいるような、主人を守る騎士みたいだったわ！」

どうやら大分美化されて噂が広がっているらしい。

食堂の件は単にギーシュに腹が立ったから文句を言ったために、決闘にまで騒ぎが広がっただけだったのだが。

「盗賊騒ぎの時も凄かったのよ？ タバサもだけど、リウスったら巨大ゴーレムを前にしても一步も引かないで戦ってるんだもの。私も危ないところを助けてもらったわ」

キユルケがうんうんと頷きながらそう言った。

決闘の話題が出てきて気まずい顔をしていたギーシュもそれに便乗する。

「そうさ。じゃあ、もう一度最初から話そうかな。フーケを捕まえるために名乗りを上げた僕は、馬車で向かっている時からミス・ロングビルを怪しいと思いつつ・・・」

お腹すいたなあ、と思いつつ、リウスはキユルケと共にギーシュの話を補足しつつ、その場に留まるのだった。

そうしたギーシュの冒険談の後、一息ついたリウスはこうしてバルコニーで夜風にあたっていたのである。

先ほどは、食事をつまんでいる際に少し離れたところでタバサを見つけた。

煌めく青いドレスに身を包んだ彼女は、目の前にある大量の食事を全て平らげようとするかのごとく、上品かつ猛然と料理を口に運んでいた。

一瞬彼女と目が合ったのだが、すぐに料理へと顔を戻していた。

今この場では料理優先なのか、もしくは馬車でのやり取りで少し嫌われてしまったのかも知れない。

バルコニーに出る前にリウスはホールをぐるりと見回したが、まだルイズは来ていないようだった。

あの子どうしたのかな、とバルコニーの窓を通してホールの様子をぼんやり見ていると、扉にいた衛兵が何やら叫んでいる。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおなぐぐりぐぐりぐぐり！」

見ると、純白のドレスに身を包んだルイズがホールに入ってくる。

濃い桃色の髪をリウスと同じようにバレッタでまとめ上げ、肘まである白い手袋がその上品さを際立たせている。

貴族のご令嬢に恥じぬ、美しい出で立ちだった。

雑談をしていた男子生徒達もルイズの姿を見るや、自分の服装を見直してから次から

次にダンスの申し込みをしている。

ルイズの美貌に改めて気付いたのか、今のうちに唾をつけておこうという魂胆なのだろう。

「やっぱり可愛いものね。人気あるわねえ」

まるで自分が褒められているかのように、リウスは嬉しそうな声を出した。

ルイズは複数の男子生徒に群がられていたが、無視はしないで生真面目に一人一人へ断りを入れているようだ。

「そうなのかね、俺たちにはよく分からん。相棒も貴族の小僧っ子達からダンスに誘われてたみたいじゃねーか」

「私はダンスなんて踊れないもの。ルイズもいないのに、勝手に慣れないことをやるもんじゃないわ」

リウスはしばらくの間、何やらきよろきよろしているルイズを眺めていた。

するとバルコニーにいるリウスに気付いたのか、ルイズが足早にバルコニーに繋がる階段を昇ってくる。

「何してるのよ、こんなところでたそがれちゃって」

「少し疲れちゃってね、休憩中。ルイズ、そのドレス似合ってるわね。間違えちゃった」

「あら、ありがとう。リウスも似合ってるわよ」

少し顔を赤らめているルイズへ、リウスは微笑みを返した。

そしてしばらくの間、二人は黙ってホールの様子を眺めていた。

「綺麗ねえ。それに、皆楽しそうだわ」

本格的に舞踏会が始まったのか、今まで談笑していた者達もみな音楽に合わせて踊り始めていた。

夜の闇の中で眩しく光るホールに、リウスは目を細める。

盗賊騒ぎの帰路のことをリウスは思い出す。

タバサの問いかけに対して、本当にやりたいことは何だったのか、とリウスは思わず口に出した。

本当にやりたいことなど、その正しさなど、誰にも分からないというのに。

目の前のホールにいる子供達は、幸せな未来が待っていることを、そしてその身を包む全てがずっと変わらないことを、疑いすらせずに踊っているように見える。

それは彼らの若さ故なのだろうが、リウスにとつて彼らの楽しそうな笑い顔はあまりにも眩しく見えた。

もう五年も前のことである。

愛する弟を殺した者への復讐は、結局のところ成し遂げられなかった。

弟を殺した者もかつての自分や弟と同じように、リヒタルゼンという街のスラムに生きる青年だった。

かつてのスラム街とは違った落ち着いた光景に戸惑いつつ、ようやくその青年の元へと辿りついた時には、既に彼自身も何者かに殺害されていた。

そして彼もまた、自分の家族と共に生きていこうと必死だったことを知った。

あの男の背景を知ったからといって、この胸の内に沸き立つ憎しみは未だに消えてない。

しかし、既にその復讐の相手はどこにもいなかった。

憎しみを育て続けた時間も、それに恐怖した時間も、何ひとつ意味など無かった。

そう気付いた時、私が本当に望んでいた結末にはもう決して手が届かなくなっていることを、私はようやく理解したのだった。

ただ、たった一人生き続けている者の責任として、そして自分の望みが届くはずもないからこそ、亡き家族に向けて『誰かを守るために生きていく』と誓ったのだ。

しかし、それは単なる口実だったのかもしれない。

誰かを守るために意味を持って死ぬのであれば、きっと父さんや弟のエミールも怒ら

ないでくれるだろうと。

そうしたもつともらしい理由で蓋をして、私は誰かを利用することで消えてしまったかったのではないだろうか。

(立派なメイジだとか、主人を守る騎士みたいだとか。酷い買い被りだわ)

リウスは先ほどの褒めそやされていた場を思い出して、自嘲気味に口元を少しだけ吊り上げた。

「楽しそうって・・・、リウスは楽しくないの？」

ふと見ると、ルイズが上目遣いにおずおずとしている。

(もしかして私は、この子も同じように利用しているのだろうか)

この世界では、死んだら終わり。

誰かによって蘇生させられることなどもないだろう。

鉄のゴーレムからルイズを助けに行ったことを思い出す。

あの状況ならば、魔法さえ使えばどうとでもなったはずだった。

それにも関わらず、私はバゼラルドを投げ捨ててゴーレムに切り掛かっていった。

明らかな失策であることは少し考えれば分かることだ。

それなのに、なぜ私はあんなことをした？

なぜ私は、ロングビルの作ったゴーレムから攻撃を受けた？

あれは本当に避け損ねただけだったのか？

本当に、私は自分のために行動していないと言えるのか？

いくら考えてもその答えは分からない。

しかし自らの思考を深めれば深めるほど、自分の身勝手さに拍車がかかっていくように思えた。

今までルイズのためだと考えていた行動も、単なる茶番に見えてくる。

「大丈夫よルイズ。ここから見てるだけでも、楽しんでるわ」

その言葉を聞いたルイズは、強い感情のこもった目でリウスの横顔を見た。

リウスは、いつつも『大丈夫だ』と言う。

使い魔として呼び出された時も、ギーシュと決闘した時も、盗賊騒ぎで大怪我を負った時も、いつもこの言葉を口にする。

そして、夢の中のリウスも同じような言葉を口にしていた。

小さく震える声で、『大丈夫だ』と。

「大丈夫なもんですか」

ついルイズはほつりと口に出した。

酔っているからか、ルイズを見たリウスの表情はいつもより少し弱々しく見える。

「楽しくないのなら、どうやって楽しめばいいのか教えてあげるわ。一緒に踊りましょ

う」

「でも、私はダンスなんて踊れないわよ?」

「つべこべ言わないの。ダンスなんてすぐ出来るようになるわ。上手い下手なんて関係ないわよ」

ルイズは有無も言わずに、リウスの手を取ってホールに続く階段を降り始める。

リウスがバルコニーに置かれたデルフリンガーをちらりと見ると、その視線に気付いたのか、デルフリンガーが鞘をかちやかちやと鳴らしている。

「ほら、早く」

リウスはルイズに引つ張られるまま、やむなくそれに続いていった。

(この子を守りたい気持ちは、きつと自分のためなんかじゃない)

リウスを引つ張っていくルイズの手はとて小さかったが、それでも力強くリウスの手を握っている。

ルイズの手から伝わった温もりで、リウスは自分の体が夜風で冷えてしまっているのに初めて気が付いた。

(でも、こうやってちよつと暖まっていくのも悪くないかもね)

リウスはそう思いながら、ルイズに連れられて眩しく輝くホールの中へと入っていくのだった。

第二章

第十八話 いつかの夢 3つ目

ルイズは夢を見る。

夢の舞台は、自分のよく見知った庭だった。

トリスティン魔法学院から馬で三日ほどあるラ・ヴァリエール領地内の、住み慣れた屋敷の中庭である。

いつの間にか、ルイズは誰かから隠れるように植え込みの陰に隠れていた。

「ルイズ、ルイズ！ どこに行ったの！ まだお説教は終わっていませんよ！」

そう言つて大声を出していたのはルイズの母だった。

そういえば、さつきまで出来の良い姉たちと魔法の成績を比べられて物覚えが悪いと叱られていたのだった。

ふと、隠れていた植え込みの下から誰かの靴が見える。

「ルイズお嬢さまは難儀だねえ」

「まったくだ。上の二人のお嬢様は、あんなに魔法がおできになるっていうのに……」

その言葉を聞いたルイズは悲しくて、悔しくて、一人植え込みに隠れたまま歯噛みを

した。

そうしていると、召使たちは少し離れた植え込みの中をがさごそと探し始めたようだ。

このままでは見つかってしまう、そう思ったルイズは召使たちの気付いていない間に植え込みの中から逃げ出していった。

そして、自分がいつも『秘密の場所』と呼んでいる中庭の池へと辿り着いた。

ここはルイズにとって唯一安心できる場所で、あまり人が寄りつかない、うらぶれた場所だった。

池の周りには季節の花が咲き乱れ、小鳥が集うアーチやベンチがあった。

それを目印に島のほとりにある小舟を見つけると、ルイズはその中へと忍び込む。

この船遊びを楽しむためにある小舟も、今ではもう使われていない。

姉たちも母も父も、もうすっかり興味を失っているのだ。

ルイズは小舟の中に用意してあった毛布を広げると、頭からつま先まですっかり覆いかぶさった。

そして、先ほどの召使たちの言葉を思い出したルイズは、悔しさと悲しさで一人声を上げないようにながら泣き始める。

ふと気付くと、池の周りは霧に包まれていた。

何でこんなに霧が、と泣き腫らした顔できよるきよるしていると、その霧の中から一人のマントを羽織った立派な貴族が歩いてきた。

年は十六歳くらいだろうか。自分の年は六歳だから十ばかり年上だ、とルイズはぼんやり考えていた。

「泣いているのかい？ ルイズ」

つばの広い羽根付き帽子に、その顔が隠れていた。

しかし、ルイズには彼が誰だかすぐに分かった。

子爵さまだ。

最近、近所の領地を相続した、年上の貴族だった。

ルイズはほんのりと胸の中を熱くする。

憧れの子爵さま。晩餐会をよく共にして、父さまと彼とで交わされた約束。

「子爵さま、いらしてたの？」

ルイズはもう一度毛布で顔を隠した。

憧れの人にみつともない所を見られてしまったため、恥ずかしさが込み上げてくる。

「今日はきみのお父様に呼ばれたのさ。あのお話しのことでね」

「まあ！」

ルイズは頬を染めて、俯いた。

「いけない人ですわ。子爵さまは……」

「ルイズ。僕の小さなルイズ。きみは僕のことを嫌いかい？」

おどけた調子で言う彼に向かって、ルイズは大きく首を振った。

「いえ、そんなことはありませんわ。でも、わたしはまだ小さいし……、よくわかりませんわ」

ルイズははにかんでそう言った。

帽子の下の顔はにっこりと笑うと、手をそつと差し伸べてくる。

「子爵さま……」

「ほら、手を貸してあげよう。掴まって。もうじき晩餐会が始まるよ」

「でも……」

「また怒られたんだね？ 安心しなさい。僕からお父上にとりなしてあげよう」

島の岸辺から小舟に向かって手が差し伸べられている。大きな手、憧れの手。

ルイズは頷いて立ち上がると、その手をそつと握った。

そのまま岸へと上がろうとした時、揺れる小舟に足を取られてルイズはよろめいてしまふ。

その拍子に、彼の胸を両手で強く押してしまった。

「あ、あめんなさい」

「貴方つたらずく謝っちゃうわねえ。こんなの、何でもないわ」

その女性の声に驚いたルイズは、目の前にある顔を見た。

そして、いつの間にかルイズは六歳から十六歳の姿へと変わっていた。

「リ、リウス？」

何故リウスと子爵様を間違えてしまったのだろう。

目の前のリウスの服装も、以前城下町で買った平民の恰好をしているというのに。

「どうしたの？ 驚いちちゃって。それよりも、もうすぐご飯よ。ほら、皆も待ってるわ」

周囲はミルクのような濃い霧に包まれたままだったが、リウスが指差した場所だけは霧が晴れているようにしっかりと見ることができた。

ルイズは、いつかその場所を見た覚えがあった。

まだ池の近くでパーティーを開いていた時に似た光景だ。

テーブルが並び、そこに朝食が添えられている。

そして、そこでは人々が歓談していた。

しかし不思議なことに、その人々の姿だけは霧に紛れたような白い影となっていた。

白い影のような人々はルイズに気付いたのだろうか、こちらへ向かつて手をふっているの分かる。ルイズ、と口々に名前を呼ぶ声がした。

その声達には、聞き覚えがあった。

「母様に父様、姉様にちい姉様？ それに、キュルケにタバサ、モンモランシーにギーシユもいるわ。他に、学院の皆もいるのかしら？ 誰だか分からない声も聞こえるけど……」

リウスはにっこりとルイズに微笑んでいる。

「行けば分かるわ。皆も待ちくたびれてるわよ」

そう言つて、リウスはルイズの背中を優しく押した。

少し不思議に思つたルイズはリウスの顔を見る。

「リウスも一緒に行くんでしょ？」

しかしリウスは、寂しそうな顔で笑つていた。

「ルイズ、貴方も分かっているでしょう？ これは、仕方がないことなんだわ」

いつの間に手に持っていたのだろうか、リウスが可愛らしい木彫りの馬人形の片割れを手渡してきた。

これは、少し前に城下町でリウスが買つてくれたものだ。

ルイズはきよんとした顔のままですの人形を受け取る。

すると、目の前のリウスはまるで塵になつたかのように、ゆつくりと霧に紛れて消えていった。

「あれ？ リウス、どこ？ リウス、リウス！」

周りを見回しても近くには誰もいない。

しかしふと気付くと、すぐ後ろに誰かが立っていた。

「どうしたんだよ、ルイズ。でっかい声出して」

さつと振り向いたルイズの前には、見知らぬ少年が立っていた。

その少年は見たことのない青いフードつきの服を着ていた。

身長は170センチ程だろうか、あまり見慣れないぼさぼさの黒髪をしている。

「あなた、誰？」

ルイズの怪訝な声に、目の前の少年はむっとしながら口を開いた。

「誰ってなんだよ、寝ぼけてんのか？ ** *だよ」

肝心の名前が何故か聞こえてこなかった。でも、彼の名前は知っているような・・・。

「え、ルイズ冗談だろ？ 俺だよ、** *だつて。お前の使い魔で、お前が呼び出したんだろ」

「私の、使い魔？」

違う。私の使い魔は・・・。

そこまでルイズは考えたが、思い出そうとした人が誰なのかが分からなかった。

顔も思い出せないし、名前も分からない。

知らない内にルイズの目から涙がこぼれていく。

何で、こんなに悲しいのだろうか。

「え？ ルイズ、どうしたんだよ」

「ダーリン！ 何やってるのよ。ルイズも何をぼうつとしてるの？ ってあら、どうしたの？」

目の前の少年にキュルケが飛びついていていたが、キュルケはルイズの様子に気付くとびつくりした表情を浮かべた。

少し離れた場所にいた人々も何かあったのかとこちらへと近付いてきている。

いつの間にか彼らは白い影ではなく、はっきりと姿が見えるようになっていた。

違う、違う、とかぶりを振って泣き続けるルイズに対して、家族も友人達も、皆が心配そうにルイズを慰めていた。

すると、突然ふうつと視界の全てが濃い霧に包まれていく。

「君は、準備をしておくべきだ」

気付くと、目の前には静かな青い目をした金髪の青年が立っていた。

優しい口調でルイズに向かって語りかけている。

ルイズは手に持った馬の人形を胸に抱えながら、必死に誰かの名前を思い出そうとしていた。

「これで君にだつて分かるだろう？」

いやだ。あの人は家族も同然だった。あの人の名前、あの人の名前は。

「夢は起きれば忘れてしまう。そして、君にはまだ許されている。だからこそ少しでも残しておきたいなら、準備だけはしておくことだよ」

金髪の青年はそう言い残すと、彼自身も霧の中へと紛れてしまった。

そのままルイズすらも霧の中へと飲み込まれていく。

そして、何もかもが白い景色に包まれていつて、ルイズには何も分からなくなつてしまった。

ルイズははつとして目を覚ました。

体中にじつとりと汗をかいている。

まだ日も昇っていないようで、部屋の中は真つ暗だった。

「・・・準備をしておく。」

何か、ひどく悲しい夢を見ていた気がする。

しかしたつた今見ていたはずの夢はほとんど思い出すことが出来なかつた。

ルイズは自分の顔に手をやると、いつの間にか自分が泣いていることに気が付いた。

「何で、わたし・・・」

確か、自分の家の中庭が出てきて、懐かしい子爵様が現れて。

その子爵様が、誰か、誰かに……。

そこから先がどうにも思い出せない。

準備をしておくべき、という言葉だけは頭の中に残っていた。

「……何の準備を？」

暗い部屋の中、ルイズは誰に言うでもなく呟いた。

ううん、と横で寝ていたリウスが寝返りをうつ。

それを見たルイズはばさつと布団を被ると、眠るリウスの背中に対して身を寄せた。

そして彼女の背中に自分の額をくつつけると、早く忘れてしまおうとまぶたを強く閉

じるのだった。

「ええと。『そして、勇者イーヴアルデイはお姫様の』……『走るお祭りです笑った』？」

凄いい光景ね……。直訳だと意味分かんないわ」

タバサの細い指がテーブルに置かれた本の一文を示した。

「これは、英雄を迎える式典のこと。縦走記念式典というのが昔話に出てくる」

「ああ、そういうこと。どういふものなの？」

「昔のトリステインの英雄がロマリアで密書を受け取った。ガリアは阻止しようとしたけど、その人はトリステインまで歩いて持ち帰った。『大変な任務でも立派にこなした人』へ送られる式典」

「なるほど。物知りねえ、タバサ」

リウスは今現在、トリステイン魔法学院の図書館にいた。

本日は虚無の曜日ということで、リウスは以前オールド・オスマンに入ることを許可された図書館へと早速来てみたのだった。

簡単な文字の読み方はここ数日の間ルイズから教えてもらったが、それでも未だに分からない言葉が多い。

そのため、ルイズから借りた辞書を片手に図書室へと乗り込んだのである。

ルイズとはいえば、昨夜遅くまでリウスに文字を教えていたためにまだ眠っている。

朝方に目が覚めたとはいえ眠っているルイズを起すのも何なので、簡単な書置きをしてからリウスだけでこの図書館へと来た。

少し前に、そこで偶然タバサと出会ったのである。

「・・・何してるの?」

異様な大きさの本棚を前にうろうろと読めそうな本を探していたリウスへ、横からタ

バサが声をかけてきた。

「あら、おはようタバサさん。ちよつと子供が読むような本を探してるのよ」

「・・・何のため？」

タバサは相変わらず眠そうなぼんやりとした顔をしていた。

リウスは右手に持った辞書をぱつとタバサへと見せる。

「今、ここの文字を勉強中だね。私でも読めそうな童話本を探してるの」

「?」でも、会話は出来てる」

「そうなのよね。話すことは出来るんだけど、文字は読めないのよ」

「・・・そう。童話ならもう少しこつちにある」

タバサはそう言うと、てくてくと奥の本棚へ歩いていく。

教えてくれるのかしら、とリウスは言葉少なげなタバサの後を付いていった。

「これなら、読みやすいと思う」

リウスはタバサが差し出してきた真新しい本を笑顔で受け取ると、その表紙に書かれたタイトルをぎこちなく読んでいく。

「ありがとう。ええつと、イー、ヴェルデ・・・」

『『イーヴァルデイの勇者』』

間髪入れずに訂正を加えたタバサの言葉を聞いて、今度はイーヴァルデイか、とリウ

スは目を丸くしていた。

イーヴァルデイという名前は、リウスの世界の神々が使用した武器を作った鍛冶屋だか、その鍛冶屋に関わる人物として存在する名前だったはずだ。

やはり、童話は役に立つものである。

童話は、伝説や神話といった宗教に関わるものであったり、国の成り立ちや大事件といったスペクタクルな物語を、子供でも理解できるように作られたお話が多いのだった。

もちろんそれが全ての童話に当てはまる訳ではないし、詳細を省いている場合がほとんどだが、その国の考え方や文化を軽く知る分にはちようどいい。

字の勉強と相まって、一石二鳥というものだ。

「あれ?」

リウスは、タバサが本を抜き取った本棚をまじまじと見つめた。

先程の本が入っていた場所の両脇にも、『イーヴァルデイ』という名前が見て取れる。「そう。こっちの本も同じ名前。でも内容が違う」

「へえ、面白いわね。じゃあこれも持っていこうかな」

ひよいひよいと本を手にしたリウスは満足げにそれらの本の背表紙を見る。

「案内してくれてありがとう。早速読んでみるわね」

手に持った本を脇に抱えると、リウスはテーブルのある場所へと向かう。すると、後ろからトコトコとタバサが付いてきていた。

「……さつき渡した本は読んだことがある。何か分からないところがあったら、聞いて」「そうなの？　ありがとう、タバサさん」

リウスはそう言つて、タバサの顔を見る。

すると、タバサはリウスの目をじつと見つめてから小さい声で呟いた。

「……タバサでいい」

「うん？」

よく聞き取れなかつたのでリウスは聞き返す。

「キュルケを呼ぶように、私のことはタバサと呼んで」

今度ははつきりとタバサが告げた。

確かに、私はいつの間にかキュルケを呼び捨てで呼んでいたな。

そう思ったリウスはタバサへと笑いかけた。

「そうね、他人行儀だったかしら。じゃあこれからはタバサって呼ぶわ」

タバサはまだ何か言いたいことがあるのか、しばらくじつとリウスの目を見つめている。

しかし彼女は何も言わないまま踵を返すと、トコトコと奥の本棚へ向かっていった。

タバサの後ろ姿を少しの間見ていたリウスだったが、ふっと小さく笑うと脇に抱えた本を持ち直してテーブルのある席へと向かう。

(ま、いつか)

どうやら嫌われてはいないようだ。

他にも何か話したいことがあるようだが、聞きたいことがあるのならまたどこかの夕イミングで聞いてくるだろう。

リウスはそう思いながら辿りついたテーブルに数冊の本を置くと、その一番上に置かれた童話本を開く。

これは先ほどタバサから受け取った童話本だ。

もちろん、テーブルには持ってきた辞書やメモ用の羊皮紙を開いて用意しておいた。リウスは自分で思っていたよりも順調に本を読み進めていく。

本の内容は、イーヴァルデイという少年が臆病な自分の心を奮い立たせながら、色々な人を助けたり、時にはならず者や盗賊と戦ったり、貴族の少女と恋をしたりというものだった。

最終章のシーンは、ドラゴンに連れ去られた少女を助けるためにイーヴァルデイがドラゴンの住む洞窟を目指している場面だ。

くくく

イーヴァルデイは竜の住む洞窟までやってきました。従者や仲間たちは、入り口で怯え始めました。猟師の一人が、イーヴァルデイに言いました。

「引き返そう。竜を起こしたら、おれたちみんな死んでしまうぞ。お前は竜の怖さを知らないのだ」

イーヴァルデイは言いました。

「ぼくだって怖いさ」

「だつたら正直になればいい」

「でも、怖さに負けたら、ぼくはぼくじゃなくなる。そのほうが、竜に噛み殺される何倍も怖いのだ」

くくく

静かな時間が図書室に流れている。

この本はよくある国の英雄を描いた英雄譚ではなく、イーヴァルデイという少年が勇者と呼ばれるまでの出来事を描いた英雄譚だった。

宗教や国家の正当性などを示したのではなく、少年が英雄となるべくその心を成長させていく様子が描かれている。

少年イーヴァルデイはついにドラゴンを打ち倒し、少女を助け出す。

そのことで未来の領主となる道が開かれるのだが、イーヴァルデイはそれを拒否し、

より多くの人を助けられるようにと旅へ出る。

いつまでも、イーヴァルデイの背を見つめ続ける少女を残して……。

ぱたんと本を閉じたリウスには、少し思うところがあつた。

リウスがこういつた本を初めて読んだのは魔法都市ゲフェンに着いてからだ。

昔は、こういつた内容をひどく毛嫌いしていた。

こんなことがあるはずがない、こんなものは単なる夢物語にすぎないのだ、と。

しかし今落ち着いて考えてみると、たぶん私もこういつた話に憧れてしまったのだろう。

憧れたからこそ、こういう勇者がいるのであれば何故私達を助けてくれなかったのかと逆恨みしていたのだと思う。

だが、思えば私は幸運だった。

私は感謝しなければならなかったのだ。

先生が、あのスラムから私を連れ出してくれたのだから。

静かに目の前の本を横へどかすと、机に置いていた羊皮紙へ本の内容を簡単にメモしておく。

少し考えてから、そのメモに矢印を引いて『ルーンミッドガッツ王国におけるイーヴァルデイとは関係無し』と付け加えておいた。

リウスが次の本を手を取って開こうとすると、リウスの横の椅子が静かに引かれた。

「……」

トン、と数冊の本を置いてリウスの横に座ったのはタバサだった。

タバサは何も言わずに自分の本を手を取って、姿勢よく読み始める。

リウスはタバサの姿を一瞥して口を開こうとしたが、特に何も言わずに次の本を開いた。

ルイズとキュルケが言い合いをしながら図書室に入ってくるのは、リウスが最後の本の分らないところをタバサに教えてもらっている最中になるのであった。

第十九話 平和な日々の過ごし方

ある虚無の休日の前日、リウスはアウストリの広場にあるベンチに座りながら本を読んでいた。

アウストリの広場は、学院の主塔、土の塔、寮塔の間にある広場である。

東側の広場であるためこの場所にはほかほかと暖かい日差しが差し込んでおり、最近のリウスにとってお気に入りの場所だった。

「あの、ミス・リウス。折り入ってお願いがありません」

リウスが顔を上げると、何やら思いつめた顔のギーシュが立っていた。

「なあに、ギーシュくん。授業は終わったの？」

「今日の授業は午後の一つだけなんですよ。それよりも、ちよつと相談に乗ってもらいたいことが……」

「何かしらっ？」

リウスは開いていた本を閉じると、ベンチに添えつけられた丸テーブルに置く。

するとギーシュは少し前のめりになりながら、何やらびっしり文字が書き込まれた羊皮紙をリウスの目前に差し出してきた。

「あの、ある女性にプレゼントをしたいんです！ 何が喜ばれますか!? 僕としては、このメモに書いたこういうった物がいいと思うんですけど、それともこっちの方が」

いきなりあだこうだ言い始めたギーシュを、リウスは何とか手で制した。

「ちよつとストップストップ。私はモンモランシーの好きな物なんて分からないってば」

「な！ なんでモンモランシーって」

「モンモランシーにプレゼントでしょ？ あなたの思い当たる物とか、モンモランシーに直接聞いた物の方がいいんじゃない？」

ギーシュはプレゼント相手を言い当てられたことに顔を赤らめつつ渋い顔をしている。

何とも器用なものである。

「その、ええと、ちよつとモンモランシーを怒らせてしまつて……」

「何よ、また浮気でもしたの？」

「あの、えー、まあ、そんなところですよ……」

呆れ顔でギーシュを見るリウスに、ギーシュはわたわたと事の次第を話し始めた。

「それには訳があつて。この間の決闘以来、モンモランシーが僕のことを熱っぽく見てくれるようになったつていうか……」

「あの時は絶交だつて言つてたのでもう許してくれないかもと思いきや、優しく許してくれたんです。ああモンモランシー、君はなんて慈悲深いんだ！」

「あのいつも険しい顔のモンモランシーがよく笑つてくれるようになって！ ほかあもう幸せの絶頂というか、ああこの喜びをなんて表現したらいいんだろう！ もうこの気持ちには言葉じゃ言い表せない！ なんとといったつてあの瞳が僕を見てくれるだけで」

「はいストップ。話が進んでないわよ」

「そ、そうでした」

ギーシュはゴホンと気まずそうに咳払いをすると、至つて真面目な顔になつて話を続けた。

「最近モンモランシーとはそんな感じだつたんですが、つい先日食堂で困つた様子の子のメイドの子がいたんです。何やら他の男子生徒に絡まれているようで。」

それで僕はその男子生徒達にこう言いました。『平民も貴族も関係などない。女の子を困らせるような者は、このギーシュ・ド・グラモンが許す訳にはいかない』、とね」

ふと見ると、ギーシュは何やらポーズを決めながら薔薇の杖を口に咥えている。

こういうギーシュの雰囲気にはもうすっかり慣れてしまったので、とりあえずリウスは突っ込みもせずにつきを促した。

「それでその場はどうにかなつたのですが、そのメイドの子はすっかり怯えてしまつて

て。それで慰めている内に近々どこかの店で食事をすることになってしまいました。て……。それをモンモランシーに見られてしまい……。」

「また随分とはしよったわね。とにかくそれでモンモランシーが怒ったって訳ね」

「はい……。」

「その女の子の誘いを断って、モンモランシーに誤解なんだって言えばいいじゃないの」「もちろんすぐその女の子の所に行つて断つたんですが、モンモランシーはそれはもう取り付く島もなくって……。」

「それでモンモランシーにプレゼント、って言つても、やっぱり私には分からないわよ。キルケとかに聞いた方がいいんじゃないかしら」

「そ、それはそれで問題が」

そんなことを言っていると、少し遠くでギャーギャーと騒いでいる声が聞こえてきた。

「何でアンタまでこつちに来るのよ！」

「こんな良い天気なんだから、お茶だつて外で楽しみたいものだわ」

「それならヴェストリの広場にでも行けばいいじゃないの！」

「いやあよ、あそこ暗いもの。ほら、お茶を飲みたいのなら貴方の分だつてあるわよ？」

ルイズはミルク多めの方がいいかしら。どことは言わないけど成長するかもしれない

わね?」

「なananなんですって! いい言うに事欠いて!」

「あら、どことは言っていないじゃない。ヴァリエールったら何のことを想像したのかしら」

わいわいと騒がしいリイズ、キュルケ、タバサの三人組がアウストリの広場へ向かって歩いてきていた。といつても、騒がしいのは二人だけである。

いつものように黙ったままのタバサに向かってリウスが軽く手を振ると、タバサもこちらに気付いたようで小さく手を振っている。

「さっきも言ったけど、私は何が良いかなんて分からないわよ。タイミングよくここに来たし、キュルケに聞いてみれば?」

リウスはとりあえず向き直ってギーシュに告げる。

するとキュルケとリイズもこちらに気付いたようで、リウス達の方へと近付いてきた。

「あら。ギーシュったらモンモランシーに振られたからって、次はリウスに手を付けようってこと?」

「き、君は人を何だと思ってるんだい。それにモンモランシーにだって振られてなんかいないよ、たぶん・・・」

キュルケの言葉を聞いたルイズはじとつとした目でギーシユを睨み付けている。

「ちよつとギーシユ。ふざけないでよね、リウスがそんなの相手にする訳ないじゃない」
「一理ある」

ルイズとタバサの言葉にギーシユは冷や汗ダラダラである。

ちゃんとした理由を言わなければまたひどい誤解を受けてしまいそうだ。

「ほら、聞いてみたら？」

リウスがそう言うのと、引きつった顔のままだったギーシユは観念したかのように溜め息をついた。

「このことは口外無用に頼むよ・・・」

広場に置かれた丸テーブルに簡単な紅茶セットが広げられている。

一通りの説明を終えたギーシユは、自分の前に置かれている紅茶を一気に飲み干した。

「そりゃあ一緒に馬で遠乗りでもしなさいよ。プレゼントを渡すだけじゃなくって」
にやにやと楽しそうなキュルケ。

ルイズはむつつりとしながらも興味はあるようだが、一方のタバサは全く興味なさげに本を読み進めている。

「いや、だからだね。モンモランシーはホントに取り付く島もないんだ」
ルイズはキュルケをちらつと見てから口を開く。

「モンモランシーでしょ？ 普通に、香水とか秘薬の材料でもプレゼントすればいいじゃないの」

「これだからトリステインの女は駄目よねえ。一緒にいる中で愛を示さなきゃ意味ないじゃないの。」

「タバサはどう思う？」

「興味ない」

キュルケは騒ぎ立てるルイズの反論にもどこ吹く風といった具合である。

こういった色恋沙汰はキュルケの方が得意分野のようだ。

「そうねえ、ギーシユが懸命にアプローチすればモンモランシーは付いてくるでしょ。謝りたいってことを伝えて、お詫びがしたいとでも話してからトリスタニアにでも行つてえ。そこでモンモランシーにその場の雰囲気でプレゼント。それから劇場にでも行つてディナーを楽しんでから、ベッドで愛を囁けばいいんじゃないの」

最後の言葉にギーシユとルイズが顔を赤くしている。

キュルケは楽しそうにしながら悪戯っぽい顔で付け加えた。

「まあ、愛想を尽かされてるなら駄目だろうけど」

当のギーシュは赤い顔で何か言い返そうと口をぱくぱくさせている。

そのまま軽く咳払いをすると、気を取り直したようにギーシュが口を開いた。

「ま、まあ最後はともかく、今のプランはいいかもしれないね！ ええつと、ミス・リウスはどう思います？」

「私？ そ、そうね。何かのプレゼントでいいかなって思ってたけど、キュルケが言うならそれがいいと思うわ。明日は虚無の曜日みたいだし」

「そうですか！ いいと思いますよね！ そうと決まればこうしちやいられない！」
ギーシュが息巻いて立ち上がると、その勢いでテーブルが少し揺れる。

「おおつと、すまない！ じゃあ恩に着るよ、みんな！ 早速モンモランシーを誘つてくる！」

そう宣言したギーシュは足早に立ち去っていった。

ルイズとリウスがほぼ同時に紅茶を一口啜ると、キュルケがすつと身を乗り出す。

「そうそう。二人とも、私たち明日トリスタニアに行くけど一緒に来る？」

「なに？ ギーシュの後を追おうとでもいうわけ？ ずいぶん悪趣味ね」

ルイズが心底呆れたような声を出すと、キュルケは首を横に振った。

「違うわよ、気にはなるけど追う程じゃあないわ。ちよつと本の買い物にね」

へえ、とリウスが相槌を打ってから口を開く。

「シルフィードで行くの?」

「そう」

リウスの問いに、タバサが本に目を落としたまま答える。

ルイズはそのリウスの反応にピンときた。

「リウスも行きたいわけ?」

「うーん。ダメかしら?」

「しようがないわね。それなら私も一緒に行くわ」

「よし、それじゃ決まりね。明日のお昼過ぎに出る予定よ。準備していてね」

ルイズは納得のいっではない怪訝な表情をキュルケへと向けている。

「なんなの? いきなり誘ってくるだなんて。どういう風の吹き回しかしら」

「あら、お言葉ね。せっかくの虚無の休日部屋に居るなんて勿体ないじゃない」

「それはそうだけど・・・」

なおもルイズは不審そうな顔をしているが、リウスが行きたいのなら、とキュルケに言いたい文句は紅茶を飲んでごまかすのだった。

「うわあ、凄いわね。ほらルイズ、こんなに高いわよ」

「ま、まあまあね。ちよ、ちよつとりウス、あんまり動かないで」

リウスが嬉しそうな様子でいる一方、ルイズはあまりの高さに出来る限り下を見ないようにしている。

キュルケはその様子に目を細めて微笑むと、シルフィードの青く輝くウロコを撫でた。

「やつぱりシルフィードはいつ見ても惚れ惚れするわねえ」

キュルケのその言葉にシルフィードがきゅいきゅいと鳴いている。

その声を聞いたタバサが、手に持った長い杖でシルフィードの頭を軽く叩いていた。

今日も、とっても良い天気だ。

キュルケは頬で風を感じながら青く澄んだ空を仰いだ。

私達を乗せたシルフィードははるか上空にいるにも関わらず、周りで吹いている風はそよ風くらいのものだ。

こうしている間にも、タバサが私達の周りの風を操ってくれているのだった。

キュルケがそんなタバサのさりげない優しさに感謝していると、次第にトリスタニアが見えてきた。

背後に座っているルイズもようやくこの高さに慣れてきたようで、落ち着いた言葉とは裏腹に、遠くに広がるトリスタニアの風景を見て嬉しそうな声を出している。

(やつぱり連れてきて良かったわ)

こないだからというもの、キュルケはルイズの様子が少しおかしかったのに気付いていた。

事あるたびにリウスを心配そうな顔で見たと思うと、不思議そうに首を傾げていたのだ。

ただルイズにも何か明確な悩みがある訳でもないらしく、リウスと話している時の様子も、からかった時の反応もいつもと変わりがあつた訳ではない。

たぶん私の杞憂なのだろうが、二人ともシルフィードの背には乗つたことがなかつただろうし、楽しんでもらえたのなら何よりだつた。

キュルケがさうこう考へていると、シルフィードは高度を下げてトリスタニアの城門から少し離れた場所に降り立つた。

全員がシルフィードの背から地面に降りると、タバサの指示を出されたシルフィードが飛び去つていく。

一行はそれを見送つてから順々にトリスタニアの城門へと向かつていった。

トリスタニアで売られている本は高級雑貨の類である。

それはトリスタニアで売られているからではなく、羊皮紙で出来たまともな本という

ものが高級な嗜好品であるからだ。

活版印刷があるとはいえ、結局のところ羊皮紙代やインク代などで相応の値段がかかるために、庶民は複数人でお金を出し合って本を回し読みするのが一般的である。

リウスは昨日の時点でそのようなように説明を受けていたため、多くの書籍工房が立ち並んでいるこの通りにここまでの人がいるとは思ってもしなかった。

通りはそこまで狭くもないのに、人を避けながら歩かなければならぬくらいである。

「凄い人ねえ。いつもこんな感じなの？ あ、リイズ。ちゃんと付いてこないとはぐれちゃうわよ」

「こないだ、ある小説の続きが出たのよ。多分そのせいだと思うわ。私もそれを買いに来たって訳」

リウスとリイズがキュルケに付いていくと、少し先の店に多くの人だかりが出来ている。

その人だかりがある店には、でかでかと文字が書かれた羊皮紙が掲げられていた。

「ええと、『禁断のロマンス、待ちに待った新刊発売！』・・・？」

「これよこれ、やっと買えるわ。あ、ちよつと失礼」

キュルケが慣れた雰囲気の人混みをかき分けて入っていくと、しばらくしてから小さ

い皮袋を手に戻ってくる。

「ロマンズ本ねえ。人気あるのね」

「そうよお。いいわよこれ、リウスも読んでみる？」

皮の小袋をぶらさげながら、キュルケは今来た道を引き返していく。

先ほど別行動を取ったタバサを探しているのだろう。

「ふーん。どうせロクでもない本なんでしょうけど、どういう本なわけ？」

無然とした声でキュルケの横に立つリウスが聞いているが、リウスはその様子にピンときた。

案外リウスもこういった本に興味があるのかもしれない。

「ある平民のメイドが偶然ある男性と知り合つて恋に落ちるけど、実はその彼つていうのがお金持ちの貴族の息子なの。二人は周りに反対されながらも愛で乗り越えて……。

いいわねえ、障害のある方が恋も燃え上がるわ」

「なな、何なのよその本、貴族と平民が愛だの恋だの……。不謹慎よ不謹慎」

「まだお子ちゃまのリウスには分からないかもしれないわね。ほら、この本買いにきてるのは平民だけじゃないわよ？ 男の人だつて買う人がいるくらいなんだから」

リウスとリウスが先程の人だからへと振り返ると、数は多くないが確かに身なりの良い貴族の女性もあの本を購入しているようだ。

「この通りには来たことがなかったから、ルイズとキュルケとタバサと一緒に来たのよ。シエスタもあの本買いに来たの？ 凄い人気ねえ」

「あ、そうだったんですか。あの前作を読みましたがとつても素敵ですよ。お貸しすることも出来ますので、ぜひ読んでみてください。皆でお金を出し合って買いましたけど、リウスさんに貸すなら皆オーケーしてくれるはずですよ」

そう言うシエスタの後ろから数人の女の子が近付いてきていた。

みな学院で見たことのある顔だったので、リウスは彼女達と軽く挨拶を交わす。

「じゃあそろそろ行きますね。あ、すみませんリウスさん。出来ればあの本を買いに来たことは貴族の方々にはご内密に……」

「分かっているわよ。誰にも言わないわ」

リウスが笑顔で返すと、安心した様子のシエスタ達は会釈混じりにその場を去っていった。

そうしてリウスがはぐれてしまったキュルケとルイズを探しながら通りを歩いていると、今度はタバサの姿を見つけた。

「どう？ 良さそうな本はあった？」

リウスがそう声をかけると、タバサはいつもの眠そうな目をしながらリウスの顔を見上げる。

「これとか、役に立つと思う」

タバサがそう言いながら差し出してきた本を受け取る。

その表紙には『トリストインの文化と歴史　くアナタの故郷も完全網羅！く』というタイトルがあつた。

「あ、これいいわね」

「この本なら持つてる。学院に戻つたら貸す」

「借りると汚しちゃうかもしれないし、お金も持つてきてるから買っちゃうわ。」

ただ分からないところがあつたら聞いてもいいかしら？」

「そう。わかつた」

言葉少なげなタバサが目の前のお店員に他の本を渡すと、タバサはどうやらここのお得意様だったようで、その店員はリウスが買おうとしていた本も一緒に値引きしてくれた。

リウスとタバサが歩きながらキュルケ達を探していると、少し先に二人の姿を見つけた。

リウスもこちらに気付いたようで、桃色の髪をなびかせながら小走りに近寄ってくる。

「何はぐれてるのよ。探しちゃつたじゃない」

「ごめんごめん。でもタバサのおかげで良いものが買えたのよ」
「もう、ご主人さまをほつといて何やってるのよ。ちゃんと付いてきてよね」

そう言つてリウスの手を引くルイズ、そして自分の横を歩くタバサを見て、キュルケは満足そうに微笑みを浮かべた。

リウスの手を引くルイズは随分と嬉しそうで、目の前を歩く二人はまるで仲の良い姉妹のようだった。

リウスもリウスで、初めて会った頃に比べるとずいぶん肩の力が抜けているように見える。

先ほど合流した時のタバサも、無表情なのは変わっていないが少しばかり楽しそうな雰囲気を漂わせていた。

(知つてはいたけど、やっぱり私はすごいわがままなのよね)

さつきルイズをからかいながら歩いている時、少し遠目にギーシュとモンモランシーを見つけた。

あれこれと話しかけているギーシュに対して、モンモランシーは少し頬を染めながらツンと澄ました顔で歩いていた。

たぶん、ギーシュの思惑は上手くいったのだろう。

辛く、悲しいことがあつても時々ならいい。

ただ、人生は楽しいことの多い方が良いに決まっているのだから。

(あとは、素敵な殿方でもいればもつと良いんだけど)

キュルケはそう思いながらも、年相応の少女らしさを伺わせながら、楽しそうな学友たちと一緒に通りを歩いていくのだった。

第二十話 王女、ご行幸

今日の授業の担当は、どこか根暗な雰囲気をも漂わせる教師、ミスタ・ギトーである。彼はフーケ騒動の時、やたら揉めてはミス・シュヴルーズを批判していた男だった。日頃から自身の扱う系統をよく自慢しているが、そのくせ盗賊騒ぎでついに名乗りを挙げることがなかったことは生徒達の中でも既に周知の事実である。

要はその程度の器量なのだ、と生徒達は噂していたのだった。

元々嫌味つたらしい性格をしているのでギトーを庇う生徒もほとんどおらず、生徒達は口々にギトーへの悪口を吹聴していた。

今回の講義でも、彼はいつものように嫌味つたらしく自分の系統について語っている最中である。

風の魔法についての長い講釈を終えたギトーは、生徒達を見回してから口を開いた。

「最強の系統を知っているかね？ ミス・ツエルプストー」

「『虚無』じゃないんですか？ ミスタ・ギトー」

「伝説の話をしているわけではない。現実的な答えを聞いているのだ」

キュルケは不快そうに眉を吊り上げる。

「『火』に決まっていますわ。全てを燃やし尽くせるのは炎と情熱、そうじゃございませんこと?」

不快そうな顔をちゃんと整えてから、キュルケは自信ありげに胸を張って答える。

しかしギトーは含みのある笑いを浮かべると、急に杖を引き抜いた。

周囲がどよめき出す中で、キュルケは先ほどよりも更に不快そうな表情になっていた。

ギトーは明らかにキュルケを舐めきった笑みを浮かべている。

「・・・火傷じゃすみませんわよ?」

「構わん、本気で来たまえ。その有名なツエルプストー家の赤毛が飾りではないならな」
例によって男物の平民の恰好をしているリウスは、先生ともあろう人が何を子供じみたことをやってるのかしら、と呆れ半分にその様子を見守っていた。

こんなことでは、かつてのギーシュのような貴族がいたとしても仕方が無いように思える。

キュルケはまるで仇敵を見るかのようにギトーを睨み付けると、胸元から自身の杖をゆつくりと取り出した。

そのまま詠唱を始めると、杖の先に拳程の小さな炎が浮かび上がる。

そしてキュルケの詠唱に合わせてその炎は徐々に大きくなり、最後には直径一メートル

はあろうかという炎の塊が杖の先に浮かんでいた。

それを見た周囲の生徒達はざわめきながらも避難を開始していく。

キュルケは生徒達の避難が終わるのを確認してから躊躇いなくギトーに向けて杖を向けると、ボン、という音と共に、渦巻く炎の塊がギトーの元へと放たれた。

しかしギトーは小馬鹿にした表情を崩そうともせず、余裕な態度のまま軽く杖を振るった。

すると、ギトーの目前で八方から強い突風が巻き起こった。

大きな炎の塊はその突風によってもみくちゃになり、ついには散り散りになって消えていく。

キュルケや他の生徒達が驚きの表情を浮かべる中、その舞い上がった風は勢いを落とさずにキュルケに向かって押し寄せていく。

(吹き飛ばされる……！)

自身の炎が、こうまで容易く消されるとは。

悔しさに顔を歪ませたキュルケは、向かってくる暴風に身体を縮めて身構えた。

しかし、キュルケの視界の端には短剣を逆手に持ったりウスの姿があった。

『アーススパイク』

どん、と音を立ててキュルケの目の前に石の柱が突き立った。

その石柱によってギトーの突風は二つに割れ、キュルケ以外の椅子や本を吹き飛ばしてから消えていった。

「・・・何のつもりかね？ ミス・ヴァリエールの使い魔」

顔を動かさずに、目だけでリウスを睨み付けるギトー。

それに物怖じすることもなく、リウスは椅子に座ったまま手に持つ短剣を腰のベルトにしまう。

そして、ギトーへ向かって平然と微笑んだ。

「素晴らしい魔法ですね、ミス・ギトー。僭越ながら、実技はここまででいいかと存じます。ああ、私の魔法は学校の備品を何一つ傷つけてはいけませんので、ご心配なさらず」と、キュルケの目の前に立つ石柱はすると散らばった椅子や本だけである。

残るのはギトーの暴風によって散らばった椅子や本だけである。

「何故私の邪魔をした、と聞いているのだ」

「ミス・ギトーは不思議なことを仰いますね。魔法の実演はもう示されたはずですよ。先ほども言ったように、授業の実技はここまででいいのでは？」

面白くなさそうなおギトーは無然とした顔をリウスに向けると、嫌味つたらしく口元を吊り上げた。

「そういえば、このクラスには君が決闘をした生徒がいたね。私にも同じように決闘で

も申し込む気かね？」

「そ、それは違います、ミスタ・ギトー！ あの決闘は僕から仕掛けたものです！」

教室の端にいたギーシュが声を張り上げるが、ギトーは気にした様子もなくリウスを睨み付けている。

「決闘など。貴方にそんなものは申し込みませんよ。そもそも貴方は強力なメイジなのですから、どちらにせよミス・ツエルプストーを傷つけるつもりなどなかったのではないのですか？」

「ほう、強力なメイジだと分かった途端に逃げ腰かね。決闘は勝てる者としかしないと言うことか」

そのギトーの言葉にルイズや他の生徒も声を張り上げようとするが、それよりも先にリウスが口を開いた。

「確かに私は貴方よりも未熟なメイジです。ですが、私は人を傷付けるためだけに魔法を使うつもりはありません。貴方は違うのですか？」

生徒達がその言葉に緊張を走らせる中、ギトーは苦虫を噛み潰したかのように顔を歪ませた。

「……君は、つくづく貴族を苛立たせることに慣れてるようだ」

明らかに苛ついた表情のギトーに対して、リウスも鋭い視線をギトーへと向け始めて

いた。

隣にいるルイズには何となく分かってはいたのだが、リウスはギトーのような行動を元々嫌ってはいそだった。

この一触即発の雰囲気では、ルイズが口を出した所でミスタ・ギトーもリウスも引き下がらないだろう。ルイズは無事に終わりますようにと、はらはらしながら見守っていた。

「最強の系統とはどのようなものか……。その前では東方の魔法など、無力だということとを教えてやろう」

「最強など、そのようなことで分かるとも思えません」

その言葉にも答えずに、ギトーは杖をリウスへと向ける。

それを見て眉をしかめたリウスはゆっくりと席から立ち上がり、生徒たちがいない場所まで移動していく。

「ほら、どうした？ その短剣を構えなくてもいいのかね？」

「私は、戦う気などありませんから」

しかし、リウスはベルトに挟んである短剣の柄頭へと手をやった。

そして軽く触れることで、自分の体からガンタールヴのルーンの力を引き出しておく。

「・・・そうか、ならばいいだろう。その慢心を後悔するといい。

ユビキタス・デル・ウインデー——」

「失礼しますぞ！」

ギトーの詠唱が終わる寸前、急にバァンと教室の扉が開かれた。

ギトーはその音にびくりと体を震わせるが、リウスは動じた様子もなくギトーから視線を離さずにいる。

ギトーの姿が一瞬左右へとぶれると、リウスはその瞬間を逃さずに小さな声で呟いた。

『『スperlブレイカー』』

ギトーは魔法を詠唱し終わると同時に、自分の体から放出しようとした精神力が急に失われていくのを感じた。

そして何故か、自分の体が妙な虚脱感に包まれていく。

「な、何だ？」

ギトーは焦った様子で自分の周囲を見回したが、自分の周りに存在しているはずの分身たちは影も形も無い。

乱入者があつたとはいえ、確かに自分は『偏在』の魔法を成功させたはずだというのに。

ギトーが唱えた『偏在』の呪文は、風によつて自分自身の分身を作り出すスクウェア・スペルである。

分身はそれぞれが思考を持っているため、偏在を使えば複数の呪文を同時に扱うことすらできる。

先ほどの石柱で自分の突風が防がれたことを警戒していたギトーは、防げない範囲での魔法を繰り出すための下準備として『偏在』を唱えていたのだった。

「ええと、皆さんは何をされているのですかな？」

素つ頓狂な声を上げたのは、教室の扉の前に立っていたコルベールだった。

先ほど扉を勢いよく開けてきたのは彼だったようだ。

その頭にはロールした大きいカツラを乗せ、やけにゴテゴテとした派手すぎる服を着ている。

普段の彼を知るものから見れば、とうとう心労で気がおかしくなってしまったのかと心配してしまう恰好である。

生徒達の視線は、ドアの前のコルベールと、教壇に立つギトー、そしてギトーを見据えたままのリウスを行ったり来たりしていた。

その様子にコルベールもぼかんとした表情を浮かべている。

ギトーは間の抜けた顔をしているコルベールを睨み付けてから、リウスに顔を向けて

口を開いた。

「貴様、何をした」

「私は何もしていませんよ。てつきり、ミスタ・ギトーが矛を収めてくださったのかと思ったのですけれども」

リウスはけろつとした顔で言う。

しかし、内心では困ったことになったかなと思っていた。

キュルケがいい様に扱われそうになったので、ついギトーの風を防いでしまった。

しかし、そのことで教師からここまで扱いを受けるとは思っていなかったのだ。た。

『スペルブレイカー』は、相手の詠唱に合わせて放つことで対象が構築している魔力を一時的に狂わせる呪文である。

要は、強制的に魔法を失敗させる呪文だった。

そして、対象の魔法失敗によって空中に四散した魔力はすぐさまスペルブレイカーを放った術者の元へと吸収することができる。

半ば強制的に魔力の構築へ介入するため、対象となる相手にはほんの少しだけダメージが残ってしまうのだが、リウスが気にしていたのはそこではなかった。

ギトーから吸収した魔力が、予想よりもはるかに多かったのだ。

彼らが自分自身の魔力しか使っていないことを鑑みると、相当な高レベルの魔法を放とうとしていたように思える。

リウスも流石にそこまでギトーが怒っているとは思わなかった。

ようやく落ち着きを取り戻したギトーはリウスの両手をじつと観察していた。

確かに、この使い魔は自身の杖であるはずの短剣を握ってはいない。

だとすれば、この私が魔法を失敗したということか？

「ええと、ミスタ・ギトー。そろそろよろしいですか？」

話の呑み込めていないコルベールが、何やら考え込んでいるギトーに向けて声を上げる。

「何の用ですか、ミスタ・コルベール」

若干いらついた声で、ギトーはコルベールへ顔を向けた。

コルベールは彼の苛立ちにも気付かず、待つてましたとばかりに勿体付けた調子で口を開いた。

「えー、皆さんにお知らせですぞ。本日はトリストイン魔法学院にとって、良き日であります！」

更に勿体付けるかのように、コルベールは一息入れてから続けた。

「恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見、我がトリストインがハルケギニアに誇る可憐な一輪

の花、アンリエッタ姫殿下が、本日ゲルマニアのご訪問からのお帰りに、この魔法学院に行幸されます!!」

途端に、周囲がざわめき出す。だがそれも当然のことだった。

アンリエッタ姫はトリスティンの間では知らない者はいない程、有名な王家の一人だった。

多くの貴族たちが、みな彼女のために命と杖をささげる程の人気である。

特に、ギーシユなどの若い男性貴族からは大いに人気があった。

「決して粗相があつてはいけませんぞ。急なことですが、今から全力を挙げて歓迎式典の準備を行います。よつて本日の授業は中止。生徒諸君は今すぐ正装に着替え、門に整列すること! よろしいですか?」

その言葉に生徒達は一斉に姿勢を正す。

そんな生徒達の様子を満足げに見つめたコルベールは、おほん、と喉の調子を戻してから話を締めくくった。

「諸君が立派な貴族に成長したことを、姫殿下にお見せする絶好の機会ですぞ! 御覚えがよろしくなるように、各々しっかりと杖を磨いておきなさい!」

魔法学院に続く街道を、聖獣ユニコーンにひかれた王家の馬車が静々と進んでいた。その四方を王家直属の近衛隊が囲んでいる。

彼らは漆黒のマントを帯び、鷲の頭に立派な羽を持ったグリフォンに跨りながら静かに王族を守護していた。

馬車の中には、トリステイン王女であるアンリエッタが座っていた。

今年で十七歳になる、みずみずしく美しい少女である。

絹のように柔らかな紫の髪に、透き通るような水色の瞳。

その可憐な美貌もあつて国民からの人気は絶大だが、今のところ政治的な実権は持っていない。

その隣には、王国の政治を一手に握っているマザリーニ枢機卿の姿があつた。

彼は今年で四十だが、トリステインの内政も外政も全てを一手に引き受ける激務のため、年齢よりも十も二十も老いて見える。

彼は国民からあまり人気が無いが、この国の実質的な最高権力者ともいえる人物であつた。

アンリエッタが沈んだ顔で溜め息をつくとき、カーテンを閉め切った窓の向こうからふいに歓声が上がつた。

聖獣ユニコーンを連れた馬車を見て、アンリエッタ姫が通ると気付いた平民達だろ

う。

「トリステイン万歳!! アンリエッタ姫殿下万歳!!」

それに答えるべく、レースのカーテンを開けたアンリエッタは優しく微笑みながら顔を覗かせる。

すると、平民達から更に大きな歓声が上がった。

やがて人気の無い場所まで馬車が移動すると、アンリエッタはカーテンをそつと閉じて、小さく溜め息をついた。

「これで十三回目ですぞ、殿下」

「分かっておりますわ」

その虚ろな声に、マザリーニこそ溜め息を吐きたい気分だった。

この様子では自分が先程から話しかけていた政治の話をちゃんと聞いていたかも怪しい。

「王族たるもの、無闇に臣下の前で溜め息を吐くものではありませんぞ」

「王族ですつて? まあ、このトリステインにおける王は貴方でしょう? 今城下町で流行っている小唄をご存じないのですか?」

「存じませんな」

枢機卿は努めて何も知らないかのように答えた。

しかしこのマザリーニは、ハルケギニアの事なら何でも知っていると貴族の間で知られている程の人物である。

ふざけた貴族が『ガリアとロマリアの国境沿いにある火竜山脈のドラゴンには何枚の鱗があるか』と質問して、それを即答したというのはトリステイン貴族の中でも非常に有名な小話だった。

そんなマザリーニが巷で流行っている小唄を知らないはずがないのである。

しかし、最近この姫はいつもこんな調子だった。

そのため、マザリーニは内心不快に思いながらも敢えて知らないふりをしてきたのだ。

それをアンリエッタは知りながらも意地悪そうに続ける。

「それなら聞かせて差し上げますわ。

『トリステインの王家には、美貌はあれど杖は無し。杖を握りし枢機卿、灰色帽の鳥の骨』」

マザリーニは特に何の感慨も無さそうに、美しく歌われる唄を聞いていた。

鳥の骨などと陰口を言われるのは残念ながら慣れきっている。

「殿下、お止めください。下賤にも程がありますぞ。そこらの街娘が歌う小唄など、口にしてはなりません」

その反応に、王女はつまらなそうな顔をして枢機卿をじとりと見据えた。

「良いではありませんか、小唄を口ずさむくらい。あと一年もしない内に、私は貴方の言いつけ通りゲルマニアに嫁ぐのですから」

アンリエッタが極めて不満に思っていたのはこの件だった。

この問答も何度したのかすら分からない程である。

マザリーニもそんなアンリエッタを内心不憫に感じていたのだが、こればかりはどうしようもない。

「仕方がありません。我が国トリスティンにとって、目下ゲルマニアとの同盟締結は何よりも優先すべき急務なのです」

「それくらい私とて分かっております」

憂鬱そうな表情で、アンリエッタはふいと横を向いた。

「レコン・キスタとかいう者共が、アルビオンの可哀そうな王様を捕らえて縛り首にしようとしているのでしょうか？」

「仰る通りです。かの『白の国』アルビオンの阿呆共は『革命』と称して王権を乗っ取るうとしております。既にアルビオン軍はそのほとんどがあの者共の手に落ちました。

そしてその軍事力を持って、次は我々トリスティンへと矛の先を向けるでしょう」

「何という礼儀知らず共なのでしょう！ 国を治め、臣民を慈しむ王家に刃を向けるな

どとは！

この世の全てが彼らの愚かな行為を許したとしても、私は許しませんわ。そして始祖ブリミルも決して許さないでしょう。ええ、許しませんとも！」

マザリーニはその皺だらけの顔にかすかな笑みを浮かべるが、すぐいつもの仏頂面へと戻る。

「良い心がけです。しかし寝返つたアルビオンの貴族共は強大の一言に尽きます。あの高名な、アルビオン空軍のほぼ全てが裏切つたのですから。王家は最早風前の灯にも等しいものとなつており、このままでは明日にでも王家は倒れてしまふでしょう。

始祖ブリミルが授けし三本の王権の内的一本が潰える訳ですな」

マザリーニは眉間に皺を寄せながら、続いてぼつりと呟く。

「まあ・・・、内憂も払えぬ王家に存在など価値もなし、とも思えるところですが」

その言葉に王女の澄んだ薄いブルーの瞳が厳しく光る。

王女は静かに、しかし威厳を持ってマザリーニを咎めた。

「アルビオン王家の方々にはゲルマニアの様な成り上がりとは違い、古くから我々トリスティン王家との親族にあたる王家なのですよ。幾ら貴方が枢機卿と言えども、その様な言い草は許しません」

そのアンリエッタの様相はまさに王家のそれであつた。

その姿を見たマザリーニは静かに頭を下げる。

「失礼致しました。本日の就寝前に始祖ブリミルの御前で許しを請うことにいたしました。しかし、先程お伝えしたことは全て事実でございます。そして奴等はハルケギニア統一などと馬鹿げた夢物語を吹聴しております。殿下、分かっておられますな？」

その言葉を聞いたアンリエッタは重々しく口を開いた。

「あの者共が次に狙うは、我々トリステイン。アルピオンの軍事力はトリステインとゲルマニアが手を組んでようやく同等。だからこそゲルマニアとの婚姻がいる。そういうことですわね？」

アンリエッタは少しカーテンを開くと、つまらなそうに外を眺めながら小さく溜め息を吐いた。

「先を読み、先手を打つ事。それが政治なのです。私とて、殿下のお心に沿わぬことをお望みするのは本意ではございません。しかしこれは王家のため、そしてトリステインの民草のためなのです。王家の務めとして、ゲルマニアへ嫁がれることは決まったものとお考え頂きたい」

アンリエッタは、もうその言葉に答えるつもりもないようだ。

そんな王女の様子に目を細めたマザリーニは窓のカーテンを少しずらし、外にいる腹心の部下を見る。

そこには年にして二十代の後半ほどの、羽帽子を被った若い貴族がいた。

口髭を生やして凛々しく精悍な顔立ちをしている。

彼はトリステイン王室に存在する三つの魔法衛士隊の一つ、王家守護の任を受けているグリフォン隊の隊長、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド子爵である。

「猊下、お呼びですか？」

マザリーニが顔を出したことにすぐ気付いた彼は、乗っているグリフォンを馬車の窓へと近付けた。

「ワルド君。殿下のご機嫌が麗しくない。何か気晴らしになる物を見つけてきてはくれんか？」

厳かに頷いたワルドは少し周りを見渡すと、街道の向こうに見える花畑へグリフォンを駆っていった。

花畑にゆっくり着地したワルドは腰に差してあるレイピア状の杖を引き抜くと、短くルーンを詠唱して咲き誇る花々を宙へと吹き飛ばす。

その中の白く大きな一輪の花を手にとって、ワルドは馬車へと戻ってくる。

彼はそれを優しく両手に包んで馬車の窓から枢機卿に渡そうとしたが、マザリーニは自身の顎を撫でながら低く呟いた。

「ワルド君。殿下がおん自ら受け取って下さるそうだ」

「光荣でございます」

ワルドが馬車の反対側へと回ると、すぐに窓が開いてアンリエッタが手を伸ばす。その手にワルドは花をそつと手渡した。

すると馬車の窓からもう一度、今度は反対の手が差し出された。

ワルドは厳かな表情で、その手に恭しく口づけをする。

その手が静かに窓の中へと消えると、続いて馬車の中からアンリエッタが顔を覗かせた。

「綺麗なお花ですわね。ありがとうございます。隊長さん、貴方のお名前は？」

「ご拝顔を賜りまして光荣でございます。恐れながら、わたくしはジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドと申します」

「まあ。ワルドという領地には聞き覚えがありますわ。ヴァリエール家の近くにある領地ですわね」

「はつ。ヴァリエール公爵家の方々とは、以前より大変ご懇意にして頂いております」

「そうでしたか。このお花、ありがたく頂きますわ。わざわざありがとうございます」

アンリエッタはそう言うのと、その細い手で窓をそつと閉じた。

「随分お若い方でしたわね。枢機卿、あの方は使える者なのですか？」

「そうですな。彼の二つ名は『閃光』です。風のスクウエアであり、グリフォン隊の隊長

だけあってその実力は折り紙つきです。かのアルピオンにもあれほどの使い手はおりますまい」

「そうですか。それは、頼もしいですわね」

アンリエッタは先程よりも少し和らいだ表情で、手に持った白い花を眺めた。

「この花のように、力強く野に咲く花々を羨ましく思いますわ。自らの力で咲き誇る花にこそ、美しさが宿るのではないでしょうか」

「そうですね。しかし、野に咲く花もいつかは枯れるか、何者かによつて摘まれてしまうものです。家々に飾られる花と何が違いましたでしょうか」

「・・・分かつておりませんわね」

そのマザリーニの言葉に、アンリエッタはもう一度深い溜め息を吐くのだった。

第二十一話 古き友の来訪

重々しい音を立てて魔法学院の正門が開いていく。

その正門の向こうには、王女が乗っているらしき立派な四頭立ての馬車が佇んでいた。

整列してそれを待ちわびていた生徒達が一斉に杖を掲げると、召使たちは馬車から学院本塔の玄関まで鮮やかな赤色の絨毯を敷きつめていく。

「トリスティン王国王女、アンリエッタ姫殿下のご到着——っ!!」

呼び出しの衛兵が王女の到着を高らかに告げると、音楽隊の音と共に馬車の扉が開く。

まずは枢機卿のマザリーニが、続いて彼に手を取られたアンリエッタ王女が姿を現した。

マザリーニの人気はあまりないのか、最初に出てきた彼に大してはさほどの拍手も起きていなかったのであるが、王女が姿を現わすと、それとは一変して生徒達から盛大な歓声が上がった。

王女はにっこりとほほ笑みながら、優雅に手を振ってそれに答えている。

「あれが噂のトリスティン王女？　へー、ゲルマニアで聞いてた程じゃないわね」

キュルケは生徒達の列から少し離れた場所で、つまらなそうに歓迎式典の様子を眺めていた。

他国からの留学生である彼女には、他の生徒ほどの熱気はないようだった。

タバサにいたっては地面に座ったまま、我関せずといった具合に本を読みふけている。

それに反して、ギーシュとモンモランシーは生徒達へ手を振っている王女に感極まった面持ちである。

リウスもしばらく王女や枢機卿の様子を眺めていたが、ただ眺めているだけだった。

先程はギーシュやキュルケからトリスティン王国の内情についていくつか聞きはしたが、知りもしない王族に対して別に光榮な気持ちなど沸き立つはずもない。

リウスが軽く首を回してからルイズへ目を向けると、ルイズは少し紅潮した顔で一点を見つめていた。

視線を辿ってみると、どうやらルイズが見ているのは王女達から少し離れた場所のようだ。

多分あの、つばの広い羽帽子の男を見ているのだろう。

その逞しい顔つきの壮年の貴族はグリフオンのような野獣に跨りつつ、静かに王女達

の後ろに控えている。

跨っているグリフォンは他のグリフォンよりも一回り以上も大きい。

リウスの世界、ラヘルの荒野に住むグリフォンと比べても、明らかに巨大なグリフォンである。

そんな野獣に平然と乗っているところを見ると、彼があ部の部隊の隊長格なのだろうか。

「あら、良い男じゃない」

その声にリウスが振り向くと、キュルケがあ部の壮年の貴族を見てうっとりとした表情を浮かべている。

どこかに良い殿方はいないかと以前ぼやいていたキュルケだったが、あの貴族はそのお眼鏡にかなったというところか。

もう一度、リウスはルイズの顔を見た。

ぼんやりと見つめているその表情は、まるで恋する乙女である。

この子の性格を考えるに、一目惚れしたことではないのだろう。

(あらあら。そうだったのね)

ルイズの意外な一面を見ることになったリウスは、ほっとしたように嬉しそうな表情を浮かべていたのだった。

晩餐会から帰ったルイズは未だに惚けたような表情のままで、ベッドの上に寝転がっていた。

リウスが声をかけても返ってくるのは生返事ばかりである。

まあいいか、とリウスは特に気にした様子もなく、デルフリンガーの手入れを行なっていた。

ちゃんとした装備は持っていないので単なる気休めにすぎないが、久々の手入れにデルフリンガーは上機嫌な様子だ。

「おお・・・、そこだぜそこ。相棒、手慣れていやがるな。大したもんだぜ・・・」
「変な声出さないでよ。突っ込む気力も失せちゃうでしょ」

先ほど物は試しとデルフリンガーの刀身についた錆を学院の衛兵から借りた簡単なやすりで削ろうとしたが、やっぱりこの錆は落とせないようだった。

錆が落とせないからには仕方がないので、柄やつばを綺麗に掃除して、刀身には簡単に植物油を塗ってから固めの布で擦ってみたりしている。

刀身の錆が残ったままなので意味が無いといえはそうなのだが、心なしかデルフリンガーが綺麗になった気がする。

しかし、リウスは少し不満そうな顔をしながらデルフリンガーを眺めていた。

「錆さえ無ければ全部キレイに出来るんだけどねえ。デルフ、貴方はこの錆を何とか出来ないんだっけ？　なんか中途半端でモヤモヤするわ」

「？　どういうことだ？　普通の錆じゃねーのか？」

そのとぼけた言葉にリウスは心底呆れた顔をする。

「あんたね・・・、自分のことも忘れちゃってどうするのよ。前に、この錆がデルフの魔力を隠してるって言ったでしょ。だとしたらこの錆はわざと付けられてるってことじゃないの。まあ貴方を作った人が付けたんだらうけど」

「そうだっけか、忘れてたわ。うーん、錆を落とす方法ねえ」

デルフは少しの間ウンウン唸ったかと思うと、あっけらかんとした声で答えた。

「何かあった気もするけど、錆落とす方法なんて忘れちゃった。だってほら、俺たち剣だもんよ。どっかで思い出すんじゃないか？」

またそれか、とリウスはため息をついた。事あるごとにこの調子である。

しかし、この言い分だとデルフリンガーにも記憶に引つかかる部分があるのかもしれない。

本当に忘れてるだけなのであれば、いずれ思い出すこともあるだろう。

すると突然、扉がノックされた。ノックは規則正しく叩かれる。

初めに長く二回、それから短く三回……。

ベッドで寝転んでいたルイズがはつとした顔をして立ち上がった。

そして急いで扉へと駆けていき、扉を開ける。

そこに立っていたのは黒いローブにフードをすっぽりと被った人物だった。

その人は注意深く周囲を伺ってから素早く部屋の中に入ると、後ろ手でドアを閉めた。

「……あなたは？」

ルイズの怪訝そうな声に、黒づくめの人物は口元に指を立てる。

どうやら声を出して欲しくないようだ。

すると、その人はローブの隙間から杖を取り出してルーンを唱えた。

杖の先から光の粉が舞う。

「ディテクトマジック？」

部屋に舞った光の粉を見たルイズに対して、ローブの少女が頷いた。

「どこに目や耳があるとも分かったものではありませんから」

声は少女のものだった。

その少女が頭に被ったフードを外すと、その顔にルイズは驚いた表情をする。

フードを外したのは、アンリエッタ王女その人であった。

その顔を見たリウスは別の意味で驚いていた。

間近で見た王女の顔は、あまりにも美しいものだったのだ。

これは人気が出るはずだわ、とリウスは一人で納得する。

「姫殿下！」

思わずルイズが膝をついたのを見て、リウスも居住まいを正してからルイズに倣って膝をついた。

「お久しぶりね、ルイズ・フランソワーズ」

王女はにこやかにルイズの名前を呼んだ。

その笑顔は正門で見た顔と同じではあったが、その雰囲気は正門にいた時よりも温かいものを感じる。

「姫殿下、いけませんわ。こんな下賤な場所に……」

嬉しそうにルイズへ歩み寄るアンリエッタに対し、ルイズは畏まった顔を伏せたままだ。

それを見て、アンリエッタは悲しそうな表情を浮かべた。

「ああ、ルイズ！ そんな堅苦しい行儀はやめて頂戴。ここには枢機卿も、母上も、あの友達面をして寄ってくる欲の皮の突っ張った宮廷貴族達もいないのですよ！」

ああ、もうわたくしには心を許せるおともだちはいないのかしら。貴方にまでそんな

よそよそしい態度を取られたら、わたくし死んでしまいますわ!」

一気にアンリエッタがまくし立てると、ルイズもようやく顔を上げた。

ルイズはその様子から、溜まつてるってやつなのかしら、と思いつつも、極力二人の邪魔にならないようにひっそりと顔を下げたままでいた。

そして、二人は昔の話に花を咲かせ始めた。

「幼い頃、一緒になって宮廷の中庭で蝶を追いかけたじゃないの。泥だらけになって!」
「ええ! お召し物を汚してしまって、侍従のラ・ボルトさまに叱られました!」

「そうそう。あと、ふわふわのクリーム菓子を折り合って、掴み合いになったこともあったわね! 喧嘩になると、いつもわたくしが負かされていたわ!」

「いえ、姫様が勝利をお収めになったことも一度ならずございました!」

「他にもほら! 覚えているかしら? わたくし達がアミアンの包囲戦と呼んでいるあの一戦のことを!」

しばらくの間、二人は昔の小さな頃の記憶を確かめあつては、それを幸せそうに語っていた。

「ああ、本当に懐かしい。懐かしくって涙まで出てきてしまったわ。あの頃は本当に自由で、毎日が楽しかった。出来るのなら、いつまでも子供のままでいたかったわ!」

目尻に浮かんだ涙をそっと拭って、アンリエッタは呟いた。

その響きにはどこか悲しみが混じっているように聞こえる。

「姫様……」

「結婚するの、わたくし」

アンリエッタは悲しげな微笑みを浮かべてルイズへと告げた。

「おめでとうございます……」

ルイズにも何となく分かっていった。

多分これは望まぬ結婚なのだ。

トリスティン唯一の王女である彼女の立場を考えると、その事情は容易に想像ができた。

しかし、ルイズにはありがちな祝福の言葉しか送ることができなかった。

「愛する者と結ばれるのが女の幸せよ。あなたにも、いつかきつと愛する人が目の前に現れるわ。いえ、もういるのかもしれないわね。せめてルイズ、貴方は愛する人と結ばれることを願ってるわ」

部屋が暗い雰囲気になってしまったのを感じたのか、アンリエッタはぱつと顔を上げて努めて明るい表情で口を開いた。

「そういえば、ルイズはもうこの学院の二年生でしたわね。使い魔の召喚も行なったの
でしよう?」

はっとしたルイズは背後にいるリウスへと顔を向けた。

リウスは未だにその顔を下げた姿勢のままである。

「はい。ここにいますのが私の使い魔です」

ルイズはそう言うのと、後ろで控えているリウスを腕で示した。

「あの、人にしか見えないのですけれど」

「人でございます。そして東方のメイジでございますわ。姫殿下」

「まあ・・・」

アンリエッタは驚いたように口を開けながら、まじまじと薄い桃色髪的女性を見つめている。

「凄いわねルイズ。東方からメイジを召喚するなんて、王宮に仕えるスクウェアメイジにもいないわ。あなたは昔から変わっていただけけれど、相変わらずなのね」

そうルイズに微笑んだアンリエッタが、もう一度顔を伏せたままのリウスを見る。

「使い魔さん、顔を上げてくださいな。貴方のお名前を教えて頂けるかしら？」

そう言われたリウスは少しだけ顔を上げた。

「では、恐れながら。わたくし、ルイズ・フランソワーズが使い魔、リウスと申します。

以後お見知りおきを」

「（こちらこそ、今後ともよろしくお願いたしますわ。使い魔さん、ルイズを守ってあげ

てくださいね」

「はい。たとえこの身が砕けようとも、我が主人を守る所存にございます」

その言葉にルイズは少し怒ったような、悲しそうな表情を浮かべながらリウスを見るが、リウスもアンリエッタもその表情に気付いた様子はない。

「では、貴方にも聞いてもらいましょうか……。いえ、でも……」

その煮え切らない様子に、リウスは静かに口を開いた。

「もしお邪魔であれば、退室いたしましたましょうか?」

「いえ、メイジと使い魔は一心同体。席を外す理由はありませんわ。……実は、先程のゲルマニアとの婚姻の話です」

その言葉にルイズが驚愕の声を上げる。

「婚姻というのは、ゲルマニアとの婚姻なのですか? あの成り上がりの国と?」

アンリエッタは、ルイズのゲルマニアを侮辱する言葉をさほど気にもせず頷いた。

「そうなのです。トリステインとゲルマニアの同盟のためには、それしかありません。しかしその婚姻には大きな問題があるのです」

アンリエッタはそう言うと、両手で顔を覆って泣き崩れるような仕草をする。

「おお、始祖ブリミルよ。この哀れな姫をお救いください……」

ルイズは驚きつつも立ち上がると、アンリエッタへ歩み寄った。

「婚姻の問題というのは、手紙です。その手紙が見つかってしまえば、ゲルマニアとの婚姻は破談となってしまうでしょう」

「そ、その手紙はどこにあるのですか？」

ルイズは焦った様子で言うが、アンリエッタはまるで舞台演劇のようによろめくと、かぶりを振りながら続けた。

「ああ、私は何を言っているのでしょうか！ 混乱しているのだわ！ お友達の貴方を巻き込むなんて、そんなこと出来るはずもないわ！」

「姫様！ 身分違いのこととは思いますが、私は姫様を今でもお友達だと思っております。そんな姫様のためなら、私は何であろうとも成し遂げてみせます！」

「ルイズ……！」

盛り上がる二人を前に、リウスはぼかんとした表情を浮かべていた。

「手紙は、アルビオンのウエールズ皇太子が持っているのです」

「ウエールズ皇太子といえば、あの麗しきウエールズ王子様ですか？」

「ええ……。しかし、今アルビオンはレコン・キスタという輩共によつて内乱となっています。そんな中に、おともだちのルイズを向かわせるなど！ 私には出来ませんわ！」

「何をおっしゃいます！ 姫様のためであれば、このルイズ・フランソワーズ！ たとえ

魔法が降り注ぐ戦火の中でも向かわせていただきませわ！」

「ああ、ルイズ！ わたくしのルイズ！ わたくし、あなたの友情と忠誠を一生忘れることはないでしょう！ これぞ正に忠誠、真の忠誠です！」

二人は感極まった様子で、ひしと抱き合っている。

その様子に今まで黙っていたデルフリンガーがひっそりと声を出した。

「……すげえな」

「凄いわね……」

リウスも呆気に取られたどころか、冷え切った視線をアンリエッタに向けるようになっていた。

この美しい姫による深い哀切を塗れさせた言葉は、ルイズならずとも、特に男であれば、無条件で言う事を聞かせてしまうであろう力を持っていた。

しかしそんな言葉は、友人であるルイズに向けるべきものではなかった。

ひとしきりルイズと抱き合ったアンリエッタは、真面目な顔を見るとルイズの顔を見た。

「ルイズ。貴方も知っているように、反乱軍の手によってアルビオン王家は風前の灯となつています。急がなければ、明日にでも滅んでしまうかもしれません」

「ええ、分かっておりますわ。いますぐにでも出立の準備をいたします」

話がとんとん拍子で進んでいく様子に、リウスは跪いたままの姿勢で思わず口を出した。

「ルイズ、ちよつといい?」

ルイズは怪訝な表情でリウスへと振り向く。

「何? リウス」

「戦争の中に入っていくってこと、分かってるわね?」

「そんなこと分かってるわよ。リウスもすぐ支度するのよ」

ルイズは何を当たり前のことを、という顔をしていたが、リウスには気が気じゃなかった。

下手をしたら、殺し合いになるというのに。

「使い魔さん、ルイズのことをよろしくお願いいたしますわ」

アンリエッタはそう言ってリウスの前に立つと、その左手をリウスの目前へと差し出した。

ルイズは一瞬嬉しそうな顔をするが、すぐにはっとして声を上げる。

「姫様、いけません! 私の使い魔にその手を許すなど!」

「いえ、いいのですルイズ。忠誠には報いる物がなければなりません」

しかしリウスは差し出された手を見つめたまま、目を細めて微動だにしない。

確かに、この王女は王族としては心優しい人なのだろう。

王族として生きながら、どこの誰かも分からない人物に手を許すなど、『貴賤の分け隔てなく接する慈悲深い王女』と呼ばれるにふさわしい。

しかしこの姫は、王女としての自分の発言がどのような事を生み出すのか、全く分かっていない。

「……リウス？ それは、姫様がその手に口づけを許されたということなのよ？」

そのルイズの言葉にも答えずに、リウスは少し眉をしかめたまま、すつと立ち上がった。

予想していなかった行動に、ルイズもアンリエッタも呆気に取られている。

「私は東方から、このルイズに使い魔として呼び出されたわ」

唐突に始まった言葉に二人は目を丸くしていたが、それを気にした様子もなくリウスは続けた。

「それまで私は冒険者として多くの国を回ってきた。市民からの要望を受けたり、時には王族や教皇の依頼を受けたりもした。だから、私はこれまでに色んな人を見てきたわ」

アンリエッタだけでなく、ルイズもその言葉に驚愕の表情を浮かべている。

「その中でも、ルイズは心から貴族であろうとする立派な子だった。そりゃあ最初はい

けすかない子だとは思ったわよ。でも一緒にいるにつれて、私はルイズを家族のように大事な存在だと思い始めているわ。自分の信念は曲げずに、何度失敗しても、どんなに恐れていても立ち向かっていく。そんなルイズだからこそ、私は身を張ってこの子を守っていくって誓った」

淡々と紡がれていく言葉に、アンリエッタはこれは決意の表明なのだと考えていた。ルイズと共に、何があっても私の依頼を達成すると。

「しかし姫様。そのルイズへの、先程のあの態度は何ですか？」

その発言に、アンリエッタもルイズも一瞬周りの時間が止まった気がした。

リウスは刺すような視線をアンリエッタへと向けている。

「貴方はルイズの大切な友人なのでしょう？ そう思っている友人に向けて、つまらない芝居を演じてまで『死ね』と言ったのですよ？」

アンリエッタの表情は固まったように動かない。

ルイズは呆気に取られたままだ。

「ルイズはこの国の貴族として、そして貴方の友人として貴方の要求に答えるでしょう。でも貴方はあんな芝居を演じてまで、友人であるルイズを死地に向かわせようとし

た。自らの責任を逃れるために、自分の意思で友人を死地に向かわせることさえしなかった。

貴方は友人としてでも王女としてでもなく哀れな姫を装って、そして、そして貴方は、その友人の立場を利用してまで！ ルイズから戦争に向かわせようと仕向けた！

そんな態度の、どこがルイズの友人ですか!! トリステインの王族ですか!!」

リウスの厳しい言葉は徐々に強くなっていく。

その声に我に返ったルイズは、さっと怒りの表情を浮かべた。

「姫様は、いつまで子供のままでいるつもりですか!!」

ぱんっ、と乾いた音が部屋の中に響いた。

リウスの頬を叩いたルイズの手はかすかに震えている。

「姫様に、なんて無礼な口をつ!!」

リウスは叩かれた頬を庇おうともせず、ルイズを強く睨み付けた。

「ルイズ、貴方は分かかっていない。相手は自分の国に戦争を仕掛けてる連中なのよ。トリステインの貴族だなんて関係無しに、殺されるかもしれないわ」

「し、死ぬかもしれないなんて分かかってるわよ！ でもそんな卑劣な連中に背を向けるなんて有り得ないわ！」

「やっぱり貴方は分かかってないわ。殺されるかもしれないってことは、否応なくその手

で人を殺す必要があるかもしれない。後悔してしまう前に、この任務を受けるからには人殺しになる覚悟を持つておかなくちやいけないのよ」

ルイズははつとした表情で、自分の手を見た。

この手で、人を殺す……？

「姫様、貴方も分かかっていない。戦争に向かう以上、仮にルイズが生き延びてもその手を汚す必要だつてあるかもしれません。戻ってきたルイズが、貴方の知っているルイズではなくなることもあります。」

そして、私がいくらルイズを守ろうとしても限界があります。たとえ私が犠牲になつたとしても、ルイズが戻ってくる保証はありません」

アンリエッタは様々な感情が入り混じった歪んだ顔のまま、目の前の使い魔を見つめている。

「姫様のお話ですと、この任務が失敗に終わった結果はルイズと私の死だけでは済みません。姫様を支えている他の貴族達、その貴族が持つ領地の平民達、トリステインのありとあらゆる人々に戦争という災禍が降りかかる可能性もあります。」

……貴方の発言や行動は間違いないく強力なものです。貴族社会においての立場としても、王族としての魅力としても。

だからこそ、少なくとも貴方だけはこの国の先を読み、あらゆる事柄に対して常に先

手を打たなければならぬのです」

アンリエッタは、自分の熱くなった頭が急に冷めていくのに気付いた。

学院に訪れる前、馬車の中で確かにマザリーニは言っていた。

『先を読み、先手を打つ事。それが政治なのだ』と。

マザリーニ枢機卿は決して無駄なことはしない人だ。

あれは、王族である私に向けた言葉だった。

そんなことにすら、あの時の私は気付いていなかったのだ。

「マザリーニ枢機卿はこの件をご存じないのですね？」

はっとしたアンリエッタは口ごもりながら言った。

「枢機卿は、知らないはずですが……でも、何故」

「こんな重要な任務を、一介の学生に任せる訳がないからです」

厳しい口調で咎めるように言うリウスに、思わずアンリエッタは顔を俯かせる。

「ルイズ。貴方は人を殺す可能性があっても、死ぬかもしれないけれども、この頼みを聞くつ

もり？」

ルイズの顔を見もせず、リウスはルイズに問いかける。

ルイズはきつとりウスを睨み付けてから、まるで叫ぶかのように言った。

「当たり前でしょ！ 私はヴァリエール公爵家！ 貴族なのよ！ 国のために、そして

大切な姫様のために！ 背を向ける訳にはいかないわ！」

リウスは厳しい顔つきをふっと緩ませると、アンリエッタに向かって恭しく膝をついた。

「姫様。私は主人であるルイズの意思を尊重したく思っております。しかし、せめて枢機卿にお話しを通して頂きたい。その上で、手練れを随行させていただけますでしょうか。ルイズと私のみでは、姫様のご依頼に失敗する可能性がございます」

その言葉にも、アンリエッタは俯いたままだった。しかしリウスは尚も続ける。

「そして、出来ればこの国の王族としてルイズに依頼をして頂きたく存じます。哀れな姫ではなく、トリステイン王国の王女として」

アンリエッタはようやくその端正な顔を上げると、背筋を伸ばしてから跪くりウスを見下ろした。

「分かりましたわ」

その佇まいは、間違いなく威厳ある王族のものだった。

先程までの小動物のような、怯えるような弱々しい瞳は影も形もない。

揺らぎのない澄んだブルーの瞳を、アンリエッタはそのままルイズへと向けた。

「ルイズ・フランソワーズ」

「はっ！」

その姫の姿に、ルイズは呼吸するかのよう自然さでさつと膝をついた。

「トリステイン王国の第一王女、アンリエッタとして、ヴァリエール公爵家が三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールに勅命を申し伝えます。

こちらの準備が済み次第アルビオンへ出立し、アルビオン王国第一王子であるウエルズ殿下より内密の文書を受け取るように。その文書を手に入れたなら、読解ができないように全て燃やしてください。これはトリステイン王国の国家存亡をかけた重要な任務です」

最後の一言を口に出すことを、アンリエッタは少しばかり逡巡した。

「……その命にかけても、この任務を全うするように」

「はっ。この命に代えましても、この任務を達成することを始祖に誓います」

国家のために死ねという言葉。

その言葉に、アンリエッタは胸を貫かれたような鈍い痛みを覚えた。

先程の自分はこの痛みから逃れるために、あのような情けない姿をしていたのか。

「ミス・リウス。貴方は主人であるルイズ・フランソワーズを……、その身に代えても守ってください。そして何としてでも、この任務を達成させるように」

「かしこまりました。この身に代えてでも主人を守り、任務達成のために尽力いたします」

アンリエッタはその二人の様子を見てから静かに目を閉じると、最後に言葉を付け加えた。

「そして、約束してください。必ず生きて帰ってくることを」

ルイズは膝をついたまま静かな口調で言った。

「姫様の命となれば、たとえ幾万の敵の只中からでも生還いたします」

「いいえ、これは王女としての命令ではありません」

ルイズの言葉に、アンリエッタが静かに口を開いた。

「友人としての、願いです」

ルイズは感極まったように、下げた頭を更に地面へと俯かせた。

「勿体なき、お言葉です」

アンリエッタはすつとりウスへと体を向けると、厳かな表情のままにリウスへ口を開いた。

「ミス・リウス。貴方のおかげで、わたくしは王族として多くのことに気付かされました。先程までのわたくしの姿を、今は心より恥じます。ありがとうございます」

「とんでもありません。それに先の暴言の数々、真に申し訳ございませんでした。ですがあのままでは、我が主人が死んでも死にきれぬと思ったのです」

アンリエッタはふつと笑うと、頭を下げたままのリウスへと口を開く。

「ルイズは本当に良い使い魔を持ったものですね。ミス・リウス、貴方も必ず生きて戻ってきてください」

「承知いたしました。任務達成の折には、ルイズと共に必ずや姫様の元へ戻ると誓います」

その言葉を受けて、アンリエッタは静かに頷く。

そしてもう一度ルイズに向き直ると、声に後悔の念をにじませながら口を開いた。

「ルイズ……。先程の私は、本当に愚かでした。まだ、私の友人でいてくれますか？」
ルイズは膝をついた姿勢から勢いよく身を起こすと、アンリエッタの両腕を優しく掴んだ。

「姫様、私はいつまでも貴方様の友人でございますわ！ 今も、これからもずっと！」

「ありがとう、ルイズ……。わたくしはこの日がこんなに素晴らしい日になるなんて、夢にも思っていなかったわ。本当に、ありがとう」

「姫殿下！ わたくしは貴方様への永遠の忠誠を誓っておりますわ！」

「ルイズ……。ああ、ルイズ！」

そう言つて、ひしと抱き合う少女二人。

リウスはまたもや展開される舞台のような雰囲気を見て、元々こんな感じなのかしら、と少し気まずい思いをしていた。

ひとしきり感動し合っていたアンリエッタとルイズだったが、ふとアンリエッタがリウスを見る。

「ミス・リウス。貴方も、わたくしのお友達になつてはもらえないでしょうか？」

その言葉に驚いたリウスは、もう一度恭しく頭を下げた。

「勿体ないお言葉です。それであれば、その、ミスなどの敬称は付けなくて頂けますでしょうか？ 私には貴族ではないので、そう呼ばれるのに慣れていないのです」

「まあ！ 貴方は貴族ではないのですか？」

「ええ。それにも関わらず、先程の暴言は申し訳ございません」

「主人として、私からも謝罪をさせていただきます」

頭を下げるルイズとリウスに、アンリエッタが笑つて言った。

「いやですわ、二人とも。頭を上げてください。それに、先程のリウスさんの言葉はこのアンリエッタの心を強く揺さぶりましたわ。貴方の仰る通りです。いつまでも、子供のままじゃいられませんものね」

アンリエッタは朗らかに微笑んでいるが、リウスは少し困つたような顔で微笑み返す。

「リウスさんのあのような言葉は、父が生きていた頃以来のものだったわ。わたくしに姉がいたのなら、こんな風に叱られていたのかしら」

「ええ、姫様。リウスはいつもあんな調子なのです。今日だってリウスと教師の一人との言い争いになってしまつて、いつも大変なのですわ」

それからリウスは最近の出来事をアンリエッタへ話し始めた。

アンリエッタは驚いたり笑つたりと、表情をころころと変えながら楽しんでいる。

リウスは、かつて自分がいた世界のアルナベルツ教国という宗教国家で崇められている、教皇のことを思い出していた。

生まれた時からフレイヤ神の化身とされてきたその教皇は、まだ年端もいかぬ幼い少女だったのだ。

彼女は一見感情が希薄なように見えていたが、実際には激化する教国の権力争いを止めようとしていた、聡明で心優しい子供であった。

アンリエッタも、いたって普通の心優しい少女なのだ。

それを王家の元に生まれてしまったから、昔からの友人にもこうして時々しか会えないでいる。

そう考えると、王家という重圧の只中にいる彼女の負担は相当なものだろう。

リウスは、ちよつと言ひ過ぎたかもしれないな、と少し申し訳なさそうな顔をしながら二人の様子を眺めていた。

「今から枢機卿に先程の件を伝えておきますので、明日の朝には出立してもらうことになるでしょう。衛士隊の中でも腕利きの人物を随行させますわ」

「ありがとうございます、姫様。でもちよつと失礼を」

きよとんとするアンリエッタを尻目に、リウスは部屋の扉へ近付くとゆつくり扉を開けた。

「ギーシュくん、何か用があるんじゃないの？ どこからいたのかは分からないけど」
扉の外では、わたわたと逃げようとしているギーシュの姿があった。

「ギーシュ！ 貴方、聞いていたの!？」

「ち、違うんだルイズ。怪しい黒ローブの人物が女子寮に入っていくのを見て、それで……」

それにしてもミス・リウス！ 君という人は、姫殿下に何て口を！」

「そこからもう聞いてたのね。それに盗み聞いていた理由になつてないわよ？」

決まりの悪そうなギーシュは、ごほんとか咳払いをすると、居住まいを正してからアンリエッタへ膝をついた。

「姫殿下！ わたくしはグラモン家が四男！ ギーシュ・ド・グラモンと申します！ よ

ろしければ、わたくしもその任務に随行したく存じます！」

「まあ、貴方がグラモン元帥の？」

「はい。息子でございます」

アンリエッタは少し困ったような顔でリウスをちらと見る。

「姫様。申し訳ありませんが、私は彼の同行を止める権限がございませんので。姫様のご判断にお任せしたいと思います」

リウスはアンリエッタにきつぱりとそう言うと、跪くギーシュを見やった。

「ギーシュくん。聞いちゃったのなら仕方ないのかもしれないけど、これがとても危険な任務だつてことは理解してるのよね？」

「は、はい。理解しているつもりです」

「とのことです。姫様」

アンリエッタはその言葉に少しだけ考え込んだが、やがて柔らかに微笑みながらギーシュを見つめた。

「ギーシュ・ド・グラモン、貴方の覚悟を理解いたしました。では、貴方にも勅命を言い渡します。明朝、ルイズ・フランソワーズは密命によりアルビオンへ出立します。そのため、密命が完了するまで貴方はルイズを護衛なさい。そして共に随行する衛士隊の指示に従ってください。しかし、もし衛士隊の者が同行を拒否した場合にはそれに従うこと。いいですね？」

「し、承知いたしました。このギーシュ・ド・グラモン、命に代えて殿下のご依頼を達成

してみせます！」

つまり、最終的な判断は随行する手練れに任せるといふことのようなだ。

アンリエッタがそう決めたのならリウスもそれに従うだけだが、当のアンリエッタはまだ少し心配そうな表情をしつつ、こちらの様子をちらちらと伺っていた。

本当に大丈夫なのか、と不安なのかもしれない。

そう思ったリウスは、せめてアンリエッタの心配を和らげられるようにと口を開いた。

「姫様。先日の盗賊騒ぎの際にも、彼はルイズと秘宝を守るといふ大役を見事成し遂げた人物です。彼がいなければ、我々のいずれかも無事では済まなかつたはずです」

「まあ！ そうなのですか！ それは心強いですわね」

にっこりと微笑むアンリエッタに、ギーシユは感極まつた表情を浮かべた。

「ですが、決して無茶はしないようにしてください。貴方も無事に帰ってくるのですよ、ギーシユ・ド・グラモン」

「ひ、姫殿下が僕の心配を……！」

ギーシユは度重なる感動のあまり、後ろにのけぞって倒れ込んだ。

リウスがギーシユの顔を覗き込んでみると、にやけ顔のまま失神している。

(この子の株を上げたのは失敗だったかしら……)

リウスはため息をひとつ吐くと、失神したギーシュを引き起こしてから背中膝を当て、両肩を掴んで思いつき後ろへ引いた。

はっと目が覚めたギーシュを、リウスは扉の外に追いやっておく。

「女の子の部屋で勝手に寝てるんじゃないわよ。ほら行った行つた」

分かっているのか分かっていないのか、ギーシュはにこやかな顔で返事をするときツプ混じりに去っていった。

ため息を吐きつつリウスが部屋に戻ってみると、アンリエッタ姫は羽ペンを手に、ルイズのテーブルに向かって何か手紙を書いている。

アンリエッタは書き上げた文章をもう一度読み直し、少し考え込んでから、末尾に一行付け加えている。

悲しげに何かを呟いているのは分かるのだが、ルイズにもリウスにもその呟きは聞か取れなかった。が、少なくともリウスには何となくその内容が予想できた。

(まるで恋文ね。まあ政略結婚の障害になる手紙つていえば、そういうことなのかな)
アンリエッタは書き上げた手紙を丸めると、取り出した杖を振るう。

すると手紙に封蝋がなされて花押が押された。

正式な書状となったそれをルイズに手渡す。

別段、リウスは先程の様子を問いただすつもりはなかった。

正直に言えば、そもそも恋文程度のものが見つかったところで政略結婚にさほどの影響が出るとは思っていない。

先程のアンリエッタ姫の言葉に嘘はないのだろうか、今書いた手紙の内容もウエールズ皇太子の元へ向かう理由の一つなのかもしれない。

「ウエールズ皇太子にお会いしましたら、その手紙を渡してください」

そして王女は右手の薬指に付けていた指輪を外すと、それをルイズに手渡した。

「ルイズ、これを貴方に」

「しかし、この指輪は？」

「これは我が国の伝わる秘宝、水のルビーです。ウエールズ様の元へ到着した時に手紙と共にお見せしてください。アンリエッタの使いであることを証明できるでしょう」

「そ、そんな大事なもの！ 受け取れせんわ！」

「いいのです、私は貴方達が帰ってくると信じていますから。ただ、もしこれを使つて貴方達の身を守ることが出来るのであれば、たとえ売り払つてしまつても構いませんわ」
本当にいいのだろうか、とリウスは思ったが、これはアンリエッタ姫の決意の表れなのだろう。

深く頭を下げるルイズと共に、リウスも深く頭を下げた。

「姫様、ひとつ友人として確認をさせていただきます」

顔を上げたリウスがそう言うと、アンリエッタは少し緊張した面持ちでリウスの顔を
見る。

「ウエールズ殿下へお伝えする内容は、この手紙だけでよろしいですね？」

アンリエッタははっとした顔を見ると、口元を強く結んでリウスの目を見つめた。

「はい。この手紙だけで、構いませんわ」

アンリエッタはそう言うと、悲しそうな声をルイズとリウスへ向けた。

「・・・申し訳ありません。私のわがままで、こんな危険な任務を」

ルイズが慌ててその言葉を否定する中、リウスはアンリエッタへ笑いかけた。

「姫様。貴方は間違つてはいませんよ」

アンリエッタは自分を責めているかのような顔をしたまま俯いている。

「ここには貴方の友人しかいないのですから。貴方の助けになるのであれば、わがまま

だろうが何であろうが構いません」

「・・・ありがとうございます」

俯き気味だったアンリエッタが顔を上げるとその水色の瞳が少し潤んでいた。

そのまますつとリウスに近付くと、リウスを強く抱きしめてくる。

「ありがとうございます。リウスさん」

急な行動に目を白黒させていたリウスだったが、アンリエッタのその様子に右手だけ

で華奢な体を抱きしめ返す。

「任せてください。ルイズと共に、この任務を必ずや達成いたします」

アンリエッタはそつとリウスから離れると、目尻に浮かんだ涙を指で拭つてから微笑んだ。

「よろしくお願いいたしますわ。ルイズ、リウスさん」

アンリエッタが去つた後、ルイズはリウスに食つて掛かった。

姫殿下が許してくれたから良かったものの、臣下に属する者が王族に対してあの暴言は何事か、とまだルイズはリウスの言動を許してはいないようだ。

しかしリウスは、臣下であるからこそ姫様に自分の言動による責任を分かってもらわなくてはならない、と引き下がらない。

「・・・やれやれ。明日から大事な任務だつてことを分かつてんのかね」

事の一部始終を見ていたデルフリンガーは一人ごちると、なる様になるか、と自分だけ鞆に収まって眠りにつくのであった。

第二十二話 出発の朝

アンリエッタ姫が訪れた次の日、ルイズとリウス、そしてギーシュは学院の正門前に集まっていた。

まだ日が昇ってからそれほど時間が経っていないので、正門の広場にははうつすらと霧が立ち込めている。

ルイズとギーシュは長旅に備えたマントを着用し、リウスは目立たないようにと平民の恰好をしていた。

ルイズに買ってもらった中でも丈夫な、所々を皮で保護している男物の服装である。

「やつと俺たちの出番だな！ わくわくしてきたぜ！」

「ふわあ……。そう、良かったわね」

リウスの馬に積み込まれたデルフリンガーが上機嫌な声を上げると、ルイズは大きなあくびで返した。

結局、昨晚のリウスとルイズの議論は眠る寸前まで続いたのだった。

途中でリウスが無理やり言い合いを終わらせたものの、興奮したままだったルイズはなかなか寝付けなかったのである。

隣で寝ているリウスの背中をぼこぼこ叩いたりしている内にいつの間にか眠ってしまったのだが、それでも若干の寝不足感はあるがなかった。

「ルイズ、僕の使い魔も一緒に連れて行っていいかい？」

馬に鞍を取り付けながらそう言ったギーシュも少し眠そうな様子だ。

どうやらギーシュは緊張のし過ぎであまり眠れていないようである。

そして、ギーシュの問いかけに合わせて地面がモコモコと盛り上がったかと思うと、そこから細い鼻とつぶらな瞳の巨大モグラが姿を現わした。

そのモグラはちよつとしたクマ程の大きさであり、リウスはその姿を興味津々といった様子で見つめている。

「ダメに決まってるでしょ」

しかしジャイアントモールが顔を出さずか出さないかのタイミングで、ルイズはにべも無くそう告げた。

「ど、どうしてだい？ 僕の使い魔ヴェルダンは馬と同じスピードで地面を掘り進めるんだ！ 決して邪魔にはならないはずさ！」

ルイズはギーシュに向き直ると、仏頂面のまま腕を組んだ。

ヴェルダンはその頭をリウスに撫でられながら、つぶらな瞳でギーシュとルイズの顔をきよるきよると見回している。

「だからダメなのよ。行き先はアルビオンなのよ？　ジャイアントモールなんて連れてちや危なっかしいわ」

はつとしたギーシユは、わなわなと震えながらヴェルダンテに抱きついた。

「ヴェルダンテ！　君が来れないなんて、何という悲劇なんだ！」

しかしこのヴェルダンテ、ルイズの指をじつと見つめたかと思うと、主人のギーシユを無残にも振り払ってからルイズへ猛然と突進した。

「きやあ！　ちよ、ちよつと！　何なのよ！」

ヴェルダンテはルイズが尻餅をついたことを気にも止めずに、ルイズの指目掛けて鼻を近づけている。

ルイズは足をばたばたさせながら何とか巨大モグラを振り払おうとしていた。

「何よ、このモグラ！　きやあ！　ちよつと止めなさい！」

「ギーシユくん。これはあなたの指示？　一体何のつもりなのかしらね？」

「ち、違うんです！　こら、ヴェルダンテ！　止めないか！」

しかし、ヴェルダンテはギーシユの制止も無視してルイズの指に夢中の様だ。

というよりも、どうやらルイズが嵌めているアンリエツタから貰った指輪に興味があるらしい。

「ああ！　ルイズ、その指輪だよ！　ヴェルダンテは珍しい鉱物に目が無いんだ！」

「へえ、そういう習性なのね。面白いわね」

「言ってる場合か！　ちよつと、ギーシユ！　リウス！　何とかしてよ！　ちよつと、きやはは！　お、お腹をまさぐらないでつたら！」

どたばたしてる内にルイズのスカートがお腹辺りまでめくり上がっていた。

完全にモロ見えであるが、見ようによつては巨大モグラと戯れている少女に見えないこともない。

しかしルイズの痴態を見たギーシユは顔を真っ赤にして俯いてしまっている。

リウスはため息をつきながら、再度ギーシユを促すことにした。

自分の魔法ではこのヴェルダンテを傷つけてしまいかねない。

「ギーシユくん。早く何とかしたら？」

「そ、そうでした。ほら、ヴェルダンテ！　こつちに来ないか！」

そう言つて、ギーシユが指輪に夢中のヴェルダンテを徐々に引きはがしていく。

すると突然強い突風が巻き起こり、ギーシユ共々ヴェルダンテを吹き飛ばした。

「うわっ！　あいだっ！」

ギーシユが思わず悲鳴を上げるが、ヴェルダンテがクッションになつたようで怪我などはないようだ。

「だ、誰だっ！」

飛び起きたギーシュが周りを見回しながら喚く。

仰向けになったヴェルダンテは何とか起き上がろうと手足をどたばたさせていた。

リウスは朝もやに隠れた広場をじつと見ていた。

その朝もやの中から羽帽子を被った長身の貴族が姿を現わすと、リウスは王女が来訪した時に見た隊長格の貴族だと気付く。

「貴様！ 僕のヴェルダンテになんてことを！」

ヴェルダンテは未だに起き上がれていないようで、今もなお手足をどたばたさせている。

ギーシュと同じく怪我などはしていないようだが、ギーシュは関係ないとばかりに薔薇の造花を羽帽子の貴族へと向けた。

しかし、一瞬早くその貴族が杖を引き抜いたかと思うと、ギーシュの手に持った薔薇の造花が吹き飛ばされた。

「僕は敵じゃない。枢機卿殿下より、君達に同行することを命じられた者だ」

羽帽子の貴族はつかつかと三人の元に歩み寄ると、羽帽子を取って一礼する。

「女王陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊隊長のワルド子爵だ」

まだ文句を言おうとしていたギーシュは、余りにも相手が悪いと口を噤まざるを得なかった。

魔法衛士隊といえ、トリストイン貴族の憧れである。その隊長ともなれば、彼の實力は言わずもがなだった。

「すまない。婚約者がモグラに襲われているのを見て見ぬ振りは出来なかった。許してくれたまえ」

（・・・婚約者？へえ、そうだったのね）

リウスは少し驚いた表情でルイズを見た。

ワルドの姿を見たルイズは更に驚いた顔をして、急いで立ち上がり身なりを整えている。

王家直属の部隊長ともなれば、その身分も実力も保障されていると思っていだるう。

公爵家の三女であるルイズの婚約者としては、妥当なところだろうか。

「ワルドさま・・・」

立ち上がったルイズは頬を染めて恥ずかしそうに俯いている。

「久しぶりだな！ルイズ！僕のルイズ！」

ワルドは羽帽子を被り直すと、人懐こい笑顔を浮かべた。

小走りにルイズへ近付くと、ルイズをひよいと抱き上げる。

「お久しぶりでございます」

ルイズは頬を染めたまま、ワルドに抱きかかえられていた。

「相変わらず軽いな君は！　まるで羽根のようだね！」

「お恥ずかしいですわ……」

「いや、本当に久しぶりだね。さあ、彼らを紹介してくれたまえ」

ワルドはルイズを地面に下ろすと、ギーシュとリウスを交互に見ながら言った。

「あ、あの……。ギーシュ・ド・グラモンと、使い魔のリウスです」

ルイズもまたギーシュとリウスを交互に指差して言った。

ギーシュとリウスは深々と頭を下げる。

「君がルイズの使い魔かい？　東方のメイジだと聞いているよ。女性だとは思わなかったけどね」

リウスは顔を上げると、ワルドに向かって簡単に自己紹介をする。

「初めまして、ルイズの使い魔のリウスと言います」

「君は優秀な使い魔だそうだね。僕の婚約者が世話になっているよ」

「いえ、とんでもない。こちらこそルイズにはいつもお世話になりっぱなしです」

ワルドはにこりとリウスへ笑いかけた。

横に立つルイズは、婚約者、という言葉に頬を染めて恥ずかしそうにしている。

「ルイズの婚約者なのですね。この子はそういった事に疎そうだったので、ちよつと安

心しました」

「ちよ、ちよつとリウス！ アンタそんなこと思ってたの!？」

ルイズが更に顔を赤くしながら慌ててリウスに言う。

それを聞いたワルドは上品な笑い顔を浮かべると、少しおどけたような態度で声を出した。

「やあ、よかった。学院の男子生徒にルイズを取られていたらどうしようかと思つていたところだよ。ミス・リウス、ルイズの使い魔である君とはこれから長い付き合いになりそうだからね。どうか今度ともよろしく頼む」

「ええ、こちらこそ」

ワルドのにこやかな笑い顔に、リウスも微笑んで返した。

柔和な表情に、精悍な顔付き。

多分この国における美男子と呼ばれるような人なのだろう。

がっしりとした体や魔力の密度から、相当な実力者だとも見て取れる。

(それにしても、嬉しそうによく笑う男だわ)

リウスは別に浮ついた気持ちなど欠片も持っていなかった。

信頼を丸投げなどせず、ただただ目の前のワルドを観察しているだけである。

枢機卿から遣わされたであろうこの貴族は信頼のおける人物なのだろうが、重要な任

務を前にやけに笑顔が多いのが気になった。

単にルイズと久しぶりに会えて嬉しいだけだろうか。

「さて。君がグラモン元帥の嫡男、ギーシユ君だね。僕は姫殿下より君が随行できるかどうかを見極めるように仰せつかったのだが」

ワルドが朗らかな笑顔をギーシユへと向けると、ギーシユは緊張した面持ちでワルドを見た。

「この任務は危険なものだ。かの国では君の家柄などお構いなしに襲われる可能性もあるだろう。もしかしたら死ぬことだってあるかもしれない。君にはその覚悟があるのかい？」

ギーシユは手に持った薔薇の造花を握りしめると、はつきりとした口調で口を開いた。

「僕は父から、命を惜しむな、名を惜しめ、と教えられてきました。だからこそ姫殿下のためにこの任務に随行したく存じます」

「そうか、ならいい。一緒に来ることを許可しよう」

あつさりワルドはそう言うと、ギーシユの肩にぽんと手を置いた。

「ただし、付いてこれない場合は置いていくよ。全ては君次第さ」

「は、はい！ ありがとうございます！」

ギーシュが感極まったようにそう叫ぶと、ワルドは上品そうににこりと笑いかけた。「さて、馬の準備も出来ているようだね。そろそろ出発するとしよう」

そう言ったワルドが口笛を吹くと、朝もやの中から羽ばたく音が聞こえてくる。

やがて見覚えのあるグリフォンが姿を現わすと、ワルドはひらりとそのグリフォンの背に跨った。

「おいで、ルイズ」

ルイズは恥ずかしそうにちよつと躊躇うようにして、ワルドから差し出された手を取った。

ルイズはワルドに抱きかかえられるようにしてグリフォンに跨り、リウスとギーシュも用意された馬へと跨る。

「では諸君！ 出撃だ！」

ワルドが手綱を手に取り、杖を掲げてそう宣言をする。

そしてグリフォンが駆け出すと、ギーシュはいささか感動した面持ちでその後が続いていく。

リウスはワルドのグリフォンをじつと見つめてから、馬に拍車を入れ、後に続いていった。

アンリエッタは出発する一行を学院長室の窓から見つめながら、祈りを捧げていた。「彼女たちに加護をお与えください。始祖プリミルよ……」

隣には、オールド・オスマン、そして枢機卿であるマザリーニが立っていた。

「これで杖は振られましたな。まあ、ワルド子爵がいれば滅多なことにはならないでしょうが」

「ええ、彼女達ならきつと成し遂げてくれるでしょう」

マザリーニの暗い口調にアンリエッタは毅然とした言葉で返した。

マザリーニは口髭を撫でながら、なおも憂鬱そうな言葉を出す。

「殿下、私はまだ許しておりませぬぞ。ヴァリエール家の子女を使いに出すなど。しかもかの者に水のルビーを渡すなどとは」

「どこに裏切り者がいるか分からない以上、ルイズは私が最も信頼できる人物です。」

それに、水のルビーは身分を証明するには必要なものでしょう。文書だけでは不十分ですわ。私は彼女たちが帰ってくることに信じていますし、彼女たちの命を救うのであれば国宝といえども惜しくはありません」

「しかしですな……」

アンリエッタの言葉には、いつもの拗ねた口調や弱々しい言い訳など欠片も見えな

かった。

その決意に満ちた様子にはマザリーニも気付いてはいたが、大貴族であるヴァリエール家の娘を使いにした挙句に、売り払つてもいいと言つて国宝を渡すなど、とマザリーニは気が気ではない表情を浮かべている。

「今さらじたばたしても始まらないやろう。杖は振られた、と先ほど君も言っていたのではないかの？」

そうオスマンが声をかけた時、学院長室の扉がどんと叩かれた。

オスマンが入室を促すと、慌てた様子のコルベールが飛び込んでくる。

「いいい、一大事ですぞ！ オールド・オスマン！」

「またかね、君はいつも一大事ではないか。どうも君はあわてんぼでいかん」

アンリエッタ姫やマザリーニ枢機卿の姿に気付いたコルベールが一瞬固まったようになるも、オスマンに続きを促されると、コルベールは慌てたように声を出した。

「城からの知らせです！ なんと、チエルノボーグの監獄からフーケが脱獄したそうです！」

「ほう……」

オールド・オスマンは口髭をひねりながら唸った。

「門番の話では、さる貴族を名乗る怪しい人物に『風』の魔法で気絶させられたそうです。

魔法衛士隊の留守の隙をつき、何者かが脱獄の手引きをしたのですぞ！　つまり、城下に裏切り者がいるということですよ！」

オスマンは手を振り、焦るコルベールに退室を促す。

「知らせは分かった。詳しい話は後ほど聞こう」

コルベールが退室すると、アンリエッタが不安そうな声を出した。

「やはり、城下に裏切り者が……。アルビオン貴族の暗躍でしょうか」

「そうかもしれないし、そうではないかもしれないかもしれません。しかし、タイミングが良すぎます。偶然であればいいのですが」

マザリーニが眉間に皺を寄せながら呟くと、オスマンが柔らかな微笑みを浮かべながら声を出した。

「儂も不安がないわけではないですがの。姫の人選は正しい。ミス・ヴァリエールとその使い魔は、この任務にふさわしい人物ですじや」

「ええ、私もそう信じておりますわ。いずれにせよ、我々には待つことしかできません」
オスマンとアンリエッタの言葉にマザリーニは疑問符を浮かべていたが、やがて観念したかのようによく呟いた。

「ならばせめて祈りましょう。始祖ブリミルが、アルビオンの猛き風から彼らを守ってくださるように」

第二十三話 アルピオンへ続く道

「グリフォンってのは、タフなものね」

リウスは学院の図書室で見たハルケギニアの地図を思い浮かべながら、少し疲れた顔をしてそう告げた。

最初の目的地であるラ・ロシエールは、トリステイン学院から早馬で二日ほどの距離にあったはずだ。

だが学院を出発してからというもの、ワルドはグリフォンをひたすら駆り続けさせていた。

馬でも追いつける程度のスピードではあるものの、グリフォンは空を飛んでいるために地形を無視することができる。

そのため、馬でその後を追うにはどうしても無理な速度で走り続ける必要があった。「いえ、幻獣といってもあんなに飛び続けられるのは、そうそういいはずですよ……」

ミス・リウスも、何で疲れていないんですか……」

リウスの横を走るギーシユは疲労が随分と溜まっているようで、ぐったりと倒れ込むように上半身を馬に預けている。

リウスは少し心配そうな顔でギーシュの様子を見てから、「そんなことないわ」と小さく苦笑した。

「私も流石に疲れてきてるわよ。それにしても、相変わらずペース速いわね」

「もう、半日近くも走りっぱなしだ……。まだ、ラ・ロシエールには着かないのか……」

「ほら、頑張れギーシュくん。これだけ走れば大分来たでしょ」

「そうだけ、貴族の小僧っ子。もつとしゃんとしたらどうだい」

「言ってくれるね、デルフリンガーくん……。僕は君と違って生身の人間なんだから、しようがないだろう……」

馬の後ろに括り付けていたデルフリンガーが、鞆をかちやかちや鳴らしてけらけらと笑っている。

リウスはぐったりとしたギーシュから視線を外すと、羽根を広げて悠然と飛んでいるグリフォンを見上げた。

既に、途中の駅で馬を二度ほど交換している。

明らかにラ・ロシエールまでは休まずに行ける距離ではないのだが、それにも関わらず先頭に行くワルドは強行軍を続けていた。

ギーシュも最初は張り切った顔をしながら馬を走らせていた。

一度目の馬の交換の際にも、まだまだいける、と笑顔を見せていた。

二度目の交換の際には、かなり疲れた顔をしながらも弱音を吐かず、頑張って吐き始めている。

・ ・ ・ 頑張っているのだが、流石にここまで来るとげっそりした顔をしながら弱音を吐き始めているように見えた。

リウスが指先ほどの大きさになっているグリフォンを見上げていると、ルイズがこちらを振り向いているように見えた。

すると、グリフォンが少しばかり速度を落とす。

多分、少しするとまたすぐに元の速度へと戻るのだろう。

こうしたことが学院を出発して以降、何回も起こっていた。

(重要な任務するのは分かるんだけど ・ ・ ・ 。何か、引つかかるわね)

一応気にはしているのか、こちらが振り切られるほどの速度ではない。

国の一大事なのだから、つい力が入ってしまうことも頷ける。

だがワルドは魔法衛士隊というエリート部隊の人間だ。

しかもその部隊を率いる隊長だというのに、気が急いで後続を無視するというハマをするものだろうか。

ハマでないのだとしたら、最初っから私達二人はこの任務の頭数に入っていないのか

もしれない。

それとも、もつと何か思惑があるのか ・ ・ ・ 。

—疑ってかかるのは良い事じゃ。しかし、リウスくん。自ら視野を狭くせよなどと、誰が教えたのかね？

正解を求め、それに固執するのは仕方のないこと。しかし何においても、真実と虚偽は得てして混じり合っているものなのじゃよ。その中で唯一つ、君の持つ『目的』だけは、君が信じ続ける限り真実であり続けるじやろう。

だからこそ、常に自分自身へ問い続けなさい。君はいま何をすべきなのか、とな。

リウスは、魔術師ギルドに入ったばかりだった時によく聞かされていた言葉をふと思いつ出した。

(そうでしたね、先生)

今重要なのはワルドの真意を想像することではない。

先頭を駆けていくワルドから、距離を離されないことだ。

「ギーシュくん、このままじゃ置いてかれちゃうわ。少しでもスピード上げるわよ」

リウスはそう言うのと背筋を伸ばし、ギーシュの様子を気にしながらも馬の速度を少しだけ上げるのだった。

「ちよつとペース速くない?」

抱かれるような恰好で、ワルドの前に跨ったルイズが言った。

ワルドとの雑談を交わす内に、ルイズの喋り方は昔のような丁寧なものから今の口調に変わっている。ワルドがそうしてくれと頼んだせいでもあるが。

「なんか、へばってるみたいだけど」

ワルドは後ろを向いた。

後ろを走る馬の片方、ギーシュが半ば倒れるような恰好で馬にしがみついている。

一方のリウスは速度を落とさずに付いてきているものの、余裕があるとは言えない状況だった。

「ラ・ロシエールの港町まで、止まらずに向かいたいのだが・・・」

「無理よ。普通は馬で二日はかかる距離なのよ?」

「別に置いて行く訳じゃないよ。ただ速度をそこまで落とすことは出来ない」

「でも、無理させる訳にもいかないじゃない」

「どうしてだい?」

ルイズは困ったように言った。

「だって・・・仲間じゃないの」

「やけに二人の肩を持つね。あのギーシユとかいう生徒、彼がきみの恋人なのかな？」
ワルドが笑いながら言った。ルイズは慌てながらそれを否定する。

「違うわよ。ギーシユは恋人なんかじゃないわ」

「そうか、それならよかった。婚約者に恋人がいるなんて知ったら、ショックで死んでしまふからね」

ワルドがおどけたように肩を竦めると、ルイズは頬を赤らめた。

「こ、婚約者なんて。親が決めたことじゃないの」

「おや？ ルイズ！ 僕の小さなルイズ！ 君はぼくのことを嫌いになったのかい？」

「も、もう小さくないもの。失礼ね」

「僕にとっては、まだ小さな女の子だよ」

ルイズは先日見た夢を思い出した。

生まれ故郷であるラ・ヴァリエールの屋敷の中庭。

忘れ去られた池に浮かぶ、小さな小さな舟。

幼い頃、私はよくそこに逃げ込んでいた。

そして本当に辛い時にいつも迎えに来てくれるのは、ワルドだったのだ。

小舟に差し出される大きな手。

ワルドは事あるごとに、いつも私を助けてくれていた。

昔はあの池のほとりで家族とピクニックを楽しんでいたのに、ワルドはいつも家族よりも早く、私があつた場所にいることに気付いてくれていたのだ。

―あるべきものを、あるべき場所に。

ふと、誰かに言われた言葉を思い出した。

確かにどこかで聞いたはずなのに、どこで聞いたのかいまいち思い出すことができない。

かつての晩餐会でそういった言葉が出てきたのだろうか。

かつての晩餐会。

父さまとワルドの父親はとても気が合ったようで、よくヴァリエール家の晩餐会へワルドと共に招待していた。

そして親同士で決めた結婚……。

幼い日の約束。婚約者。こんやくしや。

あの頃は、その意味がよく分からなかったけれど……、今ならばつきりと分かる。結婚するのだ。

「嫌いなわけ、ないじゃないの」

物思いに耽つていたルイズは、俯いたままちよつと照れたようにワルドへ言った。

「よかった、それじゃあ好きなんだね」

そのルイズの様子に微笑んだワルドは、手綱を握った手でルイズの肩を抱いた。

「僕は君を忘れたことはなかったよ。君は覚えているかな。父がランスの戦で戦死して、母もずっと昔に死んでしまった。爵位と領地を相続してからすぐに、僕は魔法衛士隊に入った」

「あの頃は、ほとんど領地にも帰ってこなかったわね」

「軍務が忙しくってね。未だに屋敷と領地はジャン爺に任せっぱなしさ。僕は、立派な貴族になりたかったんだ。家を出る時に決めていたことがあったからね」

「決めていたこと？」

ワルドは笑ってルイズの顔を見た。

「立派な貴族になって、君を迎えにいくってことさ」

ルイズはその朗らかな顔を真っ直ぐ見ることが出来ずに顔を背ける。

「でもワルド、あなたは魔法衛士隊の隊長だもの。他にも婚約の話が出たこともあるんじゃないの？ わたしみたいな、ちっぽけな婚約者なんて相手にしなくても・・・」

ワルドのことは、先日の夢に見るまでずっと忘れていた。

現実の婚約者なんて実感はなくて、遠い思い出の中の憧れそのものだったのだ。

婚約の話も、とつくの昔に反故になっていたと思っていた。

二人の父によって戯れに交わされた、あてのない約束。

私はそれくらいにしか思っていなかったのだから。

十年前、最後に会って以来、ワルドとは会うこともなくなっていたし、その記憶もすっかり思い出の中へと埋もれていた。

だからこそ昨日のワルドの姿に、今日こうして目の前に現れたワルドに、私は激しく動揺したのだ。

ただの思い出が不意に現実となつて、どうすればよいのか分からないのだ。

「旅はいい機会だ」

ルイズの動揺をよそに、ワルドが落ち着いた声で言った。

「いつしよに旅を続けければ、またあの懐かしい気持ちになるさ」

ルイズは思った。

自分は本当にワルドのことが好きなんだろうか？

嫌いな訳はない。確かに憧れていた、それは間違いない事実だ。

しかし今はどうなのだろう。

あの憧れは、あくまで思い出の中での話だ。

それがいきなり、婚約者だ、結婚だ、と言われても・・・。

ずっと離れていた分、自分がワルドを本当に好きかどうかなんて、分かる訳もない。

ルイズは後ろを向いた。

二頭の馬は、先程よりもずっと近くの距離まで追いついてきている。ワルドが婚約者だと告げた時、リウスは「安心した」と言っていた。安心したらリウスはどうすると言うのだろうか。

もしかして、ひとりで元の世界に帰ってしまうのではないか。

ワルドと結婚しても、リウスと共にいられるのだろうか・・・。

リウスは先日、リウスと共にトリスティン城下町まで馬を走らせたことを思い返した。

今グリフオンに乗っているだけの自分と、馬を駆けているリウス。

リウスは、出来れば自分も好きな馬でリウスと走りたかったと、小さく溜め息をつくのだった。

第二十四話 溪谷の戦い

「すっかり暗くなっちゃったわね」

「ここがラ・ロシエールの峡谷ですよ……。この道を越えればすぐのはずです……。」
馬を更に何度も替えて飛ばしてきたので、リウス達は出発した日の夜中にはラ・ロシエールの入口まで辿りついてた。

先程まではずぐそこにワルドのグリフオンが見えていたものの、峡谷の中に入ったためにグリフオンには少し距離を離されてしまったようだ。

リウスとギーシュは険しい山の中を縫うように進んでいく。

「よし、あともう少しだ。元気が出てきたぞ。ああ、それにしても早く柔らかいベッドで眠りたいな……。」

ぶちぶちと愚痴をこぼしているギーシュを尻目に進んでいくと、月夜に照らされた峡谷の隙間から遠目に街の灯が見えた。

その向こうには山のような巨大な黒い影が見える。

あれがラ・ロシエールのシンボルともいえる大樹であり、アルピオンへの船着き場なのだろうか。

「よくもまあこんな所に街なんて作ったものね」

「あの街はトリスティンのスクウエアメイジが総出で作ったらしいですよ。ここにはアルビオンが定期的に近付きますからね」

心なしか、街の灯を見てギーシユも元気が出てきたようだ。

少し進むとまた街の灯は峡谷に隠れて見えなくなってしまうが、ギーシユは背筋を正してキビキビと馬を進ませしていく。

リウスを先導しながら進んでいくギーシユの姿に、リウスは微笑みを浮かべてから小さく一人呟いた。

「アルビオンが近づく、ねえ。当たり前のように大陸が浮かんでるなんて、凄いもんだわ」

『白の国』アルビオンは、一定のコースを持ってハルケギニア上空を浮遊しているらしい。

その浮遊大陸の下半分は流れ落ちる水によって常に白い雲で覆われているので、『白の国』という通称で呼ばれているのだそうだ。

そんな大陸と行き来するためには空を飛べなければならない。

そんな疑問を元にリウスが調べた結果、ここハルケギニアには数多くの空飛ぶ船が存在していることが分かった。

しかも、当たり前のように平民にも使われているレベルで、である。

その事実にはリウスはととても驚かされた。

リウスが住んでいた国、シユバルツバルド共和国にも飛行船というものはあるのだが、それはせいぜい数えられる程度の数でしかないのだから。

そうリウスが感慨に耽っていると、ふいにギーシュの頭上にオレンジ色の明かりが見えた気がした。

その瞬間、ギーシュの馬の周りに何本もの松明らしきものが投げ込まれる。

「うわっ！ なんだ!？」

ギーシュが悲鳴に似た声を上げた途端、複数の矢が辺りに降り注いでいく。

ギーシュの乗った馬がいなきを上げて前足を大きく宙に振り上げた。

「うわわっ!」

馬が前足を上げた拍子に、態勢を崩したギーシュが地面に転がった。

ギーシュを振り落した馬はラ・ロシエールに続く道を走り去っていく。

「っ！ まずい!」

リウスは身を低くしながら急いでギーシュの傍へ馬を走らせると、ギーシュの元へと飛び降りた。

その瞬間リウスの乗っていた馬に数本の矢が突き刺さり、馬は悲鳴を上げて暴れまわ

りながら闇の中へ走り去っていく。

リウスは飛び降りた勢いのままギーシユの襟首をひつつかんで近くに引き寄せると、腰に差してあつた短剣に触れながら一瞬で詠唱を完了させた。

「アーススパイク！」

勢いよく目の前に発生した石柱から、いくつもの矢を弾き返す音が聞こえてくる。

その音を耳にしつつ、リウスは次にするべき行動を瞬時に判断していた。

先ほどの矢の軌道から襲ってきた相手の位置は分かつたのだが、今この時点で背面から攻撃されたらひとたまりもない。

「ギーシユくん！ 前と後ろにワルキューレを！」

「え、あ、わ、分かりました！ ワ、ワルキューレ！」

地面へ戻っていく石柱との入れ替わりに、ギーシユのワルキューレが二人の前後に立ち現れた。

それぞれのワルキューレが大盾を構えると、片側のワルキューレから矢が弾き返される金属音が聞こえてくる。

「なななんだ、野盗か!? 山賊か!? それともアルビオンの貴族連中か!？」

「こら、ギーシユくん。ちよつと落ち着きなさい」

リウスはわたわたとしているギーシユの顔を両手で掴み、自分の顔へと無理やり向き

なおさせる。

ギーシユは唾を飲みこむと、ようやく落ち着いたかのようにリウスの目を見た。

「いい？ 私がワルキューレの後ろから飛び出したら、あなたはワルキューレを盾にしてラ・ロシエールへ走りなさい」

「え、え。どういうことですか!？」

「長々話してる余裕はないわ。分かったわね？ 私は後から付いていく。あなたは全力で走ること。絶対にワルキューレからは出ないようにして」

敵が弓矢を使っている今はまだいいが、この状況で魔法を撃ちこまれたら非常にまずい。

このままワルキューレに隠れ続けていけば一網打尽にしてくれと言っているようなものだ。

ワルドがすぐ来てくれればいいが、どうなるかは分からない。

そう考えたリウスはギーシユの顔から手を離すと、ワルキューレの陰から矢が飛んできた方向を見る。

月明かりに照らされた峽谷の上では、多くの人影が動き回っていた。

(あそこか)

短剣を引き抜いたりリウスは人影の動きをじつと見つめながら口を開いた。

「ギーシュくん、用意して」

「は、はい」

人影が二、三のグループに分かれたのを見つめていたリウスは、その一つへ向けて慎重に詠唱を開始した。

「ファイアーボール」

リウスの詠唱が完了する。

するとリウスの頭上に一メートル程の炎の塊が浮かび上がり、その炎の塊は凄まじい勢いで崖の上へと向かっていった。

炎の塊は着弾する寸前にいくつもの炎へと分裂し、それぞれが意思を持つかのように尾を引きながら崖上の人影に襲い掛かっていく。

いくつもの炎が爆発する音と共に男達の悲鳴が聞こえてくる。

その瞬間にリウスはワルキューレの陰から飛び出すと、崖の上の状況をもう一度確認した。

続いて、ギーシュが少し戸惑いながらもワルキューレと共にラ・ロシエールへ続く道走り出す。

リウスは炎に照らされた崖の上にギーシュとワルキューレへ弓を向けた数人の男を見つけると、その手に持つ短剣を勢いよく向けた。

「ファイアーボール！」

黄金に輝く短剣を通して宙に火花が散ったかと思うと、その男達の目前に身の丈ほどの炎の壁が立ち現れた。

駄目押しとばかりに先ほどファイアーボールが着弾した近くにも炎の壁を発生させると、峡谷に更に大きな悲鳴が響きわたる。

リウスが走っていくギーシユの元に向かおうと駆け出した時、矢の飛び交う音が聞こえてきた。

どうやら狙い撃つのは諦めてそこらじゅうに矢を放っているようだ。

リウスは偶然当たりそうになった矢を短剣で切り払おうとする。

すると、急に突風が吹いて目の前に竜巻が発生した。

月明かりの中、目の前に飛んできていた矢が宙へと吹き飛ばされる。

「大丈夫か！」

羽ばたく音と共に現れたのはグリフオンに乗ったワルドとルイズだった。

「ギーシユくん、ストップ！ 私達は問題ありません！」

「はあ、はあ。た、助かった」

息を切らせているギーシユの様子をリウスはさっと見たが、どうやら矢は受けていないようだ。

ワールドが風を操って矢の軌道を変え続けている中、グリフォンがリウスの近くへ降りてくる。

「ミス・リウス、状況は？」

「敵は崖の上です。矢が中心で、数は不明。メイジがいるかは分かりません」

「そうか、なら僕が行こう。ルイズはここで待っていてくれ」

ワールドが崖上を睨み付ける中、リウスはグリフォンから降りてきたルイズを受け取る。

ルイズを降ろしたことを確認したワールドは、グリフォンを崖上へと駆らせていった。

「二人とも大丈夫？ 怪我はない？」

ルイズが心配そうな顔できよろきよると二人の身体を見回している。

「問題なしよ。だけど馬がいなくなっちゃったわね」

すると上空からグリフォンとは違う大きな羽ばたきが聞こえる。

その聞き覚えのある羽音に、地上に残っていたリウスは夜空に浮かぶ影を見上げた。

「あれは……、シルフィード？」

しばらくして崖上の声も聞こえなくなると、グリフォンとシルフィードが三人の傍の地面に降り立つ。

そしてシルフィードの背から赤毛の少女が飛び降り、ばさりと髪をかき上げた。

「はい、お待たせー」

そのよく見慣れた顔はキュルケだった。リウスの横に立つルイズがキュルケに怒鳴りつける。

「はいお待たせーじゃないわよっ！ 何しに来てんのよアンタ！」

「助けに来てあげたんじゃないの。あんな朝早くから馬に乗って出かけようとしてるんだから、これはこの『微熱』のキュルケが助太刀に向かわなくちゃいけない場面じゃない？」

「そういうことじゃないわ！ さっさと帰って！」

「あーら、つれないわねえ。いいじゃないの、ラ・ロシエールはすぐそこなんだし」

二人がぎやあぎやあと言いつつ合っている中、リウスは複雑そうな顔でグリフォンから降りてきたワルドに声をかけた。

「賊はどうなりました？」

「それよりも、怪我はないかい？」

「ええ、どうにか」

「それはよかった。あの炎は君の魔法なのかな？ それに驚いたのか、さつき僕が崖上に着いた時にはもう盗賊共が森の中へ逃げ込んでしまっていてね。残念ながら取り逃がしてしまっただよ」

「そうでしたか。目的を知りたかったのに、残念です」

リウスがシルフィードへと顔を向けると、シルフィード上のタバサはパジャマ姿にナイトキャップという出で立ちである。

「どうやらキュルケに無理やり起こされて追いかけさせられていたようだ。」

ルイズとキュルケの言い合いには我関せずといった具合に、シルフィードに跨がったまま眠そうな顔でぼんやりとしている。

「ツエルプストー、私達はお忍びでここに来てるのよ。シルフィードみたいな大きい竜を連れてこられたら意味ないじゃない!」

「だったら先に言いなさいよ。本当に気が利かないわねヴァリエール」

「言ったらお忍びの意味がないじゃないの!」

二人はいまだに言い争いを続けているようだった。ふと、リウスの耳に聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「・・・おい。相棒、だれか。俺たちはここにいるぞ・・・」

「あ、忘れてたわ」

「そういえば、馬に積み込んでおいたデルフリンガーのことをすっかり忘れていた。」

「少し遠くから聞こえてきているため、暴れ回った馬から落ちたのかもしれない。」

「荷物が向こうに落ちているみたいなので、ちよつと取ってきますね」

ルイズとキュルケがぎゃあぎゃあと言い争っているのを尻目に、リウスはワルドへと断りを入れた。

「む、そうか。君達の馬も無くなってしまったことだし、僕とルイズは先にラ・ロシエールで宿を取っているでしょう」

「一緒に行った方がいいのでは？ 先ほどの襲撃もありましたし、危険ですよ」

「・・・そうか、そうだな。一緒に行こう」

あつさりとその告げたワルドはルイズの元へと近付くと、ルイズの肩に手を置いた。

「ワルド・・・」

ワルドはルイズを見てにつこりと微笑むと、シルフィードに跨っているタバサへと顔を向けた。

キュルケはワルドの姿を見て、何を思ったのか目を輝かせている。

「その君、この二人をラ・ロシエールまで乗せてきてくれないか？ 馬が無くなってしまったんだ」

ワルドがタバサに向けてそう言うと、タバサはこくりと頷いた。

「では諸君、今日はラ・ロシエールに一泊し、明日の朝いちばんにアルビオンへ渡ることにする」

タバサとリウス、キュルケとギーシユはシルフィードの背に乗ってラ・ロシエールへと向かっていた。

前方で先導しているグリフオンの背にはワルドとルイズの後ろ姿が見える。

「ひでえ……、ひでえよ相棒……」

「ごめんつてば。確かにすっかり忘れてたけど」

「せつかくの出番……、せつかくの機会が……。もうその短剣への嫉妬で頭がどうにかなつちまいそうだぜ……」

「頭、ない」

タバサの突っ込みにも関わらず、デルフリンガーは未だブツブツと文句を言っている。

そうしていると、キュルケがにやつと笑いながら口を開いた。

「それにしても、ここらの野盗はグリフオンに乗ってるメイジを襲うくらい胆が座つてなのかしら。それとも、リウス達のお忍びに関係してるの？」

その口調は暗に教えてくれと言わんばかりである。

リウスは特に動揺も見せず平然と答えた。

「さあ、どうなのかしらね。ここらへんに貴族を襲うような酔狂な野盗がいるなら、もつ

と有名になつてもおかしくなさそうだけど」

リウスは以前、学院の衛兵に『メイジ殺し』なる傭兵や衛兵がいることを聞いていた。メイジのような魔法を扱う者相手でも、魔法を使わずに卓越なる技量のみでメイジに勝つことのできる平民のことだ。

しかしそういった類まれな平民は野盗などに身を落とさずに傭兵や衛兵として働いていることが多いと聞いていたので、そういった技量の持ち主がいたとはどうにも思ひにくい。

（ファイアーボールが当たった中にいたのかもしれないけど……。今となつてはもう分からないわね）

私の魔法が直撃した賊の中にメイジやメイジ殺しがいたのかどうかで、考えられる状況はずいぶん変わってくる。

あの賊たちの中にメイジはちゃんといたが、魔法の相性の問題で奇襲には使えなかったという可能性もあるにはあるのだ。

例えば、グリフォンを迎撃できる賊がちゃんといたが、私の魔法によつて先にやられてしまった、とか……。

ひとまず今考えるべきなのは、あの賊共の目的、そして奴らの目的によるこの旅の最高と最悪とは何なのか、である。

最も問題がないのは、奴らが単なる物盗りだったという場合だろう。

別に任務に支障も出ないだろうから、ラ・ロシエールの衛兵にでもこの件を伝えておけばいい。

最もマズいのはもちろん、あれが私達を狙った計画的な襲撃だった場合だ。

その場合に考えなければならぬのは『こちらの行動を把握されている』かもしれないことであり、先ほどの襲撃が『この任務を頓挫させるのに不十分なもの』だったことである。

この任務を頓挫させるのに不十分な襲撃だった理由、それは3つに分けられる。

つまり、『この任務を頓挫させるつもりだったが失敗した』のか、

『最初から頓挫させるつもりがなかった』のか、

『任務とは関係ない、他の目的があるのか』だ。

単に相手の思惑から外れて襲撃が失敗したのであれば、相手が間抜けだったただけである。

最初から任務を頓挫させるつもりがなかった場合でも、話は簡単だ。

明らかに強いメイジ以外を狙うこと、つまり全体の戦力を削ることを狙っていた可能性が高い。

あとは、他の目的がある場合だが・・・。

実際に矢を放ってきたことを考えるに、ギーシュくんと私を狙っていたはず。

その理由とは……？ ギーシュくんもトリステインで有力な貴族だと聞いているし、私はヴァリエール家の子女が持つ使い魔だ。

東方のメイジだと公言しているのも、それも関係しているのかもしれない。

あとは……、仮にこの任務で犠牲者を出した時に、ワルドさんがどういう状況に陥るかも考えなければ……。

(うーん。他の目的まで考えるとキリがないし、不毛な気がするわね)

リウスは、今日の前を飛んでいるグリフォン、そしてその背に乗るワルドとルイズを見つめた。

どの可能性であったとしても、襲撃があった以上危険であることには変わりはないのだ。

「キュルケ、タバサ。二人には詳しく言えないけど、ラ・ロシエールで襲撃があるかもしれない。私たちを降ろしたら、帰った方がいいわよ」

リウスはシルフィードの背に視線を落としながら、真面目な顔でそう告げた。

「あと、ギーシュくん。貴方はどうする？」

その言葉は、『帰った方がいい』と雄弁に物語っていた。

呆けたように口をぽかんと開けていたギーシュだったが、少し怒ったような顔で口を

開いた。

「ミス・リウス、馬鹿にしないでください。僕は僕の意味でここにいます。今さら帰るくらいなら、最初から名乗り上げたりなんかしません」

次いで、キュルケが赤髪をかき上げながら口を開いた。

「私達はただ物見遊山でラ・ロシエールに行くだけ。ヴァリエールとそのお仲間の行き先が偶然同じだからって、私達がわざわざ行き先を変える必要なんてどこにもありませんわ。そうでしょう？」

「心配」

タバサはキュルケの発言に頷きながら小さく声を出す。

三人ともが三人ともリウスの言葉に反論すると、デルフリンガーも鞘をかちやかちや鳴らしながら声を出した。

「いいじゃねえか相棒。旅の仲間が多い方がいいに決まってるぜ」

その言葉を聞いたリウスは、視線を落としたまま静かに諭すような声を出した。

「あなたたちの実力を疑ってる訳じゃないわ。ただ、危険すぎる。ワルドさんと私がいれば、どちらかがルイズを守ることができると思う。でも……」

「心外」

タバサがこちらへ向き直って、今度ははつきりと言葉を挟んだ。

リウスが顔を上げると、キュルケも憮然とした顔をして口を開く。

「そうよ、それなら尚更だわ。貴方たちに危険なことがありそうだって言うなら、私達が協力する理由にもなるでしょう？ 友人が危ない目に合いそうだっていうのにハンカチを振って見送るだけだなんて、ツエルプストーの家名にあるまじきことだわ」

「そうですよ。そういうことなら、何が何でも帰る訳にはいきません。僕たちは貴族なんです。」

「守られるだけの子供じゃないんですから」

（お姉ちゃん、こんなものぜんぜん平気だよ。僕だっていつも守ってもらっただけの子供じゃないんだから！）

突然、リウスは弟エミールの姿が見えた気がした。

床に伏している自分。

止めようと手を伸ばすけど、エミールはそのまま外に向かっていく。

笑いながらこつちに手を振っている……。

リウスは自身の顔を歪めると、顔を見られまいとするかのようにもう一度視線を落と

した。

「・・・争いから逃げることは恥なんかじゃないわ。危なくなったらすぐに逃げて。それだけは、約束してほしい」

そのリウスのただならぬ様子に、三人共がこくりと頷く。

「だーいじょうぶよ、そんな危ないことにはならないつて。リウスったら心配性なんだから」

そう言いながら、キュルケがリウスの肩に優しく手を置く。

リウスはびくりと身を震わせるが、キュルケの笑い顔を見るとほっとしたかのように笑顔を浮かべた。

「そうね、私の杞憂なら一番いいわ。・・・あの、遅くなっちゃったけど、皆ありがとう」
一瞬三人が驚いたような表情を浮かべ、次には微笑みを投げ返していた。

「いいのよ、リウス。友人なら重い荷物を分け合うのなんて普通のこと。あなただけが重荷を背負う必要なんてないのよ」

「これは僕の任務でもあるんです。僕こそ感謝を言わなければならぬですよ。さつきは助けてもらってありがとうございました」

「あらっ、もうそんなことになってたの？ ギーシユは無理しないで帰った方がいいんじゃないかしら」

キュルケがギーシュの言葉をからかい、ギーシュは任務のことを漏らしそうになりながらもしどろもどろに反論している。

タバサは先程までほとんど気付かない程度の微笑みを浮かべていたが、もういつもの無表情に戻っていた。

リウスの顔をじつと見つめたまま、タバサは口を開いた。

「問題ない、ふたりは私が守る。あなたの負担にはならない」

短くそう伝えると、タバサはくるつと前に向き直った。

「・・・ありがとうタバサ。いざとなったら、お願いね」

リウスのその言葉に、タバサは前を向いたまままで小さく頷いた。

リウスが前方を見ると、ラ・ロシエールの街の灯が美しく瞬いているように見えた。

確かにその光景はとても美しかったのだが、リウスの目にはその灯が不気味に光輝いているようにも見えるのだった。

第二十五話　ひとときの休息

「一人では危ないので、よければ送っていきましようか？」

「いえ、これでもメイジですからね。問題ないですよ。お勤めご苦労さまです」

その親切な衛兵の一人に、リウスは笑顔を返した。

少し前に、一行は明日の朝一番で船を出す予定の商船があるかどうかをラ・ロシエールの門番に問い合わせていた。

しかし、どうやらアルピオンがラ・ロシエールに近づく月の重なる夜、『スヴェル』の月夜が明後日のため、船を出すには明後日でないといけない、ということだった。

船が出ない以上どうしようもないため、一行は貴族向けの宿場だと聞いた『女神の杵』亭に泊まるということにしたが、リウスだけは一旦別行動を取ることにした。

先程の襲撃についての情報を得るために衛兵の詰所へ向かい、ついでにアルピオンの現状を詳しく尋ねていたのである。

衛兵たちは相当忙しいらしく、リウスがメイジだと聞いて渋々対応していたのだが、学院の衛兵でありラ・ロシエール出身でもあるドニの名前を出すと一転、表情を変えて色々なことを教えてくれたのだった。

「相棒。あんなに心配してたつてのに嬢ちゃん達をほっぽるといいいいのか？」

衛兵の詰所を離れたリウスに対して、背負っていたデルフリンガーが声を出した。

街中では喋るなど言っていたのにこの有様であるが、無視して騒ぎ始められたらもつと面倒なことになりかねない。

「ワルドさんとルイズだけなら一緒にいたけどね。別れる前にタバサとキュルケにもお願いしてきたし大丈夫だと思う。アルビオンへの港町なら情報も入ってきてるだろうし、どつちにしてもどこかのタイミングで来る必要があったのよ」

「さつき聞いた内容のことか？ スカした貴族の兄ちゃんにでも聞けばよかつただろーに」

「ワルドさんのこと？ うーん……、いつ船が出るのかも知らなかつたみたいだし、あんまり当てにはならないかな」

「なんだ、あんまり信頼してねーんだな」

まあね、と短く答えたリウスに、ふーん、と生返事をするデルフリンガー。

しかしまだ話し足りないのか、また背から声がかけられた。

「しっかし相棒も慣れてやがんね。いつもこうやって話聞いてんのか？」

「仕事柄ね。先にツバつけとけば動きやすいでしょ？」

「ツバつけとけば……、つてその使い方おかしくねーか？ とにかく襲撃はあるかもし

れないってことだな。俺っちをどう使ってくれるか楽しみってなもんだ」

「そんなの楽しみにしてんじやないわよ。あと、そろそろ静かにしてなさい」

デルフリンガーが静かになったのを見届けてから、リウスがラ・ロシエールの街道を歩いていると、道端に多くの空き瓶やら得体のしれない生ごみやらが転がっていた。

ごろつきらしい連中が酒場の前で喧嘩をしているのを尻目に、リウスはさっさと宿屋へ向かって歩いていく。

今のラ・ロシエールには多くの衛兵たちが臨時で送られてきているらしいが、それでもアルビオンから逃げてきた傭兵や移民による問題が日に日に増えているようだ。

そして、アルビオンについても良い話はほとんど聞けなかった。

かといってトリステインにはどうすることも出来ないらしく、今は他の国と同様に静観を決めてゲルマニアアとの同盟締結に動いているとの噂である。

いよいよ、アルビオン王家は無くなってしまいうだろう。

そう衛兵達は語っていた。

アルビオンの王族を襲っている貴族派は、『レコン・キスタ』という組織の元に反乱を起こしているようだ。

その組織が掲げているのは、どうやら東方にあるという『聖地』とやらの奪回と、貴族による共和政を目的とした革命を全ての国に対して行なっていくことなのだそうだ。

しかし、それを聞いたリウスは嫌な予感しか頭に浮かばなかった。

共和政ということは、君主を持たない、または君主が形式化されるということだ。

メイジという武力を持った集団が、王族という分かりやすいトップを持たなくなるということ。

それによつて、一体どんな混乱が生まれるのかなんて分かつたものではなかった。

この世界がどうなるかなんて私には分かりようもない。

正直に言うと、ハルケギニアもこの国の行く末も、私の知つたことじゃあないのだ。

ただ、私の守りたい人達が笑つて暮らせればそれでいい。

しかし、この戦はよくある話のように全てを巻き込んでいくもののように思えた。

そしてこの『よくある話』には、必ず弱者の犠牲がつきものとなる。

かつて、リウスの世界にあるシユバルツバルド共和国が、レッケンベル社という組織に力を奪われていった時と同じように。

それはともかく、とリウスは思考を切り替えた。

思つていた通り、ラ・ロシエール郊外で貴族が襲われるという事件は起こつていないらしい。

グリフォンに乗つたメイジについての知識を衛兵に尋ねてみたところ、そういつたメイジは王家直属の貴族か、それに相当する凄腕のメイジだという認識をちゃんと持つて

いるようだ。

だとすると、峡谷での襲撃者たちはほぼ間違いなくこの任務を妨害しようとしている連中なのだろう。

他の目的があるうがなかるうが、間違いなく言えることは現状が楽観できる状況ではないということだった。

リウスは懐に仕舞い込んだ小さな二つの皮袋にそつと触れる。

この皮袋は今回の旅でリウスが持ってきた少しばかりの荷物であり、片方には百枚ばかりのエキュール金貨、もう片方には青く輝く魔法石が入っていた。

この魔法石、ブルージエムストーンは一部の魔法の触媒となるが、数が七個しかない上にハルケギニアで補給することはできないだろう。

しかし、今回の旅で使い切ることすらもリウスは視野に入れていた。

(七回か……。足りないことはないだろうけど)

リウスはもう一度その数字を頭に刻み込むと、周囲を警戒しながら皆が泊まっている宿屋へ繋がる道を足早に歩いて行くのだった。

一方、リウスを除く一行は『女神の柩』亭に到着していた。

この宿はラ・ロシエールで一番上等な宿だそうで、一階が酒場、二階が寝室というハルケギニアではオーソドックスな宿屋である。

街で一番上等ということは貴族相手に商売をしているということであり、この宿はそれに見合った非常に豪華な内装となっていた。

テーブルからして床と同じ一枚岩を削り出したものであるらしく、顔が映り込むほどピカピカに磨き上げられている。

その様相から着席するだけでも相当な金額がかかると判る代物だった。

その内の一番入り口に近いテーブルで、旅の一行は数本のワインボトルと上等な食事の皿を並べて適当に食事を始めていた。

しかし今の一行にはリウスと、そしてワルドの姿もなかった。

リウスは衛兵の詰所へ道中の襲撃を伝えに行き、ワルドはというとアルビオンへの出発を直接交渉しに行くということで、ひとり船着き場へと向かっていったのだった。

「全く……、リウスもワルドも……。一人じゃ危ないかもしれないのに……」

ルイズは二人の行動にぶちぶちと文句を言いながら、ローストビーフを一切れ口に放り込む。

キュルケは何やらぶすつとした顔をしながら、ワイングラスを傾けていた。

「リウスなら問題ないでしょ、一人の方が動きやすいとも言ってたし。ルイズの婚約者

殿も衛士隊長なんだからウデに自信がおりなのよ」

なにやらキュルケがご機嫌ナナメなのは、先程いつものようにワルドへ言い寄ったものの、けんもほろろに扱われたためである。

それと同時に、あの氷のような目を向けてきたワルドがルイズの婚約者だと聞いて、キュルケはひとり心配なような不安なような気持ちを覚えていたのだった。

(まったく！ 美女をあんな目で見ると、本当に不躰だわっ！)

自分是不躰でないと自負するキュルケは内心の思いをいちいち口に出さなかったが、それでも気に喰わないとばかりにぷりぷり怒りながらワインを煽っていた。

「やあ、遅くなったね」

そうこうしているとワルドが戻ってきた。

ギーシュは疲れのあまり食事も程々にぐったりとした体勢でいたが、ワルドを見るやびしつと姿勢を正している。

ワルドは一行の空いた椅子に座ると、手ずからボトルを取って、ワインをグラスへ注いでいった。

「残念な知らせだ。やはりアルビオンに渡る船は明後日にならないと出ないそうだ」

「そうなの。急ぎの任務なのに・・・」

ルイズは不機嫌を隠さずに眉根を寄せた。

「遅くとも明後日の夜には出発できるようだ。明日はゆつくり休んで英気を養うことにしよう。積もりに積もった話もあることだしね」

ワルドはそう言つてルイズに向けてウイंकを投げかけると、ルイズが照れくさそうにもじもじとしている。

キュルケはますます面白くなさそうにワインをぐびりと煽つた。

そうして一行は学院の話やワルドによる魔法衛士隊の話、目を輝かせているギーシユがワルドに様々な質問をする等をしながら過ごしていった。

料理の皿が少なくなつてきた頃、会話はルイズの使い魔であるリウスの話へと移つていった。

「それにしても東方のメイジを使い魔にするとはね。ルイズ、ミス・リウスはどんな人なのか？ なにやら随分と戦い慣れてるようだが」

「確か、えつと、シュバルツバルドっていう国で学者をしながら、ボウケンシャつてのをしていたつて言つてたわ。色んな国を回つて、色んな人の頼みを受けて」

「へえ、流浪のメイジつてやつなのかな。貴族崩れなのかい？」

「リウスは貴族じゃないつて言つてたけど……」

キュルケが自分のグラスに注がれたワインをちびりと飲んだ。

「どちらにしても、良い意味で貴族らしくはないですわね。平民だろうが何だろうがお

構いなしに話してるかと思えば、学院の先生相手でもちゃんと意見して。ゲルマニアでも珍しいタイプの人ですわ」

「すごく立派な方ですよ、ミス・リウスは」

「はしばみ草のサラダ、大盛りで」

疲労もあつて一行の料理はなかなか減らないが、店員へサラダの追加を頼んだタバサはその健康家っぷりを存分に発揮していた。

料理の八割はタバサが食べているといつてもいい程である。

「君達は随分とミス・リウスを信頼しているようだね。僕は東方について少し興味があるんだが、何か東方についてのことを話していたかい？」

「そんなには話してくれないわ。あまり話したがるらないの」

「そういえば、私達もそんなにリウスのこと知らないわね。リウスも良い年齢なんだし、素敵な殿方でもいたことあるのかしら」

「お肉、追加で」

はしばみ草のサラダを持ってきた店員へ、タバサがまた追加の料理を頼んでいる。

その瑞々しい緑色のサラダを見たギーシュが何か思いついたように口を開いた。

「前にミス・リウスが言っていたんですが、東方にはイグドラシルっていう大木があるらしいですよ。実や種は万能の薬で、葉っぱは死んだ人を……あだっ！」

突然、キュルケがギーシユの頭をすぱんつとひっぱたいた。

(ギーシユ。あなた、リウスがあまりその話を他の人にしないのでって言つてたこと忘れたの?)

(ご、ごめん。つい……)

ひそひそ話をしている二人に向けて、ワルドがいたつて真面目な顔を向けた。

「死んだ人を、何かな?」

「い、いやその」

「お供え」

黙々と料理を食べていたタバサが小さく口を開いた。

その意図にすぐ気付いたキュルケがタバサの言葉を継いで発言する。

「そう、死んだ人のためにお供えするらしいですわよ? そういう風習があると言つていましたわ」

キュルケがあっけらかんとした態度でそう言葉を添えた。

しばらくワルドは真面目な顔のままギーシユとキュルケを見ていたが、何やら観念したように静かに笑つた。

「そうか、死んだ人のためにね。一度その大木を見てみたいものだ」

ワルドがそう言葉を区切つた時、リウスが宿に帰つてきた。

「ごめん、遅くなったわ」

「ほんとに遅いわよ、心配したんだから。平気？ 何にもなかった？」

ルイズはむすつとした様子をしながらも、リウスを気遣ってあれやこれやと質問を投げかけている。

「何にも無かったわよ。ちよつと衛兵に話を聞いてただけ」

リウスは空いた席に腰かけると、先程の襲撃者たちについて知り得た情報を一行へ説明する。

そして、ワルドも出発が明後日にならないと出来ないことを改めて告げた。

「それなら今すぐにも出発したいところだが・・・、出発できないからには仕方がない。今日はもう寝るとしよう。先ほど部屋を取った」

ワルドが鍵束をじやらりと机の上に置いた。

「ミス・キュルケ、ミス・タバサ、ミス・リウスが相部屋だ。ギーシュ君は一人部屋となる」

へえ、とリウスが少し驚いた顔をする。

そう来るなら次に続く言葉は・・・。

「そしてルイズと僕が同室だ」

「そんな、ダメよ！ まだ私たち結婚してる訳じゃないんだから！」

「大事な話があるんだ。二人きりで話したい」

「で、でも……」

ちらりとルイズがリウスの顔を見た。

ルイズの視線に気付いたリウスは、穏やかな表情のまま自分のグラスにワインを注いでいく。

「ギーシユくんが一人部屋なのは良くないと思いますよ」

一行がリウスの顔を見る。

リウスがワインをちびりと飲んでいる中、ワルドは少しばかりの微笑みをリウスへと向けた。

「どういふことかな？」

「いつ襲撃があるかも分かったものじゃない、だから一人で部屋にいるべきではない、という事です。」

まあ私がギーシユくんと相部屋になってもいいのですが、親密でない男女で泊まるのは褒められたことじゃないでしょう？」

「そ、それはちよつと……!」

「な、なに言ってるのよりウス! ダメよ! ぜったいダメ!」

「あら、リウスったら。どういふことなの?」

ギーシュとルイズが慌てたように声を上げ、何を思ったのかキュルケが目を輝かせながら前のめりになってくる。

「本当はみんなで一つの部屋にでも集まっていた方がいいんだけどね。それぞれ個室に泊まるのならそういうのもアリって話よ」

リウスがそこまで言うと、キュルケは前のめりになった体勢から椅子に深く座り直した。

「なーんだ。危険だから、つてこと？」

「? そうよ、他に何かある？」

きよとんとしたリウスの様子に、キュルケは「つまんないの」と一言漏らしていた。

ギーシュは心なしかほっとした様子であり、ルイズは「それでもダメ!」とわあわあ騒ぎ立てている。

ワルドは少し溜め息を吐くと、観念したように声を出した。

「・・・分かったよ。ルイズもそれは嫌なようだし、流石にそこまでしてもらおう訳にもいれないからね。ルイズとミス・リウス、僕とギーシュ君で別れて泊まることにしよう」
「すみません、ありがとうございます。ルイズと話している時には部屋に入らないようにしますので」

「ああ、そうしてくれると助かる。ではルイズ、すまないが僕の部屋まできてくれ」

ワルドはそう言つて鍵束から一つの鍵を抜き取ると、ルイズに目配せをした。

「ええ、じゃあ・・・」

二人で話をするだけなら、とルイズは特に反対する様子もなく、ワルドと一緒に階段を上がつていった。

もちろん、リウスは二人の会話が気にはなつた。

しかし盗み聞くつもりなんてなかつたので、とりあえず食事にしようと店員へいくつかの料理を頼んでいく。

正直に言つて空腹だったリウスは、まず大盛りで運ばれてきたタバサおすすめのサラダへと手を付けるのだった・・・。

第二十六話 かつての夢 4つ目

ルイズは夢を見る。

ここはどこかの宿屋の中だろうか。

真白い壁に木でしつらえた家具が立ち並び、簡素ながらも上品な雰囲気醸し出している。

その部屋の片隅にある鏡の向こうから、虚ろな顔をした、やせこけた少女がこちらをじっと見つめていた。

薄桃色の長い髪は今さつき湯あみを終えたように濡れている。

しかしそれでも所々がしわくちやになっていて、今までもろくに手入れもしていなかったように見えた。

ルイズはその姿に、心臓が強く握りしめられたような感覚を覚えていた。

(り、リウス……、よね……?)

着ている服は小奇麗で可愛らしい寝巻のようであったが、その表情は何の生氣もない、まさに死人のような顔つきだった。

ルイズがそんな姿から目を離せないでいると、耳元でかすかな声が聞こえてくる。

「……運命は、いつも、私という。だったら……女神さまは、何のつもりで……」
そう呟く鏡の中の少女は虚ろな顔をしたままだったが、その目は凍りつくかのような怒りの感情を湛えているように見えた。

その視線は、そのまま強く自分自身へと向けられている。

ふと、鏡に映った部屋の扉がちやりと開き、背の高い白髪の老人が姿を現わした。少女の姿を見ると目を細め、ゆっくりと近付いてくる。

「……そんな髪のままでしたら、病気が長引いてしまうじやろうが」

その手には柔らかいふわふわのタオルが握られていた。

それを少女の頭に被せると、ゆっくりと頭を拭いていく。

タオルの向こうから、とても優しくで大きな手の感触が伝わってくる。

そして綺麗なクシで少女の髪を優しく整えると、老人は鏡へ向いたまま青い瞳を鏡のリュースへと向けた。

「体調が良くなったら、君の要望通り魔法を教える。そして、それをどう使おうが君の自由とする。

あとはよく食べて、よく寝ることじやな。まだ薬は効き始めたばかりじや」
老人が少女の手をそっと持つ。

そのまま部屋のベッドまで連れてくると、ほこりを払うようにばさばさと布団をはたいた。

「もう寝なさい。体に響くよ」

少女がゆつくりと布団に入っていく。

それを見届けた老人が部屋にあったランプの灯を消すと、老人は部屋を出てゆつくりと扉を閉めた。

「おやすみ、リウスくん」

ぱたんと閉じられた部屋は真つ暗になったが、カーテンの隙間からはほのかな月明かりが差し込んでいる。

その月明かりを少女はじっと見つめたまま、いつまでも目を閉じようとしななかった。

突然、場面が変わる。

先ほどと同じ部屋の中、椅子に座っていた少女が目の前テーブルに置かれたスプーンを静かに啜っていた。

「だいぶ食べられるようになったようじゃな」

目の前の椅子に座って本を読んでいた老人が、ぱたんと本を閉じる。

少女は何も答えないまま、木のスプーンでもう一度スープをすくった。

「ほれ、今日の薬じゃ。ちやんと飲むんじやぞ。夜には戻る」

ことん、と目の前のテーブルに青い小瓶を置いてから、椅子にかけてあつた紫色のローブを羽織つた老人が細長い杖を手に部屋の扉を開けようとする。

すると、とても小さな声で少女が口を開いた。

「・・・魔法は？」

「うん？」

老人が振り返つてこちらを見る。

「・・・魔法は、いつ？」

「驚いた。ここに来てから、喋ってくれたのは初めてじゃの」

ふむ、と老人は長く伸ばした白いひげを撫でると、静かに声を出した。

「魔法はまだ早いよ。まずは身体を治しなさい」

それじゃあの、と老人は扉を開けて部屋を出て行つてしまった。

さつと場面が変わる。

そこはどこかの店のようだった。

棚に数多くの服やローブがしまわれている一方で、壁には様々な形の杖が飾られてお

り、そこには数多くのローブを着た人々がうろついている。

「ほれ、これなんかどうじゃ」

隣に立っていた白髪の老人がいくつかの服を手渡してきた。

それと一緒に、青いローブに短い杖。

少女は何も言わずに、山のように抱えた服や杖をじつと見つめている。

「どれもひらひらしていて、今の流行はよく分からの。まあ使ってみてからじゃな、それらはいったん買おうとしよう。君は何か欲しい物があるかね？」

老人は微かな微笑みを浮かべながら、こちらへ語りかけてくる。

「・・・杖」

「その杖だと不満かね」

「・・・お母さんの使ってた杖はあるの？」

老人がううむ、と唸った。

「農の家にあるが、あれはウィザードクラスでないと扱えないよ。杖に負けてしまう。君にはまだ無理じゃな」

「・・・そうなの。じゃあ、これでいい」

その言葉に少女の頭を優しく撫でると、老人は少女が抱えていた服や杖を手にとってから中年の店員に声を掛けた。

老人の姿を見た中年の店員が驚いた顔をする。

「あれ、先生。珍しいですね」

「なんじや、元教え子のところに儂が来たら不満かね」

「そんな滅相もない。おや、この子はどうしたんです？」

店員がにこやかにそう言うと、何かを思い出すかのように首をひねっている。

「親戚の子じや。余計な詮索はせんでくれ」

「はいはい、承知しましたよつと。すぐ会計しますんで」

店員はそう言つてこちらをちらつと見てから手早く会計を済ませると、大きめの皮袋を老人へ手渡した。

店を出ると少し遠目に大きな噴水があった。

その更に先には、天を突くかのような巨大な塔が立っている。

「さて、リウスくん。これから君はマジシャンとなる。このゲフェンで魔法を扱う以上、儂は君を一人のマジシャンとして扱う。覚悟しておくようにの」

また、場面が変わった。

そこはどこかの泉の近くで、泉の中から大きくはみ出ている石がぶすぶすと煙を上げていた。

少女の声が聞こえてくる。

ゆつくり、慎重に呪文を唱え続け、ようやく呪文を終えた瞬間に勢いよく杖を振り下ろした。

「ファイアーボルト！」

ほんの小さな火の矢が泉の石に向けて飛んでいく。

「ほすん、という音と共に石へぶつかると、わずかな煙を上げただけで火の矢はたやすく消えてしまった。」

「ちみっこいのう。それでマジシャンが務まるのかね」

ぐつと唇を噛みしめて、少女はもう一度呪文を唱え始めた。

「コールドボルト！」と叫んで杖を大きく振り下ろす。

今度は小さな氷の矢が石に当たって、かきんと澄んだ音を鳴らした。

「これじゃあ、マジシャンギルドで馬鹿にされるのも当然じゃな。ギルドで教えられたじやろうが。」

自分の心臓から運ばれる血液をしつかりと感じなさい。それらが通る流れに沿って身体の端々から魔力を凝縮させ続け、その魔力を大気中へと放出する。放出先の一点へ向けて、魔力が八方から交わるように集中させるのじやよ。

その魔力の通り道にある大気中の成分に、呪文を通して魔力反応を引き起こすの

じゃ。そして、反応させた一つ一つの現象を積み重ねて大きな反応へと変える」

「儂の頭上を見ておれ」と老人が付け加えると、呪文を静かに唱えていく。

すぐさま老人の頭上に小さく浮かびあがった十個の小さな氷の欠片が、みるみる内に大きくなっていった。

老人の言うように八方から小さな氷がくつつきながら、内側からもめきめきと氷は成長を続け、まるで圧縮するかのように中央が潰れていくと氷の端が徐々に鋭さを増していく。

最後には、大人程もある十本の巨大な氷の矢が老人の頭上に浮かんでいた。

「コールドボルト」

ゴウツ、と風切り音が響いたかと思うと、一瞬の内に十本の巨大な氷の矢が大きな音を出して石の周囲に突き刺さった。

辺りに巻き上げられた水しぶきが舞っている中、老人は泉の石を眺めながら口を開いた。

「次は早くするぞ」

老人の頭上に、今度は十個ばかりの小さな火の粉が現れた。

しかしまばたき程の間に、それらは燃え盛る巨大な炎の矢へと姿を変える。

「ファイアーボルト」

頭上に浮かんだ十本の炎の矢が尾を引いて、泉に突き刺さる水の矢の元へ飛んでいく。

それらがぶつかった瞬間、大きな爆音と共に泉の岩の周囲に炎が巻き起こった。辺りが霧のような水蒸気に包まれていく。

「練習を続けなさい。では、儂は二、三日ジュノーへ向かう」

「・・・」

少女は、あまりにも自分と違う魔法に俯いたまま杖を握りしめていた。

「・・・わからない」

誰にも聞こえない程の小ささで少女がひとり呟いた。

老人にもこの声は聞こえていなかったようだが、持ってきた荷物袋へいくつかの本を入れ終わると、老人は少女の近くへ歩いてくる。

「そうじゃな、視野を広く持ちなさい」

少女が老人を見上げる。

その老人の眼を見たルイズは、まるで全てを見透かされるような感覚を覚えながらも、それと同時にほっとするような優しさを強く感じていた。

これは、この少女、リウスの感覚なのだろうか。

「正解を求めるのは当然じゃ。ギルドで教えられる理論も一般的な正解として見なされ

ておる。しかし、儂のはちよつと違う」

老人は悪戯そうな微笑みを浮かべると、膝をついて少女へ語りかける。

「儂はの、小さな小さな鳥をイメージしておる。自分の身体から浮かび上がった小さな鳥たちが、空中に交じり合っていくのを杖でまとめているのじゃ。無論、これは勝手な儂のイメージじゃが、決して間違いではない」

「・・・難しいわ」

「じゃろうな。正解を求め、正しいと思つたことに固執してしまうのは仕方のないこと。しかし、それは君が思考を止める理由にはならない。

自分がどうしたいのかを、視野を広く持ちながら常に考えなさい。その答えは君自身を知っているはずじゃよ」

老人は立ち上がつて荷物袋を背負うと、少女の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「あ、あの」

それを見上げながら、少女がはつきりと声を出した。

「お母さんは、どんな人だったの？」

老人はすつと目を細めると、昔を思い出すかのようにしばらく黙り込んだ。

「あの子は、儂の自慢じゃったよ。リウスくん。君と同じようにの」

そう言つてにこりと微笑んでから、じゃあ行つてくる、と老人は立ち去っていく。

その後ろ姿を見つめていた少女が、ぐっと口元を結んでから叫んだ。

「先生！」

老人がこちらを振り向く。

「魔法を教えてくれて、ありがとうございます！」

老人はにこやかに笑うと同時に、意地悪そうな顔をした。

「どういたしまして。しかし、先生つてのは何じや。もう引退しと言ったじやろ
うが」

「先生は、先生です！」

老人は、はっはと笑うと少女へと手を振った。

「君は、お母さんと本当によく似ているね。数日したら戻るよ」

歩いて行く老人が小さくなるまで、少女はその後ろ姿を見つめていた。

やがてその姿が見えなくなると、少女は深呼吸をしてから自分の両頬をぱちんと叩く。

「よし」

そして、少女の魔法の練習はそのまま日が暮れるまで続いたのだった……。

ラ・ロシエールで一番上等な宿というだけあって、ルイズとリウスの部屋もまた非常に立派なつくりとなっていた。

ベッドは天蓋付きの大きなものであり、飾りとしてレースのカーテンも付いていた。テーブルや椅子ひとつ取っても、とてもきめ細やかな最高級の木材を使っているようである。

この街に到着した翌日の朝、いち早く起きていたリウスは部屋の中を見て回っていた。

別にこういった家具にはそんなに興味もないが、かといってルイズをほつたらかしにして一階に下りていくのも後ろ髪が引かれてしまう。

そこそこ日も昇ってきているが、まだルイズはぐっすりと眠ったままだった。

その様子を見たリウスは微笑みを浮かべながらベッドのカーテンをそつと閉めて、また部屋の中を見回し始めた。

要するに、暇なのである。

すると、扉をコンコンとノックする音が聞こえた。

「おはよう、良い天気だね。ミス・リウス」

扉を開けると、羽帽子を被ったワルドがリウスを見下ろしていた。

「おはようございます、ワルドさん。こんな朝早くにどうしました？」

「ああ、ルイズは起きているかな？」

「まだ寝てますよ。起きたら声をかけましょうか？」

「そうか。いやなに、実は君に用があつてね」

ルイズはきよとんとしてワルドを見る。

「ミス・リウス。昨日ルイズと話していて驚いたんだが、君は『ガンダールヴ』なんだろう？！」

リウスは頭の奥が急速に冷えていくのを感じていた。

ルイズが彼に漏らしたのでろうか？

「……さあ、何のことでしょうか」

「ああ、そんなに警戒しないでくれたまえ。『土くれ』のフーケの件は魔法衛士隊にも伝わってきていてね」

ワルドはにつこりと笑いながら説明を続けていく。

「ルイズが関わっていたから僕も興味を持っていたんだが、そこで昨日の襲撃の時だ。僕は君の左手のルーンが光輝いていたのに気付いたのさ。そして僕が助けに行つたとき、もしか、と思つたんだ」

何が言いたいのか、といった顔でリウスはワルドの言葉を待つ。

「君は飛んでくる矢が見えていただろう？」

「……」

「月明かりがあるとはいえ暗闇であることには変わりはない。あんな暗闇にいて、飛んでくる矢が見えていたなんて信じられないことだ。恥ずかしい話だがこの僕でさえなかなか難しい……、空気の動きから矢の軌道を予測することは簡単なんだがね。」

僕は歴史と兵に興味があつて、前に王立図書館で始祖とその使い魔について調べたことがある。そこに、そのルーンと同じ模様、『ガンダールヴ』のルーンがあつたのさ」

リウスの左手を指差したワルドは早口に話し続けていく。

ワルドの言い分は違和感こそあるものの有り得ない話ではなかつたが……。

リウスにはわざわざそれを伝えるに來たワルドの思惑がいまいち掴めずにいた。

「あの『土くれ』のフーケを捕らえたつてことも、そう考えれば納得もいく。どうかな、間違つてるかい？」

「……ガンダールヴつて名前は初めて聞きましたが、信じてはもらえなさそうですね。それで、どうするんですか？」

ワルドは意を得たかのように嬉しそうな顔をしながら、「ああ、これは失礼」と大げさな身振りをする。

「昨夜、ギーシュ君から学院の決闘の話も聞いてね。君はずいぶん強いようじゃないか。」

そこでちよつと、これをね」

ワルドは腰に差したレイピア状の魔法の杖へ手をかける。

「立ち合いでしょ？」

「いいだろう？ 『ガンダールヴ』の伝承に興味があるんだ。それとも今は都合が悪かったかな？」

そう言うワルドの視線がリウスの後ろへと移った。

リウスがその視線の先へ振り返ると、寝ぼけ眼を擦るルイズの姿があつた。

「……ワルド？ どうしたの、こんな時間に……」

「ああ、これはよかつた。ルイズ、実は君の使い魔くんの手合わせを頼んでいたのだが、どうも乗り気になつてくれなくてね」

ルイズだけでなく、リウスも困つた顔になつた。

ルイズまで巻き込んで、この男は一体どういうつもりなのか。

「ワルド、そんなバカなことはやめて！ ケガでもしたらどうするつもりなのよ！ そもそもそういうことをやつてる場合じゃないでしょう？」

「もちろん、こんなか弱い女性を傷つけるような真似はしないよ。でも、貴族という人種は厄介なものでね。強いか弱いか、それが気になるといてもたつてもいらなくなるのさ」

うーむ、とリウスは内心唸っていた。

ワルドが急にこんな態度を取り始めた理由のこともそうだが、『ガンダールヴ』の件といい、何が思惑なのかいまいち分からない。

ワルドの言い分を信用して立ち合いをすることで、彼の思惑を掴めるかもしれない。しかし真意が分からない以上、無策でそれに乗っかってしまう方が後々危険なのかもしれないのだ。

少しの間悩んだリウスは、ワルドへ正直に問いかけてみることにした。

「なぜ、今なのですか？ この旅の目的は違うでしょうか？」

「いや、今だからこそ必要なことなのさ。君はルイズの使い魔だからこそ、ここにいます。しかし実力は分からないだろう？ 昨日のことで戦い慣れているのは分かったが、今後のためにも君の実力がどの程度のものなのか、推し測っておくのは重要なことなのさ」

「それは否定しませんが・・・」

「僕はルイズが心配なんだ。僕が守ればいいだけの話だが、そうはいってられなくなる場合があるかもしれない。どちらがルイズを守るのかは決めておく必要がある」

そのワルドの言葉に、リウスは眉根を寄せた。

「今どちらがルイズを守るのかなんて、決めることじゃないでしょう。違いますか？」

「・・・いいかい、使い魔くん。ルイズは僕よりも君を信頼しているのかもしれないが、

ルイズを守れるのは君ではなく、僕だ」

ルイズは、昨日ワルドに何を言ったのだろうか。

明らかにワルドはこちらにただならぬ感情を持っているようだ。

だからこそなのか、何を言っても折れてくれそうにない。

実力を知っておかなければならない、というワルドの言葉にも確かに一理あるのだが……。

そう思ったリウスは仕方なく曖昧に頷いた。

「そこまで言うのなら……。ケガをさせたくないの、魔法は」

「構わない。全力できてくれたまえ」

リウスの言葉を喰い気味にワルドがそう宣言する。

そう言われても、トリウスは困った表情をしたが、しょうがないとばかりに溜め息を吐いた。

ルイズはというと唾然とした表情を浮かべたままである。

「じゃあ、訓練つてことで。場所はどこでやるんですか？」

「この宿は昔、アルピオンからの侵攻に備える為の砦だったんだ。中庭に練兵場がある、そこに来てくれ。ルイズ、君には介添え人になってもらいたい」

「ちよ、ちよつと！ いきなり何を言い出してるのよ！ リウス、あなたもやめなさいよ

！

「・・・まあ、ワルドさんの実力を見たいってのもあるし。訓練よ、訓練」
「なっ！」

リウスはいつの間にか自分が少し乗り気になってきているのに気付いていたが、別にいいかと思いはじめていた。

ワルドの実力を知るとは、私にとってもそこまで悪いことではないのだ。

リウスの言葉を聞いたワルドは面白そうににやりと笑っている。

「その調子だ。じゃあ、中庭で待っているよ」

そう言うと、ワルドはマントを翻してさっさと立ち去っていくのだった。

第二十七話 中庭の決闘

中庭はかつての練兵場という言葉通り、今では樽や空き箱が積まれた物置き場となっていた。

既に忘れ去られてしまったのだろう、すっかり昔に覆われてしまった旗置き場がかつてあった栄華の名残をかすかに残しているのみだ。

「今ではこの有様だが、かのフィリップ三世の治下ではここでよく貴族の決闘が行われたものだよ」

ワルドが昔を懐かしむかのようにそんな講釈を垂れ始める。

リウスはその言葉を受けて素直に興味をそそられていた。

「フィリップ三世というと、姫様のお爺様の時代でしょうか」

リウスは以前学院長室で話した内容を思い出しながら口を開いた。

確かオールド・オスマンに対して、あの『ユミルの書』を渡した人物だったはずだ。

「ほう、よく知っているね。そうとも、偉大な国王だった。古きよき時代。王がまだ力を持ち、貴族たちがそれに従った時代……、貴族が貴族らしかった時代さ」

ワルドが感慨深そうに講釈を続けている中、リウスは目を細めてワルドを見つめてい

た。

つまり今のワルドにとつては、王は力なく、貴族も貴族らしくなくなってしまうたということだろうか。

それと、この決闘がどう結び付くのかは定かではないが。

「まあ、それはいい……。昨日は短剣を使っていたようだったが、君の武器はそれでいいのかな？」

ワルドから二十歩ほど離れて立つリウスの手には、デルフリンガーが握られている。

「ええ、デルフが自分を使えつてうるさいんです」

「……相棒には慣れといってもらわなくっちゃあな。いざという時に使いこなせないんじゃないかねえし。」

でもよ、相棒……。この布はなんでえ」

「しょうがないじゃないの。そのままじゃ危ないでしょ」

デルフリンガーの刀身には宿屋から購入したシャツが巻きつけられていた。

シャツでぐるぐる巻きにした上に解けないようにロープで固く縛り付けられているので、傍目から見ると何を持っているかも分からない程である。

大事な任務の最中だというのに、こんな立ち合いなどで大怪我してしまつては元も子もない。とはいえ、立ち合い中に破れてしまう可能性が非常に高いのだが。

「インテリジェンスソードとは珍しい物を持っているね。まあ……構わないよ。ただし、全力できたまえ」

リウスはその言葉に苦笑で返した。

互いに本気で戦わない以上、こんな立ち合いの勝敗には興味がない。

しかし、ワルドの実力を計っておきたいというのも、デルフリンガーを使つてどれくらい戦えるのか知りたいのも事実である。

そうしていると、ルイズを先頭にキュルケ、ギーシュ、タバサが中庭の入り口までやってきていた。

ルイズはむっつりと黙りこくりながら、リウスをじろりと睨み付けていた。

さつきまで散々文句を言われた後である。

ケガだけはしないようにする、ということと同意した形だったが、未だに納得がいていない顔をしているのは誰が見ても明らかだった。

現にリウスが目を向けると、ルイズはつんと澄まして顔を背けている。

「介添え人も来たようだね。では、始めようか」

「そうですね。デルフには慣れていないので、胸をお借りします」

「いいだろう」

ワルドは腰からレイピア状の杖を引き抜くと、杖を右手に持ちながら身体を半身にす

る構えを取った。

リウスもデルフリンガーを両手で持って真っ直ぐに構えるが……、どうにも武器の時点で勝敗は明らかかな気がした。

片手で取り回しの効く、レイピアのような長身の武器。

片刃ではあるが非常に細い形状をしているため、突きに特化している武器のように見える。

鎧を着ているのなら話は別だが、鈍重な両手剣ではとてもじゃないが勝ち目が薄いだろう。かといって仮に短剣であったとしてもリーチの差から同じことであるのは否めない。

勝つためには魔法を使う必要があるが、リウスは魔法を使う気など毛頭なかった。

一応ワルドが傷つかないような魔法もないことはないが、こんな場であんまり手の内明かすのも気が進まない。

そして昨日使った魔法はどれも威力が高すぎるため、仲間へ向けて使うような代物ではないのだ。

「どうした？ 来ないのか？」

「いえ。どうしようかなあ、と」

ワルドはにやりと笑うと、朗々と口を開いた。

「君ももちろん分かっているだろうが、敵は待つてくれんぞ。それならこちらから行く」

ワルドはそう宣言して、身体へ力を溜めるように一瞬姿勢を低くした。

（まずは隙が作れるか、だ・・・）

リウスは身体のをほんの少し緩め、放たれる刺突に備えた。

突きが中心であるのなら、防御に徹していれば攻撃が当たるとはまず無いはず。

最小限の動きで攻撃を凌げば、ほんの一瞬でも隙が生まれるはずだ。

身体を縮めたワルドがバネのように鋭い突きを放った。

その予想以上の速度に目を見開いたリウスは、ギリギリのところまで突きの軌道を「デルプリンガー」でずらす。

そしてリウスの思惑とは異なり、ワルドは即座に突き手を引くと更なる刺突を放った。

内心焦りながらも、リウスはその攻撃をなんとか大きく後ろに飛び退いて回避する。

「・・・凄まじい速さですね」

「この程度で驚かれては困ってしまうな」

ワルドの攻撃には全くと言っていいほど隙が無かった。

リウスはすぐに気持ちを切り替えて、次の手を試すために身構える。

杖を構え直したワルドがすり足のように少し前進する。

その動きに合わせ、リウスはデルフリンガーをワルドの肩目掛けて勢いよく振り下ろした。

しかしワルドはなんなくその攻撃を片手に持った杖で受け止める。そして刀身を華麗に滑らせると一切の無駄なく二発の突きを繰り出してくる。

リウスはデルフリンガーで突きを逸らし、距離を取りながら刺突を避けるも、もう既に防戦一方となつてしまつているのは否めなかつた。

(この程度だと隙は出来ないか。それにしても、避けにくいったらない・・・)
片手で扱っているからだろう、やけに剣先の軌道が変わるのだ。これではデルフリンガーを使わなければ避けることが難しい。

その上、突きに特化しているからか、杖を引くスピードも相当なものである。

これだけでも、ワルドが一流の技量を持つているのは間違いがなかつた。

唯一安心した点といえば、見えない程の速さではないということ。

リウスのいた世界、砂漠の街モロクを根城にするアサン程の速さはないようだ。

しかしどちらにしても、攻撃する隙を作れないのならば同じことである。

リウスは続く数撃の突きを何とか避け切る。そしてワルドの引き手に合わせて、杖の根元を叩き落とすかのようにデルフリンガーを打ち下ろした。

しかし打ち下ろしてくることを予測していたのか、ワルドはそれすらも杖の根元で受け止めてから流れるように突きを繰り出そうとする。

防御したことで刺突のタイミングが若干遅くなったとはいえ、この体勢ではデルFRINGERを使うって避けることはできない。

しかしリウスが待っていたのは、ワルドのこの動きだった。

ワルドの右半身へ一気に踏み込むことで突きを回避する。

肉薄したワルドが驚愕の表情を浮かべる中、リウスはデルFRINGERを右手のみに持ち直し、ワルドの無防備な右腕へ向けて『柄のみ』をすれ違いざまに打ち付けた。

「ぐっー」

充分な手ごたえを感じたりウスはそのまま右手に持ったデルFRINGERから手を離す。

そして空中で左手に持ち直すと、自身の身体を左回転させながら大きく横なぎにワルドの胴体へ向けてデルFRINGERを叩きつけた。と思ったが、寸前のところでワルドが杖を使って防御に成功していたようだ。

ワルドが後ろへ飛び退いて杖を構え直すと同時に、リウスもステップを踏んで体勢を整える。

「なるほど、短剣を使っているだけはある。あのような攻撃をしてくるとは思わなかつ

た」

「あれで何とかなるかと思っただけですが……」

「あの程度では、僕は倒せないよ」

そうは言いながらも、ワルドは内心舌打ちをしていた。

（流石は『ガンダールヴ』といったところか……）

何度も分かりやすい攻撃をしてきていると思っただけが、この攻撃のための布石だったという訳だ。

杖の持ち手である右腕を狙うことで防衛を遅らせるつもりだったのだろう。

しかしそれは裏を返すと、まともな斬撃では太刀打ちができないと言っているようなものだった。

「さて、魔法は使ってくれないのかな？」

「ええ、私の魔法は危険なので。決して手を抜いている訳ではないですよ」

その言葉にワルドが鼻を鳴らす。

「そういうことにおききたいところだが……。ギーシュ君から聞いているよ。それほど殺傷力の無い魔法も使えるんだらう？」

リウスは顔をしかめた。そこまで聞いていたとは……。

「まあ、一応は。貴方達の使う念力みたいなものです」

「使いたまえ。代わりに僕も君が傷つかない魔法のみを使う」

リウスの言葉に嘘はなかったが、肝心なところは伝えていない。

リウスが使える魔法には『ナパームピート』と『ソウルストライク』という魔法がある。

これらは魔力を凝縮して即座に撃ち出すという魔法であり、魔力反応を行なう必要がないために一瞬で詠唱が完成する代物だった。

ただ魔力のみで構築されているが故に、精神体といった存在に対しては非常に有効な魔法なのだが、肉体を持った相手には効果が薄い。

リウスが以前からあえてこの魔法を多用していたのも、この魔法はせいぜい人ひとりを気絶させる程度しか衝撃を与えられないからだだった。

「さあ、次は君からきたまえ。僕の二つ名である『閃光』がどういう意味なのかを伝えるとしよう」

一連の流れを見守っていたルイズ達だったが、心配そうに見つめているルイズとは裏腹に、キュルケやギーシュはわくわくとした表情を浮かべていた。

「ミスタ相手に凄じやないか！ ミス・リウスはあの武器を使い慣れてないと言って

いたけど、もしかしてこのまま勝ててしまうのでは……？」

そう言うギーシユも何やら複雑そうな表情である。

流星に魔法衛士隊の隊長が相手ではどうにもならないだろうと考えていたギーシユだったが、この展開には驚くばかりで、流星はミス・リウスだと嬉しく思う気持ちは否めない。

とはいえ魔法衛士隊はギーシユも憧れる存在なのであって、そんな憧れの存在が負けるところを見たくはないというのが正直なところなのだ。

「魔法を使わない場合は勝てない。魔法を使えば互角だと思う」

しかし、タバサが小さい声で見解を述べた。それに頷きながらキュルケも口を開いた。

「リウスは戦いにくそうね。流星は隊長サマ、ってところかしら。それにしてもギーシユ、あなたリウスの事をどこまで話してる訳？」

「う……。いやその、ミスタがミス・リウスのことを知りたがってたから、ついちよろつと……」

それを聞いたリイズは、内心で昨日ワルドへ話した内容を後悔していた。

まさか、ワルドがこんなことをし始めるとは思わなかったのだ。

ワルドとリウスが戦うところなんて見たい訳がないリイズは、早く終わって欲しい一

心で二人が対峙する様子を見つめていた。

リウスはワールドが自分を舐め始めているのに気付いていたが、別段それをどうこうしようとは思っていないかった。

確かに、ルイズを守るに値するのは自分自身のみだ、というワールドの発言には少し苛立ちを感じている。

しかしルイズが昨晩何を言ったにせよ、嫉妬まがいのそんな争いに加担する気は全く無いし、そんなものは正直に言っただけでもいい。

要は誰がどうするといった過程はいつでもよくて、結果的にルイズが守ればいいのか。

そして、この立ち合いはリウスにとって少し別の意味を持つようになっていた。

無理やりと喋っていい程のラ・ロシエールへ向かう強行軍。

ラ・ロシエールに向かう途中で起きた襲撃。

そして、『スヴェルの夜』を考慮しなかったというワールドの思考。

やけに私のことをギーシユくんから聞いていたかと思えば、『ガンダールヴ』がどうのこうのと気にし始め、しまいにはこの決闘まがいの立ち合いである。

私の実力を知りたいというワルドの言葉には多分嘘はないのだろう。そうでなければこうした立ち合いをする意味はない。

まあ、ルイズに何か言われた結果ルイズの目の前で私を打ち倒したいと考えたのかもしれないが、そうであればあまりにも幼稚すぎる発想である。

そもそも、ルイズがそういったことを喜ぶとはとても思えないのだから。

これは推測ではあるが、つまりワルドの言っていた目的は少し違うのではないだろうか。

どちらがルイズを守るべきか、ではなく、あくまで把握できていない私の実力を知ろうとしている……。

そしてこの任務には、どこかに存在するアルビオン貴族派の内通者が関わっている。

最初は王宮や学院にそういった内通者がいるのかと思っていたが、もしかしたら……

これは強引な推測にすぎない。

しかし今までのもやもやとした状況は、そう考えると筋道が通った一本の仮説になるのだ。

あの道中の襲撃で、私かギーシユくんが手傷を負った場合、どちらにしたって私は一時的にでもこの任務を離れなければならなかっただろう。

そうしたら任務に向かうのはワルドとルイズのみとなり、急ぎの任務ということで同

行者の合流を阻止することだつて容易い。

そうしたことも見込んで、ワルドがギーシュくんを連れてきたのだとしたら……。
(ちよつと、試してみるかな……)

しばらく思索に耽つていたリウスに対して、ワルドがじれたように口を開いた。

「どうしたんだい？ 君がまさか怖気づいた訳でもないだろう？」

その言葉に、リウスはワルドへ向けて意地悪そうに笑つた。

「いえ、これはとつておきの魔法だったので。ケガだけはしないでくださいね」

リウスの言葉を受けたワルドは、気に喰わないとばかりに眉根を寄せた。

「とつておきの魔法、ね。お氣遣いはありがたいが、そうそう僕に通用するとは思わないことだ」

「そうかもしれないですね」

リウスはにべもなくそう言うと、右手に持ったデルフリンガーを肩に担いだ。

そして左手の人差し指をワルドへと静かに向ける。

「ナパームビート」

リウスの左手の先にある空気がかすかに揺らいだ。

目を見開いたワルドが両腕で防御をした瞬間、ワルドの身体が大きく後ろへと吹き飛ばされる。

「ぬおっ！」

中庭にある空き箱の山にぶつかると寸前で、ワルドの身体が急ブレーキをかけたようにふわりと浮かび上がった。

吹き飛ばされながらもワルドは『フライ』の魔法を使用したようだ。

「……なるほど、風系統ではない不可視の呪文か。しかし、もう通じない」

その言葉にも答えずに、リウスは更にワルドへ向かって魔法を放った。

「ナパームビート！」

浮かんだままのワルドは、ふつと笑いながら瞬時に真横へと身を翻した。ワルドの背後にあった空き箱の山がボゴツと音を上げて砕け散る。

「僕は風のメイジだ。空気の揺らめきを見れば、いかに目に見えない魔法だろうが回避することができると。そんな使い方では、もう僕に当たりはしない」

『フライ』を解除して地面に着地した瞬間、大地を蹴ったワルドが凄まじい勢いでリウスに襲い掛かった。

リウスは急いでデルフリンガーを両手で構えると、なんとかワルドの放った突きを回避した。

閃光のようなワルドの連撃が続く。

なんとかデルフリンガーを使って回避し続けていると、デルフリンガーを覆ったシーツがぼろぼろになって剥がれ落ちた。

「おつ、これでちゃんと戦えるぜ！ いきなりピンチみてえだけどなー！」

デルフリンガーが嬉しそうに声を上げる中、ワルドは後ろへと少し距離を取ると、にやつと笑った。

「そして、魔法衛士隊のメイジはただ呪文を唱えるだけじゃない」

そう言つてワルドが放った刺突を、生身のデルフリンガーで切り上げる。

一瞬火花が散つた後に、ワルドはまたマントを翻しながら距離を取った。

「詠唱さえ、戦いに特化されている。杖を構える仕草、突き出す動作……、杖を剣のように扱いつつ詠唱を完成させる。軍人の基本中の基本さ」

そう言うやいなや、距離を詰めたワルドが凄まじい速度で突きを何度も放った。

攻撃する隙を作るどころではない。リウスはデルフリンガーで受け流し、間合いを取り、耐えるのがやつとという状態だ。

「デル・イル・ソル・ラ・ウインデ……」

閃光のような突きを雨霰と放ちながら、ワルドは低く呪文を呟いている。

「相棒！……いつあいけねえ！ 魔法が来るぜ！」

「判ってる！ 判ってるけど！」

リウスはそう叫んでワルドの刺突をいなすと、そのままワルドに向かって体当たりを行なった。

ワルドは詠唱を止めないまま簡単にリウスを弾き飛ばし、体勢を崩されながらも距離を取ったリウスが左手の指をワルドへ向けようとする。

「ナパーム……！」

「遅い」

ボンツ、と空気が撥ねる音がしたと思うと、見えない巨大な空気のハンマーがリウスの身体を吹き飛ばした。

十メートル以上も吹き飛ばされたリウスは積み上げた樽に激突し、ガラガラと樽が崩れ落ちる。

「いったたた……」

リウスがよろよろと起き上がると、ワルドが目の前に立ってリウスに杖を突きつけていた。

「勝負あり、だ」

「・・・参りました」

リウスが両手を上げてそう宣言すると、ワルドが杖を収めた。

両手を口に当ててその様子を見ていたルイズだったが、立ち合いが終わったことにハツとするリウスの傍へと駆け寄ってくる。

「だ、大丈夫?!」

「ああルイズ、大丈夫よ。ワルドさんが威力を押しさえてくれたみたい」

「な、何もここままでしなくても!」

ワルドへ食ってかかるルイズに、ワルドが静かに声を掛ける。

「わかったらもうルイズ。彼女では君を守れない」

ルイズはワルドとリウスを交互に見る。

「・・・だって、だってあなたはあの魔法衛士隊の隊長じゃない! 陛下を守る護衛隊。

強くて当たり前じゃないの!」

「そうだよ。でも、アルビオンに行っても敵を選ぶつもりかい? 強力な敵に囲まれたとき、君はこういうつもりかい? わたしたちは弱いです。だから、杖を収めてくださいって」

ルイズがぐつと押し黙る。そんなルイズの肩に、ぽんと手が置かれた。

「ルイズ、いいのよ。・・・流星でした、ワルドさん。お手合わせ頂いてありがとうござ

いました」

「いや、君も流石だったよ。いざという時にはルイズを任せてくれ。この身に代えても彼女を守る」

じゃあ食事しよう、とワルドはルイズの手を持つ。

ルイズは心配そうにリウスの顔を見つめていたが、リウスは「行っておいで」と小さく笑った。

ルイズは心配そうな顔のままであらりとリウスを見ていたが、そのうちワルドと一緒に立ち去っていった。

それを見送ってから、リウスは「いたた」と呻きながらぐりぐりと肩を回している。

「盛大に負けちゃったな。相棒でも負けるときがあるもんだね」

地面に転がったデルフリンガーが呑気な声を出した。

「いやあ、強かった。突きもそうだけど、詠唱中でも隙がなかったわ」

「気にすんな相棒。あいつは相当な使い手だよ。スクウエアクラスかもしらんね。負けても恥じゃねえ」

デルフリンガーと話しながら、リウスは先程の立ち合いを思い返していた。

流石にあれがワルドの全力ではないだろうが、突きの速度、詠唱時間は大体把握できた。

それに魔力の動きも確認できたので、もしこちらへ杖を向けてきたとしても私の魔法なら迎撃ができるだろう。

そんなことを考えていると、先ほどの戦いを見ていたキュルケにギーシュ、タバサがリウスの傍に歩いてきていた。

「あら、あんまりシヨックそうじゃないのね」

キュルケが悪戯そうに笑いながら声をかけてくる。

しかしそうは言いながらも心配そうな表情がかすかに見えたので、リウスも笑いながら言葉を返した。

「まあね。ワルドさんは強いわねえ、さすが魔法衛士隊の隊長だわ」

「そ、そうですね。でも凄かったです！ 凄い戦いでした！」

興奮半分、心配半分といったところだろうか、ギーシュがやけに身振り手振りを交えて話しかけてくる。

当のリウスは別にシヨックなど受けていないので、ギーシュへ少し困ったような苦笑を返した。

すると、つかつかとタバサが近寄ってきた、かと思うとリウスの顔をじつと見ている。なんだろう、とリウスはその顔を見返した。

「なんで、手を抜いたの？」

「え？ 手を抜いた、って……。リウス、そうなの？」

キュルケがリウスとタバサの顔を交互に見る。

「ギーシュとの決闘のとき、空中で魔法を使ってた」

キュルケとギーシュはハツとした。確かにあの時、リウスはゴーレムの動きを避けながらでも魔法の詠唱をしていたはずだ。

ワルドはわざわざメイジの戦い方について説明をしていたようだが、あんな芸当のできるリウスもワルドと同じように、剣を交えながら魔法を使えていてもおかしくはないはずなのだ。

「さっきは、わざわざ分かりやすいように魔法を使っていた。でもあなたはもつと隙を作らずに魔法を扱えるはず。どうして？」

少し考える素振りを見せてから、リウスは口を開いた。

「別に手は抜いてないけど、タバサの言う通りよ。よく見てるわね」

「何だ、そうなのか？ 相棒」

リウスは、まあね、と一人呟くと、ぱんぱんと服についた埃をはらってから、中庭に転がるボロボロになったシーツを拾い上げた。

「念のためよ。念のため」

第二十八話 月夜の対話

その夜、ルイズは自室のベランダでひとり夜空を眺めていた。

一階の酒場からギーシュたちが酒を飲んで騒いでいる声が聞こえてくる。

ルイズも先ほどまで一緒にお酒をちびちびと飲んでいたが、一階の喧騒を抜け出して二階の自室に一人で来たのだった。

しばらくぼうつと夜空を眺めていると、部屋の扉が開く音がした。

「ここにいたの。一人でいるべきじゃないって言ったでしょ？」

部屋に入ってきたのはリウスだった。

最初はワルドかと思つてどうしようか迷つていたが、リウスの声だと分かつたルイズはゆつくりと振り向いた。

「・・・リウスつたら、心配性ね」

小さく呟いたルイズにリウスが肩をすくめた。

「それ、キュルケにも言われたわ。変えるつもりはないけど」

そう言つて軽く笑つたリウスは、ルイズの横に立つて夜空を見上げた。

少し風が吹いて、リウスとルイズの桃色の髪がなびいていく。

ルイズはしばらくリウスの横顔を眺めていたが、もう一度ルイズも夜空を見上げた。「わたし、早く大人になりたいわ」

リウスは何も言わずに続きを待っている。

「そうすれば、こんな色んなことに悩まなくて済む。リウスみたいに色んなことを決められるようになって、父さまや母さまみたいな立派なメイジになれば、きつと私だけで自分に胸を張れるようになるんだわ」

「焦ることないわよ、私だってまだまだなんだから。これからよ、これから」しばらくの間、二人は黙ったまま夜空を見上げていた。

一階からは未だにギーシュたちの笑い声が聞こえてくる。

リウスは空に浮かぶ月を眺めながら、感慨深そうに呟いた。

「綺麗な月ね。この二つの月が完全に重なると、スヴェルの夜って訳か」もう二つの月はほとんど重なったようになっていた。

赤い月が白い月の後ろに隠れ、一つだけの月が瞬く星空に輝いている。

この世界に来てから、もう随分と時間が経ってしまったものだ。

「二つの月……」

横に立つルイズが静かに呟いた。

一拍置いてから、ルイズはそのままの声色で口を開いた。

「リウスは、元の世界に帰るの？」

「・・・ああ、そのこと。うーん、どうしようかな。でもまだしばらくはここにいてもりよ」

「しばらく、つて？」

「そうね。ルイズがビービー泣かなくなってから、かしらね」

ルイズはリウスがハルケギニアへ来たばかりのことを思い出すと、ふふつと笑った。

リウスもそのルイズの顔を見て笑顔を浮かべる。

「昨日の夜ね。ワルドから、プロポーズされたの」

ルイズがリウスから視線を離すと、小さく呟くようにそう言った。

「でも、私は断ったの。自分の気持ち分からないのよ。確かにワルドはずっと憧れの人で、好きだったけど・・・。急にあんなこと、言われたって」

リウスは口には出さないようにしながら、ふうん、と内心で呟いていた。

ワルドが立ち合いを挑んできたのは、これが原因なのだろうか。

「ルイズがそう思うのなら今はそれが正しいのよ。それにしても、ワルドさんがねえ・・・」

背筋をうーんと伸ばしながら、またしてもリウスは違和感を覚えていた。

重要な任務で久しぶりに会った婚約者。

だから、会ってからすぐにプロポーズをした。

トリストインのそういった文化は知らないもので無くはないのかもしれないが、いささかワルドは焦りすぎに見える。

危険な任務だから言える時に言っておいた、と言われてしまえばそれまでなのだが……。

しかし、もしワルドがリウスの考えているように敵の内通者であるなら、少なくともルイズとワルドが結婚するのをただ見ている訳にはいかなかった。

「返事は任務が終わってからでいいんじゃないの？ 別に会えなくなるって訳じゃないんだから」

その言葉を聞いたルイズは、悲しそうな顔をしながらリウスを見た。

リウスなら、もしかしたら自分の背を押してくれるかもしれないと思っていた。

このモヤモヤした気持ちをうまく形にして、一步踏み出す勇気をくれるんじゃないかと。

リウスはいつだって正しい。

私は確かにそう思っているのだ。

だからこそ、ワルドとの結婚を祝福して欲しかった。

自分勝手な主張だなんて、そんなことは分かっている。

意に染まない言葉にヘソを曲げるだなんて、立派なメイジはそんなことをしないはずだ。

それでも……。

—自分がどうしたいのかを、視野を広く持ちながら常に考えなさい。
その答えは君自身が知っているはずじゃよ。

ルイズは今朝見たリウスの夢の中で、白髪の老人が言っていた言葉を思い出していた。

（私はリウスを信じたい。ワルドのことも、信じていたい。そして、出来れば皆でいっしょに……）

確認するのは恐ろしかった。

しかしルイズは、問いかけずにはいられなかった。

「……リウスは、ワルドとの結婚は反対なの？」

リウスはルイズの思い悩んだような顔を見た。

そのまま少し考え込むようにしばらく黙り込み、静かな瞳をもう一度ルイズへと向け

た。

「・・・ルイズの結婚は、私が決めることじゃないわ。ルイズが決めることよ」

リウスはいつだって正しい。

いつだって一歩引いてから物事を見ようとして、自身の考えを一人で抱え込もうとする。

ともすれば、私にだって冷徹に見えるくらいに。

ルイズはぐつと顎を引くと、はつきりとした口調で問いかけた。

「リウスがどう考えてるのか知りたいの。正直に言つて」

リウスは険しい顔のルイズをじつと見つめていた。

そして目を背けてから、小さく呟いた。

「・・・反対よ」

重苦しい沈黙が部屋を包み込む。

そう、と呟いたルイズはベランダの手すりへ俯くように寄り掛かった。

「それでも、私に決めろつて言うのね」

「ルイズ。私は・・・」

そう言いかけてから、リウスはぐつと黙った。

今、ワールドへの疑いを伝えて何になる。

本当にワールドが敵の内通者かなんてまだ分からないのだ。

ルイズを本当に愛してくれて、結婚まで考えているだけなのだとしたら。

いくら幼稚であつたとしても、ずれた行動だつたとしても、あの立ち合いはただルイズのことを想つてのことになるのだ。

ワールドは確かに怪しいが、何も証拠なんてない。

考え過ぎつてこともあるし、むしろそつちの方がいいとリウスも思つていた。

ルイズの婚約者で、小さな頃から憧れていた存在。

ギーシユくんだつて憧れの眼差しを向ける魔法衛士隊の隊長。

そんな人が裏切り者だつたとしたら、この子はどれほど悲しむのだろうか。

もし、万が一ワールドが裏切り者だつたとしたら、その時は私がかすればいい。

リウスは夜空に浮かぶ美しい月をふと見上げた。

幼い頃から見てきた月と、今この世界に浮かぶ月はとてもよく似ている。

凍えるような空で、いつもと変わらずに輝き続ける月。

こんな空の下で後悔を思い出して眠るなんて、もう私はごめんだ。

「ルイズ、下に行きましょう。風も冷たくなつてきたわ」

「・・・先に行つてて」

ルイズはベランダの手すりに俯いたまま、落ち込んだような声を出した。

リウスは何も言えずに、しばらくの間ルイズを見つめていた。

そしてその姿から目を離して扉へ向かおうとするが・・・、ふと何かに違和感を覚えてぴたりと動きを止めた。

さつきまで見えていたものが、見えていなかったような・・・。

「っ！ ルイズ！」

「何よ、先に行つてつて・・・、きやつ！」

振り返つたリウスはルイズの肩を抱きかかえると部屋の中へ飛び込んだ。

ゴロゴロと二人が部屋を転がった瞬間、大きな影が通り過ぎてさつきまで二人のいたベランダを粉々に砕いていた。

リウスはすぐさま立ち上がると、ルイズを庇うようにしながらベランダの外を睨み付ける。

既に、月は見えなくなっていた。

そこには、かつて見たことのある巨大な影の輪郭が立っていたのだった。

第二十九話 襲撃

ごつごつとした岩で出来た巨大ゴーレムが、窓の向こうからこちらを覗いていた。巨大ゴーレムの肩には誰かが座っている。

その人物は、長い緑色の髪を風になびかせていた。

「フーケ……!」

憎々しげにリウスは口を開いた。

その言葉を聞いて、土くれのフーケはわざとらしく嬉しそうな声を出す。

「感激だわ。覚えていてくれたのね」

「あ、あなた、牢屋に入っていたんじゃない……!」

恐怖をぐつと堪え、ルイズがリウスの肩にしがみつきながらも叫んだ。

そのルイズの様子に気付いたリウスは、ルイズを庇うようにしながらもう一度フーケを睨み付ける。

「親切な人がいてね。わたしみたいな美人はもつと世の中のために役に立たないといけないって、出してくれたのよ」

フーケは嘯いた。そんなフーケの隣に、黒マントを着た貴族が立っている。

あいつがフーケを脱獄させたのだろうか？ その貴族はしやべるのをフーケに任せ、だんまりを決め込んでいる。

白い仮面を被っているので顔は分からないが、体格から男のように見えた。

「・・・お節介なヤツもいるものね。それで、何の用？」

リウスは腰の短剣を握ると、ルイズと共にじりじりと後ろへ下がる。

あの仮面の貴族がどの程度の実力か分からない以上、ここで戦うのは得策ではない。

「素敵なバカンスをありがとうって、お礼を言いに来たんじゃないの！」

フーケの目が吊り上がり残酷な笑みを浮かべる。

その言葉と同時に、ベランダのあつた窓から部屋の中へと巨大ゴーレムの腕を突き入れた。

「アーススパイクー！」

リウスは瞬時に短剣を引き抜くと、その腕に狙い澄まして魔法を叩き込んだ。

石の床からせり出した三本の石柱がゴーレムの腕に突き刺さり、ぎぎ、と音を出してゴーレムの腕が動かなくなる。

その隙にリウスはルイズを連れて部屋の外へと飛び出すと、一階への階段を駆け下りていった。

降りた先の一階も、修羅場となっていた。

キュルケ、タバサ、ギーシユと、そしてワルドが魔法で必死に応戦しているが、多勢に無勢の言葉そのままに苦戦しているようだ。

宿の外に陣取っている傭兵の数といたら、まるでラ・ロシエールの傭兵をかき集めてきたのかと思う程である。

床と一体化しているテーブルの脚を折って盾にしているものの、外の傭兵達はメイジとの戦いに慣れているようで、しっかりとキュルケ達の魔法の射程を見極めた上で射程外から弓を射掛けていた。

しかも暗闇を背にしている傭兵達に地の利があり、屋内で迎撃するには分が悪いと言わざるを得ない。

ルイズの盾になったリウスは短剣で飛んでくる矢を切り払いながら、素早くキュルケ達の陣取るテーブル裏へと飛び込んだ。

「おかえり、リウス。ルイズも」

「ただいま。ちよつと見ない間に凄いことになってるわね」

「見ての通りよ。大変だわ」

軽口を叩き合うリウスとキュルケ。

他の貴族達は突然の襲撃に、カウンターの下へ逃げ込んで震えているだけだ。

「フーケも来てるわよ」

懐に仕舞っていた小さな荷物袋へ目を通しながらそう告げると、そのリウスの言葉に一行は驚きを隠しきれない様子だった。

一方で「俺を使え！ 使ってくれ相棒！」と騒ぐデルフリンガーに対して、リウスはどこ吹く風といった具合である。

「そんな・・・！ 捕まったんじゃないんですか!？」

「脱獄したみたいね。もう一人メイジがいるみたいだし、本当に大所帯なことだわ」

「参ったね」

ワルドがそう呟くと、タバサがこくりと頷いた。

石のテーブルには矢が雨のように降り注いでいる。この調子では迂闊に顔を出すこともできない。

「傭兵達は断続的に魔法を使わせ、精神力が無くなったところで突撃する戦術を取っている。どう対処するか考えなければならぬ」

「そこで俺たちを持った相棒がバーツと駆けていってこうバツタバツタと・・・」

「メチャクチャ言わないでよデルフ。そんなの無理に決まってるでしょ」

「僕のゴーレムで防いでみせる！」

タバサの言葉に、ギーシュが杖を持つ手を震わせながら言った。

「無理」

「無理ね」

「やめた方がいいわ」

しかし無情にも、タバサ、キュルケ、リウスがほぼ同時に告げた。

「ワルキューレじゃあ、あの数の矢や剣は受けきれないわよ。今は大人しく……」

「やってみなくちゃ分からない!」

リウスの言葉半分にギーシユはそう叫ぶと、颯爽と隠れたテーブルから身を乗り出した。

「卑しき傭兵諸君! 僕は『青銅』のギーシユ! 無礼な君達には、僕のワルキューレが……ぐえつ!」

リウスは慌ててギーシユの首根っこを掴むと、テーブルの陰に引き戻した。

その瞬間に、先ほどギーシユがいた場所へ雨のような矢が降り注ぐ。

「な、何を……」

「なにやってるの! 死ぬつもり!?!」

「あつぶないわね、まったく……。トリスティンの貴族は口ばかり達人なんだから。勇気と無謀の違いくらい、辞書に乗せといてほしいものだわ」

リウスがギーシユを叱りつけ、キュルケとルイズがじろりと睨み付けた。

タバサは咄嗟に構えた杖を地面に下ろす。

それを受けて少し頭が冷えたのか、ギーシユは冷や汗をダラダラ垂らしながらしどろもどろとなっていた。

「す、すみません」

「まったくもう、気を付けてよ？ とはいえ、どうしたもんかしらね」

この傭兵の数では、街の衛兵達が来たとしても対処し切れるとは限らない。

かといってこのまま消耗戦をしていてもいずれ攻め込まれてしまうだろう。

それだけなら、全員で脱出も可能なのだが……。問題は、フーケと白仮面のメイジである。

あの二人が追ってきた場合、容易く逃げ切れるとは限らない。逃げ切れなかった場合はここにいる傭兵達が全て追いかけてくる。

もし、外でこの数に囲まれたとしたら……。

「いいか、諸君」

リウスが必死に考えを巡らしていると、ワルドが低い声で話し始めた。

一行は黙ってワルドの話へ耳を傾ける。

「このような任務は、半数が目的地にたどりつければ成功とされる」

ワルドがそう言うのと、静かに考え込んでいたタバサが青い瞳をワルドの方へと向け

た。

自分とギーシュ、キュルケを杖で差して「囹」とだけ告げた。

それからタバサは、ワルドとルイズとリウスを指して、「棧橋へ」と呟いた。

「時間は？」

リウスが呆気にとられていると、タバサが即座に答える。

「今すぐ」

「聞いている通りだ。裏口に回ろう」

「え？ え？」

「ちよ、ちよっと！」

ルイズとリウスは驚いた声を上げた。

「彼女達が敵を引きつける。囹だ。その隙に僕らは棧橋に向かう」

「で、でも囹だなんて……。大体どうやって逃げるつもりなのよ!？」

ルイズは動揺しながらキュルケたちを見る。

リウスはそれに代わる方法を思いつかない自分に歯噛みしていた。

「ま、仕方ないわね。あたし達は何も知らないんだし、そっちの三人で行くしかないの

よ」

「ほ、僕は……」

「アンタはこつち。勇猛なるギーシユさまが、かよいい女生徒達を放っておくつもり？」
「棧橋に向かうのは少人数の方がいい。ギーシユのゴーレムは便利だから残って」

ギーシユは不貞腐れたような態度をするも、確かにそうだと無理やり納得した様子で頷いた。

「君らはかよわくないだろう・・・、ただタバサの言い分は一理あるのかもしれないね。うーむ、ここで死ぬのかな。死なないのかな。死ぬ、死なない、死ぬ、死なない・・・」
一人でぶつくさと呟きながら、ギーシユが薔薇の造花でできた杖で確かめ始めている。

タバサはリウスを静かに見つめ、こくりと頷いた。

「あなたの負担にはならない。行って」

「そうよ、ルイズも安心して行きなさいな」

キュルケもタバサの言葉へ重ねるように告げた。

自分たちが外に出れば外の傭兵達もばらけるかもしれないが、傭兵達が思っていたよりも多すぎる。

それにフーケや得体の知れないメイジがいる以上、ここに三人を残していくのは余りにも危険すぎるのだ。

でもこれ以外に方法はない。

だからこそ、ここに三人を残していくのなんて……。

リウスは悩みに悩んだが、この場は分かれて行動する以外にないように思えた。時間だつて限られている。

リウスは悔しそうな表情で頭をがしがしとかいた。

「ああもう……!」

傭兵たちの際を作るため、そして突入を遅らせるために、リウスは全力で魔法を詠唱し始めた。

隠していた呪文の一つをワールドへ見せてしまうが、この場ではしようがない。

「ソウルストライク!」

一瞬で詠唱を終えたリウスの頭上に、1メートル弱ほどもある十個の光の球が次々に浮かび上がった。

かと思うとそれらは蛇行するように尾を引いて、宿の入り口へ向けて飛び去っていく。

「ぐわっ!?!」

「な、何だ、何の魔法だ!? バカ、押すんじゃねえ!」

入り口の外へと飛び出していった光の球が密集していた傭兵達を根こそぎ薙ぎ払うと、次いでリウスが呪文を完成させる。

「ファイアーウォール！」

入り口のすぐ外に、入り口を覆うほどの炎の壁が立ち現れる。これなら突入を大分遅らせられるだろう。

「これは・・・凄いな。さあ、今の内だ。遅くなればこちらが不利になる」

リウスの魔法に目を丸くしていたワルドがルイズを促す。

リウスは殿としてルイズの後ろにつくと、残る三人に振り返った。

「三人とも、危なくなったらすぐに逃げるのよ！」

そう言って、リウスはワルド、ルイズと一緒に厨房にある勝手口へと駆け出していった。

その後ろ姿を見送って、キュルケはふうつと溜め息を吐いた。

「まったく。ルイズもリウスも、心配性なんだから」

やれやれといった風に笑うキュルケへ、タバサはこくりと頷いて杖を握った。

「あれなら大分時間は稼げる。これでフーケ達を引きつけければこつちのもの。もう少しの辛抱」

大きな音で自分の顔を叩いて、ギーシユは一つ気合いを入れる。

「よ、よし！ やろうじやないか、二人とも！」

「ええ、火傷しない程度にね」

二人は杖を抜き放ち、ニヤリと笑い合った。

第三十話 先を急ぐ者、追いつがる者

「ちよつと、どこに行くのさ」

ゴーレムの肩から飛び降りようとする仮面の男へ、土くれのフーケは非難めいた口調で問いかけた。

「ヴァリエールの娘を追う」

「わたしはどうするのよ」

「貴様は時間を稼げ。船が出港したならば後は好きにしろ」

合流は例の酒場で、と最後に言い残して男はゴーレムを飛び降りると、風のように暗闇の中へと消えていった。

男の去った方向を忌々しげにねめつけて、フーケはひとり舌打ちをする。

「勝手な男だね……。ま、これであいつともおさらば出来るわけだけど」

処刑されるというところで、命を助けてもらったことは確かに感謝している。

感謝はしているのだが、あのいけすかない男のため、そしてレコン・キスタとやらの『革命』のために命まで賭けてやろうとは到底思えなかつた。

チエルノボーグ監獄の薄暗く汚い牢屋の中、死刑を待つ身だつたフーケには考える時

間が山程あった。

その時に頭の大部分を占めていたのは、自分の守るべき存在、ティファニアのことである。

ティファニアが生きていくために、私は様々な犯罪へと手を染めた。

そのことに後悔なんてしていない。

しかし牢屋にいたあの時だけは、残されていくあの娘やあの孤児達の行く末を想って、後悔の気持ちちが首をもたげてしまったのを否定はできなかつた。

フーケは巨大ゴーレムの肩に座りながら、宿の入り口に陣取っていた傭兵達を眺めていた。

すると、弱まった炎の壁から鍋のようなものが投げ出されてくる。

それを追いかけるように大きな炎の球が飛び出してくると、あつという間に鍋の油に引火して傭兵達の幾人かが炎に包まれる。

そしてダメ押しとばかりに宿の中から突風が吹くと、他の傭兵達がいる場所まで炎がうねりを上げて襲い掛かっていった。

先程から連続する魔法の威力に恐れをなしたのか、傭兵達が我先にと散り散りになって逃げていく。

予想していたこととはいえ、その余りにも情けない姿にフーケは思わず呆れたような表情を浮かべていた。

「あらら。やっぱり金で動く連中は使えないね。あれくらいで……」
ひとり呟いたフーケは、「私も同じか」と自嘲気味に笑った。

先ほど宿屋のペランダで見た桃色髪の二人。

ヴァリエールの娘であるルイズと……、確か使い魔のリウスだったか。
ルイズを庇った姿でこちらを睨みつけるリウス。

リウスの肩にしがみつこうようにしながら、怯えたような顔でこちらを見つめるルイズ。

以前にあの桃色髪の使い魔を剣で刺した時は、何でか分からないが、とても嫌な気分だった。

あの時は、出来る限り殺しはしないように盗みを続けてきたからだろう、と考えていたが、チエルノボーグ監獄で何となく私には分かったのだった。

私は、あのリウスとルイズに、自分とティファニアを重ねたのだ。

こんな稼業をやっている以上、危険は付きまとう。

いずれ私は何者かに追われて無残に死ぬかもしれない。

その時が、もしあの娘のいるあの家で起きたとすれば……。

もうこの稼業は止めにしよう、フーケはそう考えていた。

今回のこの件でも多額の報酬が手に入る。

それを使えば、あの家にひっそりと暮らしながらまともな仕事をしたとしても、相当な時間は暮らしていけるだろう。

これから少しの間は奴らの手先になる他ないが、それが終わるまでの辛抱だ。

フーケは宿を囲んでいた傭兵がほほいなくなつたのを見計らってから、巨大ゴーレムを動かし始めた。

そして自動操縦に切り替えつつ、『宿のみを狙え』と命令を下しておく。

「……別に、情が移つたつて訳じゃないよ」

独り言でそう言い訳を告げると、フーケは巨大ゴーレムの肩からさつと降りていく。

あの白仮面の男が命じたのは、時間を稼げということ。

それならわざわざ私がいる必要もない。

家々の屋根から人目につかない路地裏に下りると、宿を破壊するゴーレムを尻目にフーケは何食わぬ顔で歩いて行く。

―憎み続けていても、その憎しみの相手がいなくなればそれでお終い。
居なくなった人が戻ってくる訳じゃないわ。

大きめの路地に出たフーケは、あの使い魔に捕まってしまった時のことを思い返していた。

あの言葉は痛い程に理解できた。

そして、それがただの綺麗ごとであることも。

その綺麗ごとには、縫るしかないことも。

―居なくなった人が望んでいたことは、そして貴方がやりたかったことは、本当にそれだったの？

もう違うのだ。

憎しみが消えてなくなるなんてことはない。

しかし、今の私がすべきことはもうそれではないのだ。
今の私には、ティファニアがいるのだから。

「アンタも、大変だね」

そう呟いたフーケはフードを目深に被り直しながら、炎に包まれて崩れゆくゴーレムを背に、さっさと立ち去っていくのだった。

岩壁の間にある道を縫うように、ルイズ達は栈橋に向かっていった。

駆けていく彼女たちを重ねた二つの月が煌々と照らしている中、ルイズは心配そうに後ろを何度も振り返っている。

どうやら宿屋を見ているのだろう、リウスは前を走るルイズへ目をやったが、何も言わずに黙ったままだ。

ルイズは一人もやもやとした感情を抱えていた。

(どうして、そこまでするのよ！)

ついてきたのは、キュルケ達の勝手だ。

だからこそ、あの場で逃げ帰るのも彼女達の勝手だったはずだ。

秘密の任務なのだから、キュルケ達には何も言っていない。

だからキュルケ達は何も知らないままだし、彼女達は遊び半分でここまで来た。ただそれだけのはずだ。

私達のために命を賭けてまで敵の足止めをする。

その理由も責任も、彼女達には一片たりともあるはずがなかった。

(どろろして……！)

ルイズはすぐに宿屋へ引き返して、「バカじゃないの！」と怒鳴りたかった。

あの安全な学院まで、何も知らない級友たちのところまで追いつ返したかった。

ただ最近少し縁があるだけという関係なのだ。

自分の為に命を張れるような関係であるはずがない。

彼女達と自分は、友人でも何でもないのだから。

そう考えて、ルイズは胸に一抹の痛みを覚えるのと同時に、愕然とした。

つい最近まで、ワルド以外の全員が単なる他人だったという事実。

それが、ルイズの心に突き刺さった。

その痛みに顔を歪めたルイズは、ようやく自分の気持ちに気が付いた。

自分は彼女達と共にいたかったのだ。

キュルケ達と楽しげに笑い合う自分の姿が一瞬ルイズの脳裏をよぎり、それが彼女の

孤独を残酷なまでに浮き彫りにした。

そんな自分がどうしようもなくみじめで悲しくて、それに、そんな人達を置いて逃げていく自分自身に対する情けなさで・・・、ルイズは唇を噛みながらも必死に足を動かして続けるのだった。

そんなルイズを心配そうに眺めていたリウスだったが、そのまま何も言えずにワルドとルイズに続いて階段を駆け上がったといった。

そして急に目の前が開けると、リウスはその光景に思わず目を奪われていた。

そこにあつたのは、余りにも巨大な樹だった。

空を突くかのような、山のような大きさの大樹が目の前にあり、そしてその大樹の枝の先にはまるで果実のようにぶら下がっている飛行船がちらほらとあつた。

ワルドがその大樹の根元にある空洞に入り、巨大なホールのような空洞から目的の階段を見つけて駆け上っていく。

ルイズとリウスもそれに続いて誰もいないぼろぼろの階段を駆け上っていった。

階段を上がるリウスは枯れた大樹の内側を手で触りながら、ひとり感慨に耽りながら進んでいた。

リウスのいた世界における、イグドラシルの樹とこの大樹は非常によく似ている。こんな風に枯れてはいないものの、大きさといい、雰囲気といい、非常に似通っているように思えた。

とはいえ、イグドラシルの樹は広大なソグラト砂漠を抜けてから、更に広々としたコモドの密林を通った先の、ウンバラという秘境にある。

そのため、リウスといえども一度しか見たことが無い。

この樹よりもっと大きかった気がするし、もちろんこの樹よりも生命力を存分に感じさせる大樹だった。

この樹は似ている気がする、あくまでその程度に過ぎなかったのであるが。

リウスがそんなことを考えていると、ワルド達は途中の踊り場へと到着した。そしてワルド達が踊り場から少し上がった所で、リウスはハツとした。

自分達の後ろから追いつがるような、かすかな足音が聞こえたのだ。

それも、すぐ近くから。

階段を上がる足を止めないままで、リウスが一息に腰の短剣を引き抜く。

「ナパーム……」

振り向きざまに詠唱を完了させ…。

「……ビート！」

頭上を飛び越えようとした黒い影へ、咄嗟に方向を変えてから魔法を解き放った。

「ぐうっ！」

（外した……！）

黒い影は上へと吹き飛ぶが、咄嗟に方向を変えたため直撃ではない。

その白い仮面を付けた人物は体勢を崩しながらも、そのまま大気を蹴るように方向転換をしてルイズの近くへと降りようとしている。

ルイズへ近付かせないために次の魔法を放とうとした瞬間、その人物の魔力の動きを追っていたリウスは目を見開いた。

魔法が、完成している……！！

「エアハンマー！！」

迎撃の魔法を唱える暇はない！

そう判断して身体を縮めて防御をするも、リウスは風の塊で大きく吹き飛ばされた。

そのまま、大樹の壁に強く叩きつけられる。

ぐるぐると回る視界の中、落下の途中で咄嗟に階段の手すりを掴む。

しかし、あえなくその勢いを押さえられずに手が離れ……。

リウスはそのまま踊り場まで落ちていくと、背中から踊り場へ思いつきり激突した。

「がっ……!」

「きやあつ!!? な、何なのよ!」

視界がチカチカとちらついている中、頭上からルイズの声が聞こえてくる。

踊り場に生身のまま突き刺さったデルFRINGERが何か言っているようだが、よく分からぬ。

何とか力を込めてリウスが起き上がった時には、仮面を付けた男がルイズを抱きかかえて逃げようとしていた。

「っ!」

リウスの魔法ではルイズを巻き込んでしまう。

しかし、更に階下へ向かわれると空を飛べないリウスにはどうすることも出来なくなる。

ソウルストライクで白仮面の男だけを狙ってもいいが、ダメージを負った今の身体ではそんな賭けに出られるはずもない。

今の状態でルイズをこの踊り場でキャッチできるかなんて、とんでもなく危険な賭け

だ。

他に方法がないかと、リウスは焦る気持ちを押さえながらも必死に逡巡した。

その瞬間、仮面の男だけが大きく横へ吹き飛ばされた。

ルイズが空中に投げ出されると、それと同時にワールドが風のように素早くルイズを拾い上げる。

「大丈夫かいルイズ！ すまない、気付くのが遅れたよ」

ルイズを抱きかかえるようにしたワールドは、レビテーションの魔法でゆっくりと上にある階段に降り立とうとしている。

ダンツ、と音を出して白仮面の男が踊り場に着地する。

男が体勢を整える前に、痛む身体に歯を食いしばりながらすぐさまリウスが肉薄した。

ワールドを信用した訳ではないが、もう今はワールドを信用する他にない。

ワールドが来てくれることを信じた上で時間稼ぎをするつもりだったが、間近で白仮面の男の魔力を見たリウスは目を疑うと同時に、確信していた。

（この男・・・魔法で作った虚像か!!）

リウスは目の前の男に有効な攻撃を考えながらも一息の間に二度、三度と短剣で攻撃を仕掛けていく。

それを受ける男は何とか攻撃を避けてはいるものの、息つく暇も、隙も見出だせない状態だった。

しかし痛みでリウスの動きが鈍った一瞬の隙に、仮面の男が黒塗りの杖を通し少しばかりの魔力を増幅させ、それを即座にリウスへと向けた。

「エアカッター!!」

こいつは即座に倒してしまおうべきだ。

そう咄嗟に考えたリウスは出し惜しみせずに、ハルケギニアでは使ったことのない魔法を解き放った。

「マジックロッド!」

白仮面の男がリウスへ杖を向けた瞬間、杖に纏った魔力が砕け散った。

ハルケギニアのメイジで、かつ自分以上の魔力を持った相手にもこういつた魔法が効くことは、学院のミスタ・ギトーの魔法を破壊できたことから分かっていた。

『スペルブレイカー』が詠唱を強制的に失敗させる魔法である一方、『マジックロッド』は対象の魔法が完成し魔力反応が行われた瞬間に、その魔力の操作を強制的に奪い取る魔法である。

つまり、魔法の元となる魔力を奪い取ることで、対象の魔法を発動させない魔法だった。

魔力反応の瞬間に使う必要があるので扱いが非常に難しいが、好んで常用していたリウスにとっては信用に値する魔法である。

ガンダールヴのルーンで強化されている今、失敗することは考えられなかった。

「……!?!」

魔法が出なかったことに仮面の男が戸惑った時、既にリウスは男の懐まで踏み込んでいた。

短剣を持っていない左手には、青く美しい小石が握られている。

「デイスペル！」

白仮面の男の至近距離から青い小石へ魔力を叩きこむと、小石がパンツ、と音を立てて砕け散った。

その破片一つ一つに込められたリウスの魔力が増幅され、次の瞬間には全ての破片から射出されたデイスペルの魔法が仮面の男の全身を貫いていた。

白仮面の男は声を発することすら出来ずに、ぐにやりと形を変えてから、霧のように一瞬で霧散していく。

残った白い仮面と黒塗りの杖が地面に落ちて、カラン、と乾いた音を立てた。

「どうやら、これらは実体だったようだ。」

「はあっ……!……はっ……」

先ほど落下した痛みを強く感じつつ、リウスはよろめきながらも呼吸を整える。

「リ、リウス！ リウス！ 大丈夫?!」

ワルドと抱きかかえられたルイズが踊り場へふわりと降りてくる。

すぐさまこちらへ駆けてくるルイズの姿に、リウスはほっとした表情を浮かべた。

それを尻目に、ワルドは鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしている。

「ルイズ、よかつた……。いてて、ちよつと、引つ張らないでよ」

「ご、ごめん！ でも平気なの!?! あんなどころから落ちたのよ!?!」

「……驚いたな、あの一瞬で。何をしたんだ?」

リウスは痛みに呻きながらワルドへと顔を向けた。

「それはともかく……。急ぎましょう。追っ手が来ます」

「あ、ああ……。そうだな、歩けるかい?」

「まあ、なんとか。いたた……」

「相棒、平気か? マジですまねーんだが、俺っちも持つてつてくれ。今回は小言なんて

言わねえからさ」

リウスは重い身体に力を込め、なるべく急ぎながらデルフリンガーの元へと辿り着い

た。

目の前がクラクラしていて、気持ちが悪い。

リウスがそう感じながらも心配そうなデルフリンガーを踊り場から引き抜き、拾い上げた鞆に収めながらよろよろと階段へと向かっていく。

それを見て、ワルドは溜め息を吐いた。

そしてデルフリンガーをリウスの手から半ば無理やり受け取ると、ワルドはゆっくり先導するように階段を登っていく。

少しして、居ても立つてもいられなかったルイズがリウスへ肩を貸したが、それは流石に無理がありそうに見えた。

そもそもこの階段はそんなに幅がある訳でもないというのに……。

「ちよつと、危ないわよ。私のことなんていいから、先行きなさい」

「……」

「ルイズ、先に……」

「……るさい。うるさい、うるさい、うるさい!!」

ルイズが俯きながら叫んだ。

その顔はぼろぼろと涙がこぼれている。

「無茶しないでつて言ったでしょ! 何でこんなメチャクチャするのよ!」

「ちよ、ちよつと、ルイズ。落ち着いて。追っ手が……」

「うるさい! アンタがいつまで経っても無茶するからでしょ!? こんなことしないっ

て言ったじゃない！」

「ちよつと、もう。ルイズ」

ルイズが息を切らせながらリウスに肩を貸し続けている。

ワルドは少し先で二人をじつと見つめていたが、はあ、ともう一度溜め息を吐くと、リウスのところまで下りてきた。

「ルイズ、いいよ。僕が代わろう」

ルイズは何も答えない。

そんなルイズから視線を外したリウスが口を開いた。

「それじゃ、追っ手が来た時に……」

「静かにしていたまえ、ケガ人は黙って従うものだよ。いざという時のために魔法は使わないが、我慢してくれ。ルイズ、君は警戒しながら僕の目の前にいてくれ」

「……」

ルイズはリウスに肩を貸したまま、息を切らせて俯いている。

「ルイズ、頼む。ミス・リウスの言う通り追っ手が来るかもしれない。ここでグズグズしている訳にはいかないんだ」

「……」

ようやく、ルイズがすつとリウスの傍から離れた。

それと入れ替わりでワルドがリウスへ肩を貸す。

「すみません、ワルドさん・・・」

意識が朦朧としながらも、リウスは小さく声を出した。

「謝ることじゃない。君はルイズを守ろうとしたんだ。名譽の負傷さ」

ワルドはそう言うのと、さつきよりも格段に早く階段を登っていく。

ルイズは俯いたままでワルド達に歩調を合わせていた。

ルイズは、さつき見た光景を何度も思い返していた。

唐突なりウスの声に、誰かが後ろに立つ音。

びつくりして振り返ると、急に抱きかかえられて連れ去られる。

後ろには、いるはずのリウスの姿がない・・・。

（あんなの・・・。もう二度といやだ・・・）

ルイズはそう何度も何度も胸の内を呟くと、自分がどうなろうとも絶対にリウスだけは無事に帰すんだ、と自分自身に強く誓うのだった。

第三十一話 かつての夢 5つ目

ルイズは夢を見る。

目の前に広がっていたのは、どこかの教室のようだった。

マントを羽織った中年の男性が何やら説明しているのを、自分はローブを着た十数人と共に聞いている。

説明を受けている人達には若者も数人いるが、その他は中年から老人までの男女である。

「・・・であるから、地域ごとのモンスターの組成が大きく変わる訳です。

各地で流れる魔力はその特性に大きく影響を受ける。によつて、諸君らが感じている魔力の集合体があるままモンスターの肉體へと形を変えているとも考えられている訳ですが、

その仮説を基にするとゲフェンタワーの地下に潜むナイトメア等の精神体は一体どのような魔力によつて生まれ出たのかという問題に・・・悪魔が多く住みついていることから・・・」

男性は長い話を流暢に話しているが、ルイズの視点である少女は話を半分聞きながらも、羊皮紙に何やら考えをまとめているようだ。

『実体であればあるほど魔力の流れを掴みやすい。アーススパイクが扱いやすい理由に繋がる?』

『ライトニングボルト、ファイアーボルトが扱いにくい理由にもなるかもしれない』

『フロストダイバーが使いにくい反面、ナパームビートが簡単に扱える理由は?』

少女は様々な疑問を書きだしているようで、羊皮紙にはびつしりと文章が刻まれている。

そして、その注釈として人体図や魔法の仕組みを図解で表していた。

見たことのない文字ではあるものの少女の視界を通しているからなのか、ルイズにもその文字の意味を理解することが出来た。

しかし、その注釈の大部分はルイズにとつてちんぷんかんぷんである。

「・・・精神体に対して、あらゆる魔法が大変有効であるのは諸君らも知つての通り。

しかし! そのようなモンスターへ特化している魔法の存在こそ忘れてはならないものであります!」

少女が顔を上げる。

教壇に立っている男性の横には、背の低いクリーム色の髪をした女の子がいた。

ルイズよりも背が低く、十二、十三歳ほどだろうか。

凜とした姿勢のままだが、何を考えているのか少し不安そうな表情を浮かべている。「ではカトリーヌくん。君はもちろんナパームビートを使えるね？ ぜひ、実演をしてほしい」

（ふうん……。あれが、例のカトリーヌか）

ルイズにも少女が内心で呟いた声が聞こえていた。

次の瞬間、目の前の視界が切り替わると、目に映る人々の周りを青いもやのようなものが薄く包み込んで見えるようになった。

人々の胸部分には真つ青に塗り潰された球体があり、そこから伸びる青い線が身体中に走っているのが見える。

これは何だろう、とルイズが見ていると、教壇に立ったカトリーヌが短く呪文を唱え始めた。

その瞬間、カトリーヌの全身から真つ青で巨大なもやが一気に立ち昇った。

そのもやは一瞬の内にカトリーヌの目前に集まり、凝縮されていく。

「ナパームビート」

カトリーヌが小さい声で呟くと、ドゴンツと地響きを伴う爆音が教室中に響き渡った。

見ると、カトリーヌの目の前にあったボロボロの椅子が粉微塵に砕け、それだけでなく石の床に1メートル程もある大穴が空いている。

「なっ、何をしている!?!」

「あっ……」

教壇に立つ男性が驚愕の声を上げ、何故かカトリーヌも驚いた顔で目を丸くしていた。

そのまま男性がカトリーヌを叱責し始めるのを見つめながら、少女の視界が元の状態へと戻る。

(すっごい魔力。たかがナパームビート程度で……)

「何故床を壊す必要があったと聞いているんだ!」

「……ごめんなさい」

そう言つてカトリーヌは頭を下げるが、悪びれもせず真っ直ぐ男性を見つめている。

見つめられた男性は「まったく!」と憤慨しているが、そのままカトリーヌへ席に戻るよう命じると、何喰わぬ顔でこちらへと向き直った。

「……何が言いたかったのかというと。」

あ……、そう、ナパームビートは精神体へ有効な打撃となるが、突き詰めればこ

これまでの威力を出せるのです。肉体を持つモンスターを傷つけずに捕える場合にも使える訳ですが、

えー……。詠唱が容易ですので自衛としても……」

「しどろもどろと男性が説明を続ける中、少女はペラペラと羊皮紙の束をめくつていく。

そして羊皮紙をめくる手を止めると、そこに書かれている文章に目をやった。

その羊皮紙は他のとは違い、二つの短文が書かれていた。

『強力な魔法を構築する方法が必要』

『忘れるな』

その前者の一文には多くの矢印が引かれ、『先生』と書かれたもの以外にも多くの名前が記されていた。

後者の一文は羊皮紙の下側、その隅にひっそりと書かれている。

少女は前者の一文へ新たな矢印を引き、そして『カトリーヌ・ケイロン』と短く書き加えるのだった。

「噂通りね。見てたわよ、さっきの」

大きな噴水の傍で固そうなパンを齧っていたクリーム色の髪をした少女に向けて、視界の主である少女、リウスが声を掛けた。

彼女、カトリーヌは少し驚いたようにきよとんとした顔をしていたが、次第に強い瞳でこちらを睨みつけていた。

そして、さつきまで読んでいた本にもう一度目を落とす。

何も答えないその様子に、リウスは少しどぎまぎしながらも声を掛け続けている。

「ねえ。隣、いいかしら。ご飯食べる場所を探してるの」

「ダメ」

「そ、そう？ ちょっと話したいだけなんだけどな。それならいいわ、ここで立ちながら食べるから」

「何の用……？ 興味本位なら、あっちに行つて。間に合ってるから」

「まあ、確かに興味本位よ。あなたが気になったって訳なんだけど」

リウスはそう言うのと、皮袋からブドウの実を取り出した。

そして皮の付いたままのブドウを口へと放り込む。

その視界を見ていたルイズにも、甘酸っぱく美味しいブドウの味が口の中に広がっていく気がした。

「……色んな物を壊すつて噂でも聞いたの？ それとも、ウィザードの人が言ってる才

能だのなんだのって言葉を鵜呑みにでもしたの？

それとも・・・、覚えてないけど、私があるたに何か迷惑をかけたの？」

少し怒っているかのような口調で、カトリーヌが静かに声を出した。

ブドウの味半分のまま、唾と一緒にぐくりと飲み下す。

「迷惑なんて、別に私はそんなことされてないわ。噂は聞いたことあるけどそういうことじゃなくて・・・」

「もういい。あつちに行つて」

リウスはそれを聞いて、そっか、と小さく呟いた。

(難しいわね。諦めた方がいいか・・・)

リウスは内心そう考えると、カトリーヌの開いた本をちらりと見た。

そこには数多くの動物の挿し絵が載っている。この本は、リウスも何度となく読み返した本だった。

「・・・ねえ、そういう動物とかつて好きなの？」

「・・・」

カトリーヌがちらりとこちらを見る。

リウスははつとしてから慌てて口を開いた。

「あつ・・・。ごめん、迷惑だったわよね。もう行くわ」

リウスはそう言うてから、そそくさとその場を離れた。

立ち去る途中、小さな声でカトリーヌが声を出していた気がするが、リウスは気にはなつたものの雰囲気の気まずさからさっさと立ち去っていった。

すると、場面が変わった。

ルイズが急に目に映った風景に驚いている一方、視界の少女もしよぼついた眼をこすりながら辺りを見回している。

薄い暗闇の中、周りは鬱蒼とした森に包まれていた。

空には三日月が煌々と輝いている。

どうやら大木に背を預けて座り込んでいるらしい。

小さな少年が自分の太ももの上に頭を乗せて、すうすうと寝息を立てて眠っている。

擦り傷や打撲などで身体中がズキズキと痛んでいるが、なんとか身体は動かすことができるようだ。

「……うなされてたよ」

大木の影から静かな声が発せられた。

月明かりに照らされたその顔は、カトリーヌだった。

「ああ、ごめん。うるさかったかな」

「別に」

カトリーヌの傍らには白い犬が丸くなって眠っていた。

しかし声は聞こえているのか、時々耳がぴくぴくと動いていたりする。

「カトリーヌ。そろそろ行く?」

「ううん、夜が明けてからの方がいい。オークも夜目が効く訳じゃないけど、それはこっちも同じ」

「そっか。確かに、見えない中であの数に囲まれたら終わりね」

リウスはそう言うのと、もう一度大木に寄り掛かった。

「ただの討伐依頼が、凄いことになっちゃったわね」

「・・・たぶん、王都が事態を把握できてなかったんだと思う。何人かは逃げれたし、援軍は来るよ」

その言葉へリウスが曖昧に返事をした時、ルイズの目にいくつかの映像が浮かんだ。

巨大な塔の横にあった掲示板。『討伐の依頼』と大きく書かれている。

森の中を駆け巡る。周りには尋常でない数の、自分の倍ほどもある緑色で筋肉質な亜人。一緒に戦っている人が何人も倒れていく。

草藪をかき分けていく中で、震えてうずくまる少年を見つける。少し離れたところから大きな爆発音が地面を揺らす。

少年を連れて爆発のあつた場所へ向かう。

先程よりもはるかに多い緑色の亜人の群れに、白い犬を庇いながら一人で戦うカトリヌの姿……。

最後にルイズの視界は今いる暗闇の森へと移る。

そして、リウスは小さく溜め息を吐いた。

「あなたもバカね。そんな犬を庇ってギリギリまで戦い続けるなんて……」

心底呆れたようなリウスの言葉に、カトリヌはむっとした表情を浮かべた。

「うるさい。それならあなただつて馬鹿。その子もいるのに、助けに飛び込んでくるなんて」

「うるさいわね。しょうがないじゃない、あなた弓持ちに気付いてないんだもの」

「普通、マジシャンに気付ける訳ないよ。そもそもあの数のオーク相手に短剣で戦うなんて、馬鹿」

静かに言い合っていたリウスは突然くつくと笑うと、その笑顔のまま溜め息を吐いた。

「はいはい、つまり二人ともバカって訳ね」

きよとんととしていたカトリーヌもそれに気付いたのか、静かに笑った。

「そうだね。二人とも馬鹿だ」

月明かりの中、二人して静かに笑い合っている。

その内にリウスが明るい声で口を開いた。

「それで？ 何で逃げなかったの？」

「・・・だって。この子、飼い犬でしょ？ 死んじやったら悲しむ人がいるかもしれない

し」

「ああ、そういえば動物好きだったっけね」

「・・・言っただけ？」

「言ってないわよ」

「じゃあ、何で？」

「いつも動物の本ばかり楽しそうに読んで、気付かれてないでも思ってた？ 魔

法書を読んだところなんて見たことないわよ？」

ああ、とカトリーヌが納得した顔になる。

リウスはその顔を面白そうに見つめていた。

「悲しむ人がいるからねえ。その子は人じゃなくて、犬よ？」

「犬だって、同じだよ。飼い主にとっては家族といっしょ」

「それは、あなたの家でも？」

「・・・うん。いつも一緒だった」

そっか、とリウスは告げる。

「まあ、その犬も飼い主が見つけれられて良かったわね。この子も飼い犬が見つかったよ」

「うん」

「それにしても、その犬はオーク相手に立ち向かっていったんだってよ。この子もこの子でわざわざ探しに来てるし。ムボーよ、ムボー」

「そうだね。ムボーだ」

そう言っただけで笑って合つてから、夜空を見上げると三日月が大分傾いてきていた。

そろそろ夜も明けることだろう。

「リウスは、なんで何度も私に話しかけてきたの？」

しばらく黙つてから、リウスは答える。

「別に。興味があったからよ」

「そうなの？」

「そうよ」

「それは、あなたが本当にしたかったことなの？」

「もちろんよ。どうしたの？ さっきから」

「だって・・・。あんなに辛そうな顔、してたから」

その言葉で、今度はルイズの頭にくくつもの声と映像が飛び込んできた。

（忘れるな）

白髪の老人と楽しそうにお喋りをしている。

どうやら初めてのの手料理を食べてもらっているようだ。

（忘れるな）

まだ弱いけど、魔法の実演でようやく上手く出来た。

目を丸くしている人達と、まるで自分のことのように笑顔を浮かべている先生の顔。

（忘れるな）

様々な人と喋りながら色んな議論を交わし……。

魔法についてウイザードから教えを請い……。

とても面白い本を読んだり……。

興味深い生物を調査したり……。

先生にもそれを教えて……。

(忘れるな!!!)

その瞬間、ルイズの目に飛び込んできたのは満月に照らされている薄汚れた路地裏だった。

周囲には、朽ちた材木と藁で作られた家々が何の音も発さずに立ち並んでいる。

その通りの奥には、何か、黒い塊が転がっている。

近付いて、それに触れる。

手には何か、液体のような感触がある。

手が、震える。

足から、力が抜ける。

黒い塊にはほのかな温もりがあり、それが徐々に消え……

(報いを——!!!)

「リウス……?」

そう呼ばれて、リウスはハッと我に返った。

周りには鬱蒼とした森のみが広がっている。

ルイズは心臓がぼくぼくと高鳴っていることに気付きながら、先程の恐ろしい声に身を震わせていた。

「……大丈夫よ」

「……だいじょうぶ? って……、何が?」

「何がって……。ああ、そうね。話しかけたのは興味があつたからよ。それだけ」
ぶつきらばうにそう告げると、リウスは静かに黙りこくった。

森の闇が風に揺れて、ざわざわと音を立てている。

風に乱れた前髪を静かに整えながら、カトリーヌが何かそわそわしているのが目に

入った。

「あのね、その……。私で助けになれることがあれば、いつでも言っただけいいよ。」

「……」

「……私は、あなたを助けたいの。だって、もう、友達だって思ってるし……」

「……助けたい？」

「だって、いつも……。今だって、そんな辛そうな顔、してるから」

「……辛そう？　……私が？」

「あつ……。ごめん、もしかして違った……。？　あの……。もし私が邪魔だったら、いつでも……」

そう言っただけ、カトリーヌは俯いてしまう。

リウスは、半ば呆然とした顔でその姿を見つめていた。

(そんなこと、ある訳がない)

リウスはまるで自分に言い聞かせるようにかすかに呟いていた。

その呟きで、頭の芯が熱くなっていく。

私が辛いだなんて、そんなことあるはずがない。

だって、私が悪いのだから。

あの男が悪いのだから。

父さんもエミールも先生も悪くななんてない。

悪いのは、私とあの男だ。

そんな私が辛いだなんて有り得ない。

そんな『権利』なんて、持っている訳がない！

「私には分からないけど、私はリウスの味方だよ。リウスがどう思っているか、分からないけど……、友達だもの」

うるさい……！ 何も分かってなくせに……！

いい加減に、黙れ!!

「馬鹿にされても、ウィザードに認められてなくっても、ずっと努力してたじゃない。色んなところで、ずっと見てたよ。あなたを見てたら、私だって何回失敗しても頑張れるって思ってた。」

ずっと、友達になりたかった」

何が、友達だ……！

人はいくらでも弱くなれる！ 弱くなれてしまう！

私はあいつを八つ裂きにするために……！

二度と私の家族が死なないように、強くなり続けなければならぬんだ!!

「それにリウスは、辛いことばかりじゃなかったでしょ？ 楽しかったことだって、

いっぱいあつたんでしょ？」

カトリーヌを睨み付けていた顔から、ふっと力が抜けた。

カトリーヌの言葉が、頭の中で鐘のように鳴り響いている。

楽しかった、こと。

その言葉に、底すら見えない憎悪が一瞬消えた気がした。

ふとりウスは、おぼろげな、はるか昔の記憶を思い出していた。

その記憶の中には、幸せそうに笑う父の姿があつた。

そしてその横には、赤ん坊を抱いた・・・母の姿が。

—あらら、どうしたのエミール。お父さんが怖かつたの？

—そんなこと言ってくれるなよ。ほーらほら、よしよし。

—ああもう。ほら、お姉ちゃんがよかつたのね。はい、ご要望よ。リウス。

うすぼんやりとした記憶の中、あまりにも柔らかい赤ん坊が胸の中にいる。

言葉にならない言葉で、何の疑いもない顔をしながら笑っている。

(私は……)

赤ん坊の重さを感じていると、父と母が嬉しそうに呼びかけてくる。

二人の顔を見た私へ、本当に幸せそうな笑顔を向けてくれている。

(私は、もう一度だけでも……)

何かが、リウスの中で溶けていった気がした。

記憶の中にある父と母の笑顔があまりにも遠くに見える。

赤ん坊の嬉しそうな声がかすかに聞こえて、ゆっくり消えていった気がした。

(復讐すれば……、また戻ってきてくれるだなんて……)

「リ、リウス。あの、もし傷つけたのなら……」

ふと見ると、カトリーヌが近くに座っていた。

いつの間にか頬に涙が流れている。

ぱつと顔を背けて涙をぬぐったが、今更どんな顔をしてカトリーヌを見ればいいのか

分からなかった。

「あの……。ご、ごめん、ね？」

「謝らないで」

何とかリウスは声を絞り出した。

今の言葉は、うまく言えただろうか。

「あなたのこじやないの。私の話よ。あなたは何も悪くなんてない」

リウスの言葉にカトリーヌは小さくもごもごと声を出している。

何を言っているのかは分からないが、リウスはそんなカトリーヌの様子をちらつと見て、小さく笑った。

「いいから、カトリーヌは気にしないで。そう、ここで泣いちゃったことも口外無用！

いい!？」

恥ずかしさを誤魔化すように、リウスがカトリーヌの顔を正面から見ると、

カトリーヌはびっくりしたように口を半開きにしていた。

「う、うん。いいけど」

「オツケー、よし。じゃあ、そうよ、ちやつちやと戻りましょ。そう、オーク達が来るかも分からないんだから」

ふと見ると、もう夜は明けていた。

美しい太陽が森を優しく照らしている。

リウスは自分の脚の上で寝入っている少年を起こそうとしたが、ふと動きを止めた。「そう。それで、さっきの話だけど」

カトリーヌがこちらへ来た時に起きていたのか、まわりついている白い犬の耳をいじっていたカトリーヌがこちらへ向き直る。

「次は魔法、教えてね。私の方でも何か助けになればいいんだけど」

「う、うん。私はいいけど……。さっきの話って？」

「友達だのなんだのって話よ」

う、とカトリーヌが言葉に詰まる。

目線を泳がせながら何か言いたげな感じになっていて、リウスはその様子をちらりと見てから、溜め息を吐いた。

「友達になりたいって思ってたのはカトリーヌだけじゃないんだから」

それを聞いてから二拍か三拍か間を置いて、カトリーヌがほっとしたように静かに笑った。

「そうなの。安心した」

「なら良かった」

「……顔、赤いよ？」

「う、うるさいなあ。あーもう、恥ずかしいったら」

カトリーヌから顔を背けながらリウスは少年を起こし始めた。

それを見ていたカトリーヌはとても嬉しそうな笑顔を浮かべながら、くすくすと笑い続けていた。

ハツとして、リウスは目を覚ました。

自分がある場所は、ゴトゴトと揺れる木製の部屋の中だった。

どうやらいつの間にか簡素なベッドで寝かされていたらしい。

ここは、飛行船の中なのだろうか。

傍らには、リウスのベッドに突っ伏して寝ているルイズの姿があった。

「ん……、むにゃ……」

ルイズの傍らには小さな籠が置かれている。

そこには包帯や水の入った小さな湯呑み等が入っていた。

ルイズの手には、真白い清潔なタオルが握られている。

「……また、心配させちゃったわね」

リウスはそう呟いて、さらさらとしたルイズの頭をゆっくり撫でる。

ルイズの髪は所々がもつれたように乱れていた。

どうやら、寝てしまう前に髪を梳かさなかつたのだろう。

「貴族のお嬢さまなら、綺麗にしとかなくちやダメでしょうに」

そう言いながらルイズの顔を見ていると、何の夢を見ているのか嬉しそうな表情のまま寝息を立てている。

まったく、とルイズはルイズの寝顔を見つめながら、さつきまで見ていた自分の夢を思い出そうとしていた。

しかし、さつきはとても懐かしい夢を見ていたような気がするが、何の夢だったのかあまり思い出せない。

すると出口と思われる通路から、何やら声が聞こえてきていた。

ルイズを起こさないようにそっとベッドから起き上がる。

ルイズはまだ残っている痛みになじみ顔に少しばかり顔を歪ませるが、自分にかかつていた毛布をルイズにかけてから部屋の外へと向かつていった。

外に出たルイズは、眩しい朝日に目を細めた。

どうやらちょうど日の出も過ぎた時間のようだ。

朝早い船員達が甲板を忙しそうにうろつき回っている。

船はアルビオンへ向かっている途中のようだった。どうやら雲を越えた場所まで浮上して飛んでいるらしい。

目に飛び込んできた景色はまるで朝日で照らされた真白い海のように見え、その景色は美しいの一言に尽きる。

船員の邪魔にならないようにしつつ、リウスは甲板の上を見回していた。

そこで、ふと見知った顔と丸くなっているグリフォンに目を止める。

「おや、起きたのかい？ ミス」

「ええ、ワルドさん」

何をしているのか、ワルドは甲板の帆へ向けて杖をかざしていた。

その体勢のまま、こちらへ向かってにこやかに笑顔を浮かべている。

「まだ寝ている構わないよ。アルビオンまではあと少しかかるようだからね」

「いえ、もう目が冴えてしまったので……。昨日はすみませんでした。途中から記憶が無くなって」

「起き上がれるだけ上出来だよ。無理言ってベッドを借りた甲斐がある」

リウスはその言葉に苦笑しながら、もう一度ワルドへ礼を言った。

「礼などいいよ。スカボローの港に着いてから、また大変だからね」

「と、いとうと？」

「船長の話によると、王軍はニューカッスル付近にいるとのことだ。そしてニューカッスルは貴族派に攻囲されている」

「なるほど。スカボローからの距離はどのくらいですか？」

「丸一日といったところだろうな。あとは包囲陣をどうするかだが・・・陣中突破しかあるまい」

リウスはその言葉に頷いた。

圧倒的に優勢となつている軍団を抜けるには、多少無理やりにも通る他にないだ。

危険ではあるが、トリステインの大使に向けていきなり攻撃を加えてくることはないだろう。

リウスがワルドの姿をざっと見ると、ワルドは随分と疲れた顔をしていた。

主人の疲れを知つてか知らずか、傍に座り込んでいるグリフォンは未だにぐつすりと寝こけている。

「お疲れみたいですな。ちなみに、そこで何を？」

「ああ、どうやら船の『風石』が足りていないようですね。僕の『風』の力を貸しているんだ」

「『ふうせき』・・・？」

首を傾げるリウスに、ワルドは怪訝な表情をした。

「そう、『風石』だ。こういうった船を飛ばしているマジックアイテムさ。なんだ、君の国にはそういうったものが無いのかい？」

アレのことかな、とリウスは思い出していた。

学院にある書籍にそういうったマジックアイテムが載っていた気がする。

こういうった船の燃料のようなものだろう。

「私の国にも、こういうった飛行船はあるんですが。私はあんまりその造りを知らないもので」

リウスは正直に答えるが、飛行船の数が少ないことは伏せておいた。

そもそも、自分が今まで見てきた飛行船のことは碌に知らないのだ。

隠すも何もあつたものではない。

「なるほど、それで『風』の魔法を。随分お疲れのようですので、代われるなら代わりたところなのですが……」

「……までやったんだ。最後まで僕がやらなきや沽券に関わってしまうよ」

ワルドがおどけたような様子でにやりと笑顔を浮かべる。

その表情に、リウスは内心驚いていた。

まるで初めてワルドの本当の表情を見た気がしたのだ。

「不思議なものだな。こうして東方のメイジと話せる機会があるとは思っていなかった」

しかしリウスは、緩んだ警戒心をもう一度引き締めた。

「どうやらまだ話し足りないらしい。」

「ラ・ロシエールの宿で私の事をあれだけ色々聞こうとしていたのだから、当然といえば当然なのだろうが。」

「僕は東方に興味があるのさ。よければ、君の話を聞かせてくれないかな？」
「やっぱりきた。」

「そうは思いながらも、リウスは平然とした様子で答える。」

「いえ、やめておきます。確か、『レコン・キスタ』でしたっけ。あの連中の目的は、東方にあるという聖地の奪還だったはず。それなら、私が簡単に漏らす訳にはいかないでしょう?」

「・・・僕とレコン・キスタに関係があると言っても言うつもりか?」

「そういう話ではないですよ。貴方は王宮直属の軍人です。つまり、トリスティン王宮との繋がりを持っている。レコン・キスタは色んな国に根を張っているんでしょう? だからですよ」

「・・・僕は君の話を誰にも漏らすつもりはないが」

不満そうなワルドに対して、リウスは少し困ったような顔で笑った。

「そう信じたいですが、すみません、確証が持てないんです。まあ、ひとつだけお伝えするなら……」

「何かな？」

「そもそも、私には東方についてろくな話は出来ないんです。私の国がどこにあるのか分からないですし」

あつけらかんと言ったリウスに、ワルドはまた怪訝な表情を浮かべる。

「うん？ 東方、ではないのか？」

「それが分からないんです。確か、『エルフ』でしたっけ。耳が長くなって、人と同じ姿の亜人種が東方にいるんですよね？」

「ああ、サハラを含んだ東方はエルフの領土だ」

「そのエルフっていうのを私は見たことないですよ。だから私の国が東方のもっと先なのか、それとももつと別の場所なのか、分からないんです」

ワルドは思案に耽りながらリウスの話を聞いている。

帆に杖を向けるのすら忘れていた。

よつほど興味を持つているようだ。

「なるほど……。それであれば、確かに仕方がない、か」

リウスはその言葉に頷いて答えると、用は済んだとばかりに短く会釈をしてからその場を離れようとする。

しかし、そんなリウスの背にワルドが声をかけた。

「すまない。最後にひとつ教えてくれ。一昨日、宿でイグドラシルという大樹の話を聞いたのだが」

ワルドに背を向けたままのリウスは、ゆっくりと、静かに歯噛みしていた。

あの話は、この世界の人へ伝えるべきではなかった。

盗賊騒ぎの時、フーケと戦った直後に気が抜けていたのかもしれない。

イグドラシルが東方にあると思われるのであれば、死者の蘇生が難しいこの世界の人にとって、この上なく魅力的なものとして映ってしまうだろう。

それこそ、戦争の発端になりかねない程に。

「その話、誰から聞きました?」

「ギーシュ君だ。確か、実や種は万能の薬だと言っていたかな。その葉っぱは、死んだ者を蘇らせられるのだろうか?」

(ギーシュくん、後で覚えてなさいよ)

あんちきしょう、とばかりにリウスは思っていたが、溜め息をひとつ吐くとワルドに向き直った。

「そんな便利なものではないです。要は、薬の材料ですよ」

「そうなのか？ 確かに、死者蘇生には条件があると言っていたが……。誰でも蘇生できるといふ訳ではないのか」

リウスはその言葉に顔を歪ませてから、ふふつと自嘲気味に笑った。

「そんな素晴らしい物があれば、誰だって苦労はしなないです」

その顔を見たワルドは少し驚いた表情を浮かべ、気まずそうに目を背けた。

「……すまない。余計なことを聞いた」

リウスはハツとした。

今、自分はどんな顔をしていたのだろう。

そしてワルドは旅の中で見せてきた仮面のような表情ではなく、これもまたリウスにとっては見たことのない沈んだ表情を浮かべている。

「いえ、あの、怒ったりなんかしてないので……。そう、もうすぐアルビオンなんです。たっけ？ ルイズを起こしてきましょうか？」

「いや、いいよ。アルビオンが見えたら僕から声をかけよう。それまでゆつくりしててくれ」

「そうですか。ではお言葉に甘えて」

リウスはそそくさとその場を立ち去っていく。

ワルドはしばらくの間、その後ろ姿を目で追っていたが、ふと思いついたように船の帆へもう一度杖を向けるのだった。

第三十二話 大空の珍客

「なあに、ルイズ。何をにやにやしてるの？」

リウスはルイズの柔らかな髪に櫛を通しながら、ルイズと空飛ぶ船のベッドに腰掛けでお喋りをしていた。

ルイズは起きてからというものの、昨日のことで心配そうな顔をしたり、リウスが動くことに安心したり、昨日の無茶に怒った表情を浮かべたり、それから何やらにやにやし始めたりと、表情をころころと変えている。

「別に何でもないわよ？」

リウスにはそう言うルイズの顔があまり見えないが、また口元が上がっているのは何となく分かった。

「わかった、何か良い夢でも見たのね」

「そう、良い夢見たのよ。なんか、ほっとしたわ」

「リラックスできたのなら良かったわ。どんな夢を見たのか聞いてもいい？」

「だーめ」

つんと澄ました仕草をしながら、ルイズは目を瞑って笑った。

今まで一緒にいて、リウスのことは分かっているつもりだ。

リウスは人を信頼しているが、心の底からリラックスして人と話しているかと問われれば、そんなことはない。彼女は、常に警戒しながら人と接しているのだ。

もちろん異世界からやってきたということも影響しているのだろう。

しかしそれ以上に、過去の体験が彼女の性格に強く現れていることを、ルイズも薄々気付いていた。

夢に現れた『先生』や『カトリース』。二人に語りかけるリウスは、それとは違った。きつと二人はリウスにとって大切な人達なのだ。

二人と話している時のリウスの気持ちだが、ルイズにも伝わってきていたのだから。

リウスの夢を見て、ルイズには思うところが山程あった。

常に身を切り刻まれるかのような悲しさや、果てしないまでに広がっていく憎しみ。

リウスはあのままだったらどうなっていたのか分からない。

しかし最後には、あの二人がリウスを救ってくれたのだ。

それがルイズにはとても嬉しかった。

そして、それとは別にもう一つ嬉しいことがあった。

リウスの夢を見ていない時は、リウスの気持ちは分からない。

しかし二人に対しての態度と同じものを、今この時、確かにリウスから感じていた。

自惚れなのかもしれないが、それでもルイズにとつてはまるで自分が救われていくよ
うな、とても嬉しいことだった。

ルイズはもう一度嬉しそうに顔をほころばして笑った。

しかしさつきまでとは違い、そこには一抹の寂しさが含まれている。

ルイズは昨日決意したことをもう一度思い返していた。

ルイズは、ハルケギニアに突然連れてこられた。

それでもルイズは自分と一緒にいてくれると言い、私も今まで考えまいとしていた
が、やっぱりルイズにも待つてくれている人達がいるのだ。

だとしたら、何としてでもルイズを無事に元の世界へ帰さなくちゃいけない。

まだどうやってルイズを元の世界に返せばいいのかは分からない。

でも、いつまでもそれに甘えている訳にはいかなかった。

「アルビオンが見えたぞー！」

そうしていると、外から船員らしい人の大声が聞こえてくる。

目を見合わせたルイズとルイズは、連れ立って甲板へと向かっていった。

甲板に出たりルイズは、目の前に広がっている光景に思わず息を飲んだ。

先にある雲の切れ目には、まさに大陸と呼ばれるにふさわしい黒々とした大地があった。

大陸ははるか視界の続く限り延びていて、地表には山々がそびえ立ち、川が流れている。

「驚いた？」

ルイズがリウスに得意げな顔で言った。

「知ってはいたけど……、これは流石に驚くわ」

ハルケギニアに来る前まで生活していた、ジュノーのような街一つどころではない、余りにも尋常ではない光景だった。

リウスは『浮遊大陸』という意味をようやく理解できた気がしていた。

「なんなの、あれ。ずっとあるの？」

リウスが若干の外れな質問をする。

「浮遊大陸アルビオン。ああやって、空中に浮遊して、主に大洋の上をさまよっているわ。でも、月に何度か、ハルケギニアの上に来てくる。大きさはトリスティンの国土ほどもあるわ。通称『白の国』」

ルイズはそのまま大陸の下半分を指差した。

大河から溢れた水が空に落ちて、白い霧になる。

そして霧は雲となり、その雲は大雨になってハルケギニアの広範囲に降り注ぐのだとルイズは説明した。

リウスが得意げなルイズから説明を受けていると、鐘楼に上った見張りの船員が大声を上げた。

「右舷上方の雲中より、船が接近してきます！」

リウスとルイズは船員の言う方向を見た。

確かに、この船よりも一回り大きい船がゆつくりと近付いてきている。

舷側に開いた穴からは、巨大な大砲がいくつも突き出ていた。

「あれって……」

リウスが眉をひそめたのと同時に、ルイズもぼつりと心配そうに呟いた。

「いやだわ。反乱軍……、貴族派の軍艦かしら」

後甲板で、ワルドと並んで操船の指揮を取っていた船長は、見張りが指差した方角を見上げた。

黒くタールが塗られた船体は、まさに戦う船を思わせている。

こちらにびたりと二十数個もの砲門を向け続けていた。

「アルビオンの貴族派か？ お前たちのために荷を運んでいる船だと教えてやれ」

見張り員は船長の指示通りに手旗を振った。しかし、黒い船からはなんの返信もない。

副長が駆け寄ってきて、青ざめた顔で船長に告げる。

「あの船は旗を掲げておりません！」

その言葉に、船長もみるみるうちに青ざめていく。

「してみると、く、空賊か!？」

「間違いありません！ 内乱の混乱に乗じて、活動が活発になっていると聞き及んでおりますから！」

「逃げろ！ 取り舵いっばい！」

その叫びに船の上がややおら慌ただしくなる。

乗っている船が緩やかにスピードを上げながら方向を変えていくが、時すでに遅し。

黒船はこちらの船を越えるスピードで並走し始めると、脅しの一発をこちらの進路めがけて放った。雷のような轟音が響きわたり、砲弾が雲の彼方へと消えていく。

青ざめた船員達が見つめる中、黒船のマストに四色の旗色信号がすると昇つていく。

「停船命令です、船長……」

船長は苦渋の決断を強いられていた。

この船にだって武装がないわけではない。しかし、移動式の大砲が三門ばかり甲板に置いてあるだけだ。

二十数門も片舷側にずらりと並べたあの船の火力からすれば、こちらの大砲なんて役に立たない飾りのようなものだった。

船長は助けを求めるように、隣に立っているワルドを見つめた。

「魔法は、この船を浮かべるために打ち止めだよ。あの船に従うんだな」

ワルドは落ち着き払った声で言った。

その落ち着いた様子を恨みながらも、船長は口の中で「これで破産だ」と呟いて、船員に命令した。

「裏帆を打て。停船だ」

いきなり現れて大砲をぶつ放した黒船と、行き足をゆるめて停戦した自船の様子に、ルイズは怯えた顔でリウスに寄り添っていた。

「空賊だ！ 抵抗するな！」

黒船から、メガホンを持った男が大声で怒鳴る。

「空賊ですって?」

「空賊……。盗賊の類か」

黒船から鉤のついたロープが放たれてこちらの船の舷縁に引っかかった。

手に斧や曲刀などの得物を持った屈強な男たちが、船の間に張られたロープを伝ってこちらに向かってくる。

「リ、リウス……」

ルイズの怯えた様子を気にしながらも、リウスは前甲板で黒船を睨み付けているグリフォンをちらりと見た。

ここからならアルビオンまでグリフォンで行けるかもしれないが、ワルドがグリフォンに命令を下しているようには見えない。

つまり、従うべきだという判断なのだろう。

すると、ルイズの肩にぼんと手を置かれた。いつの間にかワルドが後ろに立っている。

「ワルド……」

リウスはワルドをちらりと見て、空賊たちに聞こえないよう小声で囁いた。

「ワルドさん、無理ですか?」

それからグリフォンを見たリウスの視線に、ワルドも静かに声を出した。

「やめた方がいい。三人乗るとなると難しい上に、あの数の大砲がこちらに狙いを付けている。おまけに、向こうにメイジがいるかもしれない」

前甲板にいたワルドのグリフォンが立ち上がって空賊達へ威嚇を始めている。

しかしその瞬間、グリフォンの顔が青白い雲で覆われた。グリフォンはゆつくりと甲板に倒れ、寝息を立て始める。

「眠りの雲……。確実にメイジがいるようだな」

どこどかと音を立てて甲板に空賊達が降り立った。

その中に、派手な恰好が目立つ一人の空賊がいる。

汗とグレース油で汚れて真っ黒になっているシャツの胸をはだけさせ、そこから赤銅色に日焼けした逞しい胸が覗いている。

ぼさぼさの長い黒髪は赤い布で乱暴にまとめられ、ぶしよう髭が顔中に生えていた。

更には丁寧なことに左目が眼帯で覆われている。

「船長はどこでえ」

「どうやら空賊の頭なのだろう。荒っぽい仕草と言葉遣いで辺りを見回している。」

「わたしだが」

震えながらも精一杯の威厳を保った声で船長が手を上げる。

頭は大股で船長に近付き、抜いた曲刀で顔をびたびたと叩いた。

「船の名前と、積み荷は？」

「トリスティンの『マリー・ガラント』号。積み荷は硫黄だ」

空賊たちの間から感嘆の声が漏れた。

頭の男はにやつと笑うと、船長の帽子を取り上げ、自分でかぶる。

「船ごと全部買った。料金はてめえらの命だ」

船長が屈辱で震えているのを横目に、頭は甲板に佇むワルド達に気が付いた。

「これはこれは。貴族の客まで乗せてるのか」

近付いてきた頭の男はリウスとルイズをじろじろと見つめてから、リウスの顎を薄汚れた手で持ち上げた。

「二人とも良い女じゃねえか。似てはいねえが、おめえら姉妹なのか？ おれの船で皿洗いをやってみる気はないかい？」

男たちは下卑た笑い声を上げた。

リウスは顎に添えられた手を払いのけないまま、頭の男をじつと睨み付けている。

すると、横からルイズがその手をびしやりとはねつけた。

燃えるような怒りを込めて、男を睨み付ける。

「下がりなさい！ 下郎！」

「おっと、こりや驚いた！ 下郎ときたもんだ！」

男たちが大声で笑った。そのまま頭の男がルイズへと近付いていく。

「なんだ、お前が皿洗いをやりたかったのか？」

「その子に近付くな」

低く冷たい声に、頭の男がリウスをもう一度見る。

「あん？」

「その子に、触れるんじゃない」

傍目には怒った女性が強がっているだけに見えたかもしれないが、頭にだけは分かる。それほどの静かな怒りと殺意をリウスは放っていた。

「落ち着け、やめるんだ」

内心焦りを感じていたワルドがリウスの肩に手を置いた。

しばらく頭の男を睨み付けてから、リウスは目を閉じて、静かに息を吐いた。

「・・・分かりました」

頭は知らずぐくりと生唾を飲んで、「おお、怖い怖い」とその場を取り繕うように言った。

「よし、てめえら。こいつらも運びな。身代金がたんまりと貰えるだろうぜ」

それから他の空賊達がやってくると、ルイズ達の簡単なボディチェックを始めた。

とはいえ杖を取り上げるくらいで、残りは服の上から手で確認するだけである。

ルイズに触れている空賊をリウスが睨み付けていると、まるで安心させるかのようにルイズが小さく笑顔を浮かべた。

抵抗できそうな手段をおおよそ取り上げられた後、ルイズ達はマリー・ガラント号と空賊船の間にかけられた木板の栈橋を渡って、空賊船へと向かう。

その時、リウスは目の前のルイズの指で輝く『水のルビー』をただじっと見つめているのだった。

第三十三話 Flying Robber

それから数時間後。

おとなしく空賊に捕えられていたリウス達は空賊船の船倉に閉じ込められていた。

一行をここまで運んできた船、『マリー・ガラント号』の乗組員たちは自分たちのものだった船の曳航を手伝わされているようだ。

ワルドとルイズは杖を、そしてリウスは短剣やデルフリンガーを取り上げられた。

後は鍵を掛けてしまえば何も出来ない、という認識なのだろう。

リウスにとって言えば、その認識は明らかでない間違いではない。

というのもリウスは別段何も持たなくても魔法を扱うことができる。

しかしリウスは特に何か行動を起こすでもなく、酒樽や穀物袋、火薬樽が雑然と置かれた船倉を静かに見て回っていた。

「空賊ねえ……」

リウスは明らかに重そうな砲弾の山を触りながら、もの珍しそうに呟いた。

「何よりリウス。変なところでもあるの？」

「別に何でもないわ。こういったのが珍しいだけよ」

そんなことを言っていると、がちやりと扉が開いた。

扉の先には太った男が器を手に立っている。

「飯だ」

扉の近くにいたりリウスがその器を受け取ろうとする。しかし太った男はその器をひよいと持ち上げた。

「おっと、質問に答えてからだ」

口を開きかけたリウスよりも先に、男を睨み付けていたルイズが立ち上がった。

「言つてごらんささい」

「お前ら、アルビオンに何の用だ？」

「旅行よ」

ルイズは腰に手を当てて、毅然とした態度で言い放った。

「トリステイン貴族が今時のアルビオンに旅行だと？ 一体何の見物するつもりだ？」

「自分で考えてみたら？」

齒に衣着せぬ物言いに、空賊の男は苦笑いを浮かべる。

「随分と強気だな。トリステインの貴族は口ばかり達者なこつた」

苦笑いを浮かべたまま、男は器をリウスに手渡した。

そのまま部屋の扉が閉められるのを確認してから、リウスはそれをルイズの元へと

持つていく。

「ほら。先に食べちゃいなさい」

「あんな連中の寄越したスープなんて飲まないわ」

「食べないと、体がもたないぞ」

ワルドがそう言い、リウスが笑つて器を差し出すと、ルイズは渋々といった顔でスープの皿を手にとつた。

ルイズが先にスープを飲んでから、次にリウスへワルドが譲り、最後にワルドがスープを飲むといった具合で、三人は同じ皿のスープを回し飲みする。

飲んでしまうと、またやる事が無くなった。

ワルドもリウスも、壁を背にして何やら考えているようだ。

一人残つたルイズはそわそわと落ち着かない。

その時、またドアがぱたんと開けられた。今度は痩せぎすの男が立っている。

リウスは何も言わずにその男の様子をじつと見つめていた。

男は三人をじろじろと見回してから、楽しそうに口を開いた。

「おめえらは、もしかしてアルビオンの貴族派か？」

ルイズ達は答えない。

「おいおい、黙つてちや判らないだろうよ。しかし、もしそうなら失礼したな。俺達は貴

族派の皆さんのおかげで商売させてもらってゐるんだ。王党派に味方しようとする酔狂な連中を捕まえたなら、それもまた商売になるって寸法さ」

男の口上を黙って聞いている三人だったが、ルイズがそれに答えた。

「じゃあ、この船はやっぱり反乱軍の艦なのね」

「いやいや、俺達は雇われてる訳じゃねえ。あくまで対等な関係で協力し合ってるのさ。まあ、てめえらには関係のない話だな。」

で、どうだ？ 貴族派か？ もしそうなら、ちやーんと港まで送り届けてやるよ」

ルイズはもう一度男を睨み付けると、凜とした態度のまま、その空賊を見据えた。

「誰が薄汚いアルビオンの反乱軍なものですか。寝言は寝てから言いなさい。私は誇り高きアルビオン王党派への使いよ。アルビオンは王国だし、正当なる政府はアルビオンの王宮ね。わたしはトリスティンを代表してそこへ向かう貴族なのだから、つまりは大使よ。だから、大使としての扱いをあんた達に要求するわ」

しばらく、沈黙が部屋を包み込んだ。

「……正直なのは確かに美德だが、お前ら、ただじゃ済まねえぞ」

「あんた達に嘘ついて頭を下げるくらいなら、死んだ方がマシよ！」

ルイズがそう言い切ると、空賊が呆れたように鼻を鳴らした。

すると、リウスが小さくくつくつと笑い始める。

「流石ね、ルイズ。それでこそ私の見込んだ、私のご主人サマだわ」

その言葉にきよんとんとしていた空賊はくるりと扉へ向き直った。

「・・・頭に報告してくる。せいぜい遺書でも書いておくんだな」

そう言つて男は去つていった。

つかつかと近寄つてきたワルドがルイズの肩に手を置いた。

「いいぞ、ルイズ。流石は僕の花嫁だ」

ルイズは先程の男が言った『遺書』という言葉に戸惑いながら、複雑そうな顔をして

ワルドを見る。

リウスはその様子を見つめながら口を開いた。

「ルイズの好きなようにやりなさいな。ルイズの判断なら、私は何も文句を言わないわ

よ」

程なくして、再度扉が開いた。先程の痩せぎすの男だった。

「頭がお呼びだ」

狭い通路や細い階段を抜けていくと、三人は立派な部屋へと到着した。

どうやらここが空賊船の船長室らしい。

がちやりと扉を開けると、豪華なダイナーテーブルに座った頭の男が大きな水晶の付いた杖を磨いている。

頭の周りでは、ガラの悪い空賊達がにやつきながら、部屋に入ってきたルイズ達を見つめていた。

頭の男はちらりと三人を見ると、磨いた杖を眺めながら口を開いた。

「トリステインの貴族は見栄ばかりだな。名乗ってみろ」

「大使としての扱いを要求するわ」

頭の言葉を何の躊躇もなく無視してみせるルイズ。

「たかが空賊如きがトリステイン王国の大使に口を利いて貰えるだけでも身に余る光栄だわ」

ルイズの更なる暴言にも、頭の男は何処吹く風といった具合に笑ってみせた。

「トリステイン貴族といつても、こりやあ極め付けだな。お前ら、王党派なんだって？」

「何度同じことを言わせるつもり？」

「何しに行くんだ？ あいつらは明日にでも殺されちまうんだぜ？」

「それがどうしたのよ。あんた達に言っても仕方ないでしょ」

周りにいる空賊たちの威圧感にも関わらず、ルイズは凜とした姿勢のまま挑発を続ける。

左右に控えていたワルドとリウスはその様子を黙って見守っていた。

頭はその三人の様子に意地悪そうな笑みを浮かべた。

「貴族派にいたらどうだ？　今のあそこなら、メイジとなりや高い金で雇ってくれるだろうよ」

「笑わせないでちょうだい。反乱軍の貴族ならいざ知らず、トリストイン貴族に王座泥棒の片棒を担げだなんて。まるで韻竜に残飯を薦めるような所業だわ」

次々に辛辣な言葉を投げかけるリイズ。

その度に、周りにいる空賊達の目が鋭くなつていくのをリウスは感じていた。

しかしリウスは何も言わず、静かな顔のままリイズと頭の男を見つめている。

「・・・貴族派にはつかねえつてのね？　これは冗談じゃねえんだぞ。よく考えてから、口を開け」

最後通告とばかりに、頭の男はドスの効いた声で告げる。

一瞬身を強張らせるが、リイズは胸を張って答えた。

「お断りよ。さあ、私たちを港まで連れて行きなさい」

険しい顔つきのまま、頭の男はぎいっと椅子に深く座り直すと、髭をいじりながら横に立つリウスを見る。

「ところで、お前は何だ？　姉じゃねえのか？　おめえの妹が、エライこと言ってるぜ

？」

リウスはルイズの頭をくしゃくしゃと撫でてから、一步前へと出る。

「私はこの子の使い魔です」

「・・・ああ？ 使い魔だと？」

「ええ。珍しいでしょうが、人間の使い魔です。なので、私はこの子を止めるつもりはありませんよ」

「はっ！ 人間の使い魔だあ？ そんなの聞いたことねえな」

「でしょうね。貴方にとつても、この部屋の方々にとつても、そうでしょう」

やけに丁寧なその言葉に頭の男は目を丸くしたが、その内に頭の男は大声で笑い始めた。

それと共に、周りの空賊までもが一斉に笑い始める。

「こんな愉快な冗談は聞いたこともないな！ まさかトリステインの貴族相手からこんな冗談を聞けるとは思ってもいなかったよ！」

そうして笑い続ける頭の男と空賊達。

ルイズは彼らの豹変ぶりに、きよとんとしたまま固まっている。

「やれやれ、参ったな。空賊稼業にも慣れてきていると思つたんだが・・・。ご婦人、僕らのどこにボロがあつたのかな？」

空賊の頭はその格好に似合わない、品の良い笑顔を浮かべていた。

その様子に、リウスもにこりと笑い返す。

「途中までは空賊だと思つてました。でもルイズの指輪には目もくれず、あんなに硫黄に目を輝かせて……。その上、航海に必要な穀物や酒、火薬が満載の船室に閉じ込めるだなんて凄いき空賊船もあつたものだ、つて思い直したんです」

そしてリウスは胸の内で、「ほぼ全員がメイジだなんて単なる空賊とは思えないもの」と続けていた。

しかも彼らは並大抵のメイジではなく、相当な実力と魔力を持ったメイジの集団だとも感じ取っていた。

そう、まるでトリステインのグリフォン隊のような、規律ある一個の軍隊でもあるかのように。

「なるほど。ならば我々が貴族派ではなく、王党派であることも見抜いていたようだ。ともあれ、途中までは空賊と騙せていて安心したよ。」

ああ、失礼した。まだ名乗っていなかったね」

その言葉に、周りに控えていた空賊達は笑みを押さえてから一斉に直立する。

頭の男が黒髪のカツラと眼帯を外し、付けヒゲをびりびりと剥がして、それを無造作にテーブルへ放り投げた。

すると百戦錬磨の頭の男は、あつという間に凜々しい金髪の青年へと姿を変えた。

「私はアルビオン王立空軍大將にして本国艦隊司令長官、同時に本艦イーグル号艦長：：といつても、今は飾り程度にしかならない肩書きかな。大使殿にはこちらの方が通りが良いだろう」

金髪の青年はテーブルの前で笑みを浮かべ、堂々と自身の名を告げた。

「アルビオン王国皇太子、ウエールズ・テューダーだ」

ルイズは小さい口をあぐりと開けた。

リウスは、まさか皇太子本人とは、とルイズ程ではないにしろ驚いた顔をしている。

ワルドは興味深そうにウエールズを見つめていた。

「アルビオン王国へようこそ。大使殿。さて、御用の向きをうかがおうか」

ウエールズはそう言いながらルイズ達に席を促したが、ルイズは未だに固まったままだった。

呆けたような顔でウエールズの顔を見ながら立ち尽くしている。

「その顔は、どうして空賊風情に身をやつしているのか？ といった顔だね。金持ちの反乱軍には続々と補給物資が送り込まれる。敵の補給路を断つのは戦の基本だが、敵だらけの空域で王軍の軍艦旗を掲げていたのでは、あつという間に反乱軍に囲まれてしまいうだろう？ まあ、空賊を装うのは苦渋の選択といったところだ。君の使い魔殿は気付

いていたようだがね」

ウエールズはゆっくり、丁寧に説明を続けていった。

しかしルイズは未だに固まったままである。

「我が国においても王党派など圧倒的な少数派だというのに、よもや国外に我々の味方がいるとは思わなかった。大使殿には誠に失礼なことをした。君達を試すようなことをして、申し訳ない」

ウエールズはにつこりと微笑んだが、まだルイズは信じられないといった顔のままだ。

目的の人物にこんな場所で出会ってしまうなどということに、心の準備が全く出来ていなかったのは仕方のない話である。

懸命に事態を理解しようとするルイズの様子に、ワールドが一步前に出て優雅に頭を下げた。

そして一方のリウスは、自身の警戒心を数段階引き上げながらその様子を眺めていた。

空賊の頭がアルビオンの皇太子だと名乗ったことについてではなく、むしろその緊張はワールドへと向けられている。

思わぬところで目的の人物に辿り着いたことによって、ワールドがどんな行動を起こす

のかが分からないからだった。

「アンリエッタ姫殿下より、密書を言付かって参りました」

「ほう、姫殿下から。君は？」

「トリステイン王国魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵と申します。そしてこちらが姫殿下より大使の大臣をおおせつかったラ・ヴァリエール嬢と、その使い魔のメイジにございます。殿下」

ウエールズは興味深げな笑みを湛えながら、緊張した様子のルイズとリウスを流し見
た。

「ヴァリエール家といえ、あの大貴族のか。そして……、そうか。使い魔でありながら、君はメイジなのだな。」

ワルド子爵といい、きみらのように立派な貴族が私の親衛隊にあと十人ばかりいれば、このような惨めな今日を迎えることもなかったろうに！　して、その密書とやらは
？」

その言葉にやっと我に返ったルイズはアンリエッタからの手紙を取り出した。

そして恭しくウエールズに近付いたが、はたと途中で立ち止まった。

「あ、あの……。失礼ですが、本当に皇太子殿下ですか？」

ウエールズは悪戯つぽく笑うと、満足げに頷いた。

「僕個人の扮装は君のお眼鏡にかなったようだね。少々遊びが過ぎたようだが、僕はウエールズだよ。その証拠をお見せするでしょう。ラ・ヴァリエール嬢、右手を出してごらん」

言われるままに、おずおずとルイズは右手を差し出した。

ウエールズは自身の右手に嵌る指輪を外すと、そつとルイズの手を持つて指輪同士を近付ける。

その瞬間、ウエールズの指輪を飾る宝石と、ルイズの『水のルビー』が共鳴を始めた。二つの宝石から放たれた二色の光は絡み合い、やがて美しい虹色の光を振りまいていく。

「この指輪は、我がアルビオン王家に伝わる『風のルビー』だ。君のそれはアンリエッタが持っていた『水のルビー』だね？」

柔らかな眼差しで水のルビーを見つめるウエールズに、ルイズはこくりと頷いた。

「水と風は、虹を作る。王家の、そして国家の間に架かる虹さ」

ウエールズはにこりと微笑んで言うと、疑った非礼を詫びるルイズを手で制した。

「いいんだ、ラ・ヴァリエール嬢。このような状況では仕方のないことだし、大使としては正しい対応だ。」

それに、我らにとっては君たちが最後の客人となるのだから、どうか気を使わずに楽

にしている欲しい。それが我らにとつての慰みにもなるのだよ」

ルイズは皇太子にそう言わしめてしまう現状を思い、悲しそうな顔をしながら一礼した。

そしてルイズはアンリエッタからの手紙をウエールズに渡す。

ウエールズはルイズから手紙を受け取ると、愛おしそうに花押に口づけをした。

そして折り目ひとつ付けられないよう丁寧に封を開き、便箋をゆっくりと取り出す。

ウエールズは真剣な眼で文字を追ひ、わずかに目を細めてから静かに呟いた。

「……結婚するのか。アンリエッタは……私の可愛らしい、従妹は……」

その口調にはどこか寂しげなものが感じられ、ルイズは何も言えずに頷いた。

そのまま最後の一行まで手紙を読み終えて、ウエールズは微笑んだ。

「委細了解した。姫は、とある手紙を返して欲しいとのことだ。何よりも大切なアンリエッタからの手紙だが、彼女の望みは私の望みだ。喜んでそうするとしよう」

ルイズはほっとしたような、どこか物悲しいような顔でもう一度頭を下げる。

「ただ、残念なことに姫の手紙はこの船に乗せてはいないんだ。空賊船などにあの可愛い姫の手紙を連れてくる訳にもいくまい。君達には面倒をかけるが、ニューカッスルまで同乗してくれたまえ。なに、戦いが始まるまでには君達を帰すことができるだろう」

第三十四話 ニューカッスル城

ルイズ達は一路ニューカッスルへと向かうことになった。

鋸の歯のような大陸の海岸線を沿い、なおかつ雲に隠れながらの航海だというのに、イーグル号は全く危なげなく宙を進んでいく。

やがて三時間ほど経つと、大陸から大きく突き出した岬が見えてくる。

その突端には高く立派な城がそびえ立っていた。

「あれが我がアルビオン王国最後の城砦、ニューカッスル城だ」

後甲板にいた一行にウエールズは説明をする。

しかし船は真つ直ぐニューカッスル城へは向かわずに、進路を下へと向け始めていた。

「なぜ、下に潜るのですか？」

「アレがいるからだ」

ルイズの言葉に、ウエールズが城の遙か上空を指差した。

岬の突端にあるニューカッスル城へ向かうかのように、上空から巨大な艦が降下してきている。

「かつての本国艦隊旗艦、『ロイヤル・ソヴリン』号だ。叛徒達のものとなった今では『レキシントン』号と名前を変えている。奴等は初めて我等から勝利をもぎ取った戦地の名前を付けているのさ。よほどの名誉と感じているようだ」

降下してきていたレキシントン号がゆっくり宙に止まると、城に向かって数十発もの砲撃を放った。

斉射の砲撃がルイズ達のいる甲板の空気を大きく震わせている。

「ああして、時々嫌がらせのように大砲を撃ってくる。今では子守唄程度にしかならないがね」

リウスは遠い雲の切れ目に佇む巨大戦艦を見つめた。その艦は、非常に巨大な艦しか形容できないほどの大きさである。

このイーグル号も戦闘用の艦であるようだが、船体の大きさや帆の高さは優に倍ほどもあり、砲門にいたっては倍どころではない数だ。

更には、艦上に数匹のドラゴンらしき影すら見える。

「備砲は両舷あわせて、百八門。おまけに竜騎兵まで積んでいる。あの艦の反乱から全てが始まった、因縁の船さ。もちろん、我等にはあのような化け物を相手できる訳がないのでね。雲中を通り、大陸の下からニューカッスルへと近づく。我等しか知らない、秘密の港というものがあるのだよ」

ウエールズの言葉通り、イーグル号は真っ白に塗りつぶされた雲の中をすすると進んでいく。

そのうちに大陸の下へ入ったのか、辺りは一転して真っ暗になり、ひんやりとした空気が一行を包み始めた。

しかしそういった中でもイーグル号は速度を落とさない。ウエールズや船員たちは全く心配をしていないような平然とした顔のままである。

しばらく航行していくと、頭上に黒々と穴の開いている場所へと辿り着いた。

ウエールズの指示に従い、ほのかな魔法の光のみを頼りにしながら、イーグル号はその穴へとゆっくり浮上していく。

その内、頭上に明かりが見え始めた。その光は徐々に強まっていき、最後には眩いばかりの光に包まれる。

そして一行が周りを見回すと、既に巨大な鍾乳洞に作られた秘密の港に到着していた。

イーグル号は大勢の人々が待ち構えている岸壁へと近付き、静かに停船した。

一斉にもやいの縄が飛び、乗組員たちがイーグル号へ縄を結わえつけていく。

艦は岸壁に引き寄せられ、車輪のついた木のタラップが艦にびつたりと取り付けられ

た。

「よし、荷を確認しろ。大使殿、ご案内しよう。付いてきてくれ」

ウエルルズに促されて、一行はタラップを降りていく。

ルイズとリウスは一面に広がる鍾乳洞の様子に目を丸くし、ワルドは鍾乳洞の美しい光景にほうつと溜め息を吐いた。

「これは、美しい」

「驚いたかい？ 子爵」

悪戯っぽく笑って振り返ったウエルルズに、ワルドは両手を広げてみせた。

「それはもう。ここまでの旅路もさることながら、ここまで美しい光景は様々な場所を旅した私にも滅多にお目にかかれませぬ」

リウスはワルドの言葉を慎重に聞きながら、自身の胸の内でも同じような印象を抱いていた。

見事な円錐形の鍾乳石が大小問わずに垂れ下がり、それを覆う発行性のコケが天井や壁を星のように瞬かせている。

ルイズもその幻想的な美しさに息を飲みながら、周囲をきよろきよろと見回していた。

「ほほう、これはまた大した戦果でございませぬ。殿下」

タラップを降りたウエールズに、背の高い年老いたメイジが近寄ってくる。

老メイジは『イーグル』号に続いて鍾乳洞に現れた『マリィ・ガラント』号を見て、痛快そうに顔をほころばせた。

「喜べ、パリィ」

ウエールズは腕を上げて、洞窟中に響くような透き通った声で兵士たちへ告げた。

「みんな！ 積み荷は硫黄だ！ 我々は硫黄を手に入れたぞ！」

その言葉に、主人の帰還を待っていた兵士たちが一斉に歓声を上げた。

「さあ、早く皆に見せてやろう。パリィ、皆への指示をよろしく頼む」

ウエールズの言葉が聞こえているのかどうなのか、わなわなと身を震わせた老メイジが目目を輝かせている。

「おお……！ 硫黄ですと！ 火の秘薬ではござらぬか！ いやはや……これぞまさしく天の配剤というもの……！ 最後の最後に、我々の名譽を守る機会を下さるとは！」

パリィは男泣きに泣き始める。

その老人は豪傑と言われるであろう体格の持ち主だったが、そんな人物が笑いながら豪快に泣いている様はなかなか圧巻である。

「先の陛下にお仕えして六十年……。これほどに嬉しい日はありませんぞ。彼奴らめが

反乱を起こしてからというもの、苦渋を舐めさせられてきましたが……！ 何、これほどの硫黄があれば！」

ウエールズは、ニヤリと一つ勇ましく微笑んで後を継いだ。

「そうとも。我らがアルビオン王家の誇りと名誉を、散華の瞬間まで叛徒共に示し続けることができるだろう！」

「おお、おお！ この老骨、武者震いがいたしますぞ！」

ウエールズ達は心底楽しそうに笑い合っている。

「して、殿下。御報告なのですが、叛徒共は明日の正午に攻撃を開始するとの旨、伝えて参りましたぞ」

「そうか、間一髪とは正にこの事だな！ 戦に間に合わぬは武人の恥だ。始祖ブリミルも、我らに誇りある最後を見せろと仰られているに違いない！」

怯えた様子一つなく、ウエールズとパリーは興奮した面持ちで喜び合っている。

周りに控える兵たちも同様に、清々しいと言える程の笑顔を湛えていた。

（最後つて……。それなのに何でこの人達、笑っていられるの？）

ルイズは目の前の光景が信じられなかった。

そのまま困惑した顔で、横に立つワルドを見る。

ワルドは喜び合う王党派の様子にも、いつものような微笑みを浮かべたままだ。

ルイズの視線に気付くと優しそうな眼差しでこちらを見つめ返す。

ルイズがそのままリウスを見ると、リウスも気付いたのか横目でルイズの顔をちらりと見た。

その顔には微笑みが浮かんでいたが、リウスはなんとなく少しだけ寂しそうにしながら彼らの様子を見つめている。

「さて、こちらはトリステインからの客人だ。重要な用件で我が国に参られた大使殿だよ。丁重にもてなして差し上げてくれ」

「これはこれは、大使殿。殿下の侍従を仰せつかつております、パリーでございます。遠路はるばる、ようこそアルピオン王国へいらつしやった。大したもてなしはできませんぬが、今夜はささやかな祝宴が催されます。是非ともご出席ください」

ルイズ達はウェールズに付き従い、城の天守の一角にある彼の居室を訪れていた。

ウェールズの居室には豪華さなど微塵もなく、一国の王子の部屋とは思えない、簡素な部屋だった。

あるのは木でできた粗末なベッドに、椅子とテーブルが一组。

そして壁には、戦の様子を描いたタペストリーが飾られているくらいだ。

リウスは部屋にいる全員の姿が見える位置に静かに立ち、ワルドの挙動に全神経を集中させていた。

ワルドが裏切り者であった場合、動くとしたらここしかない。

ワルドはルイズの左側に立ち、ルイズと共にウエールズを見つめたままだ。

こちらの動きに気付いた様子はない。

この状況ならワルドがどんな行動をしても、動きを妨害、または魔法の破壊を行なうことができる。

ウエールズは机の引き出しから宝石箱を取り出すと、中に入っていた一通の手紙を手にとった。

宝石箱の蓋の裏側にはアンリエッタの肖像画が描かれている。

王子はその手紙をしばらく名残惜しげに見つめ、愛おしそうに口づけをしてから、開いてゆっくりと手紙を読み始めた。

もう何度も読み返していたのだろう。既に手紙は端々がぼろぼろになっていた。

読み終わったウエールズはその手紙を丁寧にあたみ、封筒に入れてからルイズへと手渡した。

「これが姫からいただいた手紙だ。この通り、確かに返却した」

「ありがとうございます」

恭しく手紙を受け取るルイズ。

しかしウエルズは渡した手紙をじっと見つめ、しばらく黙った後、ルイズへ向けて口を開いた。

「すまない、ラ・ヴァリエール嬢。その手紙の処分は、私に任せてもらえないだろうか？ ルイズはハツとした顔をしてウエルズを見つめ返した。

そして、リウスはそつと腰の短剣に手を伸ばしておく。

(……で、どう動く……?)

しかしワルドは目を丸くしながら、固まったように動かないでいた。

「姫からの手紙に書かれていたよ。君へ手紙を渡した後、出来れば私の手で手紙を処分してくれと。姫がそう望むのなら、そうしようと思う。良いだろうか？」

ウエルズが淡々とルイズへ告げる。まだ、ワルドは動かない。

「……はい。構いません、殿下」

「ありがとう」

ウエルズはにこりと笑うと、ルイズが差し出した手紙を優しく受け取った。

そして自分の懐から、ルイズが持ってきたアンリエッタの密書を取り出す。

少しだけそれらの手紙を見つめ、愛おしそうに撫でてから、ウエルズはテーブルにあつた蝋燭立てを手に取った。

そのまま蠟燭に火をつけ、部屋の窓をきいっと開ける。

ぴくりとワルドが動いたが、別段何かをしようとしている訳ではない。

(私の勘違いだった・・・?)

リウスが内心不審に思っていると、ウエールズは手紙を見つめてからぼつりと呟いた。

「・・・強くなったのだな、アンリエッタ」

そして、ウエールズは蠟燭の火にそつと手紙を当てた。

緩やかに二つの手紙が火に包まれていく。

「ウインド」

火に包まれた手紙が優しい魔法の風に吹かれ、徐々に灰になっていく。

そして灰が舞っている魔法の風を、開け放した窓からゆつくりと外へ送り出している。

「・・・これでいい。君の人生に、私は不要だ」

窓の外の風に煽られて散り散りになっていく灰を、ウエールズはじつと見つめている。

リウスはほつと息を漏らして、ワルドを見つめたまま短剣から手を離した。

任務は、完了だ。

「我が儘を聞いてもらつて、すまなかつた。明日の朝、非戦闘員を乗せた『イーグル』号がここを出港する。それに乗つて、トリストインに帰りなさい」

そう言つて向き直つたウエールズを見て、ルイズは服の端を強く握りしめた。

そして、決心したように口を開いた。

「あの、殿下……。先ほどの港で、『誇りある最後』だと仰つていましたが、王軍に勝ち目は無いのですか？」

ルイズは躊躇うように問いかける。

リウスはルイズを止めようかとも思つたが、すぐに逡巡を止めると、黙つたまま成り行きを静かに見つめていた。

「方に一つもないだろう。我が軍は三百、敵軍は五万だ。勝ち目がないのなら、我々に出ることは勇敢な死にざまを連中に見せることだけだろうね」

王族の威厳に満ちた言葉に、ルイズは俯いた。

「殿下も、討ち死になさるおつもりですか？」

「当然だ。私は真つ先に死ぬつもりだよ」

ルイズはその言葉に黙つたまま、ウエールズの顔を見つめている。

それからしばらくして、もう一度深々と頭をたれた。

「殿下……。失礼をお許しくください。恐れながら、申し上げたいことがございます」

「言つてみなさい」

「先ほど処分なされた手紙の内容……あれは」

「ルイズ」

ワルドがルイズの肩を掴んでたしなめる。

しかし、ルイズはウエールズの顔を正面から見つめて、続けた。

「私は、幼少のみぎりより姫殿下のお傍に仕えさせて頂いておりました。この任務を仰せ付けられた際の姫さまのご様子は、とても大事な人を想うかのような……。それに、先ほどの手紙に対しての殿下の物憂げなお顔といい、もしや姫さまとウエールズ皇太子殿下は……」

ウエールズは優しい眼差しをルイズへと向ける。

「きみは、従妹のアンリエッタと、この私が恋仲であつたと言いたいのかな？」

「……とんだご無礼をお許しくださいませ。しかし、そうであるならば、あの手紙の内容は……」

ウエールズは穏やかな表情のまま、ルイズに優しく笑いかけた。

「そう、恋文だよ。きみが想像している通りのものさ。彼女は始祖ブリミルの名において、永遠の愛を私に誓ってしまったている。あれが白日の下に晒されれば、重婚の罪によりゲルマニアとの同盟は叶うまい。」

だからこそ、処分した。これで証拠は何も残っていない」
ルイズは潤んだ瞳で口元をキツと結んだ。

「でも姫さまは、殿下と恋仲であられるのでしょうか？」

「昔の話だ。もう私は、彼女との繋がりを持っていない」

ルイズは熱っぽい口調で、ウエールズへ食ってかかった。

「殿下、お願いでございます！ トリスティンへ、我が国へ亡命なされませ！」

しかし、ウエールズは寂しげな笑みを浮かべるだけだった。

「どうか、お願いでございます！ これはわたくしの願いではありません！ 姫さまの願いです！ わたくしは恐れ多くも、姫さまのご気性をよく存じております！ 王宮の中にあつて、あの方は純粋な方でございます。殿下の戦死を、ご自分が愛した方がただ死ぬのを黙って見捨てる訳がありません！ 姫さまは、たぶん手紙にも貴方に亡命をお勧めしているはずでございます！」

ウエールズは静かに首を横に振った。

「そのようなことは、一行も書かれていない」

「殿下！」

ルイズはウエールズに詰め寄った。しかしウエールズは堂々とした態度のままルイズを見つめている。

「私は王族だ。嘘などつかぬ。姫と、私の名誉に誓って言うが、ただの一行たりとも私に亡命を勧めるような言葉は書かれていなかった」

ウエールズの微笑みには少しばかり陰が差していた。

ルイズはその顔を見て、涙の浮かんだ顔のまま寂しそうに俯いた。

「きみは、正直な女の子だな。アンリエッタが君を大事な友人だと書いていた理由も分かる気がするよ」

ルイズが落ち込んだ顔でウエールズを見つめる。

「あの手紙に君のことが書かれていたのさ。しかし、忠告しよう。そのように正直では大使は務まらない。しっかりとしなさい」

ウエールズは優しい顔で微笑んだ。

「しかしながら、亡国への大使としては適任だろう。明日に滅ぶ国家は、誰よりも正直なものだからね。なぜなら、名誉以外に守るものが他にないのだから」

そしてウエールズは机の上に置かれている、水の張られた盆を見た。その盆の上には大小二つの針が載っている。どうやらこれが時計なのだろう。

「さて、そろそろパーティーの時間だ。君たちは、我らアルビオン王国が迎える最後の客人だ。是非とも出席してほしい」

ウエールズが居室の扉を開き一行を促すと、扉の外にいた衛兵が恭しく一行を部屋へ

案内する。

しかし、ワールドだけは何故か部屋に居残っているようだ。

リウスはその様子を気にしながら、案内する衛兵に従って、落ち込んだ様子のルイズと共にその場を離れるのだった。

第三十五話 Party Night

「諸君、よくぞ今の今までこの王に忠誠を尽くしてくれた。朕は心より忠勇なる臣下の諸君に感謝する」

パーティーが行なわれていた大ホールに、現アルビオン国王、ジェームズ一世の声が響いた。

おそらく彼らにとつて最後の晩餐になるにも関わらず、会場は異様ともいえる熱気と歓声に包まれていた。

王党派の貴族たちや兵たちは平和だった頃のように精一杯華やかに着飾っており、テーブルにはこの日のためにとつていたのだろう、様々なご馳走が所狭しと並んでいる。

年老いたジェームズ一世の隣には、ウエールズが寄り添うようにして弱々しい父王の体を支えている。

ジェームズ一世がこほんと咳をすると、集まった人々は一斉に直立して、続く王の言葉を待った。

「いよいよ明日、このニューカッスル城へ反乱軍『レコン・キスタ』が総攻撃を行なう。この無能なる王に、諸君らはよく従い、よく戦ってくれた。しかしながら、明日の戦いは戦いではなく、おそらく一方的な虐殺となるであろう。朕は、まこと忠勇なる諸君らが傷つき、斃れるのを見るに忍びない」

老いた国王は目を伏せると、再び言葉を続けた。

「したがって、朕は諸君らに暇を与えることにする。長年、よくぞこの王に付き従ってくれた。明日の朝、巡洋艦『イーグル』号が女子供を乗せてここより離脱する。諸君らもこの船に乗り、この忌まわしき大陸を離れるがよい」

しかし、しばらく待っても誰も返事をしない。

その内に、一人の貴族が大きな声で老王に告げた。

「陛下！ 我らはただ一つの命令を待ちしております！ 『全軍前へ！全軍前へ！全軍前へ！』 今宵のうまい酒のおかげで、我らはいささか耳が遠くなっております！ はて、それ以外の命令が、耳に届きませぬ！」

その勇ましい言葉に、ホールにいる貴族や兵たちが大きく頷いた。

「いやはや、陛下はご冗談がお好きなようで！ 陛下の豪胆なる心持ちには恐れ入るばかり！」

「耄碌するにはまだ早いですぞ！ 陛下！」

ジエームズ一世は豪快に笑う。臣下たちの姿を見て、目頭を軽くぬぐった。

「ばかものどもめ、と小さく呟き、老いた手で力強く杖を握りしめる。

「よかろう！ しからば、この王に続くがよい！ 諸君！ 今宵はめでたき日である！ 天に重なりし月は始祖からの祝福に相違ない！ よく飲み、食べ、踊り、楽しもうではないか！」

会場は更なる喧騒に包まれた。

こんな時にトリストインから来た客人が珍しいらしく、王党派の貴族たちは次から次にルイズ達三人の元へとやってきては、酒を料理をと勧めてくる。

まだ宴が始まったばかりだというのに、貴族達は大いに酒が回っているかのごとく陽気で朗らかに振る舞っている。

その顔には、明日死に赴く悲壮さなど微塵も感じることができなかった。

そして、彼らの誰もが最後に「アルピオン万歳！」と叫んで去っていく。

一方のリウスはこの宴を素直に楽しめる訳がなかったが、宴の雰囲気壊さぬように貴族たちの話に付き合い、会話に花を咲かせていた。

ワルドとはいえ社交辞令を巧みに用いながら、非の打ち所のないパーティー向きの態度で貴族達と語らっている。

しかしルイズは明るすぎて物悲しいこの宴に耐え切れなくなってしまうのか、静か

に俯いたままホールの外へと出て行ってしまった。

ルイズを視線で追いかけていたリウスは後を追おうとしたが、ワルドがそつとその肩に手を置いた。

「僕が行こう」

リウスが少し考えてから小さく頷くと、ワルドはルイズの後を追ってホールの出口へ向かっていく。

ワルドをまだ信頼している訳ではないが、もう任務は完了したのだ。必要以上に警戒をし続ける意味はないだろう。

そしてリウスは、笑顔で訪れてくる貴族たちに微笑みを返しながら会話を交わしていった。

そうしてしばらく経ってから、リウスは会場の隅にあるテーブルで会場内の様子を眺めていた。

誰もかれもが、みな笑顔を浮かべて宴を楽しんでいる。

決定的な負け戦を前にして、逃げることもなく残った兵士たち。

それも、強制的にはない。

先ほど、アルビオン王のジエームズ一世はここに残った面々に避難することを勧めた。
いた。

彼らは自分の意志でここに残っている。

自分の意志で、死ぬことを決意している。

「やあ、楽しんでるかな？」

リウスがふと気付くと、横にウエールズがいた。

リウスは差し出された杯を受け取り、その芳醇な香りのする酒を軽く舐める。

ウエールズは満足したように頷いていた。

「君と話してみたかった。君も、アンリエッタの友人のようだからね」

リウスはウエールズの顔を驚いたように見る。

ウエールズはその表情を見て、笑いながら言葉を添えた。

「ラ・ヴァリエール嬢のことと同様に、手紙に書いてあったのさ。信頼のおける友人だとね」

「そうでしたか、姫様が・・・」

リウスはあのトリスティン王女、アンリエッタのことを思い出していた。

あの美しい王女。

年相応の弱さや迷いを湛えながらも、王族というしがらみの中で生き続ける少女を。

「君はトリステイン貴族なのかい？」

少し酔いが回っているのか、そう言うウエールズの頬はほんのりと赤い。

リウスはウエールズの屈託の無い笑顔を受け、どう答えるべきか考えてから、にこりと笑って答えた。

「いえ、私は貴族ではありません。トリステイン出身でもありませんよ」

「ほう、そうなのか。どこ出身だね？」

「・・・シユバルツバルド共和国、といってもご存じないでしょう。東方の国です」

リウスの言葉に、びくりとウエールズが緊張を走らせる。

「・・・東方？　まさかとは思いますが、レコン・キスタと関わりがあるのか・・・？」

そう言ってみたものの、すぐさまかぶりを振ったウエールズは豪快に笑った。

「まあ、そんな訳はないな。わざわざ自分で怪しまれるような真似をする者などいないだろう。そもそも、既にこの戦の勝敗は決している」

白い歯を見せながら笑うウエールズに対して、リウスは他の貴族たちと話していた時とは違い、少しだけ寂しそうな笑顔を見せた。

「だが、納得は出来たよ。君は相当な場数を踏んでいるのだろう？　一人の人間に気圧されたことなど、父上やパリー以外には記憶にないのだからね」

「というのは、空賊船の時ですか？　あの時はまさか、空賊の頭が一国の皇太子とは思っ

「ていませんでしたから」

「そう、あの空賊の頭を演じていた時だ。君は若いのに、大したものだ。アンリエッタも随分と信頼を置いているようだった。まるで姉のようだ、とまで書いていたよ」

「そんな、買ひ被りですよ。殿下」

リウスは少し恥ずかしそうに笑いながら短くそう答えると、笑顔を少し緩めてウエルズを正面から見つめた。

「殿下は、亡命をなさらないのですね」

ウエルズはにこりと笑うと、堂々とした態度で告げる。

「言つた通りだ。僕は明日真つ先に死ぬ。彼ら臣下の前で、そしてレコン・キスタに向けて、僕は最後まで戦つて王家の誇りを示さねばならぬ。奴らの目的が現実のものとなつてしまわないようにだ」

「そうなのですか、と小さく呟いてから、リウスはもう一度会場にいる他の貴族たちを見た。」

彼らの顔は明るく、明日に死が待っていることなど忘れていくかのようだ。

「そして姫様のために、ですね」

ウエルズが笑顔に少しばかりの陰を落とす。

「理由は一つではないよ。奴等、レコン・キスタは聖地奪還という馬鹿げた理想のため

に、血を流す民や荒れる国土のことを考えもしない。そんな外道たちのために、我ら王家が引く訳にはいかないのだ。

「……しかし、今さら隠すこともないな」

ほんのり赤くした頬のまま、ウエールズは自嘲するかのように小さく笑っている。

「そう。最大の理由は君の言う通りだ。奴らがアンリエッタの国に攻め込むなど、僕は許さない。しかし、僕には力が無い。我らの意志を誰か一人でも受け継いでくれる可能性があるのであれば、どうしてそれに賭けずにいられようか」

ウエールズの堂々とした様子に、リウスはそつと微笑んでから、短く呟いた。

「……随分と、勝手ですね」

「……なに？」

ウエールズがぴくりと真面目な顔を向ける。

リウスは、会場で笑い合っている兵士たちを見つめていた。

「皆、勝手です。勝手に未来が良くなるようにと願って、いなくなる。」

「それで、残された者にどうしろと言うんです？」

「……」

ウエールズは黙ったまま、リウスの言葉に耳を傾けている。

リウスは思い悩むように顔を歪めると、俯きがちになりながらも続けた。

「出過ぎた言葉を謝罪します。でも、私には分からない。愛する者の幸せを願う気持ちは分かっているつもりです。何を引き換えにしても、愛する者に生きていて欲しい気持ちも分かっています。」

でも、だったら、どうすればいいのか……。私は貴方に、どうすれば……
掻き消えた眩きの後、しばらく二人の間に沈黙が降りる。

周りの喧騒が、少し遠くから聞こえてきているようにも思えた。

「君は……。何故、そう思う」

リウスはウェールズの顔を正面から見据えて、小さく笑った。

「私は、『残された者』なのです。殿下」

そうか、と小さく声を出したウェールズは杯に入った琥珀色の液体に目を落としていく。

リウスは逡巡した様子のまま、ゆっくりと口を開いた。

「殿下。亡命は、しないのですか?」

そのリウスの請うような眼差しに、今度はウェールズが顔を背けながら答えた。

「……ああ」

リウスは悲しそうに目線を逸らすと、キツと口元を強く結んで声を出した。

「貴方だって、レコン・キスタの目的はご存じでしょう? きつと、殿下の生き死にに関

わらず、アルビオンの次はトリステインです。

もし貴方達が生きていければ、反乱軍も内部分裂するかもしれない。もし確固たる王族がトリステインに亡命すれば、トリステインは他の国と同盟を組む正当性を望めるでしょう。そうした方が、トリステインを守れるのではありませんか？」

ウエールズはリウスの言葉を飲みこみながら、静かに苦笑する。

「君にだつて分かっているのではないか？ 『もし』は無いんだ」

苦笑したウエールズは、そんなことは有り得ない、とばかりに諦観のこもった表情をしていた。

その表情に、リウスは杯を両手で持ち直して目線を落とす。

「……すみません、言つてはならないことを言いました」

「いや、いいよ。……リウスくんだったか。君は、優しいのだな」

今度はリウスが苦笑しながら、ウエールズを見る。

ウエールズは優しそうな、穏やかな顔のままリウスを見つめていた。

「……我が儘なだけです。殿下。本当に、亡命はしないのですか？」

「ああ。僕は戦う方に賭ける。万が一にも、僕の行動で彼女を害することがあつてはならないんだ」

「そう、ですか……」

アンリエッタとはまだ出会って間もない。

ルイズへの態度に腹を立てたことも、つい先日のことだ。

それにも関わらず、何故ここまでアンリエッタを気にかけているのか、リウスは自分でもよく分かっていなかった。

「・・・そんな顔をしないでくれ」

ウエルルズは苦痛に顔を歪めているような表情を浮かべていた。

ウエルルズだって辛いはずはない。しかし、この会場にいる皆を率いる立場なのだから、気を張っていただけだ。

そう思い、リウスは微笑みを浮かべるとウエルルズへ向き直った。

「なら、姫様に何かお伝えする言葉はありませんか？」

リウスの微笑みに、ウエルルズもにこりと笑い返した。

「そうだな」

しばらく顎に手を当てて、ウエルルズは考え込む。

「こう伝えてくれ。ウエルルズは、勇敢に戦い、そして・・・」

不自然に言葉が途切れる。

ウエルルズは首を横に振ると、もう一度口を開いた。

「いや、違う。違うんだ。僕にだって分かっている。彼女がそんな言葉を望んでいない

ことなど」

ウエルズはリウスを正面から見る。その顔は、悲壮な決意を湛えていた。

「・・・彼女に、愛していたと伝えてくれ。そして、僕を忘れてくれ、幸せになることを願っている、と」

リウスが小さく頷くと、ウエルズは顔に微笑みを戻した。

そしてその場を離れようとしたウエルズに、リウスははつきりと声をかけた。

「殿下。貴方の決意を侮辱する真似をお許しください」

「何かな？」

逡巡することもなく、リウスはウエルズの目を見つめ返した。

「・・・残された者は、大切だった時をいつまでも忘れることはありません」

ウエルズは穏やかな笑顔を浮かべながら、小さく頷いた。

「どうか、もう一度だけ考えてください」

「・・・ありがとう。最後に出会えたのが君達で、私は幸運だ」

リウスはパーティー会場を出て、蝋燭の燭台を手に薄暗い廊下を歩いていた。

思いのほか酔いも回ってしまっているようである。

ワルドは戻ってきていたが、出ていったルイズはまだ戻ってきていない。

そのためルイズの場所をワルドに聞いてから、酔い覚ましも兼ねて彼女を探しに来たのだった。

遠くからパーティーの喧騒がわずかに聞こえてくる。

城中の人間が大ホールに集まっている今、城内はまるでホールとは別世界のように、ひっそりと静まり返っていた。

廊下の途中の窓が開いていて、月明かりが差し込んでいた。

そこには、月を眺めて、ひとり涙ぐんでいるルイズがいた。

ルイズはゆっくりと近付いていく。

その足音に気付いたのか、ルイズがついとリウスを見た。涙をごしごしと拭うが、またルイズは今にも泣きだしそうになりながら、近付いてきたリウスの身体にもたれかかった。

「嫌よ……こんなの……」

ルイズが弱々しく呟いて、リウスの胸に顔を押し当てている。

リウスは手に持った燭台を窓に添えつけられたテーブルに置くと、ルイズの頭を優しく撫でた。

「どうして……？ あの人達……どうして、死を選ぶの？ わけわかんない。姫さま

は絶対に逃げて欲しいに決まってるのに……、ウエールズ様も分かつてるはずなのに……」

リウスはルイズを胸に抱いたまま静かに呟いた。

「仕方がないのよ……」

「……仕方がないなんて、そんなことないわ。だって、まだ生きてるのよ……？ 愛する人より大事なものが、この世にあるっていうの……？」

ルイズはぐしぐしと泣き声を出しながら訴えかけている。

リウスは何も言えないまま、優しくルイズの頭を撫で続けていた。

少しして、ルイズはすつとリウスから離れると、リウスの脇を通って大ホールへ向かうとする。

「どこ行くの？」

「わたし、説得する。もう一度、説得してみせる」

「無理よ、ルイズ」

ルイズがリウスへ振り返る。

「……無理だったわ」

ルイズは呆けたようにリウスを見つめている。

リウスはその顔を見ることが出来ずに、窓から外へ目をやった。

「殿下は王族としての責任を果たそうとしている。でも、それだけじゃない。姫様のことを考えての、決断よ」

「どうして……」

「殿下がトリステインに亡命すれば、レコン・キスタは間違いなくトリステインに戦争を仕掛ける。それにね。始祖ブリミルに誓った永遠の愛は、今でも姫様と殿下の中に根付いているわ。でも二人が一緒になると、ゲルマニアとの同盟は潰えてしまう。姫様を救う為には、姫様とゲルマニア皇帝が結婚する以外にはない……」

未練の種になる自分が討ち死にしてみせることで、殿下は姫様の中から未練を取り払おうとしているのよ」

ルイズは俯きながら、ぼろぼろと涙を流していた。

「……もう嫌。早く帰りたい。トリステインに帰りたいわ。この国、きらい。みんな、自分のことしか考えてない。ウエルズ様もそうよ。いなくなることで未練が無くなるなんて、そんなことない。残される人のことなんて、どうでもいいんだわ」

リウスは否定も肯定もせずに、黙ってルイズの言葉を聞いていた。

自分にだって、ウエルズ殿下が亡命するべきかそうでないのか、どちらが正しいのかなんて分からないのだから。

「そうね……。早く帰ろう、ルイズ。明日は早いわ」

リウスはそう言つてルイズの手をそつと持ったが、ルイズは俯いたままじつと黙りこくつている。

「わたし・・・、一緒に帰れない」

しばらく静寂が二人を包む。

リウスには今の言葉がどういう意味なのか、いまち掴みかねていた。

「ワルドに、結婚を申し込まれたの。明日、結婚式を挙げたいつて」

「・・・明日?」

あまりにも唐突な話に、リウスは眉をひそめた。

「ルイズは、どうするの?」

「わたしは・・・。結婚しようつて、思つてる」

すると、薄暗い廊下の奥から静かな足音が聞こえてきた。

廊下の奥を見ても蠟燭の明かりは見えない。

ルイズとリウスは近付いてくる足音のする方を見つめていた。

「すまない、ミス・リウス。君にも伝えようと思つていたんだが」

現れたのは、ワルドだった。

「明日、僕とルイズはここで結婚式を挙げるんだ」

リウスはワルドを強く睨み付けながら、まるで守るかのようにルイズの前に立った。

ルイズは不思議そうな顔でリウスの背を見つめている。

「盗み聞きとは、良いご趣味ですね」

リウスの辛辣な言葉にも、ワルドは肩をすくめるばかりである。

「いや、君達が心配になってね。見た通り、今来たところだよ。それに先ほどルイズに結婚の申し込みをしたことについて、君にも伝えておかなくてはと思ったんだ」

「今は、結婚式どころではないでしょう」

「僕はウェールズ皇太子に心酔したんだ。婚姻の晩酌を勇敢なウェールズ皇太子に頼めるなら、これほど光栄なことはない。皇太子も快く引き受けてくれたよ。決戦の前に、僕たちは式を挙げる」

リウスはワルドの飄々とした態度に顔を歪ませた。

「ルイズ。何故、明日結婚するの？」

リウスはワルドを見つめたままでルイズに問いかけた。

ルイズはその冷たい声に驚いた顔をしたまま、おろおろと逡巡した。

「な、何でって……」

ルイズは心の内ですぐに答えを出していた。

ワルドは憧れの人。自分はワルドを好きはずだ。確かにそういつた想いはある。

しかしそれ以上に、ルイズはリウスが『先生』や『カトリーヌ』の元に帰るきつかけ

を作りたかった。

リウスの心残りである、自分への心配を無くしたかったのだ。

でも、それをリウスには伝えられなかった。

伝えればリウスはきつと、この世界に残ると言うのだから。

「わ、私はワルドが、好きなのよ。だからリウスは心配しないで。大丈夫よ、ワルドと一緒にだって、立派なメイジになれるように頑張るから」

リウスは振り向きもせず、じつとルイズの言葉を聞いている。

ルイズからはリウスが今どんな顔をしているのか、窺い知ることは出来なかった。

「聞いての通りだ。いや、僕は本当に嬉しいんだ。今すぐ踊り出したいくらいに喜びでいっぱいさ。本当なら、君にも明日の結婚式には出席してもらいたいのだが・・・」

本当に申し訳ない、グリフォンに三人も乗るのは難しいんだ。だから、君は明日の船で一足先に帰りたいまえ」

別の目的・・・。

かつて考えていた言葉を思い出し、リウスはぎろりとワルドを睨み付けた。

今までの行動。

その中で、常にワルドはルイズの近くにいた。

まるで、ルイズに自分の活躍を見せつけるかのように。

そういうことか、とリウスは拳を強く握り込んだ。

「貴方の目的が何なのかは分かりませんが、トリストインに戻ってから結婚式をすればいいでしょう」

ワルドは馬鹿にしたように鼻を鳴らすと、やれやれとばかりに肩をすくめた。

「君はさっきの話を聞いていたのか？ それに目的というのが何のことなのか分からない。僕とルイズが結婚するのが、そんなに不満なのかい？」

リウスはワルドへの敵意をむき出しにしつつ、吐き捨てるように告げた。

「ええ。不満ですな」

ワルドはわざとらしく驚いた顔をしてから、小さく笑い始めた。

「ああ、すまない。驚いてしまったよ。これはルイズと僕の結婚なんだ。ただの使い魔である君が何を言っているのやら、と思ってしまうてね」

ワルドはそう言うと、小さく声を落として笑い続けている。

一見正論のようなその言葉に、リウスは頭に血が昇っていくのを感じていた。

「・・・私は、貴方が裏切り者だと考えていました。つまり『レコン・キスタ』の一員だと」

リウスは心を決めてそう言い放った。

考え過ぎなのであればそれでいい。しかし、もうこれ以上看過する訳にはいかなかった。

リウスの言葉に、ワルドはぴたりと笑うのを止めた。

ルイズは絶句したようにリウスの背を見つめている。

「姫様の手紙は処分されました。もう任務は達成されています。だから貴方が裏切り者ではないと思いましたが……もしルイズが目的である場合、話は別です」

リウスは淡々と言葉を発していく。

「結婚は、この任務が終わってからすればいい。ウェールズ様も、貴方も、ルイズも、私に失望してくれて一向に構わない。ここで結婚式をさせる訳にはいかない」

「……君は、僕をどこまで侮辱するつもりだ？」

ワルドはわなわなと震えながら、リウスを睨み付けている。

そのまま杖を引き抜こうとする様子に、ルイズがばつとリウスの前に立ちはだかった。

「もう、やめて。リウス」

「そこをどきなさい、ルイズ」

敵を見るかのようにワルドを見据えて、ルイズに顔を向けないまま短く告げるリウ

ス。

その劍幕にルイズはごくりと唾を飲みこんだ。

「あなたがこの結婚に反対なのは知ってるわ。でも、今のは言い過ぎよ。そんなはずないじゃない。だって、ワルドなのよ？」

「二日かかるラ・ロシエールまでの道を無理やり走った結果、あの襲撃があつた。そうして着いたラ・ロシエールでは、スヴェルの夜で出発する船が無かつた。

ルイズ、思い出して。あのきつかけは、全てワルドさんが主導したことだつた。そもそもこの旅は何者かに監視されている。そうでなければあんなに都合よく、あの規模で宿の襲撃が起きる訳がない」

静かな口調で自身の考えを告げていくリウスに、ルイズは頭が混乱していくのを感じていた。

確かに、筋は通っている。でも、だからって……。

「貴様……！」

「私の望みは、全員でトリスティンへ戻ること。結婚式はその後にすればいい。その後なら、私を打ち首にしても構わない。私以外の誰かがルイズを守るのなら、それで」
ぱんつ、と頬を叩く音が辺りに響いた。

リウスは何が起きたのか分からずに、叩かれた頬に手を添える。

リウスの頬を叩いた手を震わせながら、ルイズは悲しさと悔しきでぼろぼろと泣いていた。

「……いい加減にして！ そんなの私は望んでない！ あなたの先生も、カトリーヌも、エミールだって！ リウスが死ぬことを望んでたはずがない!!」

息を切らせながらリウスの表情を見たルイズは、ハツとした。

リウスはルイズへ向けて呆然とした表情を浮かべている。

「なんで、あの子の名前を……」

「そこまでだ」

無然としたままのワルドがルイズの肩を抱き、ルイズをリウスの傍から引き離れた。

「先ほどの非礼は許そう。これ以上、ルイズを苦しめるな。今夜はルイズを僕の部屋に泊める。君が何をするか分からないからな」

そう吐き捨てたワルドはそのままルイズと共にこの場を離れようとするが、ルイズはワルドの手を振りほどいてリウスに向き直った。

「リウス」

混乱した表情のまま、リウスはルイズを見る。

「お願い、リウスは先に帰って。エミールのごとは、戻ったら全部話すから」

そう言うと、ルイズはワルドに連れられて薄暗い廊下の奥に向かっていく。

肩を強張らせながら、ルイズが暗闇に紛れて見えなくなっていく。

リウスはその背を呼び止めようとして少し手を伸ばしたまま、どうすればいいのかも分からず、その場にただ立ち尽くしているのだった。

第三十六話 迷いある決断

翌朝……。

リウスはひとり自室のソファに座ったまま、じつと考え込んでいた。

既に、夜も明けてしまっている。

ずっと起きているのに眠くもないので、リウスは窓から差し込む日の光をしばらく見つめてから、またソファの背もたれに身を預けた。

「なあ、相棒。どうしたんだよ。いつも話しかけてくれるじゃねーか。無視しないでくれよ」

任務は終わったが、ワルドは怪しい。あまりにも怪しすぎる。

だからこそ、この場での結婚式は止めるべきだ。そうは思いながらも、リウスはその一歩が踏み出せないでいた。

当のルイズが……、結婚を望んでいるのだから。

「貴族の嬢ちゃんも帰ってきてないんだろ？ 探しに行かなくてもいいのかってば」

ルイズは結婚を望み、私に死なないでくれと言う。

ニューカッスルから離れる避難船もあと二、三時間したら出発してしまうだろう。

ワルドはグリフオンの定員が二人だと言っていたため、『もしトリスティンに戻るのだとすれば』ワルドはルイズと共にグリフオンに乗って戻るつもりだ。

つまり私がトリスティンに戻るのであれば、必ず避難船に乗っていなければならぬ。

「さつき、この兵隊も言つてたじゃねーか。イーグル号とかマリーガラント号つてので帰るんだろ？ もう準備しなくっちゃよ、相棒」

いつそのこと、無理やりルイズを連れ去つて避難船に乗り込んでしまつてもいいかもしれない。それもアリではある。

どちらにしてもルイズにはもう一度真意を聞いてみても遅くはないだろう。

そろそろ、あの子も起き始めている時間だ。

「ひでえよ相棒。俺つちにだつて人権はあらあな。でも許す。おめえは相棒だかんね。この鬱憤は歌でも歌つてごまかすことにするよ。もちろん大声でね」

私が死ぬことを望んでたはずがない、とルイズは泣いていた。

昨日のパーティーであの子がショックを受けていたことを、私も行なつていたということだ。

残された者の気持ちは十二分に分かっていたはずなのに、私はルイズが無事であるこ

とだけを考えて、あんなことを……。

「ファーストキスからく はくじまるく ふくたりの恋のヒューストリく この運命にく
魔法かけたく♪」

「……うっさいわね」

「おおおっ！ 相棒っ！ やっとお目覚めかっつてばよ、このやろうー！」

デルフリンガーがやけに嬉しそうな声を出している。

リウスは面倒くさそうに頭をがりがり搔きながら、妙なテンションになっているデルフリンガーをじろりと見た。

「いきなり何なの、今の歌」

「いきなりたあ何でえ。ずっと声掛けてたつてのに聞こえてないみたいによ」

「聞こえてたわよ。考え事してただけ」

「そりやますますひでえ。でも許す。おめえは相棒だかんね」

「……それはさつきも聞いたわ」

溜め息を吐きながら、リウスは少ない荷物をまとめ始めた。

デルフリンガーを背負ってから二本の短剣を腰に差し、懐に数少ない魔法石の入った小袋を収める。

「用意し始めたなら仕事が早いな！ 相棒！ 相棒っつてばー！」

「何なのよ、さっきから」

「相棒よ。無視され続けた者の恨み、思い知れ」

リウスは、最後にもう一度自分の武器をちやんとチェックし始める。

唐突なワルドの行動は、視点を変えれば焦りとも受け取れた。

もし私の考えているような裏切り者であるなら、ワルドが行動する最後のチャンスなのだろう。

裏切り者でないことも願っていたが、甘い考えはもう捨てた方がいい。

扉へと向かうリウスに、背に抱えたデルフリンガーが鼻歌を歌い始めている。

その能天気な様子に、リウスはほんの少しだけ苦笑した。

「アイセイイエス　ずつとく　きみのそばにいろくよく♪」

「うっさいって言ってるでしょ、デルフ」

少しばかり気持ち在和らいだことに気付いたリウスは、心の内でデルフリンガーへ感謝を述べながら、誰もいない部屋を後にしていった。

リウスがワルドの部屋に向かっていると、向こうからワルドとルイズ、そして城の侍従らしき女性が歩いてきていた。

ワールドが敵意をむき出しにしながらこちらを睨み付けているが、リウスは何食わぬ顔でただルイズの方を見つめている。

「リウス。もう行くのね」

ルイズは何を思っているのかもじもじとした様子だったが、リウスはその様子にこやかな笑顔を浮かべた。

「ルイズはどこ行くの？」

「あの、結婚式の準備で、礼拝堂の横にある部屋に」

リウスはちらとワールドを見る。

その視線に気付いて、ルイズがワールドへと振り向いた。

「ワールド。先に行つてて」

「だが……」

「ワールド、お願い」

ルイズは静かに、そして力強く告げた。

ワールドはその言葉に目を細めたまま静かに頷く。

「……ああ、分かった」

そしてリウスの横を通り抜けようとして、そのままワールドはぴたりと立ち止まった。

「連れ去ろうなどと、考えるな」

そう言い残して、ワルドは城の侍女と共に礼拝堂へ向けて去っていった。

しばらく二人の間に沈黙が降りる。

その空気に流石のデルフリンガーも黙ったままだった。

「……連れ去るの?」

「さあ、どうしようかな」

こともなげにリウスは告げた。

ルイズはその言葉に小さく俯きながら口を噤んでいる。

「ルイズ、考えを変える気はない?」

しばらくもじもじとしてから、ルイズは俯きがちに口を開いた。

「……うん。結婚するわ」

そっか、と小さく呟くりウス。

それを見て、ルイズは何か言いたげになりながらもごもごも口を動かしていた。

「……私はきつと、あなたとエミールを重ねていたのね」

はつとした顔のルイズへ、リウスは静かに笑いかけていた。

「ワルドは怪しい、それは間違いない。でも怪しいだけで証拠はない。ワルドの目的だつてはつきりとは分からない。

……ルイズを連れ去ろうと思えば出来るけど、ルイズはそれをして欲しい?」

ルイズはぐつと押し黙った。そして、小さく首を横に振る。

「それなら、私は何も出来ないわ。ただ、ギリギリまで待つてる。一緒に行ってもいいかな」

ルイズは何も言わずにこくりと頷くと、二人して礼拝堂へと歩き始める。

ルイズは何か言おうとしては俯き、また何か言おうとして口をぱくぱくさせている。それを見たリウスはいつものように笑顔を浮かべた。

「あの、リウス、あのね。エミールのことなんだけど、その、夢で・・・」

「言わなくてもいいわよ。戻ってきたらじっくり聞かせてもらおうから」

意地悪そうな顔でにやりと笑うリウスに、ルイズはまた俯いてしまった。

「・・・ごめんなさい。叩いたりして」

「・・・ああ。あのこと？ 別に気にしてないわ」

リウスはそのまま正面を向いて歩き続ける。

「私も謝らなくちゃいけないわね。ニューカッスルの人達と、同じことをルイズに言うてたんだから」

ルイズは俯きながらもリウスの話に耳を傾けている。

「私は、自分に何が起ころうともルイズを守る。悪いけど、それは譲れない」

しかしリウスは静かに、はつきりとそう告げた。

「私はあなたが幸せになればそれでいい。でも、私はもう消える理由にあなたを使うなんてことをするつもりはない。死ぬつもりなんて毛頭ないわ。」

・・・それに元々、戦いは嫌いなもの。誰かを傷つけるのも、傷つけられるのも。死ぬのも、殺すのも」

ルイズはそつとリウスの顔を見る。

リウスは何か遠くを見るような目をしていた。

「リウスも、怖いことがあるの?」

くつくと笑ってからリウスはルイズを見た。

「そりゃあ、あるわよ。ここに来るまでだつてずっと怖かったわ。戦うのは慣れてるけど、怖いのは変わらないんだから。」

でも、いくら怖くたったって縮こまってたんじゃあ何も出来ない。誰かを救うどころか、自分すら守れない。だから怖くっても、それは他の場所に置いておくだけよ」

ルイズがリウスの顔を見上げた。

「他の場所・・・?」

「そう、他の場所。何をするにしても、私の目的は変わらない。その目的を思い続けながら必要なことをするの。」

そうしてるとね、いくら体が痛くても動くことはできるわ。逆に痛みを気にしてる余

裕なんてない。後から思い返してみると、何で動くことが出来たんだろう、って思うくらい」

ルイズは呆気にとられてリウスを見つめていた。

「これはね、先生とカトリーヌに教わったことよ」

悪戯そうな顔でリウスは口到人差し指を当てた。

「ルイズがどこまで知ってるかは分からないけど、二人とも私の恩人よ。エミールのことも知ってるってことは、私の身の上話も知ってるのかしらね」

リウスはいたって平然と話を進めている。

気まずそうな顔のまま、ルイズはこくりと頷いた。

「そうなのね。まあ、だからって訳じゃないけど、ウェールズ殿下やこの城の人達のこと、少しだけ理解できる。残された人が幸せになるようにって考えないと、私たちはあつという間に恐怖に塗りつぶされてしまう。そして愛している人と一緒にいたいと願ってしまう。」

・・・確かに、それでもいいのかもしれないわ。でも、きつと彼らの目的はそういう人人を救うことだったり、大切な人の何かを守ることなんだと思う」

リウスの言葉に、ルイズは少し心当たりがあった。

自分が家族を助けることができるのなら、きつと自分は色んなものを投げ打つてでも

助けたいと思うだろう。

今回の任務のように、姫様のためにアルビオンまで来たことだって、今思えばそういった気持ちだったのかもしれない。

「特に彼らは王族であり、貴族でもある。守るべきものがたくさんあって、それでも守るものを選択しなくちゃいけない。

守るものの中には、自分の命もある。貴族としての誇りもあるし、王族のために支えになりたいっていう矜持もある。そして彼らは、真っ先に自分の命を捨てることを選んだのよ。それが良いか悪いかは別にしてね」

礼拝堂の扉が見えてくる。

その横には、今か今かとそわそわしている先ほどの侍従の女性がいた。

リウスはルイズに向き直った。

「私は、あの人達の選択が正しいことを祈ってるわ。ルイズ、貴方の選択も」

そのまま、わしわしとルイズの頭を撫でて静かに笑った。

「結婚、おめでとう。ルイズ」

ルイズは何も言えずに俯いたままで、頭を撫でられるがままになっている。

それを見てリウスは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「今から結婚するってのにそんな顔してたら駄目じゃない。それとも、気が変わった？」

ルイズは俯きながら首を横に振った。

リウスは肩をすくめるとルイズの顔を覗き込んで、ルイズの頬に優しく触れる。

「笑って、ルイズ。あなたは笑った顔が一番いいわ」

そう言つて、リウスはルイズを侍従の女性に引き渡した。

女性は深々とお辞儀をして答える。

「すみません、お待たせしました」

「いえ、すぐ済みますので。あの……もし避難船に乗るのでしたら、もう向かった方がいいですよ？　いつ出港するかも分かりませんから」

「貴方も？」

「ええ。ラ・ヴァリエール様の準備が整い次第、私も向かいます」

「じゃあ、貴方と一緒にに行けばちようど良いかしら。ウエールズ殿下はもう中に来られてるの？」

「いえ……まだいらつしやっていません」

頷いたリウスは、ルイズにもう一度向き直った。

「ルイズ、それじゃあね。トリステインで待つてるわ」

リウスがそう言うも、ルイズは何を思っているのか俯いたままでこくりと頷いた。

そして、ルイズは侍従の女性と共に扉の奥へ消えていき……。ぱたんと扉が閉じられると、リウスはゆっくりと溜め息を吐いてから、横の壁に寄り掛かった。

「おいおい。いいのか、相棒」

デルフリンガーがかちやかちやと声を出した。

「何がよ」

「嬢ちゃんのことじゃ決まってるんだろ」

「今ここでルイズを連れ去っても同じことよ」

「でもよ……」

リウスは無表情な顔のままデルフリンガーに言葉を返した。

「私は、ルイズの気持ちを変えることが出来なかった。連れ去っても、ルイズはきつと戻ろうとする。それから、自分に後悔する。ルイズが生き続けるだけならそれでもいいのかもしれないけど、ルイズの命も意志も全て尊重するのなら、これしかなかった」

少しだけ沈黙したリウスは、まるで他人事のように言葉を続ける。

「ルイズが船に乗らない以上、ワルドが裏切った場合はもう脱出手段がないから共倒れになっちゃうわ。私が生き残るのなら、ルイズがして欲しい一つは達成できるって寸法よ」

「……おい、相棒よ」

デルフリンガーが小さく声を出した。

「それ、本気で言ってるのか？」

「……言ってる訳ないでしょ。このバカ」

顔をしかめたリウスは宙を仰ぎながら、こつんと頭を壁に軽くぶつけた。

「ここまで来てしまうと、ワルドが裏切った場合はもうどうすることも出来ない。私が馬鹿だったわ。もっと早くに対処するべきだった」

「対処、できたんか？」

「……出来たかもしれないわね」

すると、デルフリンガーが何やらけたけたと笑っている。

「相棒、嘘はよくねえぜ。ありや無理だろ。やれるとしたら、港町の宿に泊まった時からいだな。でも、ワルドだけか？ あいつがいなけりや船に乗れなかつたとしたら、もう積みさあね。結果論だろうがそれは変わらねえよ」

「……何よ、慰めてくれてるわけ？」

「相棒が平気かって心配でな」

「私は平気よ」

「嘘ばつか言うなよ。クセになつちまうぜ？」

「……うっさい」

しばらくして、礼拝堂の前へ数人の兵士を引き連れたウエールズがやってくる。

決戦の時間が近付いているからか、全員が完全に武装していた。

ウエールズはリウスの姿を見つけて、ぱっと明るい笑顔を浮かべる。

「やあ、探していたんだ」

リウスは姿勢を正しながら、不思議そうにウエールズへと顔を向けた。

「殿下、どうしました？」

「いや、君に渡ししておくものがあつてね。君は避難船で帰るのだろうか？」

頷いたリウスに、ウエールズは右手の指に嵌った指輪を抜き取った。

「これをアンリエッタに渡してほしい」

その指輪は『風のルビー』だった。

ウエールズが差し出した指輪をリウスはそつと受け取る。

「レコン・キスタには何も残してやりたくないものでね」

ウインク混じりにウエールズは微笑んだ。

恭しく礼を返したりリウスは、そのまま少し考える素振りを見せる。

「承知いたしました。昨日のお言葉と共に、必ずや姫様の元へお届けいたします。あと、殿下。少しばかりお話を……」

「何かな？」

周りの兵士にも聞こえるような声でリウスは言った。

「ワルド子爵に注意してください。何か企んでいる可能性があります」

「子爵が……？」

「くりとリウスは頷いた。

「ええ。決戦の前に、貴方達へ危害を加える意味があるとは思えませんし、目的もはっきりしません。ただ殿下も、こういった結婚式に違和感はありませんでしたか？」

「それは……そうだな」

思案に耽ったウエールズにリウスは真面目な顔で続けた。

「ワルド子爵のグリフォンには三人も乗れないということで、私は避難船で帰ることになっています。

ルイズの意志なので私もそれに従いますが……、何かあった時はルイズの事、お願いしてもいいですか？」

「……ああ、分かった」

「ありがとうございます。……申し訳ありません。戦いも近いというのに、無理を言ってしまうって」

頭を下げたりウエールの肩に、ウエールズは優しく手を置いた。

「ラ・ヴァリエール嬢は本当に良い使い魔を持ったものだ。彼女のことは任せてくれ。安心して避難船で帰るといい」

リウスが感謝を交えて頷くと、礼拝堂隣にある扉ががちやりと開いた。中から先程の侍女が現れるが、ウエールズの姿に気付くと慌てて一礼をする。

「さあ、早く行かなくては避難船に乗り遅れてしまうぞ。君もリウスくんと一緒に早く行きたまえ」

侍女は感極まった表情で、目の端に涙を浮かべたままもう一度深々とお辞儀をした。「はい……。ウエールズ様も、どうか御武運を」

「ああ。君らの耳にも届くよう、奴らに一泡吹かせてやろう。楽しみにしててくれ」身分差も感じさせずに、ウエールズは侍女へにこやかに笑いながら返した。

その様子を、兵士達も微笑みを浮かべながら見つめている。

これがアルビオンの皇太子、ウエールズ・テューダーなのだろう。

その王族としての器と求心力を感じながら、リウスはアンリエッタと並び立つウエールズをふと想像した。

それは、本来あるべき姿だったはずだ。

しかし運命は彼らを翻弄し、望まぬ結末を迎えようとしている。

リウスは迷いを振り切るようにウエールズへ一礼してから、重い足取りのままに鍾乳洞の港へと歩を進めていくのだった。

第三十七話 求めるもの

礼拝堂の中。ルイズは式場の道を、ワルドと共に歩いていった。

ルイズの頭にはアルビオン王家から借り受けた新婦の冠があり、肩にかけられているのは道中で付けていた真つ黒なマントではなく、純白の、乙女のマントだった。

それだけでも充分な美しさを湛えていたルイズだったが、何やら考え込みながら、ワルドと共に始祖ブリミル像の前で待つウエールズ皇太子の元へと歩いていく。

ワルドはルイズが緊張していると思つていくつかの言葉を投げかけていたが、当のルイズは無反応だった。

ウエールズの元に辿り着き、ワルドはルイズと共に一礼をする。

ウエールズは明るい紫のマントを羽織り、頭には七色の羽のついた帽子をかぶつていた。

それらは王族を象徴する由緒正しい代物である。

この場には三人しかおらず、ウエールズお付きの兵士たちは礼拝堂の外に控えさせてあった。

「では、式をはじめる」

ルイズはその言葉を聞きながらも、どこか他人事のような、霧の向こうで起きている出来事のような、そんなぼんやりとした感覚に包まれていた。

「新郎、子爵ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。汝は始祖ブリミルの名において、このものを敬い、愛し、そして妻とすることを誓いますか」

ワルドは重々しく頷いて、杖を握った左手を胸の前に置いた。

「誓います」

ウエールズはにこりと笑って頷き、今度はルイズへ視線を移した。

「新婦、ラ・ヴァリエール公爵三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール……」

ルイズは、何故こんなにも気が重いのか分からなかった。

ワルドは、いつも自分を助けてくれていた。憧れだった。好きだったはずだ。それなのに、どうして……。

「……愛し、そして夫とすることを誓いますか」

ルイズはウエールズの顔を、そしてワルドの顔を見た。

ワルドはルイズの表情に気付き、にこやかに笑いかけてくる。

でも、それはさつきまで見ていたリウスの笑顔とは、少し違っているように思えた。

「……」

誓いの言葉を言おうとしたが、ルイズは何故か口に出すことができなかった。

本当に、いいのだろうか。

「新婦？」

ワルドはルイズを見つめたまま、目を細めて笑っている。

「緊張しているのかい？ 仕方がない。初めてのときは、ことがなんであれ、緊張するも

のだからね」

にっこりと笑って、ウエールズもルイズへ語りかける。

「これは確かに儀礼に過ぎぬが、儀礼にはそれをするだけの意味がある。では繰り返そう。汝は始祖ブリミルの名において、このものを敬い、愛し……」

ウエールズの言葉が頭の隅で鐘のように鳴り響いている。

ルイズは未だにぼんやりとした様子で、目の前の光景を見つめていた。

―それは、あなたが本当にしたかったことなの？

夢の中で、カトリーヌはそう言っていた。

本当にしたかったこと。この光景は、私の本当にしたかったことなのだろうか。ワルドとの結婚は憧れだった。昔の自分にとって、確かに憧れだったはずだ。でも、今は……？

―何をするにしても、私の目的は変わらない。

ルイズの頭に、先程のリウスの言葉がよぎった。

目的……。私の目的は、何だったんだろうか。

リウスを元の世界に帰してあげたい。

立派なメイジになりたい。

だから、ワルドと……結婚を……？

―そうじゃな。視野を広く持ちなさい。

静かに、しかし確信を持った老人の声が聞こえてくる。

それはリウスの夢で見た、あの先生の声だった。

—自分がどうしたいのかを、視野を広く持ちながら常に考えなさい。
その答えは君自身が知っているはずじゃよ。

自分がどうしたいのかを・・・、私自身が・・・。

「ルイズ？」

ルイズが気付くと、ワルドが顔を覗き込んでいた。
ウエールズも怪訝な表情を浮かべている。

「どうしたんだい？ ルイズ、気分でも悪いのか？」

「違うの・・・」

自分がどうしたいのか・・・。目的・・・。本当にしたかったこと・・・。

いくつもの言葉がルイズの中で一つになり、それがルイズにとっての真実になって
いった気がした。

「そうじゃないの、ワルド」

決意を湛えたルイズが、ワルドの顔を正面から見る。

「ワルド。私は、あなたと結婚できない」

「あれ？」

『イーグル』号の艦上で、舷縁に寄り掛かっていたリウスが呟いた。

「どうした？ 相棒」

それを聞きとがめたデルフリンガーが呑気な声を上げる。

リウスの左側の視界がぼやけている。

まるで真夏の陽炎のように、艦上からの風景と何かの映像が重なっているような、変な感覚だった。

「いや、目が……」

「疲れてんだよ、寝てなかったんだろ？」

「まあ、そのせいかな……」

まだ納得していないようにリウスが首を傾げていると、鍾乳洞にある港がざわめき始めている。

少し遠目に見えるマリーガラント号にも、どやどやと避難民たちが乗り込んでいた。

「どうやらそろそろ出港するのだろう。」

「・・・結局、嬢ちゃんは来なかったな。まあ落ち込むなよ。相棒」

リウスは左目を擦りながら、デルフリンガーの言葉にも答えずにぼんやりと港の様子を眺め続けていた。

「新婦は、この結婚を望まぬのか？」

いきなりの展開に、ワルドもウエールズも啞然とした顔をしている。

「その通りでございます。お二方には、大変失礼をいたすことになりますが、わたくしはこの結婚を望みません」

はつきりと言いつつ切ったルイズに、ワルドの顔がさつと朱に染まる。

ウエールズは首を傾げ、困ったような顔をしながらワルドに声をかけた。

「子爵。誠にお気の毒だが、花嫁が望まぬ式をこれ以上続ける訳にはいかぬ」

しかし、ワルドはウエールズに見向きもせず、ルイズの手を強く掴んだ。

「・・・緊張してるんだ。そうだろうルイズ。君が、僕との結婚を拒む訳がない」

握られた手に少しばかり痛みを感じながら、ルイズは毅然としてワルドを見た。

「本当にごめんさい。私はあなたと結婚したいんだって、そう思ってた。思い込もう

としてた。

でも、違うの。本当に、ごめんなさい。私はちゃんと、リウスに……」

そこまでルイズが言った瞬間、ワルドは怒りのこもったような表情を浮かべた。

ルイズの手を握るワルドの右手が小刻みに震えている。

「……あの使い魔に、何か言われたのか？」

俯きながら横に首を振るルイズを見て、ワルドはルイズの肩を両手でつかんだ。

ルイズはそのあまりにも強い力に顔を歪める。

「世界だ、ルイズ。僕は世界を手に入れる！ そのためには、きみの力が必要なんだ！」
ワルドの表情はいつもの優しげな顔ではなく、まるで爬虫類のようなものへと変わっていた。

豹変したワルドに怯えながら、ルイズは大きく首を横に振った。

「……わたし、世界なんていらわないわ」

「僕には君が必要なんだ！ 君の力が！ 君の魔法が！ 全てを手にしよう、ルイズ！」
そのワルドの剣幕に、ルイズは言いようのない恐怖に駆られていた。

あの優しかったワルドがこんな顔をして、叫ぶように話すなんて、夢にも思わなかった。

「ルイズ、いつか言ったことを忘れたか！ きみは始祖ブリミルにも劣らぬ、優秀なメイ

ジに成長するだろう！ きみは自分で気付いていないだけだ！

君はいつか才能に目覚める！ 目覚めるんだ！ 立派なメイジになりたいと言ったのは、君だっただろう!？」

怯えながらも、ルイズはずっと感じていた違和感の正体に気が付いた。

ワルドの笑顔とリウスの笑顔が違う理由。

二人が見ていた目的は、違っていたのだ。

そして、ルイズは昨日のリウスの姿を思い出していた。ワルドから守るように立つリウスの背を。

今のルイズには、あの時のリウスの言葉が初めて理解できたように思っていた。

イーグル号の艦上はざわざわと落ち着かない雰囲気に包まれていた。

避難民の収容もそろそろ終わるのだろう。リウスのいる甲板は多くの人達でごった返している。

「ああもう。何なのよ、いったい」

リウスが霞む左目をもう一度擦った。

「なんだ相棒、まだぼやけるってのか？」

「うーん、何なのかしら。急に目がこんなになるなんて」
「目が大事なら、あんまり擦らない方がいいぜ」

—担い手を守れ。なんとしても。

誰かの声が聞こえた気がして、リウスはきよろきよろと周りを見回した。

「何？ デルフ」

「だからよ。目は擦らない方がいいって」

リウスは首を傾げた。デルフリンガーにはさつききの声が聞こえなかったようだ。

幻聴が聞こえるなんて、本当に疲れているのだろうか。

ふと自分の左手が視界に入る。

違和感を覚えて左手を見ると、武器も持っていないのにガンダールヴのルーンが光り輝いていた。

ほのかな光が徐々に強まっていき、その光に合わせるかのように　ますます左目の視界が歪んでいく。

そうしていると、次第に左目が像を結んでいった。

「これは・・・？」

リウスは驚いたように声を上げた。

左目の視界は、まるで誰かの視界のように別の場所を映していた。

「ワルド……？　ここは、礼拝堂？　これは……ルイズの視界……？」

左目に映った光景には、目を吊り上げて、恐ろしい表情でルイズの肩を掴むワルドが映されていた。

自分が今まで冒険の中で幾度となく見てきた、殺意のこもった目をしながら……その光景に、リウスは全身の血の気が一気に引いていくのを感じていた。

ワルドは、ルイズを……。

瞬間、リウスはバツと顔を上げた。

人混みをかき分け、今にも出港しそうなイーグル号から飛び降りる。

周りの人々が驚きの声を上げる中、着地したリウスは鍾乳洞の港からニューカッスル城に繋がる道へ走り始めた。

「お、おい！　どうした相棒！　もう船が出ちまうぜ！」

「ルイズを助けに行く！」

「言ってること違うじゃんかよ！　王子様も守ってくれるんだろ！」

「私が間違つてたわ！ ルイズ連れて、さっさと逃げるわよ！」
城に繋がる階段を駆け上がるリウスの背で、デルフリンガーが楽しそうに笑い始めた。

「そこなくっちゃな！ ムチャクチャだが、それでこそ俺の相棒だ！」

「その手を離れたまえ、子爵！」

ウエールズが豹変したワルドへと杖を向けていた。

「ルイズ！ 君の才能が必要なんだ！ 僕と来い！ 僕と来るんだ、ルイズ！」

「わ、わたしは、才能のあるメイジなんかじゃない……」

「君が気付いてないだけだ！ 僕が目覚めさせてやる！ 僕と来い、ルイズ！」

「三度目はないっ！ その手を離せ、子爵!!」

その言葉に、ワルドはやつとルイズから手を離れた。

ワルドはルイズに向けて、どこまでも優しい笑みを浮かべている。

しかしその笑みは、既に嘘で塗り固められた仮面のように感じられた。

「……リウスキュンの言つた通りだったな。子爵、君は一人でグリフォンに乗って帰りたいまえ。間に合うかは分からぬが、ラ・ヴァリエール嬢は外の兵士に避難船まで送らせる」

厳しい目付きで睨み付けてくるウェールズを見て、ワルドはおどけたように肩をすくめた。

「殿下、貴方もですか。どいつもこいつも、あの女の言うことを鵜呑みにするとは……」
そしてワルドはルイズへ目をやった。

ルイズは湧き上がる怒りに震えながら、ワルドを強く睨み付けている。

「こうまで僕が言ってもダメかい？ 僕のルイズ」

ルイズの記憶と全く同じように、優しくワルドは語りかけてくる。

しかしもう、この人は自分の知っているワルドではなかった。

「ワルド……何があなたを変えたの？」

言葉の端々にルイズの拒絶が強く含まれていた。

しかしワルドはルイズの質問にも答えず、優しく笑ったままだ。

「やれやれ。この旅で、君の気持ちを掴むために随分努力したのだが……」

「いやよ、誰があなたと結婚なんてするもんですか。あなたが大事にしているのは、ありもしない魔法の才能だけ。あなたは、私のことなんかちつとも見てないじゃない！」

ルイズの明らかな拒絶にもワルドは優しく微笑みを浮かべている。

「ヴァリエール嬢からゆつくりと離れたまえ。おかしな動きをすれば、即座に私の魔法が君を切り裂く……。誰か！ きてくれ！」

ウエールズが外の兵士に向けて声を上げる。

しかし、外からは何の物音も聞こえてこない。

ワルドはルイズに背を見せると、ゆっくりとルイズから離れていく。

「まったく……僕としたことが散々な結果だ。ならば、最後の目的だけでも達成するでしょう」

「目的……?」

ルイズが顔を強張らせた。

「そうだ、目的だ。二つの目的は達成できなかった。そうとなれば、最後の目的は達成する。今、ここぞだ」

ワルドはゆっくりと歩いていく。

そしてワルドが小さく呟いた瞬間、その残像が残るかのように、目の前には三人のワルドが存在していた。

「偏在……!」

「最後の目的は……。貴様だ、ウエールズ」

三人のワルドがウエールズに向き直る前に、ウエールズは本体と思われるワルドに向けてエア・カッターの魔法を放った。

しかしワルドは二つ名の閃光のように杖を引き抜くと勢いよく宙へ浮かび上がる。

そのままウエールズの魔法を避けると、風のように三人のワルドがウエールズへと襲い掛かった。

ウエールズは迎撃しようと再度魔法を唱え……。

次の瞬間には、ウエールズの背から胸を、青白く光るレイピア状の杖が貫いていた。身体を走る衝撃の中、咄嗟にウエールズは短く息を吸おうとしたが、息をすることは出来なかった。

自身の胸からはエア・ニードルの魔法に包まれた杖が生えている……。

それでも、ウエールズは怒りに満ちた声をワルドに向けて上げようとする。

「きさ、ま……！」

「さくらばだ、ウエールズ」

襲い掛かる三人のワルドの杖が、ウエールズの身体を次々に貫いた。

その時……、ウエールズの脳裏には、広大なラグドリアン湖の美しいほとりが映きれていた。

—風吹く夜に。

あの、美しい湖。

自分が最も幸福だった日々。

かつての合言葉を口にする、必ず彼女ははにかんだ笑顔と共に、この言葉を返してくれるのだ。

—水の誓いを。

ぶるぶると震える身体を無理やり動かし、ウエルズは目の前のワルドへ杖を向けようとする。

「レ、レコン・キスタ・・・、貴様を、彼女の元へは・・・」

ウエルズズの口から、どつと鮮血が溢れる。

ウエルズズの背にいた四人目のワルド、そしてウエルズズに襲い掛かった三人のワルド達が、深々と突き刺さった杖を引き抜いた。

「ウエルズ様！」

悲鳴に似たルイズズの叫びと共に、ウエルズズは力無く床へと倒れこんだ。

ワルドと偏在達は黙って物言わぬウエルズズを見つめている。

血だまりが、礼拝堂の床に広がっていく。

「油断が過ぎる。王族といえどもこの程度か、呆気ないな」

「どうして……、トリスティン貴族であるあなたが、どうして！」

「……我々レコン・キスタはハルケギニアの将来を憂い、国境を越えて繋がった貴族の連盟だ。我々に国境はないのだよ、ルイズ」

そしてワルドは両手を広げ、まるで演説をするかのように笑ってみせた。

「ハルケギニアは我々の手で一つとなり、始祖ブリミルの光臨せし『聖地』を取り戻すのだ！」

がちやりと礼拝堂の扉が開いた。そこには血に塗れた白い仮面の男。

その男は後ずさったルイズへとゆっくり近付いていく。

白い仮面を外したその男は、ワルドだった。

「二つ目の目的は、あの愚かな姫の手紙だった。しかしマザリーニ枢機卿は腹心の僕ですら信頼していなかったという訳だ。手紙を処分するなど、僕は聞いていなかったのだから」

本体のワルドを除いた四人のワルドは、何かを警戒するように礼拝堂の各所に移動していく。

ルイズは凍りついたように動かないまま、恐怖と怒りで震えていた。

「二つ目は、ルイズ。君だ。しかし君は僕の元には来ないと言う。さて、今はどう思っ

いるんだい？ ルイズ」

「昔は、昔のあなたはそんな人じゃなかった！ 何があなたを変えたのよ！ ワルド！」
「月日と、数奇な運命のめぐり合わせだ。それが君の知る僕を変えたが、今ここで話すつもりはない。さあ、どうするのか？ 僕の可愛いルイズ」

ワルドの目に怪しげな光が宿る。

まるで小さな動物を見るかのような、そして何の容赦もなく手を下すような目。

初めて見るその目の光が強烈な殺意であることに気付き、ルイズは冷たい恐怖が体中に這い上がってくるのを感じていた。

今すぐ、恐怖に膝を折ってしまいたくなる。

さっきまでの怒りすら忘れて、命乞いをしたくなる。

そんなルイズの頭に、リウスの言葉が聞こえた。

—あなたは、立派よ。ルイズ。

ルイズはキツとワルドを睨み付け、力強く答えた。

「……ふざけないで！ 誰が裏切り者のあなたとなんて、行くもんですか!!」

しかしワルドはまるでルイズの言葉を予想していたように軽く笑い、目を細めてルイ

ズを見下ろしている。

「流石は僕の花嫁だ、この期に及んでも折れないとはな。しかし、言うことを聞かぬ小鳥は首を捻るしかない。そうだろう？ ルイズ」

恐怖をねじ伏せながら、さっと自身の杖を掴んだルイズはワルドめがけて杖を振ろうとした。

しかしワルドはなんなくルイズの杖を弾き飛ばすと、ルイズめがけて風の塊を放つ。ルイズは風の塊に吹き飛ばされ、その勢いのまま床を転がっていく。

身体中を走る痛みに呻きながらも、ルイズは身を起こして自分の杖の元へと走った。「ウインドブレイク」

続く広範囲の突風に、ルイズは紙きれのように吹き飛ばされた。

また、地面に叩きつけられる。朦朧としながら辺りを見回しても、自分の杖は見当たらなかった。

「ルイズ、あの使い魔を呼んでみたまえ。もしかしたら助けにきてくれるかもしれないぞ」

ワルドはゆっくりと地面に倒れるルイズへ近付き、またエア・ハンマーを放った。

ルイズは壁に叩きつけられ、蒼白な顔のままワルドを力なく睨み付ける。

「・・・しかし、もう時間切れだ」

残酷な笑みを浮かべながら、ワルドは呪文を詠唱し始める。

ワルドの周囲の空気が歪み、魔法の電撃が集まっていく。

「い、いや・・・」

ルイズは呻いた。死にたくないと思つた。

でも、リウスを呼びたくない。

呼んでしまえば、リウスは帰れない。

元の世界に帰れなくなってしまう。

「さらばだ、ルイズ」

呪文が完成し、ワルドがルイズに向かって杖を振り下ろそうとした瞬間・・・。

石柱が轟音と共に礼拝堂の壁を突き破り、外から現れた黒い影がワルドに向かって襲い掛かった。

第三十八話 礼拝堂の戦い

「やはり来たか！ ガンダールヴ!!」

瓦礫が宙を舞っている中、ワルドに肉薄したリウスは叫ぶワルドの首へと短剣を薙ぎ払った。

しかしワルドは杖で短剣を受け止め、思いつきりリウスを蹴り飛ばすと、続いて他のワルド達がリウスへと杖を向ける。

「ウインドブレイク!!」

蹴り飛ばされたリウスは、その勢いのままルイズの元へとステップを踏んでルイズを抱きかかえると、そのままルイズを守るように宙に身を投げ出した。

リウスはルイズと共に大きく吹き飛ばされ壁に叩きつけられる。

衝撃と強い痛みが体中に走ったが、リウスは呻きながら身を起こすと、腰のカウンターダガーを引き抜いた。

さつきまで持っていたバゼラルドは、先ほど受けた魔法で遠くに転がってしまってい

る。

「ルイズ！」

リウスの背後にいるルイズはぴくりとも動かない。どうやら失神してしまっているようだ。

リウスはワルドの向こう側、始祖ブリミル像の前に倒れるウエールズへ目を向けた。倒れ込んだウエールズの周りには血だまりが広がっている。

あの出血は、致命傷だ。

「ワルド……っ！」

リウスの怒りを受けながらも、ワルドはにやりと笑ってみせる。

「来てくれると思っていたよ。さて、気付いてくれたかな？ 先程の魔法は、君と話した
いがために放ったのだからな」

「お前と話すことなんてない!!」

前方にいる二人のワルドが、ぴたりとリウスへ杖を向けた。

「やめておけ。貴様は生き残れるかもしれないが、後ろにいるルイズはどうなると思う
？」

その言葉に動きを止めたリウスは、突き刺さるような視線でワルドを睨み付けてい
る。

「君は来るだろうと思っていた。しかし僕は焦らずに、君を待っていた。何故か？

・・・君にこの光景を、見せつけるためだ」

ワルドは残酷な笑みを浮かべて、満足そうに声を出した。

「君は大いに僕の邪魔をしてくれた。ウェールズも思った以上に抵抗してくれたよ。

そんな君へ、この言葉を贈ろう。君の行動は・・・全て徒労に終わった」

リウスは黙ったまま短剣を持つ手に強く力を込めた。頭の中でワルドを倒す算段を練り上げていく。

しかし目の前にはあの白い仮面の男と同じ魔力を持つ、四人のワルドがいる。

白仮面の男に合点はいったが、剣の腕においてワルドは私よりも上だ。

そして、一対一ならともかく、五対一の状態では・・・。

「僕には目的がある。こんなちんけな任務ではない、本当の目的が。そう、イグドラシルの話は興味深く聞かせてもらったよ。フーケからな」

ワルドは表情を変えて、リウスを強く睨み付ける。

そして左右のワルドが呪文の詠唱を開始した。

「貴様からはろくな情報を引き出せなかったが・・・まあいい。ルイズと共に死ね、ガンダールヴ」

本体のワールドが杖を動かした瞬間、リウスは弾かれたように懐の魔法石を宙に放った。

「デイスペル!!」

青く輝く魔法石が砕け散り、増幅されたリウスの魔力が詠唱中であるワールドの偏在に襲い掛かる。

ワールドには見えない魔力が偏在の全身を貫いた瞬間、詠唱をしていた偏在は塵のように消滅した。

「なにっ!?!」

同時にリウスがワールドへ向けて走る。

焦るワールド達が杖を自分に向けたことを確かめながら、リウスは次の魔法を放つ瞬間を窺っていた。

この位置なら、ルイズに魔法が届く心配はない。

「ウインドカッター!!」

本体と偏在から二つの風の刃が形作られ、リウスの元へと向かってくる。

その魔力を感知していたリウスは二つの襲い来る風の刃の隙間に飛び込むと、宙に身

を投げ出したまま、詠唱を完了させようとしている一体の偏在へ短剣を向けた。

「スペルブレイカー!!」

ワルドの偏在が杖を振り下ろそうとする瞬間、リウスはワルドの魔法が完成する寸前で破壊する。

着地したリウスはそのまま思いつきり地を蹴って、何が起きたのかと動揺する偏在に襲い掛かった。

その偏在の首を瞬時に断ち切り、断ち切った勢いのまま周囲の状況を確かめる。

残る三人のワルドが周囲に散り、魔力のこもった杖をこちらへと向けている。

「ライトニングクラウド!」

「マジックロッド!」

一体の偏在が先に放とうとした魔法を一瞬で掻き消した。

しかしもう一方、今にも詠唱を終えようとしている二つの魔法は、間に合わない!

「相棒!! 俺を魔法に向けろっ!!」

背に抱えたデルFRINGERが叫ぶ。

その咆哮にリウスは戸惑うことなくカウンターダガーを投げ捨てると、デルFRINGER

ガーを即座に引き抜いた。

「死ね！ ガンダールヴ!!」

空気の弾ける音と共に、二人のワルドの魔力が膨れ上がる。

「ライトニングクラウド!!」

ワルド達の周囲から稲妻が伸び、空気が弾け飛ぶ音を轟かせながらリウスの元へと向かってくる。

稲妻が直撃する瞬間、リウスが寸前で構えたデルフリンガーが光り輝いた。

その稲妻はリウスではなくデルフリンガーの刀身へとぶつかり、そのまま力無く消えていく。

その後に残っていたのは、今まさに研がれたばかりのように光り輝くデルフリンガーの姿だった。

「これが俺の本当の姿さ！ いやあ、てんで忘れて・・・」

「デイスペル！」

リウスの左手に握り込まれた魔法石が砕け散り、増幅されたリウスの魔力がワルドの偏在に襲い掛かる。

即座にワルド達は『閃光』の名に恥じぬ高速詠唱で魔法を完成させた。

「「エアハンマー!!!」」

リウスのデイスペルは風の塊に飲み込まれて散り散りになっていく。

残る二つの風の塊は横なぎに振るわれたデルフリンガーによって敢え無く吸収された。

「ちよつと!? 勘弁してくれ相棒! 俺っちの晴れ舞台だつてのに!」

「そんなの言ってる場合?」

リウスは偏在に注意を払いつつ本体のワルドを睨み付けていた。

どういふ仕組みなのかは分からないが、デルフリンガーが魔法の吸収を行なえるのならいくらでもやりようはある。

防げない距離まで近づけば、デイスペルは間違いなく偏在に直撃させられるのだ。

デイスペルの触媒となる魔法石、ブルージェムストーンの残りは四つ。無駄打ちを避ければ十分に事足りるはずだ。

「やはり・・・貴様は危険だ、ガンダールヴ」

ワルドはわなわなと震えながら、リウスを、そしてデルフリンガーを見つめていた。

「その剣も……ただの剣ではなかったという訳か。どこまでも、苛つかせてくれる……！」

ならばっ!!」

三人のワルド達は杖をリウスではなく別の場所へと向けた。

杖の先には……、倒れ込んだルイズの姿があった。

「貴様の主人を守ってみせろ!! ガンダールヴ!!」

驚愕の表情を浮かべたリウスは一瞬身を強張らせた。

この距離なら、本体のワルドを仕留めることができる。

アーススパイク……。いや、避けられるかもしれない。魔法と共に私が直接攻撃すれば……。

それでも避けられた場合は？ そうした場合他の魔法を止められるか？

スperlブレイカーか、デイスperl……。一人は止められるが、二人目は無理だ。

マジックロッドも同時に……。でも、攻撃と二つの魔法を同時に使うのなんて……。

デルフリンガーを投げて……。いや、何を考えてる。そんなの何の意味も……。

その一瞬の思惑の中、既にリウスはルイズの元へと駆け出していた。

「あ、相棒!? やめろ! 無理だ!!」

一人のワルドの魔法を、スペルブレイカーで破壊する。

「うるさい……!」

リウスはルイズを守る位置まで迫り着き、呪文の詠唱を続けながら勢いよく振り向いた。

「ライトニングクラウド!!」

二つの方向から、同時に巨大な稲妻が形作られる。

マジックロッドももう間に合わない。

一つはデルフィンガーで消せるが、二つ目は、直撃する。

(この子だけは……!!)

リウスは歯を食いしばってデルフィンガーを振るい……、そのまま、特大の雷撃がリウスの身を一瞬の内に包み込んでいった。

雷の轟音が響きわたった後……。

ワルドは息を切らせたまま、座ったような姿勢で壁にもたれかかるリウスを見つめていた。

雷撃によって遠くまで弾け飛んだようで、ルイズとは別の場所まで吹き飛ばされている。

当のルイズは、無傷であるようだった。

高速詠唱ではあるが、全力のライトニング・クラウドだ。意識がないどころか即死は免れない威力である。

どうやらまだ生きてはいるようだが、息絶えるのも時間の問題だろう。

リウスの横に転がるインテリジェンスソードが喚いているが、もうどうにもならない。

「あ、相棒！ 起きろ相棒！ ふざけんな！ こんな所で、死んでるやつがあるか!!」

呼吸を整えながら、ワルドは偏在と共にリウスの元へと近付いていく。

その途中、くらりと立ち眩みを覚えた。

あまりにも精神力を使いすぎたのだ。偏在たちも限界に近いことだろう。

ワルドがリウスの前に立つと、インテリジェンスソードが更に大きな声でわめき始めた。

「てめえ！ 貴族の風上にも置けねえとはこのことだ！ 人質なんざ取りやがって、このクソ野郎がっ!!」

「・・・彼女は危険すぎた。当然だろう」

静かに、ワルドは言葉を返した。

何故自分がインテリジェンスソードに返答したのか、ワルドには分からなかった。

もう貴族の誇りなど・・・、とうの昔に捨て去ったというのに。

「・・・これで終わりだ、ガンダールヴ。君の情報はとも役に立った。後は、僕自身が見つけに行くだけだ」

ワルドはそう静かに呟くと、リウスの首へと、杖を向けた。

第三十九話 失われた記憶

耳の奥で、何か聞き慣れない音が聞こえている。

固い紙を擦っているようなザリザリとした音、そしてパチパチと何か弾けるような音。

まるで自分の身体が空気になってしまったかのように、身体は不確かな感覚に包まれている。

ただ聞き慣れない、耳障りで、一定のリズムを持った音が聞こえてくる。

自分の頭がどこにあるのかさえも分からなくなっているのに、頭の奥がひどく痛んでいる気がする。

飛行船からの悠然な風景。

焦り、後悔、怒り……、様々な感情を感じながら、懐かしいリヒタルゼンの街並み
を歩いていく。

小綺麗な宿屋の一室で、驚愕の表情を浮かべている栗色髪の女性。

赤髪の屈強な青年がにこやかに笑い、線の細い少年が悪戯そうにくつくつと笑ってい

る。

酔いで顔の赤くした栗色髪の女性が、赤髪の青年と仲良さそうにお喋りをしている。少年は甘ったるそうなパフェを目の前に満足げな様子だ。

薄暗い建物の中、不思議な装置と牢屋の立ち並ぶ通路を歩いていく。

血の気の失せた少年や少女と戦っている。彼らの表情は虚ろで何の感情をも持っていない。

薄暗く、粉々に砕かれた鉄くずだらけの広場を歩いていく。

行きついた通路の奥には、白衣の死体が転がっている。

濁流のように見覚えのない光景が繰り返されていく。

この人達は誰なのか……。この場所はどこなのか……。

いくら考えようとしても自分の思考は霧のようにおぼろげで、まとまりがつかなくなっている。

ただひたすらに、訳も分からずに、目の前で様々な光景が映し出されていく。

そうした中、薄暗がり立つ少女の姿が目の前に映された。

その周りの暗がりにはその少女を守るかのように、幾人もの人間たちが静かに立っている。

薄暗がりの少女やその人々は全員真っ赤な目をしていて、暗闇の中でも光り輝いてい

るように見えた。

(そうだ……。この光景は……)

おぼろげな思考のまま、リウスは気が付いた。

この光景は、あの時のことだ。

(何で……。私は……)

そして、少女の目の前で突然青白い光が発生した。

そしてそれは自分の目前を覆いつくして……。

「リウスさん、リウスさん」

身体を揺すられていることに気付いたリウスは、はっとして勢いよく体を起こした。

近くにいた薄い栗色髪の女性が小さく驚きの声を上げる。

短く息が切れていたが、どうやらいつの間にか寝ていたようだ。体中が汗にまみれていて気持ち悪い。

「だ、大丈夫ですか？ 昨日のことでお疲れだとは思いますが、なにやらうなされていたみたいだったので……。お水、いりますか？」

リウスは心配そうな顔の女性をちらつと見て、窓から差し込む日の光に目を細める。もう昼すらもとつくに回っているようだった。

「・・・ああ、アンジェリカさん。ありがとう、もらうわ」

アンジェリカというこの女性はルーンミッドガッツ王国の上級聖職者、つまりルーンミッドガッツ大聖堂から派遣されたプリーストだった。

彼女は水をゆっくり飲み干したリウスの肩へ優しく手を置くと、短くヒールの呪文を唱えた。

リウスの体がほのかな治癒の光に包まれ、疲れた身体が少し楽になっていくのを感じる。

「あまり無理をしないでください。焦る気持ちは分かりますけど・・・。昨日と比べて、体調はいかがですか？」

「ありがとう。大丈夫よ、もう平気みたいだわ」

リウスが小さく言葉を返すと、なおもアンジェリカは心配そうな顔をしながらリウスの顔を見つめている。

ザザザツ、と何かが擦れたような音がした気がした。

「お疲れだとは思いますが・・・。リウスさん、落ち着いたら下に来てください。貴方のおかげです。ようやくですよ、二日後の深夜に潜入です。クレイグから詳しく説明が

あると思います」

ザザツ、という音と共に、場面が変わった。

「お、来たね。昨日はお疲れさま」

「寝ぼすけ、とは言えないな。リウスさん、傷の具合はどうです？」

一階の部屋にリウスとアンジェリカが入ると、そこには椅子に座った赤髪の屈強な青年と、弓矢の手入れをしている淡黄色の髪を湛えた少年、そして見慣れない小奇麗な黒い服を着た中年の男性がいた。

「じゃあこの件をルーンミッドガッツ国王とシユバルツバルド大統領の双方に報告してくれ」

「承知しました。それでは皆様もお気をつけて」

中年の男性はそう言つて軽く会釈をすると、そそくさと部屋から立ち去つていく。

「これで一旦の報告は済んだ。ルーンミッドガッツ上層部にも伝えられることだろう」

赤髪の青年、クレイグがリウスに向けて満足げに告げた。

落ち着いた風貌とがっしりした体格をした彼はルーンミッドガッツ騎士団の上級騎士であり、この一団のリーダーでもあった。

部屋の隅には彼の私物である重厚な鎧、そして身の丈ほどもある鞆に収まった大剣が置かれている。

「リウスくん、君のおかげだ。スラム街の下水パイプは確かにレッケンベル社の地下にあるレゲンシユルム研究所に繋がっているようだ。先ほどの報告役の部下が確認したらしい」

「いえ、皆の事前調査があつてこそよ」

「流石つすよ、リウスさん。やつとこれで次に動けるなあ。いやあ長かった。フェイヨンの森が懐かしいです、まったく」

弓矢の手入れを進めている少年、セシリアが欠伸をしながらぼやいた。

線の細い整った顔立ちと女性の名前ではあるが、彼はれつきとした男性である。

それほど屈強そうには見えないし、背も高くなくて甘い物好きなのだが、アンジェリカから聞いた話によるとハンターギルド内でも有数の弓の腕前とのこと。

一見子供のような見た目でありながら、その実リウスよりも経験豊かな年上であるのだった。

セシリアのぼやきを聞いたクレイグが豪快に笑う。

「まあそう言うな、まだ大仕事が残ってるんだぞ。戻ったらゼンザイやピーチケーキでも存分に食べればいいだろう」

「いいつすねえ。ピーチケーキを着に赤キノコワインで一杯やりたいところですよ」

「ああ、あれか……。あれを僕たちに勧めるのはやめておけよ？ 独特のハーモニーが何ともいいないからな」

「それがいいんじゃないっすかあ」

二人のやり取りにアンジエリカがくすくすと笑っている。

リウスは彼らの微笑ましいやり取りに軽く笑みを浮かべた。

「よし、じゃあ今後の概要を伝える」

クレイグは咳払いを一つすると、真面目な顔をしながら続けた。

「研究所への潜入は二日後の夜だ。月が隠れている上に、警備が比較的緩いようだからね。そして我々の目的は、被害にあつた冒険者の救出、および研究内容の把握だ。

ただし、危険だと判断した場合には目的が果たせなくても脱出することにする。理由は全員分かっているね？」

クレイグの言葉に、そこにいる全員がこくりと頷いた。

このリヒタルゼンで失踪した冒険者、つまりレゲンシウム研究所に囚われたと思われる冒険者は数多くいるが、その中には到底何かあつたとは思えない程の熟練の冒険者

達も含まれているのだ。

つまり、彼らが囚われるレベルの危険が研究所に存在しているということは明白だった。

囚われたと思われる歴戦の冒険者達には、セシリアの従姉弟であるという女性も含まれている。

何も聞いてはいないが、たぶんクレイグやアンジェリカも誰かを探すためにこの任務へと参加しているのだろう。

そして私は、先生とカトリーヌを探すために……。

「我々と同じように、彼らの中にはヴァルキリーの祝福を受けた者もいたはずだ。しかし皆も分かっているだろうが、彼らがヴァルキリーによつて蘇生されることはなかった。つまり神々の祝福をも打ち消す『何か』が存在していると思われる。彼らが生きている可能性もあるが、楽観視はできない。侵入の際には、皆も十分に気を付けてくれ」
クレイグは神妙な顔でそう告げると、各々がこくりと頷いた。

「ルーンミッドガッツ王国が欲しがっているのは、レッケンベル社の情報、ひいてはシュバルツバルド共和国の情報だ。要は『国の都合』で他国の研究記録を盗もうって訳だが、我々の本当の目的は違う。

今は魔王モロクの一件で王国も大変だろうし、お国には黙っておけば大丈夫だ。多分

「だけどね」

クレイグがおどけて言うのと、セシリアがくつくくと喉を鳴らした。

「侵入経路についての詳細は今日の夜に伝えるつもりだ。それまでは各自好きに時間を過ごしてくれ。」

「……よし、以上だ！ 飯にしよう！」

少し重くなつてしまつた空気を打ち消すように、クレイグが豪快に席を立つと、食堂にアンジェリカやリウスを促していく。

セシリアは「後で行きますからお先にどうぞ」と鼻歌混じりに弓矢の点検を再開する。

また、ザザザツという音と共に場面が変わる。

場面はその日の夜になつていた。今日の昼間に話し合いをしたクレイグの部屋には、いくつかの酒瓶やつまみが置かれている。

「それにしても、リウスさんと初めて会つた時は驚きましたねえ。調査を始めて三か月の時でしたっけ。もうリウスさんと会つてから一か月ですよ、早いもんです」

セシリアがフルーツパフェにがつつきながらそう言った。

「ルーンミッドガッツの潜入員を取つ捕まえて話を聞いたつてのは凄かつたなあ。てつ

きりモロクのアサシンでも来たのかと思いましたがよ」

「まあ、あの時はごめんなさい……。私とは別の誰かが調査してるのは分かってても、皆なかなか見つからないんですもの」

「いいんですよお、リウスさん。結果オーライですから。ほらクレイグ、お水飲みなさい。顔赤いわよ、ほらほらお水」

「いいって、大丈夫だよアンジェ。だいじょーぶだいじょーぶ」

リウスとセシリアの背後には一、二本の酒瓶が転がっているが、二人ともまだ平然と酒を飲み進めている。

それでもいつもに比べて酔っている方だが、クレイグとアンジェリカはすっかり出来上がっていた。

とはいえ、クレイグはまだ比較的アルコールの弱いマステラ酒の三杯目であり、一方のアンジェリカは既に瓶で五本もの赤キノコワインを空けているのであるが。

「まったく……。騎士なお酒弱いってどういうことなのよ」

「いやいや、アンジェが強すぎなんだよ。聖職者で酒に強いってのもどうかと思うぞお」
「まあ……。クレイグさんは弱いわよねえ」

「そう、クレイグのダンナは弱すぎますよ。モロクの酒飲んだらイチコロですな」

そんなこんなで、クレイグがこくりこくりと眠そうにし始めた。

三人はそんな様子のクレイグをベッドに寝かせてから、またそれぞれのグラスに濃い紅色の酒を注ぐ。

クレイグの様子を心配そうに眺めていたアンジェリカは少し酔いも抜けたようだが、まだほんのりと赤い頬をしながら、思い悩んだように口を開いた。

「ごめんなさいね、二人とも。クレイグも明後日の潜入が心配なのよ」

セシリアはフルーツパイにかぶりつきながら、口元についたパイのかすを指で拭う。

「しようがないですよ。俺だって不安ですからね」

「私もお酒に頼りたい気持ちは、分かるわ。本当なら今すぐにも研究所に行きたいもの」

その言葉にアンジェリカが静かに頷くと、寝息を立てているクレイグを見つめながらぼつりと呟いた。

「本当にね。．．．明後日になったら、分かることなのよね」

ザザッ、という音でまた画面が変わる。

四人はスラム街の下水管を抜け、レゲンシユルム研究所の中を探索していた。

「まったく．．．、何だっただこは。同じ顔の連中ばかり」

セシリアが心底うんざりした声で吐き捨てる。同感と言わんばかりにクレイグも溜め息を吐いた。

「犠牲になった冒険者達だろう。人を複製した上に、人形のようにしてしまふなど聞いたことがないな」

「何とか救うことはできないんでしょうか……」

アンジェリカが絞り出したような声で呟いたその時、物陰から盗賊風の少女がアンジェリカへ向かってさつと飛び出してきた。

その少女の手には短剣が握られ、その短剣をアンジェリカの首へと思いつき突き出す。

「っー」

ギンツ、という音と共にアンジェリカの目の前に現れた半透明の白い防壁が少女の短剣を弾き返した。

あらかじめアンジェリカが展開していた『キリエエレyson』という魔法の防壁である。

「っのっー」

セシリアが強く引き絞った弓から、勢いよく二本の矢が放たれる。

その矢は盗賊の少女の肩と腹に直撃し、その身体を大きく後ろへと吹き飛ばした。

しかしその少女は空中で身を翻して綺麗に着地すると、よろよろとしながらもこちらに向かって歩いてくる。

「とどめだー！」

セシリアが放った数本のとどめの矢が少女の急所へと吸い込まれた瞬間、近くの暗がりから何かの魔力が放たれるのにリウスは気が付いた。

「マジッククロツドー！」

バリツ、という音と共にセシリアの頭上から落ちた魔力の雷を、間一髪リウスが破壊する。

しかし続いて蛇行する無数の光の塊がすぐ近くの暗がりから降り注いだ。

「任せろー！」

クレイグが一行の前に立ちふさがり、大剣を盾にしながら無数の光の塊をその身に受ける。

降り注ぐ光の塊の連射が止まった瞬間、クレイグはベージュ色のマントを翻して魔法の放たれた場所へと駆けた。

またもやいくつもの光の塊が暗がりから放たれる。

しかしクレイグはスピードを緩めずに光の塊を自身の小手で弾き飛ばすと、肩に抱えた大剣を思いっきり振り上げた。

「ぬおおッ!!」

振り上げてから一瞬の内に振り下ろされた大剣は、ドゴンツ、という床を砕く音と共に、暗がりになっていた白いローブの少年を肩口から一刀両断した。

一刀両断された少年は血を流すこともなく声を上げることなく、ただ空気に溶けるかのようにすうつと消えていった。

そこに残っているのは、小さな黄色の結晶体だけである。

「ふうっ」

クレイグは一息つくとその結晶を拾い上げ、一行の元へと戻ってきた。

先ほどセシリアが打ち倒した盗賊の少女も既に消滅しており、後に残っているのは小さな鉛色の腕輪と特殊な形とした短剣だけだった。

戻ってきたクレイグはその腕輪と短剣を拾い上げると、それを眺めながら吐き捨てるように呟いた。

「この研究所の職員共は、人間じゃないな」

「ええ・・・、本当に」

「クレイグ、傷を見せてください。治療します」

アンジェリカがそう言うってクレイグを治療している中、セシリアが下層へと繋がる入り口を発見した。

「あそこから奥に行けるみたいですね．．．、もうお腹いっぱいですけど」
セシリアが悪態をつきながら道を指し示す。

するとクレイグが静かに、はつきりと口を開いた。

「ここまで来たが．．．。皆、どうする？」

沈んだ表情のクレイグへ、一行は顔を向けた。

クレイグの考えていたことは全員が分かっていた。

何をされたのかは分からないが、犠牲になつた冒険者たちが襲ってくる。

それは、つまり．．．。

そんな一行の中で、セシリアがやれやれとばかりに肩をすくめた。

「ダンナらしくもない。それにセシル姉がそんな簡単にやられたなんて、俺は信じないすよ。まだ何にも分かつちやいないんだから」

「．．．そうか。リウスくん、君は？」

「．．．ここで帰れば、私はもつと後悔します。もう、これ以上後悔なんてしたくありません」

「．．．アンジエは」

「いつからの付き合いだと思ってるのよ。言わなくても分かるでしょ？」

クレイグは三人へ向けて静かに頷くと、「ありがとう」と言葉を漏らした。

そして一行は、慎重に下層へ繋がる通路を進んでいくのだった。

ザザザ、とまた擦れた音がして場面が変わる。

ガラクタが敷き詰められた道や長い階段を進んでいくと、四人は広々とした広間に出た。

天井がとても高く灯りすら届いていないようで、一行の頭上は真つ黒に塗りつぶされている。

どうやら足元のガラクタは誰かが積んだバリケードや鋼鉄製のシャッターだったようだ。

しかし何の力でこうなったのか、ほとんどのバリケードが内側から粉々に破壊されている。

ひんやりとした空気と共に、一行はこの空間に尋常ではない気配を感じていた。

まるで大型の悪魔やドラゴンにじっと見張られているかのような・・・、いやそれ以上の何かがすぐ近くにいるかのような・・・。

「皆、すぐ撤退できるようにしておいてくれ」

クレイグが小声でそう呟く。

その言葉に一行は軽く頷いただけだったが、返事をしなくても全員がしつかりと理解できていた。

この階には、今まで見たこともない、手の付けられない存在がいると。

上層に比べてこの場所はやけに広く、研究施設もあまりに少ないように思えた。所々に光源があるものの薄暗いため、遠くまでは目で確認することができない。

最も夜目が効くセシリアを先頭に、一行は周囲を警戒しながら狭い小道を進んでいく。

そのうち大きい通路へと出ると、そこには真つ暗な牢屋らしきものが立ち並んでいた。

しかし牢屋の鉄格子はぐにやりとひしゃげていたり、ドロドロに溶けていたり、何が暴れたような形跡がそこら中に見て取れる。

一行が牢屋を確認しながら進んでいくと、通路の中央に白衣の死体が転がっていた。

うつ伏せに倒れた死体は死んでから大分経過しているようで、既にミイラのような姿となっている。

クレイグは死体がモンスター化していないかどうかを慎重に確かめながら、死体が抱えている革のカバンを手に取った。

アンジェリカが静かに眠る死体へと祈りを捧げ、セシリアとリウスが周囲を警戒して

いる中、クレイグは死体が持っていたカバンから紙の束を見つけて読み進めていく。

ページをめくり続けるクレイグは眉間に皺を寄せながら、次第に目を細めていった。

「・・・アンジェ」

「? はい」

祈りを終えたアンジェリカが不思議そうな顔で、目線を落としたクレイグに近付く。

心なしか、クレイグの顔色が悪い。

「任務は終わりだ。急いでここを出るぞ」

「え・・・? どうしたの、急に」

すると突然、セシリアが短く口笛を吹いた。

索敵は主にセシリアの役割でもあり、この口笛は何かの存在を発見した時の合図である。

がしやり、と通路の奥で鎧のような音がした。

しかしセシリア以外の誰もその暗がりの奥は分からない。

「・・・騎士?」

セシリアが静かに呟くと、真つ暗な通路からガシャ、ガシャ、と音を立てながら、白銀の鎧に身を包み、真つ赤なマントを羽織った銀髪の騎士がゆっくりと現れた。

背負った大剣はクレイグのものよりもずっと巨大な代物である。

とりわけ異様だったのは、彼の目だった。

普通の人間とはかけ離れた真つ赤な双眸で、こちらをじつと睨み付けている。

「……あの人は」

クレイグがぼつりと口にした途端、目の前の騎士が背に抱えた剣を一息に抜いた。

かと思うと、巨大な大剣を片手で持ち、空を切る音と共にこちらへとその切っ先を向ける。

あれは、ルーンミッドガッツ騎士団における決闘の合図だったはずだ。

「ま、待ってください！ 僕です、クレイグです！ 僕は貴方を探しに……」

クレイグの言葉を無視するかのようには、鈍い音を立てて目の前の赤い騎士が大地を蹴った。

重鎧を着込み巨大な大剣を抱えているにも関わらず、赤い騎士はとんでもない速度でこちらへと向かってくる。

「くそっ！ 皆、下がれ！」

赤い騎士が片手で振り下ろした大剣を、何とかクレイグが自身の大剣で受け止めた。

尋常ではない重い金属音が空気を揺らす。

しかし赤い騎士は攻撃が受け止められることを分かっていたかのように、大剣を横に滑らせたかと思うと、自身の身体を回転させながら真横に大剣を薙ぎ払った。

剣閃が煌めき、無防備なクレイグの胴体に大剣が直撃しようとした、次の瞬間、ギーン、という音と共に白い半透明の防壁が大剣を受け止めた。

しかしその勢いは止まらずに半透明の防壁は砕け散り、大剣がクレイグを真横に吹き飛ばす。

「防壁を張り直します!!」

アンジェリカのその言葉とほぼ同時に、リウスは赤い騎士の足元に構築していた魔力を解き放った。

「アーススパイク!」

地面から斜めに突き立った五本の石柱が赤い騎士に激突した。

赤い騎士が即座に大剣で石柱を防いだため大きく吹き飛ばしたただだったが、宙へ吹き飛んだ騎士の鎧の隙間に幾本もの矢が突き刺さる。

しかし赤い騎士はセシリアによる矢傷を気にもせず地面に着地する。

そして吹き飛ばされていたクレイグが何とか身を起こして、赤い騎士の目前に立ちふさがった。

「セイレンさん、やめてください! 僕たちは敵じゃありません!」

「・・・」

セシリアが苦虫を噛み潰したような顔で小さく呟いた。

「クレイグのダンナ、あんたも分かっているだろ。．．．上の連中と同じだ」

その言葉にクレイグとアンジェリカが顔を歪ませるも、赤い騎士は何の感情もない顔でゆっくりとこちらに向かってくる。

「．．．分かっている、分かっているんだ」

そう言ったクレイグの身体から魔力が立ち上り、光り輝く膜となつてクレイグの身体を覆っていく。

ルーンミッドガッツ騎士独自の強化魔法、ツーハンドクイツケンである。

同時に赤い騎士の身体からも濃密な魔力が噴き出し、クレイグが発したのと同じ光り輝く膜と共に、稲光のような赤い魔力が全身を覆っていった。

(あの魔力は．．．!?)

クレイグが大剣を構え直す。

その時、赤い騎士が一瞬で姿を消した。

「受けては駄目!!」

そうリウスが叫んだ瞬間、クレイグの肩に深々と大剣が突き刺さった。

「ぐあっ!」

直後に魔法の防壁の割れる音が鳴り響き、赤い騎士の足元からリウスの魔法である石の柱が突き立った。

しかし赤い騎士はクレイグから瞬時に距離を取って石柱を躲すと、片手に持った巨大な大剣を目に映らない程の速度で縦横無尽に振り回す。

赤い騎士の周囲に、十数本の鉄の矢が軽い音を立てて散らばっていく。

「ありえねえ……」

セシリアがぼつりと呟いた。

確かに奴の死角から矢を放ったはずだった。

身を捻ろうが先に放った矢を撃ち落とそうが、数本の矢は奴の身体に直撃するはずだったのだ。

それを、ああも簡単に……。

「動きを止めてくださいー!」

リウスの声に我に返ったアンジェリカが、即座に治癒の呪文をクレイグへ放った。

クレイグの肩に空いた大穴がみるみる内にふさがっていく。

瞬間、大地を蹴る音と共にまた赤い騎士の姿が消えた。

しかしクレイグは体の力を緩め、ほんの一時だけ魔力を周囲に放っていた。

「オートカウンター!」

一瞬で間合いを詰めた赤い騎士が、クレイグの肩を目掛けて大剣を振り下ろす。

しかしクレイグは右側面から薙ぎ払われた大剣を見もせず、自身の大剣を支柱にし

ながら全力で攻撃を受け流した。

その勢いのままクレイグは大剣を叩きつけるが、赤い騎士は自身の手甲でクレイグの攻撃を斜めに弾き飛ばす。

しかし、ほんの少しだが赤い騎士の体勢が崩れた。

「デイスペル！」

宙に投げた青い小石、ブルージェムストーンに向けてリウスが魔法を叩きこむと、鮮やかな青い宝石が空中で砕け散った。

リウスの魔力はその破片一つ一つを通して増幅され、その魔力のそれぞれが全て赤い騎士へと襲い掛かる。

リウスの魔力は赤い騎士の身体へ纏わりつくように駆け巡り、光の膜も、赤い稲光のような魔力も、全てを掻き消していく。

その瞬間、赤い騎士の動きが明らかに鈍くなった。

「うおおッ!!」

クレイグの目にも止まらぬ速さの斬撃に対して、赤い騎士は咄嗟に両手に持ち直した大剣を身構えようとした。が、その両腕に深々と鋼鉄の矢が突き刺さった。

その隙を逃さずにクレイグは赤い騎士の腕と脚へ斬撃を浴びせ、そして即座に後ろへと回り込むと、赤い騎士の背に向けて渾身の突きを叩きこんだ。

自身の背中から胸を貫通した大剣に、赤い騎士は少し呆気に取られたような仕草をした。

しかしクレイグがその大剣を勢いよく引き抜くと、赤い騎士は糸の切れた人形のようにその場でゆっくりと崩れ落ちていった……。

また、ザザザ、と何か擦れる音が聞こえる。

「今すぐにここを出る」

治療を終えたクレイグが小さく呟いた。

その手には、ミイラ化した死体から見つけた紙の束と、先ほどの赤い騎士が消えた後に残っていた濃い藍色の球体が握られている。

「あの白衣の死体が持っていた紙の束は、ここの研究記録だ」

ゆっくりと立ち上がり、クレイグは来た道に戻っていく。

その道でクレイグがぼつりぼつりと説明した内容は、一行には到底信じられるものはなかった。

「あの記録には実験の被験者の名前が書かれていた。さっきの騎士、セイレンさんの名前も。」

「……リウスくん、セイレンⅡウインザーの名前は聞いたことがあるだろうか？」
アンジェリカが沈痛な面持ちをしている中、リウスは静かに頷いた。

ルーンミッドガッツ騎士団のセイレンⅡウインザーといえば、シユバルツバルド共和国でも耳にするほどの非常に高名な騎士だった。

兄セイレン、そして弟ベネデイクト。このウインザー兄弟は現在のルーンミッドガッツ騎士団の中心人物でもあり、特に兄であるセイレンⅡウインザーはありとあらゆる任務をこなし、ルーンミッドガッツ王家にも認められる程の多大なる業績を得ていた人物だ。

義理深く、人間味に溢れ、王国騎士としての度量や技量も頭一つ抜けているのだと。冒険者として各地の流浪を繰り返しながらも、次の王国騎士団団長に最もふさわしい騎士とも言われ……。彼のことを、まるで英雄の再来であるかのように呼ぶ声すら聞いたことがあった。

「……セシル姉の名前もあつたんですね？」

セシリアの端正な顔は悔しさと憤りに満ちているかのように歪んでいた。

セシリアの言葉にゆっくり頷くと、クレイグは静かに口を開いた。

リウスは、これ以上クレイグの言葉を聞きたくはなかった。

「……ああ。セシルⅡデイモンの名前もあつた。そして、リウスくん。カトリーヌⅡケ

イロンの名前も記されていた」

リウスの頭はこれ以上ない程に落ち着いていた。

ああ、やはりそうなのか、と。

予感があった。

その予感はこの研究所に入ってからではない。

先生が、そしてカトリーヌが消えてからだ。

その時にはまだ希望があった。

どうか二人ともリヒタルゼンに向かっていないでくれ、と何度となく心の内で祈った。

しかし、リヒタルゼンに二人がそれぞれ訪れていたことを知ると、吐き気を伴うような嫌な予感が一気に膨れ上がった。

それでも、そうした中でも、どこかでひよっこりと二人が顔を出してくれると信じていた。

全てを見透かしているかのようにでいながら、いつも優しくそうな眼差しを向けてくれる先生の顔。

凛と背筋を伸ばしながらも、儚げに弱みを見せないようにしているカトリーヌの顔。その二人の優しく、うつすらとした笑顔を思い浮かべた。

リウスは急に足の力が抜けるのを感じると、その場に尻餅をついた。
「リ、リウスさん」

アンジェリカがリウスの腕を掴んで、優しく引き起こす。

「あ、あれ？　だ、大丈夫、大丈夫よ。私は、大丈夫」

しつかりと皆に告げたはずの言葉は、あまりにも小さい声だった。

アンジェリカへ笑顔を向けたはずだったが、アンジェリカはとても悲しそうな顔で目を伏せている。

「ごめんなさい。早く、ここを出ないと」

リウスはそう呟くと、出口へ繋がる道をゆっくりと戻っていく。

黙ったままのセシリアがリウスの前に立って周囲を索敵する中、クレイグがリウスへと近付いてくる。

「すまない、リウスくん。これは君が持っていてくれ」

クレイグが手に持っていた物は、濃い藍色の球体と、手の平ほどの石の欠片が入っているガラス管だった。

「これは？」

「・・・あの研究者の死体が持っていたものだ。奴の記録はカトリーヌⅡケイロンへの記述がほとんどだった。あのハイウィザードなら、このユミルの心臓の魔力として適任か

もしれないと」

クレイグは手に持った二つの物を皮袋に詰めてから、リウスに手渡す。「外に出てからこの記録を読んでもらうが……、皆も聞いていてくれ。」

この研究所の目的は、生命や魂を人工的に生み出すことだったようだ。新たな生命を作り出す技術、機械の人形に人のような思考を生み出す技術、そして強大な力を持った冒険者の魂を取り出し、複製する技術だ」

誰も返事をしない中、クレイグはまるで独り言のように説明を続けた。

「研究所の初期実験である人間の魂を複製する技術は、スラム街の人間、そして未熟な冒険者を利用することで成功したようだ。その次は、力のある冒険者達。つまり……」
クレイグの言葉はそこで途切れた。

クレイグはゆっくりりと深呼吸をしてから、強い語調で続けた。

「つまり、この連中はあの人達を使って実験をした。……まあ、実験は不十分だったようだけどね」

セシリアとアンジェリカがクレイグを見る。

「ダンナ、どういうことだ？」

セシリアが険しい顔をしたまま声を上げる。

クレイグは自嘲気味な笑みを浮かべると、セシリアの顔をちらりと見た。

「セイレンさんはあの程度じゃない。本物のセイレンさんは、あんな簡単に仕留められるような人じゃないんだ。もつと、とんでもなく強い。僕らではとても太刀打ちできないくらいにね」

アンジェリカは何も言わずに俯き、セシリアが「あれよりも・・・？」と信じられないかのように呟いている。

クレイグは静かに歯噛みをしてから、もう一度口を開いた。

「話を戻そう。この実験の根幹になっているのは、アインブロックで発掘された、ユミルの心臓の欠片という巨石だったらしい。その一部が、そのガラス管に入っているそれだ」

リウスは何の感慨もなく、先ほどクレイグから受け取った皮袋へと目をやった。

「そのユミルの心臓を基に、奴らは冒険者の魂の複製を行なった。憶測ではあるが、ヴァルキリーの祝福が打ち消されているのも、このユミルの心臓が原因なのかもしれない。

そしてカトリーヌⅡケイロンの魔力をもって、更なる実験を行なおうと計画していたようだ。しかし、そこで何かの事故が起こって研究所は崩壊した」

クレイグは至って他人事のように説明していたが、それは偽りだと全員が悟っていた。

一行は牢屋の並ぶ通路を進んでいく。

「この記録の途中には殴り書きがあった。あの研究者はユミルの心臓の一部、そしてもう一つ、そのカトリーヌ・ケイロンの複製された魂を持って脱出しようとしていたようだ」

リウスはぼんやりとした瞳で手に持った袋を見つめた。

「これが、カトリーヌ……？」

その言葉を聞いたクレイグは自身が持っていた藍色の球を強く握りしめた。

これは先ほどの赤い騎士が消えた後に残っていたものだった。

クレイグはしばらく黙ってから、話を続けた。

「あの研究者も、このユミルの心臓という石が何なのかは分かっていたいなかったようだ。

そういういた物の研究は、ゲフエンよりも君の住むジュノーの方が優れているだろう？

しかもあの街はシユバルツバルド共和国の首都でもあるし、レッケンベル社もおいそれ

と手を出せる場所ではない。

だから、それは君に預ける」

一行は牢屋の立ち並ぶ通路を抜けると、出口に繋がる小道へと足を踏み入れた。

周囲を警戒するリウスだったが、もう一方で様々な感情が頭の中をぐるぐると駆け

廻っているのを感じていた。

(何で、こんなことになったのか・・・)

先生がリヒタルゼンへ出向いたまま消息を絶ったのが最初だった。

先生はレッケンベル社について独自に調査を行なっていたようで、そして共和国大統領の依頼を機にリヒタルゼンへと向かい、そのまま消えた。

私が二度と近付きたくなかったリヒタルゼンへ向かったのも、先生を探すためだった。

しかしいくら調査しても先生は見つからなかった。

そして二ヶ月ほど経った時、一旦調査を切り上げて私はジュノーへ戻った。

——リウスさんのお友達の、カトリーヌさんって人が任務のついでに会いに来てましたよ。

ねえねえ。あの人って、ゲフェンにいるあのカトリーヌさんよね？

ジュノーに戻った時、知り合いのセージからそう伝えられた。

任務のこともあるが謝りたいことがある、と言っていたとのことだった。

あの日のゲフェンのことを言っていたのかもしれない。

しかし、あれはどう考えても私が悪かった。

何故、私はあの時すぐに謝らなかつたのか。

カトリーヌは私がリヒタルゼンに知っていることを知ると、私を追いかけるようにリヒタルゼンへ向かう飛行船に乗っていったそうだ。

何でこうなつたのか。理由なんて簡単だ。

先生は、私と私の両親のことをいつも気にしていた。

一緒に暮らしていた頃、以前借りた魔法書を探すため先生の部屋へ忍び込んだ時に、当時のリヒタルゼンについての膨大な調査資料を見つけた。

何故あんなことになつたのかと、口では言わなかつたが先生はいつも考えていたよう
だ。

ふと、私は気が付いた。

私が逃げ続けていた運命が、また私を追いかけてきたのだと。

『運命はいつも貴方と共にいる』。

かすかな記憶の中で、女神ヴァルキリーに伝えられた言葉だ。

あの時のスラム街。お婆ちゃんがいて、エミールがいて・・・。

エミールは、私が殺したも同然だ。

お婆ちゃんも私達のために無理をして、それが祟って死んでしまった。

そして先生に連れられてゲフェンで暮らしていた私は、穏やかな日々よりも・・・あの復讐を望んだのだ。

あの時の先生の顔は、よく覚えている。

そして、先生は真実を知りたがっていた。

その最後の引き金を引いたのが、あの復讐だったとしたら。

カトリーヌがこの街に訪れたのは・・・私が原因なのだとしたら。

何で、こうなったのか。

私はまた、繰り返したのだ。

小さな口笛が聞こえて、リウスははっとした。

バリケードが散乱している広場に入った一行だったが、セシリアが辺りをしきりに警戒している。

「・・・どこだ、セシリア」

「分からない。けど、確かにいる・・・」

セシリアがそう呟いた瞬間、かすかにいくつもの風を切る音が聞こえた。

そして光る防壁が砕ける音と共に、セシリアの背中へ深々と数本の矢が突き刺さった。

「がっ!!」

全員が驚愕の表情を浮かべた時、誰よりも早く動いたのはアンジェリカだった。

「ニューマッ!」

アンジェリカが即座に呪文を唱えると、一行の中心に青く輝く光の柱が出現した。

そして次々に襲い来る鋼鉄の矢が空中でびたりと止まる。

ニューマの魔法は遠距離から放たれた矢や弾丸を止める効果を持っている。

アンジェリカは一行の中心にその魔法を放ったのだ。

しかしその瞬間に、周囲から放たれた尋常でない殺気が広場を覆っていった。

誰かが飛び込んでくる気配にクレイグが大剣を使って防御すると、重厚な金属音が辺りに響き渡った。

飛び込んできた人間は大斧を手にしたブラックスミスの男性だった。

そしてその両目は、光り輝く赤い目をしている。

「うおおッ！」

大斧を受け止めたクレイグが赤い目をしたブラックスミスを弾き飛ばす。

その瞬間、リウスはセシリアを治療しようとしているアンジェリカの背後で何かの影が揺らめいたことに気が付いた。

「危ないっ！」

リウスはカウンターダガーを引き抜くとアンジェリカを突き飛ばし、鈍く光る短剣のようなものを弾き飛ばそうとする。

しかし、光り輝く防壁が碎かれながらも短剣を受け止めた時、いつの間にかリウスの両肩と左腕が深く切り裂かれていた。

揺らめいた影は、真っ黒い服に汚れた布を巻きつけた痩せぎすのアサシンだった。

リウスに手傷を負わせた男は、現れた時と同じように赤い目を輝かせながら音もなく消えていった。

クレイグはブラックスミスの男と戦っているが防戦一方のようだ。

セシリアは矢傷を負いながらも何とかクレイグの援護を行なおうとしている。

アンジェリカはセシリアとリウスに対して治癒の呪文を放とうとしていた。

その時、一行の中央に赤いマントを翻した男が飛び込んできた。

その男は巨大な大剣を地面に突き刺すと、小さな声で何かを呟いた。

その瞬間、大剣が突き立った地面が膨れ上がり大きな爆発が起こった。

一行はそれぞれ大きく吹き飛び、リウスは肩と腕に激痛を感じながら地面を転がっていく。

少し遠くで何かを突き刺す音や金属音、そして小さな悲鳴が聞こえてくると、すぐに辺りは静けさに包まれた。

「くっ……。み、みんな」

傷だらけだが、何とか動くことができる。

ようやく起き上がったリウスだったが、静かにこちらへ歩いてくる足音に気付き、そしてその姿を見て声を失った。

薄いクリーム色の短い髪。

まだあどけなさの残った顔つき。

その肩には少女の外見に似合わない立派な毛皮のマントがかけられている。

そして、その両目は血のように真っ赤に光輝いていた。

「カト、リーヌ……。？」

目の前の少女が無表情のまま小さく何かを呟くと、リウスの周囲にいくつも氷の柱

が突き立った。

それらはリウスの体を取り囲むように固まっていき、腹部から両足にいたるまで下半身の全てが凍りついていく。

薄暗がり立つカトリーヌの周りには、まるでカトリーヌを守るかのように、幾人も人間たちが静かに立っていた。

巨大な大剣を肩に構えている騎士、血に塗れた大斧をいとも簡単に手に持っているブラックスミス、存在すらおぼろげな痩せぎすのアサシン、大弓を携えた狩人の女性、聖職者のような礼装姿の女性……。

そしてその全員が真つ赤な目をしていて、薄暗がりの中でも光り輝いているかのように見えた。

「カ、カトリーヌ……。カトリーヌ、よね？」

彼らの中心に立つカトリーヌは無機質な表情でリウスを見つめている。

「カトリーヌ、帰りましょう？　こんなところにいたら、駄目よ。危ないわ。それに、いっぱい話したいこともあるのよ」

カトリーヌが持つ紫色の杖に、尋常でない魔力が集まっていく。

「わ、私は、あなたに会ったら伝えたいと思ってた言葉があるの。あなたがいつも言っていた言葉。会えてよかったって。あの言葉は、私こそあなたに伝えなくちゃいけなかった

のよ。

カトリーヌ・・・、お、お願いだから、返事をして」

カトリーヌの杖に集まった魔力は凝縮に凝縮を重ね、そして広場を覆う程の、青白い巨大な雷撃へと姿を変えた。

声が、震える。

この魔力は間違いないカトリーヌのものだ。

真つ青で巨大な魔力が、膨れ上がっていく。

「私は、あなたに会えてよかった。でも、私はあなたに出会うべきじゃなかった。いつも、いつだって私が、わ、私のせいで、こんな」

カトリーヌは青白い雷撃を帯びた杖を、静かにリウスへと向けた。

「カ、カトリーヌ。ねえ、カトリーヌ・・・？ 大丈夫、きっと大丈夫よ。返事を・・・」

カトリーヌの杖から、巨大な雷撃が放たれた。

そしてそれは青白い閃光のように、目の前を覆い尽くしていく。

身体には痛みも何もなかった。

ただ目の前が真つ白になって、わずかに身体が消えていくような感覚があるだけだ。

自分が何を考えているのかも分からない。いや、何も考えていないのかもしれない。そんな些末なことで、カトリックや先生、エミールやお婆ちゃん、父さんや母さんへ向けた、後悔の気持ちだけが微かに頭へ残っている。

そしてその意識も徐々に薄れていき・・・意識が途切れる瞬間には、自分の身体が何かへと引きずり込まれるかのような感覚だけが残っていたのだった。

第四十話 決戦

「……これで終わりだ、ガンダールヴ。君の情報はとても役に立った。後は、僕自身が見つけに行くだけだ」

ワルドは低い声でそう言うと、ぐったりと壁にもたれかかるリウスの首へ、杖を向けた。

「この野郎、やめろ!! おい、早く起きろ相棒! おい!!」

デルフリンガーが慌てて大声を出すも、リウスはぴくりとも動かない。

ワルドはその様子を無感情な顔で眺めながら、ぽつりと口を開いた。

「……すまない、ミス・リウス。もう君の妨害をこれ以上許す訳にはいかない。ここに残していくことも君のためにはならないだろう。これは、必要な犠牲なんだ」

ワルドが、短く呪文を唱えていく。

「ウインドカッ 「マジッククロッド」

俯いたままのリウスが小さく呟くと、ワルドの構築していた魔力が砕け散った。

形となりかけた真空の刃は力を失い、音も無く霧散していく。

「な・・・なに・・・?」

「カトリーヌは、やつと皆を守るために力を使えると笑ってた」

生々しい火傷がリウスの肌を焼いていたが、それに意も介さずにリウスはデルFRINGERを手に取り、ゆっくりと立ち上がっていく。

「よ、よし相棒！ 嬢ちゃん連れて早く逃げろ！ ここのメイジと合流すりゃ何とかする！」

デルFRINGERの言葉にも答えず、リウスは痛みを感じていないかのように立ち上がると、ワルドを見ないまま一人呟いている。

「先生は、私を助けようとしてくれていた。いつも、いつも。自分が辛いだなんて顔にも出さないで、いつも笑ってくれてた」

「何故、動ける・・・っ！」

先ほど目の前の使い魔が呟いた『マジックロッド』という言葉。あの魔法は、先の戦いでも使われていた。

信じられない話ではあるが、おそらく魔法を打ち消す効果を持つ、東方の魔法なのだろう。

しかし今、この使い魔は自身の杖であるはずの武器など手にしてはいなかった。

にも関わらず、この女は、魔法を使ったのだ。

「おとなしく寝ていろ!!」

得体の知れない恐怖に冷や汗を流しながらも、ワルドはブツブツと呟いているリウスから数歩後ろへ下がった。

無駄だと悟りながらも底が見え始めている精神力を振り絞って、次こそおとなしくさせるためにエアハンマーの呪文を詠唱していく。

この時、自分は何故この女に近づきたくないという感覚を持っていたのか、ワルドには分からなかった。

「エア・・・」

「スペルブレイカー」

今度は呪文を唱え終わる前に、ワルドの魔法が掻き消されていく。

「く、くそっ・・・!!」

「リイズ。あの子は学院に帰って、立派なメイジにならなくちゃいけないのよ。

ねえ、リイズはどこにいるの？　なんで、皆をあんな目に合わせたの？

・・・ねえ。答えなさいよ、あなた」

リウスは顔を上げて、うつすらと笑いながらワルドを見据えた。

ワールドはその視線に背筋が凍りついた気がした。

この女は、正気ではない。

「相棒……?」

デルフリンガーを持った左手のルーンが徐々に輝きを増していく。

その輝きに合わせて、リウスはくすくすと笑い始めていた。

「く、くは。くはははははッ!!」

甲高い笑い声が礼拝堂に響き渡る。

「あなたが、あなたがそうなのね! 父さんを! 母さんを! おばあちゃんを! エ

ミールを! 先生を! カトリーヌを!!

ようやく見つけたわ! 私の運命を! 次はルイズだつて言うのね!?! 許さないわ

! 許されないわ! そんなこと!!」

「……!? あ、相棒っ! 落ち着け! 心を落ち着かせろ!!」

デルフリンガーが叫ぶが、リウスは気にもせず、心底面白そうに笑い続けている。

その両目からは、涙がこぼれ始めていた。

デルフリンガーは思い出したように確信していた。

リウスの心の震えが、ガンダールヴの力をこれまで以上に強く引き出している。

しかし、それだけではなかった。

デルフリンガーにリウスの魔力が流れ込み、デルフリンガーと混じり合った魔力がガンダールヴの力を更に増幅させ続けている。

ルーンの光と共にガンダールヴの力が高まり続ける中、デルフリンガーはリウスの感情がとめどなく強まっていくことに気付き……、同時にそのあまりにも強すぎる感情に言葉を失った。

あまりにも深い悲しみと絶望。

何に向ければいいのかも分からない、暗く溢れんばかりの怒りを。

悲しみも、絶望も、恐怖も。何もかもが、憎しみに塗り潰されていく。

「許さない！ 私はお前たちを許さない！ 神も、運命も！ これ以上は、許してたまるか！

嬉しいわ、ようやくお前たちを殺してやれる！ 八つ裂きにしてやる!!」

リウスの瞳がワールドへ向いた瞬間、ワールドは電流が走ったかのように即応していた。思考に至る前にルーンを唱える。

それは正に、幾多の戦いを潜り抜けてきた故の直観だった。

「フライ!!」

「ヘブンズドライブ!!」

ワールドと偏在たちが間一髪空中へと浮き上がると、礼拝堂の半分近くの床が一瞬落ち窪み、次の瞬間には轟音と共に床が宙へと吹き飛んでいた。

見ると、身の丈の倍ほどもある石柱達が地面から突き立っている。

「な、何だこれはっ!!」

ワールドは眼下の光景に戦慄していた。

この魔法の威力はトライアングル・スペルを優に超えている。それを、一瞬の内に……!

空に浮かび上がった男を目で追っていたリウスは、ただ身体中を駆け巡る莫大な魔力の感覚にのみ身を預けていた。

目の前の視界は真っ赤に染まり、手元で叫ぶように呼びかける声も単なる耳障りな雑音となって聞こえてくる。

「ソウルストライク!!」

デルフリンガーがリウスを止めようとする言葉にすら意にも介さずに、リウスの周囲にいくつもの巨大な光の球が浮かび上がる。

それらは尋常でないスピードで光の尾を引きながらワルドたちへと襲い掛かった。

「くそっ! エアハンマー!」

「エアハンマー!!」

ワルドはフライの呪文を解き、高速で詠唱したエアハンマーの呪文を光の球へ向けて撃ち出した。

同時に二人の偏在たちも同じようにエアハンマーを放つ。

迫りくる複数の光の球は風の塊に反応して爆音を鳴らしながら弾け飛んだ。

その光景を見たリウスは驚くような顔すら見せずに、凄惨な笑みを浮かべていた。

「……いいわね、その調子よ。魔法を習ったかいがあるわ。もっと、楽しませて」

リウスは先程の剣幕から一転、歌うようにそう言うのと、そのままデルフリンガーを両手に構え直して着地した本体のワルドへと切り掛かった。

横から飛び出してきた二体の偏在がデルフリンガーを受け止める。

そのまま偏在たちが左右から怒涛の攻撃を仕掛けるも、リウスは先程以上の身のこなしで攻撃を受け流しつつ、楽しそうに笑ったままだ。

ワールド達の猛攻をくぐり抜けたリウスが、小さく何かを呟いた。

その瞬間、リウスを襲っていた二体の偏在が左右に大きく吹き飛ばされる。

「なっ!?!」

「ファイアーウォール」

地面に打ち付けられた片方の偏在が立ち上がろうとした瞬間、リウスがなぞるように指し示した地面から大きな炎の壁が吹き上がった。

偏在は立ち上がろうとした体勢のまま燃やし尽くされ、そのまま炎に塗れて見えなくなってしまう。

「貴様……、何をした……!」

本体のワールドの言葉に、リウスは左手で口を隠しながらくすくすと笑っている。

「あなたも知ってるでしょう? 『ナパームビート』よ」

ワールドはハツとした顔を見ると、次の瞬間には怒りの表情を浮かべていた。

「貴様は……! あの時、本気じゃなかったのか!!」

「あなた、うるさいわ。その口を削ぎ落とせば静かになるのかしら」

デルフリンガーが何とか止めようと声を掛け続けているが、リウスは気にも止めずにデルフリンガーを持った右手から構築した魔力を流し込んでいく。

「オートスペル」

その言葉を皮切りに、歯を食いしばったワルドの偏在が矢のように地面を蹴った。

そして本体のワルドも、偏在を巻き込む形で高速詠唱した魔法を解き放つ。

「ウインドカッター！」

「マジックロッド」

しかしリウスはデルフリンガーを下ろしたまま、本体のワルドを見もせず瞬時に魔法を破壊する。

肉薄した偏在が閃光のような突きを何度も放つが、リウスはほんのわずかな身のこなしでその全てを避け切り、そのまま一転してデルフリンガーで幾たびも切り掛かっている。

明らかに、先程とは動きが違っていった。

『風』を読まなければ躲すどころか受けることすら出来ない速度、そしてこの斬撃の重症。

ワルドの偏在は尋常でない速度の斬撃に、ルイズを人質に取るどころか瞬きをすることきえ恐れながらギリギリのところまで耐え続けていく。

しかし偏在はいくつもの傷を受けながらも高ぶった感情を静め、冷静にリウスの動きを分析していた。

「デル・ウインデー！ ウインド……」

「スペルブレイカー」

偏在の呪文が即座に破壊される。

しかし本体のワルドは、今だ！と胸の内で叫んでいた。

「ライトニング!!」

本体のワルドがリウスに杖を向けると、杖の先から強烈な閃光と共に電撃が四方八方へ向けて飛び交っていく。

突然の光と雷撃に目を細めたりウスは、即座に偏在を壁にすると、目を眩ませたままデルフリンガーを大きく横なぎに振るった。

しかし、偏在は歯を食いしばりながら何とかそれを受け止め、高速で自分の背後に風の層を作り出す。

雷撃が風の層に沿ってあらぬ方向へと流されていく。

「(っ)までだ！ ガンダールヴ！」

偏在はそう叫びながらデルフリンガーを全力で弾き返し、真下からリウスの喉へ向けて突きを放とうとする。

しかしその時、目に映ったリウスの表情に、ワルドの偏在はまるで周囲の時間がコマ

送りになるかのような感覚に襲われていた。

楽しそうに小虫を捻り潰す子供のような、悪戯っぽい、残酷な笑み……。

そしてリウスの持つデルフリンガーが赤く、強く光り輝き……、ワルドの目前へいくつもの燃え盛る炎の槍があつという間に形作られていく。

次の瞬間には偏在の胴体に複数の炎の槍が突き刺さり、更に吹き飛ばされた偏在の頭上から無数の炎の矢が降り注いでいく。

ワルドの偏在は驚愕の表情を浮かべたまま一瞬の内に爆炎に巻かれると、後には何も残らず消え失せていった。

「馬鹿、な……」

本体のワルドは傷ついた手で杖を握りしめながら驚愕に目を見開いていた。

杖を持ったワルドの右腕は自身の雷撃によって酷い火傷を負っていた。

そうまでしたというのに、目の前の女性は魔法による疲れどころか、息一つとして切らしてはいない。

軽くデルフリンガーを振るい、微笑みを浮かべながらこちらを見つめている。

「ば……化け物め……!」

ただ一人残った本体のワルドが吐き捨てるように言うと、またもリウスは甲高い声で笑い始めた。

「あつはははは!! あなたがそれを言うの!?! 私たちを、あの子たちを、あれだけ苦しめたつていうのに! 何度死んでも、いなくなつても、あなたみたいに形を変えて運命がやってくるのよ! 化け物はどっちだつていうの!?!」

「狂人が……!」

ワルドは引きつった顔のまま、リウスに向けて吐き捨てることしかできなかった。

ワルドはかつて持っていた恐怖の感情を、確かに今感じていた。

そして、確信していた。

このままでは、殺されると。

「痛……」

ルイズは痛む体をゆっくりと起こした。

聞いたことのある声が、笑っている。

高らかに声を上げて、礼拝堂に笑い声を響かせている。

意識を朦朧とさせながらも、痛む頭に小さく首を振ったルイズは礼拝堂の光景へと目を向けた。

少し先に、リウスがいた。

ワルドもいた。

リウスは何がおかしいのか、喉が張り裂けるほどに笑っている。

そうだ、さつきワルドに殺されそうになって・・・それで・・・。

「リウス・・・？ 何で、ここに・・・」

ルイズがリウスに向けて小さく呼びかける。

その声に、リウスではなくデルフリンガーが叫ぶように声を上げた。

「気が付いたか嬢ちゃん！ 相棒を止めてくれ！ このままじゃ相棒の精神力を吸い尽くしてしまうう！」

大きく笑っていたリウスが、ようやく気が付いたようにルイズへ顔を向けた。

「あれ、ルイズ。そこにいたの」

ルイズはびくりと身を震わせた。

リウスの目は焦点が合っていないように虚ろで、暗く、澱んでいるように見えた。

その顔はかすかな涙の跡を付けながらも、とても楽しそうな笑顔を浮かべている。

「そこで待ってて。今すぐ、こいつをバラバラに殺してあげるから」

耳を疑った。

リウスの様子は明らかにおかしい。

リウスはあんな目をしない。

あんなことを、言ったりなんてしない。

顔を強張らせたルイズに、リウスはにこりと微笑むとまたワルドへ向き直った。

―戦いは、嫌いな。

ルイズはリウスの言葉を思い出しながら、凍りついたようにその背を見つめていた。

ルイズには、さつき見た顔とその背中が、何故かあまりにも悲しそうな姿に見えたのだった。

リウスがよそ見をしているのはワルドにとって絶好の機会だった。

しかしワルドは、恐怖に抗いながらも動くことができないでいる。

そして、リウスは笑顔を張り付けたまま、ワルドへと向き直った。

ぎよつとしたワルドの様子を見つめたまま、リウスは小さく呟いた。

「アーススパイク」

その瞬間、はっと我に返ったワルドは地を蹴って足元から突き立った石柱を回避すると、その勢いのままリウスに襲い掛かった。

しかしリウスはデルフリンガーの切っ先でワルドの杖を軽く受け流して、その柄をワルドの左胸に叩き込む。

「ぐうっ！」

ワルドが体勢を立て直すために後ろへステップを踏む。

リウスは薄い笑顔を浮かべたまま、ワルドへゆつくりと近付いていく。

「ゴールドボルト」

ワルドの頭上から複数の鋭い氷の槍が降り注いだ。

ワルドが瞬時に風を操りそれらの軌道を変えることに成功したが、その何本かはワルドの体に傷を作っていく。

リウスはそのままワルドへ近付いていき、隙だらけになったワルドの肩口へデルフリンガーを振り下ろした。

「くたばれ」

「フ、フライ！」

目に追えない程の速度でデルフリンガーが振り下ろされるも、ワルドは左腕を深く切

り裂かれながら間一髪宙に身を翻した。

しかしその姿を目で追うリウスはくすくすと笑ったかと思うと、ワルドへと顔を向けた。

「間抜けね、あなた」

宙に浮かびあがったワルドの頭上で、空気が弾ける音がした。

「ライトニングボルト」

「ウ、ウインド……」

ワルドが空気の層を作るも、間に合わない。

頭上から落ちた強力な雷撃にワルドが短く悲鳴を上げると、力無く地面へと落ちていく。

低い音と共に落下したワルドが小さく呻き声を上げている。

痛みに歯を食いしばりながら、火傷で傷ついた右腕を動かそうとしていた。

「ぐっ……が……」

「あら、生きてるの？ やっぱり駄目ねえ。ライトニングボルトはいつまで経っても苦手だわ」

ワルドがなんとか起き上がろうと力を込めるが、どうにもできないようだ。

リウスはその姿を静かに眺めながら、地面に転がっているワルドへとゆっくり近付い

ていく。

「そうだ、さっきのゴールドボルトならちようどいいわ。腕も足ももぎ取ってあげる」
「や、やめろ相棒……。そこまでやらなくなつて、嬢ちゃんだつて喜びは……。」
「うるさい。黙りなさい」

苛立つたようにリウスが声を上げた。しかしデルフリンガーは続ける。

「相棒は、ルーンに操られちまつてるんだ。こんな感情、人には耐えられねえ。心を落
着かせて……。」

「黙れ!!!」

リウスが叫ぶ。

その声にデルフリンガーはかちやつと柄を鳴らして口を閉ざした。

リウスは地面に転がったワルドをぎろりと睨み付けた。

「お前が、お前たちが悪いんだ。全部、皆いなくなつたのは、お前たちのせいだ……。！」

どうせお前はまた私の前に現れる!! 何度来たって、何度でも殺してやる!!!」

リウスの左手のルーンはこれ以上ない程に光り輝いていた。

そのままリウスの頭上にいくつもの巨大な氷の槍が形作られる。

しかし次の瞬間、ワールドが甲高い指笛を鳴らした。

絹を裂くような鳴き声と共に、礼拝堂のステンドグラスが砕け散った。

そこから飛び込んできた大きな影がリウスへと襲い掛かる。

リウスは強烈な殺気を湛えた顔で、その影を睨み付けた。

「邪魔を、するな!!」

数本の巨大な氷の槍が風を切る音と共にその影へと撃ち出される。

しかしその影は瞬時に身を翻して氷の槍を躲すと、かすった傷から血を流しながらもリウスにその爪を向けた。

リウスはデルフリンガーで咄嗟に爪を受け止めるも、その巨体の勢いに押されて吹き飛ばされていく。

その巨体は、ワールドのグリフォンだった。

リウスはデルフリンガーで滑らせるようにその巨体を受け流しながら、グリフォンの横腹へ向けて即座にナパームビートの魔法を放つ。

グリフォンは叫び声を上げながら大きく吹き飛ばされるが、空中で身を起こすとワールドへ向かって飛んでいく。

そのままスピードを緩めずに、グリフォンは爪で器用にワールドを拾い上げると、大き

く羽根を広げて逃げるように飛び去ろうとしていた。

「逃がすか!!」

体勢を立て直したリウスの頭上に、数メートルもある渦巻く炎の球が浮かび上がる。

それをグリフォンに向けて撃ち出そうとした時、どん、とリウスの身体に誰かが抱きついてきた。

「駄目!! リウス!!!」

リウスはびくりと身を震わせた。

炎の玉が徐々に勢いを弱めて、消えていく。

それでもリウスがもう一度体に力を込めてグリフォンを見上げた時には、もうグリフォンの姿は見えなくなっていた。

「そんな・・・」

グリフォンが飛び去った大きな窓を見つめながら、リウスは震える声で小さく呟いた。

「何で、何で邪魔するの、エミール……。だってあいつが、あなたを、こ、こ、ころ、殺して……」

がらん、とデルフリンガーが地面に落ちた。

リウスは両手で頭を抱えながら、ぶるぶると震えている。

武器を持っていないにも関わらず、リウスの左手のルーンは未だに周囲を照らす程の強い光を放っていた。

「何でいつも、邪魔を……。何で、わたしに笑いかけるのよ……。だって、だから、先生も、カトリーヌも、みんな、みんななくなっちゃったのに。」

ぜ、全部殺さなくちゃ、わたしが殺さなくちゃ、また、みんな、なくなっちゃうから……。」

ルイズには信じられなかった。

あのリウスが、こんなにも弱々しい声で身体を震わせている。

リウスに抱きつきながらも頬に伝った涙を拭って、ルイズは力の限り叫んだ。

「私は、いなくならない！　いなくなったりなんてしない!!」

「嬢ちゃんを見ろ！　見るんだ相棒！　相棒が守りたいのは、嬢ちゃんだろうが!!」

デルフリンガーが叫ぶのと同時に、大砲の音や爆発音が礼拝堂を揺らした。王党派と貴族派の決戦が始まったのだ。

「くそっ！ 戦いが始まっちゃった！ 今すぐ逃げろ、二人とも！」
城の外から聞こえてくる轟音を背景に、デルフリンガーはわめいた。

その時、ふつとリウスの力が抜けた。

地面に膝をつき、リウスは荒く呼吸をしながらぼんやりと周囲を見回す。

滝のような汗を流しながら、そのまま混乱した表情でデルフリンガーへ目を向けた。

「……デルフ？ リウスは、どこに」

リウスの左手のルーンが徐々に輝きを無くし、次第に消えていく。

「リウス！」

リウスがしやがみこんだリウスの顔を覗き込むと、リウスは青白い顔のままにリウスの顔を見つめた。

「……リウス？ ああ、よかった。無事だったのね」

「相棒、正気に戻ったか!? 早いとこ逃げねえと！」

リウスは蒼白な顔を周囲に向ける。戦う兵士達や貴族達の怒号が礼拝堂にまで聞こえてきていた。

イーグル号もとつくの昔に出港していることだろう。

もう、逃げる時間なんて残されていないのは明白だった。

荒れた呼吸の中、リウスは何とか唾を飲み込むと、口を開いた。

「・・・デルフ。敵は五万、だったわよね」

「あ、ああ。そうだ」

リウスはゆっくりと立ち上がって、焦るルイズを強く引き離すと、転がるデルフリンガーを手を取った。

そのままふらつきながら礼拝堂の扉に向かっていく。

「え・・・。リウス、どこに・・・」

ルイズがリウスの傍まで駆け寄ると、その手を握って引き留めようとする。

「敵を止める」

「あ、相棒。無茶いうな、五万だぞ」

「五万だろうが十万だろうが、ルイズを殺させる訳にはいかない」

「馬鹿か!! 俺がここで喜んで送り出すとも思ってたのか!?!」

「言っただはずよ。ワールドが裏切ったら『共倒れ』だって。どうせ死ぬなら、少しでも止め

てみせる」

「いやだ・・・!!」

ルイズが叫び、リウスは朦朧とした表情でルイズを見る。

リウスの手を握るルイズの手はかすかに震えていた。

「行っちゃ、やだ。一緒にいて、リウス」

涙ながらに訴えかけるルイズを見て、リウスの心の奥で何かが折れる音がした。

リウスはしばらくその姿を眺めてから、小さく笑った。

「私も怖いわ、ルイズ・・・。そうね、一緒にいよう」

二人は地面に座り込み、壁に寄りかかりながら礼拝堂を震わせる轟音の中にいた。しばらく二人は何も言わずに、じっと城の中に響き渡る音を聞いている。

怒号や爆発音は既に城の内部にまで迫ってきていた。

ここに敵が押し寄せるのも、時間の問題だろう。

ルイズがリウスの左肩に頭を乗せる。

リウスは黙ったままルイズの頭を撫でようとして、右腕を走る痛み小さく呻いた。

「・・・傷が痛むの？ リウス」

「いたた、大丈夫よ」

リウスの右腕は酷い火傷に覆われていた。

全身にも痛みはあるが、特に右腕が酷い。

ワルドの電撃を受けた時、デルフリンガーを持っていたからなのだろうか。

「怖かったわ・・・。ワルドのこともそうだけど、私の知ってるリウスがもう戻ってこない気がして・・・。」

本当に、よかった・・・」

「心配かけてごめんね・・・。わたしは、いつも謝ってばかりだわ・・・」

小さく呟いたリウスはそっと目線を落とした。

そして、先程思い出した記憶をもう一度思い返していく。

轟音に揺れる礼拝堂の中でしばらくそうしていると、横に座るルイズが静かに寝息を立て始めていた。

緊張の連続で疲れ切っていたのだろう。仕方ない話だと思いつながら、これからどうなるのか、リウスはゆっくり考えを巡らしていく。

「わたしも、疲れちゃったな・・・」

誰に言うでもなくリウスは呟いた。

そして、そつと考えを途切らせると、リウスは寄り掛かるルイズの重みを感じながら目を閉じた。

そうしていると、急速な眠気が頭の中に広がっていく。

「あんな戦いの後だ、休んどけよ相棒。短い付き合いだったが、楽しかったぜ」
横に転がるデルフリンガーが小さく笑いながら声を出した。

リウスは少しだけ目を開けてデルフリンガーに笑い返す。

「デルフにも世話になったわね。本当に短くて、申し訳ないわ」

「いいから寝とけ。敵の連中には俺たちが説明しといてやるからよ。トリスティンの大使だから優しく扱ってやれってな。ああ、ガリアかロマリアってことにしとくか？」

「ふふつ、任せるわ。デルフ」

リウスが小さく返すと、かちやかちやとデルフリンガーが柄を鳴らしている。

ふと、リウスは礼拝堂にあるブリミル像の足元へと顔を向けた。

そこには音も無く横たわっている、ウエールズ殿下の亡骸があった。

「殿下……、すみません……。約束は、果たせないかも……」

目がかすみ、身体中がじんわりとした虚脱感に包まれていく。

「先生……、カトリーヌ……」

ぼんやりとした感覚の中、目に映る暗闇へ向けてリウスは呼びかけた。

二人の顔を思い出すまいとすればするほど、二人の優しい表情や幸せだった日々を思い出してしまふ。

「わたしは、どうすれば……いいと思う……？」

そうして、リウスの意識は次第に暗闇の中へ飲み込まれていった。

そして少し経った後、礼拝堂の割れた床石から、ひよっこりと茶色の生き物が顔を出したのだった。

第三章

第四十一話 いつかの夢 6つ目

ふと気付くと、リウスは暗い部屋の中にいた。

広々とした部屋には上等な家具や暖炉が置かれている。

ついさつきまで使われていたのか、部屋の中には入れたばかりの紅茶の香りや甘いスープの匂い、焼き立てのパンの香りが漂っていた。

そこはかすかに見覚えのある部屋だったが、一体どこでこの部屋を見たのか、思い出すことはできなかつた。

「……ルイズ? ……デルフ?」

リウスが弱々しい声で呼びかけるも、返ってくる言葉はない。

しかし、部屋の扉がきいっとゆっくり開いた。

見ると、先の部屋からは朝日のような明るい光が差し込んでいる。

リウスは奇妙な感覚を覚えながらも、怯えた感情を静めつつ、その部屋へと足を踏み入れていった。

入った部屋の中、閉め切られた大きな窓からは青々とした庭が見えていた。

どうやらこの部屋は一階にある居間なのだろう。先程の部屋と同様に、高価な家具等が置かれているようだった。

そしてリウスは、その窓へと静かに近付いていった。

外には、人がいた。

銀髪の男性に、薄い桃色髪の女性や少年、白髪の老人に年老いた老婆、クリーム色の髪をした少女。

そして、濃い桃色髪をたなびかせているルイズ、キュルケやタバサ、ギーシュやシエスタもいる。デルフリンガーもルイズの傍に立てかけてあった。

どうやら広い庭でピクニックでもしているようで、皆は庭に置かれたテーブルを囲んで食事をしている。

広げられたテーブルクロスには、ふつくらとしたパンや瑞々しいサラダが並んでいた。

「父さん・・・、母さん・・・、みんな・・・」

銀髪の男性は、懐かしい父の姿だった。

母も先生もおぼあちゃんも、エミールもカトリーヌもいる。

庭にいる全員が楽しそうに笑顔を浮かべてお喋りをしていた。

リウスはその光景の違和感すら忘れて、嬉しそうに顔をほころばした。

「よかった……」

そしてリウスはそつと窓を開けようとしたが、鍵がかかっているのか、その窓は開けなかつた。

がちやがちやと窓を開けようとしても、窓は一向に開かない。

窓の外にいる皆はこちらに全く気付いていない様子のままだつた。

焦つたリウスが窓の鍵を探し、もう一度外を見る。

しかし、日の光に照らされた外にはもう誰もいなかった。

それに気付いた瞬間、外の光はふつと消え、そこには満月に照らされた庭がひっそりと広がっているだけだつた。

「……あ、あれ？」

そして、リウスはハツと気が付いた。

部屋の中から綿をナイフで突き刺すような、奇妙な音が聞こえてきている。

背後から聞こえる音に、リウスは固く身を強張らせた。

何故か身体が動かない程の恐怖を感じ、耳を塞いでうずくまってしまうようになる。

ごくりと生唾を飲んで、リウスはゆっくりと音のする方へと振り返った。

背後、部屋の隅には、誰かが跪いていた。

その手には鈍く光る短剣が握られ、一心不乱にそれを振り下ろしている。振り下ろされている何かは、ぬいぐるみだろうか。

「運命は……いつも……」

その人影が小さく声を出した。その声に、リウスは短く悲鳴を上げる。

そのままリウスが後ずさって背を窓に預けた時、リウスは自分の身体が小刻みに震えていることに気が付いた。

「お前は……望んでいた……。望んでいたから……」

「い、嫌……。わ、私は……」

「お前が悪いんだ……。全部、皆いなくなったのは、お前のせいだ……」

「わ、わたし……は……」

人影が勢いよく顔を上げた。

一瞬、月明かりに映された薄桃色の髪が見えた気がした。

「忘れるな……！ 憎しみを忘れるな……！ 報いを忘れるな……！」

「いや……いやだ……！」

恐怖のあまりにリウスは目を固く瞑って、両手で耳を塞いだ。
しかし耳を塞いでいても、声はすぐ傍から聞こえてきている。

「お前は望んでいた！ 理由を望んでいた！！ もう一度繰り返せ！！ それは、すべて――」

「わたしが生き続ける目的となる!!!」

「いやああああああああ!!」

その重なった二つの声にリウスは力の限り叫んだ。

恐怖に身を預け、蹲りながら耳と目を固く閉ざしていた。

どれほどそうしていたのだろうか、気付くと周りは濃い霧に包まれたように、真白い景色となっていた。

「これが、君だ」

静かな口調で誰かが語りかけてくる。

びくりと身を震わせたリウスがゆっくり顔を上げると、そこには静かな青い目をした金髪の青年が立っていた。

「あ、あなた・・・は・・・?」

「全てが歪んでしまった。あるべきものは、あるべき場所に戻さなければならぬ」

青年はリウスを見下ろしながら、静かな口調で続けていく。

「君は、多くの者に影響を与えすぎた。記憶を変える必要すらあるんだ」

「こ、答えて。あなたは、だれ？」

「・・・このままでは危険だ。失う前に、後悔する前に、君は選択を迫られていることに気付くことだ。」

そして時が来れば、君達にはもう一度伝えなければならないだろう」

金髪の青年はそう言い残し、ゆつくりと霧に紛れるように消えていく。

「全てが終わった後、どうするかは君次第だ」

そのまま、リウスも霧の中に飲み込まれていく。

視界は次第に真っ白になっていき・・・、その内にリウスの意識すらも白い霧に紛れ、静かに消えていった。

「・・・ス。リウス」

リウスはぱつと目を開けると、心配そうな様子のキュルケが顔を覗き込んでいた。

「大丈夫？ うなされてたわよ」

短く息が切れて、体中に冷や汗が流れていた。

何の夢を見ていたかは分からないが、ひどく、恐ろしい夢だった気がする。

いや、それよりも自分はニューカッスル城に……。

「キュルケ……、何で……。ここは……?」

リウスはキュルケの膝を枕に眠っていたようだ。

身を起こして周りを見回すと、そこは空の上だった。

タバサのシルフィードに乗っているのだろう、身を起こした周りにはタバサやギー

シュが座っており、ルイズは横でキュルケに抱かれながら眠っているようだった。

「ここはトリステインの上空よ。シルフィードに乗って王宮に向かっているの。まあ、驚

くのも無理ないわね」

「ど、どうやって……?」

「ギーシュの使い魔が、ニューカッスル城だっけ? あそこまで抜け穴を掘ってつてく

れたのよ。アンリエッタ姫の指輪の匂いを辿って、だっただっけね?」

キュルケがギーシュを見ると、ギーシュがすきつと薔薇の杖を片手にポーズを決め

る。

『土くれ』のフーケとの一戦に勝利した僕たちは、寝る間も惜しんで二人の後を追いかけたんです。いやあ、あの時の戦いを二人に見せたかった! 何と言ったって僕の鍊金

が……」

「フーケはいなくなつてて、いたのは巨大ゴーレムだけ。それよりも……、怪我の調子
は？」

長くなりそうだと感じたタバサが即座に話を変える。

不満そうな顔を浮かべたギーシュも、すぐさまリウスの体調を心配し始めた。

リウスが右腕に目を落とすと、そこには真っ白い包帯が巻かれていた。

「治療してくれたの？　ありがとう、痛みもマシになつてる」

「それならいい。応急手当てだから、出来れば王宮のメイジにも見せた方がいい。ひ
どい怪我だった」

タバサはそう言うと、話は終わりとばかりにくるりと正面へ向き直つた。

すると、ギーシュがハツとする。

「そ、そうです。姫様の任務は？　ワルド子爵は？」

リウスは苦虫を噛み潰したように顔をしかめた。

「ウェールズ様には会えて、任務は無事完了したわ。でも、ワルドは裏切り者だった」

「裏切り……？」

ギーシュは信じられないといった表情のまま固まっている。

しかしキュルケは何となく納得したように肩をすくめた。

「そつちはそつちで色々あつたのね。よく分らないけど」

そうしていると、ルイズがゆっくり起き上がった。

寝ぼけ眼のまままで辺りをきよろきよろと見回している。

「ハハ、どうだ？」

先程と同様の説明をキュルケがしている中、次第にシルフィードが高度を下げ始める。

眼下には、トリステイン王宮が見え始めてきた。

翼のある大きな獣に跨った兵士たちが、王宮上は飛行禁止であると言い放つも、まるで無視するかのようにシルフィードは王宮の中庭へと降り立った。

そして周りを取り囲む兵士達に対し、地面に下りたルイズやギーシュが事情を説明していくのだった。

「ああ、ルイズ！ 二人とも、無事に帰ってきたのですね……！」

ルイズとリウスはアンリエッタと共に謁見の間へと足を運んでいた。

先程までマンティコア隊の衛士たちと押し引いての間答を続けていたのだが、中庭に現れたアンリエッタによってごくあっさりと言見が許されたのだった。

ギーシュ達三人を待合室に残し、ルイズはアンリエッタと再会の抱擁を行なっていた。

「それで……、任務は、どうなったのですか？」

二人はひと抱き合った後、ルイズは旅の顛末を説明していく。

キュルケ達との合流、陸と空の賊達が襲撃してきたこと、ウエールズとの邂逅、そして……。

「そう……ですか。ワルド子爵が……」

任務は達成され、トリステインにとって命綱であるゲルマニアとの同盟は無事守られた。

しかしアンリエッタは涙こそ見せなかったものの、ルイズの話を受けて悲嘆に暮れている。

「まさか、子爵が裏切り者だったなんて……。そして、ウエールズ様はやはり王家に殉じたのですね……？」

ルイズは何も言えずにこくりと頷いた。

先程の話の中では、ウエールズ皇太子を殺したのがワルドだということを伏せてあった。

それはアンリエッタへの裏切りなのかもしれないが、ルイズは大切な友人へそれを伝えたくはなかったのだ。

言えばきつと、アンリエッタはワルドを送り込んだ自分自身を責めてしまうだろう。そう考えて、ルイズが決断したことだった。

「・・・あの方は、手紙を最後まで読んでくれたのでしょうか」
ルイズは悲痛な面持ちをしながらも頷いた。

「はい。ウエールズ皇太子は、姫様の手紙を最後まで読んでおられました」
「・・・ならば、ウエールズさまはわたくしを愛しておられなかったのね」

その悲しそうな独白にルイズは何か言おうとするも何も言えなかったが、代わりにリウスが口を開いた。

「姫様。ウエールズ殿下より言伝を預かっております」
アンリエッタが、ついとリウスを見る。

「決戦の前夜に殿下とお話しをさせて頂いた際、姫様へお伝えするように言われていたことです」

リウスはアンリエッタの顔をそれ以上見ることが出来ず、少し目線を下げて続けた。

『君を愛していた。そして、僕を忘れてくれ、幸せになることを願っている』と」

その言葉に、アンリエッタはしばらく俯いたまま黙っていた。

「・・・ありがとうございます、リウスさん。勇敢に戦い、勇敢に死んでいく。殿方の特権ですわね・・・。愛してくれているのなら、一緒にいて欲しかったのに」

リウスはぐつと感情を押し殺しながら口を開く。

「殿下は、姫様の無事を強く願っておられるようでした。万が一にも、自分の行動で姫様を害することがあつてはならないと、仰られておりました」

「そうですか・・・。ウエールズさまらしい、ですわね」

アンリエッタはそう言つて少しばかり沈黙すると、そつと目端に浮かんだ涙を拭つてルイズとリウスの手を握つた。

「ありがとう、二人とも。わたくしの婚姻を妨げようとする暗躍は未然に防がれました。我が国はゲルマニアと無事同盟を結ぶことができるでしょう。これで、簡単にアルビオンも攻めてくる訳にはいきません。危機は去つたのです」

アンリエッタは努めて明るい声を出しながら、にこりと笑つた。

ルイズはポケットからアンリエッタにもらつた水のルビーを取り出した。

「姫さま、これをお返しいたします」

しかしアンリエッタは短く首を振った。

「それはあなたが持つていなさいな。せめてものお礼です」

「こんな高価な物、いただくわけにはいきませんわ」

「忠誠には報いるものがなくてはなりません。いいからとつておいて、ルイズ」

ルイズは深々と頭を下げると、それを細い指に嵌めた。

その様子を見ていたリウスは、懐から小袋を取り出し、その中から輝く指輪を手にとった。

「姫様、こちらを」

「これは……」

アンリエッタはその指輪に目を大きく見開いた。

「ウエールズ殿下からお預かりした風のルビーです。貴方に渡して欲しいと」

アンリエッタは受け取った風のルビーをそっと指にはめた。

アンリエッタにはゆるゆるだったが、アンリエッタが短く呪文を唱えると、指輪のリングが窄まり、薬指にぴたりとおさまった。

そのまま風のルビーを愛おしそうに撫でて、アンリエッタはリウスへと笑顔を向けた。

「ありがとうございます。二人はこのまま学院に帰るのでしょうか？　せめて、ここをメ

イジから傷の治療を受けてください。傷跡ひとつ残さずに治せるはずですよ」

自分の居室の窓辺に立って、アンリエッタは飛び立っていくシルフィードを物憂げに眺めていた。

先ほどマザリーニ枢機卿への報告と相談を終え、ゲルマニア皇帝との婚約が滞りなく進んでいることを知った。

そして誰にも入らないように命じたその部屋で、アンリエッタはようやく一人の少女へと戻ることができたのだった。

アンリエッタは力なくソファへと座り込む。

そしていつの間にか握っていた両手をそっと開くと、そこには風のルビーが美しく輝いていた。

「・・・忘れてくれ？」

この指輪は、唯一つ残ったウェールズの形見だった。今回の任務の手紙も、それ以外の手紙も、もう全て処分してあるからだ。

リウスによると、ウェールズは自分を愛してくれていたという。

それでも、忘れてくれと。幸せになつて欲しいと・・・。

アンリエッタはルビーを両手で握り込むと、俯いた額に強く押し当てた。その間にも、かつての恋人との思い出がアンリエッタの心を無数に駆け回っていく。

「忘れられる……訳がっ……！」

震える声でアンリエッタはそう呟いた。

徐々に、押し込めていた悲嘆が堰を切って溢れ出していく。

「……う……う……う……う……う……!! ウェールズさまああああ……!!」

誰も踏み入ることのできない部屋の中で、少女はひとりいつまでも泣き続けていた。

第四十二話 レコン・キスタ

かつて名城と謳われていたニューカッスル城は、まさに惨状の様相を呈していた。そこら中に瓦礫の山がうず高く積み上げられ、その中には焼け焦げた死体がちらほらと転がっている。

目を背けたくなるような惨劇の場において、豪快に笑い合う傭兵の一団がうろついていた。

どうやら貴族の居室や死体から装飾品や魔法の杖でも見つけたのだろう。

かつての仲間の死体を跨ぎながら立ち去っていくその一団に、フードを被った女性が軽く舌打ちをした。

「どうした、土くれ。貴様もあの連中のように、宝石を漁らないのか？」

フードをすっぽりと被った緑髪の女性、土くれのフーケに対して、長身の貴族が声を掛けてくる。

アルピオンでは珍しい、トリステインの魔法衛士隊の制服を着たその貴族は、ワルドだった。

右腕は真白い包帯に包まれており、その制服の左腕は、力無くひらひらと風に揺らめ

いていた。

「私をあんな連中と一緒にしないで欲しいわね」

ワルドの左腕をちらりと見てから、フーケは肩をすくめた。

「私はね、大切なお宝を盗まれて、あたふたする貴族を見るのが好きだったのよ。こいつらは……」

フーケは王軍のメイジだった死体を横目で眺めた。

「もう、慌てることもできないわね」

「アルビオン王党派は貴様の仇だったのだろうか？ 王家の名の下に、貴様の家名は辱められたのではなかったのか？」

フーケはメイジの死体を眺めながら、いたって無感情な顔で頷いた。

「そうね。そうだったんだけどね。なんというか……」

馬鹿馬鹿しい、とフーケは胸の内で続けた。

ここに来るまでは、フーケは多分自分は喜ぶのだろうと考えていた。

しかしいざ壊滅した王軍の死体を見ても、何ひとつとして感情が浮かんでくることはなかった。

喜びも、激情も、何ひとつ。

フーケにとってそれは意外だったが、頭の隅では予感していたかのように納得してい

る自分がいた。

実際に王族と会えば・・・、例えば自分の仇であったジェームズ一世と会えば、きつと何かの感情は浮かんできたのだろう。

文句の一つでも言つてから、ゴレムで押し潰していたかもしれない。

しかし、さつき見たジェームズ一世は人とは分らない程の悲惨な消し炭になっていた。

別に私は、物言わぬ死体と会いたかつた訳ではないのだ。

「あんたも、随分と苦戦したみたいね」

ワルドが負つた左腕の傷はあまりにも深すぎたため、切断するより他が無かつたのだった。

しかし当のワルドは調子を変えずに答える。

「左腕を残せなかつたのは残念だが、まあ仕方あるまい。ウエールズと左腕一本なら、安い取引だったということだろうさ」

「まったく大したもんだ、風のスクウエアにまで手傷と負わせるなんて・・・。流石『ガンダールヴ』といつたところかしら」

「油断はしていなかつたんだがな。貴様が危険だと言つていたのは、よく理解できた」

「あら。かの魔法衛士隊長サマが、随分と殊勝なもんだね」

「ただ単に危険な敵として認めているだけだ。こうなった今でも、奴に恨みなどはない」
そうかい、とフーケは短く答えた。

ワルドが戦ったという礼拝堂に入ると、そこは他の場所以上に荒れ果てた瓦礫の山になつていた。

ほとんどの床石が砕け散り、壁や天井が艦の砲撃によつてポロボロに崩れ落ちてい
る。

「……こりやあ流石に生きぢやいなね」

「……ああ、そうだな。ここでメイジに苦戦したという情報は入ってきていないが、奴は既にほとんどの力を出し切つていたはずだ。たぶん、そこいらの名も無き傭兵にでもやられたのだろう。」

それよりも、ウエールズだ」

フーケは簡易な人型ゴーレムを出しつつ、ワルドの後を続いていく。

ワルドが短く呪文を唱えると、小さな竜巻が現れ、辺りの瓦礫を吹き飛ばしていった。そして徐々に床が見えてくるとワルドは魔法を掻き消した。

始祖ブリミルの像と椅子の間に、ウエールズの亡骸があつた。どうやら偶然できた隙間によつて亡骸は潰れていなかったようだ。

フーケは生前のウエールズを目にしたことがあつた。

しかし別段何の感慨もない顔で、その亡骸を見下ろしている。

「潰されないなんて、ウエルズ様も運が良いもんだね。ついでに、あの二人も探してみる？」

「好きにしろ」

「ちよつと。私にだけやらせるつもり？」

「・・・仕方がないな。手を貸してやる」

溜め息を吐いたワルドを、フーケはちらりと盗み見た。

「どうやら少しは気になっているようだ。」

石で出来たガーゴイルのように無感情な男だと思っていたが、どうやらそんな訳でもないらしい。

先程と同じように小型の竜巻が瓦礫を吹き飛ばしていく。フーケはそことは別の場所をゴーレムに搜索させていた。

しかししばらく探しても、ルイズとリウスの死体は一向に現れない。

「ほんとに、ここで死んだわけ？」

「そのはずだが・・・」

そうしている中、フーケのゴーレムがどかした瓦礫の下から見たことのある絵画が見えてきた。

ジョルジュ・ド・ラ・トゥールの『始祖ブリミルの光臨』である。

なんだ複製か、と眩きながらその絵画を引っくり返すと、そこには一メートルほどの穴がぽっかりと口を開けていた。

「ねえ。この穴、なにかしら」

ワルドは怪訝な表情を浮かべながら、しゃがみこんでその穴を覗き込んだ。

穴の奥から吹いた冷たい風がワルドの頬を撫でる。

おそらく、外へと繋がっているのだろう。

「逃げたって訳ね」

肩をすくめたフーケの言葉に、ワルドはもう一度深い溜め息を吐いた。

「そのようだな。流石は『ガンダールヴ』といったところか」

「あら、あんまり驚いてないのね」

「奴は得体が知れない。どうやったかは分からぬが、こんなところで死を選ぶようには見えなかった。まあ、いずれまた会いまみえることもあるだろうな」

フーケは落ち着いた様子のワルドに首を傾げた。

左腕を失った原因だと言うのに、ちつとも悔しそうな様子ではない。ガンダールヴに恨みはない、と言っていたのも、もしかしたら本心から言っていたのかもしれない。

そんな二人に、礼拝堂の入り口から声がかげられた。

この場にそぐわない、よく澄んだ、快活な声。

「子爵！ ワルド君！ ウェールズ皇太子の死体は見つかったかね？」

ワルドは振り向いて、あらわれた男に答えた。

その男は、年にして三十代の半ば、丸い球帽を被っていた。

一見すると聖職者のようにも見えるが、その恰好は軍人のようである。

高い鷲鼻に、理知的な色を湛えた碧眼がきらりと光った。

「閣下。そこに見つけてございます」

ワルドは深々と一礼をした。閣下といわれたその男は、にかつと人懐こそうな笑みを浮かべている。

「そうか！ 流石だ、子爵！ きみは目覚ましい働きをしてくれたよ。かの皇太子を打ち取っていないければ、我が同胞たちは更なる苦戦を強いられていただろうからな！」

ワルドはもう一度頭を垂れた。

実際、ニューカッスル城の戦いでは想像もしていなかった被害を被っていた。

三百の王軍に対し、損害は二千。負傷者も加えれば、四千を超えていた。

それと引き換えに三百の王軍は文字通り全滅したが、死傷者の数でいえばどちらが勝ったのかも分からない程である。

「しかし件の手紙を手に入れることは叶いませんでした。申し訳ございませんぬ。いかほ

「どにも罰をお与えください」

ワルドは低頭しながら地面に膝をついた。

しかし閣下と呼ばれた男は気にしていないようにワルドの肩を叩いた。

「何を言うか子爵！ 報告は受けたが、どうにも出来なかつたのは分かっている！ あの賢きマザリーニ枢機卿殿の謀略があつたのだからな！」

その男はウエルズの亡骸に顔を向けた。

「実際のところ、同盟阻止よりもウエルズを確実に仕留めることの方が重要だつたのだ。誇りたまえ、子爵！ 君が倒したのだから！」

そしてウエルズ亡骸の近付いた男は、にこやかな表情のままに続けた。

「しかし、不思議なものだ。彼は随分と私の事を嫌っていたが……、こうしていると奇妙な友情すら感じてしまう。死んでしまえば誰もがともだちだ……。」

ワルド君、彼も私の友人に加えたいのだが、異論はあるかね？」

ワルドは首を振った。

「閣下の決定に異議が挟めようはずもございません」

「では、ミス・サウスゴータ。君に始祖より授かつた、『虚無』の魔法をお見せしよう」
フーケはびくりと眉をひそめた。

「こいつだ、こいつがワルドに私の名前を教えたのだ。」

しかも噂に聞いた、伝説上の『虚無』の魔法を操るメイジ。つまり、この男こそが『レコン・キスタ』の総司令官だ。

腰に差した杖を引き抜いた男は、短い、小さな詠唱を行なっていく。

それはフーケが今まで聞いたことのない詠唱だった。

そして詠唱が終わり、男は優しくウエールズの死体に杖を振り下ろした。

フーケはぎよつと目を見開いた。

冷たい軀だったはずのウエールズの瞳がぱちりと開いたのだ。

そしてみるみるうちに、青白い顔へ生前のような瑞々しい生気が満ちていく。

「おはよう、皇太子」

むくりと起き上がったウエールズは、男に微笑みを返した。

「久しぶりだね、大司教」

「失礼ながら、今では皇帝なのだ。親愛なる皇太子殿」

「そうだった。これは失礼した。閣下」

ウエールズは何の躊躇も無く膝をついて、男に臣下の礼を取った。

その様子に、フーケは顔を青ざめさせたまま固まっている。

「きみを余の親衛隊の一人に加えようと思うのだが。ウエールズ君」

「喜んで」

「なら、友人たちに引き合わせてあげよう。ああ、そうだった。その前に」

男はフーケへと振り向いた。ウエールズの瞳もフーケを向く。

その瞳は、フーケの記憶の中のウエールズと何ひとつ変わっていないかった。

「ミス・サウスゴータ。余は『レコン・キスタ』総司令官を務めさせていただいておる、オリヴァー・クロムウエルだ。元はこの通り、一介の司教に過ぎぬ。しかしながら、貴族議会の投票により総司令官を任じられたからには、微力を尽くさなければならぬ。」

ああ、聖職の身でありながら、『余』などという言葉を使うのは許してくれたまえよ？」
ワルドがクロムウエルの言葉を引き継いだ。

「閣下はすでに、ただの総司令官ではございませぬ。今ではアルビオンの……」

「皇帝だ、子爵」

クロムウエルはにやりと笑った。

「ミス・サウスゴータ。君とウエールズ君、アルビオン王家との確執は知っているが……まあ、今は我慢してくれたまえ。事が済めば、ウエールズ君は君に引き渡しても構わない。存分に恨みを晴らすといい」

にかりと笑ったクロムウエルを、フーケは呆然とした顔で見つめていた。

それと同時に、今までに無い程の怒りが胸の内に沸き立ってくるのを感じていた。

しかしそんなフーケの感情も知らず、クロムウエルはワルドへと顔を向けた。

「ワルド君、安心したまえ。確かにゲルマニアとトリステインの同盟は面倒なものだが、どちらにせよトリステインは裸だ。余の計画に変更はない」

ワルドは短く会釈をした。

「トリステインは、なんとしてでも余の版図に加えなければならぬ。あの王室には『始祖の祈祷書』が眠っているからな。

あと・・・、何と言ったか・・・。そう！ 『繋がりの秘宝』だ。あれも聖地に赴く際には、是非とも携えておかなければな」

その見知った単語に、フーケは震える声のまま口を開いた。

「もしかして・・・あなたが私に依頼を・・・？」

「それに関しては何とも言えないな。ミス・サウスゴータ」

そう言つてにかりと満足げに笑うと、クロムウエルはウエールズと共に立ち去つて行つた。

クロムウエルとウエールズが礼拝堂から出ていった後、フーケはやつとの思いで口を開いた。

「あれが・・・虚無・・・？ 死者が、蘇つた。そんな馬鹿な」

青ざめているフーケをちらりと見てから、ワルドが呟いた。

「虚無は命を操る系統……。閣下が言うには、そういうことらしい。伝承の一つとして知ってはいたが、目の当たりにすると信じざるを得まいな」

なんと悍ましい魔法だろうか。

フーケは吐き気を覚える程に、その魔法を使ったクロムウエルを嫌悪していた。

そして奴は、ウエルズを蘇らせ、『恨みを晴らせばいい』などと言い放った。

フーケは、まるで今までの自分の全てを侮辱されたかのような感覚を覚えていた。

「……あまたの命が聖地に光臨せし始祖によって与えられたとされている。あの『虚無』の魔法を見ていると、あながち妄言とも言えないだろう。

……そして、貴様が言っていた、イグドラシルだ」

フーケはハツとして、ワルドを見た。

「俺には、これが偶然だとは思えない。俺はそれを確かめたいのだ。そしてその答えはきつと聖地にあると、俺はそう思っているのだよ」

第四十三話 かつての夢 7つ目

リウスは夢を見る。

ぼろぼろの小屋の中、リウスは樽の中に入った薄汚れた水をもう一度汲み上げた。汚れた水を小さな樽から別の樽へとゆっくり移していく。

移し先の樽の中には布や炭、砂の層が積み重なっており、樽の下部には小さな穴、その穴には薄汚れた布と石を削って作った栓が詰め込まれていた。

リウスは栓を開けて、穴から出てくる綺麗な水を皮袋へ移し替えていく。

額の汗を手で拭いてから、ふと周りを見ると、小屋にぼつかり開いた穴からオレンジ色の光が差し込んできた。

「どこまで行つてるのよ、あの子」

そう一人で呟きながら、一つ、また一つと皮袋に綺麗な水を移し替えていく。

そんな中、小屋の入り口に掛けられた布きれがばさりと揺れた。

息を切らして入ってきたのは、薄い桃色髪の少年だった。

「もう、遅いよ。心配したんだから」

「ごめん、お姉ちゃん。でもほら！　こんなの見つけた！」

綺麗な水がほとんど出尽くしたことを確認してから、リウスは手に持った皮袋の口を紐で縛り付けた。

にこにこ近寄ってくる薄い桃色髪の少年をじろりと見て、その皮袋を手渡す。

「ほらこれ！　どう？　売れそう？」

受け取ったそれは、煤で汚れた小瓶だった。

その中にはきらきらと輝く小石がぎっしり詰め込まれている。

「あんなところにこんなものがあるなんて、びっくり！　何だっけほら、お金持ちが持つてるヤツ」

「寶石？」

「そう、それ！　もしかしてホウセキなんじゃない？」

「バーカ、これはガラスよ。でも売れるかもしれないし、明日親分さんのところに持ってってみるわね」

「えー、ホウセキじゃないの？」

がっかりする少年が皮袋に口をつける。

リウスは小瓶を古びたテーブルに置いてから、小屋の隅にある床板をがばりと開け

た。

床板の下には、筒状の鉄くずが転がっていた。

その筒の蓋を開けて中に手を入れると、いくつかの布で出来た包みの感触がある。

その一つをひよいと取り出して、リウスは包みごと少年へと手渡した。

「なにこれ」

「パン。固いけどね」

「えっ、本当!?! やった!」

包みからカチカチになったパンを取り出して、少年は目を輝かせた。

そしてパンを一度包みに戻すと、椅子の角を使って器用にパンを砕いていく。

包みから取り出したパンの欠片を少年が口に放り込み、リウスもそこから一つ手に取って自分の口へと放り込んだ。

二人してぼりぼりと塩の効いたパンを食べていると、少年が顔を上げた。

「今日はハイキュウ無しなんだっけ?」

「なーし。昨日の分がまだあるでしょ? 明日の昼過ぎにもつかい来るってウワサ」

「じゃあさ。向こうの十字路のおばちゃんかね、ご飯が足りないんだって。ぼくの残りを持っていくね」

その言葉を言うや否や準備をし始める少年へ、リウスは呆れたように溜め息を吐い

た。

「はい、ストップ。今度の人には何の理由でご飯を渡すの？ こつちだって大変だつてのに」

「だってさ、あのおばちゃんはぼくたちよりも小さい子供がいるんだよ？」

そうは言いながらも目を泳がしている少年の様子に、リウスはピンときた。

「それ以外は？」

「・・・ええと、前にハチミツをちよつと舐めさせてもらつた」

そういうことだと思つた。リウスはもう一度溜め息を吐く。

「まあ、いいけど。『支え合い』だものね」

もじもじしていた少年がぼつと明るい顔をする。

「そうだよ、『支え合い』だもん。お父さんもお母さんもきつと喜んでくれるよ」

そう言つて、少年はいそいそと新しい布きれを床に広げた。

うんうん唸りながらパンの欠片の山を二つに分けて、二分された欠片の山をまた半分に分ける。

四つになつたパンの山の一つを床に広げた布きれへと移し替えている少年に、リウスは優しく笑顔を向けた

「それっぽつちじゃ足りないでしょ」

リウスはそう言うと、自分のパンの欠片の山から二掴みの欠片を少年の布きれへと移す。

「残りは、アンタとわたしで半分こ。ほら、早く持つてきなさい」

「お姉ちゃんは無理しなくてもいいのに」

「アンタね、姉ちゃんをナメんじゃないわよ」

にやりと笑ったリウスに、にんまりと笑みを返した少年がパンの欠片の積まれた布きれをしつかり畳んで懐に入れた。

「エミール、余計なところに行ったらダメだよ」

「わかつてるよ！　すぐ戻るね！」

エミールはそう言うと、元氣よく部屋の外に飛び出していった。

翌日、ちらほらと人が行き交う配給所の前を、桃色髪の少女がばたばたと走っていた。日が頭上に昇り切らないこの時間はまだ配給の時間ではないのだが、モノの交換が行われているこの広場にはいつも人がいる。

そういった人たちの隙間を抜けて、リウスは一回り大きいぼろぼろの家へと辿り着いた。

その家の扉の前に座っていた坊主頭の男が、じろりとリウスを睨み付ける。「てめえ、また来たのか。頭は忙しいって言ってんだろうがよ。ほれ、渡せ」

リウスは息を切らせながら、綺麗な水の詰まった皮袋をひとつ渡した。

「親分さん、いる？」

「ああ、付いてこい」

その坊主頭の男はすつと立ち上がると、軋む扉をがちやりと開けた。

息を整えながら、リウスは薄暗い家の中へ入っていく。

体の大きい男達がいる部屋を抜けて、坊主頭の男と共に一番奥にある立派な部屋へと足を踏み入れた。

「なんだ、クソガキ」

リウスが入るや否やドスの効いた声がかげられるも、リウスはいたって平静を装いながら声を出した。

「ほらこれ、ご要望の」

のそりと近付いてきた髭ぼうぼうの男が、リウスが懐から取り出した緑色の草を奪うように手に取った。

「はっ、よく見つけてきたな」

「あと、これ見て欲しくって」

リウスが「ごそごそ」と取り出したのは、先日エミールが見つけてきた小瓶だった。どんなもんだとばかりに、リウスは胸を張ってみせる。

「これっていくらくらい?」

「ああ? こりやあ・・・ガラス玉だな」

あまり興味のない瞳で、男は受け取った小瓶の中身をじろじろと見つめている。

「小さすぎるな。ガラクタだ、こりや。3ゼニーつてところだな」

「300の間違いじゃないの?」

その言葉に、髭面の男がにやりと笑った。

「クソガキが。20」

「200」

「50」

「120」

即座に返されていく金額に、髭面の男は楽しそうに笑いながら頭をがしがしと掻いた。

「生意気なヤロウだ。クソガキ、青ハーブって知ってつか?」

きよんとしているリウスに、その男はテーブルに置かれた真つ青な野草を手を取っ

た。

「これだ。これ持つてくりや、そのガラクタ共々300ゼニー分で引き取つてやるよ」
しかしリウスはにやりと笑うと、また懐を探つていく。

「はい」

リウスが手に持つていたのは、髭面の男が持つているものと同じ、真つ青な野草だった。

しかし髭面の男は笑うでもなく、リウスを強く睨み付けていた。

「・・・テメエ、おちよくつてんじやねえぞ。テメエの身ぐるみ剥いで放り出してもいいんだぜ?」

その言葉にびくりと身を震わせるも、身体に力を込めたりウスは負けじと髭面の男を睨み付けた。

「や、やつてみなさいよ。そしたらもう、二度と持つてこないから」

しばらく髭面の男とリウスの睨み合いが続く。

しかし髭面の男はふっと力を緩めてリウスから目線を外し、手に持った野草をテーブルに置いた。

「……冗談だ。おい、袋6つに、塩を塊で渡してやれ」

じつと黙っていた坊主頭の男が部屋から出ていく。しばらくして、大きな皮袋を手に戻ってきた。

リウスは黙ってそれを受け取ると、髭面の男をじろりと睨み付けた。

男はその視線を受けながらも、やけに楽しそうな顔で笑いながら木製の椅子へ腰かける。

「何だ、足りねえってか？ 少しイロ付けてやっただけだぜ？」

「そんなんじゃない」

リウスは小さくそう言うと、足早に小屋の外へと足を向けていった。

十字路を過ぎ、少し歩いたところでリウスはもう一度溜め息を吐いた。

そのまま疲れたように小屋に背を預けて腰を下ろす。

「怖かった……」

つい、そう呟いてしまう。

一度口にしてしまうと、髭面の男との会話で脅された時の恐怖がますます強くなっていくのに気付いてしまった。

ふと見た自分の手が、かすかに震えているのを目に止める。
強くなる動悸を抑えながら、リウスはぎゅっと震える手を握り込んだ。

「大丈夫、大丈夫」

目を閉じて自分に言い聞かせるように声を出すと、少し気分が落ち着いてきたように思えた。

そのままちよつとして、リウスは家に帰ろうと立ち上がろうとする。

その時はじめて、目の前に見知らぬ男が立っているのにリウスは気が付いた。

まるで枯れ木のように細く、背の高い男が渴いた唇を舐める姿を見て、リウスは気付かぬ内に冷や汗を流していた。

「なあ、その袋って何入ってんだよ」

へらへらと笑いながら、男はリウスの抱えている皮袋を指差した。

「・・・別に、何でもないわ」

「重そうだなあ。持ってってやろうか？ 家はどこだあ？」

何も答えずに、リウスは家とは逆の、広場へ繋がる道を歩き始めた。

後ろから先程の男が付いてくるのを感じる。

「おい、無視すんな、よ!!」

ばつと影が横を通り過ぎる。

不意に抱えた荷物を引つ張られて、リウスは勢いよく地面を転がった。足元に広がる水たまりに顔から突っ込んでしまう。

「あ……！ ダメ！ 返して！ どろぼう！」

走っていく男の背は既に小さくなっている。

リウスは汚水に塗れた顔を拭いすらせずに駆け出した。

逃げていく男の背がどんどん離れていく。

息が切れ、悔しさに涙がこぼれる。

裸足に小石が食い込んで、じわじわと足の裏に痛みが広がっていく。

その時、離れていく男が誰かに取り押さえられるのが見えた。

息を切らしながら、その二人へ近付いていく。

周りにいる人たちは、迷惑そうな顔で見ても見ないふりをしているばかりだ。

「お前か、ここらで最近悪戯してる野郎は」

取り押さえた男が、片手で細長い男の首を持って宙に浮かしていた。

取り押さえた男は先程の親分の家にいた、坊主頭の男だった。

苦しがる犯人が暴れるも、坊主頭の男は一向にその手を緩めない。

「おい、何とか言ったらどうだ？」

声にならない声で犯人が暴れ、その内に抵抗が少なくなっていく。

リウスはハツと我に返ると、その坊主頭の男の体を思いつき叩いた。

「やめて！ その人死んじゃう！」

その男の体は石のようで、リウスが叩き続けても怯みすらしない。

その坊主頭の男がぎろりとリウスを睨み付けた。

「何寝ぼけてんだ？ てめえの荷物を取ったのはこいつじゃねえか」

「そうだけど、あなたがそんなことするのは関係ない！ いいから離して！」

坊主頭の男はじつと自分を叩き続けるリウスを見つめていたが、その内に溜め息を吐

くと犯人の男から手を離した。

地面に転がった犯人が激しくせき込んでいる。

「次から気を付けろ」

そう言つて坊主頭の男は盗まれた袋をひよいとリウスに投げ渡した。

そして咳き込んでいる犯人の首根っこを持って引きずりあげ、そのまま親分の家へと

向かっていく。

リウスがお礼の言葉も言わずに俯いていると、坊主頭の男がリウスに呼びかけた。
「おい、クソガキ。てめえも来い」

リウスは親分の家の前に座り込んでいた。

配給所の前には人が徐々に増えていつている。

あと少ししたら配給が始まるので、いち早くここに集まってきているのだろう。

しばらくして、横の扉ががちゃりと開いた。

そこから出てきたのは、先程の坊主頭の男だった。

「何だ、いたのか。律儀なやつだな」

「何よ。あなたが待ってろって言ったんでしょ」

男は小さく肩をすくめると、リウスの隣にどかりと座った。

手に持った瓶をぐびりと仰いだから、その瓶をリウスへと差し出した。

「お前のおかげで捕まえられた、その礼だ。一口飲んでみる」

おずおずとその瓶を受け取って、リウスは軽く舐めるように瓶に入った液体を口に含んだ。

果物のような、甘く苦い奇妙な味が口の中に広がっていく。

「・・・なにこれ」

「マステラ酒だ。何だ、ガキのくせに飲めるじゃねえか」

「それって・・・、お酒じゃないの？」

「酒だ」

リウスの手から瓶をひったくった男は、またぐびりと酒瓶を煽った。

それきり何を言うでもなく、男は酒を飲み進めていく。

リウスは何のつもりかと思ひながら、居心地が悪そうに配給所の様子を眺めていた。

「・・・忠告してやる。頭を頼りすぎるな」

ぼつりと、男が小さく声を出した。リウスはきよとんとしたまま男の顔を見る。

「お前のとこのババアが病気で死んだだろうが。だからお前らは周りの連中から邪魔者扱いだ。病気が移ったらどうしよう、つてな」

「そんなこと、知ってるわよ」

男は無表情を決め込んでいたリウスをちらりと見てから、もう一度酒瓶を煽った。

「だからといって、頭を頼るんじゃねえ。お前らに何かあったとしても、頭はお前らを助けねえ。俺もそうだ」

リウスはもう一度、「知ってる」と短く呟いた。

「・・・お前は賢しいガキだ。だから弟を守ることだけを考えるんだな。間違ってもさつきみたいにも、盗みを働いたヤツを助けようとするんじゃないやねえぞ。二度目は許さねえ」

今度は何を言わず黙ったままで、リウスはこくりと頷いた。

『さかしい』の意味は分からなかったが、それ以上にその後の言葉がリウスの胸へ突き刺さった気がしていた。

「最近誘拐もクソみてえに多いからな。そこいら中、ピリピリしてやがる。周りに目を付けられることは止めるこつたな」

「・・・ゆうかい、つて？ どういう意味？」

酒を煽る男に向けて、リウスは問いかけた。

「・・・これだからガキは面倒くせえ。連れ去られるって意味だ。毎日のように人が減ってってる」

「減ってるって・・・。何で分かるの？」

「頭はこの住民全員の顔を覚えてる。どこに住んでるのかもな」

リウスに向かって、男は初めてにやりと笑ってみせた。

どことなく誇らしげな顔のまま、何かを思い出したように口を開いた。

「ああそーういや、ここに呼んだ理由を言っただけ。頭からの伝言だ」

既に、男の顔はいつもの仏頂面に戻っていた。

「髪がもう少し伸びたら、また売りに来いってよ」

今度会つたら言おうと思つてたことを言い当てられて、リウスは気まずそうな顔で頷いた。

「あと、これも持つとけ」

そう言つた男が手渡してきたものは、細長い、やけに重さを感じる布きれの包みだつた。

今までにない感触に、リウスは不安げな表情のまま包みを開いていく。

そこにあつたのは、鈍い光を放つ、短めのナイフだつた。

短めではあるが持ち手がしっかりしていて、刃は今研がれたばかりのように傷一つない。

「お前にそれを渡すのは頭の判断でもあるが……、無闇に振り回すんじゃないぞ」

「……こんなの、どう使えば」

「そんなことは自分で考えろ」

しばらく呆気にと取られたままナイフを見つめていたが、配給所から聞こえてきた鍋を叩く音にリウスは顔を上げた。

どうやら今日の配給が始まつたらしい。

「あ、ありがと。これ、貰つとくわ。親分さんにもありがとうつて伝えておいて」
「ああ」

リウスはすつくと立ち上がると、ぱんぱんと砂埃を払った。

「マステラ酒、ごちそうさま。配給もらわなくちやいけないから帰るわ。．．あと、荷物取り返してくれて、ありがとう」

すると何を思ったか、くつくと男が笑っている。リウスは怪訝な顔で首を傾げた。

「何よ」

「いや、やつぱりお前らは品が良いな。礼なんざ大体の連中は言いやしねえ。そんなお前らを捨てた親の顔が見てみてえって思つてね」

リウスは静かに沸き立っていく怒りを何とか鎮めながら、じろりと男を睨み付けるだけに留めた。

その視線に気付きながらも未だ笑い続ける男を尻目に、リウスは何も言わず自分の家へ向けて歩き始めていった。

その夜、リウスとエミールは一枚の貧相な毛布を一緒に被つて横になっていた。

二人がいるところは廃材と布きれで作った簡素なテントの中である。

そのテントが小屋の中に置いてあるのは、すきま風を防ぐためだったり、外から誰が寝ているのか分からなくするためだった。

「ねえ、お姉ちゃん。どうしたの?」

「んー、何が?」

横にいるエミールが小さく声を出した。

リウスがころんと横向きになって間近にあるエミールの顔を見ると、暗闇の中でも心配そうに瞳を向けているのが分かる。

「なんか、元氣ないから」

リウスはどきりとしたが、顔には出さないようにしながら答えた。

「そんなことないよ。エミールが拾ってきたガラス玉でご飯もいっぱい手に入っただし、今日は良い日だったよ」

エミールはリウスの顔をしばらくじいっと見つめていたが、その内にウトウトと眠くなってきたようだった。

しかしエミールは短く呻いてもぞもぞとし始める。

「なんか寒いね」

「なんだ、寒いのか? こっちにおいで」

エミールがもぞもぞとリウスに近付き、二人はほとんど抱き合うようにして眠り始めた。

エミールの小さい体は暖かく、すぐにリウスも眠くなってしまった。

リウスの胸辺りに顔を横たわらせたエミールが小さく呟いた。

「お姉ちゃん、嘘はダメだよ」

「・・・何のはなし？」

リウスは強くなつていく眠気にぼんやりとしたまま聞き返した。

「だって、『支え合い』しなくちゃいけないんだよ？」

「・・・おばあちゃんはもういないんだから、それはもういいのよ」

「違うよ。ぼくがみんなを助けたいから、するんだよ」

「・・・優しいね、エミールは」

「お姉ちゃんも無理しなくて、いいんだよ」

小さくエミールが呟いて、そのまま何も言わずに黙っている。

眠ったのかな、などと考えていると、リウスの意識にもだんだん眠気が広がっていく。

「ねえ、お姉ちゃん？」

眠りかけていたリウスはゆっくりと目を覚ました。

自分の腕を握ったエミールの手が小さく震えているのに気付く。

「……ほんとに、お父さんとお母さん、迎えに来るの？」

ぐしぐしとした涙声でエミールが呟く。

まだ眠気に支配されながらも、リウスはぼんやりと周囲に広がる暗闇や、テントをほのかに照らす月明かりを見つめていた。

いつまでも、子供のままでなんていられるはずはない。

だから、私だって分かっている。

守ってくれる人がもういないのなら、自分こそが大切なものを守る存在にならなくてはならないのだと。

そうして待っていれば、きつと父さんや母さんがいつか迎えに来てくれる。

またみんなでいっしょに暮らすことだってできる。

エミールだって、いつも笑って暮らせるようになるはずだ。

たとえ身が裂かれる程に恐ろしくても、それがほんのわずかな希望に過ぎなくても、待ち続けていれば、きつと。

この世界は恐ろしいことはいっぱいだけど、最後まで残ってくれた大切なものを、決して失くさないように……。

リウスはエミールの頭をぎゅつと抱きしめ、小さく深呼吸をした。

「……大丈夫よ、もうすぐ迎えに来るわ。それまで二人で支え合っていこうね」
すると、エミールがもがもがと声を上げている。

「お姉ちゃん、苦しい」

「ああ、ごめんごめん」

リウスが笑いながらそう言うと、不安そうだったエミールも少しばかり笑っているように見えた。

リウスの身体に寄り添うようにしながら、エミールが小さく呟いている。

「お姉ちゃんがそう言うなら、そうなんだね……。ぼくも、お姉ちゃんを……。みんなを守るように……。ちゃんと……」

そう言いかけたまま、エミールは小さく寝息を立て始めていた。

リウスはエミールの温もりをしつかりと感じながら、エミールの薄い桃色髪の頭を優しく撫で……。そのまま、静かに眠りについていくのだった。

第四十四話 東の間の平和

ルイズ達が魔法学院に帰還してから三日後、正式にトリステイン王国王女アンリエッタと帝政ゲルマニア皇帝、アルブレヒト三世の婚姻が発表された。

式は一か月後に行なわれるため、それに先立つて両国の軍事同盟が締結されることとなった。

ゲルマニアの首都ヴィンドボナで締結が行なわれたが、その同盟締結式の翌日、アルビオンの新政府樹立の公布がなされた。

締結式に臨んでいた両国は緊張を走らせたが、神聖アルビオン帝国初代皇帝であるクロムウェルより不可侵条約締結の打診が届いたのだった。

協議の結果、トリステイン、ゲルマニアの両国はこれを受け入れた。両国の軍力を合わせたとしてもアルビオンの軍事力には未だ届いていないためである。

まだ軍備が整っていない両国にとって、この申し出は願ったり叶ったりだった。

そして、ハルケギニアには表面上の平和が訪れた。

それはすぐさま破れてしまう薄紙のような平和だったが、大部分の貴族や平民達に

とつてはいつもと変わらない平和な日々をもたらししていた。

そしてそれは、トリストイン魔法学院においても例外ではなかった。

「ねえルイズ。あなたたち、授業を休んで一体どこに行つてたのよ」

そんな平和な魔法学院で、モンモランシーは興味深げにルイズへ詰め寄っていた。

ルイズ達が学院を数日留守にしている間、ルイズ達が何かとんでもない手柄を立てたらしい、と既に学院中の噂になっていたのである。

しかも、それには王家やアンリエッタ姫が関わっているとのこと。

そしてルイズ達が帰ってきた直後に行なわれたゲルマニアとの条約締結。

暇を持て余していた学院の貴族達は、これらに何か関係があるに違いないとひっきりなしにルイズ達の元へ訪れていたのだった。

しかし、当のルイズは何やらぼんやりとした様子のまま、モンモランシーに答えた。

「なんでもないわ……」

帰ってきて以来、ルイズは常にこんな調子である。

近くで聞き耳を立てていた一人の生徒がつまらなそうに口を尖らせた。

せっかくの面白そうな噂なのに、本人がこの調子じゃ台無しである。

「どうせ大したことじゃないよ。なんせ、ゼロのルイズだからな！」

「ちよ、ちよつと．．．！」

その言葉にモンモランシーは焦った。

今や『ゼロのルイズ』という言葉は、あまり口にしてはいけない言葉になっていた。

ギーシュがルイズへの侮辱を大いに反対していたこともあるし、あの使い魔が聞いたらどうなるかなんて分かったものではないからである。

「うん、そうね．．．」

しかしルイズはぼんやりしたまま言葉を返した。

その様子に、モンモランシーと周りの生徒達はひそひそと声を潜める。

「一体どうしたっていうんだ？ ルイズのやつ、ずっとあんな調子だけ」

「確かに変よね。ねえ、ギーシュ！ 何か知ってる？」

少し遠くにいたギーシュも貴族達に取り囲まれていた。

最初は「話す訳にはいかない」と言っていたにも関わらず、取り囲まれてちやほやされている内に、言うか言わないかギリギリのところになっている。

「おや、モンモランシー。君も僕の秘密が知りたいのかい？ いやいや、困ったウサギちゃんだね！ 仕方ない、君にだけは教えてあげようかな！ 実は．．．」

そう言ったギーシュが人差し指を立てていたので、人混みをかき分けて近付いたキュ

ルケがギーシユの頭をすばんつ、とひっばいた。

「なっ、なにするんだね！」

「口が軽いと、お姫様から嫌われるわよ。ギーシユ」

そう言われたギーシユはぐつと黙って、「話す訳にはいかない」としかめっ面のまま呟いた。

それを聞いた周りの生徒達は明らかにがっかりしながら各々の席へと散らばって行く。

自分の席に戻ったキュルケはそれを横目で見てから、ルイズへと視線を向けた。

横にいたタバサは全く興味がないのか、ずっと本を読み続けている。

「それにしても確かにルイズは変ねえ。いつもなら、あんなこと言われたらすぐ怒るくせに」

そしてしばらくして何を思い立ったのか、もう一度立ち上がったキュルケはルイズの元に近付いていく。

「ねーえ、ルイズ？ そんな眉間にシワ寄せてたら、殿方なんて近付いてこないわよ？」

ただでさえそんなおムネしてるのに」

「そうね・・・」

しかしルイズはキュルケに顔すら向けず小さく返した。

キュルケが肩をすくめながら、またタバサの元に戻ってくる。

「全くもう、からかいにくいつたらないわ。つまんないの」

不貞腐れたようなキュルケを、ちらりとタバサが見る。

「・・・素直じゃない」

キュルケがちらとタバサを見返した。

「何か言った？ タバサ」

「・・・別に」

そしてキュルケは頬杖をついて、落ち込んだようにぼんやりとしているルイズを見つめていた。

その日の授業が終わり、ルイズはとぼとぼと歩いていった。

アルビオンでの出来事は、ルイズに大きな爪痕を残していた。

ニューカッスル城の人達やウェールズ様の覚悟を前に、何も出来なかつたこと・・・。

ウェールズ様が、目の前で殺されてしまったこと・・・。

自分が信じていたワルドが裏切り、自分たちを殺そうとしたこと・・・。

そして・・・。

ルイズはアウストリの広場へと訪れると、遠目にリウスの姿が見えた。

いつもと同じ恰好、いつもと同じ姿勢で、いつもと同じように本を読んでいる……。しかししばらくその姿を見ていても、一向に本のページがめくられる気配は無かった。

姫様の計らいによつて、リウスの傷は跡一つ残らずに治つていた。怪我也疲労ももう無くなつてはいるはずだ。

しかしアルビオンから帰つてきて以来、リウスの様子は何となくおかしいものに見えていた。

それにリウスは毎晩、滝のような汗を流しながら夢にうなされている。

ルイズがリウスの夢を見ることも、全く無くなつていた。

この数日の間、それとなくリウスへ聞いてみているのだが、リウスはまるで安心させようとするかのようにいつも通りの対応をするだけである。

ルイズはそつとリウスの背へと近付いてみた。

しかしリウスは気付いた様子も無く、ぼんやりとしたまま本ではなく宙を見つめていた。

これもまた、リウスらしくはなかった。
いつもならずぐ足音に気付いてくるというのに。

「リウス……?」

ルイズが呼びかけると、リウスはハツとした様子で振り向いた。

「あ……。どうしたのルイズ。授業おわった?」

「本、読んでたの?」

「え? ああ、そうよ。面白いのよ、この本。夢中になって全然気付かなかったわ」
そう言うと、リウスはルイズに向かってにっこりと笑いかけた。

しかしルイズは、そうしている中でもリウスの表情にどことなく違和感を覚えていた。

何だか、とても無理しているような……。

そうして二言三言話してから連れ立って歩いている時、少し強めの風が吹いた。

その風は春風らしく寒さが滲んでいて……、そう感じたルイズはぱつと名案を思い付いた。

「そうだ、リウスにマフラーを編んであげるわ。だから、リウスも私にマフラー編んでみてよ」

振り向いたリウスはきよんとした表情を浮かべている。

「マフラー？」

「え？ もしかして知らない？ こう、首に巻く、ふわふわの……」

「いや、知ってるけど……。どうしたの、急に」

その質問を予想していなかったルイズはあわあわと理由を考えるが、何も思いつかない。

何も考えずにその場の思いつきで提案した自分を呪いつつ、ルイズは堂々と腰に手を当てた。

「いい、いいから！ りり理由なんていいの！ ご主人様の命令よ！ 私に、マフラーを編みなさい！」

真つ赤になって真つ向から提案してくるルイズに、リウスはくすりと笑った。

「ま、いいわよ。私も編んだことあるもの。ルイズは得意なの？」

「わわ、私の趣味だもの！ それはそれは得意なの！ きつとリウスよりも得意だわ！」
ルイズも負けじと言いつ返していると、リウスがにやりと笑った。

「そうとなれば勝負みたいなものね。どっちが上手くできるか」

「じよ、上等よ！ かかかってきなさい！」

そうしてわいわいと話しながら、二人はルイズの部屋にあるという編み物の道具を取りに行くのだった。

その三日後の虚無の休日、ルイズの部屋には五人の女性が座り込んでいた。

「あ、違いますよリウスさん。こうですよ、こう」

「あれ、本当？ ええつと、こうやって……こう？ ……なんか違うような」

「こうです、こうやって……。こうして……」

シエスタが自分の編み棒を上手に操っていくが、リウスはきよとんとした顔のままです。それを見つめている。

そして自分の編み棒をもぞもぞと手早く操っていくが、作業が進むにつれてマフラーであるはずの横幅が徐々に狭まっていく……。

しばらく自分の編み物を進めていたシエスタが、ぎよつとしたようにリウスの手元を見た。

「リウスさん！ ストップ、ストップです！ 編み目が足りてないです！」

「え、あれ、いつの間に……。あれ？ これどうしたらいいの？」

リウスとシエスタが相談しながら進めていく中、キュルケはロマンズ本を片手に大きな欠伸をしていた。

タバサはちらりと二人のマフラーを見て、ほんの微かに笑い、もう一度本に目を戻し

ている。

「あーらら、めんどくさいことに……。どーお、ルイズ。進んでる？　……って何してんの！　めっちゃめちゃになってるじゃない！」

「う、うるさい！　ヴァリエール家じゃこれが普通なのよ！」

「こんな毛玉が普通だなんて有り得ないわよ！　貸しなさい！　あーもう、どうやったのこれ……。どうやって直せばいいのかしら」

キュルケがぶつぶつと文句を言いながらルイズのマフラーを修正していく。

つい昨日までルイズとリウスはそれぞれ別の場所で編み物を進めていたのだが、ルイズはキュルケに、リウスはシエスタにその様子を見られたのだった。

どうにも上手くいっていなかった二人は、そのままシエスタとキュルケに手伝わってもらい始めたのである。

そうはいつても、キュルケに関しては半ば無理やり手伝い始めたようなものだったのであるが。

苦戦している二人に対して、壁に立てかけてあったデルフリンガーがけらけらと笑い始めた。

「何でえ、二人とも。よくそれで編み物が得意とか言ってたもんだな」

「うっさい！」

「うるさいわ！」

ルイズとリウスの二人が顔を赤くして怒鳴った。

「おお怖い怖い。でも凄えことになってるぜ？ 鍋敷きとぬいぐるみ作ってたんだっけか？」

すつとリウスの目が細まる。

「ねえルイズ。こいつの耐久力を試してみたくない？」

「いいわね、私もすごく興味あるわ。私の魔法でも試してみようかしら」

デルフリンガーがかちやっつと柄を鳴らした。

「いやあ、よく見りや味があるというか……。いや、いいんでねえの？ なんとというか、プライスストレスな？」

ルイズがじろりとデルフリンガーを睨み付ける中、リウスは「まったく」と呟きながら作業を再開した。

「編み物ってこんなに難しかったっけ。前作った時は上手く出来たと思ったのに……」

シエスタも自分の編み物を続けている。まだ寒さが続いているので、自分用に新しい春向けのマフラーが欲しいのだそうだ。

「前は何を作ったんですか？」

「マフラーよ、マフラー。これと似たやつ。やってる内に楽しくなってきたやつ、結構な長さになってたつけ」

シエスタはリウスの顔を見た。何か嫌な予感がする。

「ど、どのくらいに？」

「えつとね。先生、マフラーあげた人が普通の男の人よりも少し背が高いくらいで……その倍くらい」

「そ、それは長すぎなんじゃ」

「……まあ、確かにちよつと長くなつちやつたけど。その人は暖かくていいって言つたのに」

しばらく沈黙が降りる。

一方のルイズとキュルケはぎやあぎやあと騒ぎながら編み物を続けていた。

「……その時の編み目の具合とか、聞いていいものなんでしょうか」

「……やめといて。なんか、大分めちやくちやだった気がしてきたわ」

しばらくしてキュルケがうーんと伸びをすると、各々が固くなった身体を伸ばしていき、

「はい、今日はここまで。二人とも上手くなってきた……気がしないでもないわね」

「そ、そうですよ。昨日までのアレに比べれば……」

昨日までに進めていたマフラーは無常にも部屋の隅に片付けられていた。

リウスのものは、毛玉が散りばめられた三角形の何か。

ルイズのものは、編み目が荒すぎて何に使うのかも分からないもの。

五人の協議の元、タバサの鶴の一声によりそれまで作っていたものは忘れようという結論に至ったのである。

すると小腹の空いたキュルケがシエスタをぱつと見た。

「そうだ。シエスタ、厨房つて借りられるのかしら？ お菓子を自分で作ってみるつてもオツなものじゃない？」

「あ、今の時間なら多分平気だと思います。先に聞いてきますね」

にこやかに一礼してから、ぱたぱたとシエスタが去っていく中、リウスはぐつと拳を握り込んだ。

「……明日こそは」

ルイズもこくりと頷いた。

「そうよ、まだまだ時間はあるわ」

広々とした厨房の中、リウスは砂糖の袋を手じつと考え込んでいた。

「このくらい……かな……」

ざらざらと荒めの砂糖がボウルの中に滑り込んでいく。

その様子をちらりと見たシエスタがぎよつとした表情を浮かべた。

「リ、リウスさん！ 砂糖入れ過ぎです！」

「ええ？ こんなものじゃないの？」

「その半分くらいですよ！ ええと、どうしようかな、ちよつと多くなつちやうけど……」

リウスとシエスタは、カスタードとベリーのパイに挑戦していた。

パイシートは既に学院にあるものを使い、シエスタはベリーの味付けを、リウスはカ

スタードクリームの作成中である。

少し離れたところでは、ルイズとキュルケが木製のボウルを前にぎやあぎやあと言い

合っている。

「ちよつとルイズ！ かき混ぜ過ぎじゃない！」

「いい、いいじゃないの！ こうやって混ぜるものでしょ!？」

「アンタね、泡立てりやいいつもんじゃないの！ ほらもう、よく見てなさい。このく

らいの力で、こうするのよ。ほら、やってみなさい」

二人は別の焼き菓子を作っていたが、もたつくルイズを見たキュルケは仕方なくその

補佐を行なっている。

タバサはいえは菓子を作る方ではなく食べる方に興味があるようで、材料を魔法で運んだり道具の準備をしたりと、静かにうろちよると動き回っていた。

それでも何とか作り上げて、かまどに作った菓子を入れると、全員で席についてふうつと一息ついた。

後片付けを買って出てくれたメイドの一人が紅茶の一式を持ってくる。

良い香りのする紅茶を一口啜ってから、キュルケがにやりと笑った。

「ま、ルイズが料理できないのは想像通りだけでも・・・」

「ど、どういう意味よー!」

「どういう意味ってそういう意味よ。・・・まさかりウスも料理下手とはねえ。あまり料理したことなかったの?」

リウスは気まずそうに紅茶を一口啜った。

「料理は、一応作ったことあるんだけど・・・」

「あら、どんな料理?」

リウスは目線を泳がせながら、もごもごと口を開いた。

「えっと、その・・・。た、タレを焦がした焼き肉料理とか」

まさかの料理に目を丸くしたキュルケが大きく笑い始めた。

「ずいぶん男らしいわね！ リウスらしいっちゃらしいわ」

「ぎや、逆に難しいと思いますよ。私は油が飛ぶのが苦手で・・・」

「美味しそう・・・」

「ねえねえリウス、今度作ってみてよ。食べてみたいわ」

各々がそれぞれ好きに笑い合っている。

タバサですらが薄く笑顔を浮かべているのを見て、リウスは顔を赤くしながら笑い返した。

すると、厨房にいた一人がくつくと笑いながら新しい紅茶を運んでくる。

恰幅の良い中年の男性、コック長のマルトーだった。

「ああ、これは失敬。貴族様方の会話に。いやなに、『我らが剣』にも苦手なもんがあるつてのに安心したんで」

「もうマルトーさん。やめてください」

リウスが困ったように笑顔を返した。マルトーは豪快に笑うと、シエスタの顔を見る。

「よかったなシエスタ。元気出てきてるみたいじゃねえか」

シエスタはハツとしたように慌てた表情を浮かべると、マルトーはにやりと笑みを返してから一団に向けて一礼をした。

「じゃあ、焼き上がったからお伝えしますんで。どつか運びたいところがあつたら言つてくださいや」

マルトーはそう言つて立ち去つていく。

きよんとんとしている桃色髪の二人に対して、合点がいったキュルケが紅茶のカップへ口を付けた。

「あの逞しい殿方も仰つてたけど、元氣が出てきたみたいでよかつたわ。ねえ、シエスタ。タバサ」

「あつ、はい……。そうですね」

シエスタは氣まずそうにもじもじとしながら頷いた。

タバサは本から目を上げて、リウス、ルイズの顔を見てから、また本へと目を戻す。合点がいったリウスは少し申し訳なきそうにしながらも、そつと紅茶へと手を伸ばした。

「初めてお菓子も作れたし、楽しかつたわ、ありがとう。肩の力も少し抜けちやつた」
リウスはにこやかと笑つてから、紅茶を一口飲む。

ルイズはその言葉に微笑みを浮かべていたが、少しばかり心配そうに、キュルケやシエスタと会話しているリウスを見つめていた。

また、あの顔だ。何か、必死に我慢しているような顔。話してくれればいいのに、と思う。

でも、その一步が踏み出せていないのは自分自身だと、ルイズにはちゃんと分かっていた。

自分はこのままリウスと一緒にいたいと思っっている。

リウスもきつとそうだと感じている。

でも、リウスは帰らなければならぬ。

それは必要に駆られてのことじゃないのだ。

私が、そうすべきだと思っっているからだ。

それならせめて、何かをリウスのために残すことは出来ないだろうか。

リウスの重荷を背負うことは、出来ないのだろうか。

あのアルビオンに、ニューカッスル城に訪れた時からずっとそう考えている。

それは自分勝手なのかもしれない。

私が満足するためだけに、そう考えているのかもしれない。

それでも、何か……。

（笑ってる顔が一番いいだなんて……、私があなたにも思っってるって考えてくれないわ

け?)

ルイズは拳を握りしめながら、ひとり心を決めていた。

「あ、そろそろ出来上がるんじゃないですか?」

シエスタの言葉通り、厨房には砂糖やバターの甘い香りが漂ってきていた。

マルトーが二つのかまどを交互に覗き込んで、焼き上がったパイや焼き菓子を手慣れた様子で銀製の皿へと移していく。

鼻孔をくすぐるような甘い香りの中、楽しそうに笑顔を浮かべているリウスに向けて、ルイズはこの時間がずっと続いてくれればいいと少しだけ考えてしまうのだった。

第四十五話 告白

虚無の休日の夜、夕食を終えたルイズとリウスは、ルイズの部屋でシエスタやキュルケに手伝ってもらった編み物の続きを行なっていた。

「あのお菓子はちよつと多かつたわねえ。もうお腹がパンパンだわ」

「でも美味しかったわよ？ 自分で作ると違うものね」

二人は編み物を続けながら雑談を交わしていた。

ルイズはちらりとリウスの様子を見るが、リウスはいつも通りの柔和な表情のまま自分の手元を見つめている。

そのままじいっとリウスの顔を見ていると、リウスが顔を上げた。

ルイズはどきりとして自分のマフラーに目線を落とす。

「ルイズ。それ、大丈夫？」

ふと気付くと、ルイズのマフラーの編み目がずれて、一部の編み目が広がってしまったている。

慌てながら修正しようとするルイズに、リウスは自分の編み物をテーブルに置いて近寄ってくる。

「ここは、こうして……こう……ほら、直った」

「あ、ありがとう」

「同じミスを大分やったからね。もう慣れたもんよ」

リウスはにやりとルイズへ笑いかけると、また自分の編み物を手にして座っていた椅子へと戻っていく。

ルイズは自分の編み物を手にしながらも作業を止めたまま、そのリウスの様子をしばらく眺めていた。

「昼間に心を決めたまではよかった。でも、どう切り出せばいいのか……」

「ルイズ、どうしたの？」

ルイズがはつとして顔を上げると、編み物をしていたりリウスがちらりと上目遣いにルイズを見た。

「あの……」

ルイズは話を切り出そうとするが、俯きながら口を噤んだ。

「変なルイズ」

笑顔を浮かべたリウスはまた作業を続けていく。しばらくそうしてから、俯いて手を止めたままだったルイズがぽつりと呟いた。

「エミールの……こと……」

一瞬だけ、リウスが手を止めた。

しかし表情は変えずにそのまま作業を続けていく。

「……そういえば、そのことは聞いてなかったわね。話したくなかったらいいわよ。個人的な話だから」

どこことなく、その口調には拒絶の感情が見え隠れしていた。

ルイズはぐつと緊張を浮かべながらも、顔を上げた。

「……私は、リウスが苦しんでる姿を見たくない。もし話すことで気が楽になるのなら、話して欲しいの」

しかしリウスは作業を止めず、ルイズを見もせず小さく言葉を出した。

「何の話？」

「……リウス、最近ずつとうなされてる。何の夢を見てるの？」

「……さあ、忘れちゃったな」

その拒絶の言葉に口を噤みそうになるが、ルイズはぐつと堪えてリウスの顔を見つめ続けていた。

「アルビオンの時、あなた言ってたじゃない。みんな、いなくなっちゃったって……」

あれは、何で」

「ルイズ」

リウスが強い口調でそう言った。

ぎくりとしてリウスの表情を見る。

また何かを必死に耐えているような、あの顔だった。

「その話はやめて」

「こちらを見ないまま投げかけられた言葉に対して、ルイズも強い口調で返した。

「いやだ。やめない」

少し苛立ったような厳しい表情を浮かべながら、リウスがようやくルイズの顔を見た。

「何のつもり？」

「リウスこそ、何のつもりよ。私が心配してないとも思ってるわけ？」

そのまましばらくの間、ルイズとリウスは睨み合っていたが……。

溜め息を吐いたリウスが手に持った作りかけのマフラーをテーブルへと置いた。

「……簡単な話よ。ワルドから雷の魔法を受けた時に思い出しただけ」

「……何を？」

「ここに来る直前の記憶」

ルイズはどきりとした。

リウスはずっと、何故この世界に来たのか自分でも分かっていなかったはずだ。

そして、そこには何か元の世界に戻る理由があるかもしれないのだと。

「何が、あつたの……？」

その震える声に、リウスはおぼろげな瞳でルイズを見つめ返した。

その姿はまるで消え入りそうに見える、ルイズはキツと唇を結んで続けた。

「私は、リウスの夢をずっと見てきたわ。始めは、ボロボロの服を着た人がいっぱいいる場所の夢だった。それから、カトリリーヌが出てくる夢も見だし、先生が出てくる夢だった……」

真つ直ぐに自分を見つめているルイズへ、リウスは納得のいったように頷いた。

「……使い魔のルーンの影響かしら。なるほどね、そうだったの。あまり楽しい夢じゃなかったでしょ」

ルイズは首を横に振る。

「辛い記憶もいっぱいあつたけど……。あの二人と話してる時のリウスは、本当に安心してて幸せそうだった……」

私はリウスの重荷を少しでも背負いたい。お願いだから、そんな顔しないで。私

だって・・・リウスのためになりたいんだから」

何の表情も浮かべずにリウスはしばらく黙ってルイズを見つめていたが、やがて観念したように薄い笑みを浮かべた。

「・・・そうね、ルイズには話さなくちゃいけないかもね」

そう言うのと、リウスは窓の向こうに浮かぶ暗闇へと視線を向ける。

「どこから、話したのかしらね」

リウスは窓の向こうを見つめたまま、ゆっくりと話し始めた。

「私が物心ついた時は、リヒタルゼンって街の大きな家で暮らしてたわ。父さんもお婆ちゃんも、赤ん坊だった弟のエミールもいた」

「母さんは、ほとんど家に帰ってこなかった。母さんはルーンミッドガッツ王国の間違ったから、一緒には住めなかったの。ほんの時々しか会えない母さんが恋しい時もあつたけど、今思えばあの頃は幸せだった気がする」

ルイズはじつとリウスの話を聞いていた。

リウスは何の感情も乗せずに、ただ訥々と話し続けている。

「リヒタルゼンはね、シュバルツバルド共和国内で一番強い権力を持つてる、レッケンベ

ル社つていう組織の街なの。父さんもレッケンベルの人間だった。

でもある時、私とエミール、それにお婆ちゃんも貧民街に追いやられた。父さんも母さんもない中で貧民街に家をあてがわれて、そこで私たちは暮らし始めた」

「貧民街に移ったのは父さんがアインブロックつていう街から帰ってきた直後だった。

後で知ったんだけど、私たちが貧民街に移った時にはもう、父さんも母さんも死んでた。事故なのか、他殺なのかすら分からない」

ルイズは息を飲んだ。

前に見た夢で、リウスの両親の顔を見ることがあった。

あの優しそうな、幸せそうな二人の顔を。

「そんな……、なんで……？」

「父さんが何かの研究に携わってたらしいけど、詳しくは知らないわ。もしかしたら家や市民権を奪われたのとの関係があるかもしれない。けど、それも結局分からなかった」

能面のような表情のまま、リウスは話し続ける。

「貧民街に着いてからのことは、いっぱいあるわね」

「街の配給だけだと食べていけなかったから、お婆ちゃんは何かの仕事をしてた。

だけどある日、足に怪我をして帰ってきたわ。その怪我が元で、お婆ちゃんも死んじゃった。いつも優しい、お婆ちゃんだった」

リウスは少し俯くと、何でもないことのように話し続けていく。

「エミールと二人で暮らしてた時、私はガラクタや髪を売って過ごしてたわ」

「・・・髪？」

ルイズが呟くと、しばらくぼんやりとしていたリウスは合点がいったように頷いた。

「・・・ああ、ルイズには馴染みがないかもね。そこそこ良い値段で売れるのよ、これ」

リウスは自分の髪を摘まんで、ぴらぴらとルイズに見せる。

貴族社会の中で生き続けてきたルイズは、髪が売れるだなんて考えたことすらなかった。

「そんな生活を始めてから、一年くらい経って、私は・・・」

ルイズは目線を落としたリウスを見つめた。

言葉を止めたリウスの唇はかすかに震えている。

それでも静かに口元を結ぶと、もう一度言葉を続けた。

「そう、私はね、貧民街から街の外へ繋がる穴を見つけたの。それからは時間のある時にその穴から外に出て、使えそうなものを集めては食べ物と交換してた。小さい頃に読んできた図鑑を思い出しながら薬草を集めたり、時々モンスターを退治して使えそうなものを集めて暮らしてた。

・・・得意になってたわね、私は。これで二人とも生きていけるって」

無表情のまま、リウスは少しだけ俯いた。

「でもね、でもある日に、私は外でモンスター群れに襲われて怪我をした。そして、その怪我が原因で病気になった。

・・・エミールは私のために、何度も栄養のある食べ物を買に行つたわ。私を、お婆ちゃんと同じ目には会わせないって。自分の髪すら売って、食べ物と交換してくれてた」

少しずつ、リウスの語調が荒くなつていく。

「ある日、エミールは男に襲われた。争う声が聞こえたから、私はその場所に走つた。そして、したら、したらエミールが倒れてて、男がエミールを殴つてた」

リウスは何も言えずに、ただ黙つてリウスの話を聞いていた。リウスの声は、かすかに震えている。

「わ、私は、止めようとしたけど、何も出来なかつた。男は、お前も仲間かつて殴りかかってきた。止めようとしたのよ。でも、武器を持つても、何も出来なかつたのよ、私は」

リウスはどう言えばいいのかも分からず、リウスの震える手をそつと握つた。びくりと身を震わせたリウスが、リウスの顔を怯えたように見る。

その顔は、まるで涙を堪えている小さな子供のようだったが・・・。我に返つたのか、リウスに向けて弱々しく微笑んでから、顔を見せまいとするかのように小さく俯いた。

「・・・大丈夫よ、落ち着いたわ。大丈夫。・・・当時ね、貧民街では失踪事件が多発してたの。だから、同じ貧民街の隣人であっても協力し合える状態じゃなかった。皆、疑心暗鬼になってたわ。だから襲われたのね、多分」

「・・・男は、私をひとしきり殴った。その時エミールが男に掴みかかったけど、あいつはエミールを突き飛ばしてから慌ててどこかに逃げていった。

エミールは、頭を強く打つた。血だらけで、ぐったりとしてて。エミールは、そのまま私の目の前で息を引き取った」

俯いたまま、リウスはルイズに添えられた手から、静かに手を引いた。

そのまましばらく黙り込んでから、リウスが小さく呟いた。

「私が、エミールを殺したのよ」

「・・・そんな」

どうすればいいのか、どう言えばいいのか、ルイズは一瞬逡巡した。

「そんなことない。エミールはその男が・・・」

「違う。私が殺したの」

リウスはルイズへ顔も向けず、独り言のように呟いている。

それでも何か言おうとしたルイズの言葉を遮るように、リウスが弱々しい目で笑いかけた。

「話を続けるわね？」

有無も言わさないような口調で、またリウスは語り始めた。

「・・・その後ちよつとしてから、母さんの知り合いだと名乗る老人が現れた。その人に治療を施されてから、私はその人に連れられてリヒタルゼンを出ることになった」

「その人は母さんの魔法の師匠でね、その後の私に魔法を教えてくれた先生でもあるの。その人と同じように、母さんもウィザードっていう地位のメイジだった。

先生は厳しかったけど、本当に優しい人だった。そのまま私は、ルーンミッドガッツ王国のゲフェンって街で暮らし始めた。ルイズは夢で見てるかもしれないわね。大きい塔と噴水のある街よ」

「そこで先生と暮らしてた私は、カトリーヌと知り合った。私は魔法を上手く使えなくてウィザードにはなれなかったけど、何とか私は魔法を使えるようになった。

・・・その間、何度も夢を見たわ。エミールが死ぬ夢を。それで私は・・・先生には止められたけど、復讐のためにリヒタルゼンに戻った」

「復讐・・・」

「そう、復讐よ。あの男を八つ裂きにしてやりたかったの。それに、私自身があいつに

会ってどう思うのかを確認するためだった。……でも、あの男はもう死んでた。他の人に殺されたんだって。あいつの死に様としては不満が残るけどね」

そう吐き捨てたリウスは、とても悲しそうな、残酷な笑みを浮かべていた。

ルイズには、ニューカッスル城で見たリウスの姿と、今のリウスが、まるで重なっているように見えた。

「私には、何にもやることがなくなった。でも、せめてセージになりたかった。それまでの私たちに意味を持たせたかった。カトリーヌのために、って言い聞かせてね。そのまま私はセージの試験を受けた。今思うと、よく受かったものよ」

「……一人でジュノーに移り住んでから、セージのアカデミーで魔力解析の勉強を必死にやったわ。才能があったみたいで、すぐ人とモンスターの魔力解析が出来るようになった。」

カトリーヌにも会いに行つて、強すぎる魔力の抑制方法を話し合つた。あの子の場合には杖にも問題があったからそれも改善して、カトリーヌは魔法を自在に操れるようになっていった」

「そこからの事を、前にアンリエッタ姫殿下が来た時に話したかしらね。私は冒険者として遠出をするようになった。色んな国を回つて、色んな人の依頼を受けた」

「ある時ジュノーに帰つてみると、先生が、さつき言った母さんの師匠ね、あの人が見失

したってという話を聞いた。リヒタルゼンに行つてから、歸つてこないって」

「リヒタルゼンには二度と近付きたくなかつたけど、先生を探すために私はリヒタルゼンに向かつた。数か月してようやく見つけた協力者によると、先生はシュバルツバルド共和国の上層部から依頼を受けて、レッケンベル社のことを調べていたらしかつた。そしてそのまま、行方知れずになつてた」

「いったん調査を切り上げてジュノーに戻つてみると、カトリーヌが私を訪ねてきていたと聞いた。私はその二年前にカトリーヌに酷いことをしたのよ。本当は、私こそ会いに行くべきだつたのに。」

でも私がリヒタルゼンにいるつて知ると、カトリーヌはリヒタルゼンに向かつていた。元々、カトリーヌもルーンミッドガッツ王国からの依頼を受けていたらしいから「嫌な予感がしてリヒタルゼンに行つても、先生も、カトリーヌも見つからなかつた。かすかな情報から辿つていく内に、カトリーヌと同じような、ルーンミッドガッツ王国からの調査員と会うことができた。」

その人たちと一緒にレッケンベル社の調査を始めて、一ヶ月くらい経つてからだつたかな。ようやくレッケンベル社の地下にある研究所の情報を手に入れた。もうその研究所は崩壊してたけどね」

「そして・・・そこでようやく、カトリーヌの情報に辿り着いた」

ルイズは息を飲んでリウスの言葉を待った。

リウスは何かを思い出すように遠い目をしていたが、その顔には何の表情も浮かんでいなかった。

「カトリーヌはね、もう死んでたのよ。研究所の実験材料にされて」

「え・・・？」

ルイズの動揺を無視するかのようになり、リウスはゆっくり話し続けていく。

「その研究所は、人間の魂を取り出して魂の複製を作ってた施設だった。力のある冒険者を複製するために・・・。私たちは、その冒険者達に襲われて全滅した。

私が死んだのはね、カトリーヌの複製に殺されたからよ。これが、思い出した記憶ってわけ」

そう言うてにこりと笑いかけるリウスの顔を、ルイズは信じられないように見つめていた。

今のリウスの顔は、ルイズの知るリウスの顔とはかけ離れているかのように見えた。「私たちは、殺される直前にこれを手に入れてたの」

一旦話を終えたリウスは呆然としているルイズから目を離すと、椅子から立ち上がった

て自分の荷物袋をあさり始めた。

そして小さな皮袋を手にする、ルイズへ見せるようにその中身を外へと出した。

「これよ」

リウスが袋から取り出したのは、手の平ほどの藍色の球体と、ガラス管に入った石の欠片だった。

「この球は、カトリーヌだって聞いている。正確には、複製された魂」

「……この球が？」

「そう。それよりも問題は、こっちの石よ」

リウスは藍色の球体を皮袋の上に置くと、石の欠片が入ったガラス管をそつと手に取った。

「この世界に來たのは、この石を持った私だけだったわ。私が死んだ時、私はこの石を持ったままカトリーヌの魔法を受けた。その時どうなったのかはほとんど分からないけど……、何か、吸い込まれるような感覚があったことだけは覚えてる」

「吸い込まれる……」

「研究者の記録だと、カトリーヌの魔力でこの石の研究を行なおうとしていたらしいから……。もしかしたら、この世界に來た理由はこれが原因なのかもしれない」

両手に持ったガラス管を見つめながら、リウスはじつと黙り込んでいた。

その目は虚ろで、ルイズには彼女が何を考えているのか分からなかった。

「何もかも、私が悪いのよ。自業自得どころじゃないわ。とんでもない女よね」

その静かな独白に、ルイズが声を上げた。

「……何で？ 何でルイズがそんなこと言うの？ あなたが悪いことなんてひとつも……」

「私がみんなと出会ったからこうなった。つまり、全ての原因は私だったってことなのよ」

そう断言したルイズに、ルイズは絶句していた。

ガラス管を見つめながら、ルイズはまるでルイズを諭すように続けていく。

「ルイズも分かるでしょ？ あのカトリリーヌですらああなった。それなら、先生もたぶん無事じゃない。」

私が最初つからいなければ、エミールも、先生も、カトリリーヌも、死なずに済んだかもしれない」

「そ、そんなことないわ！ ルイズは何も悪くない！ 悪くなんてない！」

「そんな言葉はいらないわ。……いらぬのよ、ルイズ」

「ことり、とルイズがテーブルにガラス管を置いた。」

「私は、私の家族が死んだことに意味を作りたかった。私がおその意味を作るはずだった

し、作らなくちゃいけなかった。

でもね・・・、お笑いぐさにもならないわ。私がいたから、皆いなくなった。皆いなくなったのは・・・、『私がいたから』っていう理由があつたからとしか思えない」

リウスはそう言うと、ほんの少しだけ口を閉ざした。

リウスの言葉には澱みが無かつた。

まるで、本当にそうであると信じ切っているのかのように。

「だからね・・・。そう、アルピオンから戻つて、ずっと言おうと思つてた。でも、言えなかつた。それでも言わなくちゃいけないってことは、分かつてるつもりよ」

「ここから続く言葉がルイズの脳裏によぎつたが、それを信じたくなつてなかつた。

「ルイズ・・・、私はもうこれ以上ここに居ることは出来ない。私とすれば、ルイズにも良くないことが・・・。」

「いやだつ!!!」

弾かれたようにルイズが叫んだ。

「リウスといて良くないことなんて、起こるわけない!!」

「・・・ルイズ、お願いだから・・・。これ以上・・・。」

ルイズはリウスと離れたくないという気持ち以上に、ここで引き下がつてはいけな
いと何故か強く確信していた。

二つの感情が奔流となつてルイズの中で交差する。
絶対に認めたくない。認めてはならない。

「いや!! 絶対にだめ!! そんなの・・・」

俯いたリウスは唇を震わせながら、強く、かぶりを振った。

「だったら・・・。だったらっ!!」

「わたしはっ!! どうすればいいって言うのよ!!!」

俯いたまま、リウスが叫んだ。

「私が、エミールを、みんなを殺したのよ! 私は、先生にもカトリーヌにも出会うべきじゃなかった! 母さんみたいな立派なウィザードなんて、目指すべきじゃなかった!!」

リウスは俯いたままだったが、ぽつぽつと涙がこぼれている。

リウスの服に涙が落ち、黒い染みを作っていく。

「カトリーヌと出会わなければ! 友達になろうだなんて考えなければっ! カトリー

又だつてあんなことにはならなかつた！ 先生だつて、私のことなんかあんなに気に病まなければ……！」

リウスは震える手で顔を覆つた。

そこで涙が溢れたように流れているのに気付き、ぐいと両目を拭う。

「エミールだつて……っ！ あんなに、あんなに優しい子が……どうして……!!」
拭つても拭つても、次から次に涙がこぼれていく。どうしていいかも分からずにリウスはその感情のままに言葉を続けていった。

「今でも、今でも覚えてるわ……。あんなに暖かかつたあの子の体が、見る見る内に冷たくなつてく。私が、あの子をあんな目に合わせたのよ。私が、私のせいで……あんな……!!」

リウスは両手でリウスの肩を掴んで、叫んだ。

「わたしは！ リウスに会つて救われたの！ いっぱい助けてもらつた！ あなたは悪くなんてないっ!!」

リウスは俯きながら、何かを振り切るように強くかぶりを振る。

目の前のリウスの顔なんて見る訳にはいかなかつた。

「リウスには、関係のない話なのよ……。何で、そんな……」

「関係なくない！ 何でそんなこと言うのよ!!」

ルイズはリウスの肩を掴んだ両手に力を込めた。
伝えなければならぬ言葉は分かっていた。

今にも崩れ落ちそうな姿を前にして、ルイズの目からは涙がこぼれ始めていた。

リウスや夢の中で見た人達の笑顔が頭をよぎり、その光景にルイズは胸をかきむしられるような悲しさを覚えていた。

この人は、いつだって強くあろうとしていたのだ。

何に晒されても逃げることにすらせずに、自分の命すらも後悔の記憶の中へと投げ出して、逃れられない恐怖に一人で立ち向かい続けてきていた。

今この人の手を取ることが出来なければ、この人は、いつまでも囚われたままだ。

「エミールだって！ カトリーナだって、先生だって！ リウスを恨んでる訳なんてないのよ!! リウスの幸せをつ……！ 願ってるに、決まって……」

ルイズの目から涙がこぼれていく。そのままリウスの顔を抱きしめるように強く胸へとうずめた。

「もう、やめてよ……。一人で抱え込まないで……。私がいるから……。いなくなったりなんてしないから……」

自分の頭を包む暖かい感触に、リウスは自分の感情が溢れだしていくのを感じていた。

もう嫌だと、今まで何度思ってきたのだろう。

後悔を思わなかった夜なんて今まで一度もなかった。

その度に、この手から失ったものを想う度に……。私は何度、その凍えるような感覚に怯え続けてきたのだろうか。

言葉少なげに自分を気遣ってくれていたカトリクス。

夕暮れ時に自分の手を引いてくれていた先生。

二人のうつすらとした笑顔や、エミールの嬉しそうな小さい姿、おばあちゃんの優しい細い手の平、父さんや母さんの幸せそうな表情が、濁流のように脳裏を流れていく。

「……………う……………う……………う……………」

リウスの胸から、押し込めていた悲しさも、悔しさも、全てが溢れ出していった。

憎しみも怒りも恐怖も、その全てがどんと飲みこまれていく。

「．．．うううう．．．何で．．．何でカトリーヌがつ．．．先生がつ．．．う
ああああ．．．」

必死に感情を押さえこもうとする子供のような泣き声が、いつまでも部屋の中に響き
続けていった。

第四十六話 夢の終わり

ふと気付くと、リウスは暗い部屋の中にいた。

窓からはうつすらと月明かりが差し込んでいる。

その月明かりを眺めながら、リウスは柔らかなソファの上にひとり座っていた。

しばらくして、部屋の中に綿をナイフで突き刺すような、奇妙な音が聞こえてくる。

「忘れるな……。憎しみを……。報いを……」

部屋の中に呻くような小さい声が響いている。

窓に映る満月を見上げつつ、リウスはその声へと静かに答えた。

「忘れないわ。忘れる訳がない」

高い空に浮かぶ月は、いつもと変わらずに煌々と光り輝いている。

その姿は幼い頃から全く変わってはいない。

いつもいつも、あの月は私を見下ろし続けていた。

それすらも憎んでいた時があったのだが、それはずいぶんと昔のことのように思える。

「それなら……。繰り返せ……。みんなを取り戻せ……」

誰かの小さい声が呪詛のように繰り返されていく。

しかしリウスは、今までのように恐怖に震えることも、後悔に押し潰されることもしなかった。

「みんなが戻ってくるなんてないわ」

「・・・嘘だ」

「私が、そう信じていたかっただけよ」

「・・・嘘だ！」

徐々に、眩きは訴えるような熱を帯びていく。

「それなら、みんなは何でいなくなつた・・・！ みんながいなくなつたのには・・・！

何の意味があつた・・・!!」

「・・・分からない。でも分からないなら、今、出来ることをするしかないんだわ」

「みんなは、戻ってくるに決まつてる・・・！ みんな・・・何も無かつたみたいにな・・・戻つて・・・！」

部屋を響かせていた声は、次第に少女のような嗚咽へと変わっていく。

「後悔はもうしたくないけど・・・。うずくまつてたら何も出来ないのは、あなただつて分かつてるはずよ」

そのまま暗い部屋の中にかすかな泣き声が響き続け・・・、そして、ゆっくりと消え

ていった。

リウスはしんと静まり返った部屋の中、誰に言うでもなく声を出した。

「ねえ、今も聞いているの?」

しかし、誰も答えない。

あの金髪の青年。彼は、今もこれを聞いているのだろうか。

「あなたが誰かは知らない。だけど、私はここで生きてみせる。ルイズの使い魔として」
気付くと、窓辺に誰かが立っていた。

リウスと同じように、明るく光り輝く満月を見上げている。

「それが、君の選択か」

「ルイズにとつて必要じゃなくなったら、いつでもこの世界から去ってみせるわ。あなたが何を求めているのかは分からないけどね」

男がこちらへと振り向いたが、月明かりに照らされたその顔に見覚えはなかった。

月明かりに金の髪が輝き、青い瞳を湛えたその顔には静かな笑みが浮かんでいる。

「それなら、今は君の好きなように動くといい。．．．運命は、いつも君と共にある」

そしてどこからともなく、部屋の中が真白い霧に満ちていった。

リウスの視界が白色に覆われていく中、もう一度、青年の声が聞こえてくる。

「僕も、最善を尽くしてみせよう」

リウスはぱちりと目を覚ました。

ふかふかした布団の感触の中、リウスはルイズに抱きかかえられるように眠っていたようだ。

目線だけ動かしてルイズの顔を見ると、ルイズはすうすうと寝息を立てて眠っている。

まるで幼子のような自分の体勢に気恥ずかしくなり、リウスはもぞもぞと布団から這い出していく。

幸い、ルイズが目を覚ました様子はない。

目がしよぼしよぼとしていたので、リウスはまぶたをこすりながら部屋の鏡を覗き込んだ。

「……ひどい顔」

そうは言いながらも、リウスは胸のつかえが取れたような感覚を覚えていた。

あんなことになってしまったのはいつ以来だろうか。そのまま思い返していても、自分の過去を全て話したことなんてリウスの記憶には全くなかった。

あんな情けない姿を人に見せたことなんて、今まで一度も……。

「おはよう相棒。もう平気か？」

少しぼんやりしていたリウスに、背後からデルFRINGERが声をかけた。

「……ああ、デルフ。おはよう」

平気かとはどういう意味なのか。

デルFRINGERの姿を見たリウスは、ふと何かを失念しているような気がした。

「……っ！」

それに気付いたリウスの顔は見る見る内に真っ赤になった。

そういえば、昨日はずっとデルFRINGERを部屋に置いていたはずだ。

だとしたら、昨夜のことも……。

「デ、デルフ！ アンタ、昨日の話聞いてたでしょ！」

「お、おい相棒。嬢ちゃんが起きちまうぜ？」

またしてもハツとしたリウスは、慌てて布団にくるまっているルイズへと振り向いた。

しかしルイズは未だに熟睡中である。

ほっとしてから、リウスは声のトーンを落としつつデルフリンガーに詰め寄った。

「アンタね。盗み聞きなんて趣味悪いわよ」

「しようがねえじゃねーか、俺っちは剣だもんよ。相棒みたいな足がありや俺だつて外に出てたっつ」

不貞腐れたようなデルフの声に、リウスはぐつと黙った。

それはどうみても正論であつて、デルフが悪いわけがない。悪いわけがないのだ。が……、なんとなく癪に障るのでリウスはぶいとそっぽを向いてから服を着替え始めた。

「まあ、安心したっちや安心したぜ。相棒はいつでも無理しやがるからな」

「うるさい。昨日のことは黙ってなさいよ」

リウスの不満そうな言葉にも、デルフリンガーはけらけらと笑っている。

そんなデルフリンガーをじろりと睨んだリウスは、そういえば、とあることを思い出した。

「デルフ。そういえばニューカッスル城にいた時、本当の姿がどうか言つてたわよね」

「ああ、言つたね。それで相棒は今の今まですつかり忘れてたね」

「う……。確かに忘れてたわ、ごめん」

「……まあ、しゃあないか。あの状況じゃな。そう、錆びてた姿は自分で変えてたんだよ」

「なんで、そんなこと？」

「つまんねえ奴にばつか使われて、飽き飽きしてたからな！」

わっはっは、と笑うデルフリンガーに、リウスは溜め息を吐いた。

「アンタ、変なことしてるわね。私が買った時からそういうことは言いなさいよ」

「しょうがねえじゃねーか、忘れてたんだから。相棒の感情に引っぱられて思い出したんだよ」

リウスはきよとんとした。今、デルフリンガーが変なことを言っていたような……。

「感情、って？ どういうこと？」

「あー、相棒には話してなかったっけ？ 俺たちは使い手の感情も読めるのさ。あんとき相棒は久々にビビっとくる感情だったからな。俺っちもテンション上がっちゃまってたし。」

あと……、その、なんだ。あの子の感情とかな」

あの子というものは、たぶん私が錯乱していた時のことだろう。

あの時のことはあまり自分でも覚えていないことではあるので、何やら申し訳ないような声を出されても何とも言えない。

するとデルフリンガーが何かを思い出したように、もう一度声をかけてくる。

「そう、これも相棒に言つてなかつたっけか。ガンダールヴのルーンは、感情にその強さを左右されるんだよ」

「感情に？」

「心を震わせれば震わせるほど、ガンダールヴの力を引き出せるってこつた」

「・・・それも忘れてたわけ？」

「忘れてたっつーか、なんつーか・・・。思い出したんだよ。気付いたっつーか」

「忘れてたつてことじゃない。で、何に気付いたの？」

「相棒のガンダールヴの力は、なんか、弱いんだよ」

すつかり着替え終わったリウスは、梳いた髪を三つ編みに結びながらデルフリンガーへと振り返つた。

「これで弱いのか？」

「そうそう。なんつーの？ 相棒はいつつも感情を押し殺しながら戦つたりしてらだろ？ 多分だけど、アルビオンで相棒が一回やられてからの戦い、あれが本来のガンダールヴの力だったんじゃないかな」

その時、リウスが思い出そうとしていたのはワルドとの戦いではなく、フーケを捕らえた時のことだった。

フーケのゴーレムから、ルイズを救いに行った時……。あの時のこともうる覚えではあるのだが、今考えればいつもよりも遥かに素早い動きをしていた気がする。

「まあ、流石にあそこまでの感情はいらねえけどな……」

何やら珍しい口調でデルフリンガーが呟いた。

「ワルドと戦ってたとき？」

「そう」

「私はあるまり覚えてないけど」

「……それでいいんだよ相棒。ありや、やりすぎだよ。もつと自分を大切にしな」

「……何よ、心配してくれてるの？」

「何だよ、心配しちやいけねーってのか？ ああそうだよ、心配してんだよ。あんな感情、耐えきれぬわきやねーだろが」

三つ編みを結び終わったリウスは言葉を濁しながら、ぼりぼりと頬をかく。

「その、えつと……。あ、ありがとうね、デルフ」

「けつ！ 俺つちらしくもねえな、こんなん！ 相棒も昨日は子供みてえにわんわん泣いちまってよ！ あんなに思いつめるんだったら、はなつから人に頼れつーのよ！」

かあつとリウスの顔が朱に染まった。

何か言おうとして口をぱくぱくさせてから、ようやくリウスはデルフリンガーへと

い返した。

「う、うるさいなあ！　しょうがないでしょ頼り方なんて分からないんだから！　アンタそうやって他のところでも言いふらしたら地面に埋めるわよ！」

「まーたそうやって意地ばつか張りやがってよ！　マフラー編んでる時も自信マンマンなくせしてあんな三角形の鍋敷き作ったりしてよ！　なんかあんだったら俺っちにでも話しいいじゃねーかよ！」

「剣に相談なんて私のいた世界でもいないわよ！　大体アンタ魔法を吸収できるつてもあんな状況で初めて言うだなんてバカじゃないの!？」

「だーから忘れてたんだって言ってんだろがよ！　大体あんな状況で嬢ちゃん助けに行ったらあんなことになるくらい分かりきってんじゃねーかよ！」

「そんなこと言ったってあれ以外に無かったでしょうが！　アンタほんとに地面に埋めて……」

ハツとしたリウスは、ゆっくりと顔をベッドに向けた。

そこにはベッドに座ったまま、くすくすと笑っているルイズの姿があった。

「おはよう、リウス」

「あ……、あの、ね。これは……」

リウスは顔を赤くしながら、困ったような表情で目線を泳がせている。

デルフリンガーが勝ち誇るかのように鞘をかちやかちや鳴らしているのを、リウスはじろりと睨み付けた。

「良かったわ、元気になって」

「・・・ああもう。剣と争い争いだなんて。起こしてごめんね、ルイズ」

「別にいいわよ。それよりも、リウスが元気になって本当に良かった」

そう言っただけで笑っているルイズに、リウスは自分の結んだ髪をいじりながら口を開いた。

「昨日は、迷惑をかけたわ。もういなくなるなんて言わないから」

ぱっと嬉しそうな表情を浮かべたルイズはベッドから降りると、小走りにリウスへ駆け寄っていく。

「本当?」

「本当よ」

「もうウソは言わない?」

「・・・言わない、かも」

そう言ったりリウスにルイズは少しむつつりしながら、腰に手を当ててリウスを見つめている。

そのルイズの視線にリウスは目を泳がせていたが、ゆっくり笑顔を浮かべるとルイズ

の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「……分かった。もうウソは言わないわ」

「……本当に？」

「本当よ」

「本当の、本当？」

「本当だってば」

にんまりと笑ったルイズが、リウスの身体に抱きついてくる。

リウスは驚いたようにルイズを見ていたが、優しく暖かい感覚を確かに感じながら、ふっと穏やかな微笑みを浮かべてルイズの頭をもう一度撫でた。

少しの間そうしていたが、ふとリウスが口を開いた。

「……そういえば、今日って授業なかったっけ？」

その言葉にルイズはぱつと離れて窓の外を見た。もう太陽がはるか上まで昇っている。
る。

そういえば、周りの部屋からも物音ひとつ聞こえてこない。

ルイズとリウスはそれぞれ慌てながら身支度を整え始めた。

それから少しして、授業が行われている部屋に慌てふためいた桃色髪の二人が駆け込

んでいくのだった。

第四十七話 Engine

数日が過ぎ、その日の教壇にはニコニコと笑うコルベールの姿があつた。

「さてと、皆さん」

コルベールは上機嫌にそう言うと、レベテーションの魔法で何やら奇妙な物体を机の上に置いた。

でんつと置かれたその奇妙なものには円筒状の金属の筒やらパイプやらが伸びており、パイプが繋がる先にはふいごのようなものがある。

円筒の頂上にはクラंकが、そのクラंकは奇妙な形をした車輪に繋がり、更にその車輪と繋がった奇妙な箱がある……。

一見して前衛芸術のような、ただのごちゃごちゃしたガラクタのような物体を見て、生徒達は「今日は休講か」とばかりに近くの生徒達との私語を再開していた。

コルベールは生徒の教育に冷淡というよりも、むしろ情熱を持った部類の教師だつた。

彼が好きなのは、学問や歴史、そして研究である。

だから彼は授業が好きだった。

未来ある生徒達へ向けて、自分の研究の成果を思う存分開陳できるからである。

その結果、ちよくちよく自分の授業の時間で研究の成果を披露してしまうことは珍しくなく、私語にかまける生徒達をほったらかしにしたまま自信たっぷり高説を繰り広げる光景が展開されるのだった。

とはいえ、今の時点で私語にかまけているのは生徒達の半分くらいである。

興味深げにコルベールの持つてきた奇妙な物体を見つめている生徒達に向けて、コルベールはおほんともったいぶった咳をしてから語り始めた。

「えー、『火』系統の特徴を、誰かこの私に開帳してくれないかね？」

話を聞いている生徒達がキュルケに視線を集めた。

爪の手入れをしていたキュルケは、やすりを上手に操りながら気だるげに答える。

「情熱と破壊が『火』の本懐ですわ」

「そうとも！」

意を得たように、にっこりと笑うコルベール。

「だがしかし、私は考えるのです！ 情熱はともかく、『火』が司るのが破壊だけでは寂しいと！ 諸君、『火』は使いようですぞ。使いようによっては、色んな楽しいことができるのです。それを諸君に見せるために、今日はこの『愉快なヘビくん』を持つてきた

訳ですな」

生徒達はぼかんと口を開けて、奇妙な装置に見入っている。

ルイズは気の無い顔でコルベールの様子を見守っており、一方のリウスはというと、興味深げな顔でまじまじとその装置を見つめていた。

鼻歌でも歌いだしそうな様子で、コルベールは手早く装置をいじくり始める。

「まずは、この『ふいご』で油を気化させる」

しゅこしゅこ音をしながら、コルベールは足でふいごを踏んだ。

「すると、この円筒の中に、気化した油が放り込まれるのですぞ」

慎重な顔で、コルベールは円筒の横に空いた小さな穴に、杖の先端を差し込んだ。

短く呪文を唱える。すると、断続的な発火音が聞こえ始め、気化した油に引火したのか、発火音は次第に爆発音へと音を変えた。

「ほら！ 見てごらんなさい！ この金属の円筒の中では、気化した油が爆発する力で上下にピストンが動いておる！」

すると円筒の上にくっついていたクランクが動き出し、車輪を回転させていく。

回転する車輪の動きに合わせて、箱の扉からへびの人形がびよこびよこ顔を出していった。

「動力はクランクに伝わり車輪を回す！ ほら！ するとへびくんが！ 顔を出して

びよこびよこご挨拶！面白いですよ！」

この時点で、話を聞いている生徒達は更に減っていた。もうほとんどの生徒が話も聞かずにぼけっとした顔をしているか、近くの生徒と私語を行なっている。

その中でリウスだけが、信じられないものを見たかのように驚愕の表情を浮かべていた。

「それがどうしたっていうんですか？」

生徒の一人がとぼけた顔で感想を述べた。

教室の様子を見たコルベールは自慢の発明品がほとんど無視されている現状に気付いて悲しくなったが、おほんとか咳をすると説明をし始める。

「えー、今は愉快なヘビくんが顔を出すだけです、たとえばこの装置を荷車に乗せて車輪を回させる。すると、馬がいなくても荷車は動くのですぞ！海に浮かんだ船でも同様、帆がいらなくなる訳ですよ！」

「そんなの、魔法で動かせばいいじゃないですか。なにもそんな妙ちきりんな装置を使わなくても」

生徒の一人がそういうと、みんなもそうだとやんばかりに頷き合った。

コルベールがあれやこれやと興奮した様子で説明を続けていく中、ルイズはぼんやりした顔のまま頬杖をついていた。

「ふうん。良く分からないけど、何か凄いのかしらね」

「蒸気機関……？ あんな小型で……？ 油だけで、水も使わない……？」

何やらブツブツと呟いているリウスに、ルイズはぼんやりとしたまま顔を向けた。

そういうえば、リウスも学者だったと言っていた。何かコルベール先生と通じるところがあるのだろうか。

「ねえ、リウス。何が凄いの？」

はっとしたリウスはルイズに顔を向けた。

「いや、あんなもの見たことないわ。凄いんだろうけど、仕組みが分からなくて……」
「なら授業の後に見せてもらえば？ 私も忘れかけてたけどリウスは使い魔なんだから、授業に出なくても問題ないわよ」

リウスはそういうえば、といった具合に頷いた。

「そうね。じゃあ午後は話を聞きに行こうかしら」

昼食を終えて、リウスは本塔と火の塔の間にある一面に訪れていた。

そこにはボロボロの掘つ立て小屋がひっそりと立っている。

(本当に、ここに研究室なのかしら……)

リウスは目の前の掘つ立て小屋を眺めながら、ジュノーの研究室を思い出していた。リウスはセージと呼ばれる賢者・学者の一人でもあるが、同時に冒険者でもある。

各地に赴いて情報や研究材料を集め、ジュノーに持ち帰って研究してみる、というのが基本的なパターンであり、そのため必然的にジュノーで研究をする時間は短くなる。

そもそもリウスの専門は『魔力の流動性における解析技術』。

つまりモンスターや動植物のサンプルを基にそれらが持つ魔力を読み取ったり、または地域ごとの特色を分析するというものなので、基本的にはリウス自身が持つ魔力感知や『モンスター情報』などの魔法を主に使用するのだった。

ジュノーに戻るのには、必要な書物を探す時や論文を作成するくらいのもの。

そのため、リウスは他のセージ達に比べて異色のフィールドワーカーと言っても過言ではなかった。

ジュノーを拠点とする一般的なセージ達は、主に自身の所属する研究所を中心に研究を行なっている。

だからこそ個人的に研究をし続ける人は稀でもあるし、こういった掘つ立て小屋を研究所とする人はもっと珍しかった。

(火とか出ても平気なのかしらね)

リウスは掘つ立て小屋の様子を見て回っていたが、意を決して小屋の扉を叩いた。しばらくして、小屋の中からバタバタと足音が聞こえてくる。

扉がちやりと開いて、中からひよつこりとコルベールが顔を出した。きよんとしているコルベールの頬は煤のようなもので汚れている。

「おや、ミス・リウス。こんなところに珍しいですな」

「すみません、突然お邪魔して。ミスタ・コルベール」

コルベールは怪訝な表情を浮かべており、どことなく緊張の色を感じる。

以前、ギーシュと決闘した後にも同じような表情をしていたのを思い出した。

「先ほどの授業で見せてもらった・・・、ええと、『愉快なへびくん』でしたっけ？ あれに興味があったので。今お邪魔してもよろしかったですか？」

「おお！ そうでしたか！ さき、どうぞどうぞ」

促されるままに小屋の中に入ると、内部は正に研究所の様相だった。

木でできた棚には薬品のビンやら試験管やら、更には大小さまざまな壺が雑然と並んでいる。

その隣には壁一面の本棚。羊皮紙を球に張り付けた天体儀に、ハルケギニア各地の地図などもあった。

檻に入ったへびやトカゲに見たことのない鳥。埃ともカビともつかぬ、鼻をつく妙な

異臭が漂っている。

その只中にいたリウスは異臭に顔を歪ませることもなく、目を輝かせながら興味深げにきよろきよろと周りを見回していた。

コルベールはがさがさと物をかき分けながらテーブルへと近付いていく。

リウスもその後が続いていくと、そこには少しばかり分解された『愉快なへびくん』の姿があつた。

「ああ、そういえばこの研究室はご婦人には大変不評でね。ミス・リウスは平気なのかね？」

「この匂いですか？ 慣れてますから平気ですよ。私も学者だったもので」

正直に言つて、ここよりも凄まじい臭気を放つ研究所はいくらでもあつた。

それと比べればこの匂いはそこまでのものでもない。むしろ、リウスはこの空間に懐かしさすら感じていた程である。

「なんと、そうだったのかね！ それなら早く言つてくれれば良かったのに！ さき、これが『愉快なへびくん』だよ。少し改良を加えていたので部品が外れてはいるがね」

先程の警戒した様子は早々に無くなり、やけに嬉しそうな表情のコルベールがリウスを促す。

テーブルに近付いたリウスは、まじまじと目の前にある装置を見つめていた。

クランクと繋がっている車輪、そして車輪と、箱に取り付けられた扉の構造は理解でききる。

しかし、このままでは金属性の円筒の中の構造が分からなかった。

「授業では驚きました。こんな装置は見たこともなかったもので。これは蒸気機関なのですか？」

「じょうききかん？ はて、蒸気……」

「水を沸騰させた蒸気を利用して、この装置のようなピストンを動かす機構のことです。ただそれには多量の水と燃焼させる装置が必要なので、こんなに小型のものではないですが」

何やら合点がいったように、コルベールがぱつと顔を輝かせた。

「驚いた！ このへびくんの前に、似たような物を構想したのだよ！ あまりにも巨大なものになってしまうので設計図だけ作ったのだがね！」

言葉半分のまま、コルベールがさがごととテーブル横の柵を漁っていく。

その姿に、リウスは小さく笑った。

この人はまさしく研究者なのだろう。授業で見た生徒達の反応は『魔法を使えばいい』というものだった。

しかしこの人は、個人の才能に左右される魔法というものではなく、誰もが同じよう

に扱える装置を作り出そうとしている。

コルベールはようやく設計図を見つけたようで、嬉しそうに設計図の説明を行なっていく。

リウスはその設計図を前に、コルベールとあれやこれや議論を交わしていくのだった。

日も落ちかけてきた頃、ルイズはコルベールの研究室の前に立っていた。

いつまで経ってもリウスが帰ってこないのどこまで探しに来たのである。

掘っ立て小屋の中からは、何やら男女で語り合うような声が聞こえてくる。

「すみません、ミスタ・コルベール」

ルイズが扉をノックしても何の返答もない。

未だ続けられている男女の会話に、ルイズはそつと扉へ耳を付けた。

「・・・うーむ、これでは重いものを運べないのではないかね？ そうだ！ こうやって組み合わせれば・・・」

「・・・ああ、なるほど。ただこうした装置だけではピストンの力が足りないかも・・・」

リウスの声が聞こえてくるが、話に夢中でノックの音が聞こえていないようだ。

もう一度ノックをしても反応がない。このままでは埒が明かないので、ルイズは小屋の扉をがちやりと開けた。

「お邪魔します、ミスタ・コルベール。……って何この臭い！」

「おお、これはミス・ヴァリエール。どうしたのかね？」

「あれ、ルイズ。どうしたの？」

二人がきよとんとした顔をしている中、ルイズは鼻をつまみながら小屋の外へと後ずさった。

「どうしたのって、もう夕食の時間なのにこんな時間まで何やってるのよ。しかも、こんな臭いの中で」

「ああ、もうそんな時間？」

「なるほど、それならリウスくんは行ってきたまえ。私は先程の内容を書き起こさねば」
そう言うなり、コルベールはテーブルに広げられた設計図を丸め始める。

「どうやら話した内容を早く羊皮紙にメモしたくて仕方がないらしい。」

「じゃあコルベールさん。長いことお邪魔してしまつてすみません」

「いやいや、また来てくれたまえ。お待ちしていますぞ」

リウスとコルベールがにこやかに別れの挨拶を交わしている中、ルイズは若干ぶすつとした顔でそれを見つめていた。

コルベールの研究室を出て、ルイズとリウスは食堂へと足を向けていた。

「なんか随分と仲良くなつたみたいじゃない」

「コルベールさんは凄いわよ。あんな小屋じゃなくつて、もつとちゃんとした研究室を貰えればいいのにな」

上機嫌な様子のリウスを見て、ルイズはますます面白くない。

「あんなよく分からない機械じゃなくつて魔法を使えばいいのに」

「それよ、ルイズ」

ルイズはきよとんとした顔でリウスを見る。

「魔法を使えばいい。確かにその通りだし、私のいた世界でも、魔法は単なる戦う手段に過ぎない。」

でもね、コルベールさんはそれを飲み込みながらも魔法と機械を共存させようとしてる。貴族も平民も恩恵に預かれるような物を作ろうとしている。なかなか出来ることじゃないわ」

ルイズは少しばかり思いを巡らした。

もしかしたら、コルベール先生があんな研究所しか持ててないのはそれが原因なのだ

ろうか。平民も便利に使える装置を生み出そうとしているなら、私たち貴族側からしたら面白くない人もいることだろう。

「もしかしたら、ハルケギニアの歴史に名を残す人なのかもね」

リウスのふとした呟きに、思わずルイズが笑った。

「まさかあ」

「まあ、もしかしたら、だけどね」

ルイズとリウスは互いに笑い合いながら、二人してアルヴィーズの食堂へと歩いていくのだった。

第四十八話 巫女と祈禱書

学院長室に、柔らかない日の光が差し込んでいます。窓を開けてはまだ寒いのだが、この陽気な陽射しは暖かくて心地が良い。

オールド・オスマンはパイプに火を付けると、手に持っている古ぼけた本を丁寧に眺めていた。

王宮から届けられたこの本はかつて美しい革の装丁がなされていたようだが、今や触っただけで破れてしまいそうなボロボロの表紙となってしまうている。

同じように、そつと開いた羊皮紙のページはすっかり色あせてしまっていた。

「・・・ほう、これはこれは」

オスマンはページをゆっくりとめくっていく。

「これが、トリステイン王室に伝わる『始祖の祈禱書』か」

『始祖の祈禱書』は、六千年前、始祖ブリミルが祈りをささげた際に詠み上げた呪文が記されていると伝わっている。

オスマンは三百ページほどにもなる『始祖の祈禱書』をぺらぺらとめくっていくが、どこまでめくってもページは真っ白のままだった。

「紛い物じゃないのかの?」

オスマンは胡散臭げにその本を眺めた。

この手の『伝説』に偽物が多いのは当たり前ではあるのだが、この本には呪文のルーンドロころか文字一つとして書かれてはいない。

オスマンは今までにも『始祖の祈祷書』を見たことがあった。というのも、一冊しかないはずの『始祖の祈祷書』には所有者が山程いるからである。

金持ちの貴族、寺院の司祭、各国の王室・・、いずれも自分の所有する『始祖の祈祷書』が本物だと主張している。

それらを全てかき集めれば図書館が出来る時まで言われているくらいだ。

「流石にこれが国宝だとは、誰も思わんじやろうなあ」

過去に見たことのある幾冊もの『始祖の祈祷書』にはルーン文字がびつしりと記されており、偽物であろうが祈祷書の体裁を整えていた。

しかし、全て白紙というものは見たことがない。

いくらなんでもこれでは、詐欺みたいなものではないか。

その時、ノックの音がした。

秘書を雇わなければならぬな、と少しばかり溜め息を吐きながら、オスマンは訪問者へ来室を促した。

「鍵はかかっておらぬよ。入ってきなさい」

扉が開いて、一人のスレンダーな少女が入ってきた。

濃い桃色の髪をなびかせながら、おずおずといった具合に鶯色の瞳をオスマンに向いている。ルイズだった。

「私をお呼びと聞いたものですから・・・」

緊張した様子のルイズにオスマンにはっこりと笑いながら出迎えた。

「おお、ミス・ヴァリエール。先日の旅の疲れは癒えたかね？」

オスマンはルイズに着席を促しながら続けた。

「思い返すだけで辛かろう。じゃが君らの活躍で、無事王女とゲルマニア皇帝の結婚式が正式に決定した。これで同盟は締結されるじやろう。君らのおかげで、トリステインの危機は去ったのじゃ。改めて礼を言わせて欲しい」

オスマンは優しい表情のまま、ルイズに皺だらけの笑顔を向けた。

「そして、王族の結婚式の際には貴族より選ばれた巫女を用意さねばならんのじゃ。トリステイン王室の伝統での。この『始祖の祈祷書』を手に、式の詔を詠み上げることが習わしとなっておる」

そう言つてオスマンが手に持った本をルイズに見せる。

『始祖の祈祷書』、王室に眠る国宝だったはずだ。ルイズは緊張した気持ちをますます強

くさせてしまう。

「姫はの、その巫女に、そなたを指名したのじゃ」

「姫さまが？」

「その通り。巫女は『始祖の祈禱書』を式の前より肌身離さず持ち歩き、詠み上げる詔を
考えねばならぬ」

しばらくきよんとしていたルイズは、ようやく言われた言葉を理解した。

「ええ!?! 私を考えるのですか!?!」

緊張した気持ちはどこかに飛んでいってしまっていた。

目を丸くしているルイズに、オスマンは困ったような顔で自身の髭を撫でている。

「伝統というのは面倒なものではある。もちろん、草案は宮中の連中が考えるのじやろ
うが……」

だがの、姫はミス・ヴァリエール、そなたを指名したのじや。これは大変名誉なこと
なのじやぞ? 王族の式に立ち会い、詔を詠み上げるのなぞ、一生に一度あるかないか
なのじやからな」

そう言うオスマンの口調には少し焦りが見えていた。しかしルイズには動揺こそあ
るものの、断る気など全く無かった。

あの姫さまの結婚式。

たぶん、姫さまの望んでいない結婚式……。

あの大切な友人が自分に来て欲しいと言ってくれるなら、断ることはありえなかった。

でも詔を自分で考えるのはどうも……、と思いながらも、ルイズはさつと顔を上げた。

「わかりました。謹んで拝命いたします」

ルイズはオスマンの手から『始祖の祈禱書』を受け取る。

オスマンにはこやかに笑いながらほっとした表情を浮かべていた。

「快く引き受けてくれるか。よかったよかった。姫も喜んでくれるじやろうて」

魔法学院から少し離れた森の中、ひとり長剣を手に素振りをしている人影があった。

「今度はどう？ デルフ」

「うーん、速くはなってきたるんじゃないか？ まあ、ニューカッスル城のときに比べ

りやまだまだだけだな」

その人影、リウスはデルフリンガーの言葉にしばらく考え込んだ。そして目の前へ向

けてイメージを広げていく。

目の前には、かつて戦ったことのあるモンスター達、背後にはルイズや学院で知り合った人たちの姿をイメージする。

守ること。

それを強く頭に刷り込ませると、徐々に左手のルーンが輝きを増していった。

どん、と大地を蹴る音が鳴り響く。

かつて戦ったことのあるモンスターの動きを想定して、それを切り崩すようにデルFRINGERをよどみなく操る。防御されることや避けられることをイメージしながら、魔法や斬撃を駆使して戦っていく。

不意に、目の前へ誰か、長身の男がイメージされそうになった。

羽帽子を被った長身の男。半身になりながら、隙も無くレイピアのような武器を構えている。

リウスは一瞬身を強張らせたが、ふっと力を抜くとデルFRINGERを肩に抱えた。

目の前のイメージは崩れ、目に映るのはざわざわと風の音を鳴らしている森の風景だけである。

「どうした？ 相棒」

「うん、休憩しようかなって」

今回リウスが森の中に訪れていたのは、デルフリンガーが語る『ガンダールヴの力』を検証するためだった。

ガンダールヴは感情の強さによってその力を左右される。

そうしたデルフリンガーの言葉は正しかったようで、確かに感情が高ぶれば高ぶる程、リウスは自分の身が軽くなっていくのを実感できていた。

憎しみを目の前のイメージにぶつければ更に大きな力となるかもしれない。それをリウスは薄々勘付いていたが、今は憎しみよりも、守ることを強くイメージするようにしていた。

ニューカッスル城の時のように我を忘れてしまったら元も子もないためである。

散々動き回っていたためいつもよりも入念に身体を伸ばしておく。

デルフリンガーは上機嫌なもので、素振りといえども使ってもらえることが嬉しかったようだ。

柔軟を続けながら、そんなデルフリンガーにリウスは一つ質問をする。

「デルフ、ニューカッスル城の時のことなんだけど。私の魔力を吸い取ってたって言ってたじゃない？」

「あー、そうだな。俺っちに相棒の精神力がガンガン流れ込んできてなあ。なんかよく分からねえけど、ガンダールヴのルーンがそれにすげえ反応してたぜ」

あつけらかんと言うデルフリンガーに、リウスは怪訝な表情を浮かべていた。

先程の素振りでの自身の魔力の流れを確認していたのだが、そんなことが起きているような気配は無かったのだ。

「さつき、同じこと起きてた?」

「いんや、起きてねえんじやねえかな」

「そうよね。何でかしら」

「何でだろうなあ。分かんね」

デルフリンガーは素っ気なく呟いた。

柔軟を終えたリウスはほんのり浮かんでいた汗を平民が使うようなタオルで拭きながら、デルフリンガーへと目を向ける。

「私は覚えてないことなんだから、デルフだけが頼りなんだけど」

「んなこと言われても分からねえっての、ガンダールヴの力が弱いからじゃねえか?」

ちなみにあん時、相棒の魔法は吸い取ってなかったぜ。精神力だけだ」

「うーん、他に気付いたことは?」

「そうだなあ・・・」

あれやこれや呟きながらうんうん唸っているが、考え込みながらもデルフリンガーは何も話そうとはしない。

「まあいいわ。気付いたことがあったら教えてね。ありがと、デルフ」

リウスが礼を言つてデルフリンガーから視線を外す。すると、デルフリンガーは「うーん」と唸りながらも声を出した。

「いや、いいんだけどよ……。あんまり、ニューカッスル城のあの状態にはならない方がいいって思うんだよなあ」

「どうして？」

きよとんととして、リウスはデルフリンガーを見る。

ガンダールヴの本当の力とやらを任意に引き出せるのなら、引き出せるようにした方が良くは決まっているのだが。

「いや、何だろうなあ……。嫌な予感つてーのか、何て言えばいいかな……。」

デルフリンガーは言葉を濁したように呟いている。

その様子を眺めていたリウスはデルフリンガーの横に座り込んだ。

「気になったことがあるなら教えて欲しいわ。あと、思ったことをそのまま言ってくれた方がいい」

「うーん……。」

デルフリンガーには珍しく、しばらく黙り込んだ後、神妙な口調で話し始めた。

「まあ、何となく、って感じなんだが……。あの時のことを正直に言うとな、ガンダールヴのルーンが俺つちを使つて、無理やり相棒の身体を動かしてた感じだったんだよ」
その発言にリウスはびっくりしていた。

デルフリンガーは、使い手の身体を乗っ取れるとでもいうのだろうか。

「デルフってそういう力があるの？ それともガンダールヴのルーンの方かしら」

「分つかんねえよ。どちらかと言えば、俺つちの力なのかもしれねえ。そういうのも思
い出せりゃいいんだけどよ」

デルフリンガーの発言はあまり要領の得ないものだったが、とりあえずリウスは相槌
を打って続きを促した。

「それでな、相棒の精神力を吸い取つてた時なんだけだよ。言ってることが変なのは分
かるんだが、なんつーか……。そんな時にな、相棒の命も吸い取つちまつてる気がした
んだわ」

リウスは首を傾げた。

「吸つてたのは魔力でしょ？」

「いや、そうなんだけどな。相棒が覚えててくれてりやよかつたんだが……」

デルフリンガーは言葉を選びつつ、静かな声で問いかける。

「相棒よ。あんとき、自分の生命力を精神力に変えてなかったか？」

リウスは不思議そうな顔で、デルフリンガーの言葉を反芻していた。

生命力を、魔力に変換する？

そんなことが、可能なんだろうか。

「分からないわ。私はそんなこと出来ないし、聞いたこともない」

「まあ、それならいいんだけどよ。あれは危ねえつてことだけ覚えといてくれよ」

なにやら深刻そうな声でデルフリンガーが告げる。

「オツケー、危ないつてことは覚えておく。それを使うか使わないかは場合によるけど」

「使わねえ方がいいつての。やめてくれよ、使い手を殺す伝説の剣なんざ願い下げだぜ」

「分かんないでしょ、その時になんきや」

未だ嫌そうにぶつくさ言っているデルフリンガーと話している中、リウスの横の地面がもこもここと盛り上がった。

ぱつとその場所を見ると、盛り上がった土の中から細長い髭の伸びた鼻が覗いている。

のそりと穴から出てきたのは、巨大なモグラだった。

「なんだ、おでれえた。ジャイアントモールじゃねえか」

巨大モグラはちらりとリウスの顔を見るも、ふんふんと鼻をひくつかせながらリウスの荷物袋へと近付いていく。

「(から)から、ダメよ。ヴェルダンテ、何でここにいるの？」

その巨大なモグラは、ギーシュの使い魔、ヴェルダンテだった。

リウスに頭を撫でられながら、しきりにリウスの荷物袋に鼻を押し付けている。

もぐもぐ言いながら荷物袋へまとわりついているヴェルダンテへ、リウスは合点がいったように笑いかけた。

リウスは荷物袋をがさごそと漁ると、その中にある小さな皮袋を取り出す。

「いれっ！」

もぐもぐ言いつつ、ヴェルダンテが目を輝かせている。

その小さな袋から取り出したのは真紅の宝石だった。リウスが以前いた世界の冒険で手に入れた大きめのルビーである。

宝石に目が無い、とギーシュが言っていたことをリウスは思い出していた。

ヴェルダンテの前に宝石を置いてあげると、ヴェルダンテは目を輝かせながら、短い両手で宝石を持ったり、鼻を押し当てたりとずいぶん嬉しそうだ。

リウスはヴェルダンデの頭を一撫でしてから、平たい石に立てかけられたデルフリンガーをちらりと見る。

デルフリンガーとの会話は正直気になっていたが、これ以上は分かりようもない。

また今後、素振りをしながら確認してみようと考えながら、リウスは荷物袋の中から別の小さな皮袋を取り出した。

その皮袋を開き、ふと藍色の球体を見つめる。

これは、カトリーヌの複製された魂だ。そう気付いたとしても、今はこの球体をどうするべきなのか全く見当もつかない。

目を細めたリウスは思惑に耽ってしまいそうな自分に気付いて軽く首を振った。

今はそのことよりも、こちらを調査しなければならぬのだ。

小袋の中から、ガラス管に入った、手の平ほどの石を取り出した。

ユミルの心臓の欠片。その名前から連想するのは、学院の宝物庫に眠る『繋がりのお宝』……、リウスのいた世界、ミッドガルドで見たことのある『ユミルの書』のことだった。

カトリーヌの魔力によって、この『ユミルの心臓』が作動した。だとするとこの『ユミルの心臓』は、魔法具……、ハルケギニアで言うところのマジックアイテムである可能性が高い。

しかしガラス管に入った石からは魔力を感じることができなかった。

『繋がりの秘宝』においても同じで、フーケ騒動の時に目にした『繋がりの秘宝』からも魔力なんて感じることはできなかったのだ。

「デルフ。この石を見て何か感じる」とか、気付くところはない？」

「うーん……、別に何にも感じねえやな」

未だ嬉しそうにもぐもぐ言っているヴェルダンデの背中を撫でてから、リウスは胡坐をかいて魔力分析に集中する姿勢を取った。

もう錆が無くなったからだろう、横目に映ったデルフリングーは尋常でない魔力を放っている。

通常、魔法具であるなら何かしらの魔力を放っているはずだ。デルフリングー程の魔力ではないにしろ、リウスが持っているバゼラルドやカウンターダガーも刀身全体に強い魔力を帯びている。

だからこそ、他では持ち得ない力を宿しているのであるが……。

リウスは目を細めて、しばらくの間ガラス管の石をじつと見つめていた。

やはり、魔力は感じない。しかし何となく違和感がある。

そのままリウスは、石の欠片の魔力を探り続けていく。

(・・・魔力を放つては、いないけど・・・。これは・・・どこかで・・・)

しばらくしてようやく、かすかな魔力の痕跡があることにリウスは気が付いた。

疑問に思つて入念に探らなければ気付くことができないほど、ほのかに漂っている魔力。

「それつてよ、相棒がこの世界に來た時に持つてた石つてやつか？」

「そうよ・・・。調査しとかなくちやいけなから・・・」

デルフリンガーの言葉に気の無い声で答える。

この魔力の痕跡には、どことなく見覚えがあつた。しかし、一体どこで・・・。

「ふつつうの石に見えるけどなあ。ま、俺たちもポロ剣だのなんだのつて言われてたからな。実は伝説の小石でした、つてもありえねえ話じゃねえわな」

「ちよつとー・・・。静かにしててよ、デルフ・・・」

『ユミルの心臓』に魔法を撃ちこんでみてもいいが、何がきっかけで作動するのか分からない。

この世界にいることを決めた以上、思い付きで魔法など使つては危険すぎるのだ。じいっと石の欠片を見つめ続ける。

やはり、ほんのかすかな魔力の痕跡があるのだが・・・。自分がどこでこの痕跡に似たものを見たのか、思い出すことはできない。

「そうだ、相棒の魔法でも撃ってみりゃいいんじゃないか？」

「ダメよ……。作動するかもしれないでしょ……」

作動する。そう、魔法具なら魔力で作動するのだ。

魔力の痕跡があるということ、カトリーヌの魔力で作動したこと。それらは疑いようのない事実である。

しばらく静かな時間が過ぎる。

ふと、リウスは記憶の中に、これと似たものを見た時のことを思い出した。

あれはジュノーの研究室だった気がする。いや、ゲフェンでも見たことが……。

(……有り得ない。有り得ないけど、確かに似てる)

リウスは勘というよりも確信めいたものを感じていた。

確かに、これと似た物を見たことがある。

リウスのいた世界。

そこでは一般的に使われている、冒険者にとって大して珍しくもないもの。

魔力を解き放ち、使用した後は、ただ捨てられるだけのもの。

「……スクロール？」

「こら、ヴェルダンデ！ 何をやってるんだい！」

「あ、やーつと見つけた！」

ぱつと目の前の茂みを見ると、がさがさと茂みをかき分けて学生の一団が姿を現わした。

ギーシュを先頭に、ルイズやキュルケ、タバサが近付いてくる。

「あれ、どうしたの？」

「僕はヴェルダンデを探してて。ほらヴェルダンデ、早くその宝石を返し……。わつ、こら！ ヴェルダンデ！ 抵抗するんじゃないよ！ まったく可愛いな君ってやつは！」

「リウスを探してたに決まってるでしょ？ まったく、なんでこんな森の中に……」

「私もリウスを探してたのよ、タバサから森にいるかもって聞いて。あのね、とっても面白い話があるんだけど……」

わいわいと話している一団を前に、リウスは驚いた顔をしながらルイズが抱えていた物へと視線を向けていた。

ルイズの抱えている古びた本。

その本からは、自分の手の中にある石の欠片と同じような、ほのかな魔力の痕跡が

漂っていたのだった。

第四十九話 コルベールの出発前夜

ある日、図書室で発見した古ぼけた本の記述にコルベールは興奮していた。

その数日後、ワクワクウキウキしながら、コルベールは改良版『愉快なへびくん』を教室に持ち込んでいた。

そしてその授業が終わった後、心なしかガツカリした様子でコルベールは教室を見回していた。

「あー、ミス・モンモランシ。ミスタ・グラモンはどこに行ったのだね？ それと・・・、幾人かの生徒の姿が見えないようだが・・・」

そう言うコルベールの視線はルイズの席を向いている。

そして、その横の空席。

コルベールは改良を施した『愉快なへびくん』をリウスに見せようと考えていたのだが、どうやら今日の授業には来ていないようだった。

それに少なからず落胆を覚えていたのだが、それどころかルイズの姿もなく、ギーシュ、キュルケ、タバサの席もほっかりと空いている有様である。

「さ、さあ、存じませせんわ。学院長先生なら何かご存じなのではないでしょうか？」

しどろもどろとした対応にコルベールは小首を傾げていたが、とりあえずはモンモランシーへと礼を返した。

そしてしようがないとばかりにレビテーションの魔法で不評だった『愉快なヘビくん』を浮かせると、そのごちゃごちゃした機械と共に教室を後にするのだった。

） 学院長の証言 ）

「おや、君のところ司書から連絡がいかなかったのかね？ 彼らは十日程の間、留守にするらしいのじゃ。司書の子には君へ伝えるよう言っておいたはずじゃがの」

コルベールは首を傾げると自身の記憶を思い返していった。

「・・・そういえば、聞いたような気がします」

いつかは忘れてしまったが・・・、この前、図書室にいた時のことだ。

図書室の司書に何か告げられていた気がするが、その時は発見した本の記述に頭がいつぱいだったのである。

もしかしたら違う内容なのかもしれないが、コルベールの記憶には司書の言葉なんてこれっぽっちも残っていないかった。

「まったく、君はあわてんぼでいかなのう。儂が特別に許可を出して、数日前に出発した

のじゃよ。授業の内容には遅れが出てしまいかもしれんが、彼女らは戻ってきてからそれを取り戻すと宣言してくれたよ」

「ま、まあ、それなら良いのですが」

「この間の件かの？ ミス・リウスも彼女らと共に行ってしまったのじゃよ。まあもう少し調査してからでも遅くはあるまい。君の休暇も溜まっておるのだし、少し羽根を伸ばしてきたらどうかね？」

「確かに……。それもいいかもしれませんな」

オスマンは、ゲルマニアの美女でも、と言葉を続けていたが、当のコルベールは先日の本の調査のことで頭がいっぱいだった。

コルベールは根っからの研究馬鹿だったのであるが、そう言われてもコルベールが不快な顔ひとつすることがないのは周知の事実である。

「・・・というのほそういうことじゃ。こら、聞いておるのかね。いい加減に浮いた話の一つや二つ、君だつて作るべきだと思うのじゃがの。いつまでもミス・リウスのことばかり考えておつてはいかんぞ」

オスマンの話を半分聞き流していたコルベールだったが、聞こえてきたその内容にコルベールはぎよつとした表情を浮かべた。

「な、何を仰る！ リウスくんは、いわば『研究仲間』のようなものなのですぞ!」

焦ったコルベールの様子にオスマンはきよとんとした表情をしていたが、合点がいったとばかりにニヤリと笑みを返した。

「例の件で言ったんじゃがの。まあ、年齢が半分ほどの『わいふ』を貰つてもバチは当たらんのだ」

パイプを吹かし始めたオスマンは「そうか、君にも春が・・・」と感慨深そうに呟いていたが、コルベールはこの頭が桃色の老人には付き合つてられないとばかりに溜め息だけを返したのだった。

く 同僚たちの証言 く

「まったく！ オールド・オスマンは何を考えているのですかな！ 今までも散々学院を留守にしていると言うのに！ またいつものメンバーが遊びに出かけるなぞ！」

ギトーが泡を食つたように喚き散らす。コルベールとシユヴルーズは困つたような表情を浮かべながら顔を見合わせていた。

「あ、遊びではないと思うのですけれども……。オールド・オスマンも容認しているようですし……」

シユヴルーズがおどおどとした口調で返すも、ギトーは分かっているか

ぶりを振った。

「甘い！ ミセス・シユヴルーズは甘すぎる！ 教師だからこそ生徒達には毅然として立ち向かわなければならんです！」

どうやら火に油を注いだようだ。

正直なところコルベールはこの場を離れたかったのだが、ギトーの剣幕になかなかそのチャンスが巡ってこないのだった。

「それというのも、あの使い魔が召喚されて以来！ 何度目の留守になったと思ってるのですかな!? まったく……! あの使用魔ときたら……!」

「まあ。ミス・リウスは素敵な女性ではないですか。何度か話した際にも良い人柄だと思いましたが……」

「そ、そうですぞ。彼女の考え方は、生徒達にも良い影響を……」
ギトーの目がカッと見開いた。

「良い影響ばかりと言えますか?! 聞けば学院の平民とも仲睦まじく話をしているそうではないですか! 衛兵やらメイドやらコックやらと話しているかと思えば、我々の授業にも口出しを……」

どうやら前に赤つ恥をかかされたことを根に持っているようである。

それはアンリエッタ姫殿下が来校した際のこと。コルベールもその場にいたことに

はいたのだが、その時は何が起きたのかさっぱり分かっていなかった。

今知っている情報も風の噂程度に聞きかじったくらいである。

「そもそも誉れある当学院に東方のメイジを……レコン・キスタとの政治的情勢があるにも関わらず……あのメイジは……決闘だつて……すると……で……だから……」
ペラペラと喋りまくるギトーをなんとか宥めすかしながら、コルベールとシユヴルーズの二人はその場をやり過ぎしていくのだった。

く 平民たちの証言 く

「……では、タルブ村までは大体二日程ですかね？」

「おおよそ、ですが。ラ・ロシエールまでの距離だと考えていただければ……」

厩にいた平民の青年は恐縮した様子で言葉を返した。

コルベールの評判は平民の間では良い方である。そのため他の貴族への態度に比べればマシな方だと言えるが、平民たちはどうしたって貴族相手だと恐縮してしまうらしい。

「あの、タルブ村で何かあるのですかね……？」

そのおどおどした言葉に、コルベールはきよとんとした顔を返した。

「どういふことかね？」

「は、はい。リウスさ……、いえ、ミス・ヴァリエール様の使い魔殿も同じように聞かれてこられたので……」

「いや、私は研究がてらの旅行ですな。しかし、そうかね。リウスくんもね」

そう呟いたコルベールに、平民の青年はふっと緊張の色を薄くさせた。

どうやら彼も彼女と会話をしたことがあるようだ。

「そうです。いくつか行く場所があるとのこと、それぞれの距離を聞いていかれました。

あの、タルブ村なら食堂のメイドの一人がその村の出身だったはずですよ。ここいらじゃ珍しい黒髪で……、確か、シエスタという名前だったはず」

「なるほど、ありがとう。では明日の朝に出発するのでね。馬を用意しておいてくれると助かりますぞ」

「分かりました、お任せください」

「明日にここを立つのだがね。明日の朝までに、五日分の簡単な食事を用意してくれないかね？ 干し肉のみだろうが何でも良いのでね」

「かしこまりました。ミスタ・コルベール」

アルヴィーズの食堂でコルベールはメイドに声をかけていた。

貴族相手の対応にも慣れたもので、多少緊張はしているものの、その態度には緊張の色をほとんど出してはいない。

「あと、シエスタというメイドはいますかな？」

「えっ……。あの、シエスタが何か？」

突然の名前に、そのメイドは怪訝な表情を浮かべていた。

「この貴族は平民の名前を覚えていないのが普通なので、妥当な反応というところだろうか。」

「いや、彼女がタルブ村の出身だと聞いてね。少しばかり話を聞いておきたいのだが」

「あ、そうでしたか。あの、今シエスタはいないので、戻ってきたら声をおかけするように伝えておきましょうか？」

「おっと、そうなのかね。いつごろ戻るのかね？」

「えっと……。十日ほどしたら戻ると聞いていますので、あと数日したら……」

はたとコルベールはメイドの顔を見返した。

もしかしたら……。

「リウスくんと一緒に出ているのかね？」

そう問われたメイドは目を見開いていた。

「どうやらその通りであるらしい。もしタルプ村に訪れているのであれば、コルベールにとつてはむしろ好都合だった。」

「それならば問題はないですぞ。では明日の朝に取りに来るのでね。用意しておいてくれると助かりますぞ」

「すぐ我に返つたメイドが礼を返す。」

すると、厨房の奥からひよいと中年の男性が顔を出した。料理長のマルトーである。

「おつ、ミスタ！ どうしましたかね、こんなところに」

「おや、ミスタ・マルトー。忙しいところに申し訳ない。明日から旅行に行こうと思つたので、食料調達に来たのですぞ」

豪快に笑いながらマルトーが近付いてくる。

傍らにいたメイドが呆気に取られた顔をしていたが、マルトーの視線を受けると礼をしてからそそくさと厨房に引っ込んでいった。

「よしてくれよ、ミスタ！ 『ミスタ・マルトー』なんて何かこう、むずがゆくつていけねえや！」

がつはつは、と笑いながらコルベールの肩をばんばん叩くマルトー。

マルトーは貴族嫌いを公言する程の常識外れな人物であるのだが、その嫌いな貴族の中にオールド・オスマンとコルベールの二人は入っていないのである。

ふとしたことでよく話すようになり、今では時々コルベル作の試供品である酒を一緒に飲むくらい仲にはなっていたのだった。

「休暇ですかい。ミスタはずつと研究漬けだものなあ。時には一息つかなくつちやな！
それで、どこに行くんで？」

「ちよつとタルブ村にですな」

少しばかり驚いた表情を浮かべてから、マルトーがにやりと笑った。

「何だ、ミスタもですかい。ワインでも買いに行くんで？」

「いや、少し調査したいことがあるので。これが面白いのですぞ。タルブ村には『竜の羽衣』という伝説があつて……」

「何だミスタ！ 骨休めなのに休めねえじゃねえか！ トリスタニアでも繰り出して遊び回つてもバチは当たらんですぜ！」

話をきれいに遮られたコルベルは困つたように苦笑を返した。

裏表の無いマルトーの人柄は好ましいものではあるが、ぐいぐい来るこの雰囲気にはどうにも慣れないままである。

「ウチのシエスタも休暇で戻つてゐるらしいんで、聞きたいことがあるなら聞いてやってくださいや。ああ、あと『我らが剣』と貴族の方々も一緒に行つてゐるそうで」

「『我らが剣』？ 誰のことですかな？」

「あまり耳にしたことのないフレーズにコルベールが首を傾げると、マルトーはにかりと笑った。

「ミス・ヴァリエールの使い魔やつてる嬢ちゃんのことよ！ いやあメイジ様だつてのに、あいつは良いヤツだな！ 女じやなきや頬ずりして顔にキスしちまいてえところだ！ 前にやろうとしたらウチの連中に叱られちまってよ！」

「あ、あまりそういうのを気軽にやつてはダメですよ？」

ぐいぐい来る雰囲気を押されつつ、コルベールはそのまま数十分の間、立ち話に付き合うことになったのだった。

その夜、コルベールは古ぼけた本をもう一度読み直していた。

この本は、マジックアイテムを調査するためにハルケギニア全土を旅したという、学者の手記だった。

そのの途中に『竜の羽衣』の存在が書かれていたのである。

『竜の羽衣』伝説はよくある伝説であり、この手記が最も古いものとはいえ、他のいくつかの本にもその伝説が記されていた。

眉唾である可能性は十分にあるし、祀られている『竜の羽衣』そのものが存在しない

可能性もあつた。

しかし、この学者の手記は『竜の羽衣』の伝説を次のように語っていた。

数あるマジックアイテムの中でも一際特殊であるのが、身につけた者は空を飛べるようになるという『竜の羽衣』である。

ラ・ロシエール近郊のタルブ村に伝わっている物であるが、羽衣とは名ばかりであり、十マイル程からなる異様な形の船のような代物だった。本当にマジックアイテムなのかは正確には分からなかったが、この『竜の羽衣』には東の彼方から飛んできたという言い伝えや、空に浮かぶ日食を通してやってきたという噂がある。

しかし『竜の羽衣』の所有者である当の本人が語るには、今はもう動かなくなつてしまった物なのだと言う。私が壊れているのかと尋ねると、「必要な物が無くなつてしまったのだ」と語っていた……。

所有者の男性は非常に理知的で心優しい、不思議な人物だった。

珍しい黒髪に白髪が目立つ初老の男性であり、我々が舌を巻く程の知識を湛えていたのであるが、そのくせ我々からいえば常識であるはずの知識をあまり知らないのだ。

彼は『竜の羽衣』についてほとんど語ろうとはしてくれなかった。しかし調査を抜き

にしても、またタルブ村の彼や彼の娘夫婦へ会いに行きたいものである……。

『竜の羽衣』伝説で特徴的なのは、身につけた者が飛べるようになるということ、そしてはるか上空に浮かぶ太陽にまで到達できるという部分だ。いかにも眉唾ものの伝説である。

しかしコルベールは、この著者とはまた違う、ある部分にひそかな疑念を抱いていた。

—我々が舌を巻く程の知識を湛えていたのであるが、そのくせ我々からいえば常識であるはずの知識をあまり知らないのだ……。

この一文を読んだ時、コルベールの脳裏に浮かんだのは一人の年若い女性だった。ミス・ヴァリエールの使い魔であり、異世界からやってきたというメイジ……、リウスのことである。

リウスが異世界から来たということ。当初は半信半疑ではあったのだが、彼女と会話していくにつれて、段々とその言葉の信ぴょう性が強まっているのは否めなかった。

ハルケギニアには存在しない高度な機械の説明。

彼女が操る魔法の理論とその特異性。

そして、余りにも無知に等しいハルケギニアへの知識……。

オールド・オスマンが言うように、彼女が東方から来た可能性も大いにある。この本に書かれている『竜の羽衣』の所有者も『東の地からやってきた』と書かれていた。

しかし、異世界の存在なんて有り得ない、と言い切れない自分がいることもまた事実だった。

有り得ないとは言えないこともある。

それならば、この伝承だって有り得ないと言い切ることが出来ないのではないか。

彼女と『竜の羽衣』伝説にも、何か関係があるのではないか……。

もつとも、こういった伝承を調べることそのものが楽しいのは否定できない。

もし見たこともない、特殊なマジックアイテムだったとしたら……。そう考えると、むくむくと胸の内から研究欲が湧き上がってくるのだ。

もしかしたら、もつと新しい発想を得るチャンスになるかもしれない。

コルベールはふと、脇のテーブルに置かれている改良版『愉快なへびくん』を眺めていた。

「それにしても……、不思議な人ですな……」

そう呟いて、コルベールは古ぼけた本をばたりと閉じた。

初めてリウスを見た時、ずいぶん落ち着いた子だと思ったものだった。

それと同時に年相応の素直さも感じていたのであるが……。

あのギーシユ・ド・グラモンとの決闘を見てからというもの、コルベールはリウスに對して非常に強い危機感を感じ始めていたのである。

あまりにも強力すぎる魔法。

女性の身でありながらそれを我が物のように操り、息一つ乱さずにゴーレムの群れを打ち倒す、異様なまでに洗練された戦い方……。

もし彼女が軍人であり、底知れない野心があるのであれば、あの力にも多少は納得がいくものだが……。彼女は野心など欠片も持つていないようにすら見えるのだ。

ただ強大な存在と戦える程の力を持ち続け、次々と迫りくる出来事へ向けて常に冷静な対応をし続けていく……。

あのうら若い娘に一体何があれば、野心などを持つこともなく、あれ程までの力を持つことができるようになるのだろうか。

そう考えたとき、そして学院長室で彼女と話した際に、コルベールには思い当たる節があつたのだった。

戦いの中に身を置き続けた日々。

そしてその日々を支えた、あまりにも強すぎる、彼女の人生をも変えるほどの激情。かつて、そして今もなお、私自身が抱えている感情と似ているものを。

感情はその人間が生きるために必要なものだ。

生活に彩りを与え、生きる希望を見出し、時には自らの命をも食い破ろうとひそかに現れるもの。

彼女は若すぎた。

この学院の生徒達ともそれほど年に違いはないのだ。

それ故に、仮にそういった激情が彼女の内に潜んでいるのであれば、それを生徒達へ向けないと誰が言い切れるだろうか。

そういった不安は日に日に強まっていたのだが、あの麗しき姫殿下の任務から帰ってきて数日後、彼女が私の研究室に訪れてきた時のことである。

彼女の立ち振る舞いは以前と変わらず落ち着いたものではあったのだが、どこことなく肩の力の抜けた、何かから解放されたような表情をしていたのだった。

これでも教師として二十年もの間、生徒達を見てきたのだ。たぶんこの感覚に間違いはないだろう。

彼女の表情を見て、思っていた以上にほつとしたような嬉しい感情が浮かんできたのだが、それと同時に羨ましくもあった。

自分の胸の内にあるこの激情が、この後悔が、薄れてくれる日は来るのだろうか。

「おっと・・・。もう寝なければ」

コルベールは窓から夜の闇を覗き込んだ。

ただでさえ明日は早いのだ。夜更かしをしていては寝過ぎしてしまうかもしれない。

コルベールは古ぼけた本を皮袋に押し込むと、明日の荷物をもう一度確認しておく。

そして自分の研究記録や『愉快なへびくん』などの装置をざっと見ていると、もう少し研究をしていきたいという気持ちに後ろ髪を引かれてしまう。

軽やかぶりを振ってそれを振り切ると、コルベールは少し伸びをしてから部屋の明かりを消し、ごそごそとベッドの中に潜りこんだ。

暗い部屋の中で窓を揺らす風の音を聞きながら、コルベールはかつての自分の姿を思い浮かべていた。

特殊部隊の小隊長だった若かりし頃の自分、何も知らずに力を振りかざしていた時の

自分・・・。

あの炎に焼かれていく村を、取り返しのつかないことをしてしまった自分を、一日だつて忘れたことはない。

そんな私が許されることなんてないのは百も承知だというのに、羨ましい等とつまらない感情に振り回されてしまっている。

それはきつと、自身の未熟さ故なのだろう。

せめて、私はあの子が解き放たれたことを祝福しなければ・・・。

コルベールはそう祈りにも似た感情を覚えながらも、ひとり静かに眠りの中へと落ちていくのだつた。

第五十話 宝探しの夜

奥深い森の中、うらぶれた寺院が見える草陰で、数人の人影がぼそぼそと話し合っていた。

「・・・やりたいんなら、やらしてみてもいいんじゃない？ この人数なら失敗しても問題なさそうだわ」

「・・・まあ、お手並み拝見かしらね。引きつけてくれれば一網打尽にできるし。失敗したらそれまでだけど」

「・・・さ、散々な言いようだね。いけるさ、多分だけど・・・」

人影が三つに分かれ、少ししてから爆発音が鳴り響いた。炎の塊が寺院の横の木に直撃したのだ。

それまでは明るい陽の光に照らされた、牧歌的な風景を思わせる寺院だったが、すぐさま豚の鳴き声のような恐ろしい呻き声が寺院の中から響きわたった。

どたどたと寺院から飛び出してきたのは、オーク鬼の群れだった。

二メートル程もある巨軀に、獣から剥いだ皮を身に纏っている。

醜く太った身体は常人の数倍の体重を誇り、一匹につき並みの戦士が五人必要とも言われる丑人だった。

ぶくぶくとした人並み外れた身体に豚の頭が乗っかっているその姿は、まさに二本足で立ち上がった巨大な豚という形容がふさわしい。

燃え盛る木を目にしたオーク鬼たちは激昂した雄叫びを上げ始めた。

侵入者を群れの仲間に伝えているのだろう。次から次に寺院から飛び出してきたオーク鬼達は十匹ほど。

その先頭に立ったオーク鬼が、ゆらりと立っている人影に目を止めた。

青銅の剣と盾を携え、青銅の鎧に身を包んだ三匹の人間。

オーク鬼たちは色めき立って威嚇の声を上げ始めた。

火をつけた侵入者がいる。きつとあの人間達である。人間は敵であり、エサである。

疑いすらせずにオーク鬼達はその人間達に突進し始めた。

獲物は早い者勝ちだ。相手はたったの三人だ。そもそも人間なんてエサにすぎないのだ。

勝利を確信していたオーク鬼たちは勢いよく突進し、そのままいきなり空いた大穴に勢いよく落ちていった。

驚愕の声を上げて止まろうとするオーク鬼もいたが、後続に押されて次から次に穴の

中へと落ちていく。

それでも数匹が何とか踏みとどまった時、その穴へ青銅の人間達が飛び込んでいくのが彼らの濁った目に映っていた。

その瞬間、人間達の青銅の鎧が花びらに覆われていった。そのままどろりと黒光りする液体に変わったかと思うと、草陰から帯状になった炎が飛び出してくる。

その炎が穴に直撃した瞬間、穴から巨大な火柱が吹き上がった。

オーク鬼達の叫び声が辺りに響きわたる。

それと同時に、いつの間にか現れた青銅の人間達が残るオーク鬼の一匹に細長い槍を突き立てていた。

四つの槍に貫かれたオーク鬼は混乱と驚愕の叫び声を上げて、ぐらりと体勢を崩し……。

すぐさま体勢を立て直すと、手に持った棍棒で四つの青銅の人間を吹き飛ばした。

「あーらら、やっぱり」

物陰に隠れていたキュルケは予想通りとばかりに溜め息を吐いた。

あんな槍くらいでは、オーク鬼の厚い脂肪や筋肉を貫くことが出来なかったのだろ

う。

何とか破壊を免れたギーシユのゴーレムは負けじと戦おうとするも、オーク鬼達が振り回す棍棒によって次々と破壊されていく。

「あああ！ 僕のワルキューレが！」

ゴーレムが残らず破壊される中、更に遅れて寺院から数匹のオーク鬼達が飛び出してきている。

がつくりとうなだれるギーシユの肩に、ぽんとリウスが手を置いた。

「ここまでね。でも良い感じだったじゃない。じゃあ残りは私達で何とかするわ」
「気を付けろよ相棒。あいつら怒りまくってるぜ」

分かってる、と引き抜いたデルフリンガーに返しつつ、木の陰からリウスはひとりオーク鬼達の前に姿を現わした。

新しく現れた人間の女にオーク鬼たちは怒りと歓喜の雄叫びを上げ始める。

たくさんいた仲間たちは半分近くも炎に焼かれてしまった。

きつと相手はメイジだが、現れたのは鎧すら着ていない人間の女だ。

長らくメイジとの戦いに身を置いてきたこのオーク鬼の群れは、メイジという存在がいかに危険であるか、そしていかに接近戦に弱く、脆い存在なのかを認識していた。

オーク鬼達の頭には仲間の仇を討つなどといった感情は既に無く、目の前の旨そうな

獲物を誰よりも先に手に入れるという原始的な欲求のみとなっている。

そして獣の雄叫びを上げて突進を開始したオーク鬼たちを、リウスは手慣れた様子で静かに見つめていた。

奴らに指揮系統は無し。

罨も魔法も飛び道具も無ければ、工夫も無し。

ただ人間の女子供を好み、人里を襲うモンスタ―。

先頭にいるオーク鬼の首飾りが遠目に見える。

荒縄で繋がれた、人の頭骨を繋いで作った首飾りだった。

同じ戦うでも、人間相手よりは幾分か気が楽だ。

リウスはそう思いながら右手に握ったデルフリンガーを肩に預けた。

「ファイアーウォール」

リウスが左手を振るうと、ぼうんと先頭にいたオーク鬼の目の前で炎の壁が立ち現れた。

一匹のオーク鬼が炎の壁に突っ込み、悲鳴を上げて地面をのたうちまわっている。

「ファイアーボルト」

更にのたうつオーク鬼へ向けて複数の炎の矢が勢いよく降り注いでいく。

それを受けて、後続のオーク鬼たちは巨体には似合わない機敏な動きで炎の壁を迂回してきていた。

しかしその瞬間、右方から大きな炎の塊と爆発が、左方からは十数本もの氷柱の槍がオーク鬼達に襲い掛かった。

キュルケの『フレイム・ボール』に、ルイズの爆発魔法、そしてタバサの『ウインディ・アイシクル』である。

炎の壁を迂回したために突進の速度が緩やかになっていたので、横から突如襲い掛かった魔法にオーク鬼達はなす術もなく巻き込まれた。

更に続く無数の魔法を受けた彼らはその威力に耐え切れず、次々と地面へ倒れ伏していく。

それでも二匹のオーク鬼が仲間の軀を盾に魔法の雨を突破してきた。どうやら最後のオーク鬼達のようなだ。

リウスは、ゆつくりとデルフリンガーを両手で構え直す。

あともう少しでオーク鬼の棍棒が届くかというところで、リウスは静かに詠唱を完了させた。

「ヘブンズドライブ」

突然地響きが鳴り響き、オーク鬼たちの身体がびたりと止まった。

傷付き怒り狂ったオーク鬼達は自分の意に反して停止した自身の身体に混乱していたが、気付くと全身へ尖った石の柱が斜めに突き立っている。

怒りのあまり痛みが無くなっているのか、それでも動こうともがき始めていた。

そしてもう一度怒りにまかせて雄叫びを上げようとしたが、空を切る風切り音が聞こえると、もうそれすらも出来なかった。

二匹のオーク鬼達は下がついていく自分の視界に、訳も分からないままその意識を途絶えさせていくのだった。

その夜、旅の一行は寺院の中庭で焚火を囲んでいた。

シエスタが焚火にくべられた鍋でシチューを作り、リウスやルイズ、キュルケやタバサがお喋りをしながらその手伝いを行なっている。

いつも通りキュルケがルイズをからかい、シエスタやリウスがルイズをなだめたり話題を変えたりしながらわいわいと晩御飯の用意が進んでいた。

そんな一行から少し離れた場所で座り込んでいたギーシュは、少し疲れた様子を隠しもせずに恨めしそうな顔で口を開いた。

「はーあ。まさか『炎の黄金』とやらがこんな安物のネックレスだとはね・・・」

鈍色に光るネックレスを見やるギーシユの脇には、ヴェルダンデと、キュルケのサラマンダーが寝そべっている。

その後ろには巨体を上手に丸くしているシルフィード。

ギーシユの頭越しにもぐもぐきゆるきゆるきゆいきゆい話しているのがまるでギーシユを慰めているようにも見え、なんだか微笑ましい光景である。

「ぶつくさ言わないの。だから言ったじゃない。『中には』お宝もあるかもしれない」

このお宝さがしの提案者であるキュルケの言葉に、ギーシユは非難ごうごうである。

「それにしてもひどすぎる！ 地図に書かれたお宝とやらで、見つかったのは一枚だけじゃないか！ 廃墟や洞窟は化け物や猛獣の巣窟になってるし！ 苦労してそいつらをやっつけて、手に入れた報酬がこれじゃあ割に合わんこと甚だしい！」

そう言っているのは、七枚あった宝の地図の内、二枚目が当たりだったのである。

確かにお宝があると書かれていた場所で見つけたのは銅貨が数枚入ったチエストだったのだが、冒険に慣れているリウスが見つけた本当の隠し場所で、十個ばかりの小さな宝石と数十枚の古い金貨を見つけたのだった。

それに味をしめて意気揚々と他のお宝を探したのであるが、残りの地図で見つかったのは安物の装飾品やガラクタばかりだったのはご愛嬌だ。

「でもギーシュくん、最後のオーク鬼は良い感じで戦えてたわよ。武者修行だと思えばいいんじゃない？」

「そもそも、そんな簡単に『伝説の秘宝』なんて見つかるもんですか。ツエルプストーの持つて来た地図なんだからインチキが多いのなんて分かり切ってたわ」

それを聞いたキュルケがにやりと笑う。

「あーらルイズ。さっきのチェスト見つけた時なんて、きやあきやあ言いながら開けてたじゃないのよ。楽しそうにしてたのはどこの誰なのかしらね」

顔を赤くしてどもりながら言い返すルイズと、手を替え品を替えルイズをからかうキュルケ。タバサはといえば我関せずとばかりにシエスタの手伝いを続けている。

まるでピクニックのように明るい雰囲気の中、ギーシュは頭で思い描いていたお宝の山を発見する自分の姿に大きくバツ印を付けていた。

このお宝さがしは予想よりもはるかに早いスピードで進んだため、まだ学院を出発して四日程しか経っていない。

疲労もそんなにある訳じゃないし、損どころか得しかしてないのであるが、二枚目のお宝で膨らみすぎた期待を思うとどうにも溜め息を吐かざるを得ないのである。

ギーシュはそのままヴェルダンデに抱きつきながら、人知れずぶつくさと文句を言っている。

しかし使い魔同士の会話に水を差されたのか、若干嫌そうにしているヴェルダンドの様子にリウスはくすりと笑った。

「はい、出来ました！」

シエスタが焚火にくべた鍋からシチューをよそって、めいめいに配り始める。

良い匂いが鼻孔をくすぐる。

のそのそとヴェルダンドから離れたギーシユもがつつくようにシチューを食べ始めた。

「こりやうまそうだ！ って本当に旨いじゃないかね！ こりやいったい何の肉だい？」

「野うさぎですよ。皆さんが戦う前に罨を仕掛けておいたんです」

美味しい旨いと思いのほか好評だったシチューにシエスタはほっと胸を撫で下ろす。

さつそくお替りを要求するタバサへ、シエスタが慌てて新しくシチューをよそった。

「それにしてもハーブの使い方が独特ね。見たことない野菜もたくさん入ってるし、これは何ていうシチューなの？」

キュルケが見慣れない野菜をフォークで突つき回しながら言った。

「わたしの村に伝わるシチューで、ヨシエナヴェっていうんです。食べられる色んな山菜が入っているので栄養満点ですよ」

シエスタは鍋をかき混ぜながら説明する。

「父から作り方を教わったんです。父はひいおじいちゃんから教わったって言うてました。今では村の名物ですよ。」

他にもおじいちゃんから教わった名物料理もあつて、わたし大好きなんです。村でご馳走しますね」

一行の最後の目的地は、シエスタの故郷でもあるタルブ村だった。

偶然キュルケが持ってきた宝の地図に、『竜の羽衣』というお宝があつたのだ。

そして宝さがしのルートを決めている際にシエスタが『竜の羽衣』のあるタルブ村出身だと聞いたので、シエスタの里帰りも兼ねて最後の目的地として決めていたのである。

「それは楽しみだわ。どんな料理？」

もぐもぐとシチューを頬張るリウスに、シエスタがはにかんで答える。

「おじいちゃん特製のスペシャルトーストです。お肉と果物を焼き立てのパンに挟んで、甘いソースと辛いソースにハチミツを塗った料理なんですよ」

シチューの味が気に入ったのか、ルイズも期待に満ちたまなざしをシエスタへ向け

た。

「へえ、美味しそう。でもなんか、これでもかかって感じの料理ね」

「これがまた本当に美味しいんです。きつとミス・ヴァリエールも気に入ると思いますよ。本当はハチミツじゃなくてローヤルゼリーを使うらしいんですけど、私はハチミツ入りの方が甘くって好きだなあ」

新しくシチューをよそつてもらったギーシユが驚いた表情を浮かべている。

「へええ、ローヤルゼリー。それはまた凄いもんだね。おじいちゃんは何をやってた人だったんだね？」

ローヤルゼリーと聞いて、キュルケやギーシユだけでなくルイズも興味津々な様子だった。

ハチミツとローヤルゼリーは同じミツバチの巣から採取されるが、その内容は似て異なるものである。

ハチミツは働き蜂が食すハチたちの保存食だが、ローヤルゼリーは女王蜂だけが食べる特別なものと知られていた。

一つの巣から採取される量も微量である上に、万能の薬としても重宝されるという非常に高価な食材であるのだった。

「おじいちゃんは『冒険者』っていう、冒険を生業にしてた人だったって聞いてます。村

に来てからは冒険に出かけないで村の仕事をしてたんですけど、私に色んな冒険の話の聞かせてくれて。私もおじいちゃんみたいな冒険がしたいってずっと思ってたので、今回連れてきてもらえてとっても嬉しいんです」

照れくさそうにシエスタが答える中、リウスとルイズは顔を見合わせていた。
キュルケが興味深そうな顔で口を開く。

「冒険を生業、つてのは珍しいわね。というかあまり聞いたことないわ。秘薬を集めたり、秘境に行ったりする人は商人だったり学者だったりするし……。傭兵とも違うのよね。宝さがし専門ってことなのかしら」

「シエスタ。おじいちゃんはこの出身だったの？」

リウスは少し真面目な顔で問いかけた。

「ええっと、遠い場所って聞いてますけど、どこだったかな……。あ、空中に浮いてる都市出身だつて言ってたので、もしかしたらアルビオンじゃないかなって思います」

ルイズは考え込むリウスをちらりと見て、シチューを一口啜った。

「リウスも冒険者なのよ？」

シエスタはぱちくりと目を瞬かせたが、途端にぱあつと明るい顔になった。

「ええっ、そうだったんですか!? わああ、なんか運命を感じちゃいます!」

「あら、そうだったの? そういえば前言ってたような……。道理で宝さがしに慣れるはずだわ」

「でも、学者だとも言ってた」

タバサの眩きにリウスは笑って答えた。

「学者だけど、冒険者でもあるのよ。それにしても、おじいちゃんかね。」

ね、シエスタ。おじいちゃんから聞いた冒険のお話を聞かせてもらってもいい?」

「いいですよ。ちよつとよろ覚えなんですけど、それでも良ければ。えっと、どの話にしようかな……。」

そうして一行はシエスタの語る冒険談を聞きながら、美味しいシチューと共に賑やかな夕食を過ごしていくのだった。

その夜、リウスは寺院の中庭で寝ずの番を行っていた。

お腹がいっぱいになった他の一行は、既に寺院の中にギーシュが作った寝台でぐつすり寝入っている。

寝ずの番とはいえ、寺院の近くにはヴェルダンデやサラマンダー、シルフィードも

眠っているため、それほどの危険があるとは思えない。

一応油断は禁物なので、今日はリウス、ギーシユの順に周囲の警戒を続ける予定である。

渴いた薪を焚火にくべていたリウスは、寺院の中から現れた寝巻姿の人影へと目を向けた。

「リウスさん、お疲れ様です。ちよつと焚き火に当たつてもいいですか？」

「もちろん」

現れたのはシエスタである。

シエスタはざんばらに下ろした黒髪を手ぐしで整えると、ゆっくりとリウスの横に腰を下ろした。

「どうしたの？ 眠れないの？」

もう一度細い木の枝を折って、リウスが焚火にくべる。

「あの・・・、おじいちゃんのこと、リウスさんとお話ししたくて。もしお疲れじゃなければ・・・」

「いいわよ。私も聞きたいって思つてたところ。ちよつと暇してたところだからありがたいわ」

リウスは水の入った皮袋をシエスタに手渡す。

受け取った皮袋に口をつけてから、おずおずとしながらもシエスタは話し始めた。「ありがとうございます、他の貴族様がいるところでは話しくくって……」

えつと、まず、おじいちゃんはとも不思議な人だったんです。昔、おじいちゃんが来た時のことを知ってる人に、聞かせてもらったお話があつて」

揺らめく焚火の明かりが二人を照らす中、リウスはシエスタに向き直つた。

「ある日、おじいちゃんタルブ村にふらつと訪れたみたいなんです。その時、村では亜人やオオカミの被害が多くつて、数日泊めてもらう代わりにおじいちゃんが見張りを買つてでたらしいんです」

シエスタは昔聞いた話を思い出しながら訥々と続けていく。

「村では人手が足りてなくつて、不審だけど誠実そうだったので受け入れたらしいんです。この話を教えてくれた人もおじいちゃんと一緒に見張りをしていた人でした。」

それである日の夜、村で家畜が襲われたそうなんです。現れたのはオーク鬼の群れで、とても村の人だけで対処できる数じゃなかったみたいです……。おじいちゃんはそのオーク鬼たちを簡単に撃退してしまつたんです」

「凄いわね。どうやつて？」

もじもじとしながら、シエスタは口を開いた。

「あの……、魔法を使つてたつて聞きました」

リウスは特に驚いた顔もせず、納得したように皮袋の水を一口飲んだ。

「なるほど。だから話しくかつたつてことね」

「……そうなんです。当時は怖いオーク鬼の群れを一人で倒しちやうなんて、おじいちゃんの話と同じであまり信じていなかつたんです。

でも、皆さんの戦いを見ていて思いました。もしかしたら、おじいちゃんは皆さんのような、強いメイジだつたんじやないかなつて」

「シエスタの家族はメイジの血を引いているかも、つてこと？」

「はい……。でも、私の家族に魔法を使える人がいる訳でもないんです。なので正直なところは、分からないんですが」

シエスタが言葉を終わると、リウスは片膝を立てながら少し考え込んでいる。

その横顔を見ていたシエスタは、どきりとした。

やつぱりどこことなく、この人とおじいちゃんにはとても似ているところがあるように見えたのだ。

そう考えていると、髪の色こそ違うものの顔立ちがどこことなく似ているようにも思えてしまう。

シエスタがどきどきしながらリウスの横顔を見つめていると、リウスはシエスタへとその顔を向けた。

「……冒険者つてこと以外に、何をやってたか聞いたことはある？」

「……あ、はい。でも本当にうる覚えで……。確か、えつと……、サツジ？とかなんとか……」

「セージ？」

リウスの問いかけにシエスタが目を丸くする。

「そ、そうです。セージって言ってた気がします」

「そう。やっぱり」

シエスタは丸くしている目をますます丸くした。その表情を見たリウスは小さく笑う。

「私もセージだもの」

「えっ……、そうなんですか？」

夕食の時、リウスはシチューを食べながらシエスタの話の話を聞く中で、ある一つの確信を得ていたのだった。

シエスタの語る冒険のお話は、ハルケギニアに住む人にとって馴染みのない話ばかりだったようである。

砂漠の街の近くにある、石造りで巨大な三角形の建造物の話。

孤島の洞窟の奥にあるという海底神殿の話。

はるか昔に滅んだとされている廃墟の古城の話。

そして、天を突くかのような巨塔の地下に眠る、地に沈んだ遺跡の話。

聞いたこともない冒険談に、キュルケやギーシユ、ルイズやタバサですら冗談半分に面白がっていた。

しかし、その話はどれもリウスにとって馴染みのあるものである。

それどころか、リウスもその多くへ訪れたことがあったのだった。

「たぶん、シエスタのおじいちゃんとは私と同じ場所の出身だと思うわ。実際に会ってみたかったわね」

シエスタの祖父はどうやってこの世界に来たのだろうか。リウスはそれをずっと考えていたのだった。

まだ仮定の段階ではあるが、リウスは『ユミルの心臓』を使ってこの世界に来たのだ。それなら、もしかしたらタルブ村にも似たようなものがあるのかもしれない。

「シエスタの村に、おじいちゃんから伝わってるものとか無い？ 例えば……おじい

ちゃんが売らないように言つてた物とか」

おじいちゃんと同じ場所の出身だ、と聞かされて驚いた顔をしていたのだが、リウスの言葉にシエスタはますます驚愕の色を濃くしている。

シエスタは迷いながらも興奮したような、紅潮した顔で答えた。

「……リウスさんの言う通り、私の家には二つ伝わっているものがあります。ミス・ツエルプストーの地図にある『竜の羽衣』も、ひいおじいちゃんから伝わっているものなんです」

心なしかシエスタは少し恥ずかしそうな口調で言つた。

しかし真面目な顔を見ると、もう一度口を開く。

「もう一つは、私の家の人間以外、誰も知りません。おじいちゃんの私物が入つた箱があるんです。」

巻物だつたり日記だつたり色々残っているのですが、その内の一つは、おじいちゃんから『絶対に壊すな、絶対に家族以外には見せるな』って何度も言われました。でも、リウスさんになら見せてもいいかもしれないです」

リウスはシエスタの緊張が移ってしまったかのように、ごくりと唾を飲み込んだ。

「それはどんなもの？」

「えっと……。マジックアイテムらしいんです。少しだけ見せてもらったことがあって、

その時はただの汚れた木の枝にしか見えませんでしたけど」

未だに半信半疑なのか、シエスタは自信無さげにもじもじとしながら続けた。

「おじいちゃんが言うには・・・、『恐ろしい化け物を召喚するマジックアイテムだ』つて・・・」

第五十一話 O o p a r t s

翌朝、一行は空飛ぶシルフィードの背でシエスタの説明を聞いていた。

シエスタの説明はあまり要領を得ないものだったが、確かに『竜の羽衣』はタルブ村に存在しているらしい。

村の近くにある寺院に保存されていて、それを管理しているのはシエスタの家族なのだそうだ。

「どうして『竜の羽衣』って呼ばれてるの?」

「えっと・・・、それを身に纏った者は空を飛べるって言われているので」

ルイズの言葉にシエスタは言いにくそうな顔で告げた。

「空を?」 ということは、『風』のマジックアイテムなのかしら」

シエスタは困ったような顔で笑った。

「本当に大したものじゃないんです。そういう言い伝えがあるだけなんですよ」

「そうなの? どうして?」

「なんていうか、インチキなんです。どこにでもある、名ばかりの秘宝というか・・・。ただ地元の皆はありがたがって、寺院もあることですし、近くのおばあちゃんとかは毎

日拝んでたりもしています」

「へえええ。ミス・シエスタの家族が管理してるってことは、君の家族のものなのかい？」

シエスタは恥ずかしそうにほんのりと頬を染めている。

「実は、ひいおじいちゃん私の私物なんです。ある日、ひいおじいちゃんは私の村にふらりとやってきたんです。その『竜の羽衣』に乗って東の地からやってきたって、みんなに言ったそうです」

「すごいじゃないの」

「それが、誰も信じなかったんです。ひいおじいちゃんは頭がおかしかったって、みんなそう言ってます」

「どうして?」

『竜の羽衣』で飛ぶことなんて出来なかったからです。ひいおじいちゃんは色々試して、色々と言いつくをしたらいいんですけど、それで皆が信じる訳もなくなってます。

そのまま飛べないことを理由にして村に住み着いちゃったので、村の皆は仕方なく受け入れたらしいです」

その話にキュルケは面白そうな顔をしながら笑った。

「変わり者だったのね。家族も大変だったんじゃないの?」

「いえ、『竜の羽衣』の件以外はとても真面目な人で、仕事もちゃんとしてた人だっ
ています。大金を払って『竜の羽衣』に『固定化』の魔法をかけてもらったり、ちよ
つと無駄遣いをするような人だったそうですけど」

「本当に飛べるのなら凄いわね。ぜひとも私も欲しいもんだわ」

「リウスは飛べないものね。あんな魔法も使えるくせに本当に不思議だわ」

「分からないものは分からないのよ。今でもみんな飛べることの方が不思議でし
ょうがないんだから」

「・・・もしかしたら、ひいおじいちゃんも嘘を言っただのかもしれない」

ぼつりと呟いたシエスタの言葉に、キュルケが首を傾げた。

「どういふこと?」

「あ、いえ。もしかしたらっと思ってただけです」

シエスタがリウスをちらりと見るも、リウスは目線を合わせるだけで何も口には出さ
なかった。

東の地から飛んできた男。偶然に偶然が重なってタルブ村へと向かっている現状を
思うと、シエスタのひいおじいちゃんの話ですら、遠いかつての世界に何か関係してい
るようにも思えてしまうのだった。

ひんやりとした寺院の中、リウスは興味深げに『竜の羽衣』を見つめていた。

ここはシエスタの故郷、タルブ村の外れにある寺院の中である。

そこに『竜の羽衣』は安置されていた。というより『竜の羽衣』を包むように寺院が建てられている、といった方が正しい。

丸太が組み合わされた門の形。石の代わりに、板と漆喰で作られた壁や木の柱。白い紙と、縄で作られた紐飾り……。

あまり見たこともない寺院ではあるが、それ以上に見たことがないのは『竜の羽衣』そのものである。

板敷きの床の上に置かれている、くすんだ濃緑の塗装を施された『竜の羽衣』。

それは、あまりにも不思議な形をしていた。

全長は十メートル程で、筒状になった胴体の先端には金属のプロペラが付いている。

胴体の足元には黒のような奇妙な色をした二つの車輪。

胴体から横に伸びている羽根のようなものに関しては、何に使うのかすらも分からない形状をしている。

キュルケやギーシュ、ルイズは気のなさそうな顔で『竜の羽衣』を見つめていた。

好奇心を刺激されたのか、タバサだけがリウスと同じように興味深げな顔をしてい

る。

「まったく。こんなものが浮くわけじゃないじゃないの」

キュルケが欠伸混じりに呟いた。それにルイズとギーシュも頷く。

「これはカヌーみたいな丸太船じゃないのかね。それに、鳥のおもちやのような翼をくつつけただけのインチキキ。」

大体、何だねこの翼は。こんなもので羽ばたける訳がない。大きさだって小型のドラゴンほどもある。ドラゴンだってワイバーンだって、羽ばたくからこそ飛ぶことができるとは子供でも知っているというのに。何が『竜の羽衣』なものかね」

ギーシュは『竜の羽衣』を間近で見つめつつ、もっともらしく頷いた。

リウスもその言葉に異論はないものの、曖昧に頷いていた。

「・・・それにしても、面白い形してるわね」

リウスはおずおずとした顔で『竜の羽衣』を見つめていた。

そのまま『竜の羽衣』をぐるりと見て回る。

「これが、羽衣？」

羽衣ということは身に纏うのだ。シエスタだって『身に纏ったものは飛べるのだ』と

言っていた。

しかしどう考えても、金属のようなこんな固そうな物を身に纏うことなんて出来る訳がない。

そもそもこんな大きさのものを『羽衣』と名付けたことにだって違和感しか感じないのだ。

ふと胴体の上部を見ると、ぽつこりと盛り上がっているガラス張りの箇所がある。

そこは人が出入りできるくらいの大さきになっているので、もしかしたらギーシユの言うように船のような乗り物なのかもしれない。とはいえ、今勝手に『竜の羽衣』へ昇る訳にもいかないだろうが。

リウスは軽く手の平で『竜の羽衣』に触れてみる。

固いことは固いのだが、思いのほか薄く作られているような、不思議な柔らかさを感じる事ができた。

すると、突然ガンダールヴのルーンが光り始めた。

驚いたリウスは咄嗟に手を離そうとしたが、頭へ流れ込んできた情報にびたりとその手を止めた。

「・・・」

「ねえ、リウス。皆シエスタの家に行くんだって。私たちも行きましょ?」

遠目にルイズが声をかけてくるが、リウスは目を丸くしたまま固まっている。

首を傾げたルイズがもう一度声をかけると、はっとしたリウスが振り返った。

「あ、ああ、そうなの。先に行ってもらつていい? 私はまだ少しこれを見てから行くわ」

「そう? じゃあ先に行ってるわね。さっさと来てね」

「分かった、分かったって」

硬い表情のまま手を振ると、ルイズは不思議そうな顔をしながらも寺院を後にしていった。

一人残されたリウスはもう一度、『竜の羽衣』を細い指でゆつくりと撫でる。

「・・・信じられない」

こわばった顔でリウスは呟いた。

これには魔力なんて欠片も存在しない。

ただの置物のような、到底飛べるだなんて思えない代物なのに・・・。

ルーンが光り、中の構造やその動かし方、『竜の羽衣』に何が出来るのかが頭の中へと

流れ込んでくる。

これに乗れば、ドラゴンどころではない速度で空を飛ぶことができる……。固い鱗すらなんなく破壊できる、小型の大砲のような未知の銃を搭載している……。しかもその銃は有り得ない程の速度で連射することができる……。

そしてこの全ては、尋常ではない緻密な機械によって作り上げられている……。この機械は見たことがないどころの騒ぎではなかった。

この『竜の羽衣』はリウスのいた世界よりも、はるかに高度な文明によって作り出された代物だ。

こんなものを生み出せる文明。それが、この世界のどこかに存在するともいえるか。

そんなはずはない、トリウスは必死に頭の中で否定していた。

今まで見てきたハルケギニアにはこれに近い機械など存在していなかった。

アルビオンまで乗ることができる飛行船だって、リウスのいた世界とほとんど変わらない乗り物だったではないか。

いま私の目の前に確固たる証拠があるにも関わらず、信じることなんて出来ない程の物だというのに。

強く混乱していたリウスだったが、はたと考えを止めた。

頭に流れ込んでくる『竜の羽衣』の構造の中において、一つだけ見覚えのある場所があったのだ。

いや、似ているだけといった方がいいかもしれない。いつたい、どこで。この構造は、いつたい。

リウスは、知らず息を飲んでいた。

「……『愉快なへびくん』と……同じ……?」

「……おお、ここですか? これはまた見たことのない寺院ですな」

「そうでしょう、そうでしょう。他の貴族様達も先ほど訪れておりましたので、もしかしたらまだいらつしやるかもしれませんよ」

「そうですか。では失礼して」

聞き覚えのある声にリウスは勢いよく寺院の入り口へ振り向いた。

そこには見覚えのある眼鏡と、禿げあがった頭をしている男が寺院に入ってくるのが見えた。

「おや、やっぱり来てましたか。どうですか? 『竜の羽衣』は、何か発見がありましたかな?」

信じられないものを見たかのように、リウスは小さく呟いていた。
「コルベールさん……。何で、ここに……。」

第五十二話 紡がれる偶然

「まあまあ、何も無い村ですけどゆっくりしてって下さい」

シエスタの生家で一行は歓迎を受けていた。

テーブルには所狭しと家庭料理やタルブ村特産のワインが並んでいる。

しかしシエスタの父親から手酌を受けている人物に、一行は少なからず気まずそうな表情を浮かべていた。

「おっとつと、これはありがたいですな。タルブ村のワインはトリスタニアでも有名ですからなあ」

「先生、嬉しいことを言ってくれますなあ。どうぞ、ぐいっと」

「おおつと、これはどうもどうも」

シエスタが家族へ「奉公先でお世話になつていゝ」と一行やコルベールを紹介したからだろうが、既にコルベール自身もシエスタの家族に馴染んでいるようだ。

あつという間にタルブ村の雰囲気へ馴染んでしまったコルベールに、一行は彼の思わぬ一面を感じていたのだった。

紹介されるまではシエスタの両親も怪訝な表情を浮かべていたのだが、シエスタの紹

介に彼らはすぐさま相好を崩していた。

シエスタは八人兄弟の長女だそうで、幼い弟や妹たちもあつという間に一行へあれやこれや質問を投げかけるようになっていた。

貴族の客をお泊めするということで、タルブ村の村長までもが挨拶にくるといふ騒ぎにまでなっていたのだった。

「ねー、シエスタお姉ちゃん。お外にいるドラゴンとかトカゲつて貴族さまの使い魔なんですよ?」

「こら、失礼なことをしないのよ」

「いいわよシエスタ。なあに? 触ってみたいの?」

子供に慣れているのか、しやがみこんだキュルケがにっこりと笑いかけると、小さい子供たちはおぞおぞとしながらもこくりと頷いた。

「私がいるところでないわよ。あ、でもあのドラゴンはこつちのお姉ちゃんの使い魔なのよ。ねえタバサ、貴女もいいわよね」

タルブ村の名物料理であるスペシャルトーストが気に入ったのか、タバサは上品ながらも猛然と焼き立てのトーストにパクついていた。

しかし、ぴたりとその手を止める。子供たちはきらきらとした期待に満ちた瞳をタバサへと投げかけていた。

「・・・」

キュルケと違いタバサは子供に慣れていないのか、珍しく目線を少し泳がせるとこくりと頷いた。

許可を得た子供たちはきやあきやあ言いながら喜び合っている。

「ぼく、あのモグラに触りたい！」

その子供の声をギーシユがびくりと聞きとがめた。

「君って子はセンスがいいね！　もちろんいいとも！　僕のヴェルダンデを思う存分愛でてあげてくれたまえ！」

子供たちの歓声にギーシユは有頂天である。

騒がしい食卓の光景にシエスタの父親が困ったような顔で子供たちをたしなめた。

「いや、すみませんな。お前たち、貴族の皆さまはお疲れなんだから明日にするんだぞ」

穏やかで、暖かい時間が過ぎていった。

久々に家族と会ったシエスタは照れくさそうにしながらも、とても嬉しそうな表情でときばきと一行をもてなしている。

そうして一行は美味しい食事やワインをお腹いっぱい詰め込むと、各々が用意され

た部屋に案内されていった。

その中で、シエスタが父親に小声で何かを話している。

先にルイズへ休むように言ってから、リウスはシエスタに促されつつシエスタの父親から手酌を受けていた。

「いやいや、凄い偶然です。まさか親父と同じ故郷の人が来るだなんて」

「私も驚きました。私の故郷は本当に遠いところなので」

「そうなんですか。どこらへんなので？」

リウスは注がれたワインで唇を少し湿らせる。

「東方なんだと思います。私は使い魔として召喚されたので、ちゃんとした場所は分からないですが」

シエスタの父親は目を丸くしながら合点がいったように頷いた。

「おお・・・、そうなんですか。そうか、だから親父は爺さまと話が合ったんですね」

シエスタの父親が語るには、シエスタの曾祖父であるササキタケオはどこかおかしい人だったそうである。

当たり前の知識を知らず、それでいて色んなことに妙に博識で温和な人間。

そしてそれは、シエスタの祖父にも同じことがいえたのだそうだ。

「親父は村の誰よりも早く、爺さまと仲良くなったって聞いてます。同じ東方の出身だったのか……。そりゃあ馬が合うわけですなあ」

長年の謎が解けたかのように、シエスタの父親はぐびりとワインを煽った。

しかし舐めるようにワインを飲んでいたりウスは、多分それは違うだろう、と考えていた。

ササキⅡタケオは明らかに異常な私物を持っていた。トリステインとはまるで違う、異国の人間だったのは想像に難くない。

そこへリウスのいた世界から来た、自身と境遇の似ている異国の人間が現れた。

それを知ったシエスタの曾祖父の驚きや喜びはとても強いものだったのだろう。

そこからタルブ村の話やシエスタの奉公先である魔法学院の話など会話に華を咲かせていると、席を立っていたシエスタがぱたと戻ってきた。

手には何かの本が握られている。それを父親へ渡すと、彼はぺらぺらとその本をめくっていった。

「うーん、やっぱり読めないな。ミス、これが親父の日記です」

シエスタの父親は席を立つと、リウスにも見えるように横の席に座りながら日記を開いた。

そしてその中の一文を、ごつごつとした指で示す。

「……です。すみませんが、何て書いてありますかね？」

怪訝な表情を浮かべながらも、リウスは指し示された一文を声に出して読み始めた。

「……『イチゴと豚肉のトースト作り方メモ』……？」

首を傾げたリウスに、シエスタの父親はほつと息を吐いた。

「本当なんですね。申し訳ありません、試すような真似しちまつて」

深々と頭を下げる姿に、リウスは慌てて頭を上げてくれるように言った。

ようやく頭を上げた彼は困ったような顔で笑う。

「いや、私は親父の私物を触ったり他の人に見せたりするなって散々言われて育ったんです。他にも色々残ってるんですが、この日記を読める人になら私物を全部譲ってやれって」

これで肩の荷がひとつ降りたなあ、と嬉しそうにしているのを尻目に、リウスは手渡された日記の最初のページを開いた。

そのページに書かれているのは、たった一つの文章だけである。

『いずれ来るかもしれない同士のために、この記録を残す』……。

簡素ながらもしつかりとした木材で作られた部屋の中、ろうそくの火と月明かりがぼんやりと周囲を照らしている。

リウスとルイズは一緒の部屋にいたが、お腹がいつぱいになったルイズはすぐに眠くなってしまったようで、既にベッドの毛布にくるまって寝息を立てている。

他の皆もやはり疲れていたのか、彼女たちが案内された部屋からは物音ひとつしていない。

三つ編みをほどいた髪を肩に流しながら、リウスはシエスタの祖父の日記を静かに読み進めていた。

シエスタの父親は「明日には親父の私物をお見せします」とのことで、ひとまず日記だけをリウスに渡してくれたのだった。

リウスは椅子に腰かけたまま、ろうそくの火に照らされている日記のページをぺらりとめくった。

どうやらシエスタの祖父は、予想通りシュバルツバルド共和国の首都、ジュノー出身のセージだったようだ。

自身の研究を行なっている中、突然起動した魔法具によってこの世界を訪れた、と書かれている。

その内容はリウスにとって驚きの連続だったのだが、大いに驚かされたのは序盤のページに書かれている内容だった。

シユバルツバルド共和国の首都、ジュノーの心臓部ともいえる、共和国の機密の研究。巨大な都市であるジュノーをその大地ごと宙に浮かばせ、そのまま宙に『固定』している魔法具の存在。

歴史あるジュノーにおける全ての魔法の研究は……、その魔法具、『ユミルの心臓の欠片』によって成されてきたものである、と。

同じように、リウスのいた世界における残り二つの大国、ルーンミッドガッツ王国やアルナベルツ教国にも『ユミルの心臓』が存在しているらしい。

言い伝えや諜報の捜査を分析すると、今ある三つの大国はその『ユミルの心臓』を基に成り立ってきた国々である可能性が高い、と結論付けている。

では、『ユミルの心臓』とは何なのか。

それについての結論は『分からない』とのことだが、彼は仮定としてこう書き連ねて

いた。

『ユミルの心臓』は、少なくとも人工物である。失われた巨大国家にたとえられる、偉大な魔術師たちによって造られたと伝わっているが、その詳細は不明……。

『ユミルの心臓』には膨大な魔法構築式と共に、魔力を自己生成する機構が備わっている。つまり、数多くの呪文が埋め込まれているのと同時に、大気中の魔力を吸い取りながら、自らも莫大な魔力を生み出し続ける永久機関の存在が確認されている。

埋め込まれている呪文はその多くが解明されておらず、『ユミルの心臓』には、神族や悪魔族が使ったとされる魔法すら含まれていると考えられる……。

私の研究は実を結びかけていた。かつて悪魔族の一柱、魔王モロクが我々の世界へ侵入してきた時に使われたとされている『次元を突破する魔法』もその一つである。

私がハルケギニアに飛ばされた理由としては、この魔法が作動した可能性が高い……。

魔王が侵入してきた際の痕跡を調査できていれば良かったのだが、結局それは果たされないままだ。

共和国の北方、フイゲル地方の外れにあるタナトスタワーにその痕跡が存在すると考えられるが、凶暴な天使たちの妨害があり調査には至っていない……。

魔王モロク……。その言葉に、リウスはこの世界に来てしまった謎が少しずつ紐解かれていくのを感じていた。

「アツシユ・バキユーム……」

リウスがこの世界に訪れる直前、当事者であるルーンミッドガッツ王国だけでなく、周辺国全てで大騒ぎになった事件があった。

魔王モロクの復活である。

モロクという街は元々魔王モロクを封じている街だとされていたが、あくまでそれは伝説上の作り話だと一般的に考えられてきた。

しかし何が起きたのか、その魔王モロクが突如として復活し、ルーンミッドガッツ王国における軍事的、経済的支援の土台であるモロクの街を徹底的に破壊し尽くした。

しかもあの悪魔は自身の身体から強大なモンスター達を際限なく生み出し続け、周辺にある広大なソグラト砂漠の環境すら浸食するほどの壊滅的な被害を及ぼしていたのだった。

そういつた事態の中、即座に大国同士で協定が生まれ、討伐隊が結成された。

ルーンミッドガッツ騎士団。

プロンテラ大聖堂の聖騎士や聖職者たち。

アサシングルドやハンターギルドなどの各ギルド構成員。

魔法都市ゲフェンのウィザード達から、シュバルツバルド共和国におけるセージ達も、ブラックスミス達も、アルケミスト達も。

大国の誇る精鋭たちが一堂に会し、魔王モロクの討伐が行なわれたのだ。

結果は、辛勝だった。

数多くの犠牲を出した末に、討伐隊は魔王モロクを打ち破った。

しかし魔王モロクは滅ぼされる寸前に、別の世界へと逃げ込んだ。

そう、あの伝説上の悪魔は正に『次元を突破した』のだ。

そして魔王モロクの残した世界を渡る扉、次元の狭間を辿っていく中で、アツシュ・バキュームという異世界が発見された……。

シエスタの祖父の憶測は正しかったということだ。魔王モロクが異世界への扉を開くことが可能なのは確かに事実だった。

シエスタの祖父も、私も、突如としてハルケギニアに飛ばされてきた。

魔王モロクの使用できる魔法が『ユミルの心臓』にも埋め込まれているのであれば、私

たちが異世界であるハルケギニアに迷い込んだ理由も説明がつく。

そして、『ユミルの心臓』の魔法を使うには莫大な魔力が必要だと書かれていた。きつとそれも正しいのだろう。

シエスタの祖父は『ユミルの心臓』が生み出す魔力によって飛ばされてきたのだろうと書いている。

そして、私はたぶん、カトリーヌによる魔法・・・、その強大な魔力によって飛ばされてきたのだ。

リウスはもう一度日記のページをめくった。

序盤のページには重要な情報が次から次に記載されていたが、それ以降はハルケギニアの知識や料理のレシピ、周辺にある街や国の名産品など、メモ書きのような記述がほとんどだった。

そういった内容を斜め読みしている中、リウスは最後辺りにあるページに目を止めた。

この世界に訪れてから七年が経つ。来月の結婚は私にとつての決意に他ならない。私の年齢は決して若いとは言えないにも関わらず、あのササキの娘が好いてくれたこと

は確かに嬉しく思っている。

しかし・・・、私の行動は明らかな裏切りだ。もはや私に出来ることは、ただ一人残されたあの娘が、健やかに、幸せに生き続けていると信じることだけだ・・・。

もう私はあの世界へ戻ることができない。なぜなら『ユミルの心臓』が手元に無い以上、世界を繋げる扉を開くことは不可能に近いからだ。

ハルケギニアに存在する多くの魔法は、限らない程に私の知る魔法と似通っている。私たちが『ユミルの心臓』の知識を基に開発したガーディアンと、ハルケギニアのメイジが操るゴーレムにすら、あまりにも類似する部分が多いのだ。

これらに繋がりがあることは明白なのだが、その証拠を掴むことなど出来なかった。たとえ、このまま十年二十年と調査を進めていても結果は同じことだろう・・・。

しかし調査の結果は悪いことばかりではなかった。私のいた世界に比べれば、このハルケギニアは比較的 안전한世界なのだ。

土地の魔力がモンスターを作り出すことは無い。人同士の争いですら、際限なく湧出するモンスターとの争いに比べれば平和を生み出す可能性が高いだろう。

村の皆も良い人ばかりだ。ササキもこのハルケギニアとは異なる『チキユウ』という

世界からやってきたと聞いたが、彼もまた気の良い人物だ。

偶然訪れたこの村に住むことができたことは確かに幸運なことだったと、今では思っている……。

かつての世界に戻れるのなら、会いたい人も、謝りたい人も数多くいる。しかしあの子も、彼も、私は死んだものだと思っていることだろう。そうであるなら、私はもう戻るべきではないのかもしれない。

そう考えた時の最後の心残りは、私が持ってきてしまった私物だ。召喚魔法における研究材料をいくつも持ってきてしまっている。その中には非常に危険な魔法具も含まれているのだ……。

もしこの記録を読んでいる者がいるのなら、どうか貴方に判断してほしい。私の私物は貴方に譲るつもりだ。ほとんど大したものではないが、この世界においてはそれなりに価値があることだろう。

ただし、一つだけ注意してほしい。貴方が知っているかは分からないが、私物の中には二本の古びた木の枝がある。あれらはモンスターを召喚する呪物だ。

そしてただそれだけなら特に問題もないのだが、その片方には血の契約が行なわれて

いる……。

リウスはその文章から目を離すことができなかつた。

古木の枝。モンスターを召喚する魔法具であり、破壊によつて放出された魔力がモンスターを形作る呪物である。

そして……、血の契約が施された古木の枝は、あまりにも危険な存在として知られている。

神族や悪魔族に匹敵する魔力が封じられているという、滅多に見つかることのない、非常に珍しい呪物だった。

決してあの木の枝を破壊してはならない。『血塗られた古木の枝』は危険すぎる。

封じられた魔力がハルケギニアで何を召喚するのかなど、我々には分からないのだから……。

「リウス……？ まだ寝ないの？」

どきりとして、リウスはベッドの方へと振り向いた。

「もう寝るつもりよ。起こしちゃった？」

「ううん、だいじょうぶ」

眠くて仕方がないという様子で、ルイズは横になったままぼんやりと声を出した。

先程の内容に尾を引かれながらも、リウスは日記を閉じてろうそくの火を静かに吹き消す。

もぞもぞと布団に入ると、薄目を開けたルイズが安心したように笑みを浮かべている。

しかし、少し険しい顔で天井を眺めているリウスを見て、ルイズは不思議そうに口を開いた。

「どうしたの？」

嘘は言わない、という約束を思い出して、リウスはころんとルイズへ向き直った。

「・・・明日話すわ。面白い話があったの」

「そう？　ならいいわ・・・。私もねむくって・・・」

小さく欠伸をしたルイズは暗闇の中でリウスの表情を見つめる。

そして何を思ったのかにんまり笑うと、もぞもぞとリウスに抱きつくようにして眠り始めた。

幼い頃の光景をふと思い出しながらも、リウスは優しくルイズの頭を撫でる。

「……もう、甘えんぼなんだから」

「……いいじゃない。久しぶりなんだし……」

呆れたようにリウスが言うが、嬉しそうな様子のルイズはそのまま目を閉じる。

しばらくリウスがぼんやり考え事をしてしていると、ルイズはすうすうと寝息を立て始めていた。

タルブ村に着いて、偶然コルベールと会った時の会話を、リウスは静かに思い返していた。

—偶然なのですが、学院で『竜の羽衣』の伝説を見つけたのですぞ。これが面白いのですぞ？ 『竜の羽衣』は日食を通じて突如としてこの地に現れた、という言い伝えが残されているのです！

おおよその書物には『風』のマジックアイテムのように書かれていたのですが、気になる点がいくつかありましてな。

コルベールはその伝説を確かめるために、はるばるタルブ村へとやってきたようだった。

実際の『竜の羽衣』を見たコルベールは、しきりに感心したように興奮した顔つきで話しかけてきた。

「いやはや、本当に見たことのない物ですな。これが飛ぶとなると不思議でしょうがないですよ。」

本当ならこれを調査してからリウスくと話すつもりだったのですが、君も来ているのなら話は早い。偶然とは恐ろしいものですね！

偶然……。これは、本当に偶然なのだろうか。

『竜の羽衣』に触れた時、私の持つガンダールヴのルーンが反応していた。

つまり、あれ自身が『武器』だということだ。

偶然あれの正体を知り得たのも、偶然私がルイズに召喚されて、私がガンダールヴのルーンを持っていたからだ。

そして偶然、シエスタの祖父はかつて私のいた世界の住人だった。

『ユミルの心臓』を知っていた彼の情報は、偶然同じ境遇にいる私へと伝えられた。

宝さがしにシエスタを連れてきていかなかったとしたら、きっと私はあの日記を読むこ

とが出来なかつただろう。

ルイズがいたトリステイン魔法学院。

そこに偶然私が召喚されて、偶然シエスタがいて、偶然知り合つたからこそ、私は『竜の羽衣』の情報を、『ユミルの心臓』の情報を、そしてこの村に『血塗られた古木の枝』が保管されているのを、知ることが出来たのだ。

ハルケギニアに來た理由だつてそうだ。

偶然カトリーンの魔法をあの時に受けたから、私はハルケギニアに來ることになつた。

偶然・・・、私が『ユミルの心臓』を持つていたから・・・。

—運命は、いつも君と共にある。

先日見たあの夢のことは何故かよく覚えていた。

あの金髪の青年。彼は何者なのだろうか。

彼は何故、かつて女神ヴァルキリーに伝えられた言葉を口にしたのだろうか。

セージになつた後、私のいた世界で信じられている神々の本を読みふけていた時期

がある。

ルーンミッドガッツ王国におけるオーディン信仰・・・、アルナベルツ教国におけるフレイヤ信仰・・・。

シユバルツバルド共和国は科学を主軸に据えた国ではあるが、それでも他の国々と同じ、ただ一つの宗教が中心となっている国家だった。

どの国の書物を読んでも、女神ヴァルキリーを含む神族たちは『運命』を司る存在なのだ共通して描かれていた。

—『ユミルの心臓』には、神族や悪魔族が使ったとされる魔法すら含まれていると考えられる・・・。

得体の知れない恐怖が、リウスの胸にじわじわと広がっていった。

運命という言葉は大嫌いだった。

そんなもので今までのことが片付けられるのなんて、許したくはなかった。

しかし頭の片隅では・・・、私は確かに運命の存在を信じ、それに強く恐怖していたのだ。

そんなものが存在するのであれば、私はいつまでも、何を想ったとしても、繰り返し

続けるのではないか……。

早くなる動悸を抑えようとしている中、ふとリウスは自分の胸の前で丸くなっているルイズを一瞥した。

もう、繰り返さない。繰り返す訳にはいかない。

「……運命が、存在するのなら」

そのまま、リウスはそつと目を閉じた。

今日の前にある暖かさを確かに感じながら、そのかけがえのない存在へと思いを巡らせる。

「……これからも降りかかってくるのなら、私はいくらでも抗ってやる……」

リウスは小さく呟くと、かつての自分がそうしたように、もう一度静かな決意を頭の中へと刻み付けていくのだった。

第五十三話 陰謀の影

二日後、リウスとコルベールを除く一行はシルフィードに乗り込んでいた。

シエスタは当初の予定通り、少しの間タルブ村に滞在するということで残っている。

シルフィードの背の上から、ルイズが不満そうな顔で声を上げた。

「じゃあ、リウスもちゃんと戻ってくるのよ？ 絶対に危ないことしちや駄目なんだから」

「分かっているって。いつまでも名残惜しそにしないの」

少しむくれた表情のまま、ルイズはリウスをじとりと見つめている。

そのままふいと横を向いたルイズに、シルフィード上にいたキュルケとギーシユは、何をそんなに心配しているのか、ときよとんとした顔で首を傾げていた。

「そんなに心配しないでよ、すぐ戻るようにするから。約束する」

困った顔で笑いかけるリウスに、ルイズは未だ心配そうな表情のままでもリウスをちらりと見て、こくりと頷いた。

リウスは昨日の内に、シエスタの祖父と自分のいた世界との関係を詳しくルイズに説明していた。

その内容にルイズは驚きながらも、何かの事故でリウスが元の世界に帰ってしまうんじゃないかと、事あるごとに不安そうな表情を浮かべている。

くれぐれも気を付けるとのこと、ルイズは渋々リウスが残ることを承知したのだ。た。

コルベールはといえば『竜の羽衣』の調査を続けたいらしく、しばらくタルブ村に滞在することを決めている。

シエスタの家族たちも、二人が残ることについて大いに快諾していたのである。

思い出したように、ルイズの後ろにいたキュルケが口を開いた。

「じゃあ先に帰ってるわね。お宝については戻ってから一緒に話しましょ」

「ああ、そういえばそれがあつたわ。分かった、じゃあ帰ってからね」

キュルケはルイズの様子に未だ不思議そうな顔をしているも、あまり深くは考えなかつたようだ。

使い魔たちが行ってしまうため、村の子供たちがシルフィードやサラマンダー、更にはシルフィードが啜えているヴェルダンデに別れの挨拶を行なっている。

そうして別れも程々に、シルフィードが地面を蹴って空中へと浮かび上がった。

そのまま大空へ羽ばたいていくと、別れを叫ぶ子供たちの声を背景に、あつという間にシルフィードは空の向こうへ飛んでいってしまった。

「それで、このプロペラですが……。これが後ろへの風を作って、その風がこの翼に当たると浮力を得られるみたいですね」

「なんと、そんなことが可能なんですかな……!? まったく、とんでもない代物ですな」
リウスとコルベールは『竜の羽衣』を調査しつつ、あれやこれやと議論を投げ合っていた。

とはいえリウスに分かるのは、ガンダールヴのルーンによって手に入る情報のみ。

コルベールはその情報を元に、あれこれと仮説を巡らしているのだった。

当初は、こんな機械の情報を伝えてしまった方がいいのだろうか、とリウスも悩んでいたのだが……。昨日コルベールがシエスタの家族に対し、必死の形相で『竜の羽衣』を譲ってくれるようお願いを続けていたのである。

結局、一時的に貸し出すのであれば、とシエスタの家族も折れてしまったのだった。

とりあえず学院に運びたいということで、ギーシユの父のコネを使い、数日後には『竜の羽衣』を運んでくれる竜騎士隊が到着する予定とのこと。

リウスがコルベールへの協力を決めたのはその貸し出しが決まってからだ。

いずれコルベールならば『竜の羽衣』のことを解き明かしてしまうだろう、と考えたからだ、それと同じくらいリウスも『竜の羽衣』のことが気になっていたのだった。

「ふうむ。しかし・・・結局のところ『足りないもの』というのは何なのでしょいうな」
既にリウスは、コルベールへ『竜の羽衣』の構造を簡単に説明していた。

『竜の羽衣』における重要な機械というものは、筒状になった胴体の前半分くらいにしか存在していない。他の部分は金属の骨組みに柔らかい金属のような布を張り付けただけのものがほとんどである。

その重要な機械類の中で、ある一部分、何に使われているのかよく分からない場所があったのだった。

というのも、ガンダールヴのルーンが教えてくれるのは『武器』の情報だけなのである。

動かし方や何が出来るか、などは分かる反面、何が不足しているか、壊れているのかどうか、などを読み取るとは出来なかった。

コルベールとリウスがあれこれと議論を交わしている中、ふとコルベールは何かに気付いたように『竜の羽衣』をいじくり始めた。

それは正に『竜の羽衣』の下部、使用不明の場所へと繋がる小さな栓だった。

コルベールが慎重にその栓を開けると、空洞になった穴がほつきりと口を開けていた。

「なるほど、分かりましたぞ。まず必要なのは『燃料』ですな」

そうか、とりウスは納得したように頷いた。

確かに機械でできた乗り物で人力ではない以上、燃料は必要である。しかしこの『竜の羽衣』には薪を入れるような場所などなかった。

つまりこんな小さな穴に入る燃料は液体しかない。

コルベールはおずおずとしながらその穴へ手を突っ込んでいく。

中には何も入っていないようだったが、ぴくりと何かに気が付くとゆっくり外へ手を引き出した。

その指には、何か得体の知れない液体が付着していた。

「これは何でしょうか。知らない匂いですが、暖めなくてもこれほどの匂いを発するとは」

手であおぐようにしながら、ふんふんとコルベールがその匂いを嗅いでいる。

指に付けている時点でそこまでする必要もないだろうが、しゃがみこんだリウスもコルベールの真似をしながらその匂いを嗅ぎ始めた。

「・・・刺激臭ですね。何だろう、変なおい」

二人してしゃがみこんで指の匂いを嗅いでいる。

傍から見ると何処ぞの変態のようであるが、二人は大真面目な顔でじつと考え込んで

いた。

「・・・何かの油なんでしょうな。学院に戻ってみなければ分かりませんが」

「液体の燃料っていうと、植物や動物から採ったものくらいしか知らないのですが・・・。コルベールさんはどう思いますか？」

「これ程に気化しやすいのであれば違うでしょうな。そういえば、火竜山脈の一部で取れる油が燃焼に特化していると聞いたことがありますぞ。戻ったら早速、取り寄せて・・・」

コルベールは間近にあるリウスの顔に気付き、ほんの少しの間見つめていた。

大きめの目に、整った顔立ち。

薄桃色の髪や三つ編みも彼女の造形によく似合っている。

彼女なら求婚相手も引く手あまただろう、とまで考えたところで、コルベールは小さく笑った。

自分には子供などいなくても関わらず、まるでよく見知った近所の子供の将来を心配しているかのような、変な心持ちになってしまっている。

「・・・『竜の羽衣』の運搬費もありますし、お金が大分掛かっちゃいますよ？　もし良ければ私もお金を出しますので・・・。どうしました？」

うーんと考え込んでいる顔がコルベールに向いた。
ぎくりとしながらもコルベールはその顔に笑い返す。

「いや、何でもありませんぞ。金銭のことは気にしなくても問題ありません。これでも貯蓄はしておりますからな。学院に戻ってから調査してみるとしましょう」

「なるほど。燃料に関して分かったことがあれば、ぜひ教えてくださいね」

コルベールの様子にも、リウスは特に違和感を感じていなかったようである。

二人は立ち上がると、もう一度『竜の羽衣』の調査を行ない始めるのだった。

アルビオン空軍工廠の街ロサイスは、油と汗に塗れた人々でごった返していた。

ロサイスはアルビオンの首都ロンドンディニウムの郊外に位置しており、レコン・キスタが呼ぶ『革命戦争』が終結する前から王立空軍の工廠であった。

そのためロサイスには職人達が多く住み着き、ハンマーを叩く音と人々の活気に満ちた都市であったのだが・・・、今のロサイスはどことなく暗い雰囲気にも包まれていた。

レコン・キスタが革命を始めてからというものの食料生産や物資の輸出入が遅れ、首都に近いこの街ですらも食料不足が深刻化しているのだ。

それにも関わらず、首都からの労働者が数多く送り込まれてきている。

いくら腹が減ろうが決して口には出さないものの、この都市の人々はレコン・キスタに対して多くの不満と不信を抱いているのだった。

そんな街の中で、ひととき目立つ赤レンガの大きな建物があった。

警備する軍人の頭上にはレコン・キスタの三色の旗が翻っている。

ハルケギニア最強とも言われるアルビオン空軍の基点、空軍発令所である。

その内部に、空軍の持つ技術を賭して作り出された『レキシントン』号はあった。

全長二百メートルを超えるかつての『ロイヤル・ソヴリン』号に更なる改装を行なうため、レコン・キスタは日夜突貫工事を行なっていた。

その巨大戦艦の舷側から伸びる大砲を見て、レコン・キスタの最高司令官、アルビオン現皇帝のオリヴァー・クロムウエルは痛快そうに顔をほころばせていた。

「なんとも勇ましく、頼もしい艦ではないか。この艦を与えられた者は世界を自由にできるような、そんな気分にはならないかね？　艦装主任」

「我が身には余りある光栄ですな」

気の無い声で、サー・ヘンリ・ポードは答えた。

彼は元々レコン・キスタ側の巡洋艦艦長であった。しかし革命戦争の折にその武功を

認められ、『レキシントン』号の改装艦装主任を任せられることになったのである。

艦装主任は艦の艦装が完了した後、そのまま艦長へと任命される。それは王立であった頃からの、アルビオン空軍の伝統だった。

「あの大砲は新型だ。余からの新任祝いだと考えてくれたまえよ？　設計士の計算では・・・」

クロムウエルの傍に控えた、長髪の女性が答える。

「トリステインやゲルマニアの戦列艦が装備するカノン砲に比べ、およそ一・五倍の射程を有しております」

「そうだな、ミス・シエフィールド」

ボーウッドはシエフィールドと呼ばれる女性を見る。冷たい雰囲気を持つ、二十代半ば程の女性である。

細い、ぴったりとした黒いコートを身に纏っているが、メイジの象徴であるマントを羽織ってはいない。

メイジではないのかもしれないが、ボーウッドにはそんなことを詮索する意味も興味もなかった。

クロムウエルは満足げな顔でボーウッドを見つめ、そのまま彼の肩を叩いた。

「彼女は東方の『ロバ・アル・カリイエ』からやってきたのだ。エルフより学んだ技術を

私たちに伝えてくれている。そうだな、君ももだちとなるといい。艦装主任」

ボーウッドは静かに感謝を述べるが、その表情は暗く落ち込んでいた。

彼は心情的には、未だに王党派だった。上官であった艦隊司令が反乱軍側についたため、仕方なく反乱軍側の艦長として革命戦争に参加したのである。

彼は、高貴であるからこそ身を呈して国土や国民を守るべきだと考える貴族だった。

だからこそレコン・キスタは単なる王権の篡奪者であり、未だにアルビオンは王国だとも考えている。

彼にとって国土を荒廃させるだけのレコン・キスタは、ただの下賤なる盗賊共と同じ、忌むべき存在なのである。

「これで『ロイヤル・ソヴリン』号にかなう艦など、ハルケギニアのどこを探しても存在しなくなるでしょうな」

間違えた振りをしながらボーウッドはこの艦の旧名を口にした。

しかしクロムウエルはその皮肉に気付きながらも、楽しそうにボーウッドへ微笑む。

「ミスタ・ボーウッド、君は面白い冗談を言うのだな。アルビオンに『王権』は存在しないのだよ」

平然と返された言葉に、ボーウッドは思わず舌を打ちそうになっていた。

この男は確かに人々を導く力を持っている。

ただしそれは、綿密な計画を持って人々を扇動し、それぞれの身に潜む欲望を引き出し、終いには周囲を破滅させるような悍ましい力だ。

ボーウツドにとつてのクロムウエルは、断じて王の器とはかけ離れた存在だった。

「そうでしたな。しかしながら、ただの婚姻の場に新型の大砲を積んでいくなど、下品な示威行為と受け取られかねませんぞ」

トリステイン王女とゲルマニア皇帝との結婚式には、国賓として初代神聖アルビオン皇帝であるクロムウエルや閣僚たちが出席する。

この『レキシントン』号は、その際の御召艦として使用される予定だった。

「ああ、君には『親善訪問』の概要を説明していなかったな」
「概要ですと?」

また陰謀か、とボーウツドは顔をしかめる。

そんなボーウツドの表情を楽しむかのように、クロムウエルはそつとボーウツドの耳元に二言、三言囁いた。

ボーウツドの顔は見る見る内に蒼白になっていった。

ありえぬ、と呟くボーウツドへ、クロムウエルはただ静かに微笑んでいる。

「そのような、破廉恥な行為を行なうつもりか!!」

激昂したボーウツドが叫んだ。

周りの労働者たちが驚いて目だけを向けているが、当のクロムウエルは平然とした顔のまま笑っている。

「軍事行動の一環だ」

「こともなげに、クロムウエルは声を出した。

「トリステインとは不可侵条約を結んだばかりだ！ このアルビオンの長い歴史の中で、他国との条約を破り捨てた歴史はない！」

「口を慎みたまえ、ミスタ・ボーウツド。それ以上の政治批判は許さぬ。これは議会が決定し、余が承認した事項なのだ。きみは余と議会の決定に逆らうつもりかな？」

ボーウツドはぐつと押し黙り、苦虫を噛み潰したような顔のまま感情を押し込めた。

彼にとつての軍人は物言わぬ剣であり、盾であり、祖国の忠実なる番犬だった。

いくら有り得ぬ決定であろうが、指揮系統の上位に存在するものの決定であるなら黙って従うより他はない。

「・・・アルビオンは、ハルケギニア中に恥をさらすこととなります。卑劣な条約破りの国と、悪名を轟かすこととなりますぞ」

「君は本当に冗談が好きなのだ。ハルケギニアは我々レコン・キスタの旗の下、一つに

まとまるのだ。聖地をエルフ共より取り返した暁には、些細な外交上のいきさつなど誰も気に留めまいよ」

もう我慢できないとばかりに、ボーウッドはクロムウエルに詰め寄った。

「……私が冗談を言っているとしても？ 条約破りが些細な外交上のいきさつなどと……！ 貴殿は祖国をも裏切るおつもりか!!」

しかし、クロムウエルの傍らに佇む男が詰め寄るボーウッドを杖で制した。

フードに隠れたその顔は、見覚えのある顔だった。

震える声で、ボーウッドは呟く。

「……そんな、馬鹿な。殿下……?」

「果たして、かつての上官にも同じ台詞が言えるのかな?」

ボーウッドは咄嗟に膝をついた。

フードでその顔を隠した男は、討ち死にしたと伝えられる、ウエールズ皇太子だった。ウエールズは静かに手を差し出した。ウエールズが生きていることに感極まりながら、ボーウッドはその手に接吻をする。

刹那、ボーウッドは青ざめた。

皇太子の手が、まるで氷のように冷たかったからだ。

「君には期待しているぞ。艦長」

記憶通りの口調でウエルズが告げる。

そのままクロムウエルは供の者たちと歩き始め、ウエルズもそれに続いていく。その場に取り残されたポーウッドは、ただ呆然と立ち尽くしていた。

あの戦いで死んだはずのウエルズ殿下が、生きて動いている……。

ポーウッドは『水』系統のトライアングルメイジだった。生物の組成を司る『水』系統のエキスパートである。

しかし……、死人を蘇らせる魔法など聞いたことはなかった。

ウエルズ殿下に触れた時、はつきりと分かった。

殿下の身体には間違いなく生気が流れていた。『水』系統の使い手だからこそ分かる、懐かしいウエルズ殿下の水の流れが……。

未知の魔法に違いない。そう考えたポーウッドは、まことしやかに流れている樽を思い出し、思わず身震いしていた。

神聖皇帝クロムウエルは、命を……、『虚無』を操ると。

ならばあれが、『虚無』の魔法なのか？

伝説の、五番目の系統……。

ボーウツドは震える声で小さく呟いた。

「あいつは……、ハルケギニアをどうするつもりなのだ……」

クロムウエルは、傍らを歩く貴族へ声をかけた。

「子爵、きみに二つの竜騎兵隊を授けよう。竜騎兵隊の総隊長として『レキシントン』に乗り込みたまえ」

羽帽子の下の、ワルドの静かな瞳がクロムウエルに向く。

「目付け、ということですか？」

クロムウエルは柔和な表情でワルドへ答えた。

「あの男は信用できる。頑固で融通が利かないが、決して裏切ることをしないだろう。余は君の能力を信頼しているだけだ。竜に乗ったことはあるかね？」

「ありませぬ。しかし、私に乗りこなせぬ幻獣などハルケギニアには存在しないと存じます」

「だろーうな、とクロムウエルは微笑んだ。」

そしてクロムウエルは不意にワルドの顔を見る。

「子爵、きみはなぜ余に付き従う？」

「……わたしの忠誠をお疑いになりますか？」

「そうではない。余はきみの能力を買っているが、一方のきみは余に何ひとつ要求しようとはしない」

いつもと変わらない様子で、ワルドはにこりと笑った。そして最近取り付けたばかりの義手をいじる。

「わたしは、閣下がわたしに見せてくださるものを、見ただけです」

「『聖地』か？」

静かにワルドが頷くのを見て、クロムウエルは面白そうに笑いかける。

「信仰か？ 欲がないのだな」

かつての聖職者らしからぬ言葉に、ワルドは何も言わず押し黙っていた。

『聖地』。そこに全ての答えがある。

その答えを前にして、何をするのかはその時に決める。

ワルドは首にかけてペンダントを服の上から触った。

古ぼけた銀細工のロケット。その中には、あの人の肖像画が描かれている。

あの肖像画を見る度に、冷たく静かなワルドの胸の内が、熱く、強く、さざめくのだ。失くしたものを取り戻す。

そして母を狂わせた原因を暴いてやる。

たとえ何を犠牲にしても、必ず辿り着いてみせる。

ふとワルドは、かつての可愛らしい婚約者と、薄い桃色髪の使い魔を思い出していた。

そう、今までと同じように、何を犠牲にしても……。

たとえ、同じ痛みを知る者が相手でも……。

しばらく思考に耽っていたワルドが、小さく呟いた。

「……それは違います、閣下。わたしは世界で最も、欲深い男です」

第五十四話 Nostalgia

「うーん……。火……、火に対する感謝……」

学院の自室で、ルイズは一人もんもんと考えていた。

ルイズは机に置いた羊皮紙を前に、手に持ったぼろぼろの本をばたばたといじくっていた。手の中にあるのが国宝だということすら忘れているような雰囲気である。

リウスが言うには、この『始祖の祈禱書』は単なるガラクタではないだろうとのことだった。

本物かどうかは分からないものの確実にマジックアイテムの一種であり、何かの条件があるのか、今のままでは読めない本なのだという。

魔力の痕跡がどのと言っていたがルイズにはよく分からなかったので、リウスの言葉信じてはいるものの、他のことで頭が一杯だったルイズは何の気もなく『始祖の祈禱書』を手で弄んでいた。

ルイズが必死に考えているのは、アンリエッタの結婚式でルイズが詠み上げなければならない、式の詔だった。

宝さがしに夢中になるあまり、ルイズはその存在をすっかり忘れていたのである。

とりあえず頭に浮かんだ一文を羊皮紙に書き出してみる。

「・・・炎は、熱いので、気を付けること・・・」

これでどうだ、とルイズはその一文をもう一度読み直してみる。しかし、あまりピンとこない。

「・・・これは詩なのかしら」

なんとというか、違う。というより、絶対に違う。

ルイズは疲れてしまった身体を伸ばしてから『始祖の祈祷書』をベッドに添えられた机へと置いた。

そのまま、ぼてつとベッドに横になる。

「何にも思いつかないわ。詩的になんて言われても・・・」

アンリエッタ姫の結婚式はもう五日後にまで迫っていた。

結婚式で述べる詔はある程度決まっている。決まっているのであるが、火に対する感謝・・・、水に対する感謝・・・、といった感じで四大系統に対する感謝の辞を言わなければならぬのだ。

「・・・この麗しき日に、始祖の調べの光臨を願いつつ、ルイズ・フランソワーズ・ル・

ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。畏れ多くも祝福の詔を詠みあげ奉る・・・」

ベッドに転がりながら、ルイズは流暢かつ気の無い声で式の言葉を読み上げてみる。

「炎は熱いので気を付けること・・・」

ムチャクチャだ。そう感じながら、ルイズは枕を抱きしめたまま足をばたばたとし始めた。

「もー、何で帰ってこないのよー」

とはいえ、まだルイズ達ですらおととい帰ってきたばかりである。

ラ・ロシエールまでの距離を考えてもリウスが帰ってくるのはあと三、四日後くらいになる予定なのだった。

「リウスなら何とかしてくれると思うのに・・・」

ベッドの上でごろごろ転がりながら、ルイズはうーうー唸っていた。

このままじゃ詔なんて出来そうにない。それなら・・・、誰かに相談してみるとか・・・。キュルケ。絶対に馬鹿にされる。却下。

タバサ。何を考えているか分からないし、何て相談すればいいのか分からない。もしあの無口な感じで馬鹿にされたら立ち直れそうにない。

ギーシユ。たぶん詩のセンスがないだろうし論外。

モンモランシー。絶対に馬鹿にされる。

先生の誰か。呆れられるどころか怒られるんじゃないだろうか……。事情を知っているとはいえ、オールド・オスマンに相談する訳にもいかない。そんなの迷惑極まりないし。

うんうん唸りながらルイズはそのまま、リウス、シエスタ、と考えていく。

シエスタは平民だが、それでも私よりもマシな詩を考えてくれそうな気がする。しかし、二人ともまだタルブ村から帰ってきてはいない。

帰ってきてから聞けばギリギリ間に合わないこともないが……。

「わたし、人に頼ろうとしてばっかりだわ」

枕に顔半分を埋めながらルイズは呟いた。

そのままごろんと横になって自分の机の上を見る。

一対の木彫り人形、綺麗な木製の馬たちはまるで互いに戯れるかのような姿で机の上に置かれている。

「ダメじゃない、一人で考えないと。リウスはいてくれるって言ってたけど……。それでも、リウスだって……。いつかは……」

そこまで眩いて、少しかだけルイズは涙ぐんだ。

しかしすぐに枕でわしわしと顔を拭いて、がばつとベッドから起き上がった。

「そうよ、一人で考えないとダメじゃないの！ 人を頼るなんて姫さまに失礼だわ！」

そのままルイズはもう一度椅子に座り直した。

「サイアクの場合は、火はこれでいいわ。となれば次は水よ、水」

ルイズはそう考え直した。どちらしても全て考えなければならぬのだ。それなら、今は私に出来ることをやっておくだけだ。

「えーと……。水は、流れるから、水浸しになります……。」

調子が出てきたと言わんばかりに、ルイズの部屋に羽ペンの音が響き続けていくのだった。

その翌日、リウスはシエスタの家族へ、シエスタの祖父の私物について説明を行なっていた。

「これが『ヒール』のスクロールですね。少し深い程度の傷ならすぐに治るはずですよ。

れで、こつちが素早く使える『ソウルストライク』のスクロールで……」

シエスタの祖父の私物には、例の日記のほかに、魔法の杖や普通の眼鏡、それにいくらかのスクロールが残されていたのだった。

『スタッフォブウィング』と呼ばれるその魔法の杖には風の魔法が封じ込められている。

とはいえリウスにとってはさほど使いこなせる装備ではないため、いざという時の資金源としてシエスタの家族に残すつもりでいた。

結局リウスが受け取ることにしたのは、シエスタの祖父がこの世界に持ってきてしまった『血塗られた古木の杖』だけである。

そのためシエスタの家族でも扱える魔法のスクロールについて説明を行っていたのだが、説明をするリウスには若干の迷いがあった。

下手に使えば、これらは非常に危険なことになりかねない代物だからである。

「それで、これがさつきお見せした『アーススパイク』ですね。あの魔法のスクロールです」

「……この巻物をほどこせば、さつきの魔法が使えるんですか？」

シエスタの父親はとても信じられないように目を丸くしていた。シエスタの母親も、シエスタも同様である。

「そうです。ただし慣れていなければ魔法を放つまで時間がかかりますし、これらは一

度使うと二度と使うことができません。弓矢のようなものだと考えていただければ」

「……弓、ですか」

「これらのスクロールを『矢』だとすると、使う人間が『弓』になります。一度矢を放てば、もうその矢は戻ってきません」

シエスタの父も母も、シエスタも、リウスが何を言いたいのか理解できていた。

使い方を誤れば、自分たちをも危機に陥れる代物なのだと。

「オーク鬼程度であれば怯ませることが可能です。ただし、あくまで弓矢と同じような、怯ませる程度のものだと考えてください」

三人は戸惑いながらもこくりと頷いた。

リウスが説明は以上だと告げると、シエスタの父親が唸りながら口を開いた。

「……しかし、親父も凄いものを残していったもんだな。貴族様に見せられねえわ」

「その通りだと思います。本当に使わなければならぬ場合にだけ使ってくださいい。……どうしましょうか。一回だけ使ってみますか？」

これなら、とリウスは一つのスクロールに手を持った。

このスクロールは非常に低レベルの魔法が埋め込まれているので、他のスクロールに比べれば重要度は低いだろう。

「いや、やめときます。仰る通り本当に必要になった時に使うようにします。なんだか、

変わっちまいそうで」

困ったような顔でシエスタの父親が笑う。

その表情を見たリウスは、少しばかり胸に痛みを覚えていた。

貴族だからこそ魔法を扱うことができる。

それがこの世界の常識であり、国々を成り立たせている根幹なのだ。

貴族と平民。その境を作っているのは魔法という力なのだから、シエスタの父親が使用を嫌がるのも当然だろう。

それでも、魔法の力が必要な時には使ってほしい。それがリウスの結論だった。

宝さがしで遭遇した亜人の群れのような、ああいった存在には望まずともこういった力が必要不可欠なのだ。

もちろん、使わないで済めばそれに越したことはない。

「では、また明日にあの箱だけ頂くことにしますので」

「ええ。あれは明日出発する際にお渡しします」

二人が言っているのは『血塗られた古木の枝』のことである。

あの魔法具は嚴重に作られた小さい木の箱に入れられており、その箱の表面は『鍊金』で作られた薄い金属によって覆われていた。

しかも、その三十サントにも満たない箱全体に強力な『固定化』の魔法をかけてある程の嚴重っぷりである。

オールド・オスマンに事情を話せば、たぶん学院の宝物庫に保管してもらうことも可能だろう。

ひとまず話をお開きとして、シエスタの母に頼まれたリウスは幼い子供たちを呼びに行こうと外へ出た。

きよろきよろ辺りを見回しながら歩いていると、きやあきやあ言いながら遊び回っている子供たちと、なにやら疲れた様子で地面に座り込むコルベルがいる。

『竜の羽衣』も昨日の内にギーシユの父から送られてきた竜騎士隊によつて学院へと運ばれているので、手持無沙汰なコルベルが子供たちの相手をしていたのである。

「大丈夫ですか？ だいぶお疲れみたいですけど」

リウスの言葉に、げっそりしたコルベルがリウスを見上げた。

「あの年頃の子供は本当に元気ですな。こちらが先に参つてしまつて……」

「それはそれは……。お疲れ様です。助かりました」

リウスは広場で遊び回る子供たちへと視線を向ける。

「みんなー、お母さんが呼んでるわよー」

はーい、とそれぞれが元気よく返事をするや、子供たちはまだまだ元気有り余っているように二人の横を駆け抜けていった。

他の家の子供たちがリウスに遊ぼうとせがんでくるが、とりあえず優しく追っ払っておく。

「すみません、追い出してしまつて」

遠目にぶーぶー言う子供たちの声を尻目に、リウスは立ち上がったコルベールに声をかける。

若干残念そうにしながらもコルベールが言葉を返した。

「仕方ありません。彼らも貴族が傍にいたのでは緊張してしまうでしょう」

コルベールには『スクロール』とは何なのかを簡単に説明してある。

その内容を聞いたコルベールは話が聞きたいと興味津々だったのだが、リウスが懸念している内容を伝えると、残念がりながらも身を引いてくれたのだった。

そのままコルベールといくつか立ち話をしていると、リウスの後ろから声がかけられた。

「あの、リウスさん？」

リウスがその声に振り向くと、シエスタがいた。

「ちよつと散歩しませんか？ 少し時間が出来ちゃったので」

「うん、いいけど・・・？」

リウスが不思議そうに首を傾げている中、コルベールがリウスの肩に手を置いた。

「リウスくん、行つてきなさい。私はシエスタ嬢のお父上に何か手伝えることがあるか聞いてきませんぞ」

そう言つて、コルベールはシエスタの家に向かつて歩き始める。

そのままリウスはシエスタに連れられて散歩へと向かつていくのだった。

リウスはシエスタに連れられて、タルブ村のそばに広がる草原へと足を運んでいた。夕日が草原の向こうにある山々の間へゆるゆると落ちていく。

草原は柔らかな風に煽られながら、まるで広大な海のようにきらきらと茜色の波を作り出していた。

「この時間の、この草原、とつてもきれいでしょう？ リウスさんが帰る前にもう一度見て貰いたかつたんです」

そう言つてシエスタがはにかんだ笑顔を向ける。

その顔にリウスはにこりと笑い返した。

「ほんとに綺麗ね、素敵などころだわ。タルブ村に来てよかった」

「私の家族もみんな嬉しがってましたよ。お二人を見て、あんなメイジ様がいるんだって。こちらこそ、来ていただいてありがとうございます」

シエスタはそう言ってぺこりとお辞儀をした。

「あんなにもてなしてもらって、こちらこそお礼を言いたいわ。みんな良い人ばかりだったから」

その言葉にシエスタは照れながらも、とても嬉しそうな表情を浮かべている。

「本当に、リウスさんは不思議な方ですね。私のおじいちゃんを思い出します」

「それって褒めてるの？」

悪戯そうな顔で笑うリウスにシエスタは慌てていたが、その内、楽しそうに笑い始めていた。

いくつかのお喋りをしながらも茜色に染まる草原を眺めていたリウスは、ふとシエスタの祖父が記した日記を思い返していた。

そして、リウスがいた世界とも、このハルケギニアとも違う、『チキユウ』という異世界からやってきたシエスタの曾祖父のことを。

彼らもまた、この美しい草原をこうやって眺めていたのだろうか。

シエスタはリウスの視線を追うように草原を見つめながら、ぽつりと口を開いた。

「……おじいちゃんはアルビオンじゃなくなつて、本当に遠いところから来たんですね」

「まあ……、そうね。気軽に行ける場所じゃないわね」

「あの冒険の話も、本当の話なんですか？」

「うん、そうだと思う。なかなか信じにくいだろうけど私も行ったことあるもの。結構危ない場所ばかりだったけどね」

リウスは沈んでいく夕日に目を細めながら、色々と故郷の話を続けている。

シエスタはそんなリウスを見て、少しだけ寂しそうな表情を浮かべていた。

「リウスさんも、いつか帰っちゃうんですか？」

リウスはシエスタに笑いかけながら、首を横に振る。

「まだ帰らないわ。ルイズもいるから」

じゃあいずれ帰ってしまうのか、とシエスタは少し落ち込んだ顔をする。

そしてずっと気になっていた質問をしようとしたが、シエスタはぐつとそれを飲み込んだ。

この人は自分とそれほど年が変わらないはずだ。確か、一歳、二歳くらいしか違わな

かったはず。

それにも関わらず、いつも凜としていて、いつも強くって優しいリウスさん。

その姿に、私は大きな感謝と、強い憧れを抱いているのだ。

そう思いながらも、リウスさんの家族が故郷で待っているのではないか、帰らなくていいのか、と時々シエスタは考えていた。

考えてはいたが、何故かそれはシエスタにとつて、とても聞きにくいことだった。

「あの、もし良ければまた来てくださいね。みんな待つてますから」

シエスタをちらりと見たリウスは何も言わず、とても嬉しそうに、そして少しだけ寂しそうに笑っていた。

その顔を見て、シエスタはまるで胸を締め付けられるような感覚を覚えていた。

大好きだったおじいちゃんに、いつも私はべったりだった。

色んなことを教えてもらって、いっぱい色んな話をした。

その中で・・・、おじいちゃんにタルブ村へ訪れる以前のことを聞いたことがあった。

—前は帰りたいとばかり思ってたけどな。ここにも大切なもんが出来ちまつたしなあ。

もう、比べられねえやな・・・。

その時のおじいちゃんの顔と、今のリウスさんの顔が、まるで重なっている気がしていた。

「わたし、リウスさんは大事なお友達だと思ってますから！　いつでも来てくださいます！　いくらでも来たっていいんですから！」

思わず口から出た言葉にシエスタはハツとした。

リウスは驚いた顔でシエスタの顔を見つめている。

「あ、わわ、私ったら何て失礼なことを！　わ、私が勝手にそう思ってるだけですから！」
顔を赤くして慌てるシエスタにリウスはまだぼかんとした顔をしていたが、次第に声を抑えながら笑い始めた。

「もうシエスタだったら、びっくりしたわ。ありがとう。私も大事な友人だと思ってる」

その言葉に今度はシエスタがきよんとしていたが、次第に嬉しそうな表情を浮かべ

ていった。

そのままシエスタはリウスの話に驚いたり笑ったりと、様々な話をし続けていた。

「今日はお二人の最後の夜ですので、今晚のご飯は腕によりをかけて作っちゃいました。楽しみにしてくださいね」

「そうなの？ それは楽しみね。でもシエスタの料理は美味しいんだもの。こんなに食べたら太っちゃうわ」

草原の向こうに沈んだ夕日の光が残っている中、二人は楽しそうにお喋りをしながら、シエスタの家へと向かっていくのだった。

第五十五話 開戦

ゲルマニア皇帝のアルブレヒト三世と、トリステイン王女アンリエッタの結婚式は、ゲルマニアの首都ヴィンドボナにて行なわれる運びだった。

式の日取りは三日後、ニューイの月の一日に行われる予定である。

そして本日、トリステイン艦隊旗艦の『メルカトル』号は神聖アルビオン政府の客を迎えるため、艦隊を率いてラ・ロシエールの上空に停泊していた。

後甲板では、艦隊司令長官のラ・ラメー伯爵が国賓を迎えるために居住まいを正している。

その隣に立つ、艦長のフェヴィスは焦れたように口髭をいじっていた。

「奴らは遅いではないか。艦長」

苛ついた口調で、ラ・ラメーが呟いた。

「自らの王を手を掛けるような者共です。着飾るのにも時間がかかるのでしょような」

アルビオン嫌いであったフェヴィスは忌々しげに呟く。

その内に、鐘楼に登った見張りの水兵が大声で艦隊の接近を告げた。

二人が上方を見上げると、雲と見まごうばかりの巨艦を先頭に、アルビオン艦隊が静

かに降下してきている。

「ふむ。あれがアルビオンの誇る『ロイヤル・ソヴリン』か……」

「戦場では会いたくないものですね。後方の戦列艦が小型スループにすら見える程です」

フェヴィスの言葉に、ラ・ラメーも後方のアルビオン艦隊を見る。

なるほど、確かに戦列艦といえども『ロイヤル・ソヴリン』の前では大人と子供の差のようなものだ。

かの内戦においてあの艦が最初に裏切ったのであれば、アルビオン王党派が敗北を喫したのにも納得はいく。

降下してきたアルビオン艦隊がトリステイン艦隊に並走する形を取ると、旗流信号をマスト上に掲げた。

「貴艦隊ノ歓迎を謝ス。アルビオン艦隊旗艦『レキシントン』号艦長」

傍らの士官が言葉を読み上げる中、フェヴィスは苦々しげな表情で口を開いた。

「こちらは提督を乗せているのだぞ。艦長名義での発信とはこれまたコケにされたものですね」

「あのような艦を与えられたら、世界を手中に収めたなどと勘違いしてしまうのである。よい。返信だ。『貴艦隊ノ来訪ヲ心ヨリ歓迎ス。トリステイン艦隊司令長官』、以

上

ラ・ラメーの言葉が士官が復唱し、それをマストに張り付いた水兵が復唱する。すると、マストに命令どおりの旗流信号が昇る。

すると、空気を引き裂く轟音と共にアルピオン艦隊から礼砲が放たれる。

大砲に詰められた火薬のみを爆発させているため弾は込められていないが、『レキシントン』号からの射撃には禍々しい程の威圧感がある。

とはいえ、この距離ならば弾が込められていても届くことはない。

「よし、答砲だ」

「何発撃ちますか？ 最上級の貴族への答砲ならば十一発と決められておりますが」

「七発でよい」

子供のような意地を張るラ・ラメーに、艦長のフェヴィスはにやりと笑って命令を下した。

「答砲準備！ 順に七発！ 準備が出来次第、撃ち方はじめ！」

アルピオン艦隊旗艦『レキシントン』号の後甲板で、艦長のボーウッドは左舷に広がるトリステイン艦隊を見つめていた。

貧弱な布陣ではあるが、トリステイン空軍の規模を考えると最大限の布陣だともいえるだろう。

トリステイン空軍とアルビオン空軍を比較するのは流石に酷だと言わざるを得ないのも事実である。

しかし、ボーウツドの隣に佇むサー・ジョンストンは心なしか不安そうな表情を浮かべている。

サー・ジョンストンはアルビオン艦隊司令長官及び、トリステイン侵攻軍の全権を担っている。

貴族議会議員でもある彼はクロムウエルの信任厚いことでも知られているが、実戦の指揮は執ったことがなかった。サー・ジョンストンは政治家であるのだ。

「艦長、この距離で本当に問題ないのかね？　まだ先は長いのだ、もつと離れたまえ」

クロムウエルの腰ぎんちゃくめ、と内心呟きながら、ボーウツドは冷たい声で答えた。

「サー。新型の大砲といえども、射程いっぱい撃つたのでは当たるものも当たりませぬ」

「分かっているのか？　ここでの損害は抑えなければならぬのだ。託宣の通りに向かわなければならぬのだぞ？」

ボーウツドは憎々しげな顔をしながらも頷いた。

「・・・分かつております。ですが、ここは私にお任せください」

信じられない話ではあるが、アルビオン艦隊の目的地はラ・ロシエールではなかった。それを知ったボーウッドは再度クロムウエルに詰め寄った。

空軍の拠点として最適なのはラ・ロシエールだ、後続の安全を確保するためにも狙う場所はそこではない、と。

しかしクロムウエルは、まるで狂信者めいた目をしながらこう告げたのだった。

—艦長、君は家畜をしめたことがないのか？ 一息に、しかし確実に、だ。

それに、これは始祖より賜った託宣なのだよ！ 余の決定に変更はない！

甲板に流れる風の中で、素人が、とボーウッドは小さく呟いた。

以前ロサイスで会った時に比べてクロムウエルの様子は少々おかしかったが、ボーウッドにとってはどうでも良い話だった。

それに突拍子もない計画であるとはいえ、奇策の一つとしては悪くは無い。

今日の前にあるトリステイン艦隊を殲滅するのなら、ラ・ロシエールを狙おうが狙うまいが、早いか遅いかだけの違いである。

「左砲戦準備」

「左砲戦準備！ アイ・サー！」

砲甲板の水兵たちによって大砲に装薬が詰められ、砲弾が込められる。トリスティンの旗艦より答砲が轟いた。

作戦開始。

その瞬間、ボーウツドの目が軍人のそれへと変貌した。

政治上のいきさつも、作戦への不信感も、トリスティン艦隊への憐憫も、その全てが頭から掻き消えていた。

「各艦へ通達。作戦開始」

静かに命令を下すと、傍らの士官が部下たちにその言葉を伝えた。

甲板上の水兵たちが慌ただしく動き回っていく。

そしてアルビオン艦隊の最後尾に位置していた『ホバート』号の乗組員達が、『フライ』の呪文を使用したボートで脱出していくのを、ボーウツドは視界の端で見送っていた。

答砲が次々と発射される中、『メルカトール』艦上のラ・ラメーは驚くべき光景を目の

当たりにした。

アルビオン艦隊最後尾……、旧型の小さな艦から火災が発生したのだ。

「なんだ？ 事故か？」

フェヴィスが呟く。

次の瞬間、火災が発生した艦があつという間に炎に包まれ、大きな爆発を起こした。

残骸となったそのアルビオン艦は、燃え盛る炎と共に、ゆるゆると地面に向かって墜落していく。

「……何事だ？ 火災が火薬庫に回ったのか？」

トリステイン旗艦『メルカトール』号が騒然となる中、『レキシントン』号の艦上より手旗の信号が送られてくる。

それを望遠鏡で見つめる水兵が信号の内容を読み上げていく。

『レキシントン』号艦長ヨリ、トリステイン艦隊旗艦。『ホバート』号ヲ撃沈セシ、旗艦ノ砲撃ノ意図ヲ説明セヨ」

「何……？」

水兵の言葉に、ラ・ラマーは緊張を走らせた。

「何を言っている……！ 返信しろ！ 『本艦ノ射撃ハ答砲ナリ。実弾ニアラズ』、送れ！」

すぐに『レキシントン』号からの返信が届く。

「タダイマノ旗艦ノ砲撃ハ空砲ニアラズ。我ハ、貴艦ノ攻撃ニ対シ応戦セントス」
「何のつもりだ！ ふざけたことを！」

ラ・ラメーは激昂した。しかし、その声は『レキシントン』号の一斉射撃の轟音で掻き消される。

次々と迫りくる砲弾に、フェヴィースとラ・ラメーは息を飲んだ。
着弾。

『メルカトール』号のマストが折れ、甲板に数発の砲弾が直撃する。

「ば、馬鹿な！ この距離だぞ！」

「送れ！ 『砲撃ヲ中止セヨ。我ニ交戦ノ意志ハアラズ！』」

しかし『レキシントン』号は更なる砲撃を続けていく。

艦が震え、そこかしこで悲鳴と怒号が響きわたる。

「繰り返せ！ 『砲撃ヲ中止セヨ！ 我ニ交戦ノ意志ハアラズ！』」

「回避行動いそげ！ 全速にて敵旗艦射程より離脱——」

フェヴィスが命令を下そうとした瞬間、着弾した砲弾の破片がラ・ラメーの身体を飲み込んだ。

フェヴィスの身体もその衝撃に吹き飛び、甲板に叩きつけられる。

霞む視界に目の前で広がる光景が映され、フェヴィスはようやく信じたくもない事実
に気が付いた。

これは、計画された攻撃行動だ。

奴らは……初めから親善訪問のつもりなどなかったのだ！

艦上ではいたるところで火災が発生し、水兵たちが苦痛の呻き声を上げている。
頭を振りながらフェヴィスは立ち上がると、生き残った士官へと叫んだ。

「艦隊司令長官戦死！ これより旗艦艦長が艦隊指揮を執る！ 各部被害状況知らせ！

艦隊全速！ 右砲戦用意ッ!!」

「やっと気付いたようですね」

ゆるゆると動き出したトリステイン艦隊を眺めながら、ボウウツドの傍らでワルドが呟いた。

既に、ジョンストーンは逃げるように艦の中へと引っ込んでしまっている。とはいえ、名ばかりの司令長官ごときにかほどのことが出来るともワルドは思っていなかった。

上陸作戦における実際の総指揮は、ワルドが行なうことになっているのだ。

「そのようだな。しかし、もう勝敗は決した」

行き足のついていないアルビオン艦隊は、主にマストや甲板上の設備を狙って砲撃を繰り返していた。

その上、速度を上げ始めていたトリステイン艦隊の頭を抑えながら一定の距離を保ち続けている。

速度を維持できないトリステイン艦隊には、もう為す術がない。

しかも、アルビオン艦隊には『レキシントン』号がいる。

超長射程での一斉射撃が行なわれる度、狙われた艦からは大きな爆炎が上がっていった。

一刻も持たぬ間に『メルカトール』号の甲板がめくり上がり、爆音と共に空の上から

消えた。

次々と撃沈されていくトリステイン艦隊の中には既に白旗を上げている艦すら見える。

一方のアルビオン艦隊にはさほどの損傷も見られない。正に、完勝だった。

その光景に、『レキシントン』号の艦上からは歓声が上がっていた。

「アルビオン万歳！ 神聖皇帝クロムエル万歳！」という叫びに対して、ポーウッドは冷たい視線を送り続けていた。見ると、いつの間にか艦内から出てきたジョンストーンまでもが万歳の連呼に加わっている。

かつて空軍が王立だった時には、戦闘行動中に『万歳』を唱える輩などいなかった。

「……堕ちたものだな」

その眩きはポーウッド以外の誰にも聞こえてはいなかった。

ワールドがいつものように、何の感慨も無い口調で言う。

「艦長、新たな歴史の幕開けですな」

ポーウッドは炎に包まれて落ちていく『メルカトル』号を見つめながら、静かに呟いた。

「……なに、戦争が始まったただけだ」

「すぐにここを離れるのです！ 急いで！」

ラ・ロシエールの方角から響き渡る轟音の中、コルベールは声を張り上げていた。タルブ村の人々はみな怯えながらも各々の荷物をまとめ始めている。

こうしている間にも先程と同じように、空から何隻もの燃え上がった艦が森の中や山肌へと落ちてきていた。

シエスタの家族や村の人々を手伝いながら、リウスは遠く見える艦隊へと目を向ける。

その先頭には他の艦よりも、一回りも二回りも巨大な艦。

リウスには、その艦の様相に見覚えがあった。

アルビオンとトリステインは不可侵条約を結んでいたはずだ。しかし今の状況を見る限り間違いない。

戦争が、始まったのだ。

コルベールは元々軍人だったらしく、今のタルブ村の状況は非常に危ういものだと危惧していた。

そのコルベールと村長の相談の元、タルブ村の人々はタルブ領主の館を経由し、トリ

スタニアまで避難することを決めている。

アルビオンが侵攻するのであればラ・ロシエールを狙う可能性が高い。その際の拠点となりうるのは、ここ、タルブ村となる可能性が極めて高いのだ。

しかしまだ一刻程度しか経っていないというのに、既に上空から墜落してくる艦の数は無くなりつつある。

つまり、空戦が終わろうとしているということだ。

「ドラゴンが来るぞ!!」

その村人の叫びに、シエスタの家の中にいたりウスは外へと飛び出した。

瞬間、二匹の真っ赤なドラゴンが頭上を通り過ぎていく。

奴らは値踏みするかのようには上空を旋回し、次第に高度を下げ始めていた。

「みんな、急いで!」

シエスタの両親を促して先に子供達と共に森へ向かわせる。

村の人々が悲鳴を上げる中、竜騎士の乗った一匹の火竜が通り過ぎる際に家々へ火のブレスを放っていた。

直径2メートルはあろうかという火のブレスはあっという間に家々を飲み込み、タルブ

村が炎に包まれていく。

ぎりり目の前の光景に齒噛みをしながら、リウスは叫んだ。

「シエスタ！ 早く！」

そしてシエスタが階段を駆け下りてくる音を耳にしながら、リウスは勢いよくバゼラルドを引き抜いていた。

上空にいる一匹の竜騎士がこちらに向かつてきている。

それに気付いたコルベールもこちらに向かつて駆けてきていた。

「リウスくん！ そこを離れなさい！」

「まだシエスタが中に！ ここで迎撃します！ シエスタ、下がって！」

一か八か、ブレスを吐かれる前に撃ち落とすしかない。

ガンダールヴのルーンが光り輝き、リウスは詠唱を紡いでいく。

全力のライトニングボルト。これが効かなければ、二人とも死ぬことになる。

迫りくるドラゴンの口の中がかすかに光る。

その瞬間、ようやく竜騎士が射程に入った。

「ライトニングボルト！」

ドラゴンの翼に強力な稲妻が落ち、がくとドラゴンの体勢が崩れた。突然のことに竜騎士が慌てて方向を変える。

しかし方向を変えたために勢いは落ちながらも、ドラゴンはその口から既に火のブレスを放っていた。

「いかん！」

駆けるコルベールが即座にルーンを詠唱すると、杖の周りに大きい炎の帯が発生した。

その炎の帯はまるで地面を滑るようにリウスの元へと進み……、ブレスが直撃する寸前にリウスの目前で炎の帯が勢いよく吹き上がった。

二つの炎は絡み合うように頭上へと逸れていく。

突然のことにリウスがコルベールへ驚愕の表情を向ける。

「早く行きますぞ！」

「は、はい！ シエスタ！ 行くわよ！」

家の中から飛び出してきたシエスタと共に、リウスは森へ走り始めた。

シエスタの腕には頑丈な木の箱と、何枚かのスクロールが握られている。

「すみません！ 箱の鍵が見つからなくて！」

「いいのよ！ それよりも早く逃げないと・・・っ！」

リウスは目を見開いた。

森の上空、その左右から竜騎士が旋回してきている。

周りにはまだ数人の逃げ遅れた村人たちがいる。

先に走るコルベールも気付いた様子ではない。

森までは間に合わない。

一瞬の逡巡の中、リウスはシエスタの抱えるスクロールを見る。

「シエスタ、止まって！ ドラゴンが来る！ 一番上のスクロールを！」

はっとしたシエスタは、上空から向かってくる二体のドラゴンに目を見開いていた。怯えた様子でリウスの顔を見る。

「大丈夫、あなたなら出来る！ 早く！」

意を決して、シエスタは一番上のスクロールを開いた。

スクロールが光り輝き、シエスタは身体の中を何か得体の知れないものが駆け巡るのを感じていた。

胸の奥が熱くなり、口からは聞いたこともない呪文が飛び出していく。狙うべきは、目の前の火竜。

次の瞬間、頭に魔法の言葉が浮かび上がった。

その言葉は……。

「ソウル——」

スクロールが起動した瞬間、それに合わせるようにリウスも高速で詠唱を開始していった。

この魔法でドラゴンを倒すことはできない。

だが、『怯ませる』ことなら……！

「ソウル——」

二体の竜騎士がこちらへと向かってくる。

そのまま左右のドラゴンがブレスを吐く準備を整えた瞬間、二人は同時に詠唱を完了させた。

「——ストライク!!」

二人の後方から十数個の光の球が浮かび上がった。

シエスタが放った小型のソウルストライクの隙間を埋めるように、リウスの光球も竜騎士たちへと襲い掛かる。

二人の竜騎士は目前に広がる光の壁に息を飲み、即座に回避行動に出た。

しかし追尾する光の球は竜騎士たちの側面へと次々にぶつかり、二体のドラゴンはきりもみをしながら地面へと落下する。

リウスはふらつくシエスタの手を取ると、背後の気配を警戒しながら森の中へと急ぐ。

しかしその途中で、リウスは気が付いた。

今、シエスタの手を取っているということは……。

シエスタを先に走らせ、森の入り口に差し掛かっていたリウスは勢いよく振り向いた。

起き上がった二体のドラゴンが雄叫びを上げる中、タルブ村の広場に、小さな、重厚な木の箱が転がっていた。

咄嗟に駆け出そうとしたリウスの手が誰かに掴まれる。

「何をしているのです！ 早く逃げますぞ！」

「あれを回収しないと！」

二体のドラゴンが宙へと飛び上がり、猛然とこちらに向かってくる。

そのまま翼を翻したかと思うと勢いよく森の入り口へ向けて火のブレスを放った。

リウスはコルベールに引つ張られるように森の奥へと駆け始める。

「もう無理だ！ 諦めなさい！」

背後からは炎がうねりを上げて迫ってきている。

その炎の壁に、隙間などなかった。

「くそっ！」

木々の間からそこら中に火を吐きかけているドラゴンが見える。

このままでは逃げ場がなくなる。

リウスは、シエスタやコルベールと共に森の奥へと走り続けた。

あの箱が破壊されないことを、ただひたすらに祈りながら……。

第五十六話 The Will of Royalty

トリステイン王宮は騒然としていた。

ラ・ロシエール上空に停泊していたトリステイン艦隊が全滅、それとほぼ同時にアルビオン政府からの宣戦布告文が急使によって届いたのである。

ゲルマニアへのアンリエッタ出発の準備でおおわらわだった王宮には更に將軍や大臣たちが集められ、緊急会議が開かれていた。

会議室の上座には呆然としているアンリエッタの姿があった。

本縫いを終えたばかりの、眩いウエディングドレスを身に纏っている。

これから馬車に乗り込み、ゲルマニアへと向かう予定であった。

本来、その上座にはこの場にいる全員を指揮する王の姿があるはずだった。

しかし、今この場でアンリエッタに目を向ける者は誰もいない。

「アルビオンは我が艦隊が先に攻撃したと言い張っておる！　しかしながら、我が方は礼砲を発射しただけと言うのではないか！」

「偶然の事故が、誤解を生んだようですな」

「アルビオンに会議の開催を打診しましょう！　今ならまだ誤解が解けるかもしれません

ぬ！」

各有力貴族たちの意見を聞いていたマザリーニ枢機卿が頷いた。

「よし、アルビオンに特使を派遣する。ことは慎重を要する。この双方の誤解が生んだ遺憾なる交戦が、全面戦争へと発展しない内に……」

そのとき、急報が届いた。

伝書鳩によつてもたらされた書簡を手にした伝令が、息を切らして会議室に飛び込んでくる。

「急報！ 急報です！ アルビオン艦隊がタルブ地方より北東へ移動を開始！ ラ・ロシエールの空域から、トリスタニア方面へと進んでおります!!」

一瞬、会議室の喧騒が静まり返った。

しかし次の瞬間には息巻いた貴族たちの怒声に包まれていた。

「馬鹿なツ!! ここに向かつてきてきているだど!?!」

「間違いではないのか!? ラ・ロシエールを素通りするなど有り得ん!」

「至急ゲルマニアへ軍の派遣を要請しなければ!」

「いかん! 事を荒立てては全面戦争となる! アルビオンへの打診を急げ!」

「枢機卿！ 今すぐに残りの艦隊をかき集めるべきです！ 迎撃せねば、トリステインは終わりですぞ!!」

既に、会議は混乱の極みに達していた。

各々が怒号のような意見を言い合い、全面戦争の準備を進めるべきだという將軍達、外交による解決を求める大臣達・・・、互いの発言が紛糾する中で、もはやトリステイン上層部は収拾すらかめ状況へと成り果てていた。

「報告です。斥候部隊がラ・ロシエールを除く周辺地域の制圧を完了。その際、竜騎士三名が負傷いたしました」

タルブ地方を通過していた『レキシントン』号の艦上にて・・・、ワルドが眉をひそめる中、サー・ジョンストンが泡を食ったように激昂していた。

「何をやっておる！ こんな序盤で負傷など!」

「・・・火竜に問題はないか?」

目を剥いて喚くジョンストンを尻目に、ワルドが伝令へ問いかける。

「はっ。火竜の損傷は軽微かと思われます。目下、念を入れて治療中でございます」

「その三人をここに連れてこい！ 私が直々に処遇を決定してくれる!」

「で、ですが、現在竜騎士達も治療中でございまして……」

顔を真っ赤にして更なる怒りをぶちまけようとしたジョンストンに、ワルドが割って入る。

「お気持ちは分かりますが、そのようなことをなさつては士気に影響いたします。総司令閣下の作戦に影響はございませんでござんを……」

不機嫌さを露にしながらも、ジョンストンはどすどすと足音を立てて立ち去っていく。

「……原因は何だ？」

ワルドの短い言葉に、伝令は口ごもりながら報告を続けた。

「はっ。一名はタルブ領主率いる部隊より奇襲を受けたとのことで、重傷を負っております。」

あとの二名は軽傷なのですが……、彼らが言うには、タルブ村のメイジより攻撃を受けたとのこと。なんでも、光の球のような……、未知の魔法だったと」

顔には出さないまでもワルドはその魔法に心当たりがあった。

あの光球を操る魔法を使える存在がトリステインに二人いるとは考えにくい。驚愕などはなく、分かり切っていたことでもある。

(こんなところにいるとはな。やはり、生きていたか……)

「予備隊より代わりの竜騎士を三名選出する。火竜の治療は念入りに行なっておけ」
「はっ！」

伝令が走り去っていく中、問題なく航行を続けていた『レキシントン』号の艦長、ポークウッドが士官への命令を終えて戻ってくる。

「何か問題があったのか？」

「些細なことです、竜騎士三名が負傷いたしました。予備隊より代わりの竜騎士を選出いたします」

ポークウッドは小さく溜め息を吐いた。

「言わんことではないな。本営はトリスティンのメイジを甘く見過ぎている」

「ええ。司令官の命令であれば従う他ないのでしようが、無意味な損害ですな」

ポークウッドが同意するように頷くと、ワルドは艦内の竜騎士詰所へと向かおうとする。

「君も出るのか？」

「火竜の確認と、斥候として進路の確認をして参ります」

「君は負傷などしないでくれよ。今後の作戦に支障が出る」

ボーウッドの言葉に小さく笑いながらワルドは振り返った。

「お言葉ながら、私に傷を付けられる竜騎士などトリステインには存在いたしません」

その確信を持った発言にボーウッドはにやりと笑った。

「それは頼もしい限りだな、子爵」

昼を過ぎてても、トリステイン王宮の緊急会議は遅々として進んでいなかった。

王宮には次々と報告が飛び込んできている。

「偵察に向かっていた竜騎士隊、帰還せず！」

「タルブ領地、アストン伯戦死！」

「未だアルビオンより問い合わせの返答ありません！」

「アルビオン艦隊はトリステイン方面へと依然進行中のようです！」

それぞれの怒号が響きわたる会議室の中で、アンリエッタは自身の薬指にはまっている『風のルビー』に目を落としていた。

(何故、わたしは……、何も言えずに……)

恐ろしかった。そして、情けなかった。

愛する者と共にいることすら出来ないこの世界が、自らの意志を口にする事すら許されないこの国が……。

迫りくるアルビオン軍に慌てることしか出来ない目の前の人達も、民の血が流されている中で何も出来ない自分自身も……、その何もかもが……。

未だに会議は混乱の渦に飲まれたままだ。

顔を真つ赤にしながら喚き散らす人々。マザリーニ枢機卿でさえ、普段とはまるで異なる顔をしながら大臣や將軍達と怒鳴り合うように意見を交わしている。

(父上……、ウェールズ様……。わたしは、どうすれば……)

「やはり、ゲルマニアに軍の派遣を要求するべきです！」

「それよりも艦隊の再編成が先だ！ 小きかろうが古かろうがこの際何でも良い！」

「馬鹿な！ アルビオン艦隊の戦列艦は十を優に超えるのだぞ!! 全面戦争へと突入した場合どう責任を取るつもりなのだ！ アルビオンへ特使を送るべきだ！」

「そうだ！ 今は事を荒立てるべきではないと言っておろうが！」

怒号に包まれている会議室へ、また新たな急使たちが飛び込んでくる。

「ラ・ロシエール近辺の村々から火の手が上がっているとの報告あり！ 各領主から次々に救援要請が届いております！」

「城下町に避難民が殺到しております！ 衛兵の補充の要請が……」

「愚か者が！ そんなことは後回しで良い！」

大臣の一人が伝令に怒鳴り散らし、その言葉にアンリエッタは顔を上げた。

周囲の喧騒が遠のき、アンリエッタの頭からは悲嘆の感情も恐怖の感情も掻き消えていた。

「……そんなこと……ですって？」

しかしそのアンリエッタの眩きに目を向ける者は誰もいない。

アンリエッタは、自身の頭の芯が次第に冷えていくのを感じていた。同時に、胸に沸き起こる、熱く、確信に似た想いも。

アンリエッタの脳裏に、今なお愛し続けている王子の姿が浮かび上がる。

あの人は、ウエールズ様は、国家に殉じ、勇敢に戦い……、そして、死んだのだ。私がどんなに想い続け、どんなに会いたいと願ひ続けたとしても……。もう一度と、会うことはできないのだ。

薄いブルーの瞳と金の髪を湛えたあの人の横顔を、アンリエッタは静かに思い浮かべていた。

あの人はとても優しく、とても強く、そしてとてもずるい人だった。

ウエールズ様と初めて出会ってからレコン・キスタが現れるまで、アルビオン王家を揺るがす事件はアンリエッタの耳にも届いていた。

国王ジェームズ一世の王弟であったモード大公の処刑。

その処刑から始まった、荒れる王家と貴族一派との諍い。

そして、ウエールズ様の父君であるジェームズ一世が衰弱の一途を辿り始め、その全ての重責は年若い皇太子へと向けられているということ……。

そう、あの人はとてもずるい人だったのだ。

あの優しい瞳の奥にどれだけの苦悩があるうとも、彼は決して私にそれを見せることがなかったのだから。

私はあの人とずっと一緒にいたかった。

あの人の苦難を分かち合い、共に寄り添ってずっと生きていきたくかった。でも、もうそれが叶うことなんてない。

私の願いが叶わないのであれば。せめてあの人の強さの欠片を、私だけでも……。

—貴方の発言や行動は、間違いなく強力なものです。

かつてリウスに言われた言葉がアンリエッタの脳裏によぎり、アンリエッタの胸の内でもう一度確信に似た想いが湧き上がる。

おぼろげだったそれは確かに形を持って、アンリエッタの心をただ強く揺さぶっていた。

今まで、アンリエッタは『王族』というものを呪い以外の何物とも思っていなかった。しかし今のアンリエッタには、その裏に潜む力をはつきりと意識することができていた。

王族であること。

それは王家に定められた呪いでもあり、同時に祝福でもあったのだ。

臣下を導くことができる立場も、民を守り、苦境に立ち向かえる力も、怒りや憎しみ

を一身に受けなければならぬ責務も……。

王族として生を受けたその時から、それらは間違ひなくこの身に宿っているのだから。

そうであれば……、私もウエールズ様のように生きてみよう。

そう生きることが、たとえこの身を裂かれる程に恐ろしくても、私を本当に守つてくれる人はもういない。

それならば、あのウエールズ様のように、大切なものを守るためにもこの力を飼ひ慣らすのだ。

この胸の内に住むあの人を想えば、私は何が起きようとも乗り越えられるはずだ。

かすかに俯いていたアンリエッタの瞳は、誰に知られることもなく、静かな決意を湛えていた。

(……いつまでも、守ってもらう子供のままではいられませんわね。リウスさん)

アンリエッタは顔を上げた。

目の前に広がるのは叫ぶように罵り合う貴族たち。

その姿はまるで道標を失い、周囲へ怯えに似た戸惑う感情をぶつけているだけに見える。

アンリエッタは彼らを見下すでもなく真つ直ぐに見つめ続け、そして、ゆつくりと立ち上がった。

「あなたがたは、恥ずかしくないのですか？」

決して大きい声ではなかったが、その透き通った言葉に彼らは罵り合いを止めた。

それぞれの目がアンリエッタへと集まっていく。

「姫殿下？」

「国土が敵に侵されているのですよ？ 特使がなんだ、責任がなんだ、と……。あなたがやるべきことは騒ぎ立てることだけなのですか？」

「しかし殿下……。この件は誤解から発生した小競り合いなのですぞ？ 我々は不可侵条約を結んでいたのですから……」

「条約は紙よりも容易く破られたようですね。元より条約を守る気がなかったことは明白です。もうあなたがたも分かっているはず」

「しかしですな……」

「……あなたは、先程の報告を聞いていなかったのですか？」
声を上げていた大臣を薄いブルーの瞳が射抜く。

「あなた達は……！ それでも自分は貴族だと胸を張ることが出来るのですか!!!」

アンリエッタはテーブルを叩き、大声で叫んだ。

「今こうしている間にも民の血が流されているのです！ 我らは何のために王族を、貴族を名乗っているのですか！

!!」
このような危急の時に、彼らを守るために我々は存在しているのではないのですか

將軍たちも大臣たちも、誰もが何も言えずに息を飲んでいた。

「この事態に対処を講じられるのは我々だけなのです！ あなた達は分かっているのですか?! 今ここにいる我々だけが、トリスティン国民の命運を握っているのです！

いくら強大であろうが、我が民たちを害する者は何者をも許しません!!」

目の前にいる年端もいかない姫の姿が、かつての偉大な先王と重なって見える。彼らは互いの顔色を窺うこともなく次々に心を決めていた。会議室を覆う熱気が貴族たちの表情を変えていく。

我が王が命ずるのであれば・・・！ 我々がすべきことはただ一つ!!!

「我々は!! 戦います!!!」

雄叫びとも怒号とも言えぬ歓声が会議室を包み込んだ。それぞれの貴族が大声で士官に向けて指示を行ない始める。

「将軍！ 各連隊を集め、アルビオン艦隊への打開策を模索しなさい！ 大臣！ ゲルマニアへ援軍の要請を！」

「ははっ！」

「アルビオン艦隊の速度からトリスタニア到達時刻をもう一度逆算せよ！ 迎撃地点を模索する！」

「ゲルマニアに親交の深い貴族を集めろ！ なんと少しでもゲルマニアから援軍を引き出すぞ！ 必ず引き出さなければならん！」

「各領主へ正確な状況確認を行なえ！ 偵察および支援部隊を向かわせるぞ！ 風竜主体の竜騎士隊を複数編成しろ！ 走れ！」

「艦隊配備を急げ！ どんな艦でも構わん！ 全ての艦の戦闘準備を急がせろ！ トリスタニア周辺の連隊を早急にトリスタニアへと集めるのだ!!」

あつという間に少数となった反戦派の大臣が声を上げる。

「で、殿下……！ 事を荒立てては！」

「黙りなさい！ もう杖は振られたのです！ ただ喚き合うだけの会議を行ないたいのなら出ていきなさい！」

衛兵！ 避難民たちの受け入れを！ 王宮の警備は最低限でも構いません！」

止まっていた血液が巡り始めたかのように、各々の貴族達が強い決意と共に動き始めていく。

その熱意が伝播するがごとく、会議室に出入りする士官や衛兵達からも悲壮な表情ひとつ見られなくなっていた。

マザリーニはアンリエッタと共に貴族達への指示を飛ばしながら、同時に先程のアンリエッタの姿を思い浮かべていた。

いずれ、アルビオンとの戦になることは覚悟していた。

しかし未だに国内の軍備は整ってなどいない。

その上、ラ・ロシエールに展開していた艦隊が壊滅したことは致命的だった。

決して命を惜しんだ訳ではない。

こうなった以上、外交による停戦を行なわなければトリスティンに勝ち目などないのだから……。

(しかし……。机上の空論だと言われた気さえますな……)

マザリーニは数人の大臣や将軍を集め、決戦へ向けて更なる有力貴族たちを集めるよう指示を飛ばしていく。

彼らと二、三の意見を交わしながらも、マザリーニは自身の胸に沸き立つ熱い感覚を静かに味わっていた。

いつか忘れてしまった、あの先王に仕えていた時の感覚を……。

マザリーニの心は常に、このトリステインと、忠誠を誓った先王の元にあった。

だからこそ、陛下の忘れ形見であるアンリエッタ姫殿下が確実に生き残れる道を模索していたのだ。

急速に増長し続けるレコン・キスタを止めるには、もう二つの道しか残されていないかった。

一つは、ガリア王国を動かすこと。

そしてもう一つは、王の存在しないトリステインが帝政ゲルマニアの傘下に下ること。

しかしガリア王国がレコン・キスタの支援を行なっている可能性がある以上、我々は後者の選択肢を取るしかなかった。

名ばかりの同盟という体の元、いずれ我々やトリステインの民達が戦の犠牲になるにしても……、アンリエッタ姫殿下を、ゲルマニアの元に。

我らにとって守らなければならないものは数多くあるが、今この時こそ、私の最も守るべきものを最優先で選択しなければならない。

そのためにはそうするしかない、マザリーニは考えていたのだ。

しかし、それでも、殿下が民を守るために戦えと言うのであれば……。
マザリーニが取るべき選択は、一つしかなかった。

「枢機卿……。アルビオンへの特使の件ですが……」

先程いた反戦派の大臣である。

その薄ら笑いを浮かべた顔を、マザリーニは強く、ただ強く睨み付けていた。

見たこともないマザリーニの視線を受け、その大臣は顔を真っ青にしながら何も言わずに立ち去っていく。

そしてその場に残った貴族たちも、マザリーニもアンリエッタも、アルビオン艦隊迎撃のために全力で打開策を模索していくのだった。

日も暮れ始めた頃、コルベールとリウスは一路、トリステイン魔法学院へと向かって
いた。

「ここから迂回しますぞ！ 着いてきなさい！」

「はー。」

遠く見える上空にはアルビオンの船団がかすかに見えている。その周辺の大地からは、絶えず黒煙が上がり続けていた。

奴らはラ・ロシエールを通り過ぎて北東へと進み続けている。

トリスティン魔法学院もその方角であるために、二人はアルビオンの竜騎士に見つからぬよう慎重かつ迅速に歩を進めていた。

十数刻も前、二人はタルブ村の村人たちと森の中を逃げている際にタルブ伯の一団と遭遇していた。

どうやらアルビオン艦隊は王都トリスタリアへと向かっているらしい。

そのためタルブ地方周辺の村人達は一時的にでもラ・ロシエールへ避難を行なっているとのことだった。

タルブ伯の本隊は斥候である竜騎士への強襲を行なうとのことで、二人と村人たちはタルブ伯の館には向かわずにラ・ロシエールへと向かっていた。

タルブ村の村人たちをラ・ロシエールに送り届けた後、そのまま二人はラ・ロシエールで馬を買い付けて魔法学院へと戻ることを決めたのである。

荒れた道を進んでいくと、トリスタリア方面から逃げてきた避難民たちとすれ違っていく。

同時に、馬に乗った軍人たちがトリスタニアへ向けて走っていく姿も見て取れた。
「コルベールさん」

進路方向を向きながら、リウスは横を走るコルベールへ呼びかける。
コルベールは正面を向いたまま険しい表情を浮かべていた。

「……この戦争に、勝ち目はあるのですか」

コルベールはしばらく何も言わずに、荒れ果てた道の向こうを睨み付けている。

「トリステイン単独では、勝ち目はありません」

リウスは何も言わず、コルベールと同様に正面を見続けていた。

「ラ・ロシエールの上空から落ちてきた艦隊が多すぎます。今のトリステイン空軍に、アルビオン艦隊は止められないでしょう。あとはゲルマニアの援軍が来るのを待つしかありません」

まるで他人事のような言葉に、リウスはコルベールへと視線を向ける。

しかし先程の落ち着いた言葉とは裏腹に、コルベールの目は燃えるような怒りを湛えているように見えた。

「我々に出来ることは学院に戻ることでだけです。……お喋りはここまで。飛ばしますぞ」

「・・・分かりました」

山々の向こうへ日が落ちていく中、二人の馬が荒れた道を駆けていく。

その中で、コルベールははるか遠くに見えるアルビオン艦隊を横目でひたすらに睨みつけていた。

第五十七話 決戦の日 前日

翌朝、トリステイン魔法学院のオールド・オスマンは結婚式へ出席するための準備に未だ追われていた。

日程の関係上、オスマンは一週間近くも学院を留守にしなければならない。

そのため前もって片付けておかなければならない用件が多いのである。

「ふうむ、帰ってきたら本格的に秘書の募集をかけねばならんな……。残りは帰ってきてからにするとしよう」

ぶつくさと不満げな独り言を呟きながら荷造りに取りかかろうとした時、猛烈な勢いで扉が叩かれる。

「誰じゃね?」

この忙しい時に、と言う暇も無く、一人の男が飛び込んでくる。

その服装から王宮の使者であることを理解するや否や、男は大声で口上を述べ始めた。

「王宮からです! 申し上げます! アルビオンがトリステインに宣戦布告! 姫殿下

の式は無期限延期となりました！」

アルビオン艦隊はラ・ロシエールの空域を抜け、トリスタニアへと向かって進軍中です！ 従つて学院に置かれましては、安全のため生徒及び職員の禁足令を願います！」

使者の口上に、オスマンは一瞬言葉を失った。

「宣戦布告とな？ 戦争かね？」

「いかにも！ アンリエッタ姫殿下率いるトリステイン軍は、王都トリスタニアとの連携を図るためトリスタニア郊外にて展開中です！」

オスマンは険しい顔で使者に告げた。

「……トリスタニアまで来るか。敵軍の規模と我が軍について、詳細を教えてほしい」「はっ！ 巨艦『レキシントン』号を筆頭に、戦列艦が十四隻。それに加え巡洋艦も数隻が確認されており、乗員兵力は三千から四千と予想されます。こちらの兵力は現段階で二千、開戦までには二千五百程となることでしょう。」

しかしながらラ・ロシエールでの空戦によりトリステイン空軍の主力は壊滅。トリスタニアからの援護があるとはいえ、制空権を奪われたまままでの戦いとなるかと存じます」

「……致命的じゃな。ゲルマニアからの援軍は？」

「同盟に基づき、ゲルマニアへ軍の派遣を要請しましたが、先陣が到着するのは一週間後かと……」

「そうか。予想よりも大分早いが……間に合うかは微妙じやな。しかし、微かな望みは繋がっている訳か……」

あいわかった。学院にて対応を検討した後に、儂もトリスタリアへ向かうとしよう。

「ご苦労じやった」

「はっ！ それでは！」

悲痛な表情を浮かべているオスマンを背にして、伝令の男が部屋を出た時……、駆けるように立ち去っていく桃色髪の少女が目にとまった。

しかし彼はかすかに目を細めただけで、そのまま王宮へ向けて立ち去っていった。

日が頭上から落ち始めている頃、リウスとコルベールはようやく学院へと到着していた。た。

アルピオン軍の斥候に見つからないよう回り道を繰り返していたために、予想よりも到着が遅くなってしまったのである。

学院の空に数多くの伝書鳩が飛び交っている中、広場に見たことのあるドラゴンのシルエットがあった。そのシルフィードの近くで準備するキュルケとタバサが目止まる。

「キュルケと別れたリウスは馬に乗ったまま二人へと近付いていく。

蹄の音にキュルケが振り向き、ぱつと笑顔を浮かべた。

「良かった！ 無事だったのね！」

「そつちこそ。しかし凄いことになっちゃったわね」

再会も程々に、リウスは次々と飛来する伝書鳩たちへ視線を向ける。

そのリウスの表情にキュルケも小さく口を開いた。

「こんなに早く、アルビオンとの戦争が始まるなんてね。タバサも私も帰還命令が出るのよ。アルビオン艦隊がトリスタニアにまで迫ってるって……」

沈痛な表情を浮かべながらキュルケが呟いた。

「トリステインの隣国とはいえ、ゲルマニアが軍備を整えてから援軍を向けるまでには時間がかかる。」

事実として援軍が間に合うとは限らないのだろう、トリウスは内心で考えるも、それを口には出さなかった。

キュルケの方が、それについてはよく分かっているはずだからだ。

「・・・ごめんなさい。私だけ逃げるみたいに・・・」

まるで吐露するかのようによくケが声を絞り出す。

たとえば気休めでも、そう考えてリウスは口を開いた。

「大丈夫よ、何とかなるわ。キュルケも早く帰った方がいい。きっと家族も心配してる。・・・タバサも、気を付けて」

「・・・分かつてる。あなたも死なないで」

いつものようにタバサは短い言葉を告げる。

しかし普段あまり変化の無いタバサの顔に心配そうな表情を見つけて、リウスは小さく二人へ笑いかけた。

そして落ち着いた声で本心からの言葉を口にする。

「当たり前よ、こんなことで死んでたまるもんですか。また会いましょう」

その明るいうりウスの口調に、キュルケは目端に浮かんだ涙を拭いながらこくりと頷いた。

二人を乗せたシルフィードがきゅいきゅいと声を出し、ぼさりと浮かび上がる。

そのまま速度を上げて空の向こうに消えていくのを見送りながら、リウスも厩舎へと馬を駆らせていった。

厩舎番の青年がリウスを見るや目を丸くして声を上げる。

「リ、リウスさん!? ああ、良かった! ご無事で何よりです!」

その青年は何やらおろおろとした様子でリウスの元へ駆けてくると、沈痛な表情のまま勢いよく頭を下げた。

「も、申し訳ございませぬ! 止めたんですけど全然聞かなくて・・・!」

その劍幕に嫌な予感を覚えながら、馬を下りたりリウスは謝り続ける目の前の青年へ問いかける。

「ちよつと、落ち着いて。何があつたの?」

その青年はリウスの顔を見ることもなく、ただ頭を下げたまま叫ぶように口を開いた。

「申し訳ございませぬ! ヴァリエール様が・・・!」

そのままリウスはその青年から、ルイズガラ・ロシエールに向かってしまったことを告げられるのだった。

トリスタニア郊外に展開した軍団へと合流するため、アンリエッタとマザリーニの

乗った馬車がトリスタニア城を出発していた。

馬車の周りはマンティコア隊およびグリフォン隊の精鋭たちが警護している。

彼らを指揮しているのはマンティコア隊隊長のド・ゼツサル卿だった。

敵めしい髭を湛えた顔つきと、並外れた巨軀に重厚な鎧。

彼はトリステインでも有数の実力者として名高い人物である。

平時には王宮およびトリスタニア全体の警備隊長として任務に当たる程、慎重さと大胆さの柔剛併せ持った豪傑として知られていた。

まさに蟻の隙間もないほどの警備体制の中、マザリーニは最後の確認としてアンリエッタへと語りかけていた。

「分かっておりますな？ 殿下は危険の少ない最後尾にて軍団を見守ることで、殿下が飛び出しても戦局が変わることはありませんぞ」

「分かっておりますわ。それは貴方も同じですよ、マザリーニ」

アンリエッタは薄く笑いながらマザリーニへ言葉を返した。

その顔には緊張の色と王族の高貴さが入り混じっている。

しかしマザリーニはこの苦境に不適當だと思いつつも、内心高揚した心持ちでいた。

この姫には、まさに王族の威厳というものが備わりつつある。

「枢機卿。この戦に勝ち目はありますか？」

その澄んだ声に、マザリーニは一瞬逡巡する。

「……そうですね。五分五分といったところでしょう」

アンリエッタは小さく笑うと、マザリーニの顔を正面から見た。

その空色の瞳は決して鋭いものではなかったが、マザリーニは一瞬アンリエッタの視線が背中へと突き抜けたような感覚を覚えていた。

「ここには私と貴方しかいないのです。正直に言ってください」

頭を下げたマザリーニは、静かに、もう一度現状を分析する。

「……非常に厳しいと言わざるを得ません。そうですね……。勝利の可能性は、二割……いや、一割ほどかと……」

「そうですね。充分です」

こともなげに放たれた言葉に、思わずマザリーニはアンリエッタの顔を見る。

「父上やお爺様の時代は、更に厳しい戦争が多かったのでしょうか？ それならば『この程度の相手』、我々の力で何とかしなければ面目が立ちませんわ」

その口調には傲慢の色も虚勢の色も含まれてはいなかった。

ただ目の前の苦境を静かに見据え、決して折れるまいという王族としての決意の

色・・・。

マザリーニは絶句したように固まっていたが、次第に大声で笑い始めた。

「そうですね！ 先王も同じことを仰るでしょう、『この程度の相手』だと!!」

マザリーニは心底嬉しそうに笑い続けている。

マザリーニのこういつた姿を始めて見たアンリエッタだったが、その姿に驚くこともなく、にこやかに、そして力強くマザリーニへ向けて口を開いた。

「この戦、必ず勝ちましょう。我がトリステインの民を守るのです」

「もちろんです！ 我が命は殿下と共にありますぞ！」

マザリーニは嬉しかった。そして誇らしかった。

あの殿下がこの危機の中、トリステインのために立ち上がる。

先王と重なる程に勇ましく、民のために戦おうとする殿下の姿が見られるとは。これほどに喜ばしい瞬間があるか。

そのマザリーニの様子にアンリエッタはにこりと笑いかける。

「さあ、笑うのはそこまでにして・・・。今後の計画を教えてください。枢機卿」

「おっと！ これは失礼いたしましたな！」

紅潮した顔のまま軽く咳払いをしてから、マザリーニは説明を始めた。

「アルビオン艦隊は現在トリスタニア郊外に……あの『レキシントン』号が見えますな？ あの場所に展開を開始しております」

トリスタニア城門を通過した馬車の窓からアンリエッタが外へ目を向ける。

マザリーニの視線の先には、巨大な『レキシントン』号を筆頭にした艦隊がはるか遠目にぼんやりと浮かんでいた。

「歩兵の展開中は無防備ですが、制空権は奴らの艦隊および竜騎士隊に握られております。奇襲のタイミングを図ってはおりますが、無駄に兵力を削がれては勝てるものも勝てませぬ。

展開が終わるや突撃を仕掛けるような相手でもございませぬゆえ、戦闘開始は明日の夜明け頃かと……」

そのままマザリーニは集結しているトリステイン軍の状態やトリスタニアからの支援について、更には周辺国の反応などを語り始める。

アンリエッタがそうした現在の状況を詳しく聞いていると、外が随分と騒がしいことに気が付いた。

アンリエッタとマザリーニが目を合わせ、馬車の窓を開けたマザリーニが警護するド・ゼツサールへと呼びかける。

「ゼツサール卿。何事だ？」

敵かに領いたゼツサールが大地を響かせるような低い声で口を開いた。

「猊下。なにやら一人の貴族がラ・ロシエールへ向かおうとしているようです。魔法学院の者とのことです。今すぐ護衛と共に学院へ帰還させます」

アンリエッタは数人の兵士が押しとどめている人物を見る。

そこには、桃色髪をたなびかせた貴族の姿があった。

「あれは、ルイズ？」

マザリーニもその姿を目に止めると、指示を仰ぐようにアンリエッタへ視線を向ける。

「ゼツサール卿、彼女をここに呼んでください。何があったのか聞いてみましょう」

馬車を一旦止めて、アンリエッタはルイズの言葉をじっと聞いていた。

当初は馬を下りて低頭しようとしたルイズだったが、アンリエッタとマザリーニの計らいにより馬車と並ぶ形で説明を行なっている。

「つまり、リウスさんを探すためにラ・ロシエールまで向かうということですね？」

「……姫殿下、申し訳ございません。でも私は行かなくちゃいけないんです」

ルイズはようやく落ち着いた様子で目線を落とした。

無茶だなんてことはルイズにも分かっていた。でも、戦争の話聞いたルイズはいてもたつてもいらなかったのだ。

アンリエッタは消沈するルイズの表情を目に止めながら、少しだけ考え込んだ。アンリエッタ自身もルイズと同じ気持ちだった。

あのリウスさんを救えるのであれば、今すぐにも竜騎士隊を向かわせたいところなのだ。

しかし……。

「……ラ・ロシエールに向かうことは許しません。理由はあなたも分かっているでしょう?」

「で、でも……!」

ルイズは抗議の声を上げかけたが、そのまま俯いて口を閉ざした。

そのルイズの葛藤の中、アンリエッタはもう一度口を開く。

「ルイズ、あなたは誰よりも理解しているはず。リウスさんは……、ルイズの無茶を決して喜ばないわ」

ルイズは俯いたままアンリエッタの言葉に答える。

「……分かっています。分かっていますけど……だからって……」

「聞いて、ルイズ。きつとりウスさんもあなたが心配でたまらないはず。私が二人を心配するのは、同じように。」

「・・・わざわざあなたが危険な所に行つて、どうするといふのです」

そのアンリエッタの言葉を飲み込みながら、ルイズは自分の感情がぐちゃぐちゃになつていくのを感じていた。

気を抜けば泣きそうになるのをそれでも我慢していたルイズだったが、自分を心配そうに見つめるアンリエッタの顔を見て、更に言葉を失つていった。

アンリエッタ姫殿下の表情には見覚えがあつた。

ウエールズ様やニューカッスル城の人達のように、そしてリウスのように・・・。

まるで心配をさせまいとするかのような、決意に満ちた穏やかな表情を浮かべている。

「・・・お願い、ルイズは今すぐ学院に戻つて。ここだつて、トリスタニアだつて安全ではないのよ」

俯きながらルイズはぼろぼろと涙をこぼし、自分の力の無さを呪っていた。

もし、あの時ワルドが言っていたように、私が特別なメイジであるなら・・・。

今この時、苦境に立とうとしている大事な友人を助けることだつて、もしかしたら無事でないかもしれないリウスを助けに行くことだつて、出来るかもしれないのに・・・。

「ルイズ……」

そんなルイズを慰めようとしているアンリエッタの耳元で、マザリーニが小さく囁いた。

アンリエッタは驚愕の表情を浮かべるも、今日の前で消沈している親友にそれを告げまいと決意していた。

「ルイズ、アルビオン軍が斥候を放ちました。安全が確保されるまでトリスタニアで休んでからお戻りなさいな。大丈夫、すぐにこの戦いは終わりますわ」

そしてマザリーニが護衛へと目配せするとルイズは護衛の兵士達に引き渡されたいく。

立ち去る前に、ルイズは落ち込んだ顔のままアンリエッタへ振り向いた。

「姫さま……、どうかご無事で」

「ええ。ありがとう、ルイズ」

そうしてルイズと別れたアンリエッタは窓を静かに閉めると、悲痛な表情を浮かべな

がらマザリーニへと問いかけた。

「枢機卿……。何か、手はありますか？」

「……申し訳ございません、まさかこれ程までに卑劣な手段を取ってくるとは。先ほど伝令を放ちましたが、伝令の到着はほぼ同時になると思われます。竜騎士隊を向かわせるにも複数の艦が相手では危険すぎまする。

それに……」

言葉を濁らせたマザリーニをアンリエッタが見る。

「それに、何ですか？ 言ってください」

「はっ……。これは憶測にすぎませぬが、彼奴らの行動には罫の気配がいたしまする。我らが数隻の巡洋艦を救援に向かわせれば、奴等は数隻の戦列艦を送り込むでしょう。空戦において、奴等は圧倒的な優位に立っておりますからな」

俯いたアンリエッタに向けて、マザリーニは苦渋の決断を下さなければならなかった。

「……明日の戦が終わる次第、即座に艦隊と竜騎士隊を向かわせましょう。殿下、それまでどうかご辛抱ください」

アンリエッタは、その決断に賛同せざるを得なかつた。

しかしその決断は余りにも重く、決意したアンリエッタの覚悟を試すかのように、た

だアンリエッタの胸の内を強く締め上げていく。

「……分かっております。それでも、何か……」

「幸い、禁足令により学院には多くのメイジが残っておりますので……。彼らが何とか耐えてくれるのを期待するしかありません……」

護衛の一団と共に、二人を乗せた馬車は展開を進めるトリスティン軍へ向けて進んでいく。

その軍団の更先にあるアルビオン艦隊からは、三隻の巡洋艦が、忽然と姿を消していたのだった。

第五十八話 迫り来る脅威

トリステイン魔法学院、その厩舎の前ではちよつとした騒ぎになっていた。

馬に乗りこもうとするリウスを、厩舎番の青年や数人の衛兵が何とか押しとどめようとしている。

「このっ！ いい加減に離しなさい！」

「ダメです！ 絶対に離しません！ どれだけ距離があると思ってるんですか！ 会える訳ないでしょう！」

「お前はバカか嬢ちゃん！ いまさら間に合う訳ねえ！ トリスタニアの戦がいつ始まるのかも分からねえんだぞ!!」

ルイズがラ・ロシエールに向かったと聞いて、即座にリウスはルイズの後を追おうとしていた。

それに気付いた厩舎の青年がリウスを引き止め、すつたもんだの言い合いをしている内に近くの衛兵達までもが騒ぎに駆けつけてきたのである。

キリがないと馬に乗りこもうとするリウスを抑えつけるように、リウスの周りへ衛兵達が群がっていたのだった。

「落ち着いて！ リウスさんらしくもない！」

「そうだぞ相棒！ 落ち着けて！」

「いいから離しなさいってば！ それに落ち着いてなんかいられる訳・・・！」

「何をやっている!!!」

その叫ぶような怒声に、息を切らしたその場の全員が振り向いた。

そこには教師のマントを羽織りながら、厳しい目でこちらへ向かってくるミスタ・ギトーの姿があつた。

その後ろからシュヴルーズもばたばたと近付いてくる。

「禁足令が出ているのだ！ ミス・ヴァリエールの使い魔、お前はどこに行こうとしている！」

抱きつくようにリウスを押しさえこんでいた衛兵達はその怒気に押されて、ばらばらとリウスから離れていく。

「ルイズを迎えに行きます」

一言だけリウスが告げると、また馬の手綱を手に取りながら鎧へ片足を乗せる。

しかし、ぴたりとそのまま動きを止めた。

ギトーは静かに、杖をリウスへと向けていた。

「まだ、許可など出してはいない」

周りの衛兵達が息を飲む中、地面に下りたりウスは静かに振り向いた。

「ミス・ヴァリエールを探しに、か。ラ・ロシエールへ向かうのだな？」

こくりと頷いたリウスに、ギトーは何の感情も伴っていない、冷たい笑みを浮かべていた。

「主人想いなのは良いことだが……、むぎむぎヴァリエール家の使い魔を見殺しにすることはできません。私は学院長からこの学院の全権を任されている。」

「ここを出るんじゃない、従いたまえ」

それでもリウスが口を開こうとしたが、ギトーの後ろからおおずとおおずとシユヴルーズも声を上げた。

「ミス・リウス。今回ばかりは、私もミスタ・ギトーに賛成ですわ。行くべきではありません。見つかる保証もないのですし……」

見つかる保証がないこと。それをリウスも分かっていたが……、ルイズが危険である可能性があるのであれば、いてもたってもいられないのだからまた事実だった。

「……分かっていきます。でも、ここに留まるよりかは……」

「君は分かっている。仮にミス・ヴァリエールを見つけれられるのであれば、それで良い。しかし見つけられないのであれば、君とミス・ヴァリエール、二人を探すのは誰だと思うのかね？」

「そもそも、その疲れ切った身体で君に如何ほどのことが出来ると言うのだ？」

リウスはぐつと押し黙る。

静かに杖を収めながら、ギトーは続けた。

「君には使い魔のルーンがある。それを使って確実に探せるのであれば許可しよう。しかし、そうでないのならば許可はできない。」

君がここに残ることで……、ミス・ヴァリエールの生死を確認することだっただけで出来るのだから」

その冷淡ともいえる言葉にシユヴルーズが焦ってギトーを見るも、一方のリウスは歯噛みするしかなかった。

ギトーの言い分は、まさしく正論なのだ。

「……そんな確認が必要となる前に、私は行く必要があると言っているのです！」

「……これ以上の問答は無用だ。君は学院を出ないように。行きますぞ、ミセス・シユ

ヴルーズ」

マントを翻しながらギトーは学院へと歩を進める。

そしてギトーはぴたりと立ち止まるや、ふと思いついたように口を開いた。

「学院に残るのであれば、まずはその身体を休めることだ。……そうだな、ミスタ・コルベールも休ませる必要があるな」

そう独り言に似た言葉を残して、ギトーは去っていった。

シユヴルーズはちらちらと心配そうな顔でリウスを見ていたが、ギトーに続いて学院へと向かっていく。

残されたりウスはギトーの正論を飲み込もうとしている自分自身への怒りに震えていたが、小さく深呼吸すると周りで見守る衛兵達へ顔を向けた。

「……皆さん、大変な時にすみませんでした。とりあえず休んでから考えます」
周りにほっとしたような弛緩した空気が流れる。

「そうですよ。きつと、ミス・ヴァリエールも大丈夫です」

厩舎番の青年が声を上げるも、それを中年の衛兵が手で制した。

「きつと、じゃねえ。嬢ちゃん、絶対に大丈夫だ。あの位置にいるアルピオン軍を避けながらラ・ロシエールに向かう場合は、トリスタニアの近くを通らなくちゃならねえ。間

違いなくトリストニアの軍隊に止められてるはずだ。

「……まずは休め。疲れてんだろ？」

消沈した表情のまま、リウスはこくりと頷いた。

「リウスさん。先程ミスタ・コルベールにも伝えましたが、食堂で何か食べていってください。何も食べてないんでしょう？」

「……ありがと。そうね、そうするわ」

「あんま落ち込むなってよ、相棒。大丈夫だって」

背に抱えたデルフリンガーの声に小さく答えつつ、リウスは食堂へ向けて立ち去っていった。

その背を見つめながら、衛兵の青年がぼんやりとした声を上げる。

「……あの剣、喋るんですね」

軽く舌打ちをした中年の衛兵が青年の肩を叩いた。

「そんなこと言ってる場合か。ほら、急ぐぞ」

その声を皮切りに、その場にいた平民達は各々の仕事へと戻っていくのだった。

学院へと向かうアルビオン巡洋艦の貴賓室にて・・・、一人の男が鼻歌を歌いながら金属で造られた杖を磨いていた。

先端がメイスのように塊になっている、戦闘時の機能性のみを追求した武骨な杖である。

彼の羽織つている革のコートは激しく汚れ、部屋の外をうろつき回る船員達とはかけ離れた雰囲気その身から漂わせている。

同じく貴賓室にいる二人の男も薄汚れた革の装備を身に付けているが、それが当たり前だと言わんばかりに気にした様子はない。

「隊長、随分と機嫌が良いようで」

隊長と呼ばれた男はにやにやと笑いながら、すっかり汚れきった布きれを床に放り投げた。

杖を磨いてその汚れは大分落ちたようだが、まだ炭のような汚れや乾ききった血のような汚れはそこここにこびり付いている。

「分かるか？ お前ら」

にんまりと笑みを浮かべた隊長は、その顔を部下の男達へ向けた。

その右の顔面は酷く焼けただれ、真っ黒になった火傷の跡に覆われている。

そして、残る左目は白く濁った色のみを映し出していた。

「分かりますよ、そりやあ」

しかし部下の男達は見慣れたものとはかりに隊長へ答えた。

「戦だ、分かるか？ 戦、戦だ。トロールやオーク共とも違う、あの極上の香りを嗅げるとなりやあな。そりやあ気分も良くなるつてもんだろうが」

違う、と二人の男は笑い返した。しかしその表情は苦笑いに近い。

隊長の『趣味』は嫌と言うほど知ってはいるが、だからといっていつまで経つても慣れないものもあるのだ。

「てめえらにはあの香りは勿体ねえ。俺だけが得るべきものだ。嫌々つてんなら尚更だな」

部下の男の心臓が跳ねた。

まるで天井を見つめるように顔を上げながら、隊長はにやにやと笑い続けている。

「せっかく温室育ちの貴族共を焼けるんだ、しかめつつらは似合わねえだろ。なあ？」

これだから隊長の近くに居るのは嫌だったんだ。そう思いながら緊張した面持ちの部下達だったが、その一人が内心怯えながらも口を開いた。

「まあ、隊長の言う通りですが……。貴族のガキ共はあくまで人質ですぜ？ トリスタニアを制圧した後、つつがなく降伏させるためとか軍の連中が言って……」

すると突然、隊長がかすかに声を出して笑い始めた。

その様子を見た部下達は緊張を更に強くする。

「おいおい、俺が嫌いなものを知ってるか？ 一つ目は平和ボケした博愛主義者。二つ目は、クソに似たおべっかを喚く野郎だ」

その言葉に、部下の男は額に汗を浮かべながら青ざめていた。

しかし目が見えていないはずの隊長は笑い顔を欠片も崩さず、男達へもう一度顔を向けた。

「だからといって、てめえは焼かねえよ。クソみてえな悪臭を撒き散らかされても困るからな。『隊長』の爪の垢でも飲んでみりゃあ、てめえにも俺の言うことが少しは理解できさるだろうさ」

青ざめている男を尻目に、もう一人の部下が口を開いた。

「例の『隊長』さんで？」

「ああ、そうだ。アイツは今どうしてるんだろなあ。また会いてえなあ」

一見機嫌が良さそうに隊長は自分の杖を手の中で弄んでいる。

「隊長の話を他の奴に聞いたことはありますが、詳しい話は知らないんですがね。その『隊長』さんはどんな人だったんですかい？」

というより、傭兵仲間からは『聞かない方がいいかもしれない』ということを書いてただけだ。

しかし、仲間といえどもこの男の機嫌を損ねてしまう訳にはいかなかった。

「そうかそうか、知らないなら教えてやろう」

白く濁った瞳が部下の男へと向けられる。

「まず……、お前。俺は何だ？」

その問いに部下は戸惑った。

その視界の中で、青ざめていた隣の男がこちらをちらりと見るのが目に止まった。

畜生が。てめえがヘマをやらかさなけりや、こんな綱渡りなんざやりたくなかったつてのに。

お前が焼かれようが知ったこつちやねえが、とぼつちりを喰うのは御免なんだ。

「……隊長は『白炎』のメンヌヴィルで、ウチら傭兵共の頭でさ」

「そうだ。それで、今はアルピオンの麗しき狂った犬共、レコン・キスタ様の手先つて訳だ」

どうやら回答に問題は無かったようだ。部下の男はほつと息を吐く。

それも束の間、メンヌヴィルがもう一度部下の男へと口を開いた。

「じゃあ、お前は何だ？」

「お、俺ですか？ そりゃ、隊長の部下でさ」

「そうだな。頭も悪けりや度胸も無え、貴族崩れの傭兵だ」

にやにやと笑いながら、メンヌヴィルは部下達を見つめている。

その白く濁った瞳がいつにも増して恐ろしいものに見えて、部下達は思わずこの怪物のいる部屋から一目散に逃げ去りたくなっていた。

「俺が二十歳の時だったか。もう二十年も前になるが、俺はトリステイン貴族士官としてアカデミーの小隊に所属しててな。当時の俺も、お前みたいな甘ったれだったんだろ
うよ」

メンヌヴィルが歌うように言葉を続けていく。

「ああ、あの小隊は楽しかったな。来る日も来る日も盗賊共を魔法で粉々にしたり、こんがり焼いたりしてな。お偉いさんは賊の討伐もとい人体における魔法の調査だの言っていたが、俺にとつちや知ったことじゃなかった。そんな俺よりも凄かったのが、隊長だ」
その言葉に、実際メンヌヴィルの凶行を目の当たりにしていた部下達は少し気分が悪くなっていた。

『白炎』のメンヌヴィルは裏町に轟いている噂通り、いわゆるイカれた凄腕の傭兵だった。

鋼鉄の剣や槌、更には鋼鉄の弾丸すらも瞬時に溶かし尽くし、焼き尽くす。

それを操る人間ですらも、一息の内に。

それ程の実力があるからこそ隊長の率いる傭兵団は破格の報酬を我が物とする集団であり、それを理由に加入している傭兵は数多くいる。

というよりも、ほぼ全ての傭兵がそうであると言つてもいいだろう。

女子供であろうが、メンヌヴィルは貴族や平民問わず敵対する存在を全て標的にする。

時には、敵対していない味方さえも、全てをだ。

「あの隊長は凄いやつでなあ。海岸沿いにある田舎の村で任務があつただけどな。俺とはそう年も離れてねえ二十歳そこそこのガキが、顔色ひとつ変えずに村も人も全部焼いちまったんだ。竜巻みてえな炎を操つて、その村をあつという間に炎の海に変えちまった。

分かるか？ 夜の海岸に真つ赤な海がある。空には真つ白な月がぼつんとあつて、その海には黒色と赤色が虹みてえに織り交ぎつてるんだ。ありやあ綺麗だったなあ」
うつとりとした顔のまま、メンヌヴィルは続けた。

「分かるか？ この火傷だよ。俺あ、あの隊長にぞっこん惚れちまつた。だから、任務が終わった後に隊長の背中へ杖を向けたんだ。俺の惚れた器が本物かどうか試したかったんだ。」

分かるか？ あの隊長は、俺を軽くあしらいやがったんだ！ アイツは本物だった！！」

部下達は青ざめた顔をして、楽しげに笑う目の前の男を見つめていた。

昔の話とはいえ、この男を超える實力を持つていた人間がいたとは驚くべきことだ。しかし、それ以上に戦慄していたのは……。

この男は間違いなく、想像以上に、昔から今までずっと、イカれていたということだ。

「ああ、アイツに会いてえなあ！ 傭兵やってりやいつか会えると思ってたが、考えが甘かった！ 今の俺はあの時よりはるかに強くなったし、俺は何にも後悔しちやいねえ！ 貴族の名なんざクソ喰らえだと気付かせてくれた隊長に、会って礼がしてえ！

いや、礼をする訳にはいかねえな。会ったら、アイツの焼ける香りを存分に楽しまなきや失礼つてなもんだ！

なあ、お前らもそう思うだろう!？」

第五十九話 喧騒の学院

学院の中はどたばたと慌ただしい雰囲気にもまれていた。

食堂のコックやメイドは備蓄の食料をかき集め、衛兵達はいざという時のために優先して守るべき場所を確認しているのか、学院の至るところを見回っている。

その中で貴族の生徒達は不安そうにうろつき回ったり、平民達へふわふわとした指示を飛ばしたり、時には生徒同士で喧嘩まがいなことを引き起こしたりしていた。

食堂の一角には先程から騒ぎ立てている一団もいた。恐怖や不安を紛らわせるために酒盛りを始めた生徒達である。

べろべろに酔っぱらった生徒達が酒を運んできたメイドに怒鳴り散らしているのを見て、リウスは溜め息を吐きながら席を立ち上がった。

そんなリウスの肩へ、静かに手が置かれた。

「私が行こう。こういうことは、教師である我々の仕事だ」

そこにいたのは、いつか見た教師の一人である。

ほとんど顔を合わせたこともないし名前も知らないが、確か学院の三年生の教師だった気がする。

彼はリウスの顔をちらりと見てから酒盛りをしている生徒達へと向かっていく。

メイドを下からさせてから生徒たちへ注意を行なうも、生徒達は半ばやけくそというように教師に向かつて反論を始めていた。

そんな喧騒の中、貴族の一団から離れたメイドがリウスの姿を見つけて近寄ってくる。

「リウスさん、ご飯は足りてましたか？」

そのメイドは背の低い、そばかす混じりで幼くも見える女の子だったが、先程まで酔った貴族に目を付けられていたにも関わらず毅然としたものである。

余計なお世話だったか、と思いつつながら、リウスはそのメイドへ小さく笑いかけた。

「うん、ありがとう。美味しかったわ。貴方も大変だったわね」

リウスがちらりと先程の生徒達を見る。

未だ喚き散らす生徒達だったが、相対する教師は冷静に生徒達を説得しているようだ。

「へっちゃらですよ、こんな時ですし。あの方にも助けて頂きましたから」

リウスが持つていこうとしたスープ皿を受け取りながら、メイドがリウスの顔をちらと見る。

「知ってます？ リウスさんが来てから、一部の貴族様が私たちを助けてくれるように

なつたんですよ」

リウスは少し困惑気味に、嬉しそうな笑顔を浮かべているメイドへ顔を向けた。

「私が来たから、つて断言はできないんじゃない？」

「いえ、リウスさんがここに来てくれたからです。今までは貴族様が私たちを助けてくれるなんてほとんどありませんでしたから。」

だから、ああやってお酒を飲まれて絡まれるのは困りますけど、貴族様が不安に思われているのならお酒をお出しするくらいは全然構わないんです」

メイドはリウスの顔をじつと見つめて、ぱつと笑顔を浮かべた。

「そうだ。リウスさんも少し飲まれますか？ 確かとつても美味しいワインが残って……」

「ううん、私はいいわ。いつもよりも酔っちゃいそうだから」

皿を両手に抱えたメイドは何やらもじもじしながら、もう一度リウスを見る。

「あの、何かご入り用なら言ってくださいいね？ ちよつと心配ですので……」

リウスはメイドの表情を見て、少し溜め息を吐いた。

「……私は感情が顔に出やすいのかしらね。ありがとう、何かあつたら言うわ」

未だ少し心配そうなメイドだったが、可愛らしくぺこりとお辞儀をすると厨房に向かつて去っていった。

それを見送ってから、周囲の様子を見回したリウスはもう一度小さく溜め息を吐いた。

ルイズは、無事なのだろうか。

いくら大丈夫だと言われても、リウスは気付かぬ内にそれを考えてしまっていた。

そして、どうしてもニューカッスル城の、ルイズを救いに行つた時のことを思い出してしまう。

待つしかできないことが、これほどまでに苦痛だったとは。

しかし、今の私には何もすることは出来ない。

ルイズを迎えに行くことも、この戦争をどうにかすることも……。

成り行きに任せるしかない現状に、リウスは強い無力感を感じていた。

「リウスくん。ちよつといいかね？」

ふと横からかけられた言葉に振り返ると、そこにはコルベールがいた。

学院に至るまでの道程で疲れはあるはずなのだが、彼の固い表情からは疲れなど見つけることは出来なかった。

「もちろんです。どうしました？」

「なに、今から教師陣で緊急会議を開くのでね。君にも参加してもらいたいのですぞ」
コルベールはそう言うと、リウスの確認を待つこともなくすたすたと歩き始めた。

リウスは怪訝に思いながらもその後を追う。

「私は構わないのですが、学院の部外者がしゃしゃり出ても良いものなんでしょうか？」
「ええ。すまないが、協力してもらいたい。この学院に実戦の経験がある者は少ない。いざという時に対応できる人間は、一人でも多く欲しいのです」

「・・・なるほど、分かりました」

二人は食堂の外へ出た。コルベールはどうやら学院長室へと向かっているらしい。廊下でおろおろとしている学生達を尻目に二人は学院長室に繋がる階段を登っていく。

「・・・そういえば『竜の羽衣』が届いていましたぞ。この戦が終わる次第、また調査を進めたいものですな」

ぼつりとコルベールが呟いた。リウスはコルベールの背を見つめる。

「そうですか・・・。もう少し早く見つけられていれば、あの兵器を使えたかもしれないですね」

「・・・『竜の羽衣』を使って、君が戦いに行くということかね？」

階段を登りながらコルベールが問いかける。

「私は『ガンダールヴ』です。あれほどまでの兵器であれば、もしかしたら戦局を覆すことも・・・」

「やめなさい」

途中の踊り場で立ち止まったコルベールはくるりと振り返った。

「君はこの世界の住人ではないでしょう。わざわざ死に行く必要などない」

その強い言葉とは裏腹に、コルベールは優しい表情を浮かべながらまるで説得するかのようにリウスを見つめていた。

「君が思う以上に、君を心配する人間は多い。それにハルケギニアのことはハルケギニアの人間がどうにかすることです。君が無理をする必要はない」

その言葉を聞いて、リウスは何故かルイズの姿を思い出していた。

そしてあの夜、自分の過去を全て話した夜に……ルイズが言っていた言葉を。

「私はもう無関係な人間ではないでしょう？ 私は、既に貴方たちと知り合ってしまったのですから」

コルベールは目を細めて、目の前に立つ女性の、強い瞳を見つめ返していた。たぶん彼女には譲れないものがあるのだろう。

今までの行動は、彼女が彼女であり続けるために必要なものなのだ。

だからこそ、私はこれ程までに心配な気持ちになってしまおうのだろうか。

彼女のような人々は確かにいたのだ。

私の行動を止めようと、その身すら顧みずに向かってくる者達は。そして、あの人達の悲劇を作り出したのは……。

あの頃の私は……。一体いつから、抵抗なく人を焼けるようになったのだろうか……。

そのままコルベールはくるりと階段へ歩を進めた。

後ろからリウスが付いてくるのを感じる。

「ならばせめて、危険だけは避けるように。君を心配する人の中には私だって含まれているのですからな」

「……それはお互い様です。コルベールさんならご存知でしょうが、戦う必要がある時には躊躇なんてしませんよ」

「……貴方は頑固ですな」

その言葉と共に、コルベールは静かに溜め息を吐いた。

「……まあ、リウスくんの言うことは分かっておりますぞ」

学院長室の扉を開けると、集まっていた十名程の教師達がこちらへ振り向いた。

教師の半数は納得したようにリウスへと目を向けていたが、残る半数は苛ついたように厳しい視線をリウスへ投げかけている。

その一団から少し離れた場所で、ギトーがリウスとコルベールをちらと見た。

「・・・よし、それでは教師の皆様は先程伝えたように、生徒達が勝手な行動を取らないよう見張っていること。とにかく学院への出入りを厳格に制限しなければなりません。アルビオン軍がこちらへ来ることもないでしょうが・・・」

ギトーに向き直った教師陣が緊張した面持ちで頷いた。ギトーもまた緊張した様子のまま、しかめっ面で口を開く。

「では、緊急時の対応を話し合いましよう。もしアルビオン軍がここへ攻めてきた場合、まず第一に考えるべきことは子供らを守ることです。

・・・そうですね、食堂に生徒を集めて全員で立て籠もるのが良いでしょう。異論はありませんか？」

教師達は互いに頷き合い、異議なしと口々に言った。

その中でコルベールとリウスだけが険しい顔で考え込んでいる。

「異論がないのであれば早速行動へと移りましょう。まずは・・・」

「……敵の数や種類にもよりますが、全員で立て籠もるべきではないですぞ」

教師達がコルベールへ視線を集める。それを代表するようにギトーが口を開いた。

「何故です」

「全員が一カ所に集まれば一網打尽にされるだけですからな。」

詳細を説明をする前に、まずは皆様の認識を再度確認しますが……。アルビオン軍が攻めてきた場合は、少なくともトリスタニアの決着がつくまでは投降をしない……。間違いありませんか？」

その落ち着いた確認の言葉に、数人の教師たちは憤ったような声を上げる。

「当たり前です！ ミスタ・コルベールは我々を侮辱するつもりですか!？」

「アルビオンの恥知らず共に屈するなどトリステイン貴族として有り得ませんぞ！」

青筋立った教師達の言葉にも、コルベールは冷静な表情を崩さずに頷いた。

「そうですね。では説明いたしますぞ。……投降せずに戦うのであれば、生徒達に指示を行なう数人を除いて、いくらかの教師は迎撃に回った方がよろしい」

全員とは言わずとも、特に先ほど声を上げていた教師達は、愕然とした様子でコルベールを見つめている。

どうやら戦争が始まり、なおかつ投降もしないと決めていたにも関わらず、彼らの大

半は未だ自分たちが実際に戦う可能性があることを念頭に入れていなかったようだ。

「この本塔は壁こそ強固とはいえ、出入り口や窓が多すぎることは知っておりますな？
事が起きた際、食堂へ生徒達を集めるのに異論はありません。しかしいざという時のために、今の内から食堂を中心として侵入路を塞いでおく必要がありますぞ」

教師達を代表するように、納得した様子ギトーが頷いた。

「確かに。それでは・・・、それだけをすればよろしい。教師を迎撃に回す余裕などないはずでは？」

「先程も言った通り、それだけでは一網打尽にされるだけです。誰かが迎撃に回らねば敵を好きにさせるだけですからな」

眉根を寄せたギトーはコルベールの言葉をゆっくりと飲み込んだ。

「・・・つまり、教師の数人を盾にする、ということですか？　我々が、その教師を助ける術を必ずしも持てないにも関わらず」

コルベールは静かに頷いた。

その様子に教師達の大半がざわめき始めた。

覚悟を決めたと思われる表情を浮かべている教師もいるが、それはほんの二、三人程

度である。

ギトーは教師達の表情をちらりと見てから、コルベールに向き直った。

「そこまで言うのなら、ミスタ・コルベールも矢面に立つのでしよな？ 学院の全権を担っている以上、私は貴方のように出来ませんがな」

「分かっておりますぞ、ミスタ・ギトーは生徒達といてください。事が起きた場合には私も迎撃に加わるとしましょう」

険しい顔のまま、ギトーは考え込むようにしばらく黙りこくった。

そして、ふとコルベールの横に立つリウスを見る。

「その使い魔はどうするおつもりです」

「・・・彼女も生徒達と共にいさせた方が賢明でしよな。いざという時には、平民達への指示を飛ばしてもらいましょう」

リウスは驚いたようにコルベールを見た。

「それは得策ではないです！ 私も迎撃に加わった方が・・・」

「そうだ！ その女は東方のメイジで、ただの使い魔だろうが！ お前も戦わなければならん！」

教師の半数が口々に反論の声を上げ始めた。それに対してコルベールや二、三人の教師達が説得を始める。

シユヴルーズはおろおろと周囲の喧騒に戸惑い、ギトーはそれぞれの主張を聞きながら静かに考え込んでいる。

すると突然、学院長室の扉が猛烈な勢いで叩かれた。

それとほぼ同時に、入室を促していないにも関わらず扉が勢いよく開けられる。

「な、何だ貴様らは！　今は会議中なのだぞ！」

教師の一人が怒鳴りつける。

息せき切つて学院長室に駆けこんできたのは、学院の衛兵と、軍属の服に身を包んだ急使だった。

「マザリーニ枢機卿より伝令です！　トリスタニア郊外に展開したアルビオン艦隊より、アルビオン巡洋艦三隻が離脱！　当学院に迫つてきております！　我らトリステイン軍は明朝の決戦の為に動くことが叶わず！　学院の皆さまは至急対応を検討すべしとのこと！」

言葉を失った全員はしばらく立ち尽くし、学院長室の窓に向かった教師を皮切りにそ

の場の全員が窓から外へと目をやった。

しかし、この場所からは何も見えない。

「食堂だ！」と誰かが叫び、それぞれが学院長室から廊下へと飛び出していく。

空を飛べるにも関わらず全員が学院内を移動しているのは、迫ってきているアルピオン軍を警戒してのことだろうか。

教師の一団と共に学院をひた走るリウスは、横を走るコルベールへ声を上げた。

「コルベールさん！」

「何かね！」

コルベールの視線がリウスに向いた。

「私は、迎撃に回りますから！」

コルベールの瞳に苛立ちと怒りが満ちていく。

「君は何を言っているのか分かっていいのか!? 死ぬかもしれないのだぞ！」

「子供たちを守れないのであれば、魔法を扱える意味などありません！ 今は最適な選択を選ぶべきです！」

走りながらも教師達の数人がリウスへと視線を向ける。

そして、その言葉を聞いたコルベールはリウスを強く睨み付け、そのままその瞳を前へと向けた。

「君は、本当に愚かだ．．．！」

そう吐き捨てられた発言にリウスも叫ぶような声で返した。
「分かっています！　でもお説教は全部終わった後に！」

第六十話 迎撃に向けて

教師の一団が本塔の食堂へと着いた時、はるか遠くに浮かんでいる三隻の巡洋艦に生徒達が騒ぎ始めていた。

教師達はしばし呆然としていたが、ギトーとコルベールの言葉にそれぞれが動き始める。

一部の教師達は寮塔などにいる生徒達をこの食堂へと集め始め、シュヴルーズを含める一部の教師達は指定された窓や入り口へバリケードを作るために、土系統の生徒達を引き連れて走り回っている。

リウスはといえば、ギトーやコルベールと相談の上で学院の平民達を食堂へと集めるために食堂の外へと向かっていた。

コルベールやギトーは軍の急使から戦争の状況を詳しく共有していく。その中で、コルベールはちらりと急使の青年へ顔を向けた。

「君はあれら巡洋艦に何名の乗員がいるか聞いているかね？」

急使の青年は険しい顔のまま頷いた。

「あくまで憶測に過ぎないのですが……、本營が判断するには巡洋艦一隻につき五、六十程度の乗員がいるのではないかと……」

その言葉に内心緊張しながら、ギトーは鼻を鳴らした。

「ふん、巡洋艦といえどもその程度か。操船の船乗りを抜いたとして百程度ですか。その程度でこの学院を攻撃するとは……」

しかしコルベールは油断するギトーの様子にちらりと目を向けた。

「悔るべきではありませんぞ。奴ら全員がメイジではないでしょうが、生粋の軍人ではあるのですからな」

「そ、そんなことは分かっている！」

焦るギトーが声を張り上げるも、コルベールは表情を変えずに窓の外へと目をやった。

三隻の巡洋艦はかなり近付いてきている。

一刻も経たない内に、この学院の上空へと到着するだろう。

窓の向こうを見つめるコルベールは険しい顔で黙りこくっていた。

急使の青年は食堂に到着した衛兵たちと行動を共にし始め、ギトーはあれやこれや独り言のように呟きながら、訪れてくる教師や生徒へ指示を飛ばしていく。

そんなギトーが苛立った様子で声を上げた。

「ミスタ・コルベール。何を考えているのです」

「・・・」

しかしコルベールは答えない。

険しい顔で、遠くからゆっくり近付いてくる敵艦を見つめているだけだ。

「ミスタ！」

ギトーが声を荒げると、ようやくコルベールがギトーへ目を向けた。

「・・・聞こえていますぞ」

「まったく、それなら先に返事をするべきですな。何を考えていたのかは知りませんが・・・」

「伝えましょう」

振り向いたコルベールは静かな瞳をギトーへと向ける。

「まず一つ。いずれこの本塔は破壊されかねない。巡洋艦三隻に、あの砲数が相手では耐えられないでしょうな」

「なっ・・・」

ギトーは啞然とした。それなら、立て籠もったところで・・・。

「しかし、これはいずれの話です。本塔の壁には特に強固な『固定化』がかけてありますからな。どうしたって時間のかかることですから、トリスタニアからの救援が間に合えば・・・、可能性はある」

しかしギトーは緊張を緩めなかった。

「まず一つ、ということは・・・」

「二つ目ですが、侵入路を塞ぐのは間に合いません。・・・アルピオン軍がこの学院を優先してくると思いませんでしたからな」

その他人事のような言葉に、ギトーは怒りの矛先をコルベールへ向けた。

「な、何を言っている！ ではどうすると・・・」

「足止めが必要ですよ」

コルベールの短い返答へ、ギトーは叫ぶように声を上げた。

「だから、それがミスタの言っていた迎撃では・・・！」

「あれは、学院の内部から攻撃を行なうのみです。侵入路を制限した上で、奴らの侵入を遅らせるためだけのものですよ。」

しかし侵入路を塞ぐためには、実際に外へ出て、降り立った者共の足止めを行なう必要がある」

ギトーは息を飲んだ。

「外に……?」

「その通りです。しかし大勢で向かってしまえば、奴らの砲撃によってあつという間に全滅してしまうでしょう。逆に少数であれば、巡洋艦の砲を使うまでもない」

そう言ってもう一度思考を巡らせ始めたコルベールの顔を、ギトーは息を飲んで見つめていた。

今の彼の表情は、ギトーが見知ったコルベールの顔ではなかった。

感情を欠片も浮かべていない、ただ冷静に今の戦況だけを見つめる軍人の顔。

ギトーは齒噛みした。

先程のヴァリエールの使い魔もそうだ。

何故この二人は、この状況で……。

「……私は、オールド・オスマンより学院の全権を任されているのだ」

「分かっておりますぞ。奴等の足止めは私が行ないましょう。それでも、元軍人ですからな」

そう言つて薄く笑いかけるコルベールに、いつの間にかギトーは心の内で静かな敬意を感じ始めていた。

貴族といえども軍人という人種は、野蛮で、思慮に欠ける、薄汚い平民の如きものだ

とずっと思い続けてきた。

しかし、その中にもこういう男がいる。

その事実は、ギトーの思考を変化させるのに充分なものだった。

この男の覚悟を、私は決して穢してはならない。

そのまま二人は学院への侵入地点と迎撃箇所の手合わせを始める。

巡洋艦の砲撃が行なわれかねない部屋には『鍊金』による何層もの壁を作る。

侵入されやすい箇所にはバリケードを築きあげ、教師陣による迎撃の準備を押し進める。

すると突然、学院の外から轟音が鳴り響いた。

生徒達の悲鳴が食堂に響き渡る。

まだ学院にまでは到達していないにも関わらず、三隻のアルビオン巡洋艦は砲撃を開始していた。

外側に位置する塔や城壁の上を狙っているようで、数度の斉射が終わると砲撃の音はぴたりと止まった。

食堂の中が喧騒に包まれていく。

次々に生徒達が到着するのを尻目に、コルベールはギトーに短く言葉を告げると、迎

撃の準備を整えるため食堂を立ち去っていった。

一人残されたギトーは騒ぎ立てる生徒達や動揺する教師陣へ指示を行なっていく。そんな中、ギトーに駆け寄ってくる姿があった。

「こちらの準備は整いました。教師の方との連携を図りながら、衛兵の皆は食堂の出入り口、それぞれの渡り廊下を守るようにしています。

それで、計画はどうなりましたか？」

声をかけてきた人物は、リウスだった。

ギトーはその姿を一瞥してから、静かに先程コルベールと話し合った内容を伝えていく。

「一人で・・・？」

「そうだ。ミスタ・コルベールは、もう奴等の足止めをするために外へ向かっているはずだ」

「コルベールさんだけで、**囷**を・・・」

険しい表情のままリウスが小さく呟く。

その言葉を聞いたギトーは、少なからず衝撃を覚えていた。

そうだ、時間を稼ぐのであれば隠れていては意味などない。

つまり……、自ら敵に狙われる必要が……。

「私も行きます。平民の皆のことはお願いします」

しかしリウスはこともなげに告げる。

ギトーはその姿に何を言うことも出来ずに、ただやり場のない怒りの言葉を吐き捨てた。

「……行きたければ行くがいい！ 勝手にしろ！」

苛立ちながらギトーが立ち去るのを見送って、リウスは食堂の扉へと歩き始める。

外の巡洋艦が、とうとう学院の上空にまで到達してきていた。

ゆるゆると高度を下げて、先程の砲撃で煙が上がっている城壁へと近付いてきている。

「ミス・リウス！」

その声にリウスが振り向くと、そこには息を切らせているギーシュの姿があった。彼の後ろには同じく息を切らしている、見覚えのある生徒達がいた。

泣きじゃくっている女生徒などはいるものの、彼らが無事であることにリウスは小さ

く安堵の表情を浮かべていた。

「どこに行くんですか!」

「気にしないで。あなたたちはここで立て籠もる準備を……」

「ま、待つてください! 僕も行きます!」

生徒達をかき分けてきたモンモランシーがギーシュを引き止めようとするも、ギーシュは駆けるようにリウスの元へと近付いていく。

「僕も、行きます」

ギーシュの顔には有無も言わさぬ迫力があつた。

しかしリウスはギーシュの顔を見つめたまま目を細めると、彼の胸を静かに押した。

「ダメよ」

優しく胸を押されたギーシュは、憤ったように口を開いた。

「ど、どうして……!」

「前の舞踏会のことを覚えてる? あなた達を支えるのは、私の番。ギーシュくん、あなたは怖がつてる子達の傍にいてあげて」

ギーシュは納得していないように声を上げようとするが、それよりも先にリウスが口を開いた。

「それにね、今回ばかりは足手まといよ。私一人の方が動きやすいわ」

リウスはそう言つてギーシユから指を離すと、『土』のメイジ達が塞ごうとしている窓の外を覗み付ける。

巡洋艦の甲板から十数人のメイジが飛び立つ姿が見える。

そして、地面から低い位置に停まった先頭の巡洋艦からは縄梯子が降ろされ始めていた。

もう、時間が無い。

リウスが食堂のドアへ向かおうとした時、後ろからギーシユの声がした。

「ミス・リウス。何で貴方がそこまでするんですか……。怖くは、ないんですか……。？」

リウスはその言葉を聞いて足を止めると、何を思ったか小さく笑つた。

「……怖いに決まつてるでしょ？ 勝算なんてないし、負ければ殺されるかもしれない。殺されなくても、何をされるか……。あなた達がどうなるかつて考えると……。？」

振り向いたリウスの顔を見て、ギーシユは息を飲んだ。

彼女は不安そうな表情を浮かべたまま、ギーシユ達を安心させるかのように強張つた笑みを浮かべていた。

目に映った彼女の手は、微かに震えている。

生徒達が息を飲む中……、ギーシユの瞳には、今日の前にいるリウスの姿が初めて年相応の女性のように映っていた。

(僕は……、今まで何を見てきたんだ……?)

僕はミス・リウスを、物語の英雄だとも思っていたのか？

弱さを持っていないと、何を前にしても怖くはないとでも……?

自分とそう年齢も変わらない、普通の女の子だとは、考えなかったのか？

「……前にね、『イーヴアルデイの勇者』のお話しを図書室で読んだわ。彼はドラゴンがいくら怖くつても逃げる訳にはいかなかった。

彼が彼であるために、守りたい人を見捨てることなんて、決してしなかった」

リウスはそう呟きながら、脳裏に薄桃色髪の少年を思い出していた。

エミール。

あの子だつてそうだ。

あの子はどんなに辛く、厳しい環境の中に置かれたとしても、決して人を見捨てることなんてしなかった。

あの子は決して、病気にかかった私を見捨てることをしなかったのだ。だからこそ私だって、あの子のように……。

ギーシュ達の視線でリウスは震えている自分の手に気が付くと、静かにその手を握り込んだ。

「私はね、戦うために魔法を学んだの。私には戦うことしかできない、だから逃げる訳にはいかないのよ。それにこういう時に守りたい人を守れなくて、何が魔法よ」

リウスはゆっくりと腰の短剣に手を添えながら、無邪気な顔で微笑んだ。

「今度こそ、私が守ってみせる。あなた達には絶対に手を出させないんだから」

そう言うと、リウスはくるりと振り返って、ただ立ち尽くしている生徒達がいる食堂を後にしていくのだった。

食堂を後にしたリウスは駆けるように中庭へと向かっていた。

(……私は、弱くなった)

胸に沸き起こる決意と共に、リウスは小さく呟いていた。

いつか薄れてしまった死への恐怖が、これほどまでに強くなっているなんて。

恐怖は心を縛り、そして身体を縛るのだ。

冒険者として学んできたことの多くは、この恐怖をいかにして我が物とするか。それに尽きるというのに。

「・・・相棒、大丈夫か？」

背に抱えたデルフリンガーが心配そうな声を出す。

感情を読んだのだろうか、リウスはデルフリンガーに小さく返した。

「大丈夫。怖いけど、何とか時間を稼いでみせる」

その言葉は、正にリウスの本心だった。

「聞いてくれ相棒。俺が言いたいのはな、無理だけはすんなってことだよ。嬢ちゃんを泣かせたくはないだろ？」

リウスの脳裏にルイズの笑顔がよぎった。

分かってる、と呟くように答えてから、リウスは不機嫌そうな表情でデルフリンガーにもう一度言葉を返した。

「・・・アンタね。こんな時にそういうこと言うんじゃないわよ。行くのが嫌になっちゃうでしょ」

「相棒はいつつも無理しやがるからな。これくらい言つといた方がいいかと思つてよ」
「アンタが羨ましいわ。いつつもそんな調子なんだから」

リウスがかすかに笑いながら返すと、デルフリンガーもいつものようにけらけらと笑っている。

そのままリウスは中庭に繋がる扉へと辿り着くと、その扉を静かに押し開けたのだつた。

第六十一話 それぞれの思惑

『トリステイン貴族の皆々方！ 何も、我々は諸君らに危害を加えようとする気はない！ 武装を解除し、肅々と投降することを望んでいる！』

『風』の魔法で増幅された声がアルビオン巡洋艦より響きわたった。

投降を促しているのは、三隻いるアルビオン巡洋艦の中でアルビオン軍属の兵士が多く乗り込んでいる艦である。

その中にはこの艦隊を率いている壮年の貴族・・、アルビオン軍総司令官の子飼いの貴族もいるのだが、実質的な総指揮権はメンヌヴィルの元にあった。

傭兵団の頭を指揮官とすることに抵抗があつたのだろうが、誰が上になろうが下になろうが、そんなことはメンヌヴィルにとつてどうでも良かった。

彼にとつては単に自分に対して余計な口出しをしなければそれで良いのである。

先程から再三にわたつて投降を促しているが、学院側に何か動きがある訳でもない。隣に浮かぶ巡洋艦からむなしく響きわたる貴族の声に、メンヌヴィルは小さく鼻を鳴らした。

「茶番だな。さっさと命じて欲しいもんだ」

メンヌヴィルは巡洋艦の甲板から遠くに浮かぶ艦を眺めた。

とはいえ盲目である彼の目には何も映ってはいないが、空気の揺らぎや風の音によって前方にある本塔の位置は分かっている。

本塔の反対側に浮かんでいるはずの三番艦は、逃げようとする学院の貴族たちを逃がさぬよう、監視する役割を担っている。

そして、今自分がいる二番艦と、隣に浮かぶ一番艦は、トリスタニアからの援軍を警戒しているのだった。

「隊長、ウチの連中の降下が完了した模様です。いつでも降りられますよ」

「まあ待て。まだ上官殿の演説が終わってねえよ」

事前の取り決めにおいて、トリステイン軍が救援に来た場合には即座に撤退することが決められている。

そのまま付かず離れずの距離において応戦していれば、トリステインの救援軍を追いかけたきたアルビオン戦列艦によって一網打尽に出来るといふ訳だ。

その間、学院内の拠点を確保するために自分ら傭兵団が同行している訳だが……、いかに鼻持ちならない貴族の考えそうな、性根の腐った作戦である。

そしてそんな展開はメンヌヴィルにとっても喜ばしいことではなかった。

そんな光景が繰り広げられてしまつては、学院の連中が早々に投降してしまう可能性があるのだ。

「しかし……。わざわざ降伏勧告を行なつてやるなんざ、お優しいことで」

「馬鹿かテメエは。トリステイン貴族がそう簡単に投降なんざする訳ねえだろ。ありやあ脅しだ」

傭兵の男がメンヌヴィルを見ると、メンヌヴィルはつまらなそうな顔で口を開いた。

「貴族のガキは二、三十人も捕まえば上々だ。だから、今は選択肢を与えてやつてるのさ。今頃あいつらは大混乱、それでも投降しないとすれば学院に立て籠もることを選ぶだろうよ」

「……なるほど。それでこの艦の数ですか」

「そうだ、ああいった連中は屈服させねえと何をするか分からねえ。だから、俺らは親切にも気付かせてやつてるのさ。時間が経てば経つほど、選択肢は無くなつていくことをな」

メンヌヴィルはアルビオン貴族の声が途絶えていることに気が付いた。

そして、ふと隣に浮かぶ巡洋艦に顔を向ける。

『これ以上我々の言葉に答えぬのであれば、諸君らに抗戦の意志があると認めざるを得

ない！　これは警告である！　速やかに武装を解除し、投降せよ！』

くつくとメンヌヴィルが笑う。

「大詰めだな。おい、斥候として下の連中の一部と軍属の連中を右手前方にある渡り廊下に布陣しろ。念のため、反対側へ古参の連中を数人送っとけ。

本塔周辺の状況が把握できたらそのまま待機だ。トリスタニアの救援軍が来るまでしばらく待つ」

「はっ」

「救援が来ないのなら、俺らの合図に合わせて砲撃が始まるだろうよ。砲撃が終わったなら、そうだな……。塔上部の窓、渡り廊下から突入だ。罨の気配があるなら軍属の連中を使え。俺を待つ必要はない」

その発言に怪訝な表情を浮かべながらも、部下の男は傍らにいる傭兵に隊長の言葉を伝える。

その傭兵が縄梯子で降りていくのを見送って、部下の男はメンヌヴィルの近くへと戻ってくる。

「何故、俺が真っ先に行かないのかと思っているだろう？」

メンヌヴィルの言葉に、ぎくりと部下の男は身を強張らせた。

下へ降りる準備を進めながら、部下の動揺を感知していたメンヌヴィルは満足そうな表情で部下の男へ白く濁った瞳を向けた。

「メインディッシュは俺が貰う。だから、お前らには前菜をくれてやる。

お前らは……、無駄死にすることも仕事の内なのだからな」

背後、上空に浮かぶ巡洋艦からは投降を促す警告が繰り返し聞こえてくる。

十数人にもなる貴族崩れの傭兵達とアルピオン軍の兵士達は流れるように歩を進めながらも、各々のその顔には緊張が浮かんでいた。

ここにいるほとんどのメイジが貴族の子供らであり、教師達が『ただ魔法を使えるだけ』の一般人であるとはいえ、ここがメイジの巣であることには変わりがない。

精度の低い魔法なぞ物の数ではないが、それでも束で来られては危険ではあるのだ。手練れである古参の傭兵達は既に塔の反対側へと移動している。

今残っている傭兵達は頼りない周囲の味方達に内心舌打ちをしながらも、前後左右を寸断無く警戒しつつ本塔の右手にある渡り廊下へと進んでいく。

傭兵達が音も立てずに進む中、ふと渡り廊下近くに人影が見えた気がした。

先頭の傭兵が手サインでそれを知らせるや、その人影がすたすたとこちらへ向かって歩いてくる。

あまりにも無防備なその姿に、傭兵達はそれぞれ警戒の色を濃くしていく。

現れた桃色髪の女性は何やら一人で何かを話しているように見えた。

「……おいおい、相棒。わざわざ真正面から出ていかなくてもよ……」

「……さあ、どれが正解なんて分かんないわ。変に刺激するよりこっちの方がいいかもって思っただけ……」

女性の方向から男の声が聞こえた気がして、傭兵達は散開しながら周囲に気を配っていく。

とはいえ、今いる場所は塔や建物から離れているため奇襲をするには適していないようにも思えた。

桃色髪の女性は十メートル程離れた場所で立ち止まると、目の前の男たちへざつと目を通していく。

いかに彼らが傭兵として生きてきて、その上戦争中であるといえども、彼らはこの人数差でいきなり攻撃を行なうほど無粋な訳でもなかった。

何より目の前の女性がこちらに危害を加えてきた訳でもないし、たかが女一人、さつさと拘束して連れていってしまえばいいだけだ。

もしかしたら白旗でも上げるつもりなのかもしれない。

緊迫した雰囲気の中、アルビオン軍属の兵士が口を開く前に、髭面の傭兵が脅すような声を上げた。

「おい。てめえ、そこから動くなよ。何のつもりだ」

「アンタ達こそ何の用？ 戦争になったのは知ってるから、何となく予想はつくけど」

窮地に立たされているのは明白にも関わらず、目の前の女性は無然とした表情で腕を組んだ。

その妙に落ち着いた雰囲気、アルビオン軍の兵士が苛ついた声で答える。

「お前の想像通りだ。投降するのであれば、両手を頭の後ろに付けろ」

しかし桃色髪の女性は馬鹿にするように肩を竦めると、朗々とした声で口を開いた。

「お断りよ。それより、アンタ達に決闘を申し込むわ」

予想もしていなかった言葉にアルピオンの兵達は目を丸くする。思わず互いの顔を見合わせる傭兵達。

ほんの少し弛緩したような妙な雰囲気包まれ、傭兵達が目の前にいる桃色髪の女性へと視線を戻した瞬間、傭兵達から大きな笑い声が上がった。

「おいおい嘘だろ！ トリステイン貴族つつつてもここまでとはな！」

「お前オツムがおかしいのか!? ここにきて笑いを取ろうつてのはよ！ 面白え女だ！」

「決闘だあ!? こっちは戦争やっつてんだぜ!」

大笑いする傭兵達だが、彼らのその目は注意深く周囲へと向けられている。

彼らにとって想像すらしていなかった状況だが、常に戦いの中に身を置いていた彼らの意識が緩むことはほとんど無かった。

「お嬢ちゃんよ、そんな訳の分からないこと言つて俺らを困らせるんじゃねえよ。ふん縛つちまうぞ?」

へらへらと笑いながら傭兵の一人が下卑た声を上げる。

しかし桃色髪の女性は緊張した様子もなく、もう一度肩をすくめた。

「せつかく学院で魔法の勉強してきたんだもの。だから何もしないで捕まるなんて、私のプライドが許さないわ。私を捕まえる人は私よりも強い方がいいの。言つてる意

味は分かる？」

その言葉を真に受けたのか、アルビオン軍の兵達は緊張した表情を浮かべている。

しかし一方の傭兵たちはまた大笑いを上げ始めていた。

馬鹿にするような笑い声の中、リウスの背にいたデルフリンガーが「よく言うぜ……と小さく呟いているが、リウスは聞こえていないように腕を組みながら笑い続ける傭兵達を眺めていた。

現実が見えていない世間知らずなメイジ。大部分の傭兵達とアルビオン兵達はそう思っているようだったが、それでも納得のいつていないアルビオン兵の一人が声を上げた。

「お前の思惑は分かっている、先ほど男の声が聞こえていたからな。我らを罠に嵌めようと考えているのだろう。違うか？」

しかしリウスはきよとした表情を浮かべると、背から鞆に入った剣を手を取った。

アルビオン兵達は焦ったように杖をリウスへと向ける。

「男の声って、この剣のことでしょ？ ほらデルフ、ご挨拶しなさい」

驚いたようにデルフリンガーが鞘をかちやかちや鳴らすも、すぐさま納得がいったように声を張り上げた。

「ようお前ら、俺たちはデルフリンガーってんだ。まあこの状況じゃ、よろしくって訳にはいかねえがな」

アルビオン兵達が杖を構えたまま目を丸くすると、その脇に立つ傭兵達はそれぞれ豪快に笑い始めた。

「おいおい、何が分かってたんだよ！ 剣が罫に嵌めてくるってか!? こりゃいいや！」

アルビオン兵達は笑う傭兵達を苦々しげに睨み付け、そのまま手に構えた杖をもう一度リウスに突きつけた。

「やかましい！ どちらにせよ我々は貴様など相手にしている訳にはいかんだ！ おとなしく投降するがいい！ それとも私の魔法で引き裂かれたいか!?」

その兵士の雄叫びにも傭兵達は大笑いすることを止めず、リウスの手に握られたデルフリンガーも馬鹿にするように声を上げた。

「おいおい、相棒のことがいくら怖いっていつてもよ。大の男共が年端もいかねえ娘っ子一人にこの人数差で襲い掛かるって？ なっさけねえの」

「やめなさいよデルフ。この人達に自信が無いのならしようがないじゃないの」

怒りで顔を赤くする兵士達とは裏腹に、傭兵達はにやにやと興味深げに答える。

「おもしろえ。軍の連中が舐められるのは構わねえが、俺らも一緒にされちゃ困っちゃうなあ」

そう言った無精ひげの傭兵が一步前に出ると、アルビオン兵は怒りの矛先をその傭兵へと向ける。

「何のつもりだ。そんなことをしている場合ではないだろうが!」

「なあに、状況が分かかっていない嬢ちゃんにちよつと教育してやるだけだ。それに反対側にも手練れが行ってるんだからな。問題はねえよ」

一色触発の雰囲気の中、強面の傭兵の一人がにやついた声を上げる。

「つたく、仲間同士で何争ってんだ。そもそも据え膳喰わぬはどうたらつて言うだろうが。もうちよつとアルビオン軍も遊び心を持ってもいいんじゃないやねえかあ?」

リウスが慥然とした声を上げる。

「据え膳扱いとは失礼ね。それよりもさつきとしてよ、待ちくたびれちゃったわ」

「ほうら嬢ちゃんも待ちくたびれたつてよ。軍属の連中は女の扱いが分かかってねえな。さつきと満足させてやれよ」

そうだそうだ、と傭兵達から声が上がると、にやついた無精ひげの傭兵がリウスに向

かつて杖を向けた。

「しようがねえから俺が可愛がつてやるよ。ほら嬢ちゃん、構えな」

腕に自信があるのか、その傭兵は余裕たつぷりの舐めきつた表情を浮かべている。

魔力の密度を見ても、数少ないこの部隊の手練れの一人だと言つていいかもしれない。

「貴方が一人目ね。分かつたわ」

リウスがデルフリンガーを引き抜くと、傭兵は意外そうに口を開いた。

「なんとなくそうじゃねえかと思つてたけどよ。お前は貴族崩れなのか？」

「まあそんなとこよ。この学院には子供の頃からちよつとした縁があつてね、今さら厄介になつてるわけ」

リウスの言葉はまるで嘘つぱちであつたが、傭兵は納得したように鼻を鳴らした。

「なら手加減はできねえな。後悔するなよ」

傭兵は片手に持つた杖を軽く振るうと、魔法の詠唱を開始する。

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウインデ・・」

リウスも同時に詠唱を開始する。

「ウル・カーノ・ジエーラ・ハルクス・ペオース……」

リウスの詠唱は全くのデタラメである。

学院の図書室で見た呪文のルーンに適当な言葉を繋げただけのデタラメな詠唱を口に出してから、ほぼ同時にリウスは本来の詠唱を開始していた。

傭兵の周りに十数本の氷の矢が浮かび上がる。

それと同時にリウスの周囲にも燃え盛る数本の炎の矢が浮かび上がっていった。

「ウインデイ・アイシクル！」

「ファイアーボルト！」

二人の周囲から異なる属性の矢が撃ち出される。

それらは互いに交差するかのようにつつかり合い、勢いを削がれた属性の矢がリウスと傭兵の周囲に降り注いだ。

「おっと！ やるじゃねえか！ じゃあこんなのはどうかだ！」

敢えてリウスは弱めの魔法を放っていたため、勢いの弱まっていない氷の矢をリウスは何とか自力で避けざるを得ない。その隙に傭兵が次の魔法を唱える。

「ウォーターウィップ！」

傭兵の杖の先端から発生した水の塊が杖の周囲を覆っていく。

「そっちらー！」

傭兵が杖を勢いよく振ると、杖に纏わりついていた水の塊が鞭のように細長く伸びあがった。

風切り音と共に飛来する水の鞭をリウスは間一髪身を引いて回避する。

回避された水の魔法は即座に方向を変えると、正にしなやかで強靱な鞭のようにリウスへ向けて襲い掛かる。

リウスはデルFRINGERすら使わずにそれを避けながらも、デルFRINGERへと小さく静かに口を開いた。

「・・・デルフ、魔法を消しちゃダメよ。時間稼ぎなんだから」

「わかってら。任せとけて」

上半身に飛来する水の鞭を咄嗟に屈んで回避しながら、リウスは水の鞭をデルFRINGERで切り上げるように叩き切った。

しかし切り落とされた水の鞭は即座に繋がり、何の問題もないかのようにまたリウスへと襲い掛かる。

「馬鹿か！　これは水なんだぜ!？」

まるで生き物のように襲い掛かる水の鞭がリウスの顔面へと飛来する。

流れるような身のこなしで鞭を回避しながらも、実のところリウスには別のことを考える余裕すらあつた。

しかしそれに気付いていない傭兵は水の鞭を操っていくのに夢中である。

主塔の反対側。先程の傭兵の言葉が正しいのなら、この部隊の手練れはそちらへと向かつているようだ。

コルベールが同じ方向にいるはずなので、既にあつちはあつちで戦つていてもおかしくはない。

（コルベールさんなら問題はないだろうけど……。こつちに来てくれる余裕はないと思つた方がいいか）

そう考えながらリウスは足元へ飛来した水の鞭を身を翻して回避すると、デルFRINGERで切り掛かるため猛然と傭兵に襲い掛かる。

焦つた傭兵が水の鞭を球状の水の塊に戻し、それを弾くように周囲へ撃ち出すと、即座に後ろへステップを踏んだりリウスは直撃しそうになつた水の弾丸をデルFRINGER

を盾に防ぎきった。

「おいおい、お前がまさか手間取ってるんじゃないやねえのか!? 手え貸してやろうかあ!」
「俺にもやらせろよ! あつという間に仕留めてやるからよ!」

傭兵達から下卑た笑い声が漏れ出すと、リウスに相對する傭兵が苛立った顔でわめき散らす。

「うるせえ引つ込んでろ! 意外とやるんだよ、この女!」

この演技は大した時間稼ぎにもならない。演技がバレたなら、その時はその時だ。

リウスはそう考えながら、またデタラメの詠唱と共に、威力の弱い魔法を傭兵に向けて撃ち出したのだった。

リウスが戦っているちょうどその頃・・・、主塔の反対側に位置する広場は炎の海に包まれていた。

最後に残った二人の傭兵が、炎の海を中心に立つ男へと渾身の魔法を詠唱する。

「ウオーターフォール！」

「エアストーム！」

三メートル以上もある大量の水の塊が男の頭上から襲い掛かると同時に、男の周囲に発生した数メートルもの風の竜巻が炎を掻き散らしながら襲い掛かる。

しかしその男は、周囲の炎を巻き取りながらも杖の周りから地面に向けて大人程もある火柱を走らせると、吹き上がった細く高密度な炎の一閃によつて襲い来る竜巻を真っ直ぐに両断した。

「ば、馬鹿な!!」

傭兵が叫びを上げるや否や、空中へと凝縮された炎の塊は蛇のような巨大な炎の帯へと姿を変えた。

まるで怪物の唸り声を思わせる業火の音と共に、身を翻した巨大な炎の蛇は頭上から襲い掛かる水の塊を真横に弾き飛ばす。

周囲に熱風のような水蒸気が撒き散らかされた瞬間、その巨大な炎の蛇はうねりながら分裂するように無数の炎へと分かれ、獲物を捕食するかのよう二人の傭兵の腕や足を焼き尽くした。

「ぐわあああああ!!!」

「ぎゃああああ!!!」

杖と共に四肢を焼かれた傭兵達は地面へと転がり叫び声を上げている。

しかしその男、コルベールは二人へ止めを刺すこともなく、静かに口を開いた。

「……そのまま大人しくしていたまえ。命まで奪うつもりはない」

コルベールの周囲には既に数名の傭兵達が転がっていた。

しかし死んでまでではないのか、二人の傭兵と同じく腕や足を焼かれて呻き声を上げて
ている。

彼らには鋼鉄の杖や剣を使用していた者もいたが、その全ては既に燃やし尽くされ、
どろりと溶けた鉄の塊へと姿を変えていた。

「……メンヌヴィル」

忌々しげにコルベールは呟いた。

この傭兵達から聞いた名前。

この学院を襲った彼ら傭兵団の隊長であり……、かつて自分の腹心だった男の名前。常に人を馬鹿にしたような笑みを湛え、有り余る才能を人を害するためだけに扱う男。

忌むべき仲間達を焼き殺し、自分の背に杖を向けたあの男に対して、かつての自分はその狂気に満ちた両目を奪っただけで留めていたのだ。

駒のように、命令されるがままに無実の人々を焼き殺した自分。

かつての自分があの男を殺さなかったのは、真実を知った自分が自身の所業を恐れ、その場から逃げることを選択したからに他ならない。

（私は、あの頃から変わることなど出来なかった訳ですな……。そして、あの男も……）

コルベールは呻き声を上げる傭兵へと静かに近付いていく。

地面に倒れ伏した傭兵が恐怖に濁った目を向けている中、コルベールは氷のような冷たい瞳でその傭兵へと杖を向けた。

「……お前達の隊長はどこにいる。正直に答えねば、焼き殺す」

第六十二話 学院の戦い

「ほら、どうしたー！」

傭兵が振るう鋼鉄の剣をリウスはデルフリンガーで受ける。

片手で振るわれた剣に重さは無いものの、傭兵は手慣れた様子で二、三の斬撃を加えながら呪文を詠唱していく。

「ラグーズ・ウオータル・イス・イーサ・ハガラース！」

リウスは苦しげな表情を浮かべながら斬撃を凌ぎつつ、押されるままに自身の身を大きく後ろへと引いた。

「ジャベリンー！」

傭兵の杖から生み出された氷の槍がリウスの胸へと投擲される。

リウスは両手に持ったデルフリンガーを逆手に持ち変え、飛来する氷の槍を滑らせるようにデルフリンガーで受け流した。

鈍い音を立てて氷の槍が地面に突き刺さると、傭兵は苦々しげな表情で舌を打った。

「……手間取り過ぎた。そろそろ終わりにしねえとな」

「あらそう？　大したことないのね」

苦し紛れのようなリウスの言葉に傭兵が苦笑いで答える。

「確かにな。お前のことはよく分かった」

その傭兵は肩をすくめると、杖を持った右手を軽く宙に振った。

「お前は傭兵の流儀で始末することにする」

対峙していた傭兵が後ろへと下がると、前方にいた傭兵達がボウガンの照準をリウスに合わせ、散開していた左右のメイジ達が杖をリウスへと向けている。

「まだ俺達が気付いていないとでも思ったか？　お前が時間を稼ごうとしていることに
よ」

リウスはデルフリンガーを軽く振るい、先程までの苦しげな表情を一変させると、対峙していた傭兵へと小さく笑いかけた。

「欲を言えばもう少し粘りたかったけどね。あまり大した時間稼ぎにはならなかったわ」

「舐めた真似をしてくれるじゃねえか。だが、これが実戦つてやつだ。計画には何の支障もない」

傭兵は神妙な雰囲気を漂わせながら、リウスへ向けて険しい顔を浮かべている。

「つまりお前は犬死につて訳だ。言い残すことはあるか？」

リウスは少し俯きながら、小さく答える。

「そうね……。あなたたちは」

「やれ」

下卑た表情を浮かべた傭兵はリウスの言葉も聞かずに命令を下した。即座に幾本ものボウガンの矢が発射される。

「こうしてくるだろうって思ってた」

瞬間、リウスの目前に突った石の柱が突き立った。

迫り来るボウガンの矢は甲高い音を立てて弾き飛ばされていく。

「スペルブレイカー！」

石柱の影から飛び出したリウスはそのまま右に散開していたメイジの魔法を即座に破壊しながら、左方に立つメイジへ向けて大地を蹴った。

「ウインドブレイク！」

「フレイムボール！」

左にいた二人のアルビオン兵達から魔法が撃ち出される。

それをリウスは光り輝くデルフリンガーで斜めに切り裂いていく。

「なっ！」

「ナパームビート！」

すれ違いざま、至近距離から魔力の塊で顎を撃ち抜かれた二人の兵士達は、意識を刈り取られたように膝から崩れ落ちた。

駆ける速度を緩めずに方向を変えながら、散開し始めた傭兵達へ向けてリウスは魔法の詠唱を開始する。

「ファイアーウォール！」

傭兵達の周囲に火花が散ったかと思うと、彼らを囲うように三枚の炎の壁が吹き上がった。

しかし傭兵達は攻撃を予測していたように『フライ』の呪文を駆使して吹き上がる炎を回避する。

「馬鹿が！ この程度・・・っ!？」

しかし宙に浮かび上がった傭兵たちは目を見開いた。前方から複数の光の塊が凄まじい勢いで襲い掛かってきている。

(さっきの炎は、目くらましか!?)

そう気付いたとしても既に遅かった。『フライ』の呪文を使用していた傭兵達は為す術もなく、次々と追尾する光弾に撃ち落とされていく。

「ウインディ・アイシクル！」

『フライ』の呪文を使わずに切り抜けた傭兵から十数本もの氷の矢が放たれた。

しかしリウスの視線の先にいる他の傭兵が更に杖を向けようとしている。

敢えてリウスは魔法を使わず、身を低くしながらデルフリンガーを振るいつつ氷の矢を切り抜けていく。

「つつー！」

右腕を氷の矢がかすったようだが、たかがかすり傷だ。

リウスは気にもせず、呪文の詠唱を始めている傭兵へと駆ける方向を変える。

「アースハンド！」

「マジックロッド！」

『土』のメイジが魔法を放とうとするも即座にその魔法は掻き消された。

何が起きたのかと焦った傭兵が剣を引き抜く前にリウスの斬撃が傭兵へと襲い掛かる。

しかし、横から飛び出してきた別の傭兵がデルフリンガーを受け止めた。

交差する剣から火花が散り、傭兵はその勢いのまま剣を振り切ろうとしている。

「はしやぎすぎだ！ クソガキ!!」

力任せにリウスを弾き飛ばそうとする傭兵に対して、リウスは回転するようにその巨体を受け流しながら傭兵の側面へと回り込んだ。

その傭兵の背後からは、また別の傭兵が襲い掛かってきている。

リウスは歯を食いしばりながら迫り来る傭兵達の間へ飛び込むと、地面を滑るようにしながら男達の膝へ向けて魔法を撃ち出した。

「ナパームビート！」

リウスが傭兵達の間を風のように通り過ぎた瞬間、その場で大きく弾き飛ばされるように男達の身体が宙を舞っていく。

三つ編みを翻しながら、リウスは矢継ぎ早に襲い掛かってくる傭兵達へと視線を向けていた。

こんなものは単なる足止めには過ぎない。

戦力を削ぎ切れてなどいないが、仕留めるために足を止めようものならあつという間に捕まってしまう。

別の傭兵が繰り出した斬撃を寸前のところで回避しながら、リウスは迫り来る傭兵の一団へと瞬時に瞳を向けた。

「ファイアーボール！」

撃ち出された一マイル程の火球は宙で分裂し、それぞれの傭兵達へと次々に襲い掛かっていく。

その防御のため傭兵達が魔法を使ったことを確認する前に、リウスはその傭兵の一団へと駆け出していた。

(距離を離されれば防ぎ切れない！ それなら連中を盾にすれば……！)

そう必死に考えを巡らせながら、リウスには自身の冷静な思考も認識できていた。

連中が傭兵の全員とは思えない。勝ち目は限りなく皆無に等しい、と。

それでもゼロではない。

生き残ることは、防衛の準備が整うまで時間を稼げる可能性は、ゼロではないのだ。

それなら、私はその可能性に賭けるだけだ。

かつて、元いた世界で、リウスは何度も死んだことがあった。

今の状況はそれに限りなく近く、この世界においては生き返ることなど叶わない。

しかし恐怖を一度でも抱いてしまえば、微かな生き残る道すらも潰えてしまうことになる。

(恐れるな……！ 恐れてしまえば、そこで終わりだ!!!)

そんな大騒ぎになっている広場の一面に向けて、異様な雰囲気を持つ男と、更に大勢

の傭兵達が静かに向かっていた。

「こんな所にもイキの良いメイジはいるものだな」

にやにやとした楽しそうな表情を浮かべながら、その男は白く濁った片目を遠く見える騒ぎの中心へと向けている。

『白炎』のメンヌヴィルである。

第六十三話 Mage of Flames

「そつちにいったぞ！ 仕留めろ！」

「このクソガキがつ！ いい加減にしやがれ!!」

傭兵の間を駆け抜けるリウスに対して傭兵達が次々と剣を振るう。

しかし身を低くしながら傭兵達を盾とするリウスへその斬撃が届くことはなく、逆に同士討ちまで発生する程に傭兵達は混乱していた。

舞うように傭兵を翻弄するリウスの身体には擦り傷やかすり傷がそこかしこに見て取れたが、当初十数人もいた貴族崩れのメイジ達は既に動ける者の数を半分近くも減らしている。

「エアハンマー！」

「フレイルムボール！」

傭兵の斬撃を回避したりリウスへと二つの魔法が飛来する。

しかし離れた位置から放たれた風の塊は身を翻して回避され、リウスの身体ほどもある火球はデルフリンガーによって一刀両断された。

目標を外れた火球はリウスの背後にいる傭兵へと直撃し、炎に包まれた傭兵が大きく

悲鳴を上げています。

「馬鹿野郎！ これ以上味方を巻き込むじゃねえ！」

「うるせえ！ もう隊長もこっちに向かつてるんだ！ グズグズしてる場合じゃねえんだよ!!」

その言葉に傭兵達は一瞬青ざめると、次々とリウスに向かって杖を向けた。

「ここのなりや破れかぶれだ!!!」

各々の傭兵がリウスの周囲にいる味方など気にせず、高威力の魔法の詠唱を開始する。

しかしリウスはその一瞬の隙を逃さなかった。

「ソウルストライク!!!」

リウスの周囲から光り輝く十個の光の弾が浮かび上がり、光の尾を引いたそれぞれが

詠唱中の傭兵達を吹き飛ばした。

大きく吹き飛ばされた傭兵達は他の傭兵達へと次々にぶつかり、彼らは一カ所にまとめられるようにもみくちやになっていく。

「うおおお!!」

「クソが! 何してやがる!」

わめき散らす傭兵達の周囲に次々と炎の壁が吹き上がる。

傭兵達は、今自分たちが置かれている周囲の状況に思わず目を見開いていた。

あの桃色髪の女の周囲には、既に味方の傭兵がいなくなっていた。

まるで檻のように左右と背後へ炎の壁を作られ、メイジの女が今まで使つてはいなかった長い詠唱を開始している。

「まつ、まずい……!」

『フライ』の呪文で逃げようとするも、折り重なるようにもみくちやになった傭兵達は思うように浮力を得ることが出来ない。

「へブンス……!」

「相棒!! 後ろに避ける!!!」

デルフリンガーの叫びに、リウスは詠唱を中断することを選択すると全力で大きく後ろへと飛び退いた。

瞬間、巨大な炎の波がリウスの目の前を飲み込んでいった。

余りの火力に肌が焼ける程の熱を感じ、その殺意の塊のような炎にリウスは一瞬全身が栗立ったような感覚に襲われていた。

しかしリウスは恐れることなく体勢を整えると、新しく現れた敵へと視線を向ける。

「良い動きだ」

傭兵の一団の先頭にいる、ゆらりと現れた男……。

その顔面の右半分は黒く焼けただけ、残った左目も白く濁り切った色を湛えている。その背後には二十人を超える傭兵達の姿があった。

「増援……」

乱れた息を整えながら、忌々しげにリウスは呟いた。
体力は確実に削られている。

時間も充分に稼げたとはいえない。

しかも現れた一団は……、その全員がメイジだった。

「……相棒、潮時だぜ」

「ああ？　なんだ、その剣はインテリジエンスソードか？」

ほんのかすかなデルフリンガーの呟きだったが、先頭の男は耳ざとく言葉を返した。

「たかが剣如きがつれないことを言うんじゃないよ。これからだろうが。なあ？」

心底楽しそうな顔がリウスへと向けられ、リウスはそのにやついた顔を強く睨み付けた。

こいつが、この部隊の隊長なのだろうか。

盲目なのだろう、男の濁った左目はリウスを見てはいなかった。

しかしこちらの位置は把握しているのか、にやりと笑みを浮かべた顔がしつかりとリウスに向いている。

「お前ら、手を出すな。こいつは俺の獲物だ」

その男は武骨なメイスを片手に前へ出る。

しかし、先程まで戦っていた傭兵達から不満の声が漏れ出した。

「隊長！　ここまでやられたんだ、こいつは俺達が……！」

「うるせえ、ごく潰し共が。黙ってろ」

傭兵達はびくりと身を震わせる。

メンヌヴィルの白く濁った瞳がそのまま傭兵達へと向けられると、傭兵達は青ざめた顔のまま次々に口を閉ざした。

しかし、その中の一人、アルビオン軍属の兵士が叫ぶように声を上げた。

「メンヌヴィル殿！　いくら貴殿と言えども遊んでいる時間など……！」

その瞬間、地面から走った炎の塊がその兵士を一息に飲み込んだ。

叫び声もなく一瞬の内に火柱が巻き起こると、それとは反対に周囲は凍りついたような静けさに包まれていた。

「何か言ったか？」

パチパチと炎の弾ける音が答える中、メンヌヴィルは辺りを静かに見回す。

「先ほど不満の声を上げていた傭兵達は呻くことすら止め、恐怖に濁った目をメンヌヴィルへと向けていた。」

「・・・ちつ、生きてやがるな。おい、お前ら」

「かすかに背後へ視線を向けたメンヌヴィルに、背後の傭兵達が青ざめた顔のまま答える。」

「へ、へえ・・・。何でしょうか」

「転がつてる連中はほとんどが生きてやがる。艦まで連れてつてやれ、邪魔だ」

「わ、分かりました！ 連れてくぞお前ら！」

メンヌヴィルの背後にいる傭兵達が駆けるように動き始める。

「リウスは倒れる傭兵達を魔法の射程内に収めてはいたものの、傭兵達が負傷者を連れていこうとするのを止めることは出来なかった。」

「リウスはゆっくりと緊張を高めていく。」

「間違いなく、私が動けば、この男も動く。」

「これ以上手駒を減らす訳にはいかないからな。今更お前もここから逃げられるとは思っていないだろう？」

「・・・そうね。その通りだね」

「思わぬ収穫だ。こんな辺鄙な所まで来た甲斐があるつてもんだな」

残った傭兵達が遠巻きに取り囲み始める中、リウスは小さく深呼吸をする。

「どうすんだ、相棒・・・」

「・・・こいつを倒すしかないわね」

ある意味では僥倖であるかもしれない、リウスはそう考えていた。

先程のやり取りを見る限り、このメンヌヴィルという男が傭兵達の隊長であることは間違いない。

その上、数いる敵の中でも、明らかに突出した力量を持つメイジであることも間違いなかった。

そうであるなら、こいつを仕留めれば一時的にでもこの部隊を退却させることが出来るかもしれない。

当初の目的である時間稼ぎには充分すぎる程だろう。

くつくと、メンヌヴィルが笑う。

「そう、お前の想像通りだ。俺を倒せばこの状況も打開できるかもしれないなあ」

リウスの背に冷たいものが走った気がした。

まるで内心を見透かされたような言葉に戸惑いながら、リウスは今自分が置かれた状況を意識してしまいそうになる。

今この場にいる数十人のメイジ達は全員が自分の敵であること。

先程までとは比較にならない程の致命的な状況だった。

この場で戦うことを選択すれば、誰がどう見ようとも、たとえこの男を倒そうとも……。

結果は、同じ……、絶望的な……。

胸の内に湧きあがりそうになった恐怖の感情を、リウスは必死に掻き消していく。

隙は出来る。

この男を倒せば、必ず隙は出来るはずだ。

メンスヴィルが鋼鉄のメイスを肩に担ぎ、にやりと笑った。

「上玉だな。俺を楽しませてくれ、女」

「言われなくても……！」

メンヌヴィルの挙動に全神経を集中させながらリウスは地面を蹴った。体力の残りなど気にしているべきではない。

今は全力で、即座にこの男を打ち倒す……！

「ウル・カーノ！」

メンヌヴィルの振るう武骨なメイスの先端から炎がほとぼしると、急激に成長した炎は白い光を発しながらリウスを包むように襲い掛かった。

「デルフ!!」

「任せろ!!」

リウスはその炎へと飛び込むようにデルフリンガーを振るっていた。

白い炎が真つ二つに引き裂かれ、火の粉がリウスの肌や髪をかすかに焼いていく。

「はっ！ 凄えな！ 何だ、その剣は！」

楽しそうに笑いながらメンヌヴィルが更に杖を振るうと、周囲にいくつもの炎の塊がばら撒かれていく。

「これはどうだ！」

メンヌヴィルの叫びへ合わせるかのように、周囲に散った炎の塊が猛然とリウスへ襲い掛かった。

デルフリンガーが届くか届かないかの距離まで近付いていたりウスは、魔法も使わずにそれらの火球を紙一重で避け続けながら詠唱を完了させる。

「ライトニングボルト！」

空気の弾ける音と共にメンヌヴィルの頭上から強力な魔法の雷が落ちる。

「しやらくせえ！」

明らかに死角から放たれた魔法だったが、生物のように飛び回るいくつかの火球がメンヌヴィルの頭上で爆発する。

そして威力が削がれた魔法の雷を、敢えてメンヌヴィルはその身で受け止めていた。

あくまで牽制として放っていたために今のライトニングボルトはそれほどの魔力が込められていなかった。

それを見破ったかのような予想していなかった行動だったが、リウスはそのままメンヌヴィルの肩口に向かって斬り掛かっていく。

回避をしないことで反撃の準備を整えていたメンヌヴィルは目前のリウスへ向けて

勢いよく杖を振るった。

「燃え尽きろ！」

メヌヌヴィルの魔力が凝縮され、杖から炎を生み出そうとした瞬間、リウスは詠唱を完了させていた。

「マジックロッド！」

杖の魔力が霧散するのと同時にデルフリンガーの一閃がメヌヌヴィルの肩口へと叩き込まれる。

しかしその寸前、身を翻したメヌヌヴィルは即座に回転させたメイス状の杖でデルフリンガーを受け止めると、リウスの腕を掴みながら、その耳元で囁いた。

「……てめえ。今、俺の魔法を消したな？」

「……っ！ アーススパイク!!」

メンヌヴィルの足元から尖った石の柱が突き立った。即座にリウスの腕から手を離れたメンヌヴィルは大きく後ろへとステップを踏む。

リウスは距離を離されないようにそれを追いつながらも次々と斬撃を放った。

弾かれた二つの斬撃に火花が散る中、リウスの撃ち出した光球の魔法が縦横無尽にメンヌヴィルへ襲い掛かる。

メンヌヴィルが光球を魔法で撃ち落とそうとした瞬間、リウスはデルフリンガーの斬撃を放ちながらもメンヌヴィルの魔法を破壊する。

しかしメンヌヴィルの顔には、まるで獲物を捉えた猛禽のような笑みが張り付いていた。

「馬鹿がツ!!!」

大きく横なぎに放たれたメイスの一撃に、斬撃を放とうとしていたリウスは身構えることしか出来ない。

何とか距離を詰めて直撃は避けたが、それでも腹部に強烈な衝撃を感じながらリウスは大きく吹き飛ばされた。

「がっ……!」

吹き飛ばされたリウスは地面に打ち据えられながらも流れるようにその身を起こす。

既に撃ち出されていた光の弾が次々とメンヌヴィルへ襲い掛かるも、リウスを弾き飛ばした瞬間にメンヌヴィルの持つメイスの先端から帯のような炎が吹き上がっていた。

メンヌヴィルはその炎を意のままに操りながら、死角にある魔法すら見えているかのよう光の弾を次々と撃ち落とし回避していく。

「……見たことのない魔法だな。お前……、一体何者だ?」

(こいつ……!)

先ほど受けた打撃の回復を図りながら、リウスは詠唱を開始する。

「コールドボルト!」

リウスの頭上に生み出された十本の氷の矢が撃ち出されるも、メンヌヴィルは身じろぎ一つせずに杖から吹き上がった炎を振るってその魔法を掻き消した。

瞬間、背後から一本の尖った石柱がメンヌヴィルへと突き立ったが、それすらもまるで見えているかのようにメンヌヴィルは身を翻して回避する。

「おい! お前ら! この女の髪は桃色か!」

息を飲んで繰り広げられる攻防を見ていた傭兵達は、はっと我に返った。

あの女が次々と放っていく攻撃は、手練れのメイジといえども二度、三度と致命傷を受けている程のものだったからだ。

「そ、そうですね！ そいつの髪は薄い桃色をしています！」

メンヌヴィルは眉間に皺を寄せながらリウスへと顔を向けた。

「なるほど、貴様が使い魔のメイジとやらか。ワルドの野郎……、魔法を消せるなんざ言つてなかつたつての……」

リウスは不吉な予感を振り払うように呪文の詠唱を開始していた。

「オートスペル！」

リウスの魔法による構築された魔力がデルフリンガーに流れ込んでいく。

オートスペルの魔法は、武器に『魔法構築式そのもの』を纏わせることで、衝撃によって半ば自動的に特定の魔法を放つことのできる魔法である。

複雑な魔法構築式を用いるため戦いながら扱える魔法ではなく、オートスペルの魔法を発動させるには、武器に纏わせた魔法構築式そのものへ魔力を蓄積させる必要があった。

そのため魔力分析に長けた者しか扱うことのできない、非常に扱いが難しい魔法だつ

た。

「ほう、次は何を見せてくれるんだ？」

「うるさい……！」

期待を寄せたようなにやついた表情のメンヌヴィルへ、受け止められることも視野に入れながらリウスは猛然と斬り掛かっていた。

斬り掛かりながらもメンヌヴィルによる反撃の魔法を破壊するが、もう想定済みであるかのようにメンヌヴィルは軽く右側面からの斬撃を受け止める。

そのままメンヌヴィルが左手で掴みかかろうとするが、リウスはデルフリンガーを滑らせるようにしてその攻撃を躲ししながら至近距離での呪文を完成させた。

「ナパームビートー！」

しかしメンヌヴィルは魔法が撃ち出されるよりも前に身を翻してリウスの側面へと回り込んでいく。

ぶおん、と鋼鉄のメイスが薙ぎ払われる。

それを受け流そうと身構えたりウスだったが、まるで誘い込まれているかのような嫌な感覚に大きく後ろへと飛び退いた。

「ウル・カーノ!!」

メイスから炎が吹き上がると爆裂するようにリウスの目前が吹き飛んだ。

何とか爆風に吹き飛ばされずに耐えたりウスは即座にメンヌヴィルへと全神経を集
中させた。

「ソウルストライク!!」

同時にメンヌヴィルへと肉薄したりウスはデルフリンガーを全力で逆袈裟に斬り上
げる。

煌めく剣閃と時を同じくして、リウスの背後から生み出された十個の光の弾が尾を引
いて頭上へと翻っていく。

「同じ手か！ くだらねえな!!」

リウスの渾身の斬撃すらなんなく受け止めたメンヌヴィルは、リウスの魔法へと合わ
せるように杖の先端から炎を生み出し光の弾を迎撃しようとする。

しかしそれと同時に、デルフリンガーが電気を帯びたように光を放った。

オートスペルの発動条件が満たされたのだ。

「ライトニングボルト!!」

ばちん、とメンヌヴィルの頭上に最大火力の雷が形成された瞬間、リウスは後ろに飛び退きながら畳み掛けるように魔法の詠唱を開始する。

メンヌヴィルの周囲には十個の光弾と魔法の雷。

そしてリウスは、自身にとって最も威力の高い魔法の詠唱を完了させた。

「アーススパイクツ!!!」

「鬱陶しいッ!!!」

メンヌヴィルの杖を覆っていた炎が一瞬の内に膨れ上がった。球体を思わせるような白く巨大な炎がメンヌヴィル自身の真下へと撃ちこまれる。

自身の身体すら巻き込みながら地面を爆裂させて石柱の群れを吹き飛ばすと、それと同時に分裂した炎が魔力の雷を左右から飲み込み、メンヌヴィルの周囲を飛び回る炎の蛇たちが光球を喰らうように破壊していく。

肌を焼くほどの爆風に押されたリウスは一旦距離を取りつつ、静かに息を整えながら、平然と佇むメンヌヴィルを強く睨み付けた。

「危ねえ危ねえ、やるじゃねえか」

「・・・自分の炎に飲み込まれた気がしたけど、生きてるとは驚いたわ」

デルフリンガーに纏わせていたオートスペルの魔法が消えていく。

しかしメンヌヴィルはそれを知ってか知らずか、隙一つない様相でリウスへと口を開いた。

「何を言ってるやがる、『火』のメイジが炎に強えのは当たり前じゃねえか。まあ俺は火力の調整をちゃんとしてたがな」

メンヌヴィルはにやついた笑みを顔に張り付かせたまま、もう一度口を開いた。

「しかし、惜しいな。貴様が男ならばもう少し楽しめただろうが・・・。貴様の戦い方は、ただの奇襲にすぎん」

まるで称賛するかのようメンヌヴィルが語り続ける。

しかしリウスは、先程の攻撃で仕留め切れなかったことにかすかな冷や汗を流していた。

「いじましいことだ。腕力の劣る女だからだろうが・・・、貴様の攻撃は全て虚を突く攻撃ばかりだ。

確かに並みのメイジには効果的だが、俺にとっては何ら工夫の無い攻撃に過ぎない。相性つてのは残酷なもんだな」

『相性』。

リウスにはその言葉が何を指しているのか理解できなかったが、胸中で不安に似た感情がじわじわと大きくなっていくのは確かに感じていた。

しかしリウスは怯えた表情一つなく、にやりとメンヌヴィルへ馬鹿にしたような笑みを向ける。

「そんなこと言つてて良いのかしら？」

「ああ？」

「それで負けたら恥さらしなんてものじゃないわ。部下の手前、格好つけるってのがレコン・キスタの流儀なのかしらね？」

その言葉にメンヌヴィルが噴き出すと、豪快に笑い始めた。

「なるほど、こりや大したタマだ。怯えたガキの言葉に、俺が激昂するとも思つたか？」

リウスは自分の心臓が凍りついた気がした。それと同時に、先程の『相性』という言葉が頭の中で鐘のように繰り返されていく。

戦闘の中で、幾度も感じた違和感。

徐々に正確さを増していく、こちらの動きを先読みするかのような戦い方。

(まさか、有り得ない……。でも……)

この男が、もしこちらの感情を読めるのだとしたら……。
もし、戦いの中で……。自分の思惑が筒抜けなのだとしたら……。

「緊張が増したな。そうだ。俺は目が見えんが、貴様のことはよく見えている。戦いの中で貴様が何を狙っているのかも。その内面に隠した、恐怖すらもな」

歌うようにメンヌヴィルは続けていく。

「感情は杖を鈍らせ目を曇らせる、ってな。おっと、俺の場合は鼻や耳か？ ま、どっちでもいいことだ。そうだろう？」

リウスは自分の心臓がいつの間にか強く高鳴っていることに気付いていた。

胸の内から湧き上がる感情を何とか押しとどめながら、緩みそうになったデルフリンガーを握った手に無理やり力を込める。

「貴様は、俺を仕留めきれなかった。あれ程に手の内を晒したにも関わらず」

メンヌヴィルはリウスの様子を味わうように眺め、凄惨な笑みを浮かべながらも一度静かに口を開いた。

「……貴様ほどの使い手ならば分かるはずだ。もう、勝ち目など無いことに」

全身に力を込め、メンヌヴィルに斬り掛かりながら、リウスはニューカッスル城の時のことを思い返そうとしていた。

デルフリンガーが言っていた、自分が我を忘れた時のガンダールヴの力。

あれを使うことが出来れば、この窮地を脱することができるかもしれない。

それが逃避であることにも気付かずに、リウスは必死にそれを考えながら魔法を繰り出し、メンヌヴィルへ斬撃を加えていく。

「体温が上がっているな。動きにも動揺が多い。どうすればいいのか分からないか？」
メンヌヴィルは既に魔法を頼らずに打撃による攻撃を中心に切り替えていた。

リウスの斬撃や魔法を全て予測したように回避し弾き飛ばしながら、その太い足によつて放たれた蹴りがリウスの身体にめり込んでいく。

「が……！ はっ……！」

吹き飛ばされ地面を転がったリウスは何とかデルフリンガーを手に取り、よろめく足で立ち上がった。

「ウル・カーノ・ジエーラ・テイル・ギョーフ」

リウスが詠唱を行なえない隙にメンヌヴィルが呪文を紡いでいく。

揺らぐ視界の中でリウスは確信していた。

こいつは、スペルブレイカーやマジックロッドのタイミングすら完全に把握している……。

「あ、相棒！ もうあいつに勝つのは無理だ！ 何とかして逃げろ！」

「……」

その言葉にも答えずにデルフリンガーを構えたリウスへ、メンヌヴィルがにやにやと笑う。

「女、お前は正しい。今さら逃げることなど不可能だ」

メンヌヴィルの持つ武骨なメイスの先端から炎がほとばしると、その炎は次第に勢力を増しながら生物のように蠢き始めている。

「悪いが、時間が押しているのだから、手早く済ませるとしよう」

鎌首をもたげるように、巨大な業火の先端が頭上へと翻った。

そのままりウスを喰らうかのように襲い掛かる炎の帯を何とか身を投げ出して回避する。

爆発が地面を抉り、それと同時に分裂した炎が更に襲い掛かるも、リウスは輝くデルフリンガーによってそれを受け止める。

瞬時にデルフリンガーが炎を吸収するが、それすらも予測していたように周囲から次々と炎の塊が飛来してきている。

その隙間を縫うように身を翻して避け続けていく中、火球の群れと共に接近したメンヌヴィルが鋼鉄のメイスを叩きつけるように撃ち下ろした。

「くっ……!」

ギリギリのところでデルフリンガーを使ってメイスを斜めに受け流す。

しかし、メンヌヴィルは攻撃の手を緩めない。

「消し飛べ」

斜め下から振り上げられたメンヌヴィルの杖に、魔力が凝縮されていく。

（避け……切れない……!!）

明らかかな誘いであるにも関わらず、リウスはその魔法を掻き消す以外の選択肢が残されていなかった。

「マジックロッド・・・!!」

メンヌヴィルの魔法が掻き消されるも、それと同時に振るわれたメイスの一撃がリウスの握ったデルフリンガーを弾き飛ばした。

「あ、相棒っ!!!」

弾き飛ばされたデルフリンガーの叫ぶ声を背景に、更に周囲の炎がメンヌヴィルの杖に合わせて立ち昇り、無数の炎の鞭となって四方八方からリウスへと襲い掛かった。

デルフリンガーと分断されたリウスは腰の短剣を引き抜きつつ、石の柱を発生させることで次々と襲い掛かる魔法を耐え続けていく。

メンヌヴィルはその様子を眺めながら心底恍惚とした表情を浮かべていた。

「おお、恐怖の香りだ。闘争の香りだ。人間だけが発することのできる、必死に感情を制する時の……、極上の香りだ」

リウスを襲っていた炎がメンヌヴィルの杖へと戻り、先ほどよりも更に大きい、白炎の業火へと姿を変えていく。

「……さあ、準備は整った。そろそろ貴様の焼ける匂いが嗅ぎたいものだな」

(どうすればいい……！ どうすれば……！)

しかし、リウスは気付いていた。

縦横無尽に襲い掛かるこの男の炎はデルフリンガーがなければ防ぐことが出来ない。

既に形作られた魔法である場合は魔法で掻き消すことも出来やしない。

つまりもう、打つ手など……。

「お前は誇つていい。ここまで耐えられたのは、久しぶりだ」

メンヌヴィルがそう言い放った瞬間、真っ赤な蛇のような炎がふいを突かれた傭兵達を薙ぎ払った。

「燃え尽きろ」

メンヌヴィルが放った白く巨大な炎の波に、別方向から放たれた炎の蛇が勢いよくぶつかった。

リウスの目前で二つの炎は大きく逸れ、あらぬ方向へと流れた炎は絡み合うように大きな爆発を引き起こしていく。

その爆発と共に、何者かがメンヌヴィルの頭上から襲い掛かっていた。

「ウル・カーノ!!!」

「クソが……。邪魔をするんじゃないぞ!!!」

獣のような雄叫びを上げたメンヌヴィルは頭上から撃ち出された炎の塊を躲しながら、現れた男へ向けて吹き上がった白炎を放った。

しかし、その白炎は火球による複数の爆発を受けてあらぬ方向に逸れ、その男が地面へ着地すると同時に無数の鞭のような炎がメンヌヴィルに猛然と迫っていく。

「この程度……っ!」

しかしメンヌヴィルに直撃する寸前、それらは絡み合うように大きな火柱へと姿を変

えた。

目を見開いたメンヌヴィルは左腕を焼かれながらも寸前で回避し、そのまま叫びにも似た驚愕の声を上げ始める。

「おお・・・、おおおつ。おおおおお！ お前は！ お前はお前はお前は!!!」

「一気に仕留めますぞ!!」

「はっ、はい!!」

現れた男と共に、即座にメンヌヴィルへ接近したりウスは至近距離からアーススパイクの魔法を放つ。

メンヌヴィルがかろうじて石柱を回避をしつつリウスへメイスを振るうも、小さな火球の爆発が鋼鉄のメイスの軌道を大きく変えた。

(いける・・・！)

体勢の崩れたメンヌヴィルへ更に一步踏み出したリウスは、横から飛び出してきた人物に抱えられるように突き飛ばされた。

瞬間、リウスのいた場所へ無数の魔法の矢が突き刺さる。

その人物はリウスを抱えるようにしつつメンヌヴィルから即座に距離を取っていく。

「・・・あと一步でしたな」

何が起きたのかよく分かっていなかったリウスは先ほど自分がいた場所を見やると、納得したように口を開いた。

「た、助かりました。コルベールさん」

コルベールはリウスから身を離すと、魔法の矢が放たれた方向を睨み付ける。

先程コルベールの攻撃を回避した傭兵達の幾人かがメンヌヴィルへの援護を行なったようだ。

「間違いない！ この魔法！ この待ち望んだ温度は！ お前は！ お前は、コルベール！ 隊長どの！ 俺を忘れたか!!!」

命拾いしたことすらどうでもいいのか歓喜の声を上げ続けるメンヌヴィルへ向けて、コルベールは突き刺さるような瞳で返した。

「・・・お前はまるで変わっていないのだな、メンヌヴィル」

「懐かしい！ 懐かしいぞ、隊長どの！ 二十年ぶりだ！ 今までどこにいたと言うのだ！」

メンヌヴィルが歓喜の声を上げ続ける中、リウスは殺気に満ちたコルベールの様子をちらりと見た。

「・・・知り合いですか？」

「・・・ああ。昔の、知り合いだ」

「こんなところで出会えるとはな！ はるばるここまで来た甲斐が・・・」
狂ったように笑い続けるメンヌヴィルが、はたと考える素振りを見せる。

「・・・なんだ？ 隊長どの。もしやと思うが、今は教師なのか？ 貴様が・・・、かつて『炎蛇』と呼ばれた貴様が？」

一瞬間を震わせたメンヌヴィルだったが・・・、奇声にも似た猛獣を思わせる声でもう一度笑い始めた。

「は、はは！ ははははは!! 今は教師なのか！ そうか！ 隊長どのが教師か!? 貴様が一体何を教えると言うのだ!!」

「・・・黙れ。貴様に分かるはずもない」

コルベールの言葉にメンヌヴィルは笑いを抑え始めると、興奮し切った表情のままコルベールへ顔を向ける。

「つれないな、隊長どの。俺の両目を奪った時と同じだ」

メンヌヴィルはにやにやと楽しむように呟きながら、残る傭兵達へと顔を向けた。

「あの女はお前らが仕留めろ！ この男は俺の獲物だ！ この男に手を出す奴は諸共に焼き殺す！ 分かったな!!!」

その狂気じみた怒声へ応じるように、傭兵達が怯えと殺気の入り混じった表情と共に動き始めた。

その中には負傷し苦痛に顔を歪めた傭兵達も含まれている。

それでもなお、互いの戦力差は火を見るよりも明らかなものだった。

「リウスくん・・・、君は本塔まで下がりましたまえ。私が道を作る」

しかしリウスはデルフリンガーが転がる位置を確認しながら、小さくコルベールに言

葉を返した。

「……私は、頑固だつて言われたことを忘れてませんよ。コルベールさん」
険しい表情を浮かべたまま、コルベールはほんの少しだけ笑みを浮かべた。

「今は最適な選択を選ぶべき……。そういうことでしたな」

「ええ、貴方の邪魔にはなりませんから」

油断なく二人を見つめるメンヌヴィルが呆れたように苦笑する。

「なんだ、その女が心配なのか？ らしくはないな、隊長どの」

傷だらけのリウスをちらりと見てから、コルベールはもう一度メンヌヴィルへと氷の
ような視線を向けた。

「……過去の清算をしなければならん。メンヌヴィルくん、私を恨んでくれても構わな
い」

コルベールが静かに詠唱を呟くと、手に持った杖から真紅の炎が吹き上がっていく。

「そうだ、その殺意だ。俺の両目に焼きついた、貴様の殺意だ」

メンヌヴィルの背後に広がった十名を優に超える傭兵達が杖をリウスに向け、メンヌヴィルもまた、武骨な杖をコルベールへと静かに向けた。

「・・・お前の焼ける匂いを嗅がせてくれ。隊長どの」

第六十四話 贖罪の炎

「きみ、彼らの合図はまだかね？」

学院に停泊していたアルビオン巡洋艦の甲板上、指揮官然とした貴族が艦内からひよっこりと顔を覗かせた。

問われた士官は姿勢を正すと、上官への礼を取ったまま答える。

「はっ、未だ合図はございません。先程傭兵団の本隊が向かいましたが、どうやら戦闘中のようですな」

「何、まだその段階か」

目を丸くした指揮官に、士官の男が軽く笑みを浮かべる。

「所詮は傭兵、仕事の詰めが甘いものには閉口いたしますな。しかし、あと二、三刻も待てば拠点を築けるのではないかと……」

「トリスタニアの救援軍はもう来ないだろう。こちらから艦砲射撃を行なう旨、彼らにも伝えておいてくれ」

発言の途中で挟まれた指揮官の言葉に、士官は怪訝な顔を浮かべる。

「しかし……。メンヌヴィル殿の段取りですと、彼ら傭兵団の合図を起点に砲撃を開始

するのでは……?」

指揮官の男は不満そうな表情を浮かべる。

「だからだね、彼らに知らせた上で砲撃を開始すればいいだけではないか。いつトリステイン軍が迫ってくるやもしれないこんな場所に、いつまでも留まっている訳にはいかなのだ。一刻も早く艦隊の元へ帰らなければな」

生粋の軍人である士官の男はぴくりと眉をひそめた。

艦隊司令長官であるサー・ジョンストンと同じく、この男は政治家である。

奴の子飼いの貴族であるため戦の経験が無いのは最もであるのだが……、この恥知らずな作戦を強行した上に、こうも保身の発言を行なわれるのは決して気分の良いものではなかった。

その士官の表情に、指揮官の男は不愉快を隠さないまま口を開いた。

「きみ。この分隊の指揮官は一体誰なのだね? 命令に従わぬともなれば、軍規違反として裁判にかけることも止む無しとなってしまうな」

貴様こそ張り子の虎だろうが、と内心で舌を打ちながらも、士官の男は仕方ないとはかりに恭しく頭を垂れた。

「……承知いたしました。指揮官殿のお言葉通りに決行いたします」

「まだバリケードは完成せんのか！　どれだけ時間がかかっているのだ！」

食堂の外からは男達の雄叫びと炎の弾けるような爆発音が響きわたっている。

忌々しげにその音を耳にしながら、ギトーは報告のため駆け寄ってきた生徒へと声を張り上げていた。

「あ、あともう少しということですよ！」

「アルピオンの犬共が迫ってきておるのだぞ！　ええい、一部のバリケードを簡略化する！　三階より上階の北側は二層にしると伝えたまえ！」

「わ、分かりました！　そう伝えます！」

指示を受けた生徒が走り去っていくのと同時に、もう一度すぐ外から炎が弾けるような爆音が轟いていく。

うずくまる女生徒の悲鳴が聞こえてくる中、ギトーは金属の壁で嚴重に塞がれた窓を睨み付けた。

「時間が、かかりすぎだ……！」

今の食堂の中では、轟音の鳴る反対側から外へ逃げようとする一部の生徒達を教師達が必死になだめている姿も見取れた。

ギトーはその様子をぎろりと睨み付け、近くにいた三年の教師へと叫ぶように声を荒げた。

「二階の迎撃地点に向かう！ 貴方はここへの対応を行なってくれ！」
「しっ、承知しました！ ミスタ・ギトー！」

教師のマントを翻してギトーが上階へと向かう途中、また声をかけてくる者達があった。

ギトーが振り返ると、そこには学院の衛兵達……、そして十数人の生徒達の姿があった。

「ミスタ・ギトー！ 我々はミスタ・コルベールとミス・ヴァリエールの使い魔殿の救援に向かいます！ 勝手ながら許可をいただけますようお願いいたします！」

「ぼ、僕たちも彼らと一緒に外へ出ます！ お願いです！ あの二人を救いに……！」

生徒達の言葉の途中で、ギトーは憤怒の表情を浮かべていく。

「この、馬鹿共がッ!! あのと二人が、誰のために戦っていると思っっているのだ!!!」

その一喝に生徒達はびっくりと身を震わせるも、衛兵達は一步も引かずに食い下がる。「ミスタ・ギトー、どうか! 我らだけでも!」

猛るような燃える瞳で衛兵達を睨み付け、ギトーは食堂へと踵を返した。

そのまま叫ぶように数人の教師を呼びつけ、更に呼んでもいないのに集まってきた生徒達へ向けて指示を下していく。

そしてまた上階へと向かおうとするギトーは、衛兵と生徒達へ向けて苛立った顔のまま口を開いた。

「衛兵共! 我々は貴様らを救う術など持たん! 外に出るからには、死ぬことも覚悟の上で向かうことだ!!」

目を丸くした衛兵達は各々の顔を引き締めると一斉に膝を付き頭を垂れた。

「生徒の君たちは身の安全を最優先に考えたまえ! 上階の者の援護に合わせて外へ出るように! 我ら教師の傍から離れてはならんぞ!!」

「はっ、はい!」

教師のマントを翻したギトーが衛兵達や生徒達の脇を通り過ぎると、後ろに続いていた教師の一団が彼らへの指示を飛ばし始める。

半ば駆けるかのように各々が動き始める中、忌々しげに顔を歪ませたギトーは誰に向けるでもなく小さく舌打ちをしていた。

「どこまでも、小賢しい．．．！」

ギトーの横に続く生徒の一人が怪訝な表情を向ける。

それに気付きながらもギトーは不愉快極まりないといった表情を崩さないまま、上階へと続く廊下を駆けるように進んでいく。

幾度となく、年若い女性の声が頭の中で繰り返される。

その度に胸の内から苛立ちが湧き上がってくるが、その苛立ちが一体誰に向けられているのか、ギトーには分からなかった。

―子供たちを守れないのであれば、魔法を扱える意味などありません！

ギトーはもう一度舌を打ちながら、苦々しい苛立ちと共に頭の中で繰り返される声へと答える。

（貴様なぞに言われずとも．．．！ そんなことは、百も承知だ．．．!!）

「どうした！ 隊長どの、その程度か！」

メンヌヴィルが放った無数の火球に、追尾するコルベールの放った火球がぶつかっていく。

空中で次々と爆発が発生する中、互いの地面から走った炎の波がぶつかり合い、絡み合った炎によって広場に大きな炎の壁が沸き起こっていく。

「一体どうしたと言うのだ！ コルベールともあろう者が！ 俺が強くなりすぎてしまったのか!？」

双方の目前で大きく広がる炎の壁に、コルベールはメンヌヴィルの動きを確認することができない。

いかにメンヌヴィルとてそれは同じことだったが、盲目でありながらも戦いに身を置き続けてきたからこそその直観によって、メンヌヴィルはおおよそのコルベールの位置を把握し続けていた。

「そこだ！ 隊長どの！」

炎の壁の隙間を縫って複数の火球がコルベールへ飛来する。

コルベールが瞬時に放った火球の爆発によりメンヌヴィルの火球は目標から外れていく。

しかし、爆発の余波に隠れて飛来する、最後の一発は逸らしきれていない。

瞬間、コルベールの目前へと迫る火球が石柱に貫かれた。

石柱と共に爆裂する火球を前にしながら、コルベールは動揺の表情すら浮かべないまま即座にルーンの詠唱を開始していた。

少し離れた場所にて、リウスは傭兵の放った岩の塊を避けながらもコルベールへと目を向けていた。

そのまま激昂する傭兵が喚きつつ、リウスの至近距離から魔法の詠唱を完了させる。

「死ね！ クソガキが!!」

その瞬間、傭兵の右半身で大きな爆発が発生した。

爆発は炎へと姿を変えながら吹き飛ばされる傭兵の身体をあつという間に包み込んでいく。

傭兵達が突然の攻撃に驚愕の色を濃くしながらも、傭兵の一人がリウスへと斬撃を放つ。

左方から放たれた斬撃を直撃する寸前に短剣でいなしながら、リウスはコルベールの方から次々と飛来する無数の火球へ瞳だけを向けた。

そのまま火球の隙間を身を躍らせるように潜り抜けつつ、即座に短剣を腰の鞘へと収

め、短剣の柄に指先だけで触れる。

瞬間、リウスの三つ編みがぼろりとほどけた。紙一重に蛇行していく無数の火球がすすかにリウスの髪を焼いていく。

しかしそれを気にすることもなく、リウスは静かに詠唱を開始していた。

「アーススパイクー！」

リウスのすぐ傍を通り過ぎた火球がリウスの近くにいた傭兵、そして背後にいた傭兵達へと襲い掛かった。

思わぬ攻撃に傭兵達が何とか魔法で防御し、大きく下がりながら回避を行なう中、遠く地面に転がっていたデルフリンガーが石柱に天高く弾き飛ばされる。

「め、めちやくちやだ相棒！ もっと良いやり方があったんじゃねえのか！」

喚きながらもくるくると空中に吹き飛ばされたデルフリンガーを、地面を蹴ったりリウスが上手く拾い上げた。

着地するまでの間に小さく詠唱を続けつつ両手にデルフリンガーを持ち変えながら、リウスは迫る空気の刃や魔法の矢へと即座に視線を向ける。

地面に足をついた瞬間にリウスは身を屈めながらデルフリンガーを斜めに突き立た

せ、そのままデルフリンガーを盾にしながら、飛来した数々の魔法を受け止めていく。「ソウルストライク!!」

光り輝いたデルフリンガーが寸前まで迫っていた魔法を次々に吸収した瞬間、リウスの周囲から浮かび上がった十個の光弾は即座にリウスの背後へと飛び上がった。

宙を泳ぐように光の尾を引きながら、それらはリウスから離れた位置にいる、メンヌヴィルへと襲い掛かっていく。

「ウル・カーノ・ジエーラ・テイル・ギョーフ!!」

コルベールの眼前に広がる炎の壁が弱まっていく中、次々と襲い掛かる火球を避けながらもコルベールはルーンを紡ぎ続けていく。

コルベールの杖を炎が纏わりつき、それは瞬時に大きな炎の蛇へと姿を変えていく、と同時に、コルベールのはるか頭上を十個の光弾が次々に通り過ぎていった。

メンヌヴィルは頭上から迫りくる無数の光弾を感知し、炎の壁の向こう側に発生した尋常ではない熱量を前に表情を変えていた。

「ちいっ!」

コルベールの杖から放たれた真つ赤な炎の蛇が、弱まった炎の壁を突き破った。同時に四方八方から飛来した光弾がメンヌヴィルへと迫っていく。

即座にメンヌヴィルは杖に纏っていた炎の帯を自分の周囲へと翻らせるも、防ぎ切れない光弾がメンヌヴィルを右腕へと直撃した。

骨が軋むような強烈な衝撃と共に体勢を崩されたメンヌヴィルは、何とか自身の炎を次々に爆裂させることで炎の蛇の軌道を寸前のところで逸らしていく。

「クソが……!」

メンヌヴィルは忌々しげに煙を上げる自身の右腕を確認していく。

コルベールの魔法はメンヌヴィルの右腕と背をかすっただけである。

しかしそれでも、コルベールの魔法はメンヌヴィルの身体に決して軽くはないダメージを負わせていた。

「てめえら……っ!! その女を自由にさせてるんじゃない!!」

メンヌヴィルの激昂を背景に、コルベールとリウスはそれぞれ息を切らしながらも自身の目の前にいる敵を見つめていた。

二人は互いに離れていながらにして、自分の視界の中に互いの姿を入れるように立ち回っていた。

互いが互いを気遣っている……。確かにそれも一因ではあったが、その本質はまる

で違っていることを、リウスも、コルベールも、はつきりと認識していた。

互いの目の前にいる敵は、自分の力量のみで敵う相手ではない……。

「同士討ちを躊躇するんじゃないやねえ！ その女の思う壺だろうが！ 数で押し潰せ!!」

次しくじりやがったら、俺の魔法で全員消し炭にしてやるぞ!!!」

傭兵達は苦虫を噛み潰したように顔を歪めながらも、それぞれが意を決したようにリウスへ杖を向けたまま散開し始める。

メヌ又ヴィルの言葉は単なる脅しではない。

恐怖に顔を強張らせている傭兵達の表情が、それを強く物語っているようにも見え
た。

各々の傭兵達が即座にルーンを紡ぎ、魔法の詠唱を開始する。

それと同時に複数の男達が手に持った長剣でリウスを切り裂くべく走り出していた。

彼らの目は先程までとはまるで違う、恐怖に駆られた野犬の群れのようなのである。

「相棒！ 絶対に足を止めるなよ!!」

デルフリンガーの叫びと共に、リウスも迫ってくる傭兵達へと駆け出していた。

デルフリンガーを盾にしながら、魔法を凌ぎ、斬撃を凌ぎ、瞬きほどの一瞬の隙すらも見せないように……。

「っ……！」

背後から聞こえてくる戦闘の音に、コルベールは息を整えながらもリウスへの支援を行なおうとしていた。が、コルベールに対峙するメンヌヴィルは隙一つなく、コルベールへと静かに杖を向けていた。

「……隊長どの、俺は失望したぞ。あの女に救われた挙句、よもや貴様があの女の援護に合わせて『炎の蛇』を放つとはな」

リウスと傭兵達の戦う音を背景にしながら、コルベールは無表情で話し続けるメンヌヴィルを何も言わず睨み付けていた。

リウスと同じくコルベールの身体にもそこかしこに掠り傷や火傷が散見していた。

それは行動不能になる程のものではないにしろ、メンヌヴィルとの攻防において防戦一方になってしまっていることを如実に表していた。

「二十年前、貴様はメイジとして完成していた。俺は常々そう思っていたものだ。その貴様を象徴する『炎の蛇』は、援護などまるつきり必要としていなかったはずだ。

貴様一人で……、完結していたはずだ」

一度言葉を区切ったメンヌヴィルは、かつての目標であった目の前の男へともう一度口を開いた。

「貴様はこの程度ではないはずだ。あの女を焼けば……、貴様もかつての面影を少しでも思い出してくれるのか？」

地の底から響くようなメンヌヴィルの呟きに、コルベールは静かに自身の思考を深めていく。

そしてコルベールは顔を歪ませて笑うと、滔々と語り続けるメンヌヴィルへ静かに口を開いた。

「なあメンヌヴィルくん。ここは私の命に免じて、引いてくれないかね？」

何も答えないメンヌヴィルに、コルベールは静かに続ける。

「レコン・キスタの目的がこの学院であることは分かっている。だが、君の言葉を聞いていて思ったよ。君はかつての私にいつまでも囚われていたのだと」

話し続けながら、コルベールは焼けた大地に足を踏み出し、メンヌヴィルへとゆっくり近付き始めていた。

「君と私の戦いは、どちらかが死ぬことで初めて終わるのだろう。しかし私はもう、この炎で命を奪わぬと決めたのだ」

「……」

「ならば、その過去を今ここで消し去るといい。君の目的はそれで達成される。学院から立ち去ってくれるのであれば、私は何も抵抗などしない」

互いの距離は十メートル程まで近付いていた。

放心したような表情のメンヌヴィルに対して、コルベールはもう一度、静かに口を開いた。

「・・・ダングルテールを覚えているか？ 副長」

まるで搾り出すような力の無い声で、コルベールはその村の名前を口に出していた。

今がグズグズしている状況でないことは分かっている。

分かっているはいたが・・・、今この時だからこそ、コルベールはどうしても目の前の男に自分の言葉を伝えておきたかった。

「・・・我々は決して許されない。だが、あの村の虐殺と同様のことを君がこの学院にも行なうつもりならば・・・。

今度は、私こそが君を止めなければならぬのだよ」

放心した表情のまま、メンヌヴィルが小さく口を開いた。

「……何故だ、隊長どの。何故、お前は……あの程度のことです……」
「頼む、副長。引いてくれ」

呆けたように呟くメンヌヴィルへ、コルベールは静かに続けた。

「私はもうこれ以上、人を殺したくはないのだ」

コルベールを白く濁った瞳で見つめながら、メンヌヴィルもまた絞り出すように呟いていた。

「俺は……俺は貴様のような腑抜けを、二十年以上も追ってきたのか……」

わなわなと震えながら、メンヌヴィルは次第に憤怒の表情を浮かべていく。

「許せぬ……。俺は自分が許せぬ……。隊長、貴様は指先からゆつくりと消し炭にしてくれろ。」

貴様が絶命する前に……！ 貴様が守ろうとしているものを、残らず灰に変えてく

れる!!!」

炎を杖に纏わせ始め、悪鬼のような表情を浮かべたメンヌヴィルの姿。

それはまるで、数千と見続けてきた悪夢の中に佇む、あの時の自分の姿を目の前にしたかのようだった。

「……残念だ。ならば、こうするとしよう」

コルベールが小さく振るった杖から、小型の火球が宙に浮かび上がった。

メンヌヴィルはその火球を感知していたものの、自分の位置とはまるで違う、十数メートル程の上空へと浮かび上がった火球へ一瞬呆気にとられる。

「贖罪は……、まだ終わってなどいかなかったのだがな」

瞬間、小さな火球が爆発した。

それをきつかけとしたように宙で次々と爆音が鳴り響くと、火球から伸び上がった、空気を引き裂くような炎が急激に膨れ上がっていく。

メンヌヴィルは驚愕の表情を浮かべながら、コルベールが放った魔法を即座に理解していた。

「『爆炎』かつ!!」

空気中の水蒸気を『錬金』により気化した燃料油へと変える。

空気と混じり合った『それ』は火球の爆裂を引き金にして周囲の空気を燃やし尽くし、窒息と強力な熱射によって範囲内にいる全ての生物へ致命的なダメージを与える。

理論的にはトライアングル・スペルとして確立されているといえども、『爆炎』は誰でも扱える魔法ではない。

対流する空気中に気化油を発生させる『錬金』の正確さ……、炎の燃焼速度を計算に入れた緻密な火球の爆裂範囲……。

正に、才のある者が努力と実践を積み重ねてこそ、初めて扱える程の魔法であった。しかしこの位置では、この魔法の使用者ですらも……。

「この位置なら、私と君だけが射程内だ」

メンヌヴィルの思考を読んだかのように、コルベールはただ小さく笑みを零していた。

「やはり、貴様は本物だ!!! 隊長どの!!!」

そう叫びながらメンヌヴィルは頭上に広がる炎の渦へと一瞬の内にルーンを紡ぎ、この場で最も適した自身の魔法を放っていた。

笑みを張り付かせながらも開いた口からは水分が失われ、眼球や舌に焦げ付くような熱を感じていく。

その中でも、これ以上なく研ぎ澄まされたメンヌヴィルの感覚は一寸たりとも途切れることがなかった。

メンヌヴィルの放った白炎が、薄い絹布のように広がった。

頭上に巻き起こる炎が空気中の水分や酸素を燃やし尽くしていく。

それは連鎖するかのように広がり続け、直下にいるメンヌヴィルやコルベールすらも

覆い尽くそうとし始めている。

メンヌヴィルの放った白炎は、薄く広く、頭上に広がる炎の渦の下半分をほんの一瞬だけ包み込んでいた。

「うお、おおおおおッ．．．!!」

薄く広がった白炎がほんの一瞬、血液が流れたかのように厚みを増し、波打った。

「おおおおおああアツツ!!!」

メンヌヴィルとコルベールの頭上が突如として爆発した。

その爆発は広がり続ける炎の渦の連鎖を空気ごと断ち切り、頭上に広がっていた『爆炎』の効果範囲を捻じ曲げていた。

直下へと広がろうとしていた『爆炎』は行き場を失い、更なる空気を求めるように上

空へと一瞬だけ大きく伸び上がったが……。

そのまま二人の頭上に広がっていた炎の渦は急速に力を落とし始め、そのまま空気を燃やし尽くす音と共に、消え失せていった。

「か、はは……、はははは……」

炎が掻き消えた後の沈黙を過ぎて、数メートル程先にいるメンヌヴィルが小さく笑い始めている。

その声を耳にしながら、少なからず熱射を受けていたコルベールは全身からかすかな煙を上げつつ、持てる力を出し切ったかのように地面へ膝をついていた。

(まさか……、『爆炎』すらも……)

コルベールの心は決して折れてなどいなかった。

しかし今の魔法は、正に『必殺』だったのだ。

同じ手を、この男は二度と許しなどしないだろう。

「はははは……。貴様は、やはり『蛇』のままだ。隊長どの」

満足げに呟いたメンヌヴィルが、武骨な杖をコルベールへ向ける。

「今のは俺ですら死を覚悟した。そうだ、これこそが戦いだつた。

貴様ならば……、俺にこの感覚をもう一度味わわせてくれると……」

そう口にしたメンヌヴィルの身体がぐらりと揺れた。

その隙を目にしたコルベールは弾かれたように手に持った杖をメンヌヴィルへと向ける。

「ウル・カーノ!!!」

我に振り返り目を見開いたメンヌヴィルがほぼ同時に白炎を放つ。

二つの炎は絡み合うように激突し、二人の間で大きな爆発を引き起こした。

吹き飛ばされたメンヌヴィルは何とか体勢を立て直しつつ地面を滑るように着地するも、コルベールは爆発の勢いのまま地面を転がっていく。

「……どうした。どうした隊長どの。もう精神力が限界なのか？」

「……それは、貴様も同じだろう。メンヌヴィル」

全身に力を込めて立ち上がろうとするコルベールの姿に、歩み寄るメンヌヴィルは小さく笑ったままだ。

「おっと……。あちらも決着がついたようだ」

瞬間、地面を揺らす爆音と共に、コルベールの近くへ何か吹き飛ばされてきた。

鈍い音と共に地面を転がりながらも、その人物は震える上半身を何とか引き起こしつつ、地面に転がった長剣をよろよろと手に取った。

「隊長どのに気を取られでもしたか？ 同じ場所に来るとは、手間が省けるってなもんだ」

顔を少し俯かせ、荒い呼吸を繰り返していたその人物が、ちらりとコルベールを見る。至るところに打撃や切り傷を受けながら、土に汚れ、ぼろぼろになったその姿は……、リウスだった。

「コ、コルベールさん……。動けますか……。？」

疲弊し尽くした朦朧とした表情で、リウスがコルベールへ視線を向けている。

コルベールは、静かにリウスの目を見つめ返していた。

彼女は、決して諦めてはいなかった。

諦めてはいなかったが・・・、コルベールは自身の経験から、この戦いの答えを既に出していた。

「メンヌヴィル・・・。彼女は」

「聞くに堪えんよ、隊長どの」

コルベールの言葉を遮るようにメンヌヴィルが小さく呟いた。

無表情だったメンヌヴィルは次第に笑みを浮かべ始めると、もう一度口を開く。

「終わりか。終わりなのだな。何とも・・・、呆気ないものだ」

コルベールを見下ろしていたメンヌヴィルが杖を構えると共に、二人を囲み始めていた傭兵達も同時に杖を向けた。

「せめて一息に焼き尽くしてやる。ああ・・・、貴様の焼ける香りが、楽しみだ」

ゆつくりと味わうようにメンヌヴィルがそう呟いた時、メンヌヴィルと傭兵達の乗ってきた巡洋艦から、音もなく発煙弾が上がっていった。

しかし、それに気付いた者は、この場には誰もいない……。

第六十五話 Relief

学院の広場は正に戦場然とした様相が広がっていた。

幾度の爆発により地面は抉れ、鋭利な風の刃で切り裂かれ、そこかしこに鋼鉄の矢や氷の矢が突き刺さっている。

その中で、メンヌヴィルと傭兵達に杖を突きつけられている二人の男女の姿があった。

「ふ、ふふ。あははは……」

その内の一人、疲弊し尽くしたりウスが、俯きながらも小さく笑い始める。

傍らで力無く膝をつくコルベールはそのりウスの様子に怪訝な表情を浮かべていた。

「……なんだ？ 追い詰められて狂いでもしたか？」

杖を突きつけている一人、メンヌヴィルがにやにやと面白そうに、残酷な笑みを浮かべていく。

「あはは……いや、アンタ達のことを考えると面白くってね」

この状況が面白くて仕方ないとも言おうかのようには、リウスは声を落として笑い続けている。

一方のメンヌヴィルは次第に笑みを抑え始めると、白く濁った瞳でリウスを冷たく見つめ始めていた。

この女の感情に変わりなどない。

こちらを馬鹿にするような笑い声の裏では、今でも強い怯えが色濃く燻っている。

この女の脈拍や呼吸音、筋肉のおこりや骨の軋みを聞いていても、この女の身体は既に戦うどころではない程に限界が近くなっていた。

間違いなく、それ以外には何も無いはずだ。

「アンタ達は、私達に時間をかけすぎたんじゃないの？」

「……どういう意味だ？」

くすくすと笑いながら、リウスは小さく口を開いた。

「……またルイズに、怒られちゃうわね」

守ること。

それはこの世界に来るまでは単なる口実に過ぎなかった。

使い魔として召喚され、ルイズを守ると心に決め始めたことすら、とどのつまりは自分の過去を忘れないための行動でしかなかったのかもしれない。

しかし、今この胸に沸き起こる決意は、それとは違っているように思える。

今この時、私がすべきことは何か。

今、変化しようとしているこの場の状況で……。

『私達の敵の注意を、私だけへと向かせなければならぬ』……！！

リウスの左手のルーンが徐々に光を強め始める。

動揺しながらも傭兵達が杖を持つ手へ力を込めると同時に、驚愕の表情を浮かべたメンヌヴィルは傭兵達へ叫ぼうとしていた。

この女は、戦うことすら、剣を振ることすら難しいはずだった。

骨が軋むような音……、筋肉が弾けるような肉体の異音……、この女の身体が悲鳴を上げているのは既に明白だった。

しかし、ろくに動けないはずの目の前の女は、何かをしようとしている……！

「お前らッ！ この女を……!!!」

リウスの左手から周囲を照らす程の強い光が発せられた瞬間、大地を蹴る音と共にリウスの姿が消えた。

メンヌヴィルの咄嗟に構えた鋼鉄のメイスが甲高い音と共にリウスの斬撃を受け止める。

交差するメイスとデルフリンガーの間で火花が散った瞬間、傭兵達はルーンを紡ぎながら即座に杖をリウスへと向けようとする。

その時、傭兵達の足元から真紅の火柱が次々と発生した。

驚愕の声を上げた傭兵達はルーンの詠唱を中断し、咄嗟に吹き上がった火柱を回避する。

地面に膝をついていたコルベールは吹けば飛びそうな意識の中、歯を食いしばるようにしながらも、か細い声でルーンの詠唱を続けていた。

もう精神力はほとんど残ってなどいない。

この場の状況も致命的であることには変わりはない。

それでも、彼女が諦めないのであれば……！

「邪魔は、させん……っ!!」

残る精神力を振り絞ったコルベールの眩きと共に、地面から沸き起こった無数の火柱が勢力を増して各々の傭兵達へと襲い掛かった。

リウスを仕留めようとしていた傭兵達の意識が襲い来る火柱へと向き、尋常でない速度で放たれたリウスの斬撃をメンヌヴィルがかりうじて受け止めていく。

「クソ、が……!!」

既にメンヌヴィルは、リウスとの戦い、そしてコルベールとの戦いにおいて決して軽くは無いダメージを負っていた。

そして今、有り得ない程の速度で次々とリウスの斬撃が放たれていく。

動きを先読みしながらも余裕の無いメンヌヴィルの身体へ、更にいくつもの傷が刻まれていく。

しかしリウスの動きがかすかに鈍った瞬間、リウスの繰り出したナパームビートの衝

撃を傷だらけの片腕で受けながらも、メンヌヴィルの放ったメイスの一撃がリウスの脇腹へと直撃していた。

吐き出してしまいそうになった息を何とか飲み込みながら、真横に吹き飛ばされたりウスは出来る限りの力を振り絞って、大きく口を開いた。

「今ですッ!!!」

「トルネードランス!!!」

メンヌヴィルのはるか頭上から竜巻にも似た風の塊が襲い掛かった。

「な・・・っ!」

身を翻したメンヌヴィルの左腕が切り裂かれ、鋼鉄のメイスの先端が竜巻に貫かれた

かのように砕け散った。

それと同時に、驚愕の表情を浮かべていたメンヌヴィルと傭兵達の目前に飛び降りてきたのは、教師のマントを翻した、ギトーの『偏在』の姿だった。

「ウインドブレイク!!!」

広範囲の風の塊がメンヌヴィルと傭兵達を大きく吹き飛ばした。

「今だッ!!!」

そのギトーの叫びに合わせて、リウスやコルベールの周囲に次々と人々が降り立ってくる。

それと同じくして弧を描いた無数の魔法の矢が傭兵達へと降り注いだ。

吹き飛ばされていたメンヌヴィルと傭兵達は、雨あられと襲い来る魔法の矢に対応せざるを得ない。

「早く！ 学院へ!!」

リウスの腕を肩に回して引き起こそうとしていたのは、学院の衛兵達だった。見ると、コルベールの周囲にも守るように学院の教師達が立ちはだかっている。

学院の塔の窓から放たれた『レビテーション』の魔法によって、学院のメイジ達は宙に浮かびながらも自身の魔法を使えるようにしているようだ。

「ガキ・・・共・・・っ!!!」

降り注ぐ魔法によってその場で釘付けにされていた傭兵達が、何重もの魔法の壁を作ること魔法の矢を防ぎ始めている。

同時にメンヌヴィルがぼろぼろになった鋼鉄のメイスを勢いよく振るい、それへ合わせるように傭兵達の杖からも次々にあらゆる魔法が放たれ始めていた。

傭兵達による魔法の大部分は空中にいる生徒達へと向けられているものの、同時にリウスやコルベールに対しても傭兵達の魔法が襲い掛かってくる。

宙に浮く生徒達が協力し合いながら魔法で必死に防御を行なっていく中、リウス、そしてコルベールの目の前に立ちはだかつたギトーの『偏在』が二人の目前へ勢いよく風の防壁を作り出していた。

しかし、リウスと衛兵達の元に飛来してきた大きい石弾の雨が、ギトーによる風の防壁を突き破った。

(直撃する……!)

ギトーの『偏在』が砕け散るのを目の当たりにしつつ、即座にリウスは詠唱を行なうために立ち上がろうとするが……。

「ぐ……う……っ!」

小さい呻き声と共に、立ち上がろうとしたリウスが前のめりに地面へ倒れ込む。

全身に走った激痛と疲労により、リウスは詠唱はおろか立ち上がることも出来なかった。

周囲にいる衛兵達が焦った様子で倒れ込んだリウスへと視線を向ける中、土に汚れながらもリウスはもう一度腕と足に力を込めていくが、リウスの身体はまるで言うことを聞かなかった。

(何で、何で動かないのよ．．．！ 動きなさい！！ 動いて！！)

反動。その言葉が焦るリウスの脳裏によぎった。

さつきはあのニューカッスル城の時のように、ガンダールヴのルーンによる本当の力を引き出せていた。

しかし、それは一瞬だけだったのだ。

何が足りていなかったのか、あの時のニューカッスル城とは違い、あくまでリウスの身体は『限界を超えて無理やり動くことが出来た』だけに過ぎなかった。

「嬢ちゃん!! 俺達の後ろにいろ!!!」

衛兵達が迫り来る魔法とリウスの間へ次々に立ちはだかっていく。

そのまま身を屈めた衛兵達は自身の身体を壁にしながら、左腕に携えていた小盾を目前へと構えていた。

しかし、彼らのその小盾はあくまで武器による攻撃を止めるだけに過ぎず、風の防壁を突き破る程の強力な魔法を防ぐことなど到底叶わない代物だった。

「だ、駄目……！ やめて……っ！」

小さく叫んだリウスの身体を覆うように、数人の衛兵がリウスを抱え込んだ。

「俺達のことはいいですから！ 身体を小さく！ 頭を下げて！」

一人の衛兵がそう叫んだ瞬間……、リウス達の近くに二人の人間が飛び込んできた。

「させるかっ!!」

「させません!!」

リウスの盾になっていた衛兵達の目前に、数メートル程の分厚い土壁と青銅のゴーレム達が立ちはだかった。

石弾の雨はその大半が土壁によって威力を削られ、そのまま青銅のゴーレムが斜めに構えた大盾によって石弾が弾き飛ばされていく。

「は、早く！ 行きましよう！」

シユヴルーズが杖を構えながら叫ぶように声を上げる中、次々と飛来する魔法によって土壁があつという間に削られていく。

ギーシユの作り出していたワルキューレの一体が、飛んできた石の槍に貫かれて粉々に砕け散った。

残るワルキューレがリウスを抱きかかえ、その場の全員が学院へと駆け出し始めた時、シユヴルーズは背後にもう一度同じような土壁を作り出していた。

しかし、地面から土壁が立ち現れた瞬間に、土壁の向こう側で次々と爆発が巻き起こった。

無数の炎による爆発で土壁が大きく弾け飛ぶ。

殿に陣取っていた衛兵達が爆風に巻き込まれ、吹き飛ばされるように地面へと転がっていく。

衛兵達が呻き声を上げる中、爆風を免れたシユヴルーズとギーシユは足を止めて咄嗟に振り向いていた。

半身を爆発に巻き込まれ、地面に転がっていた衛兵が叫ぶ。

「い、行ってください！ 我々のことは気にせずに、学院の中に!!!」

しかし、その衛兵の視線の先……、そこにいたシュヴルーズはルーンの詠唱を続けながら杖を掲げていた。

「貴方達を見捨てるなんて……！」

次々に大型のゴーレムが散らばっていた衛兵達の背後へ立ち現れる。

「出来る訳がないでしょう!!!」

シュヴルーズの額に脂汗が浮き上がるも、精神力の残量など構いもせずシュヴルーズは詠唱を続けていく。

大型のゴーレムはその身体を金属の塊へと変えながら、同時に自身の背から簡易な四足獣の形をしたゴーレムを生み出していった。

金属のゴーレム達が次々と飛来する魔法をその身で防いでいく。

シュヴルーズの生み出した四足獣のゴーレムが衛兵達を背に運びながら、同時にギースユの生み出したワルキューレ達が大盾を構えつつ傭兵達へ突撃を開始する。

そして傭兵の魔法が突進するワルキューレへと集中し始めた時、ワルキューレとは別

の方向から無数の氷の槍や風の刃が傭兵達へ向けて次々に撃ち出された。

焦る傭兵達が再度魔法での防御を行なう中、リウス達の近くへ、コルベールを背に抱えた教師と生徒の一団が到着した。

「動けるか!!?」 「戻るぞ!!」

教師の一団と共に、リウス達は学院へともう一度駆け始めた。

空中にいた生徒達も学院の窓から内部への退避を始めている。

駆ける一団の中、リウスの横を走るギトーがワルキューレに抱きかかえられていたりウスをぎろりと睨み付ける。

「ヴァリエールの使い魔! 一つ言わせてもらおう!」

朦朧とする意識のまま、ワルキューレの腕の中で短い呼吸を繰り返していたリウスがギトーへ目を向ける。

リウスの視界には、一人の教師に背負われながら、リウスと同じようにおぼろげな目を向けるコルベールの姿があった。

傭兵達も教師陣も、コルベールも無事だったことに、リウスは小さく安堵の息を漏らしていた。

「貴様は、大馬鹿者だ!! どうやって逃げるつもりだったのかね!! ちゃんと教えてもらおう!!!」

「ミスタ・ギトー! そんなこと言ってる場合ですか!」

「そうですよ! 貴方こそ時と場所をちゃんと考えてください!」

ふらつくギーシュとシュヴルーズが次々に非難の声を上げる中、ギトーはカツと目を見開いた。

「やかましい! ミス・リウス! 学院の中に戻ったら、たつぷりと小言を言わせてもらうぞ!」

一団は本塔の近くまで辿り着いていた。

それでも背後から魔法の矢が飛んできているものの、先程までに比べるとその数は圧倒的に少なくなっていた。

追ってくる背後の傭兵達は、本塔にかなり近付いたことで学院のメイジによる魔法の援護を警戒しているようだ。

「よし! あつちの渡り廊下に入入り口が……!」

そうギトーが叫んだ時、背後から遠雷のような轟音が一齐に響きわたった。

アルビオン巡洋艦の艦上にて、アルビオン兵の一人が物見からの報告を告げる。

「二番艦の砲撃も本塔の下部および渡り廊下に命中です」

「よし、装填急げ。本塔二階へ砲撃を集中させる。斜角は下げるな」

艦隊を仕切っていた士官が短く告げる。その傍らには不安げに顎をいじっている指揮官の姿もあつた。

士官は土煙を上げている本塔と渡り廊下を静かに見つめていた。

渡り廊下は二隻の砲撃によつて無残にも破壊されたようだが、肝心の本塔にはさほどの損傷も見られない。

「やはり、固いな・・・」

視界の端に映っていた指揮官が士官をちらりと見る。

それを気付きながらも、士官はまるで気付いていないかのように指揮官を無視し続けていた。

「装填、よしー」

船員の叫び声が甲板に響く。

それに答えるように、士官も叫ぶように声を上げた。

「目標、本塔二階！ 右から順に、撃ち方始めッ！」

空気を引き裂くような轟音が次々に響き渡る。

同時に離れた位置で浮かぶ巡洋艦、二番艦からも次々に雷にも似た砲撃の音が轟いていく。

砲撃を行なった艦砲は即座に装填が行なわれ、その数十秒後には同じ斜角のまま次々と砲撃が繰り返されていく。

士官の傍らに立っていた指揮官が砲撃の轟音を怯えるように両手で耳を押さえている中、士官の元へ報告が届いた。

「申し上げます！ トリスタニア方面より竜騎士が接近！」

その叫ぶような声も、次々に轟く砲撃の音の中ではかすかにしか聞こえてこない。

士官はその伝令にも聞こえるように出来る限りの大声で返した。

「何騎だ!？」

「一騎です！ 風竜と思われませう！」

その報告に、土官は怪訝な表情を浮かべながら頭の中で考えを巡らせていた。

通常、巡洋艦を攻撃するための竜騎士は火竜を扱うのが一般的であり、その上で小隊規模以上の数でなければ損害を与えることが出来ない。

それにも関わらず風竜を使うとすれば、十中八九、単なる偵察だろう。

まず有り得ないだろうが、火の秘薬を使用した玉碎覚悟での攪乱の可能性もある。

「上部甲板の艦載砲にぶどう弾を装填しておけ！ 念のためだ！」

「はっ！」

たかが一騎の風竜では何も出来ることはない。

轟音の中で伝令が走り去っていくのを見届けることもなく、土官はもう一度攻撃目標である本塔へと目を向けるのだった。

はるか上空を飛来する風竜が大きく翼をはためかせ、下方に浮かんでいる巡洋艦へと方向を変えていた。

目標の巡洋艦は本塔への砲撃を繰り返しながら、少しずつ移動を開始している。

竜騎士を撃ち落とすために使用するぶどう弾はその射程が極端に短いのが弱点である。

そのため射程に至るまでにはまだまだ距離があるのだが、甲高く鳴り響く風の音の中、竜騎士の真後ろに座る人物が叫ぶように声を上げた。

「……までで良い!!」

竜騎士は更に風竜の速度を上げながら、その声へ叫ぶように返した。

「御武運を!!」

瞬間、風竜が方向を変える寸前に、背後の人物が矢のように飛び降りていくのが竜騎士の瞳に映った。

竜騎士はその人影が瞬時に四つに分かれていくのを見送りながら、方角を変えてトリスタニアへと飛び去っていった。

「一番艦の命令に従え！ 傭兵団を回収し三番艦と合流せよ！ 本塔の至近距離より砲撃を行なうぞ！」

二番艦は傭兵達が多く乗り込んでいる艦である。

どうやらメンヌヴィル率いる傭兵団は砲撃と同時に突入する作戦を行なえなかったらしいが、メンヌヴィルはその可能性すらも考慮して傭兵の一部を艦内に残していた。

傭兵団の損害はさほどのものでもないとのことなので、再突入を行なうにはまだ充分な余力を残しているのだ。

この分隊の旗艦である一番艦が砲撃を繰り返すのを背景に、二番艦はゆるゆると移動を開始する。

アルビオン兵の号令を背景に甲板上の船員達が慌ただしく作業を行なっていく中、額の汗を拭いた一人の船員がふと、頭上を見上げた。

「何だ……？」

直後、頭上から降ってきた影たちが鈍い音を立てて甲板に着地する。それと同じくして、一番艦の砲撃の音が周囲に轟いていく。

その音を聞きながらも目を見開いた船員は、ぱくぱくと口を開けることしか出来な

かった。

「て……、て……」

着地した人影は、その全員が同じ姿形をしていた。

教師のマントを羽織っている、賢者然とした年老いた姿。

白髪を風になびかせ、静かに構えた杖を手に、魔法の詠唱を開始している。

その姿は、トリステインの貴族であれば誰しもが知る、オールド・オスマンの姿だった。

「敵襲だっ!!!」

その叫びにアルビオン兵達が驚愕の目を向ける。

三人の老人たちが詠唱を続けているのを目の当たりにし、アルビオン兵達は即座に杖を引き抜いていた。

しかし……。

「エア・ストーム!!!」

甲板に出現した特大の竜巻に、アルビオン兵達は無残にも巡洋艦の甲板から根こそぎ吹き飛ばされた。

誰もいなくなつた甲板上で、周囲を囲んだ竜巻を尻目にオスマンの一人が甲板をきよろきよろと見回す。

「ふむ、(ハハ)じやな」

甲板上、目的の位置へと目を向けたオールド・オスマンの『偏在』達は精神力を使い切る勢いのまま、長い詠唱を完了させた。

「トルネードランス!!」

二つの巨大な竜巻が、分厚い甲板とその奥にある鉄の壁を大きく斬り裂き、突き破つた。

オスマンは船の下部まで貫かれた大穴を静かに眺める。

アルビオン巡洋艦の構造を知る、マザリーニの言葉が正しいのなら・・・。

突然、巡洋艦がぐらりとバランスを崩した。右へかすかに傾いたかと思えば、反動のように左へ大きく傾いてしまっている。

それでも何とか浮遊しているものの、さつきまでと比べて航行が不安定であるのは明

白だった。

先程放った魔法は、間違いなく巡洋艦の機関部を破壊したらしい。

「・・・よし。あとは、もう一隻じゃが」

オスマンがそう呟いた瞬間、周囲に巻き起こっていた分厚い竜巻が爆発と風の刃によつて破壊された。

同時に降り注いだ氷と炎の矢を、二人のオスマンが生み出した炎と氷の壁によつて防ぎ切る。

「この、じじいッ!!」

怒り狂った傭兵達とアルビオン兵達を静かに眺めながら、オスマンは小さく溜め息を吐いた。

「・・・あつちの艦は、無理っばいかの」

そう呟きながら、次々と飛来する魔法へと合わせるように、三人のオスマンは自身の杖の周りに特大の火球を作り出していた。

「置き土産じゃ」

数マイルもある三つの火球が弾かれたように天高く撃ち出された。

同時に、オスマンによる三人の『偏在』達は襲い来る魔法に飲み込まれ、散り散りとなる。

しかし既に撃ち出されていた特大の火球は空中で次々と爆裂し、余りにも無数の炎の矢となつて周囲に降り注いでいた。

アルビオン兵や傭兵達、甲板も、帆も、次々と炎の矢に貫かれて炎上していく。

既に、アルビオン巡洋艦の二番艦は、到底航行など行えない状況へと成り果てていたのだつた。

「馬鹿な……。何が起きた……。！」

アルビオン分隊の旗艦、一番艦の甲板にて、士官の男が目を見開いていた。

本塔へと向かおうとしていた二番艦の甲板が炎上し、ぐらりとバランスを崩し始めている。

「あれは何だ！ きみ！ 一体何が起きているんだ！ 何とか言いたまえ!!」

未だ砲撃を続けているものの、一番艦の甲板に動揺が広がっていく。

隣でわめき散らす指揮官が士官へと掴みかかった。

「何故我々が攻撃を受けている！ 何が起きたというのだ！ きみの責任だぞ!!」

唾を飛ばしながら士官へと掴みかかっていた指揮官が、更にわめいた。

「本塔の向こうにまだ巡洋艦がいるはずだ！ 呼び戻せ！ 総司令官は仰っていたのだぞ！ この学院の本塔は、三隻の巡洋艦でなければ・・・!!」

士官は徐々に怒りの表情を浮かべると、片手で指揮官の襟を掴んで横へと投げ飛ばした。

「貴様などに言われんでも分かっている!!」

甲板に転がりながら、目を丸くした指揮官の顔が朱に染まっていく。

「き、貴様・・・！ 軍事裁判にかけてやる！ 貴様と貴様の家族を打ち首に・・・！」

「二番艦より手旗信号あり！」

「報告せよ!!」

激昂する指揮官を無視して、士官は走り寄ってくる伝令へと叫んだ。

「二人の学院のメイジにより、二番艦は機関部を破壊されたとのこと！ 既に二番艦は航行不能！ 救援を求めております！」

「二人の、メイジだと・・・!?!」

忌々しげな声と共に士官が憤怒の表情を浮かべていく中、伝令が報告を続けていく。

「侵入者は老人の姿をしていたとのことです！ その全てが『偏在』であり、本体の位置および姿は確認されておりません！」

たった一人のメイジが巡洋艦を落とすなど不可能だ。

そう考えていた士官は、伝令の言葉から一つの可能性を即座に導き出していた。

「オスマンか・・・!?!」

トリステイン魔法学院の学院長である、オールド・オスマン。

三百年もの長きを生きたメイジとして知られているが、それ以上のことは何も分かっていないに等しい。

長い時を生きたなどという突拍子もない噂と共に、何の信ぴょう性も無いまま偉大なメイジだと言われている一方で……。

その実力は、誰も知らないのだと。

「砲撃停止！ 砲撃を停止せよ!!」

士官の男が叫ぶように指示を下す。

その声を聞いたアルビオン兵達は一様に動揺を静め、士官の言葉へと従るかのように慌てて動き始めていく。

「総員！ 戦闘配置！ 侵入者は何としてでもその場で仕留めよ！ 伝令！ 三番艦を呼び戻せ!!!」

第六十六話 守るべき意味

学院の大地を揺るがす轟音が一番艦の内部にも強く響きわたっていく。

二番艦が墜落したことに、多くの船員や兵士達が顔を青ざめさせながら駆け回る中、その通路の中央を憤怒の表情を浮かべた人物が足早に進んでいた。

「クソが……!!」

魔法の使い過ぎなのだろう、その男の顔色は悪く、時折ふらついたように廊下の壁へ手を付けている。

しかし、白い瞳を湛えた怒りの形相と、その身体から立ち昇る殺気が、男の姿を傷付き怒り狂った恐ろしい怪物のようにも思わせていた。

その男の顔を見た兵士が小さく息を飲んでその男へ道を譲る。

同じようにその男を見た船員達は次々に心底怯えたような表情を浮かべると、金縛りを受けたかのようにその場で凍り付いていた。

その男、メンヌヴィルは巡洋艦の甲板へと辿り着くと、その中でアルビオン兵へ指示を飛ばしている士官の元へと歩み寄っていた。

「おい、説明しろ……!」

振り向いた士官の襟をメンヌヴィルが掴みあげる。

「何故、俺達の艦が落ちてやがる……! 一体何が起きた!!」

万力のような力で締め上げられた士官の男は苦しげな顔を浮かべながらも、その手を何とか振りほどいた。

「オ、オスマンだ……! 学院のメイジによって、貴殿の艦は航行不能に陥ったのだ!」

メンヌヴィルはその言葉を飲み込みながら、ゆっくりと怒りの感情を露わにしていく。

「それを……! てめえらは指をくわえて見てたつてのか!」

「こちらとしてはどうすることも出来なかつたのだ! 今、三番艦を呼び戻している!

メンヌヴィル殿はこの艦の艦のアルピオン兵を率いて、再突入を……!」

「きみ! きみがメンヌヴィルだな!? 役立たずの傭兵というのはきみのことだろう

!」

どすどすと足音を立てながら、艦内から駆けるように指揮官の男が近付いてくる。

「……ああ?」

「貴様らが失敗しなければ、一隻程度の巡洋艦を落とされたところで決着はついていたのだ! この事態は貴様の責任だと分かっているのかね!」

佇むメンヌヴィルの殺気にすら気付いていないのか、その指揮官はメンヌヴィルの元

へと詰め寄っていく。

「貴様には今すぐこの責任を取ってもらおう！　今すぐにこの艦を降りたまえ！　そしてあの学院へと突入して……！」

指揮官の男へ、メンヌヴィルが一瞬の内に杖を振った。

爆炎が指揮官の身体を瞬時に包み込んだ。

その勢いのまま、轟く爆音と共に炎に包まれた指揮官は巡洋艦の外へと吹き飛ばされ、眼下へと消えていった。

「き、貴様は、何を……っ！」

目の前で起きた惨劇に士官の男が杖を引き抜こうとするも、同時に士官の足元から吹き上がった大きな火柱が一瞬の内に士官の身体を吹き飛ばした。

凍り付いた甲板上の兵士達の間へ、炎に包まれた士官が鈍い音と共に落ちていく。

「……指揮官殿は戦死した。今から、この分隊の指揮は俺が取る」

地を響かせるような声に、アルピオン兵達は上官の軀をただ見つめることしか出来ない

かった。

「……隊長どのであれば、巡洋艦の砲撃でも死ぬことはないはずだ。あの男を殺せるのは……俺の炎だけなのだから……」

意味の分からない言葉の口にするメンヌヴィルへ、アルビオン兵達は恐怖に濁った目を次々に向けていく。

「砲撃準備だ。外にいる学院のメイジ共を狙え。あそこに群がるメイジ共を、皆殺しにしろ……！」

「……え、……っかりして……！」

「負……者を運び……！ 今の……だ！」

頭の奥で響き渡る耳鳴りと共に、ギーシュは自分の身体が強く揺すられているのに気が付いた。

目を開けるのが億劫なのと、自分が何故地面に倒れているのか分からないのとで、ギーシュの意識はもう一度暗闇の中へ落ちていきそうになる。

「……シーシュ！ ギーシュ！ お願いだから、目を開けて!!」

その声に、ギーシュの意識はゆっくりと覚醒していく。

愛しいモンモランシーの声がすぐ近くから聞こえてくる。

そうだ、僕たちは、学院の中に逃げようとして……。

ギーシュは我に返ると、ぱつとその身体を起こした。

「あだっ!」

「いったっ!」

急に動いたギーシュにモンモランシーの身体がぶつかつた。

土に塗れたギーシュの傍らでモンモランシーが尻もちをつく。

「このバカ! いきなり起き上がらないで!」

「ごめんよ! でも、一体何が何やら……!」

怒るモンモランシーに謝りながらも、ギーシュはきよろきよると辺りを見回す。

自分たちのすぐ近くには瓦礫の山、地面に転がる多くの人々に、何とか学院へ運び入

れようとすする教師や生徒たち……。

「さつき砲撃があつたのよ！ あなた達はそれに巻き込まれて……、そうよ！ 早く学院の中に入らないと！」

「そ、そうだ！ ミス・リウスはどこに……!? あの人はもう限界で……！」

モンモランシーの言葉を無視するようにギーシュが立ち上がろうとする。

が、足に力が入らないのかよろよろとその場に倒れ込んだ。

「ちよつと！ 無理しないで！」

「ギーシュ！ お、お前も早く学院に！」

モンモランシーもよく見知つた小太りの男子生徒が駆けるように近付いてくる。

一方のギーシュは、蒼白の表情を浮かべながらも必死の形相で再度立ち上がろうとしていた。

その姿にモンモランシーは胸の内では何やら苦い感覚を覚えつつも、ギーシュの肩を両手で優しく掴んだ。

「あの人は私に任せて！ マリコルヌ！ ギーシュをお願い！」

そう言われた小太りの男子生徒がギーシュの腕を肩に回す。

『フライ』の魔法でそのまま学院へと運ばれていくギーシュをほんの一時見つめてから、モンモランシーは目に止めた女性の元へと一人駆けていった。

遠く転がっていたリウスの周りには数人の衛兵がいた。

彼らは身体の各所に火傷のような傷を負っていた。しかしその痛みには歯を食いしばりながら、必死にリウスを学院へと運び入れようとしている。

「ねえ！ 大丈夫!？」

モンモランシーの姿に気付いた衛兵の一人が声を上げた。

「ここ、この人を、早く中に……」

リウスを抱えようとしながらその衛兵はよろよろと膝をついた。

見ると、周りの衛兵達も既に限界に近いようだ。

リウスはかすかに目を開けていたが、弱々しい朦朧とした瞳のまま短い呼吸を続けている。

そのぼろぼろの姿に息を飲んだモンモランシーは焦る感情を抑えつつ、衛兵たちへと顔を向けた。

「ミス・リウスは私に任せて！ あなた達こそ早く学院に！」

「し、しかし……」

「いいから！ 渡り廊下が壊されたんだから、今は上の階からしか学院には入れないの

よ!? ミス・リウスの方が軽いんだから、私が・・・!」

すると、彼らの近くにギトーや教師陣がふわりと着地した。

「何を言い合っている! 早く行くぞ!」

「そ、その人達をお願いします! ミス・リウスは軽いですから、私が運びます!」

モンモランシーの言葉に、教師陣は衛兵達へ肩を貸しながら次々に宙へと飛び立つていく。

一人残ったギトーがモンモランシーと共にリウスを運び入れようとするも、ギトーの身体がぐらりと揺れた。

「わ、わっ! ちよつと、ミスタ・ギトー!」

倒れかけたギトーが何とか踏みとどまる。

「心配は、無用だ・・・!」

両足に力を込めて、ギトーはもう一度『フライ』の呪文を唱えていく。

それを手助けするようにモンモランシーも『フライ』の呪文を唱えていくが・・・。

彼らの周囲に、遠く、遠雷のような轟音が響きわたった。

「なっ……」

ギトーの小さな声と共に、モンモランシーも遠く浮かぶ巡洋艦へと勢いよく振り向いていた。

巡洋艦の舷側がゆるやかに黒煙を上げていく。

空を切る音と共に、何かの黒い点が、勢いよく、こちらへ向かって飛んできている。

「ふ、伏せ……」

ギトーのその声とほぼ同時に、周囲へ竜巻のような暴風が巻き起こった。

広範囲を覆い尽くしたその暴風は、ギトーやモンモランシー達の間所だけでなく、『フライ』で逃げようとしている多くの生徒達すらも守るように吹き荒れていく。

暴風がかすかに砲弾の軌道を変え、襲い来る砲弾は見当違いの方角へと次々に着弾していった。

「きゃあっ!!」

砲撃の轟音に地面が大きく揺れていく。

モンモランシーが悲鳴を上げる中、彼らの近くに一人の人間がふわりと着地した。

「あつぶないのう。間に合ったようで何よりじゃ」

その人物はギトー達や逃げ切れていない生徒達へと目を向けてから、もう一度遠くに浮かぶ巡洋艦を睨み付けた。

「オ、オールド・オスマン……」

へなへなとモンモランシーが地面に腰を落とす。

オスマンの姿を見たギトーも、心なしか安堵した表情を浮かべていた。

「こちら君たち、早く連れて行きなさい。儂の精神力も、もう限界が……」

どんどんどん、と遠く砲撃の音が響きわたっていく。

先程の砲撃はまだ微調整が済んでいなかったのか二、三発の砲弾のみが正確に飛んできていたが、今度の砲撃は更に多くの砲弾が飛来してきていた。

「限界が……！ 近いんじゃないの……!!」

もう一度オスマンの生み出した暴風が壁となって砲弾の軌道を変えていった。

更に、もう一度鳴り響く砲撃の音。

それを耳にしたオスマンは底の見えかけている精神力を限界まで振り絞っていく。

一回目の砲撃は五発。先程の砲撃も同数の五発だったが・・・。

この砲撃で止めと言わんばかりに、更に七発の砲弾が飛来してきている。

(防ぎ切れん・・・！)

オスマンの生み出した暴風がほんの一瞬力を落とす、次々と暴風の壁を砲弾の雨が突き破った。

飛来する砲弾が、逃げ遅れた生徒達や、ギトー達の元へと向かってくる。

その瞬間、周囲を埋め尽くす程の魔法が一齐に降り注いだ。

「砲弾を狙う必要はない!! とにかく、撃ち落とせ!!」

数十人のメイジによる魔法の束が飛来する砲弾へと襲い掛かった。

そのほとんどが砲弾には当たらず空を切っていくが、そのいくつかは砲弾へと直撃し、切り裂き、粉々に砕いていく。

轟いた砲撃の音が消え、最後の砲弾が撃ち落とされた。

生徒達による魔法の矢はそれでも降り注いでいたが……、それも次第に数を減らし、魔法の雨はゆつくりと止んでいった。

迫り来る砲撃を防ぎ切ったことに、学院の中にいたメイジ達も、外にいたメイジ達も全員が色めきたった。

わあつという歓声が周囲を包み込んでいく。

次々に外にいたメイジ達が『フライ』の魔法を詠唱し始め、ギターやモンモランシ―もそれに続こうとする。

しかし、二人の肩に担がれていたリウスがかすかに顔を上げて、必死に声を上げようとしていた。

「ま、まだ……！」

それと同時にオスマンは目を見開いていた。

巡洋艦の砲撃は一旦止まっているのだが、並び立つ無数の砲身、そのいくつもが、ゆつくりと動いている。

「まだです・・・!!」

「まだじゃッ!!!」

落雷のような砲撃の音が一齐に鳴り響き、その音に学院のメイジ達は周囲の時が止まったような感覚に襲われていた。

無数の砲弾が徐々に近付き、精度を上げていた砲撃は多くの生徒達がいる場所と、詠唱を開始していたオスマン、ギターやモンモランシーのいる場所へと向かってくる。

「あ・・・」

モンモランシーの口から乾いた声が漏れた。

その時モンモランシーの視界で、どこからともなく、急に白い光があふれ始めていた。

「あ、相棒ッ！ やめろ!!!」

モンモランシーの傍から叫ぶような声が聞こえてくる。

それと同時に、肩を貸していたリウスが、モンモランシー達の前へとゆっくり歩を進めていた。

リウスの周囲に小さな、複数の氷の欠片が次々に浮かび上がった。

それらは八方から生み出した氷を取り込みながら、内側からもめきめきと氷の成長を続けている。

ガンダールヴのルーンが際限なく光を強め始める。

周囲を照らす程の光が、更に強くなっていく。

ガンダールヴのルーンに導かれるままに、リウスは理解していた。

ガンダールヴのルーンを刻まれた自分自身と、デルフリンガー。

その双方から放たれた魔力の共鳴によって、リウスは何の痛みも感じないまま身体を動かすことが出来るようになっていた。

目に映る全ての動きが緩慢になり、自身の魔力、周囲の魔力、その全ての動きを瞬時に分析していく。

その中で詠唱を続けるリウスは……、『自身の身体の内部へと』魔法構築式そのものを生み出し続けていた。

リウスの肉体に宿る生命力が、魔力に変換されていく。

自分の命が急速に削られていくのを感じながら、自身の生み出した魔力がデルフリンガーの魔力と混ざり合い、更なる莫大な魔力が身体中を駆け巡っていく。

「やめろ!! やめろ、やめろ!!!」

デルフリンガーの叫びを耳にしながら、リウスは魔力の奔流の行く先を、周囲に浮かぶ氷の矢へと向けていった。

(死んで……、たまるか……!!)

突如として氷の矢が急激に成長し始めた。

氷が弾けるような異音と共に、それらは数メートルもの巨大な氷の槍へと次々に姿を変えていく。

リウスの視界が真っ赤に染まっていく。

その中で、リウスはこの世界での記憶が濁流のように脳裏へ駆け巡るのを感じていた。

守るべきものは、数多くあった。

この世界において、リウスは数多くの守らなければならないものを見つけていたのだ。

ルイズの笑顔が脳裏によぎる。

自分が死ねば、あの子と二度と会えなくなる。

そんなことは……、認められる訳がない……！

(諦めて、たまるか……っ!!!)

リウスは迫り来る無数の砲弾へと瞳を向けていた。

その軌道と速度に合わせ、自身の周囲に浮かぶ氷の槍の照準を合わせていく。

「コールド……!!」

それぞれの砲弾が、射程に入った。

「ボルトツ!!!」

空気を切り裂く音と共に、氷の槍が次々と撃ち出された。

無数の氷の槍はそれぞれが弧を描くように迫り来る砲弾へと向かっていく。

二発の砲弾へ氷の槍が直撃した。

砕け散った砲弾は生徒達への軌道を大きく外れていく。

左右の砲弾を氷の槍が貫く。

更に迫り来る砲弾へと向けて、氷の槍は生物のように宙を泳ぎ、無数の砲弾を撃ち落とすとしていく。

その中で、最後の二発がリウス達の元へと迫り……。

それを複数の氷の槍で吹き飛ばした瞬間、リウスの意識はぶつりと途絶えていたのだった。

第六十七話 喧騒の後で

暗闇の中、全身を走った悪寒にリウスは勢いよくその身を起こした。

「はっ……！ はっ……」

短く息を切らしながらリウスは動揺のままに周囲を見回していく。

ほのかなランプの灯りが、今リウスのいる部屋をぼんやりと照らしていた。

「い……、今の、は……?」

どうやらこの部屋は学院の医務室であるようだが、それを意にも介さずに、リウスは先程の悪寒に向けてひたすらに不安げな表情を浮かべていた。

何か、底知れぬ気配が生み出されたような……。

余りにも莫大な魔力が一瞬弾け飛んだような、異様な感覚……。

「……おい相棒よ、静かにしろよ。他の連中が起きちまうだろう」

寝かされていたベッドの脇から、聞き覚えのある声があった。リウスは混乱した表情でベッドに立てかけられていた長剣へと目を向ける。

「デルフ……」

「……」

しかしデルフリンガーは何も言わずに黙りこくっている。

リウスは徐々にはつきりしてきた頭で、周りの様子をもう一度見回していった。どうやらこの部屋は元々教室の一つであったようだ。

部屋の隅には木製の椅子や机が乱雑に積み上げられ、どこから運ばれてきたのか、整然と並べられているベッドには多くの人達が横になつて寝息を立てていた。

この部屋のベッドは全て満員であり、その一つにリウスも寝かされていたようである。

部屋の中で静かに響いている寝息の音を聞きながら、リウスは先程の悪寒よりも先に、まず聞くべきことがあったことを思い出した。

「ねえ……。あの後、どうなったの……。？」

声を極力落ししながらデルフリンガーに問いかけるも、デルフリンガーは何も答えな

い。

その様子を不思議そうに見つめてから、リウスはひとまず医務室の外で話そうとゆっくり身体を動かしていく。

「いつ……た……」

ほんの少し腕を動かしただけでも軋むかのような鈍い痛みが全身に走った。

それでもリウスはデルフリンガーをその手に取ると、よろよろとしながら医務室の外へと向かっていった。

部屋の外に出ると、人気の無いひっそりとした廊下をかすかな月明かりが照らしていた。

ほとんどの窓はバリケードで塞がれているが、人が通り抜けられそうにない上部の小窓は塞がれないままぼっかりと星空を映し出している。

外は、既に真つ暗である。

かなりの時間を眠ってしまっていたらしい。

「デルフ。あの後……」

「……」

リウスは怪訝な表情を浮かべながら、廊下の壁を背にしてゆっくりと腰を下ろした。身体中に巻かれた包帯をちらりと見て、デルフリンガーへともう一度目を向ける。デルフリンガーは、未だ何も答えない。

「デルフ．．．？」

不安げな声で、リウスはもう一度デルフリンガーへと声をかけた。

それでもいくらかの沈黙が続いたが、その内、デルフリンガーは小さく声を出した。

「．．．相棒。俺はよ、怒ってるんだぜ？」

その言葉にリウスはデルフリンガーを見つめる。

デルフリンガーはまた少しばかり黙りこくってから、もう一度声を出した。

「．．．無茶するなってよ。俺は．．．、言ったはずだ」

「．．．」

リウスは何も言えずに、ただデルフリンガーを見つめていた。

「．．．どうでもいいってのか？ 俺たちの、心配は．．．」

「違うわ……。どうでもいいだなんて……」

かすかな、戸惑ったようなリウスの言葉に、デルフリンガーはほんの少しだけ笑う。かちやかちやという音が、やけに小さく聞こえたような気がした。

「……俺たちだって分かってるんだよ、相棒の行動が正しかったのは……。それでもよ……。他にやりようがよ……」

「……(ぐ)めん」

リウスが小さく、絞り出すように声を出した。

沈黙が周囲を包み込む。

その内に、デルフリンガーがぼつぼつと言葉を紡いでいく。

「相棒はよ……。自分のことを分かってねえんだよ……。何でお前は、いつも……。自分を捨てることを選んだよ……。どれだけの人間が、相棒のために……」

おぼろげな記憶の中、リウスはいくつかの光景を静かに思い出していた。

倒れ込む自分の前に立ちはだかる、衛兵達の後ろ姿……。

ワルキューレに抱きかかえられ……。砲撃に吹き飛ばされた後にも……。

「頼むよ相棒……。自分で自分を、苦しめないでくれよ……。

俺に相棒を……、殺させないでくれ……」

リウスの目からかすかに涙がこぼれた。

リウスはそれに気付き、ほんの少し驚いてから、もう一度口を開いた。

「ごめん、なさい……」

口から出た明らかな涙声に、思わずリウスは小さく鼻をすする。

子供のような、ぐすぐすとした音が廊下に少し響くと、デルフリンガーが鞘をかちやかちやと鳴らした。

「ま……、いいわ別に。俺つちがもつと相棒を守ってやりやいいんだからな」

使用される剣が使い手を守る。

その言葉にリウスがかすかに笑うと、デルフリンガーも小さく笑い返した。

「無茶すんなつてのも、これ以上は言わねえよ。心配してるってことだけ覚えててくれ

てりやいいわな」

「もう……。何なのよ、デルフ」

小さくからからとデルフリンガーが笑う。

それに笑い返したリウスはかすかにこぼれていた涙を指で拭った。

「ああ、それでよ。あの後の話だっけ？」

リウスはデルフリンガーに顔を向けて、小さく頷いた。

「うーん、そうだな。学院に逃げ込んでからは、てんやわんやだったぜ。相棒とか怪我したやつの治療が始まって、学院の防壁を更に固めて……。それでも砲撃やら傭兵共の攻撃やらが立て続いてよ」

リウスが頷くのとほぼ同時に、デルフリンガーは続ける。

「何度目だったかねえ、侵入しようって奴らを何とか食い止めてよ。それも夜になったらピタッと止まっちゃまって。そんで、今のこの状態よ」

リウスはじつとデルフリンガーの話を聞いていた。

『風』のメイジがこぞって外を確認してみたいだが、アルビオン兵の連中は巡洋艦まで引いてつたらしい。

オスマンとかいう爺さんが言うには、本塔を破壊するにはあの砲数の巡洋艦が最低で三隻は必要なんだってよ。そうじゃねえと積み荷が持たねえんだとさ」

痛みを気にしないようにしながら、リウスはもう一度デルフリンガーへと目を向ける。

「三隻・・・いなかっただけ？」

「それが、オスマンの爺さんが一隻落としたんだってよ。だから連中は決め手を欠いちまつてるんじゃないかって言ってたな」

その言葉にリウスは小さく驚くと共に、安堵していた。

それなら・・・何とかなるかもしれない。

「オールド・オスマンは、ルイズのことを何か言ってた・・・？」

オスマンがルイズのことを知っている訳がないとは思いつつも、思わずリウスは問いかけていた。

「ああ、嬢ちゃんは今トリスタニアにいるらしいぜ。軍の連中が守ってるってよ」

予想もしていなかった情報に、リウスは小さく息を吐いた。

今のトリスタニアが危険なのは分かっているが、それでも・・・軍の人達と一緒にいるなら・・・。

次第に身体を動かすのが億劫になるのを感じながら、リウスは先程目を覚ました時の

感覚を再度思い出していた。

痛みに呻きながらゆっくりと身体を起こしつつ、よろよろと壁に手を付く。

「お、おい。相棒、どうした」

「さつき、向こう側で変な気配があつて……。たぶん、女子寮の方だと……」

「止めろつてば、今は戻つて寝とけつてばよ。相棒はいつつもこうだ。舌の根も乾かねえ内に……」

「……何をしてるんだ、貴様は」

かすかな足音と共に、声がかけられる。

壁に手を付いたままりウスが顔を上げると、そこにはランプを手にしたギトーの姿があつた。

「お、ちようどいいところに。ギトーさんよ、相棒の代わりに頼まれてくれねえか？」

「何だ、気安いぞ。インテリジェンスソード」

「俺つちの名前はデルフだつて言つただろがよ。ああ、それより……」

ぺらぺらとデルフリンガーが喋り始め、戸惑うリウスからその内容を聞き出していく。

「ふん……。仕方がないな、私が見てこよう」

鼻を鳴らしたギトーが女子寮へと歩を向ける。

それに付いていこうとしたリウスを、ギトーはちらりと見下ろした。

「北側は狙われていないとはいえ、貴様が来たところで足手まとい以外の何物でもない。そこで待つていたまえ」

そう言い放ったギトーはつかつかと廊下の奥へ進んでいく。

「わかりました……。お願いします、ギトーさん」

壁を背にして、リウスはもう一度よろよろと腰を下ろしていく。

背後からかすかに聞こえてきたリウスの言葉に、もう一度鼻を鳴らしたギトーは誰にも聞こえない程の小さな声で呟いた。

「……まったく。貴様がそうだから、剣も気安くなるのだ……」

しばらくして、女子寮にあるルイズの部屋を見てきたギトーが医務室の前に戻ってくる。

「おつ、ギトーさんよ。遅かったじゃねえか」

「……どうした、寝てるのか？」

デルフリンガーの言葉を無視しつつ、数多くの毛布を手にしていたギトーは廊下に横たわるリウスへと目を向けていた。

「ああ、眠っちまったよ。アンタもどうした、その毛布」

「途中でメイドと会ったのでな。ついでに医務室まで運んできただけだ」

ギトーは毛布の山を魔法で降ろしながら、すうすうと眠っているリウスをちらりと一瞥した。

「まったく、良いご身分だな。人に頼みごとをしていたとは思えん」

「そう言つてやるなよ。眠らせてやってくれ」

ふん、ともう一度鼻を鳴らすギトー。

風の魔法で一枚の毛布がふわりと宙に浮かび、横たわるリウスへとその毛布が掛けられていく。

その様子に、けらけらと笑ったデルフリンガーが声を出した。

「そーいや、何でアンタ起きてんだ？ 精神力も限界だっただろーが」

ギトーは怪訝な顔を浮かべた。

まずは頼みごとの内容を聞くのが筋というものであろうに。

持ち主が持ち主なら、剣も剣だ。

「ああ、目が冴えてしまつてな。私だけでなく、他の教師の数人も・・・」

説明をしようとしていたギトーはふと気付いた。

たかがインテリジェンスソードに説明をしても、何の意味もないのだ。

「いや、貴様に言ったところで・・・」

「ああ、あれだろ？　一瞬膨れ上がった、あの変な感覚」

びくりと怪訝な表情を浮かべて、ギトーはデルフリンガーへと目を向けた。

「たぶん、相棒もあれで目が覚めたんだぜ？　だから調査しに行こうとしてたんだろ」

「ミス・リウスは、自分の部屋に異常があったとしても・・・？」

ギトーがそう呟くと、デルフリンガーは面白いものでも見つけたかのように小さく笑っている。

「ミス・・・。ミス、ねえ」

「わざわざ茶化すな、インテリジェンスソード」

「デルフだ、デルフ」とデルフリンガーが返しながら、もう一度声を出した。

「そうだ、相棒の部屋に何かあったか？」

「・・・お前の思考体系は一体どうなっているのだ。それを始めに聞くべきだろう」

小さく溜め息を吐いたギトーは続ける。

「・・・見てきたのだがな。何かの破片が散らばっているだけだった」

「へー、どんな？」

呑気な声を上げるデルフリンガーを睨み付けながら、ギトーは懐に入れていた小さな破片を取り出した。

「何か、球体だったものだろうな。弾け飛んだように粉々になっていた」

「何で球体だつて分かるんだ？」

「破片を見てみるといい」

デルフリンガーの近くに、小さな破片がふわりと着地した。

「断面以外の部分が滑らかに弧を描いているだろう。他の破片も同じだった」

「ふーん、誰か入ってきたのかね」

「それはない。鍵がかかっていた上に、窓は破壊されていないからな。ミス・リウスにはお前から伝えておいてくれ」

そう言つて踵を返そうとしたギトーに、デルフリンガーが声を上げる。

「おいおい、相棒をそのままにしようつてのか？」

背からかけられた言葉にギトーは少しの間考え込んだが・・・。

小さく溜め息を吐くと、横たわるリウスへ向き直った。

「まったく……。何故私が……」

「たぶん相棒は起きねえからよ。前もこうだったんだ、頼むよ」

リウスを見下ろしていたギトーがそのまま『レビテーション』の魔法を唱えようとするも、またもやデルFRINGERが声を上げた。

「おっと、落とさねえでくれよ。俺っちはちゃんと見てたんだぜ？ 学院の中に相棒を

運ぼうとして、アンタがよろめいて……」

「いちいち説明せんがいい。こうすればいいのだろう」

『レビテーション』の魔法をかけたまま、ふわりと浮かび上がったリウスをギトーはその腕の中に抱えていった。

こうすればバランスも取りやすい上に、重量もさほどのものではなくなる。

ギトーは、腕の中で毛布にくるまって眠っているリウスを一瞥した。

赤子のような無垢な表情を浮かべ、すうすうと静かに寝息を立てたまま、目を覚ました様子は欠片もない。

「ふん……」

思っていた以上に、軽く、小さな身体である。

こんな身体であの数の傭兵達と戦っていたなど、今もなお、到底信じることなど出来なかつた。

「……襲うなよ?」

デルフリンガーの眩きに、ギトーは馬鹿にしたような笑みで返した。

「……貴様はもう少し礼を学ぶべきだな。こんな子供に手を出す訳がなからう」

そのままギトーは医務室の扉を魔法で開けると、空いたベッドまでリウスを運んでいく。

ゆっくりリウスをベッドに横たわらせてから、布団を被せ、その上に先程掛かつていた毛布を被せてやった。

未だ目を覚ました気配もなく、リウスは静かに眠ったままである。

ちらりとその姿を目端で見送ってから、ギトーは音も無く医務室から外に出た。

「……ありがとな、ギトーさんよ。相棒を助けてくれて」

ギトーが医務室の扉を閉める中、壁に立てかけられていたデルフリンガーがそう言葉

を告げた。

それに答えることもなく、仏頂面のままギトーはその場を後にする。

「……って、あら？　俺たちは放置なのか？」

ギトーはゆつくり振り向きながら、くつくと笑った。

「貴様はここで不審者がいないか見張っていたまえ。剣なのだから眠る必要はないだろう？」

「俺つちだって眠るっての。お、おい、待てつてば」

小さく笑いつつ、ギトーはその場から立ち去っていった。

「……ま、いいか。しゃあねえな」

誰もいなくなつた廊下でデルフリンガーは呟いた。

そのまま、自分の近くに置かれたままの小さな破片へと意識を向ける。

たぶん、この破片は前に見たことのある、あの球体なのだろう。

しかし、あの時に心底感じた嫌な気配はきれいさっぱり無くなつていた。

「……俺つちには分からねえけど、全ては結局、運命の赴くままだな。

ずっと前に……、アイツもそう言つて……」

誰に言うでもなくそう呟いたデルフリンガーは、ふと自身の記憶を巡らしていく。

「・・・アイツって、誰だったっけか」

しばらくの間ウンウン唸ってから、デルフリンガーは面倒くさそうに思考を途切れさせた。

今思い出せなくてもいざれ思い出すことだってあるだろう。

自分には、有り余る程の時間がたっぷりとあるのだから。

「なんせ、俺たちは剣だから・・・」

そう呟きながら、デルフリンガーはいつものように、まどろむ意識の中へと自分自身を落とし込んでいくのだった。

アルビオン巡洋艦の貴賓室で窓を叩くかのような風の音を聞きながら、薄暗い部屋の中、一人の男が静かにワイングラスを傾けていた。

そのグラスの中には琥珀色の液体が波々と注がれているが、まるで身体の傷を癒していくかのように、男は一息の内にその液体を飲み干していく。

男の吐息がかすかに漏れる。そのまましばらく、手の中にある空のワイングラスをつ

まらなそうに弄んでいた。

「・・・酔えやしねえ」

小さく、男が呟いた。

傷だらけの身体には包帯が巻かれてはいるものの、その包帯は既に汚れ、黒ずんでいた。

その男、メンヌヴィルはワイングラスをテーブルに置き、風が揺らす窓を静かに見つめていた。

「・・・さつき、学院の方角で妙な気配がしたな。撤退は正しかったってことか・・・？」
そう呟いてから、まるで自分を慰めているような言葉に気付いたメンヌヴィルは、自嘲気味に口元を歪ませていた。

部屋を照らしていたランプの灯りがかすかに揺らめき、小さく音を立てながらその光を弱めていく。

たとえ真つ暗になった部屋でも、盲目であるメンヌヴィルには全く問題ではない。

とはいえ誰かが来た場合にはランプの光が必要になるのだろうが、今のこの状況ではランプの灯りが消えていた方が都合が良いとも言えるのだった。

「・・・潮時だな」

その呟きはすぐさま風の音で掻き消えたが、メンヌヴィルの胸中では残り火のよう

に、何か、得体の知れない感情が渦巻いていた。

学院の任務。それは余りにも容易く、何一つとして問題のない任務であるはずだった。

それに反して、メンヌヴィルは積み上げてきたものを全て失う程の打撃を被っていた。

アルピオン巡洋艦が学院から移動し始めてから今まで、生き残った傭兵達はメンヌヴィルに一度たりとも近付くことがなかった。

アルピオン兵達も今は大人しく指示に従っているものの、この巡洋艦がアルピオン艦隊へと合流した後は反旗を翻すのが目に見えている。

メンヌヴィルの傭兵団は正に終わりだった。

主人に準じる者への攻撃こそ、傷付いた狂犬を始末するには充分すぎる理由だろう。

「・・・く、くくっ」

そうした中でも、メンヌヴィルは小さく笑い始めていた。

学院で思わぬ足止めを受け、メイジ共からの攻撃を受け・・・、こちらが巡洋艦の砲

撃を加えた上に可能な限りの攻撃を繰り返したにも関わらず、あの学院を落とすことは叶わなかった。

この事態の原因となったのは紛れも無く、かつて自分が目標としていた隊長と・・・、あの、桃色髪の女だった。

「・・・面白い。何が起きるかは、分からねえもんだ」

全てを失ったメンヌヴィルは低く笑い続けていた。

メンヌヴィルの胸の内に広がっていくのは、学院への怒りでも、窮地に陥った自分への憐憫でも、あの二人に対しての憎しみでも無かった。

ただ、その胸の内に広がっていくのは・・・、底知れぬ昂揚感のみ・・・。

「・・・待っている。隊長どの・・・、使い魔の女・・・」

ジジと音を出して、ランプの灯りが消えた。

かすかな月明かり以外に部屋の中で浮かび上がっていたのは、薄暗がりに光り輝く、

白く濁った瞳だけである。

「お前らはこの俺が．．．。必ず、焼き尽くしてやる．．．」

暗がりからかすかに響いたその声が、外から響きわたった風の音に紛れていく。
貴賓室の暗闇の中からは、怪物のような笑い声がいつまでも響きわたっていくのだつた。

第六十八話　タルブの夜

アルビオン巡洋艦が学院から撤退する、その数刻前……、タルブ地方の森を二人の男達が気だるげに歩いていた。

深く生い茂った草藪をかき分けながら、緑髪の青年が溜め息混じりに言葉を漏らす。

「……何でこんな森を通らなくちやいけねえんだよ。街道を通れば、こんな苦勞……」
先頭を進む銀髪の青年が草藪から飛び出ていた枝を短剣で切り払った。

「少しは頭使つて考えろよ、アルビオン軍に見つかったら終わりだろ？　それに、もう着くつて」

「……お前そればかりじゃねえか。ああ……疲れた……」

その言葉を聞いた銀髪の青年が慄然とした声を上げる。

「俺の方が疲れてるに決まつてるだろ。なあ、そろそろ代わつてくれないか？」

「……嫌だね。お前の方が慣れてるだろ……」

ラ・ロシエールを出発してから今まで、二人はただひたすらに歩き続けていた。

今のラ・ロシエールで傭兵に馬を売つてくれる場所なんてもうどこにも存在していな

かった。

食料品の値はあつという間に高騰し、それでも何とか集めた干し肉の山によって二人の財布の中身は既にすつからかんとなくなっている。

「……本当にあるのか？ お宝は」

「何だよ、気の滅入ること言わないでくれよ。俺達が同時に見た夢はただの偶然だったのか？」

「……有り得ねえ話じゃねえだろ」

「ナーバスになるなつてば。あれはお告げだよ。不幸な俺達をきつと救ってくれるさ」

「……そうなりやいいがな。ああ……本当にツイてねえ……」

思えば、アルビオンで王党派側についたのが不運の始まりだった。

アルビオン王国の軍事力はあのガリア王国に次ぎ、更に空軍の力で言えばハルケギニアにおいて他の追随を許さない。

『宙に浮かび続ける大陸』という地の利も相まって、国土は長いこと戦火に巻き込まれることもなく、その肥沃な土地に根差した平民達も一定以上の豊かな生活を送ることが出来ていた。

過去に王族関連のゴタゴタが多少あつたとはいえ、貴族達、平民達による王家への忠誠も厚く、古臭いトリステインや不安定なゲルマニア、強権的なガリア王国やロマリア

皇国に比べても、アルビオン王国は非常に安定していて、常駐していた傭兵達にとつても住みやすい国だったのだ。

だからこそ一部貴族達の離反が発生した時には驚きこそすれ、あつという間に反乱が鎮圧されるのは目に見えていた。

王党派についた自分ら傭兵も、どうせ王国の方が勝つだろうと見込んだ程度の、単なる臨時収入の機会が回ってきたという程度の考えしか持てなかったのだ。

しかし、現実は違った。

反乱軍の鎮圧に乗り出した『ロイヤル・ソヴリン』号の離反を皮切りに、あれよあれよという間に大部分の空軍や王軍側の兵士達が次々と寝返りはじめたのだ。

『獅子身中の虫』というのはこういう事を言うのだろうか、内部からガタガタになっていった王軍はレキシントンでの戦で呆気なく大敗した。

そんな戦でも何とか生き残ったのはいいものの、いざ王党派の拠点に戻ってみると既にその拠点すらも根こそぎ壊滅していたのだった。

王党派に見切りを付け、長い時間をかけてようやくトリステインまで逃げてきたのはいいが、そうしたらまたアルビオンとトリステインの戦が始まった有様である。

正に、お先真つ暗だった。

森の中は薄暗さが増し、日が暮れかけている今のこの状況が自分たちの未来を暗示し

ているようにも思えていた。

「ツイてるか、ツイてないかはタルブ村に着いてから考えりゃいいさ。それにさ、あそこは一昨日襲われたばっかりなんだろう？ 住んでた奴等もこぞつてラ・ロシエールに逃げきててみたいだし、たぶん色々残ってるんじゃないか？」

もう一度枝を切り払いながら、銀髪の青年は明るい声を出した。

その様子に緑髪の青年はもう一度溜め息を吐く。

傭兵になつてから腐れ縁で行動を共にしているとはいえ、何でこいつはこうも楽観的なんだ。

「・・・残つてたら、どうだつてんだよ」

「ほら、考えてみなよ。タルブ村だぜ？ ワインがたんまりあるだろうし、それを元手に何かの商売始めてみるつてのは？」

不満をもう一度口にしようとしていた緑髪の青年は、口から出そうになつていた不満の言葉を飲み込んでいた。

確かに、それもいいかもしれない。

「・・・ああ、そりゃいいな。ワインを金にしてよ、ゲルマニアにでも行つて・・・」

「そうさ。今はなかなか売れないだろうが、トリスティンがアルビオンに占領されてから兵士相手に売つぱらえば相当な金になるだろ。」

そうだな、ゲルマニアかあ。ゲルマニアはどうせ降伏するだろうし、どさくさに紛れて成り上がりを狙うのもいいかもしれないなあ」

がさがさと森の中を歩きながら、彼らは少しばかり未来が明るくなった気がしていた。

それに、タルブ村のワインに加えて、もし本当にお宝があつたとしたら……。

「……お前は平民の癖に、本当に頭がいいな」

「そうだろ？ 商売始めるにしても、貴族崩れのアンタがいてくれりゃ百人力だ」

「……その調子で成功する商売の内容も考えといてくれよ」

任せとけ、と銀髪の青年が明るい笑い声を上げていると、二人の視界がぼつかりと開いた。

「お、着いたかな？」

どうやら森と村を繋げるための裏道へと出たらしい。

徐々に暗くなつていく夕暮れの中で二人が歩いていく中、うつすらと空に黒く上がる煙が見え始めた。

「……燃えてるのかよ。勘弁してくれ」

まさかワインも駄目になつていけるのでは、と緑髪の青年が不安げな表情を浮かべる一方、銀髪の青年はあつけらかんと声を上げる。

「まあ、あそこで見てみりや分かるだろ。ワインが駄目なら、その時はその時だ」

二人の傭兵がタルブ村の広場をてくてくと歩いていった。

周囲には全く人氣がなく、アルビオン軍は村の家々を大雑把に燃やしただけで通り過ぎていたようだ。

広場の向こう側に広がっていたであろう森は、黒々とした木の残骸から今もなお薄い煙を上げ続けている。

人の気配の無い廃墟じみた村の頭上で風が吹き、家々の隙間から見える草原からは草の擦れる、ざあつとした音が聞こえてくる。

何とも、ぞつとしない光景だった。

「……こりや、ひでえな。死体は無いみてえだが」

「……、あの広場じゃないか？ 夢だと、確かこころへんに」

歩いていく二人の目前に、何かが転がっているのが見えた。

日の光が消えかけている薄暗い中で、二人は慎重にその影へと近付いていく。

「……まじかよ。まさか、本当に……」

そこにあつたのは、三十センチにも満たない小さな木の箱だった。

その箱の表面は『鍊金』で作られたであろう薄い金属に覆われている。正に夢で見た、あの箱だった。

「おい！ やったな！ やっぱりあれはお告げだったんだよ！」

銀髪の青年は心底興奮したように、緑髪の青年の肩をばしばしと叩く。

重厚な木の箱を拾い上げた緑髪の青年も、沸き立つような喜びを確かに感じていた。しかし、まずは箱の中身を確認しなければ素直に喜べないのだった。

「・・・こう、暗くちやな」

「そうだ、そうだな！ 鍵かかかってるみたいだけどアンタの『鍊金』なら何とかかなんだろ！ まずは焚火だ！」

二人はそこら中に転がっている木の板やぼろぼろになった木の破片を集め始めた。

しばらくして、森を燃やしていた残り火をそのまま種火として使い、広場に大きめの焚火が出来上がる。

その焚火がすっかり暗くなつた広場を照らす中で、緑髪の青年が小さく詠唱を行なつていく。

銀髪の青年が傍らでわくわくした表情を浮かべているものの、かなり高レベルの『固定化』がかけてあるらしく、鍵を開けるには相応の時間がかかった。

それでもかちやりと軽い音を立てて、箱の鍵が開いた。

「・・・さて、ご対面だ」

ゆつくりと箱の蓋を開けていく。そこにあつたのは・・・。

「・・・何だ、こりゃ」

二本の古びた木の枝が、箱に敷き詰められた布の上に転がっていた。

「これだけ、か？」

その二本の木の枝を外に出してから、布きれを地面に放り投げた。

そのまま箱を引っくり返したり、くるくる回したりしてみるものの、箱の中身はたつ

たこれだけである。

「……」

「……」

気まずい沈黙が二人を包み込んだ。

ぱちぱちと焚火の音だけが広場にこだましていく。

「……はあ。何が、お告げだ」

心底落ち込んだ緑髪の青年に、銀髪の青年は懽然とした表情のまま勢いよく立ち上がった。

「お宝は無かった、それだけだ！俺はワインとツマミをかき集めてくる！　こういうりやヤケ酒だ!!」

焚火で簡単な松明を作って、銀髪の青年はずんずんと壊れた家の中へと歩いていく。

それを横目で見送りながら、緑髪の青年は真つ暗になった夜空をゆつくりと見上げていった。

「……本当に、ツイてねえ」

こんな結果なんだったら、箱なんて無い方がまだマシだった。

ついそんなことを考えながら、一人残った青年は傍らに転がっている二本の木の枝をちらりと見る。

焚火の明かりが闇夜を照らしてくれているおかげか、森を歩いていた時に感じていた、じくじくとした不安はすっかりとその勢いを落としていた。

自分のことながら何とも単純なもんだ、とぼんやり考えながら、青年は一本の古びた木の枝をそつと掴み上げた。

胸の内にあるのは徒労感だけで別に怒ってなんていない。

ただ何にもしないで焚火の番をしているのもつまらないので、何とはなしに、青年は手に持った木の枝を焚火の中に放り投げた。

「……ワインは無事みたいだったからな。それを使えばいいだけの話だ」

さつき木材をかき集めながら家の中を簡単にチェックしたのだが、家の地下にあるワインセラーは無事のようにだった。

こぢんまりとしたワインセラーだったが、その家だけでも相当な量のワインが貯蔵されていたのだ。

それなら全ての家の中、そして村のどこかにある貯蔵庫の中には、一体どれだけのワインが眠っているのだろうか。

「・・・そうだ。お宝なんて無かった。それだけだ」

そう一人で眩きながら、傍らに転がっているもう一本の古びた木の枝を掴みあげる。先程と同じようにその木の枝も焚火へと投げ入れようとした時、ふと、手に持った枝に何かの感触があるのが気になった。

不思議そうな顔でその枝をまじまじと見る。

そこには、木の枝に描かれた赤黒い紋章のようなものがあつた。指でこすつてみても、それは塗料などではない。

「・・・ま、まさか。マジックアイテムか!？」

焦つた青年が焚火の中へにじり寄る。

中腰になりながら焚火をくまなく見ようとすることも、たかが一本の木の枝を勢いの増している炎の中に見つけるのは到底不可能に思えた。

「・・・やつちまつた」

目の前ではちんと音を立てて、少しずつ勢いを強めていた炎が闇の中に伸び上つていく。

立ち上がろうとしていた腰を下ろし、げんなりとした顔で俯いた青年は自分の安易な

行動を後悔していた。

とりあえず手に握っていた紋章付きの木の枝を箱へ戻しながら、青年は忌々しげな表情で揺らめく焚火へと視線を向けた。

あんなぼろつちい枯れ枝だ。仮にマジックアイテムだとしてももう使い物になるはずがない。

しかし、まさか……、本当にお宝だったとは……。

「……本当にツイてねえ。アイツになんて説明すりゃ……」

もう一度、ばちんと焚火が音を立てる。

その瞬間。

耳をつんざく爆音と共に焚火が木端微塵に弾け飛んだ。

急に巻き起こった爆風に青年は吹き飛ばされていく。

そのまま地面に転がった緑髪の青年は、周囲に散らばった火と真つ暗闇の中へ、きよろきよろと忙しく目を向けていく。

「・・・な、な、何だ今のは！ 魔法か!? 砲撃か!」

そしてそのまま、青年はある一点に目を釘付けにされていた。

弾け飛んだ焚火の火が、何かの大きな影をかすかに照らしている。

ごぶごぶという呼吸音と共に、その大きな影はゆつくりと周囲を見回している。

「み・・・、み、み・・・」

震えるその眩きに、大きな影がぐるりとこちらを向いた。

咄嗟に青年は口を両手で押さえる。

ずん、と重量のある音を立てながら、その大きな影は青年のいる方向へ歩き出した。

青年は息が詰まる程の恐怖を覚えながらも、立ち上がることすら出来ずに、その大きな影をひたすらに凝視していた。

「おーい！ 何だ、今の音！」

大きな影が歩みを止め、ぐるりと声のした方角へ向き直った。

緑髪の青年は必死にその大きな影から視線を外し、破壊された家の方角を見る。

「おい！ 焚火が吹っ飛んでるじゃねえか！ 敵襲か!? 無事なのか!」

ワインやチーズがぎっしり詰まった籠を放り投げながら、長剣を引き抜いた銀髪の青年が松明を手に駆け寄ってくる。

そのまま、松明の灯りが大きな影を照らしていく。

「ごぶごぶ、ともう一度音がする中、銀髪の青年は照らされていくその大きな影を、ゆつくりと見上げていった。

「み、み……」

手に持った松明がかたかたと揺れ、震えるその青年を、びつしりと剛毛に包まれていく巨大な牛の頭が静かに見下ろしていた。

「ミ、ミノタウロスッ!!!」

銀髪の青年が叫ぶのと同時に、牛頭のミノタウロスは絶叫するかのよう雄叫びを上げた。

はるか遠くまで届くかのような轟音を受け、銀髪の青年はただ時が止まったかのように、その場で凍り付いていた。

ずん、とミノタウロスが一步前に進み、丸太のような腕を振り上げていく。

「アースハンド！」

突然、ミノタウロスの真横から出現した岩の拳がその巨体をわずかに吹き飛ばした。

「に、逃げる……！ 逃げるぞ!!」

緑髪の青年が自身の杖を構えながら叫ぶ。

その声に我に返った銀髪の青年も駆け出そうとしていたが……、地面から突き出た岩の手と一緒に、その身体が突然大きく吹き飛ばされた。

銀髪の青年は力無く地面をバウンドし、そのまま地面に転がっていく。

「くっ、そ……！」

緑髪の青年の周囲から生み出された多くの石つぶてがミノタウロスへと襲い掛かる。暗闇に目が慣れ始めていたためそれらは正確にミノタウロスの顔面へと直撃していくが、ミノタウロスは全く気にした様子もなく、地面に横たわる銀髪の青年へゆっくり近付いていく。

緑髪の青年は貴族崩れであった。

しかし彼は力のあるメイジではなく、ただのラインクラスのメイジだった。

それでも彼は、今持てる最大の力を振り絞っていく。

（お前がいなけりや．．．、商売できねえじゃねえか！）

緑髪の青年は可能な限り精神力を振り絞りながら、自分の持ちうる全力の魔法を解き放った。

「アースハンド!!」

ミノタウロスの目前から先程より一回り大きい岩の拳が襲い掛かる。

しかし先程とは違い、ミノタウロスはその岩の拳を左右の腕で受け止め・・・、それをそのまま、まるで枯れ木をへし折るかのように、あつという間に破壊していた。

ミノタウロスの目がぎよろりと緑髪の青年へと向けられる。

そのまま重い音と共に歩いてくるミノタウロスの前にしながら、彼は蛇に睨まれた蛙のごとく、力無く立ちすくんでいた。

ずん、とミノタウロスが目の前に立った。

三メートルにも至るその剛毛に覆われた身体には、傷一つとして付いていなかった。彼の魔法は、何一つとして障害にすらなっていなかったのだ。

「・・・ツイて、ねえ。本当に・・・」

青年の震える声と共に、ミノタウロスが腕を振り上げていく。

巨大な牛の頭が目の前の獲物を凝視し、その口からごぶごぶという呼吸音が漏れていく。

(俺を喰うなら、せめて、殺してからにしてくれ・・・)

そうかすかに考えながら、振り下ろされる腕を見つめて……。

ぶおん、と振り下ろされる腕を、地面に転がった彼は何とか避けることに成功していた。

「はっ……！ はあっ……！」

そのまま地面を四つん這いに逃げ惑いながら、背後から聞こえてくるミノタウロスの追ってくる音に耳を澄ませていく。

ふと、目の前に小さい重厚な木の箱が転がっていることに気が付いた。

その木の箱を手にとって、ミノタウロスへと投げつける。

「く、来るな……！」

飛んできた木の箱を全く気にも止めずに、ミノタウロスの巨大な影が迫ってくる。

そのままもう一度両腕を振り上げ、地面にへたりこむ青年へと勢いよく振り下ろした。

咄嗟に、青年は真横へと飛び退いていた。

そしてそのまま地面を揺らす轟音に息を飲んだ……、その瞬間、青年は何故か周り

の時が止まったかのような感覚を覚えていた。

ミノタウロスが降り下ろした腕は地面を抉り・・・、その近くの空気が、ぐにやりと歪んだ気がした。

何故か自分の肌が次々に粟立ち、得体の知れない恐怖が一瞬の内に全身を包み込んでいく。

そしてかすかな、何かが折れる、乾いた音と共に・・・。
弾けるような爆風がまたしても彼を大きく吹き飛ばしていた。

地面をバウンドして、ごろごろと地面を転がっていく。

何が起きたのか全く分からない青年は、朦朧とする視界をミノタウロスである巨大な影へと向けていった。

周囲を揺るがす雄叫びが響きわたる。

その音は、先程の雄叫びどころではなかった。

その余りにも巨大な轟音に、思わず青年は両手で耳を塞ぐ。

ミノタウロスは怒り狂うかのように何度も雄叫びを放っている。

そのミノタウロスの影は、既に青年を追ってなどいなかった。

何か、人間程の影を目の前にして、狂ったように雄叫びを上げ続けている。

その暗がりにはいつの間にか、赤い瞳がいくつも浮かび上がっていた。

地面を踏みしめるように身を低くしたミノタウロスがその人影達へと襲い掛かる。

先程までは見せていなかった、岩の塊のような肉体を利用した、正に全力の突進であつたが……。

それらの人影は瞬時にミノタウロスへと飛びかかっていた。

かすかに光る赤い瞳がミノタウロスの周囲へ次々に纏わりついた瞬間、ミノタウロスはそのまま一歩、二歩と前へと歩き……、地面を揺らす音と共に、倒れ伏していった。

「はっ……、はっ……」

周りから聞こえてくるのは青年の呼吸音だけである。

倒れ伏したミノタウロスはぴくりとも動かず、その周囲には赤い瞳の人影がじつと佇

んでいた。

青年は身じろぎ一つすることが出来なかった。

ミノタウロスを目の前にした時、間違いなく、今までの人生における最大の恐怖を彼は感じていた。

しかし、今のこの恐怖は……、この粘り気のある、余りにも巨大な殺気は……、それすらも遥かに凌駕していた。

「……誰？」

かすかに、誰かの声が耳に届いた。

その声はその人影達の中から聞こえてきた気がしたが、青年は恐怖のあまり何も口に出ることが出来ない。

「……あなた、誰？」

もう一度、少女のような声が聞こえてくる。

この場にはふさわしくない、幼い女の子の声。

青年は、自分が何者かの悪夢の中に迷い込んでしまったかのような、まるで現実味の無い感覚を覚えていた。

「……そうだけど。どういうこと？ どこにいるの？」

青年の心臓はばくばくと高鳴っていたが、その音は既に遠い場所から聞こえてきているようにも思っていた。

ごくりと、青年は苦い味のする唾をゆっくり飲み込んでいく。

「……うん。一応は」

その言葉と共に、少女はじつと何かを聞いているように黙りこくっている。しばらくの間、長い時にも感じられた時間が過ぎると、もう一度少女の声がした。

「……よく分からないけど。とにかく、あなたが制御してるんだね」

かすかな眩きが聞こえ、少女が小さく相槌を打つかのように頷いている中、青年はよ

うやく身体を動かし始めていた。

足を捻ってしまったのか、立ち上がるうとするもバランスを崩して地面へと倒れ込む。

突然、暗闇に浮かんだ赤い瞳が次々に青年へと向いた。

そしてその多くの人影が、底知れぬ殺気と共に青年へと近付いていく。

「ひっ……ひっ……ひっ……」

「……止まって」

眩くような声に、それらの人影はびたりと止まった。

「……この人達も同じっ」

この声は一体誰に向いているのだ。

青年はそんなどうでも良いことを考えていたが、それでも、今自分は身じろぎ一つするべきではない、と朦朧とする頭で考え始めていた。

「……うん、そうして。私もそうした方が良いと思う」

その眩きとほぼ同時に、青年へと向いていた赤い瞳が暗闇の中を動き始めた。きよろきよろと辺りを見回したり、自分の身体を見つめたりしている。

少女は小さく「分かった」と眩き、きよろきよろしている赤い瞳の集団へと口を開いた。

「……説明するね。あの人が言うには……」

「……いや、説明はいらないよ。僕らにも聞こえていたからね」

暗闇の中、重厚な鎧を身に包んだ青年がそう告げる。

人影たちは少し離れていた少女へと次々に近付いていった。

「ふうん。こんな感じなんだな」

「そうね。うん、面白いわね。これがモンスターなのね」

大斧を手にしていた青年と、礼装姿の女性が呑気な声を上げた。

先程までの殺気を欠片も感じさせない、その和やかな雰囲気のまま、鎧の青年が口を開いた。

「君は、ハワードに……、マーガレッタだな。有名人だらけだ」

「なんだ？ 俺のこと知ってるのか？」

きよとんとした声に、鎧の青年が頷いた。

「君はホルグレンの兄弟子だろう？ プロンテラの鍛冶屋には世話になってるからね。騎士団の者であれば、君のことを知っている者も多いのではないかな」

「何だ、あいつ今プロンテラで仕事してるのか？ あんな下手くそが偉くなったもんだな」

馬鹿にしたように笑う大斧の青年を尻目に、礼装姿の女性も口を開く。

「騎士団の人なのね。いつもお世話になってます」

ペこりと鎧の青年へ頭を下げた女性に、大斧の青年が豪快に笑った。

「こうなつちまつたら、お世話になるも何もないだろう？ 討伐される側だつてのに」

「うるさいわねアンタ。ねえねえ、貴方のお名前は？」

礼装姿の女性が傍らに立っていた少女へと近付いていく。

その少女はぼんやりと女性を見上げて、小さく口を開いた。

「・・・カトリーヌって名前」

「うん分かった、カトリーヌちゃんね。私はマーガレッタ・ソリンって名前。よろしくね」

「・・・君が、カトリーヌ？ ウィザードギルドのカトリーヌか？」

鎧の青年が驚きの声を上げると、少女は不思議そうな顔で鎧の青年を見つめていた。少女が何となく気まずそうな雰囲気でもごもごと呟いている中、大斧の青年が面白そうな顔で口を開いた。

「アンタ、事情通なんだな。じゃああつちのアイツは？」

大斧の青年の赤い瞳が緑髪の青年へと向いた。

正確には、その横に・・・。

「ひ・・・」

緑髪の青年の傍らには、いつの間にか影のような男が音も無く立っていた。

真つ黒い服に薄汚れた布を身体に巻いた痩せぎすの男が、全く何の気配もなく佇んでいる。

また鎧の青年が口を開いた。

「ああ、彼はアサシングルドの危険人物だ。そうだろう、エレメス」
「・・・」

何も口に出すこともなく、痩せぎすの男は静かに佇んでいる。

「口下手なのかしら」

「そういや、口下手っぽい恰好してるな」

口々に悪口のような言葉が放たれるも、痩せぎすの男は気にした様子もない。

「ねえ・・・。時間が無いんじゃない？」

身の丈程もある大弓を携えた女性が口を開くと、それぞれの赤い瞳がその女性へと向く。

「そうだな・・・」

鎧の青年がぼつりと呟く中、礼装姿の女性が口を開いた。

「もう少しいいじゃない？ 貴方のお名前は？」

「私は、セシルだけど・・・」

「セシルちゃんね、分かった。これからよろしくね」

これから、という言葉に少しばかり眉間へ皺を寄せながら、大弓を携えた女性が話は

終わりとばかりに少女へ向き直った。

それを見た少女は何か思い悩んだ顔をしながら、口を開いた。

「……あの。あなた達に力を貸してほしいの」

そう告げられた少女の言葉に、各々がきよとんとした顔を浮かべている。

「力を貸すも何も……。俺達はこのちっこいご主人様に生み出されたんだろ？」

「そうだな。君の事情も僕たちは分かっているから、手足のように使ってくれて構わないよ」

「……事情、つて？」

小さく首を傾げた言葉に、礼装姿の女性が答える。

「あの子のために、でしょ？ あんな訳わかんない人に使われるんじゃないわかって、カトリー又ちゃんの理由で使われるのなら別に構わないわ」

「まあ、あの人がかトリー又さんを制御してるみたいだし、別に悪い人じゃなさそうだけど……」

大弓の女性が静かに呟き、それに礼装姿の女性が耳元で茶々を入れている。

少し頬を染めながら「タイプとかじゃない」と大弓の女性が否定する中、礼装姿の女

性は悪戯そうにお喋りを開始していた。

少し離れた場所で彼らのやり取りを見つめながら、緑髪の青年は訳の分からない光景に頭がパンクしそうだった。

彼らは明らかに異常な存在だった。

人のような姿をした、正体の分からない何かだった。

それにも関わらず、この和やかな雰囲気は一体何だ。

この・・・、異様な感覚は・・・。

それぞれの赤い瞳が、地面に座ったままだった緑髪の青年へと向いた。

「っ・・・！」

緑髪の青年が心臓を掴まれたような緊張を感じる中、赤い瞳の一団が静かに近寄ってきていた。

「・・・ねえ、教えてほしいことがあるんだけど」

目の前でちよこんと腰を降ろした人物は、まだ幼さの残る少女だった。

薄いクリーム色をした短い髪を湛えながら、じつとその真紅の瞳を緑髪の青年へと向けている。

「……この国の首都は、どっちの方向？」

「こ、この国……？ しゅ、首都は、トリスタニアだ……」

その震える声に、大斧を背負った青年が静かに睨み付けていた。

「さつさと方角を教えろ。時間が無いって言っただろ」

「もう、止めなさいよ。こんなに怯えられるのはショックだけど……」

大弓を携えた女性が小さく溜め息を吐く中、少女がもう一度口を開いた。

「……トリスタニアは、どっちにあるの？」

「……あ、あっちだ。あっちに、馬で二日くらい……」

指差された方角をちらりと見てから、少女はもう一度緑髪の青年へと顔を向けた。

「……うん、分かった。ありがとう」

その言葉と共に、立ち上がった少女は教えられた方向を見つめる。

赤い瞳の一団がそれぞれその方向へと目を向けていくと、彼らの足元に光り輝く魔法陣が浮かび上がった。

そして次の瞬間には……、光に包まれた彼らの姿が、まるで幻であったかのように消えていった。

「……」

何も言えず、緑髪の青年は一瞬の内に消えた一団の場所を見つめ続けていた。

彼は気絶していた銀髪の青年が声をかけるまで、その場で固まったように座り続けていたのだった。

第六十九話 伝説と口八丁

首都トリスタニアの夜も更け、夜の闇がとつぷりと首都の頭上を覆い尽くしていた。その宿屋の一室でランプの明かりに照らされながら、一人の桃色髪の少女が部屋の中を忙しくうろつき回っている。

その内に椅子へと深く座り込むものの、また不安げな表情を浮かべてから立ち上がり、もう一度おろおろと部屋の中を歩き回っていた。

「……」

ふと気付くと、窓の外に広がる城下町にほのかな明かりが灯り始めていた。朝の早い首都の住人にしても、早すぎる時刻である。

きつと彼らも私のように、眠れない夜を過ごしていたに違いなかった。

「……どうしよう、どうしよう」

もう何度目かも分からない自問自答を繰り返しながら、ルイズは一人呟いていた。昨日の夕方を過ぎた時刻、ルイズは護衛の兵士たちを問い詰めていた。

アルビオン軍が斥候を放ったはいえ、一向に彼らはルイズを学院へと連れて行くことしなかったのだ。

余りにも不自然な対応にルイズは彼らへの質問を繰り返し、そして彼らは、ようやくその理由をルイズへと伝えたのだった。

アルビオン軍が、トリステイン魔法学院を攻撃している、と。

「……どうしよう、どうすればいいの……？」

学院の皆は無事なのか、リウスは無事なのか……。

何か、姫様の力にはなれないのか……、私に……、何か出来ることは……。

そう自分自身に問い続けていても、何一つとして状況が解決することなんてなかった。

流れるように時間だけが過ぎ、刻一刻と戦いの時刻だけが近付いてきている。

魔法学院が攻撃されている。

その事実にも、ルイズは想像以上の、余りにも強いショックを受けていた。

魔法学院は自分の帰る場所だった。

あんなに忌々しく思っていた学院の人々ですら、リウスを使い魔として召喚した以降、いつの間にか自分に安らぎを与えてくれるような存在へと徐々に変わっていたのだ。

その学院が、今……、攻撃されて……。

「ど、どうしよう……。何で……。こんな……」

気付くと、ルイズははらはらと泣いていた。

今この場にいるのは自分だけだった。

いつも一緒にいてくれたリウスだって無事じゃないかもしれない。

キュルケや、タバサや、シエスタ……、ギーシュ、モンモランシーだって……。無事じゃないのかもしれない……。

涙を拭くことすらなく、ルイズは憔悴し切った顔のまま、誰もいない部屋の中を見回していった。

ずっと起きているのにルイズは眠くなんてなかった。

眠ることは、恐ろしかった。

一度目を閉じてしまえば、何もかも、全てが終わっているのかもしれないのだから……。

ぐすぐすとした声^が部屋に響く。

そんな自分の涙声を気にも止めずに、ルイズはふと、自分の首からかけられているネックレスを服の上から触っていた。

もぞもぞと、そのネックレスを取り出していく。

そのネックレスの先端には水色の宝石が輝く指輪があつた。

その指輪をネックレスから外し、ゆっくりルイズは自分の薬指にはめていく。

アンリエッタ姫殿下から『水のルビー』を頂戴して今まで、ルイズはその指輪を大事に持ち歩いていた。

そしてその指輪をはめることは、姫様と会ったあの日以来、一度たりともしていなかった。

あのウエールズ様の最後を、そして、アルビオン王国の最後を……、ルイズは思い出したくなかったのだ。

「ウエールズ様……。貴方様のアンリエッタ姫殿下を、どうやって救えば……」
藁にもすがる想いで、ルイズは指輪を両手で覆いながら祈り続けていた。

しかし、何かが起きる訳でもない。

そんなことは当たり前だとルイズは思考の端で考えながら、それでも必死に、亡き王子へ向けて祈り続けていた……。

「何が……、特別なメイジよ……。何も出来やしない……」

しばらくして、ぽつりとルイズは自分自身を嘲笑するように呟いていた。

そのまま鼻をすすりながら、涙がこぼれた目をごしごしとこする。

顔を上げたルイズはもう一度部屋の中を見回していき……。ある一点をぼんやりと見つめていた。

机の上に転がっている、『始祖の祈禱書』。

姫さまの結婚式のために、せめて少しでも姫さまの幸せを願うことのできる詔を考えていた、あの瞬間すら……。今はもう、遠い昔のことのように思える。

「始祖……ブリミル……。何であなたは、こんな……」

何故、始祖はこんなに苦しい思いをしている私達を救ってくれないのか。

何故……。ブリミル様は、アルピオンの人達を助けてくれなかったのか……。

そんな考えがルイズの心に満ちていった。

胸の内を支配する暗い感情のままにルイズは椅子から立ち上がると、『始祖の祈祷書』へ向けて歩き始める。

「何が……慈愛に満ちた始祖の祝福よ……。私達から全てを奪おうとしてるのに……。何が……。っ！」

怒りのこもった手で『始祖の祈祷書』をルイズは掴み上げた。

その瞬間、かすかに『始祖の祈祷書』が光り輝いた気がした。

「え……。？」

ほのかなランプの光を掻き消すように、『始祖の祈祷書』の光が大きくなっていく。

伸ばしている手の指にはめていた『水のルビー』が同じように光っているのに気が付いた。

恐る恐るルイズは『始祖の祈祷書』の表紙をゆつくりと開いていく。

ルイズは光を発しているページの中に、浮かび上がっていく文字を見つけていた。

『序文。』

これより我が知りし真理をこの書に記す。この世における全ての物質は、小さき粒より成る。

四の系統はその小さき粒に干渉し、影響を与え、かつ変化せしめる呪文なり。

その四つの系統は、「火」、「水」、「風」、「土」と為す』

ルイズはその文字に目を見開いていた。

この文章は一体何なのか。

何故、自分にこの文字が読めるのか。

この本は……、『白紙』だったはずだ。

『神々の魔法を解析し、我らは更なる力を得ることが可能となった。四の系統が影響を与えし小さな粒は、さらに小さな粒より為る。』

その系統は、四のいずれにも属せず。さらなる小さき粒に干渉し、影響を与え、かつ変化せしめる呪文なり。

四にあらざれば零、零すなわちこれを『虚無』とする。彼ら神族の魔法を昇華せし零を『虚無』と名付けん。』

どくどくとルイズの鼓動が高鳴っていく。

虚無。虚無の魔法。

既に失われた、五つ目の……。

『これを読みし者は、私の行ないと理想を受け継ぐ者なり。またそのための力を担いし者なり。

虚無を扱う者は心せよ。志半ばで倒れし我とその同胞のため、そしてこの世界の命を有する者のために、彼らの侵略に対抗し、失われし大樹の浸食を喰い止めるべく尽力せよ。

虚無は強大なり。その詠唱は長きにわたり、多大な魔力を消耗する。

詠唱者は心せよ。時として虚無はその強力により命を削る。したがって我はこの書の読み手を選び、読み手の詠唱する呪文を選ぶ。

たとえ資格無きものが指輪をはめようとも、この書は開かれぬ。選ばれし読み手は『四の系統』の指輪をはめよ。されば、この書は開かれん。

以下に、我が扱いし虚無の呪文を記す。初歩の初歩の初歩。エクスポロージョン』

そしてルイズは最後の文章へと目を向けていく。

そこには、自分が子供の頃より見知った言葉が描かれていた。

『ブリミル・ル・ルミル・ユル・ヴィリ・ヴェー・ヴァルトリ』

その後には、何かの古代語のような言葉が続いていた。

それは全く見たこともない文字だったが・・・、ルイズには何故か、これを読むことが出来るように思えていた。

「あ・・・、あはは・・・」

光り輝く『始祖の祈祷書』を手にしたまま、ルイズはぺたんと床に腰を落としていた。

ブリミル様は馬鹿だ。

この『始祖の祈祷書』を読むためには『水のルビー』みたいな指輪が必要なのに・・・。

その注意書きを、指輪が無いと読めない場所に書いておくなんて……。リウスは、この本が何かの力を持っていると言っていた。

この本は……、『何かの魔法を利用するための書物』であるかもしれないと……。ルイズは小さく笑い続けながら、かすかに涙をこぼしていた。

私は、選ばれていた。

自惚れかもしれないなんてどうでもいい。

この魔法を……、虚無を、扱うことが出来るのであれば……。

涙を拭ったルイズは光り輝く『始祖の祈祷書』を閉じ、その指から『水のルビー』を外した。

光が急速に力を失っていくのを見つめながら、水色の指輪を付け直したネックレスを首に通していく。

そのまま薄暗くなった部屋の中、『始祖の祈祷書』を手にとったルイズはゆっくりと立ち上がっていた。

「……行かないや。街の、向こうに」

そう呟きながら、部屋の扉へと目を向ける。

あの扉の更に奥、この部屋の入口では護衛の兵士達が警護しているはずだ。

彼らは私がこの街から外へ出ないように目を光らせている。

私が何をどう伝えようと、彼らが姫殿下直々の命令に反する行動を取るとはとても思えなかった。

まずは、彼らの警護を振り切らなければならない。

「・・・」

ルイズは自分が何を出来るのかと、静かに思考を巡らしていた。

それと同時に、ルイズはこう考えていた。

リウスなら、どうするのかと。

ヴァリエール家の三女が泊まっている宿屋において、二人の兵士達が隙一つ無く周囲を警戒していた。

トリステイン王国そのものが危機的な状況にある今、いかにヴァリエール家の者とい

えども警備を付ける余裕など無いはずである。

しかしアンリエッタ姫殿下とマザリーニ枢機卿の命令である以上、彼らはその任務を全うすべく自身の神経を尖らせ続けていた。

その時、ヴァリエール家の三女、ルイズ・フランソワーズの部屋の扉ががちゃりと開いた。

「……どうされました？　こんな夜分に」

顔を覗かせた桃色髪の少女に護衛の一人が目を向け、そのまま少しばかり眉を細めた。

顔を覗かせている少女の目は泣き腫らしたような跡を付けている。

やはり、学院の件は伝えるべきではなかったかもしれない。

「あの……。行きたい場所があるんです。案内してくれませんか？」

護衛の兵士達は困ったように顔を見合わせた。

「もちろん構いませんが……。もう少し休まれた方が……」

「郊外の戦いは、夜明け過ぎだと聞いていますので……。その前に……。」
おずおずとした口調のまま、ルイズは護衛の兵士へと声を上げた。

護衛の兵士達は仕方がないとばかりに装備を整えると、ルイズへと顔を向けた。

「承知いたしました。場所はどこに？」

「あゝ……。ブルドンネ街の、武器屋まで……」

松明の灯りを頼りに、護衛の兵士達は狭く汚い路地裏を歩いていった。

その二人に守られるようにしながら、フードを目深に被ったルイズが薄く色を付けつつある夜空を見上げていく。

夜明けはもう近くなっている。急がなければ。

そうして辿り着いた武器屋は、以前と変わりのない姿形をしていた。

石段を登った護衛の一人が、羽扉の外にある閉め切られた鉄格子をがんと叩く。

「店主はいるか！」

護衛がそう叫ぶのを尻目に、ルイズは石段やその周囲の壁を見回していた。

そういえば、前に来た時はもう少し汚れていた気がするが、今は磨かれたようにすっかり綺麗になっている気がする。

「……なあに？ 誰？」

武器屋の奥から年若い女性の声がした。

護衛の二人が怪訝な顔を浮かべる中、奥の方からどたと走ってくる音がする。

「こら、勝手に出たら危ないだろ！・・・へえ、どちらさんで？」

武器屋の奥からおずおずと出てきたのは、五十そこらの親父である。

「トリストイン軍の者だ。とある大貴族の息女が貴方に会いたいということで連れてきたのだ」

「こ、これはこれは。すぐ開けますんで・・・」

がちやがちやと音を立てながら、厳重な鉄格子が開いた。

そのまま護衛の兵士は石段を降り、ルイズへと道を譲る。

「我らも立ち会いましょうか？」

「いいえ、大丈夫です。ここで待っていてください」

「承知いたしました。何かありましたらお呼びください」

そう告げてから護衛の兵士たちを尻目に、ルイズは武器屋の中へと足を踏み入れた。

何やら不安げな顔をしている店主を見つめながら、ルイズは目深に被ったフードをばさりと外す。

「……！これは、若奥さま」

「……奥で話してもいい？」

「わ、分かりました。では、こちらに……」

ぎくしやくとしながら店主が奥の部屋へと案内していく。

その途中、ちらりと護衛の兵士がこちらへ視線を向けていたが……。

「……ごめんなさい」

そう呟いたルイズは少し俯きがちに彼らから視線を外していった。

そうして奥の部屋まで案内された時、店主の傍らには二十歳くらいの年若い女性と、四十半ば程の女性の姿があった。

少しばかり皺の寄った女性の顔が店主へと向いた。

「……ねえ、あんた。お客さまなの？」

「いや、俺にも分からねえんだ。それで……、どうしたってんですか？」

「覚えていてくれて良かった。こんな明け方にごめんなさい」

ルイズは安堵の息を漏らすと、小さく頭を下げた。

その姿に店主は息を飲んだようにルイズの傍で腰を降ろす。

「そ、そんな。頭を下げる必要なんざありません。一体どうしたってんです」

息を飲みながら、以前とは全く違うこの貴族の態度に店主は驚いていた。

この貴族の娘と、その使い魔とかいう嬢ちゃんのこととはよく覚えていた。

何せあのデルフリンガーを売った客であり、あの買い取った武器によつて莫大な額の大金を得ることが出来た客なのである。

そしてその時の金を使って、過去に別れた妻子を見つけ、養うことが出来ているのだから。

「突然で申し訳ないんだけど、あなたはこの街について詳しいと思うの」

その言葉に店主は怪訝な表情を浮かべた。

「へ、へえ。詳しいっちゃ詳しいですな。かれこれ二十年はここに暮らしてるんで」

「この街を出たいんだけど、どうすればいいのか全然分らないの。教えてもらうことはできない？」

その言葉に店主は戸惑っていた。

この貴族は護衛二人を引き連れてここまで来ているのである。

街を出たいというのも、トリステイン軍の許可を得た行動とはとても思えなかった。

「……お言葉ですが、若奥さま。何せ今はこの状況です。面倒事は……」

ルイズは目をかすかに見開いて、がばつと頭を下げた。

「お願い！ 早く行かなくちや間に合わないの！ あなた以外に私の知ってる人なんていないのよ！ お願いします！」

「ちよ、ちよつと！ やめてくださいませ！ そんなされても……！」

焦った店主は何とか頭を上げてくれるようルイズに頼むも、一向にルイズは頭を上げようとしない。

腰を降ろしながら必死に説得を続ける店主へ、その背後に立つ女性が小さく声を上げた。

「……あんた、連れてつてあげなさいよ」

「お、おまえ。何を……」

その女性は頭を下げ続けるルイズへ近付くと、そつと腰を落とした。

「貴族様。貴方が何故そんなに外へ出たいのかは分かりませんが、この馬鹿旦那を一緒

に行かせますので……。顔をお上げください」

ようやくおずおずと顔を上げたルイズは、につこりと笑う女性と、がりがりと頭を掻いている店主を交互に見る。

店主は気まずそうな顔をしながらルイズへ視線を返していた。

「つつてもよ……。危ねえだろ。ここに俺がいなけりゃ……。」

その言葉に、店主の後ろで腕を組んでいた年若い女性が声を上げた。

「父さん、ここまでした貴族様に恥をかかせるつもり？ この貴族様が父さんの言つた『桃色髪の貴族さま』でしょ？」

気まずそうな表情を浮かべた店主の顔を見つめながら、年若い女性は続ける。

「『金銭の恩義には最大の礼をもって返す』が商人組合の基本でしょう。断つたりしたら、今度こそ私は許さないわよ」

じとりと睨み付ける娘の視線を受けて、店主は今度こそ観念したように小さく溜め息を吐いた。

「……裏口から案内します。装備持ってくるんで、少々お待ちを」

「あ……。ありがとうございます」

ちらりとルイズを見た店主が奥の部屋に消える。

気付けば、ルイズは平民相手でも威圧的ではなく普通に話していた。

それは本来ヴァリエール家の貴族として有り得ないことだったが、ルイズはいつの間にか自然に感謝の言葉を口にしていたのだった。

そんなルイズを二人の女性が見つめる中、何かに気付いたように年若い女性がぱたぱたと奥の部屋へ駆けていく。

そして戻ってきたその女性の手には、果物やパンの入った籠が握られていた。

「貴族様のお口に合うかは分かりませんが、良ければこちらを……」

「あ、ありがとう」

もう一度感謝の言葉を口にしながら、ルイズはおずおずと籠の果物を手に取った。

それを口に入れると、ルイズは自分が空腹であったことに初めて気が付いた。

そうしてルイズが果物を食べ終わった頃、店主が長剣を下げて戻ってきた。

「じゃあ、さっさと行きましようや。護衛に気付かれると・・・」

ハツとした店主が妻の顔を見る。

その顔をちらりと見るや、女性は小さく溜め息を吐いていた。

「私は武器屋の妻だもの、あの二人は私に任せときなさい。あんたはさっさと行つてきな」

虫を追つ払う仕草をした女性に、店主はおどおどとした顔で返した。

「じゃ、じゃあ行つてくる。くれぐれも、危ねえ真似は・・・」

「いいからあんたは！ 早く行つてきな！」

声を落としながらのドスの効いた言葉に店主はびくりと身を震わせると、ルイズを裏口へと案内し始めた。

それに続きながら、ルイズは二人の女性へと顔を向ける。

「あ、あの・・・！ ありがとうございます！ 果物おいしかったです！」

そう言葉を残してぱたぱたと裏口へ向かつていく桃色髪の貴族の姿を見つめながら、二人の女性は口を開いた。

「あの貴族様……。大貴族とか言ってなかったかしら？」

「そう言ってた……気がするけど……」

そのまま二人して顔を見合わせると、待ち続ける護衛達の対応へと向かっていくのだった。

ルイズと店主がトリスタニア城門の近くまで迫り着いた時、既に夜は明けていた。

通常はこの時刻でようやく城門が開けられるのだが、多くの兵士達や武器が戦場へと運ばれていく今の現状においては、夜間問わず常に城門が空いている状態だった。

「そういや……、若奥さまのお名前を聞いていませんでした」

唐突に店主がルイズへ顔を向ける。

武器屋を出て以降、フードを目深に被っていたルイズが小さく首を傾げた。

「あ、いや……、城門が出る時には変に抜けちまうよりは身分を明かした方がいいと……」

「そういえば伝えてなかったわね。」

私の名前は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。アンリ

エツタ姫殿下とも知り合いだし、ヴァリエール家の三女だから、それを言えば……」

「ヴァ……、ヴァリエール家……？ アンリエツタ姫の……、知り合い……？」

わなわなと震えながら店主は目を見開いていた。

ヴァリエール家といえば、このトリステインにおける公爵の一族である。いかに極貧に苦しむ平民といえどもその事実を知らぬ者などいないのだ。

つまり彼女は、全トリステイン貴族の頂点に君臨する、王家に次ぐ地位を保有している存在の子女であるということ……。

そんな店主の心境も知らずにきよとんとした顔のルイズへ向けて、突然がばりと店主が頭を下げた。

「そんなお方とは露知らず……！ 一度ならず二度までも失言の数々……！」

「ちよ、ちよつと……！ 顔上げてよ！ 兵士に気付かれ……！」

「おい！ お前達！」

そんな二人の元に衛兵の一団が近付いてきていた。

がちやがちやと威圧的な鎧の音を鳴らしてくる衛兵達に、二人は小さく息を飲んでいった。

「お前達は何をやっている。城門は封鎖しているのだ、兵以外は通れんぞ」

完全武装した兵士達はじろじろと二人を見つめていた。

明らかな平民っぽい親父が頭を下げ、フードを目深に被った胡散臭い子供がぼかんとした顔でこちらを見つめている。

どう見たって怪しい人物たちである。

「おい、貴様。フードを外せ。何者……」

「やい！ 何だてめえらは！ この御方をどなたと心得る！」

突然店主が叫んだ。

衛兵は目を丸くしていたが、次から次に起きる思いもよらない出来事に、ルイズも目を丸くしていた。

「ここにいらつしやるのは！ 麗しきアンリエッタ姫殿下の旧友であらせられる！ ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール様だぞ！ 今から密命のた

め戦場へと赴くというのに、貴様らこそ所属を言いやがれ！」

騙し騙されを繰り返してきた店主は長いセリフをよどみなく叫んでいた。

口八丁で生きてきた店主にとってこの程度のことは容易いことであつたが、最後辺りに乱暴な雰囲気が出てしまったのは否めない。

しばらく呆気にとられていたルイズだったが、はつと我に返るとフードをばさりと外した。

そのまま少し動揺していた衛兵達に向けて堂々と口を開く。

「今のトリスタニアが封鎖されているのは存じておりますが、私はアンリエッタ姫殿下の密命を帯びて入城しております。

決戦が始まる前に、アンリエッタ姫の元へと一刻も早く戻らなければなりません。馬をお借りしてもよろしいでしょうか？」

その貴族然とした態度に、衛兵達は動揺のまま各々の顔を見合わせていた。

ルイズの態度だけでなく、彼女のピンクブロードの珍しい髪は正にヴァリエール家の者である証拠にもなり得る。

トリステイン魔法学院の紋章といい、この少女が貴族であることは違いないのであるが……。

すると突然、遠くから鳴り響いた歓声が風に乗ってかすかに聞こえ始めていた。

その音は、トリスタニア郊外に展開しているトリスタイン軍、その本陣の方角である。その音を耳にした店主は更に衛兵達へと詰め寄っていく。

「戦が始まる前に向かわなければならぬと仰っているのだ！ てめえら、もし間に合わなかったらアンリエッタ姫がどうこうつてだけじゃないのだぞ！ アルビオンとの戦においてもどういった影響があるか……！」

興が乗ってきたのか、貴族つぼさと平民つぼさが入り混じった言葉をべらべらと喚びていく店主。

それを尻目にルイズは静かに首にかけたネックレスを衛兵達へと見せた。

そのネックレスに取り付けられた指輪がきらりと光る。

「こちらは、姫様よりお預かりしている『水のルビー』です。この指輪をお見せすれば、姫様は城門を通過できると……」

衛兵達は目を見開いていた。

彼らにはその指輪の真贋など判らなかつたが、国宝である『水のルビー』は今、姫殿下の元には存在していない。

盗まれたという話も聞いてはいないし、軍内部の噂によると……、親交の厚い貴族の息女に譲られたと……。

「……承知いたしました。早馬をご用意いたしますので、少々お待ちください」

そうこうして、ルイズはトリスタニア城門の前で馬に跨っていた。

背後の城門には決戦のために集められている兵士達の姿が数多く見える。

「色々ありがとうございます！ お礼は必ず！」

ルイズが叫び、それを受けた店主は苦笑いを浮かべながら駆けていくルイズを見送っていた。

本当ならどさくさに紛れてこの場を離れるつもりだったのだが、衛兵達が見守る中ではなかなかその機会が巡ってこなかったのだった。

あのヴァリエールの嬢ちゃんが「護衛はいらない」ときっぱり断ってしまったことも影響しているのだろう。

「・・・さて」

小さくなっていくルイズを見送って、店主はトリスタニアへと踵を返した。

店主の左右には衛兵達が立っている。

軽く舌打ちをしてから、店主はぎろりと隣に立つ衛兵へと視線を向けた。

「別に逃げやしねえよ。お前らはヴァリエール家の密命が嘘だつて思ってるのか？」

「・・・我々も信頼していない訳ではないが、一応貴方の身分と住居は把握しておかなければならん」

「へえへえ・・・、お役目ご苦労なことで。決戦が近いつてのに呑気なもんだ」

肩をすくめた店主は衛兵達へと苦言を返しながら、もう一度背後へと目を向けた。

ルイズは既に豆粒のように小さくなっている。

周りの衛兵など気にもせず、店主は矢のように駆けていく少女へと、「死ぬなよ」と小さく呟いていた。

第七十話 来訪者たち

夜明けを過ぎ、トリスタニア郊外に展開していたトリステイン軍の本営は慌ただしく動き回っていた。

偵察の竜騎士からアルビオン軍の動きが伝えられ、決戦の時刻は刻一刻と近付いてきている。

それでも、本営を駆けまわる兵士達の顔には悲壮感など欠片も存在していなかった。つい先程トリステイン軍総司令官としてのアンリエッタ姫の言葉が、トリステイン軍の兵士達全員の前で伝えられていたためである。

多くの兵士達はこの国を守るためにこそ動き回っており、その士気は非常に高いまま維持されていた。

その中で今現在、最も士気が高い状態にあるのは、本陣において強固な布陣を引かれている一つの天幕だった。

「お疲れでございますな。先程の演説、実にお見事でございますぞ」

その広い天幕の中では多くの高名な貴族達が決戦に向けて駆け回っていた。

その奥の方、即席の椅子に腰かけていたアンリエッタは静かにマザリーニへと向き直った。

「上手く話せたようで、わたくしも安心しました。ですが……、緊張してしまって……」
マザリーニへ薄く笑いかけたアンリエッタの顔には疲れがにじみ出ている。しかし、それは仕方のないことだった。

何せアンリエッタは戦の経験が無いのである。

その上でこの危機の中、戦の要となる兵士達の士気はこの年若いアンリエッタの双肩にかかっていたのだから。

マザリーニは姫の体調を気遣いながら、演説の最中に届いた報告を口にしていった。

「姫殿下。一つ、朗報でございます。トリステイン魔法学院を襲っていた巡洋艦が撤退した模様です」

アンリエッタは目を見開いた。

そしてマザリーニの顔をまじまじと見つめてから、ほうつと息をついて椅子に深く座り込む。

「……よかった」

その眩きを耳にしながら、マザリーニは力が抜けたように安堵する姫を見つめ、その行く末を案じていた。

アンリエッタ姫殿下は、余りにも優しすぎた。

それがアンリエッタ姫の求心力を生んでいるのも事実であり、この慈愛こそアンリエッタ姫をアンリエッタ姫として足らしめている要因なのだ。

しかし、この優しさこそが・・・、アンリエッタ姫殿下を強く苦しめる要因にもなるのだ。

「ヴァリエール公爵、ご到着!!」

兵士の叫びと共に天幕の入り口が揺れた。天幕の中にいた貴族達がざわめきと共に視線を向けていく。

マザリーニとアンリエッタも入り口へ目を向けると、そこには白くなりかけた金髪を湛え、立派な口髭を湛えた老年の貴族の姿があった。

左目にはめたモノクルがきらりと光り、その貴族はつかつかとアンリエッタの前へと歩み寄っていく。

そしてばさりとヴァリエール家を象徴する貴族のマントを翻しながら、アンリエッタ

へと臣下の礼を取った。

「殿下、ご機嫌麗しゆう」

「・・・ヴァリエール公爵、貴方までが」

驚きの表情と共にアンリエッタが呟くと、公爵は臣下の礼を取ったまま厳かな声を上げた。

「国家存亡の危機において、殿下の元に馳せ参じぬ理由がどこにありましようや。

それに先程の演説・・・、この老いた胸の内すらも強く揺れ動かしましたぞ」

「公爵、ありがとうございます・・・。どうか、お顔をお上げください」

アンリエッタの言葉に、ヴァリエール公爵はゆつくりと立ち上がった。

そしてアンリエッタの横に佇むマザリーニへとその視線を向ける。

「久方ぶりですな、公爵」

「マザリーニ殿も、お変わりがなさそうですね」

ほんの少し彼らの間に緊張感があるのをアンリエッタは感じていた。

しかし二人はくつくと笑い合い、その内に笑い声が大きくなっていく。

「何、私に出来ることはこの老骨を更に『鳥の骨』へと近付かせることのみ。カリーヌ殿

はお元気ですか？」

「我が妻は今領地にて憤慨していることでしょう。最後まで私が出陣することへぶちぶちと文句を言っていましたからなあ」

「それは、カリィヌ殿らしい。戦の後には土産を買っておく必要がありますな」

くつくつと笑い合う二人に、アンリエッタはぽかんとした顔のままである。

「ここに来る途中、グラモン元帥とも話しました。あやつはアンリエッタ姫殿下の御言葉に強く感銘を受けていたようでした。そのまま一人で勝手に突撃してしまいそうな勢いでしたぞ」

「次会った際、あやつには功を焦り過ぎないようにと忠告しておかなければなりません。殿下の御前で格好つけるのも程々にしておくと」

わっはっは、と二人して笑い合っている。

その姿を天幕にいた多くの貴族もぽかんと見つめていたが、その内の一人がヴァリエール公爵へと近付いていく。

「ヴァリエール公爵。お久しぶりでございます」

その貴族は地を響かせるような低い声と共に、その巨体を跪かせていた。

「おお、これはゼツサルくん。久方ぶりだな、元気にしていたか？」

「勿論でございます。まさかヴァリエール公爵までいらつしやるとは……。このゼツサル、感激に打ち震えて……」

「君は随分と立派になったものだが、私にまであんまり気を使わんでいい。カリーヌにしごかれていた時など必死の形相で私の後ろへ隠れようとしていたではないか」

その言葉に、ぱつと顔を上げたゼツサル卿が慌てた様子で声を上げる。

「こ、公爵、お止めください！ 殿下の御前で……！」

焦るゼツサル卿がその強面の顔を赤くしていく中、ヴァリエール公爵は心底懐かしそうに気品溢れる笑みを浮かべていた。

「して、公爵。今回の戦における作戦については知っておりますかな？」

マザリーニがヴァリエール公爵へと問いかけると、公爵は口髭をいじりながら口を開いた。

「グラモンから滔々と聞かされましたぞ。いや、あれしか無いでしょうな。単純ではありますそれが故に効果的でしょう」

トリステイン軍の作戦はこうである。

アルビオン軍の進軍に合わせ、トリステイン軍は『陸軍のみ』でアルビオン陸軍へと
防衛主体のまま突撃すること。

空軍や竜騎士はトリスタニアへの空路を制限するようにアルビオン空軍への挑発じ
みた攻撃を繰り返し、一定の距離を保ちながら陸軍の動きを補佐すること。

この作戦の肝は、両陸軍による混戦を引き起こすことだった。

制空権を握られている以上、空軍同士の衝突は得策ではなく、そうである場合は空か
らの砲撃を停止せざるを得ない位置までトリステイン陸軍が近づく必要がある。

あくまでトリステイン空軍の目的は王都トリスタニアの防衛であり、陸軍の目的はあ
くまでゲリラ的にアルビオン陸軍の力を削ることなのだ。

ラ・ロシエールでの戦いであるなら無意味に近い作戦だが、ここトリスタニア郊外
での戦いであるなら非常に効果的な作戦だと言えた。

アルビオン軍にはゲルマニアの援軍という時間的な制約があり、トリステイン軍には
王都トリスタニアを背にしているという地の利が大きく存在しているからだ。

最大の懸念材料は数で劣る兵士達が各々の士気を維持できるかだったが、先程のアン
リエッタの演説により、その懸念はもはや解決したと言ってもいいだろう。

「ヴァリエール公爵にそう言つて頂けるのなら心強いですが」

「あまりに無謀な作戦であるなら踵を返すところでしたが、そうはならずに内心安堵しておりますぞ」

マザリーニとヴァリエール公爵は冗談混じりに笑い合っていたが、彼らの会話において、ある事柄については全く触れられていなかった。

この作戦は……余りにも多くの死傷者を出す。

作戦が成功し、ゲルマニアの援軍が間に合ったとしても……。最悪の場合、三千名近くにもなる陸軍は文字通り全滅する可能性すらあった。

それを、今から戦いに赴く兵士達にまで心を削つてしまふ、この心優しい殿下の前で言う訳にはいかないのだ。

「それに、今の私には引く訳にはいかない理由が新たに出来ましたからな。この若い先短い命を賭して、アルピオン軍を喰ひ止めることに致しましょう」

アンリエッタはその言葉に顔を上げ、ヴァリエール公爵の顔を見つめることしか出来なかつた。

そのアンリエッタの表情に気付いた公爵は、アンリエッタへと小さく笑いかけてい

る。

「殿下が気に病むことではありません。ルイズは、強い子ですからな」

にこりと微笑む皺の刻まれた顔にアンリエッタは思わず俯いてしまいそうになるが、それでもヴァリエール公爵の顔を見つめたまま、こくりと頷いた。

「ルイズは私にとつて、我が身を投げ打つてでも救わなければならない、とても大切な友人です。彼女のためにも・・・、貴方様の活躍を心より願っております」

公爵はアンリエッタへと深く礼を返し、満足げに笑みを浮かべながら口を開く。

「殿下の御心遣い、この身体を命の尽きる最後まで支えることとなりますよう。」

しかし、今の御言葉はルイズにも聞かせたかったですな。あの子もきつと喜ぶでしょう」

そのまま公爵はマザリーニ、そしてゼツサールへと目を向けていった。

「お二方とも、殿下を頼みましたぞ。・・・さて、私は我が軍の元へ戻るとしますかな」
「公爵。御武運を・・・」

マザリーニが短く答え、ゼツサールが礼を返そうとした、その時。

次々に降り立つかのような足音が、すぐ近くから聞こえてきた。

「な……!」

天幕にいた貴族たちが声を上げる。

その足音の方向へとその場の全員が目に向けた時……、彼らは目を見開き、一切の躊躇もなく杖へと手を伸ばしていた。

「何者だっ!!!」

天幕の中、突然現れた六名の男女が真紅の瞳を輝かせながら、アンリエッタへと歩を進めている。

天幕にいた全ての貴族達はその謎の一団へと杖を即座に引き抜いていた。しかしその瞬間、何かの黒い影によって彼らの杖が次々に弾き飛ばされていく。

「で、殿下……っ!!」

マザリーニがアンリエッタの前に立ちふさがり、その二人の壁となつて即座に臨戦態

勢となつたヴァリエール公爵とゼツサール卿は、その黒い影の斬撃を何とか長剣状の杖で受け止めていた。

天幕を一瞬の内に駆け巡つた何者かの影。

凝縮されたような意識の只中で、かすかに眼に写つた、瘦せぎすの男の赤い瞳……。影が通り過ぎると同時に甲高い金属音が鳴り響き、体勢を立て直しながらも公爵とゼツサール卿がルーンを紡ぎ始めた瞬間。

二人に向けて、鋼鉄の塊が撃ち降ろされていた。

「ツッ」

一瞬の内に撃ち降ろされた大剣と、大斧。

二人は決して油断などしていなかった。

しかし瞬きよりも短い一瞬の内に接近され、降り下ろされていた鋼鉄の塊に、二人は息を飲み……。

撃ち降ろされたそれらは風を斬る轟音と共に、二人の顔の前でびたりと止まつていた。

二人が目前で止められた鉄塊を信じられないように見つめている中、それを手にして

いた赤い瞳の男達が静かにその武器を引き、二人の目前で肩に担いでいった。

静まり返った天幕の中で、その赤い瞳の一団がアンリエッタの元へと歩み寄っている。

その一団は、まるで空気を歪ませるかのような、余りにも異常な雰囲気を感じてきた。

ゼツサール卿の目の前に立つ、銀髪の子騎士。

ヴァリエール公爵の目の前に立つ、大斧を手にした短髪の子青年。

異常な雰囲気はこの二人だけでなく、一団を率いているような、クリーム色の短い髪を濡れた幼い少女も。

まるで少女を守るように傍らに立っている、礼装姿をした金髪の女性も。

そして離れた位置から周囲を警戒する、黒い服を身に纏った痩せぎすの男も。

一団の背後を隙一つなく見つめている、淡黄色の長い髪を濡れた、大弓を手にした女性も。

彼らが赤い瞳を持っているからではない。

各々の、その存在の全てが……、正に異様としか言うことの出来ない空気を纏って

いた。

ヴァリエール公爵は静かに長剣を構えたまま、未だ信じられないといった表情で目の前に佇む大斧を担いだ青年を見つめていた。

「動くな。アンタも分かっているだろうけどな」

小さく告げられた言葉と共に、その青年は赤い瞳を輝かせながらかすかな笑みを浮かべていた。

その佇まいには欠片ほどの隙も無く、一度でも動いてしまえば最後、自身の首を一瞬の内に叩き落とされるのが容易に想像できる程のものだった。

ヴァリエール公爵の頬を一筋の汗が流れていく。

自分の無力を呪ったことは今まで数えきれない程に経験してきたが……、目の前の存在は、自分の無力などという言葉だけで到底片付けられるものではない。

この一団は……。たとえば、我が妻……。カリーヌですが抑え切れるかどうか……。

一方、赤いマントを纏った銀髪の騎士は何も言わず、余りにも巨大な、人間程もある

大剣を肩に預けながら、真紅の双眸でド・ゼツサール卿をじつと見つめ続けている。

(何だ……この男は……っ!!)

ゼツサール卿は震撼していた。

長剣を握る手の平にじわりと汗が浮かんでくる。

自分は、今までの人生のほとんどを軍の中で過ごしてきた。

他国に名だたる豪傑達から母国トリスティンの英雄までも、その数多くをこの目で見てきたのだ。

その中においても、目の前にいる男を止められる人物は数えられる程度しかいないと断言できる。

(有り得ぬ……! こやつらは決して亜人などではない! そうだ、まるで……!)

自分の全身へ広がる悪寒のようなものに、ゼツサール卿は覚えがあった。

かつてのマンティコア隊、その精鋭部隊が反乱軍を相手にした時の……、狂ったドラゴンの群れを相手にした時の……。

ただ一人で敵の群れを薙ぎ倒していく、かつてのマンティコア隊、隊長。ハルケギニアの歴史においても最強の騎士と目される、母国の英雄……。

あの……、『烈風』のカリンを前にしているかのような……。

しかしゼツサル卿はその考えを即座に振り払いながら、今自分らが置かれている状況を静かに分析していく。

これ程の者がトリステインにいたなぞ聞いたことがない。しかも目の前にいるのはこの男だけではなかった。

目の前の男と同じような、明らかに異常な雰囲気を纏った存在が、あと五人もいるのだ。

確実に守りきれない、ゼツサル卿はそう確信していた。

となれば我らの命に代えても殿下や枢機卿を逃がすしかない。

奴らが、殿下に襲い掛かるのであれば……。

「……あなたが、アンリエッタ？」

赤い瞳の一団を率いていた少女が、静かに歩を進め始めた。

その視線はマザリーニの背後、青ざめながら緊張した様子のアンリエッタへと向けられている。

ヴァリエール公爵、そしてゼツサール卿は長剣を構えたまま彼らの動きをつぶさに観察していた。

もし、彼らが攻撃を仕掛ける素振りを一度でも見せたなら……、我が身を盾にしても……。

「動かないでくれ。御二方の忠義が深いことと、望みの無い賭けに出ることは意味が違

う。

我々は、貴方達へ剣を向けることを望んでいない」

二人を見つめながら、銀髪の騎士がそう口を開いた。

その涼やかに響いた声はゼツサール卿と公爵の耳に残り、それ故に、その違和感を更に浮き彫りにさせていた。

ただ一言でも分かる程に、彼は稀有な剣士としての高貴さと、英雄じみた魅力や資質をその身から放っていた。

しかしそれと同時に……、余りにも禍々しい、息が詰まる程の存在感をも放っているのだ。

「貴方たちは……、何者なのですか……？」

マザリーニの脇を抜け、一步前に踏み出したアンリエッタを、一団から離れた目の前の少女がじつと見つめてくる。

その濃い赤色の瞳にアンリエッタは思わずたじろぎそうになるが、それでも一步も引かずに堂々と返答を待ち続けた。

周りの貴族たちが息を飲む中、赤い瞳の少女は静かに口を開いた。

「……私たちは、あの軍隊を止めるために来た」

マザリーニはその短い言葉に意図を計りかねていた。

少女へと問いかけようとしたマザリーニを、アンリエッタが手で制する。

「・・・レコン・キスタに関わる者ですか？　我々に、降伏勧告でも行なおうと・・・？」
「違う」

即座に少女が否定する。

「あなた達を守る」

短く伝えられた言葉に、アンリエッタもマザリーニも、誰しもが言葉を失っていた。

「敵は私たちが止める。大軍で向かえば、あの艦隊からの砲撃を受ける。食い止めるには少数じゃなくちやいけない。あなた達には、出来る限り死なないようにしてほしい」

ほんの少し、天幕に沈黙が降りる。

ハツと我に返ったアンリエッタが、慌てて口を開いた。

「で、ですが、それからどうすると言うのです？　たった数人であの軍団を倒すなど、出来るはずがありません」

少女は静かに、首を横へ振った。

「最後はあなた達が戦うけど、その前に合図が来る」

アンリエッタが小さく息を飲んだ。

「合図・・・？」

「あの艦隊は全て落ちる。そうしたら、次はあなた達が戦う番」

意味が分からなかった。

トリステイン空軍を容易く打ち破ったあの艦隊を、どうやって・・・？

話は終わりとばかりに、少女が天幕の中からレコン・キスタの軍勢のいる方角へと顔を向ける。

しかし困惑するアンリエッタの背後から静かに声が発せられた。

「ひとつだけお聞かせ願いたい」

彼らの異様な雰囲気を感じながらも、マザリーニは恐れることもなく、厳しい瞳で目

の前の一団を見つめていた。

「本当にあのアルビオン艦隊を、かつてアルビオンの旗艦だった『ロイヤル・ソヴリン』号を落とせると言うのなら、これから山のような他国の軍艦がやってくるはずだ。

ありえないとしか思えない話ではあるが、もし本当であるならこれだけは聞いておかなければならない。」

「貴方達を遣わせた人物は、誰なのですか」

その言葉に少女がゆっくりと振り向いた。

その少し悩んだような、困ったような顔は、まるで年相応の少女のようだったが……。彼女はすぐさま答えを得たかのように、赤い瞳をマザリーニに向けた。

「……ブリミル」

その場にいた者達、全員が凍りついたように目の前の少女を見つめていた。

しかし少女が小さく何かを呟くと、その瞬間に彼らの足元へ光り輝く魔法陣が浮かび上がり……。彼らは一瞬の内にその姿を消した。

まるで、その場にいた全員が幻でも見ていたかのように・・・。

「・・・始祖の・・・使い・・・？」

そのマザリーニの眩きは、直後に遠く鳴り響いたレコン・キスタ達の歓声によって掻き消されていった。

第七十一話 彼方からの援軍

トリスタニア郊外、そのだだっ広い平野に六名の男女が次々に着地していた。

背後にはトリステイン本営の軍勢が遠目に見えるも、彼らは軍を展開させたまま動くとはしていない。

敵軍の歩兵達もまだ遠いとはいえ、徐々にこちらへ向かって進軍を開始していた。

遠い平野をびっしりと埋め尽くす黒い塊の背後には、ここからでも分かる程の巨大な戦艦と、数多くの戦列艦が少しずつ近付いてきている。

先程の歓声は進軍が始まった合図だったのだろう、今もなお敵軍の方向からは大きな歓声が上がっている。

もう一刻足らずの間はこの場所まで辿り着くのは目に見えていた。

赤い瞳の一団は遠く聞こえる歓声にいったん目を向けるも、その後は辺りをきよろきよろしたり、装備を点検したり、小さく肩を回したりしていた。

「まだあんな所にいるのか。急いで来て損したな」

気の抜けたような、つまらなそうな声で大斧を背負った青年が呟く。

「間に合ったようだが、まだ少し時間があるみたいだね」

重厚な鎧に身を包んだ銀髪の騎士が巨大な大剣を横の地面に突き刺した。

その横に立つ礼装姿の女性はその声が聞こえていないのか、日の光で煌めく自分の金髪をくるくると弄んでいる。

「さて、どうしようか。カトリーヌくんは……」

「……な～んか、気に喰わない。ねえ、そう思わない？」

礼装姿の女性が不満たっぷりの口調でそう告げる。

溜め息まじりに、身の丈程もある大弓を携えた女性が口を開いた。

「もう……、セイレンさんが話してるのに……。何なのよ？」

「だって……！ セシルちゃんも気付いてるでしょ!? 何であの人たち私達をあんな目でじろじろ見てくるわけ!？」

「んなこと言ったって仕方がないだろ。今の俺達を見たら誰だってあんな顔になるぜ？」

その呆れたような声に、ぎろりと礼装姿の女性が大斧を背負った青年を睨み付ける。

そのまま近くで様子を見ていたクリーム髪の少女へとがぼつと抱きついた。

「アンタ、カトリーヌちゃんを見てもそんなこと言うの!? こんなにちっちゃくて可愛いじゃない! こんな子をあんな怖い目で見るとだなんて人間性を疑っちゃうわ!」

大斧を背負った青年がにやりと笑う。

「どつちかかってーと、人間じゃないのは俺達……、つとこら、石投げるなつて」

いつの間に拾っていたのか、礼装姿の女性が指先程度の小石を大斧の青年へとぼいぼい投げつけている。

「アンタ、次変なこと言ったら『ホーリーライト』お見舞いするわよ」

ドスの効いた声で呟きながらも、礼装姿の女性は腕の中にいる少女を抱き枕のようになぐいぐい抱きしめている。

それを受けて、クリーム髪の少女が困った顔をしながらもぞもぞ逃げようとし始めていた。

「……おてんばだとは聞いていたが、君は想像の上を行つてるね」

拘束からぞもぞと逃げようとする少女、それを逃がすまいと抵抗する礼装姿の女性。

その二人のやり取りを尻目に、鎧の青年はもう一度溜息をついた。

「……そもそも、間に合うのか？」

聞き慣れない声に、赤い瞳の一団はきよとんとした。

そのまま声の主を探してきよろきよろと辺りを見回す。

「……首都からここまで、相当な距離がある」

それぞれの赤い瞳がある一人へと向いていく。

声の主は、痩せぎすの青年だった。

「何だ、アンタ喋れるのか」

「驚いたわ。喋れないとばっかり」

ようやくクリーム髪の少女が礼装姿の女性の拘束から逃げ出していた。

名残惜しそうに少し離れていく少女を見つめながら、腕を組んだ礼装姿の女性が痩せぎすの青年へと声を上げる。

「さあ、間に合うかなんて知らないわ。大体ね、ここまでばつと連れてきて、どかーんつてあの艦隊を吹っ飛ばして、ばつと宿屋まで戻してあげればそれで万事オツケーな話……」

不自然に、礼装姿の女性の声が途切れた。

そのまま赤い瞳の一団は、ふんふんと何かを聞いて頷いたり、首を傾げたりしている。

「ふーん……。分かったような、分からなかったような……」

大弓を携えた女性が呟いた。それに続いて、礼装姿の女性も不満たつぷりに声を上げる。

『偶然と運命を積み重ねる』ねえ……。『影響を少なく』の意味も分からないし……。

この人って、上手く言葉を伝えるのが苦手なのかしら」

「あんまりそういうのに慣れてないんじゃないか？ 他にも色々とやらかしてそうだな」

二人して不平不満をぶちぶちと言いつけている一方、無表情のままだった瘦せぎすの青年がぼつりと口を開いた。

「……シンプルな話だ」

「ああ。僕らのやることは分かり易くなった」

鎧の青年がクリーム髪の少女へと視線を向けると、他の一団も次々に少女へと瞳を向けていった。

「うん。じゃあ、皆の戦う場所について相談なんだけど……」

レコン・キスタの『レキシントン』号艦上にて……、艦隊司令長官サー・ジョンストンは苛立ちを隠さないまま、遠く見えるトリステインの軍勢を見つめていた。

「奴等は動かぬのだな、艦長」

眼下から雄叫びとも歓声とも似た陸軍の声が聞こえてくる中で、ジョンストンは忌々しげに艦隊の前方を進む歩兵達を睨み付けていた。

彼らの士気が高いのは上々なのだが、今のジョンストンにはその声すらも単なる耳障りな雑音にしか聞こえてこない。

「我々を引き込むつもりでしょうな。王都トリスタニアとの連携を図る策なのでしよう」

「臆病者めが。堂々と戦う気概すら持たぬ者が、我々の策を翻弄するとは実に腹立たしい」

その言葉を耳にしながら、『レキシントン』号艦長、ボークウッドは今すぐにこの男へ杖を向けてしまいたい感情を必死に押さえつけていた。

トリステイン王国において高名であり、他国の由緒ある貴族ですら受け入れるという

トリステイン魔法学院。

その貴族の子弟たちを標的にし、兵士ですらない彼らを戦争における勝利に利用するなど……。

それはポーウッドが考え得る悪行を遥かに超えた、最悪の行動であった。

それが失敗に終わり、学院を襲った三隻の巡洋艦は、その内の一隻を失ったという理由で既に艦隊へと合流している。

乗組員の報告によると、傭兵団を率いていたメンヌヴィルは傭兵達を残したまま忽然と姿を消し、ジョンストンの副官であった指揮官やその補佐についた士官は戦死したとのこと。

失敗の原因……、その情報は未だ錯綜している。

メンヌヴィル率いる傭兵団の離反とも、指揮官の勝手な行動により巡洋艦の連携が混乱したとも、偶然の事故により巡洋艦が航行不能に陥ったとも。

そして、あのオールド・オスマンによる巡洋艦撃沈などという、虚実の分からぬ情報すらあったのだった。

「……目前にある王都を落としさえすれば、戦は終わりです。司令長官殿は目の前の戦いのことのみをお考えください。託宣に従わねばならぬのでしょうか？」

その言葉にジョンストンはポーウッドを睨み付けるも、何も言わずに「ふん」と鼻を

鳴らした。

ふと、眼下に広がる歩兵達の動きが止まっていることにポーウッドは気が付いた。先程まで鳴り響いていた騒がしい程の歓声が、かすかに弱まっているようにも感じられる。

「何だ・・・？」

怪訝な表情を浮かべたポーウッドが地を覆う程の歩兵達を再度見つめる。

やはり、進軍が停止している。

「各艦へ通達。艦隊停止」

「はっ！ 艦隊、停止せよ！」

傍らの士官が叫び、『レキシントン』号は徐々に速度を落とし始めた。

同時に『レキシントン』号のマスト上に立つ物見から他の艦にも手旗信号が送られていく。

そうしている間にも歓声が徐々に小さくなっていった。

一体何が起きているのかと艦上にざわざわとした雰囲気広がっていく。

直後、最前線にいる歩兵達が駆け出していくのが見えた。

眼下に広く展開している歩兵達の、右翼と、左翼、そのそれぞれがほぼ同時に動いていくのが見える。

かすかに雄叫びらしき音が聞こえ、軍団から離れた歩兵達が何かに襲い掛かった瞬間、その歩兵達は何かの攻撃を受けて次々と吹き飛ばされていった。

「物見！ 報告しろ！ 何が起きています！」

ようやく違和感に気付いたジョンストンが大声で叫ぶ中、アルビオン中央軍の前方で何かの青白い光が弾けた。

その光は突撃していた歩兵達を次々と貫き、その背後に広がる歩兵達の只中で炸裂したように更なる光を放っている。

「歩兵部隊が何者かと交戦中の模様！ 敵は少数です！」

その物見からの報告は余りにも杜撰なものである。

ボーウッドが眉根を寄せる中、その傍らに佇むジョンストンが激昂したように伝令へ

と叫んだ。

「そんなことは見れば分かるだろうが！ トリステイン軍による奇襲か!? 敵は何人いるのかと聞いているのだ！」

「さ、再度確認を行なっているのですが、合計で、四名……、または五名との報告が……！」

その報告にボーウッドはますます怪訝な表情を浮かべていく。

「それぞれの位置に敵軍が一、二名しかいないということか？ 敵の別動隊は確認できるのか？」

そうしている間にも眼下では二度、三度と歩兵の小部隊が突撃を仕掛け、右翼、左翼、中央における歩兵達が次々に吹き飛ばされていく姿が見える。

「中央部隊より報告あり！ 現在、正体不明のメイジと交戦中とのこと！ それ以外の敵は確認されておりません！」

物見からの報告を耳にしながらボーウッドは『レキシントン』号の舷縁へと歩み寄り、眼下に広がる歩兵達の最前線へと目を向けていく。

先程まで次々に沸き起こっていた歓声はいつの間にかまばらのものとなっていた。

「何が起きている……」

ボーウツドがそう呟く中、既に歩兵達は攻撃の手すら止め、ただ立ち竦むかのように軍の動きを停止させている。

その余りにも異様な光景にジョンストンが声を張り上げた。
「何故彼奴らは進軍せんのだ！ 艦長！ 何とかしたまえ!!」

艦隊総司令官であるサー・ジョンストンは気に喰わないが、確かにこのままでは埒が明かない。

仕方がないとばかりにボーウツドは傍らの士官へと命令を下した。

「地上部隊の前方に砲撃を行なえ。その数名如きに何故止まっているのかは分からんが、歩兵達の背を押してやるのだ」

アルビオン軍の左翼、そこに広がっていたのは正に異常とも言える光景だった。

数千からなる軍団がざわめきと共にその歩みを止め、粉々に砕け散った複数の岩の拳や、地面に突き刺さった数十本の氷の矢、目前に力無く転がっている十数人もの兵士達をただ見つめているのだ。

彼らの前方。

そこには、白銀の鎧を身に包み、真つ赤なマントを羽織った銀髪の騎士が静かに佇んでいた。

「忠告する」

その言葉と共に、輝く赤い瞳が兵士達を射抜く。

目の前に佇む赤いマントの騎士に対して前線の兵士達は何も言えず、怯えたようにその赤い騎士を見つめているだけだ。

それでも、左翼を率いるアルビオン軍の指揮官の一人が、小さいながらも声を張り上げようとした。

「ぎ……、貴様は、何者……」

「……から先へ進ませる訳にはいかない」

指揮官の言葉へと重なるように、赤い騎士が静かに声を上げた。

その声はそれほど大きいものではなかったが、兵士達のざわめきを抑えるほどに力強く、透き通った声だった。

「君達がこれ以上進むことを、我々は許さない。自らの国へ戻るのならそれも良いだろう」

指揮官へと真紅の瞳が向けられると、指揮官は言葉にならない声しか上げることができなかつた。

「しかし……、それでもなお進むというのなら、命の保証は無い」

その右翼……、大斧を携えた赤目の青年がにやりと笑っていた。

「お前らが戦いたいのなら、そうすればいいさ。俺達を殺そうってんならそれでもいいだけだな……」

その青年の顔から馬鹿にするような笑みが消えた。

肩に担がれていた、血に塗れた大斧が勢いよく地面に叩きつけられる。

まるで大砲が撃ちこまれたような地響きと轟音に、前線にいた兵士達は思わず後ずさっていた。

「忠告してやる。それなりの覚悟を持ってから向かってこい。命乞いは無駄だと思え。

・・・それでも向かってくるのなら、俺達はそいつを叩き潰すだけだ」

アルビオン軍の中央・・・、まだ幼さの残る少女と、礼装のような服に身を包んだ女性性が、静かにアルビオン指揮官を見つめていた。

「私たちは、貴方たちを無駄に殺すことなんて望んでいない。

でも、私にもやらなければならないことがある。・・・躊躇なんてしない」

すつと少女の赤い瞳が細まる。

その瞬間・・・、アルビオンの兵士達は周囲の空気が凍りついたかのような、途轍もない威圧感をその身で感じていた。

知らぬ内に前列の兵士達が少しずつ下がりはじめ、遠目にその様子を見ていた兵士達も目を見開き、自分の肌が粟立ち始めるのを感じていた。

高まっていた士気は大いに崩されつつある。

中央軍を率いていた、屈強な指揮官の男もそれを確かに感じていた。

戦争において、軍団に強者や英雄は必ずしも必要ではない。

たとえ数人、十数人の豪傑がいようと、戦の勝敗を決めるのは制空権を握る艦隊や竜騎士、そして地を進む歩兵……、つまりは兵士の数によって戦が決まるのだ。

もちろん優秀な戦術や指揮官の存在によって数の差が覆ることもままあるが、最終的には兵士の数によって戦争の結果が決定される。これはこの世の摂理ともいえる、当たり前のことなのだ。

しかし……、目の前の存在からはこの軍団を飲み込むかのような、あまりにも不吉な雰囲気を感じてしまう。

数多くの戦いを経験してきたからこそ分かる……、濃密な、死の気配を。

その瞬間、上空に浮かんだ『レキシントン』号から数発の砲撃音が轟いた。

その砲弾は遠く見えるトリステイン軍と赤い瞳の一团の間に着弾する。

ハツと我に返つた中央軍の指揮官は得も知れぬ恐怖を必死にねじふせる。

そのまま自分自身を鼓舞するように、『レキシントン』号からの命令へ答えるがごとく号令を下した。

「と、突撃だ……。全軍、突撃せよ！ 所詮、奴等はただの人に過ぎぬ！ 我らは『虚無』に選ばれし皇帝クロムウエルの軍勢である!! 始祖ブリミルの庇護を受けし我らを阻むことは、何者も許されぬのだ!!!」

その声にアルビオンの指揮官たちは次々と同調し、口々に天高く叫び始める。

「神聖皇帝クロムウエル、万歳!!!」

その指揮官たちの号令に、アルビオン軍の兵士達が戸惑いながら、そして次第に力強く雄叫びを上げ始めた。

前列の兵士達はまるで不吉な予感を拭い去ろうとするかのように、そして後列の兵士達はその勢いに押されながら歓声に似た雄叫びを上げ続ける。

それは波のように大きくうねりを上げ、大地を揺らすような力を持ってアルビオン兵

たちの心を強く揺さぶっていく。

『レキシントン』号からまた数発の大砲が放たれる。

それに続くように指揮官たちは各々の杖を高く天に掲げ、そして、喉が張り裂けるほどの号令を叫んだ。

「全軍、突撃ツツ!!」

目の前の兵士達が進軍を開始する。

その雄叫びに飲み込まれるような小さな声で、カトリーヌは静かに呟いていた。

「・・・そう。分かった」

右翼にいた青年がくつくと笑いながら、突撃し始めた兵士達を向かい討つがごとく、大斧を肩に担ぎなおす。

「これだから、軍隊ってのは・・・」

左翼、赤いマントの騎士は決して油断することもなく、肩に担いでいた余りにも巨大な大剣をゆつくりと構え直し……。

その切っ先を、迫る兵士達へと向けた。

「いいだろう、かかってくるがいい。レコン・キスタ」

第七十二話 エインヘリアルの残影

「何だ・・・、これは・・・」

トリステイン本営。その天幕の中で、宙に浮かんでいるいくつかの鏡を見つめる人々がいた。

その淡く光る鏡は『遠見の鏡』というマジックアイテムである。

遠隔地を映し出す鏡として知られるそのマジックアイテムが映し出しているのは、決戦の地であったトリステイン郊外に広がる平野と、今正にそこで戦う兵士達の姿だった。

それぞれの鏡の中心に映っているのは、突如としてこの天幕に現れ、そして消えていった、あの赤い瞳の一団である。

銀髪の騎士へと次々に襲い掛かるトライアングル・スベル。

水や炎の矢が間断無く降り注ぐ中、同時に十数メートルもの大型ゴーレム達が次々に拳を振り上げながら突撃を仕掛け、狙い澄ました雷の一閃が赤いマントを翻した銀髪の騎士へと続けざまに襲い掛かっていく。

しかし、その全ては無駄に終わっていた。

輝く赤い瞳と真紅のマントが舞うようにそれぞれの魔法を潜り抜け、大型のゴーレム達の攻撃に合わせるように次々とその腕や足を容易く斬り裂きながら、複数のメイジにより放たれていたライトニング・クラウドの魔法ですらも瞬時に回避されていく。

大斧を振るう青年も同じように、無数の魔法や雨のように降り注ぐ弓矢に怯むことすらなく、次々に襲い来るゴーレムや兵士達を両断し、吹き飛ばし、右翼にいる敵軍の指揮官を守る布陣を切り裂くように戦い続けている。

「この人達は……」

放心したように鏡へ視線を向けていたアンリエッタが小さく呟いた。

そんな中、一つの鏡から赤い光や青白い閃光が放たれていた。

その鏡に映されているクリーム髪の少女が紫色の宝石を湛えた杖を振るう度に、少女の周囲には空を埋め尽くす程の炎の塊や、青白い巨大な雷が瞬時に形成され続けた。

天災のような魔法が数十人の兵士達を飲み込んでいく中、更に地面を走る氷の柱や巨大な氷の槍が残る兵士達に対しても次々に襲い掛かっていく。

しかし大混乱に陥りながらも、後衛のアルビオン軍は無数の矢や銃弾、更には迫撃砲の砲弾までもを少女へと次々と放っていた。

アルビオン軍による一斉攻撃には到底避ける隙間など無い。

しかし、少女が後方へステップを踏むと同時に、少女の前方へと立ちはだかった金髪の女性。

その周囲に、突如青い光の柱が次々と立ち現れていた。

真つ黒い壁のように迫り来る砲弾や矢は二人へと直撃する寸前にびたりとその動きを止め、まるで全てが宙に縫い付けられたようにその動きを止めている。

その戦いの光景を喰い入るように見つめていたアンリエッタが、もう一度口を開いた。

「……この人達は、本当に人間なのですか……?」

「……分かりませぬ。彼らが、何者なのか……」

不敬だとは知りつつも、マザリーニはアンリエッタへ顔も向けずに、鏡の向こうで繰り広げられる戦闘へと視線を向け続けていた。

彼らの戦い方は異質だった。

もちろんそれは、到底人間とは思えない程の、彼らが持つ戦闘力が異質であるからだとも思える。

しかしそれだけではないと、兵士でもないマザリーニは直観していた。

彼らは、余りにも『慣れてる』のだ。

周囲を埋め尽くす程の敵軍や、到底勝ち目など無い状況においての、判断力。

自身を襲う攻撃の『どこを切り崩し、どこを避けるべきなのか』。

そして更には、無謀とも思える程に敵陣を切り崩すことで、相手の押し返そうとする反応を誘っているかのような……、『一個の強大な怪物を相手にしているかのような戦い方』……。

ふと、マザリーニは周囲にいる軍属の貴族達の表情を見る。

鏡を凝視し、まるで歯を喰い縛るかのように緊張した表情。

その表情がどんな感情から浮かんだものなのか、兵士ではないマザリーニには分からなかった。

しかし自分も含めて、彼らの胸中を満たしているであろう感覚は理解できていた。

多分ではあるが・・・、彼らはある種の『到達点』だった。人が人として得ることの出来る、強さの極致。それを担う者達が、今あの場所で戦い続けている。

戦闘が始まる前の、先程までの喧騒とはうってかわって、天幕の中で声を上げる人間はほとんどいなかった。

天幕の内部を包み込んでいたのは、ただ遠くから聞こえてくる雄叫びや地響きのみである。

『始祖に遣わされた』と言い放ったあの赤い瞳の一団が現れてから、戦闘が始まる寸前まで、トリスティン本営にいた指揮官たちはどちらの判断を下すべきなのかを喚くように話し合っていた。

彼らの指示に従うべきか、否か。

彼らが尋常でない存在であることは、彼らを実際に目にした者達の全員が認識できていた。

しかし、あの者達がレコン・キスタ側の者共ではないにせよ、あのような異常な存在の言うことに従うべきかどうかは誰しも判断することが出来なかったのだ。

トリステイン軍の陸空両軍に突撃待機命令を下しているとはいえ、あの一団を目にしている軍団の兵士達が今の不可思議な状況に対応できるとは限らない。

その軍団の兵士達への指示と、完全なる本営との連携を行なうために、ヴァリエール公爵がその役目を買って出ている。

既に軍団の元へと到着しているヴァリエール公爵からは、何度か伝令による本営への確認が行われているのだ。

しかし、天幕の人間達は目の前の鏡へ映されていく光景に絶句しながら、待機命令以外の指示を出すことが出来ていなかった。

もし、万が一、彼らがトリステイン軍へと矛先を変えた場合・・・。
アルビオン軍と彼らを抑えきることなど、到底不可能であるからだ。

「・・・」

天幕に次々と響きわたる、遠く聞こえる戦いの音。

その只中でトリステイン軍は何もすることが出来ず、ただ彼の地で戦い続ける赤い瞳の存在を見つめているのだった。

大騒ぎになっていゝる地上の音を聞きながら、レキシントン号から飛び立とうとしていた竜騎士の一団がいた。

レキシントン号の甲板の一部が仕掛けにより徐々に開け放たれ、そこからは雲間に広がる大空が見え始めている。

本来、彼らが出撃するタイミングはもつと後のはずだった。

トリステイン陸軍とアルビオン陸軍が衝突した後、互いの空軍が砲撃戦を開始するであろう中盤戦以降において、二つの竜騎士隊はアルビオン陸軍への支援攻撃を行なうはずだったのである。

しかし今現在、地上の状況はトリステイン軍の精鋭らしき歩兵の攻撃によつて大混乱に陥つていゝる。

しかもその攻撃の規模は極少数人数による攻撃であるために、大規模な空戦を予想していた空軍は地上部隊への支援が行なえないでいゝること。

万が一にも地上部隊が大打撃を被ることなど有り得ないが、念には念を入れて謎の敵軍に対しての竜騎士達による対地攻撃が行われようとしていたのだ。

アルビオンに誇る竜騎士達は突然の指令に戸惑いながらも着々と出撃準備を進めていた。

走り回る竜騎士付きの世話人達は火竜の群れへ水の秘薬を含んだ飲み薬を与えながら、火竜のコンデイションを最大限に引き出せるように。

竜騎士達は自身の杖や装備を再確認しながら、自身が乗る火竜達との意思疎通を再度行ない始めている。

わざわざ竜騎士隊を使用する意図が分からず苦言を呈する竜騎士もいたものの、彼らは既に今の状況が決して樂觀できる状況でないことに気付き始めていた。

地上から聞こえてくる陸軍の怒声や戦闘音は尋常なものではない。

出撃をしたところで局地戦に近い現状においては無意味に終わる可能性もあるが、彼らは決して油断することなく出撃準備を進めていった。

その中で一際大きい火竜に乗り込み始めていた男性へ、精悍ながらもまだ年若い兵士が走り寄っていく。

「総司令官閣下およびワルド総隊長より、伝令です！」

火竜に跨った隊長格の男性が鷲羽のついた兜を腕に抱えながら、伝令の青年へと刺すような瞳を向けた。

この二つの竜騎士隊はアルビオンが王国だった頃より、アルビオンの精鋭部隊とも言

える高名な一団である。

その元総隊長の視線を受けて、伝令の青年は息を飲みながらも苦々しい顔でもう一度口を開いた。

「申し上げます！ 攻撃目標は変わらず、前方のメイジへの攻撃を実施すること！
し、しかし！ 各竜騎士隊は、『華』を使用するようにと申されました!!」

青ざめながら声を張り上げる伝令へ向けて、周囲の竜騎士達は戸惑った様子で目を見開いていた。

「・・・馬鹿な」

短いなながらも威圧に塗れた口調と共に、隊長の男は怒りのこもった瞳で伝令の青年を睨みつけていた。

「連中はよりにもよつて『華』を使えと言うのか!! 味方は、どうするつもりだツ!!」

船内で響き渡った咆哮に伝令の青年は全身を強張らせるも、もう一度引きつった顔で声を上げた。

「お、仰られていることは分かります！　しかし、総司令閣下より命令が下されたのです！」

悲鳴のような口調のまま伝令の青年が続ける。

「敵味方問わずに、一刻も早く混乱の一因を消し去れとのことですよ！　ワルド総隊長は別方面からの奇襲を行いません！　皆様の攻撃に合わせるため心配は無用とのこと！」
隊長格の男性はがぎりど歯ぎしりをすると、忌々しげに「委細了解した」と声を出した。

伝令の青年は慌てて一礼をするとまた船内へ向かって走り去っていった。

火竜に乗った一人の竜騎士が隊長の男へと近付く。

「……隊長、本気ですか？」

「……俺だって味方殺しの悪名など背負いたくはないが、命令であれば仕方がないだろうが。だが、士気の低下は免れぬだろうな」

隊長の男は手に持っていた鷲羽の兜をかぶり直すと、怒りを吐き出すように部下の竜騎士達へ叫んだ。

「総員、飛翔準備！　目標上部、雲まで至った後に散開！　急降下を行なう！　目標のメイズへ『華』を咲かせるぞ！」

その言葉を聞いた竜騎士達は各々の火竜へと乗り込み、次々に火竜達が上空へ向けて飛び立っていく。

その羽音が遠ざかっていく中、レキシントン号にいた若い船乗りの一人が不思議そうな顔で首を傾げた。

「『華』って何だ？ でけえ声だったな」

「・・・城落とした」

もう一人の中年の船乗りが戸惑った表情のまま、自分の作業を再開する。

「二人のメイジに、しかも混戦中に使うなんざ聞いたこともねえがな」

周囲を覆いつくす戦場の音の中で、クリーム髪の少女、カトリーヌは静かに青い空を見上げていた。

はるか上空に鳥のような小さな点が複数存在し、それらが急降下をし始めるのが赤い瞳に映っている。

「カトリーヌちゃん、前」

その落ち着いた声に、カトリーヌは視線を前方へと戻した。

先程のカトリーヌによる魔法で一度は布陣を瓦解させたものの、すぐさま立て直してきた歩兵の一団が再度カトリーヌ達への攻撃を再開しようとしている。

「飛び道具と魔法は何とかするわね」

金髪をなびかせた女性、マーガレッタが微笑みながらカトリーヌをちらりと見る。

先程からマーガレッタはニューマの魔法で飛び道具を無力化しつつ、非物質の魔法は瞬時に紡がれる『ホーリーライト』の魔法で上手く相殺させ、実体化した魔法は手に持った十字架型の鈍器で叩き落とし続けている。

カトリーヌの魔法を恐れてか、敵メイジによる魔法の攻撃は決して多いものではない。とはいえ、その戦い方は一般的なブリストと比べると明らかに異色な戦い方である。

そのマーガレッタの戦い方にかつての友人を少しだけ思い出したが、すぐにその余計な考えを振り払ったカトリーヌは、もう一度魔法の詠唱を開始していた。

今度の相手は四足獣型のゴーレムの群れ、そして宙に浮かび上がった十数人にもなるメイジ達のようなのだ。

人知れず胸に沸き起こった恐怖と怯えをそっと沈めながら、カトリーヌはその突撃してくる地上の軍団へ向けて巨大な火球、ファイアーボールを全力で撃ち出していた。

瞬時に分裂した数マイルの火球一つ一つがゴーレムの一団とメイジ達をそれぞれ消

し飛ばしていく中、その隙を狙うかのように軍団から再度放たれた矢や弾丸、果ては砲弾すらが次々と迫り来る。

しかし歌うようにマーガレッタが放ったニューマの魔法によって、それらの飛び道具は力無くびたりと宙に縫い付けられていく。

宙に停止する飛び道具の向こう側で、爆裂した炎の中から黒に染まった人影が見えた気がした。

まるでその人影から目を逸らすように、カトリーヌはもう一度頭上へと顔を向けていた。

しばらく上空から接近してくる小さな点をそのまま見つめてみると、カトリーヌのすぐ近くからマーガレッタの声がした。

「あなたのせいじゃないわ」

声のした方へカトリーヌが顔を向けると、マーガレッタは今までに無いほど険しい顔のまま、炎に包まれて落下していくメイジ達を見つめていた。

「でも、嫌になっちゃったのなら・・・、私たちはあなたに従うだけよ」

二人の頭上を通り過ぎた砲弾が背後へと着弾し、大地を大きく震わせている。

身体を強張らせたカトリーヌは両手で杖を抱えたまま一瞬下を向きそうになったが、マーガレッタの言葉に答えるように、ゆっくりと視線をはるか上空へ向けていった。

そのまま、まるで目の前の軍隊を無視するかのようになり、カトリーヌはこれまで以上の莫大な魔力を集中させ……、それを即座に解き放った。

カトリーヌの足元を中心として二十メートルもの巨大な魔法陣が浮かび上がり、凍り付くような一陣の風が周囲を駆け巡っていく。

それらが大地へ急激な氷の痕跡を刻み始めるのと同時に、カトリーヌは周囲の喧騒に飲み込まれる程に小さく、魔法の詠唱を完了させた。

「——ストームガスト」

はるか上空にいた竜騎士たちは自由落下を開始していた。

翼を畳みながらの急降下により、下方の目標へ向けて速度を高め続けていく。

竜騎士隊の中隊規模による火のブレスを急加速で連携させる。

頭上から一目標に対して放たれる八方の火力を集中させる。

俗称で『華』と呼ばれるこの技は分厚い城壁を溶かすほどの大火力を持つ一方、ブレスを放つまでにその身を守るのはドラゴンを操る竜騎士の技量のみ。

ドラゴンと竜騎士に多大なる負担を強いる上に竜騎士の命をも天秤にかける危険な

行為として、決して多用されない捨て身の大技であった。

手練れのメイジがいくら集まろうとも、人が防げる規模の火力ではない。

だからこそ敵味方が混在しているこの場で使うべきではないのだが・・・、既に隊長には迷いなどなかった。

尋常でない速度の中で、隊長は下方の光景に目を奪われていた。

目標のメイジが、あらゆる魔法を用いて次々と目前の兵士達を吹き飛ばしていく。

あのメイジは危険すぎる。

奴が何者なのかは知らないが、戦への影響が少ない今の段階で、あの存在を確実に消し去るべきだ・・・。

その思考の直後、大地に巨大な魔法陣が浮かび上がった。

何事かと逡巡したが即座にその考えを振り払う。

何を行なおうとも防ぐことは出来ない。

そう確信した各竜騎士がブレスを放つ準備を整えた瞬間・・・。

凍りつくような暴風と共に、氷の塊が側面から隊長とドラゴンを吹き飛ばした。

「な、何だっ!？」

咄嗟に目を細めながらも、隊長は周囲に風の層を作り出す。

風のトライアングルメイジであった隊長は必死にドラゴンを立て直しながら目標のメイジを探そうとして……、周囲の様相に思わず息を飲んでいた。

周りは全て白一色の吹雪の中だった。

まるで山脈の猛吹雪にでも放り込まれたような、『ドラゴンの頭すら見えない』程の猛吹雪の中にいる……。

脱出しなければ。

そう隊長が判断をした時、かすかに竜の叫び声が聞こえ、がくとドラゴンが体勢を崩した。

そのまま暴風に煽られながら力無く落ちていく中で、彼は自分の乗るドラゴンが死んだことを確信した。

自身の身体にも何かの衝撃が走るが、何が起きたのかは全く分からない。

そして隊長とドラゴンは吹雪から抜け、三十メートルもない目の前には広がる大地が見える。

隊長は即座に『フライ』の呪文を唱えようとしたが、ルーンを唱えることは出来なかった。

口からは血がほとぼしり、何かに胸を貫かれたということに隊長はようやく気が付い

た。

そして、目標のメイジと目が合った。

目標のメイジは、まだあどけない少女だった。

その目は見たこともない真紅の瞳だったが、悲しそうな感情をその両目に湛えながら、自分をじつと見つめ続けている。

戦争にはそぐわない、幼く、悲しげな瞳。

（お前は……何故、そんな目をしている……）

そう問いかけようとしたまま、凍りついた隊長の意識は徐々に消え失せていった。

「くそっ！ 何が起きた！」

吹雪に飲み込まれていたワルドは全力で離脱を行っていた。

急降下する火竜の群れと離れていたために周囲の吹雪には若干の隙間がある。

ワルドは風竜と自身の魔法を駆使してなんとか脱出し、下方に広がる猛吹雪に息を飲んだ……。次の瞬間、何かが近づく気配にワルドは操っていた周囲の風を暴風へと変えた。

何かが肩を掠め、血が後方へ飛び散っていく。

ワルドは今通り過ぎたものを何とか視認することができていた。

『矢』だ。

何者かが自分を狙撃している。

矢が飛んできた方角から狙撃者のいる位置を割り出し、そのまま、ワルドは自分の目を疑っていた。

「馬鹿な……!! あの世界かっ!!!」

また風を切る音と共に矢が飛来し、ワルドは全力で風竜を駆りながらエア・ハンマーの魔法で矢を弾き飛ばす。

遠く見える森の端……、あの場所から矢を放っている者がいる。

しかしあの場所は……、四百メートルを超えている……!!

次々と飛来する矢を避けつつも、なんとかワルドは急上昇を開始していた。

防ぎきれない矢はワルドの身体を掠め、空気の影響を欠片も受けていないように風竜の鱗すらも吹き飛ばしていく。

それでも何とか雲近くまで飛翔すると、ワルドは狙撃手を仕留めるためにその方向へと速度を上げていった。

木々の隙間から、静かに戦場を見つめる女性がいた。

腰ほどもある淡黄色の長い髪。

その手には身の丈近くもある大弓が携えられている。

遠く見える兵士達の頭上から吹雪が掻き消える。

ばらばらと散らばるように落下していく竜騎士達を見て、その女性は軽々と木々の間を飛び移っていく。

その瞬間、木々の枝をなぎ倒しつつ、頭上から風竜がその女性に襲い掛かった。

しかし女性は焦った様子もなくその突進を瞬時に避けると、風竜へ向けて数発の矢を

放つ。

矢は強固な竜の鱗すらも貫き、風竜が悲鳴のような雄叫びを上げた。

その一瞬の攻防の中、女性の斜め後方から、漆黒のマントを翻しながら襲い掛かる影があつた。

(殺つた……！)

しかし女性はまるで見えているかのようにワルドの刺突を容易く躲し、逃げるように木々の枝を飛び移っていく。

逃がすまいとワルドが風のように木々の間を縫いながら、その女性を魔法の射程に収めようとした瞬間、ワルドはそのままぎくりと身を強張らせた。

ちらりとこちらを見たその瞳は、血のように真っ赤な色を湛えている。

その動揺の隙を突くかのように女性は即座に方向を変え、木々を蹴るようにしてワルドの頭上を通り過ぎた。

弓を引き絞る音にワルドは『フライ』の呪文を駆使して宙へ身を翻す。

「ウインドカッター！」

即座に『フライ』を解除して瞬間的に上昇した慣性を利用しながら、ワルドは振り向きざまにウインドカッターの魔法を放つ。

しかし、既にその場所には狙撃手の女性はいなかった。

木々の隙間から次々と矢が放たれる。

ワルドは全力での呪文を多用しながら襲い掛かる矢をなんとか回避し続けていく。

緊張の糸を緩ませず戦闘に集中しながらも、ワルドは戦慄していた。

広範囲の風を操り、今この瞬間ですら周囲を索敵し続けているにも関わらず。

一度目を離して以降、『風』のスクウェアメイジである自分があ女性の影すらも見る
ことができない。

この強敵から一旦逃れるように枝を伝って移動しつつ、精神力の残量などお構いなしに、ワルドは自らにとって最も強力な魔法の詠唱を開始していた。

「ユビキタス・デル・ウインデ……！」

風のように移動し続けるワルドの身体から四体の偏在が生まれていく。

そして、彼らが瞬時に四方へ散った瞬間……、その偏在たちの頭上から無数の矢が

襲い掛かっていた。

それぞれの偏在はエア・ハンマーやウィンドカッターの魔法で即応していたが、その魔法すらも突き破った矢が偏在たちの急所を次々に貫いていく。

背筋が凍り、ワルドがこの場から脱出しようと振り向いた時には、いつの間にか目の前の太い枝に狙撃手の女性が立っていた。

淡黄色の長い髪を風になびかせ、弓を引くこともなく、その真紅の双眸は静かにワルドを見下ろし続けている。

「な……。何だ……。お前は……！」

目の前に立って初めて、狙撃手の女性はその身からあまりにも冷たい気配を放ち始めていた。

この女性の殺気と気配は、ワルドが想像できるものを遥かに超えていた。どう逃げようとも逃れることのできない、確実な死。

ワルドの目には……。目の前の女性が、もはや人間にすらも見えていなかった。

「き、貴様は……。貴様らはっ……。!! 一体何者なんだ!!」

ワルドは瞬時にルーンの詠唱を開始するが、一瞬の内に間合いを詰めた女性がワルドを思いつきり蹴り飛ばす。

大木に叩きつけられて落ちていくワルドを見下ろしながら、数瞬の逡巡の中、その女性がいくつもの矢を放った。

ワルドの両肩と両足を矢が貫いていく。突き刺さることもなくワルドの身体を突き抜け、それらは背後の木すらも貫いていた。

地面へ落下したワルドが苦悶の呻き声を上げる中、音も無く大地に降り立ったその女性がワルドへと静かに近付いていく。

そのままずっとワルドの首元の服を持つと、その細腕からは想像も出来ない程に、軽々とワルドを宙に浮かべた。

明らかに女性の膂力ではない。

ワルドが恐怖に濁った眼で睨み付けるも、女性はその端正な顔に何の表情すら浮かべないままでワルドを手に持ったまま移動していく。

そして、急にワルドを地面へと投げ飛ばした。

地面に叩きつけられたワルドが呻き声を上げながら周囲を見ると、自身のすぐ傍らに青い鱗を持った巨体が、怯えの混じった、弱々しい唸り声を上げ始めている。

その巨体は先程ワルドが乗っていた風竜だ。しかしその風竜は飛べない程の損傷を受けていないにも関わらず、その大きな身体を縮めるかのように、狙撃手の女性へと向けてかすかな唸り声を上げ続けるだけである。

ワルドが怒りと戸惑いの混じった視線で狙撃手の女性をもう一度睨み付ける。

未だに弓を構えることもしない女性は、そのワルドの様子にも輝く赤い瞳を返すだけだった。

「何の……つもりだ……！」

その言葉にも答えず、女性はついと別の方向を見るや、木々の枝を飛び移っていく。

そのまま木の葉を揺らす音と共に、その女性の姿も気配も、何もかもがワルドの目の前から消えていったのだった。

第七十三話 Apostle of Ymir

「りゅ、竜騎士が．．．！」

「馬鹿な！ そんな、馬鹿な話があるか!!」

左翼部隊の歩兵達から悲鳴に似たどよめきが広がっていく。

中央部隊の頭上に広がっていた、突如として現れた猛吹雪が掻き消え、ばらばらと散らばるように竜騎士らしき複数の影が墜落していく。

「し、静まれ！ 静まるのだ！」

歩兵達の動揺を目の当たりにしながらも各部隊を率いる士官達が声を張り上げていた。

明らかに士気が低下していく今の状況に、士官達は自身を鼓舞するかのよう歩兵達への指示を続けていく。

「案ずるな！ 戦におけるこちらの優勢は変わらぬ！ 今は目前の状況に集中せよ！」

左翼を率いていた老年の総指揮官が戸惑う士官達へと声を荒げていく。

「ゴーレム部隊を前面に押し出せ！ 量よりも質を重視せよ！ 両面より奴の逃れる先を無くすのだ！ 決して、距離を詰めてはならんぞ!!」

目を剥き唾を飛ばしながら士官達へと叫びつつ、左翼の指揮官は今の状況が想像以上に悪化していることをようやく実感していた。

しかし虎の子であった竜騎士隊が撃破された今、一体どうすればいいのか。

指揮官の貴族は周囲の士官達の請うような視線に気付きながら、悪化を辿る状況打破すべく、自身の経験から懸命に頭を回転させ続けていく。

士官や歩兵達への指示を飛ばしながらも、思考を続ける左翼の指揮官は先程の恐怖を必死に抑え込み続けていた。

あの大斧を携えた青年の突進力は尋常ではなかった。

我々は幾度も、あの怪物を仕留めるチャンスを見つけていたはずだった。

しかし、奴は目の前の危機に目もくれず……いや、『だからこそ』奴の斧はこの左翼の指揮系統にすら届きかけていたのだ。

我々に未だ命があるのは、数多くの戦の経験を基に、即座に指揮系統を後退させるべきだと判断したために他ならない。

歩兵達を壁にして自身の命を捨てる行動は、軍で積み上げた自身の誇りとしても、かつてのアルビオン王軍に名を連ねていた貴族の矜持としても、決して容認できることではなかった。

しかし、あの瞬間のあの判断が無ければ、左翼の軍団は信じられない程に呆気なく瓦解していただろう。

奴は指揮系統が後退し始めたのを確認するや、包囲の隙間を縫うように最前線の地点まで退いていった。

その際に信頼のおける側近の士官達を各方面へ分散させながら、命令系統の独立化、軍団の再配備、トリステイン軍の奇襲を警戒する斥候部隊の派遣、右翼や中央軍との再連携等々を行なっている。

指揮官自身、たかが一兵士の奇襲程度でここまでする必要があるか、とは確かに考えたが……、現に奴は完全包囲されていた状況からいとも容易く脱出しているのだ。

考え得る最悪の状況だけは、なんとしてでも避けなければならない。

しかし今までの戦況を見る限り、自身の考えが正しければ、奴は……。

遠目に見える最前線では十メートル弱もある鉄製のゴーレムが次々に立ち現れていた。

同時にあの大斧を携えた怪物を包囲していた兵士達が、そのゴーレム達の前面へと数々の魔法を、そして弓矢や銃弾を雨あられと放ち続けている。

そうした中でも、数体のゴーレムが強烈な衝撃を受けて体勢を崩し、その内のゴーレムの一体が自身の身体を粉碎されながら地響きを立てて倒れていった。

「あ、ありえぬ……！ 何故こちらが攻撃を受けているのだ!？」

「指揮官殿！ 更にこの陣を下げるべきです！ 奴を止められなければ、また……！」

しかし指揮官はその遠目に見える光景を前に、自身の思惑が正しかったと、確信に満ちた眼光を向け始めていた。

「……いける、いけるぞ！ 奴は攻めあぐねている!!」

そう叫んだ指揮官は、士官達の驚愕の表情にも気付かずに更なる命令を下していた。

「ゴーレムの質と大きさを更に上げよ！ 奴を前面に誘い出せ！ 迫撃砲用意!!」

戸惑う士官が指揮官へと声を上げていく。

「しかし！ あの様では長くは持ちませぬぞ！」

「奴は前に出る他ないのだ！ 奴は魔法を使えぬ!!」

士官達は愕然とした視線を老年の指揮官へと向けた。

「分からんのか！ 奴は『メイジ殺し』だ！ 空を飛んで逃れることすら出来ない、ただの平民に過ぎぬ！ ならば、脱出できぬ状況に誘い込めば良いだけだ!!」

その言葉に、次々と士官達が部下達への指示を飛ばし始める。

十メートル程の鉄製ゴーレム達が何とか奴を食い止め続けている中、軍団の前方に三十メートルを超える巨大ゴーレムが生み出されていく。

その表面は複数のメイジによる強固な鉄に覆われ、更なる時間を稼いでくれることが容易に想像できた。

「恐れるな！ 奴は初手の攻撃に全てを賭けていたのだ！ 奴が何者なのかなぞどうで

もいい！ たかが一人の平民に突破されるなど、あつてはならんぞ!!」

「また増えやがったか。考えてやがるな」

むくむくと巨大な影が人の姿を形作っていくのを見上げていると、大斧の青年、ハワードに向けて次から次に鋼鉄の拳が襲い掛かった。

隊列を組みながら殴りかかってくるゴーレム達の攻撃を縫うように避けていく中、両側面からは飽きもせず矢や銃弾、果てには雨のような氷の槍やら火球やらが飛び交ってくる。

「なるほど、なるほど。面白い戦い方をするもんだ……。しかしアイツ、まだ仕事は終わらねえのか？」

側面から襲い掛かった飛び道具は、鉄製ゴーレムを盾にしながら防ぎ切る。

追尾する火球が飛来してくれば、鉄製ゴーレムの手足を破壊することで安全な地帯を作り出してやり過ごす。

そんな中でもゴーレム達は次々にハワード目掛けて拳を振り下ろし続けているが、紙一重で避けられた打撃が地響きを上げながら地面へと突き刺さっていくだけだ。

土煙と共に地面が大きく抉れ、あらゆる魔法や飛び道具が大地に更なる痕跡を残し続

けているも、ハワードはほぼ全ての攻撃をこの調子で避け続けていた。

絶えず殴りかかってくるゴーレム達の攻撃は、その正確さ故に若干の隙間とパターンがある。

所詮は人形だな、と考えながら、ハワードは掴むかのように横なぎに振り回されたゴーレムの手を叩きつけるような斬撃で粉碎した。

大斧で打ち砕かれたゴーレムの腕はばらばらに砕け散り、大きく体勢を崩したようにぐらりとその身体をよろめかせている。

しかしゴーレムの破片が宙に散る中で、側面のメイジ達の動きがハワードの赤い瞳に映っていた。

彼らの動きは今ここで自分を仕留めようとしているものではなかった。

何というか、『意識が他の場所へとずれている』のだ。

「罨か。前の方だな」

周囲のゴーレムの位置を確認したハワードは、心底楽しそうに、にやりと笑みを浮かべていた。

両側からは自分を押し潰そうと拳を振り上げるゴーレム達。

前方には突進する十メートル程のゴーレムが二体と、その背後には三十メートルを超える、黒々とした光沢を放つ巨大なゴーレム。

自分の目には、前方の軍勢がどういう動きをしているか目視することが出来ない。しかしハワードの頭には、その状況に対しての恐れなど欠片も浮かんではいなかった。

冷静な思考を放棄した訳ではない。

『目前の敵の注意を引き付ける』役割を忘れた訳でもない。

ただ、敵である彼らの紡ぎ出した工夫が見たかった。

見たことのない魔法の数々。

それらを操る、この異世界の軍勢。

自分という正体不明の異物を前に、彼らは一体どのような思考の片鱗を見せてくれるのか。

尊敬に値する師から離れ、そして鉄と火を生業にする鍛冶屋として求め続けてきたものは、人知れず幾星霜も積み上げられてきた、数え切れない『工夫』を目にするためにこそなのだ。

両側面から薙ぎ払われたゴーレムの攻撃。

その攻撃に合わせて跳躍したハワードの眼下を大木のような腕が一瞬で通り過ぎていく。

それを瞬時に蹴り付け、ハワードは目前へ迫る二体のゴーレムの隙間を風のように通

り抜けていく。

そんな中、ハワードの視界の端には殺意に満ち満ちている異世界の住人たちの姿があった。

火花が瞬いている。そうハワードは感じていた。

自分は戦いが嫌いではなかった。

まるでハンマーで鉄をぶっ叩く時の、一瞬の煌めき。

それに似たものを、今この時の戦いの中にも見出すことが出来るのだから。

「どんな畏なのか・・・、楽しみつてなもんだな！」

十メートル程のゴーレム達の隙間を瞬時に通り過ぎたハワードは、その背後に天高くそびえ立つ巨大ゴーレムへと視線を向けていた。

三十メートルを超えるゴーレムは両腕を更に高く掲げ、ハワードに向けて思いつきり開いた両手を叩きつける。

身を翻してそれを回避したハワードはすぐ傍で鳴り響いた爆音のような衝撃を感じながら、感情のままに、自身の全力を敢えて振り絞っていた。

ハワードの身体だけでなく得体の知れない魔力が周囲を包み込む。

それと同時に振るわれた大斧の一撃は空を歪ませる程の威力をもって、城壁にも似た巨大ゴーレムの鋼鉄の脚を一瞬の内に打ち砕いていった。

傍から見ていたなら、ハウードの姿が一瞬の内に消え、巨大ゴーレムの足が突然弾け飛んだように見えたかもしれない。

そしてその次の瞬間、舞うように戦っていたはずのハウードが、突然その勢いを落としましたも。

「な、なんだ、こりゃ・・・っ!」

黒光りする巨大ゴーレムの破片が宙に散らばる中、ハウードは突如として苦悶の表情を浮かべながらその動きを緩めていた。

全力で大斧の一撃を振った時、いきなり自分の中に膨れ上がった感覚。

一瞬の内に自分の意識が遠のきそうになりながらも、思わず沸き上がった、目の前の全てを破壊し、全ての存在を殺し尽くしたいという自分の意図しない激情。

(意識が・・・飛びそうだ・・・っ!)

反射的に自分の中で暴れまわる激情を抑え込もうとする中、ハワードに向けて、鋼鉄で作られた拳や無数の強力な魔法が次々と襲い掛かっていく。

「ちっ……！」

よろめきながらも襲い来る鉄の拳をハワードは間一髪回避したが、がりがりと大斧を大地に引き擦りながら、先程とはうってかわって、不格好にハワードは次々と襲い掛かる魔法の数々を潜り抜けていく。

その瞬間、前方から鳴り響いた迫撃砲の轟音と共に、無数の砲弾がハワードへと襲い掛かっていった。

「め、命中ッ！ 命中です！」

「よし、よし！ 油断するな！ 畳みかけろッ!!」

左翼の指揮官と士官達は紅潮した顔で目の前の光景に声を荒げていた。

あの大斧の青年はゴーレム達とメイジ達の包囲攻撃を凌ぎ切った挙句、あろうことか複数人の『鍊金』によって生み出された巨大ゴーレムの脚すらも打ち砕いていた。

しかし流石に体力の限界だったのか、突如としてあの怪物が勢いを落としたのだ。

そこへ数十人規模による魔法の総攻撃、更には攻城戦のために用意していた迫撃砲の一斉射撃。

いかに奴が人外のような存在だったとしても、あれらの攻撃で無事なはずがない。もうもうと広がる土煙に向けて、左翼の軍勢が更なる攻撃を加えていく。

標的の姿が見えないにしても雨霰と撃ち込まれる攻撃に奴は為す術もないだろう。

「お見事！ 正にお見事です！ 流石は指揮官殿！ これで奴は……」

そう叫んだ士官は指揮官へと顔を向け、同時にその表情を強張らせていた。

「ぐ……が……っ」

かすかな呻き声を上げた老年の指揮官。

その胴体からは、短剣の刃が背後から深々と生えていたのだ。

「な……っ」

周囲の士官達がその有り得ない光景を目の当たりにした時、指揮官のすぐ背後に揺らめいた影が、一瞬の内に姿を消したように見えた。

「……遅すぎる」

指揮官の身体がぐらりと倒れ始めたと同時に、士官達のすぐ背後から誰かの声が低く響いた。

すぐさま敵襲だと声を上げようとするも、彼らは声を出すことが出来なかった。

既に、彼らの首は何者かによつて深く掻き切られていたのだから。

首を抑えて次々に膝を付いていく士官達。

そして老年の指揮官が倒れこむ姿に気付いた兵士達は一様に、ぼかんとした間の抜けた表情のまま固まっていた。

「て、敵……?」

数秒もの間、兵士達は金縛りを受けたように固まっていたが、少しずつ増えていくざわめきと共に、次々とその表情を朱に染めていった。

「敵だ！ 敵襲だ!!」

「馬鹿な、馬鹿な！ 指揮官殿が、そんな・・・っ!!」

「許さぬ!! 生かして帰すなッ!!」

悲鳴のような轟きが周囲を包み込み、屈強な兵士達は次々とその影のような男を切り裂くべく駆け出していた。

殺到するようにその影へと襲い掛かる兵士達。

彼らはその時、指揮官の仇であるその男がかすかに笑ったことに気付いていなかった。

「な・・・っ!!」

怒りに我を忘れていた先頭の兵士が驚愕の声を上げる。

自身の長剣が奴を切り裂く瞬間、確かに目の前にいた男の影が揺らめき、音もなく消えていったのだ。

「後ろ、後ろだッ!!」

背後の兵士達がこぞつて大声を上げる。

それと同時に背後にいた別の兵士達から叫びに似た怒声が飛び交っていく。

「馬鹿野郎!　そこをどけ!!」

「俺の後ろだ!　迫撃砲の方角に．．．!」

「違う!　あっちの一団に紛れた!!」

「どこだ!　どこにいるッ!!」

指揮官の死体と兵士達の一団から、波のような動揺が軍団の中へ広がっていく。

最も重要な指揮系統をいつの間にか失った兵士達は一様に混乱していたが、その混乱は左翼の前線にまでは届いていなかった。

未だ大斧の青年への攻撃に夢中であった兵士達は、『自分達と同じように動く影』まで

には気を配ることが出来なかった。

そしてその影が土煙の中へと紛れていくことにも気付かぬまま、むやみやたらに土煙の中へと攻撃を加え続けていくのだった。

「……痛くねえな。不思議なもんだ」

周囲から鳴り響く地響きに包まれながら、大斧の青年、ハワードはひとりごちていた。無残に破壊された、巨大な鋼鉄の腕。

その腕のすぐ近くで大きく空いた穴の中に、ハワードはいた。

ハワードがいる場所は最前線から少し離れた、ゴーレムの群れがいるすぐ近くである。

迫撃砲の衝撃を大斧で受け止め、その反動を利用して吹き飛ばされたハワードは、瞬時にゴーレム達を利用してその身を隠していた。

その代償として身体中にいくつもの深い傷を受け、その上にハワードは左腕まで無残にも吹き飛ばされていた。しかし……。

「これが、モンスターか」

ハワードは漏れ出た自分の声に少し驚きつつ、その内にしかめっ面を浮かべていった。

あのブリミルとか言う信用ならない奴の話聞いても、別にハワードはさほどショックを受けていなかった。

重要なのは自分の意志、そして感覚だ。

モンスターだから、とか、人間だから、とか。

そんなことは大した意味など無い。

そう思っていたのに……。

「やべえな……」

後悔しちまいそうだ、と口に出しそうになって、ハワードはますます機嫌が悪そうに顔をしかめていった。

軽く顔を振って直前の思考を振り払い、ふと、ハワードは自分へと近付いてくる気配へ顔を向けていた。

「・・・」

「随分遅かったな。凄腕のアサシンじゃなかったのか？」

口元に意地悪そうな笑みを浮かべたハワードへ、影のような男が音もなく近づいていく。

「腕はどうした」

その言葉に、ハワードは少し意外そうな顔をしていた。

中腰になりながらも穴の中へと滑りこんだ影の男。

こいつは到底仲間想いな奴には見えなかったのだが。

「エレメス、って言ったっけか。意外なことを口にすんだな」

思ったことをそのまま口にするハワード。

しかしその男、エレメスは欠片も表情を崩さないまま、ハワードの左腕があつた場所を見つめ続けている。

「別に痛くはねえよ、モンスターになった面目躍如つてところだ。そんで、そっちの仕事は済んだのか？」

無表情のままのエレメスがしばらくハワードへと視線を向ける。

その内に何を思ったか、エレメスは穴の外へと音もなく出ていった。

「・・・何だあいつ」

呆気にとられたハワードを尻目に、すぐさまエレメスが音もなく戻ってくる。

「タフな奴等だ」

その小さな声に、ハワードが残った右手で頭をがりがりと搔いた。

「おい、それだけじゃ分からねえだろ」

エレメスがその赤く細い目をハワードへと向けるも、またもやそのまま黙りこくつて
いる。

「おい、聞こえてるかあ？ もしもーし」

「・・・？ 聞こえてるが」

無表情のまま返された言葉に、ハワードは思いつきり分かりやすく、深いため息を吐
いた。

「ちゃんと・説明・しろ。分かったか？」

何の表情もなく、じつと黙り込むエレメス。

ハワードは徐々にイライラしながら、思わず右手の指の腹で地面を叩き始めていた。

「そう、だな……。そう……。指揮官は、倒した」

「……。それで？ さっきの『タフな奴等』ってのはどういう意味なんだ？」

またしばらく沈黙が降りる。

そのまま黙って待っていても一向に続きが返ってこない。

もはやハワードは我慢の限界だった。

「お前は、答えるのがおせえ!!」

「静かにしろ。攻撃が来るぞ」

「そんでそういうのは早いのかよ!!」

はーあと溜め息を吐いて、ハワードはじろりと無表情のエレメスを睨む。

「マジで口下手なのか、お前」

「……。すまんが、慣れてない」

もう一度わざとらしい程の溜め息を吐いてから、ハワードが口を開いた。

「それで、さっきのお前の言葉はどういう……」

唐突にハワードが口を閉ざした、と同時に、二人とも耳を澄ませるように宙へと意識を向け始める。

「……音が止み始めたな」

「ああ」

示し合わせたように赤目の二人は息を殺して周囲の様子を伺っていた。

地響きと轟音は徐々に鳴りを潜め始めている。

「『タフな奴等』という言葉の意味は」

突然エレメスがゆっくりと話し始める。

なんとなく今の状況でハワードも予測がついていたが、今度は茶々を入れずに黙って続きを待っていた。

「奴らの『頭』は死んでいない、という意味だ」

眉間に皺を寄せたハワードは、また分かりにくい言い方を、と愚痴をこぼす。

「指揮官は仕留めたんだろ？」

「ああ。周囲の直属も仕留めてある」

「つてことは、他に優秀な奴がいるのか。それとも、その指揮官はこの状況を予測してたつてことか。流石つて言えばいいのかね」

「そうだな、なかなか上手くないものだ」

既に繰り返し響いていた轟音はすっかりと消え去り、代わりに他の場所から聞こえてくる戦いの音だけが周囲に響いている。

右翼と中央では未だ戦いが繰り返り広げられていることだろう。

「さて、第二ラウンドだな」

「・・・」

小用を済ませるかのように二人して穴からゆっくりと外に出る。

ここからは計画など欠片もない。

正にモンスターと同じように、ただ策も無く乱戦を行なうだけだ。

「それにしてもだ」

「ハワードはやれやれと言った具合に呟きながら、前方に広がる敵軍をゆっくり眺める。」

穴から這い出してきた赤目の二人組に、敵軍は怒号に似た号令を繰り返しながら更なる布陣を整えていく。

「あのブリミルだかと言った言葉。『偶然と運命を積み重ねる』ってどういう意味なんだ。とどのつまりは『なるようになる』って意味じゃねえのか？」

「・・・それも今更だな」

エレメスが初めて微かな笑みをこぼす。

それを見たハワードは残った右腕で大斧を肩に担ぎ、そういえば、と小さく呟いた。

「一つ、注意しろよ。エレメス」

エレメスの赤い瞳がハワードに向く。

「いいか、『全力で戦おうとするな』。自我が吹き飛ばすぞ」

不思議そうな顔でエレメスは黙っていたが、その内にハワードから視線を外して小さ

く口を開いた。

「……お前の言い方も、十二分に分かりにくい」

「うっせ」

軽い口調のまま、二人は広範囲に生み出され始めた巨大ゴーレム達へと目を向けていく。

「……最後まで、人間のままでいたいものだな」

歩を進めようとしていたハワードはふとエレメスへと視線を向けた。

静かに敵陣を見つめるエレメスは先程までと同じ、無表情のまま、もう一度ゆっくり口を開いていく。

「……今更こんなことを思うとは、思ってもいなかったが」

その横顔にかすかな笑みを見つけると、ハワードは視線を地響きと共に歩き始めたゴーレム達へと戻っていた。

「ああ、同感だ」

アルビオン軍、右翼。そこは正に戦場だった。

氷や炎の竜巻が地面に多くの痕跡を残し、その間を高速で動き回る四足型のゴーレムの群れが、まるで獣の群れのように一人の男へと飛び掛かっていく。

そのゴーレム達は一瞬の煌めいた剣閃の束に薙ぎ払われていた。

ほんの一瞬、人程もあるはずの巨大な大剣がその刀身を無くしたかのように見えなくなる。

男の赤いマントが宙を縫い付けるように線となり、はためき、しばらくしてその動きを止める。

次の瞬間、ゴーレム達だったものは、岩の塊を周囲にまき散らしていく。

数マイルもある水の塊が銀髪の騎士の周囲に次々と浮かび上がる。

それらの水の塊が瞬時に形を変える。

剣や槍、大槌や鞭、果ては矢や砲弾であるかのように形を変え、到底対応など不可能な程の密度をもって銀髪の騎士へと襲い掛かる。

銀髪の騎士は死角も含めた全ての攻撃が見えているかのように回避し続けていく。同時に宙に散ったメイジ達から放たれた複数の雷が、銀髪の騎士へと襲い掛かる。

しかし、水で出来たありとあらゆる武器、そして雷が、一か所に集まった瞬間、突如として騎士の周囲を爆炎が包み込んでいた。

空気が急激に膨れ上がり、水で出来た数々の武器が一瞬の内に蒸発し、それらによって作り出された空気層によって複数の雷は照準を大いに外し、大地に突き刺さつていく。

そして、また、一瞬の静寂が周囲を包み込む。

銀髪の騎士の赤い瞳が輝き、右翼の軍団の兵士達を貫く。

その度に、何か得も知れぬ声、ざわめきが、兵士達の間を包み込んでいくのだ。

こういったことが、もう幾度となく繰り返されている。

「・・・攻撃中止」

右翼の指揮官が静かに、厳かな声を上げる。

目の前の戦いに呆気を取られていた士官達はびくりと我に返ると、指揮官の命令を

次々に声高に宣言していった。

「攻撃中止！ 攻撃を中止せよ!!」

浮足立っていた兵士達は一様に当惑しつつも、続く攻撃の手を止めていく。

静かに指揮官が歩を進め始める。

それを止めようと側近である士官達が声を上げるが、全く意に介さないように指揮官の男は銀髪の男へと歩み続けていく。

騎士の姿がはつきりと見える位置まで近付いた指揮官は、思わず息を飲んでいた。

あれ程の攻撃を受け続けていたにも関わらず、あの騎士に与えた傷はほんのかすり傷程度に過ぎなかったのだ。

その事実には慄然としながらも、指揮官は大きく息を吸った。

「一つ！ 聞かせていただけるか!!」

銀髪の騎士の視線が最前線へと近付いた指揮官へと向けられる。

その輝く赤い瞳を向けられた指揮官は一瞬身を強張らせるも、戦いが始まる前の得休

の知れない恐怖は、何故かそれほど感じられていなかった。

「貴君は、何者だ!! トリステイン貴族の内、いずれの名に連ねるのか!!」

その言葉に、背後に広がる兵士達は次々にどよめきたった。

ここは戦場なのだ。

戦争の只中で、敵国の首都へと進軍している最中だというのに。

何故『まるで貴族同士の御前試合でもあるかのように』、指揮官が敵に向けて言葉を投げかけるのか。

銀髪の騎士はただ静かに指揮官を見つめたまま、ゆっくりと口を開いた。

「私は何者でもない。君たちが思っている者とは違う」

「・・・ならば、何故! ただ一人で我らの道を阻む!!」

指揮官が怒声に似た声を響かせる。

「何故! 貴君は我らを攻撃しない!! それ程の力を持ちながらも!! ただ耐え続けて

死ぬだけか!!」

兵士達のどよめきが徐々に静まり始めていく。

横の戦場ではいまだに戦闘の音が続いている。

それにも関わらずに誰も彼もが、敵であるはずの人物の返答を待ち始めていた。

「()を通しはしない。ただそれだけだ」

大きく、静かな返答に、右翼の指揮官は更に声を荒げていく。

「貴君はこのような場所で死ぬべき男ではない!! 悪いようにはせぬ!! 投降せよ!!!」

その有り得ない発言にも関わらず、今度は兵士達のざわめきすら起こらずに、ただ静けさだけが周囲を包み込んでいた。

戦闘の音は絶えず周囲に鳴り響いているにも関わらず。

数多くの兵士達の視線が、ただ一人立つ銀髪の騎士へと向けられていく。

赤い瞳を輝かせた銀髪の騎士が静かに口を開いた。

「私と君達は、何一つとして変わらない。ただの・・・、ただ一人の、兵士だ」

銀髪の騎士の声が周囲に響いていく。

涼やかでありながら絞り出されたその言葉は、周囲の喧騒を掻き消すような響きを持つっていた。

「私の剣は、我が守るべき者のためだけに振るわれる。それこそが、私自身を支え続けた約束に報いる、ただ一つの手段であるからだ」

アルビオンの兵士達は静かに、その赤い瞳の男の言葉に耳を傾けていた。

軍団の前にいる騎士は、ただの、たった一人で戦い続ける敵であるだけのはずだった。

しかし軍団の兵士達は身じろぎ一つせずに、このただ一人の騎士の言葉を聞き続けている。

「君達が行なってきたことの多くを問うつもりはない。無辜の村々を襲ったことも、そこにただ生きる村人達を焼き払ったことも。それをするだけの理由が、きつとあるのだ

ろう」

騎士の赤い瞳が強く光輝く。

「ただ、私は私のために、君達をこの先へ通しはしない。私が私でいるために、ただそれだけのためにだ」

騎士の瞳はまるで一人一人の兵士達の顔を見ているかのようにだった。

その瞳を目にした兵士達は何故か自身の胸に何かの感情が沸き上がるのを感じていた。

彼らの剣を握る手に力がこもり……。

「君達が、それをさせぬと言うのであれば!!」

吠えるような騎士の声が兵士達の耳に残る。

彼らは凡百の傭兵であり、祖国を裏切った兵士達であり、矜持に泥を被せ続けてきた

貴族達だった。

「余計な問答など無用!! 　ただ剣を取り!!」

その彼らの心中が、何故か見も知らぬこの男に揺さぶられ続ける。

「自らの意思を持って、敵であるこの私を打ち破ってみせろ!!!」

雄たけびにも似た声に軍団は何も答えず、ただ沸々と沸き上がる感覚だけを味わっていた。

ただの敵である自分らに向けられた言葉は、何故か分からぬ程に純粹な言葉であるかのように思えた。

「・・・よく分かった。何者でもない、騎士殿」

紅潮した顔のままであつた指揮官はかすかな笑みを浮かべて、貴族のマントを翻しながら大きく口を開く。

「全軍、攻撃準備!!!」

その瞬間、これまでを遙かに超える轟音が大地を震わせていた。

人の声であるとは到底思えない程のその轟音を背景に、銀髪の騎士が巨大な大剣を構えなおす。

「騎士殿!! 出来得るのであれば、この戦場ではない別の場所で出会いたかった!!」

軍団の元へと戻り始めた指揮官はその言葉と共に胸中を満たす感覚を味わっていた。

それは何故か、自分をはるか昔に捨て去り、それを後悔し続けた貴族の誇りを、ほんのかすかにでも取り戻したようにも思えたのだった。